

多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財調査報告書 第5集

今井見切塚遺跡

— 旧石器時代編 —

第1分冊 (本文編)

2007

群 馬 県 企 業 局
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財調査報告書 第5集

今井見切塚遺跡

— 旧石器時代編 —

第1分冊（本文編）

2007

群 馬 県 企 業 局

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



第Ⅲ文化層 1a地点出土の石器



第Ⅲ文化層 第9・11・12・13地点出土の石器



第Ⅲ文化層 第11・12・14地点出土の石器



第Ⅳ文化層 1a地点出土の石器1



第IV文化層 1a地点出土の石器2



第IV文化層 1a地点出土の石器3



第IV文化層 1b地点出土の石器



第IV文化層 第45地点出土の石器

序

多田山遺跡群は、群馬県企業局による多田山丘陵開発事業に先立ち発掘調査されました。平成9年度から12年度にかけて、当事業団により実施された発掘調査では、後期旧石器時代から江戸時代に至る各種遺構・遺物が累々と発見され、歴史的にも極めて重要な遺跡であることが判明しました。

旧石器時代の石器分布は多田山丘陵の全域に及びましたが、本書には県道前橋・今井線以南の今井見切塚遺跡から出土したものに限って報告しました。今井見切塚遺跡では4期におよぶ旧石器文化層が発見され、7000点近い旧石器が出土しました。それぞれの旧石器文化層が貴重なものであったということはいうまでもないところですが、とりわけ第4文化層として報告した石器群は後期旧石器時代初頭の環状ブロック群として典型的な石器群でした。また、本書では黒曜石製石器の表面観察と原産地分析を行っています。それらは遊動社会に生きた人々の生活ぶりを解明する上で貴重な資料となりましょう。

発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県企業局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、赤堀町教育委員会、地元関係者の方々には種々、ご指導、ご協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げるとともに、併せて本書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い、序とします。

平成19年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本書は、多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した「今井見切塚遺跡（旧石器時代編）」の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査では、調査対象地全域から旧石器時代石器群が出土している。本書では、このうち県道前橋－赤堀線より南側に出土した旧石器を報告する。調査に至る経緯・経過、及び、縄文時代以後の調査成果については、別刷の報告書「縄文時代編」「古墳時代編」「歴史時代編」を参照されたい。
3. 遺跡の所在地は下記のとおりである。

今井見切遺跡 群馬県前橋市東大室町ほか、群馬県佐波郡（現 伊勢崎市）赤堀町今井ほか
4. 事業主体 群馬県企業局（経費は群馬県企業局と一部を群馬県土木部が負担した）
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 平成9年9月～平成14年3月
7. 調査組織 事務担当 小野宇三郎・菅野 清・赤山容造・原田恒弘・神保侑史・渡辺 健・平野進一・能登 健・水田 稔・右島和夫・真下高幸・西田健彦・佐藤明人・中束耕志・飯島義雄・小山友孝・相京建史・下城 正・笠原英樹・植原恒夫・大島信夫・坂本敏夫・小淵 淳・小山建夫・井上 剛・国定 均・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・岡嶋伸昌・宮崎忠司・片岡徳雄・森下弘美
調査担当 石坂 茂・斎藤和之・井上哲男・坂口 一・小野和之・大西雅広・津島秀章・関口博幸・須田正久・関 俊明・深沢敦仁・松原孝志・松島久仁治・石田 真・田中 雄・佐藤理重・小保方香里・原 真
8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 整理期間 平成15年4月～平成18年3月
10. 整理組織 事務担当 高橋勇夫・小野宇三郎・木村裕紀・住谷永市・吉田 豊・神保侑史・津金澤吉茂・萩原利通・水田 稔・能登 健・巾 隆之・右島和夫・佐藤明人・真下高幸・西田健彦・下城 正・笠原英樹・小山建夫・植原恒夫・国定 均・竹内 宏・石井 清・高橋房雄・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・今泉大作・栗原幸代・清水秀紀・佐藤聖行・阿久沢玄洋・田中健一・片岡徳雄
整理担当 岩崎泰一・津島秀章（平成16年12月～平成17年3月）
神谷みや子・吉原清乃・新平美津子・南雲富子・飯田和子・柳澤有里子・市田武子・森 美穂子・飯塚絵里香・下川陽子・五十嵐由美子・横坂英実
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一・土橋まり子・小材浩一
機械実測 伊東博子・岸 弘子・田所順子・廣津真希子
11. 本書作成に際し、以下に各種業務を委託した。

石器の石材同定……………飯島静男氏	石材原産地分析……………第四紀地質研究所
テフラ・植物珪酸体分析……………古環境研究所	石器トレース・分布図作成……………技研測量設計
写真撮影（巻頭カラー）……………写真家小川忠博	

12. 本書の作成に際しては、群馬県企業局・前橋市教育委員会・赤堀町教育委員会・地権者・地元関係者の方々の多大な協力及び支援をいただいた。また、調査に従事された発掘補助員の方々には酷暑・酷暑の中、大変ご苦勞をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。
13. 調査資料は、一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡 例

1. 本文中に使用した方位は、総て国家座標（2002.4改正前の日本測地系）の北を使用している。
2. 本文中には、基本的に地点毎に全体図を掲載した。各地点の石器実測図・ブロック図については、本文の後に地点毎に掲載した。

全体図…………… 1/150、1/200、1/300、1/400、1/500、1/600

石器平面分布図（ブロック）…………… 1/50、1/100

石器垂直分布図（ブロック）…………… 1/100（垂直方向のみ1/50で表示）

接合資料・器種別・石材別分布図… 1/100、1/200、

礫群…………… 1/50、1/100

3. 石器実測図は以下の縮尺を基本に掲載した。なお、削片等の小形石器・接合資料については、その都度縮尺を変え掲載しているので、図版中のスケールを参照されたい。

旧石器時代・単独石器…………… 4/5 旧石器時代・接合資料…………… 1/2

4. 旧石器時代の遺物分布図に使用したマークは、以下の器種を示している。

▲ 尖頭器	◆ ナイフ形石器	□ 削器	▪ 搔器	* 加工痕ある削片
◇ 台形様石器	△ 角錐状石器	▲ 彫器	△ 削片	* 使用痕ある削片
◀ 切出形石器	○ 細石刃核	○ 礫器	▽ 縦長削片	* 敲石・台石
+ 両極石器	• 局部磨製石斧	▼ 石核	• 削片	• 碎片

5. 図版中の器種・石材名については、下記のとおり略記した。

ナイフ形石器：ナイフ 切出形石器：切出形 台形様石器：台形様 局部磨製石斧：局磨斧 楔形石器：楔形 加工痕ある削片：加工痕 使用痕ある削片：使用痕 縦長削片：縦長 角錐状石器：角錐
細石刃核：細石核

黒色安山岩：黒安 黒色頁岩：黒頁 褐色碧玉：褐碧 珪質頁岩：珪頁 ホルンフェルス：ホルン
硬質頁岩：硬頁 砂質頁岩：砂頁 粗粒輝石安山岩：粗安 細粒輝石安山岩：細安 文象斑岩：文象
溶結凝灰岩：溶凝 雲母石英片岩：雲石片 珪質変質岩：珪変 変質安山岩：変安 石英斑岩：石斑
変質玄武岩：変玄 黒色片岩：黒片 白色凝灰岩：白凝 変質輝緑岩：変輝 緑色片岩：緑片
凝灰質泥岩：凝泥 珪質凝灰岩：珪凝 点紋頁岩：点頁 輝緑凝灰岩：輝凝

6. 遺物写真図版は、基本的に実測図の順に掲載した。実測図と対照できるように挿図番号を図版右下に付したので参照されたい。なお、写真図版のみ掲載したものについては、出土地点名と接合番号を記した。
7. 本文については、II-4 (1) 第IV文化層1a地点を津島が、その他を岩崎が担当した。

目 次

序
例 言
凡 例
抄 録

I 遺跡と調査の概要

1. 遺跡の立地 3
2. 調査の方法 5
3. 基本土層 5
4. 周辺遺跡 8

II 調査の成果

1. 第I文化層 9
 - (1) 1 b地点 9
2. 第II文化層 21
 - (1) 1 b地点 21
 - (2) 第2～5地点 22
 - (3) 第6・7地点 26
3. 第III文化層 31
 - (1) 1 a地点 34
 - (2) 1 b地点 75
 - (3) その他の地点 91
4. 第IV文化層 139
 - (1) 1 a地点 141
 - (2) 1 b地点 235
 - (3) その他の地点 386
5. グリッド出土石器 550
6. 今井三騎堂遺跡出土の旧石器 555

III 小 結

1. 黒曜石製石器の表面観察 556
2. 黒曜石製石器表面のキズについて 562
3. 黒曜石製石器の増減と黒曜石原産地の動向 570

計測値一覧表

〈第2分冊〉

IV 自然科学分析

1. 火山灰分析 3
2. 植物珪酸体分析 7
3. 黒曜石の産地分析 12
4. 黒曜石製石器の使用痕と表面状態の分析 41

写真図版

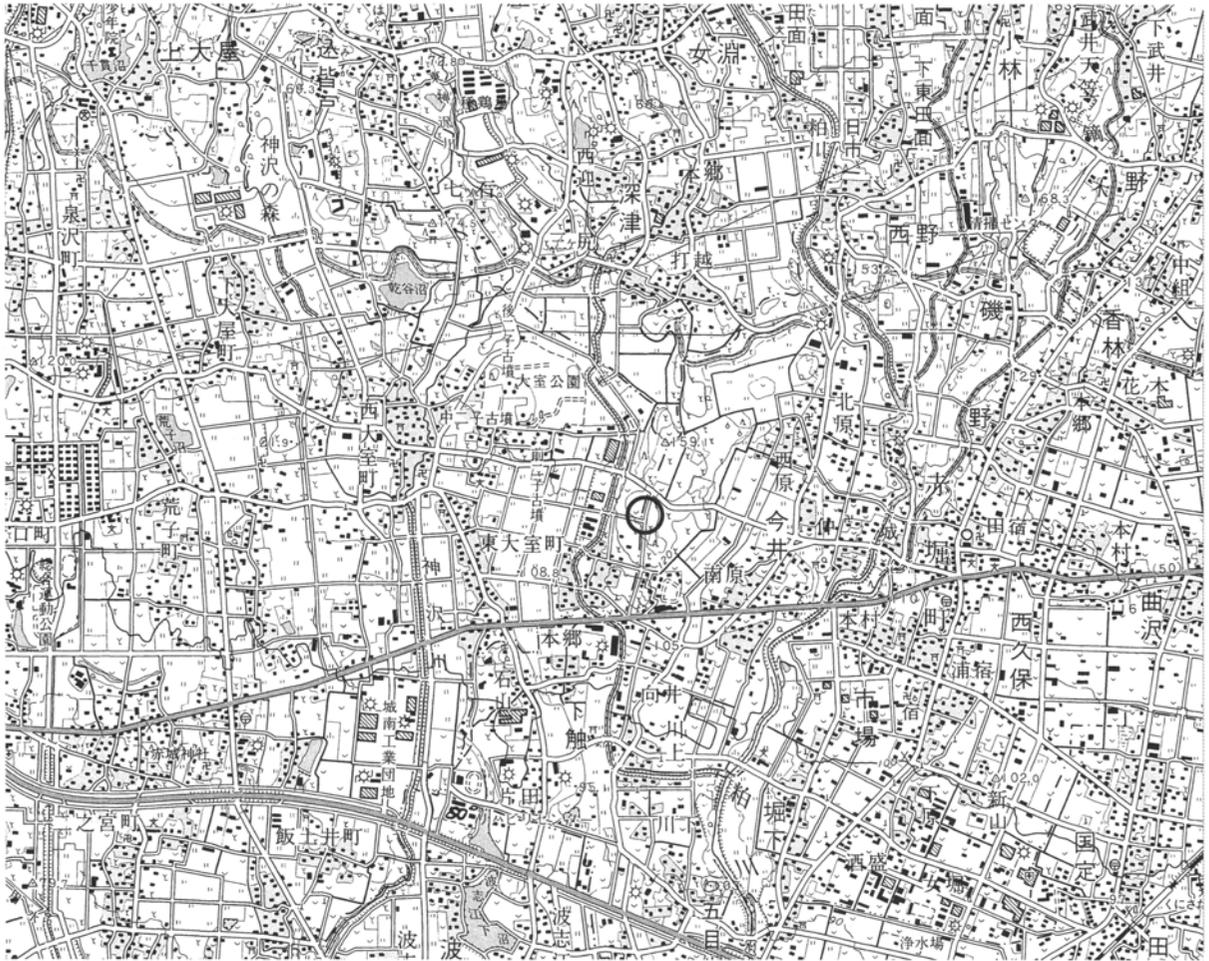
報告書抄録

ふりがな	いまいみきりづかいせき
書名	今井見切塚遺跡（旧石器時代編）
副書名	多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第5集
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第382集
編著者名	岩崎泰一・津島秀章
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
発行年	2007年2月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
いまいみきりづか 今井見切塚	まえぼししひがしおおむろ 前橋市東大室 あかぼりまちなまい 赤堀町今井	10210 10461		36°22'40"	139°12'25"	19970901) 20020331	148,500m ²	団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今井見切塚	包蔵地	旧石器時代 第I文化層	1地点 ブロック5	細石刃核ほか	As-YP下
		旧石器時代 第II文化層	5地点 ブロック・礫群	尖頭器ほか	As-SP 降下前後
		旧石器時代 第III文化層	23地点 ブロック・礫群	ナイフ・角錐状石器・削器ほか	As-BP下
		旧石器時代 第IV文化層	57地点 ブロック・礫群	ナイフ・台形様石器・削器ほか	AT下、環状ブロック 群2ヶ所

今井見切塚遺跡



国土地理院50000分の1 (大胡)

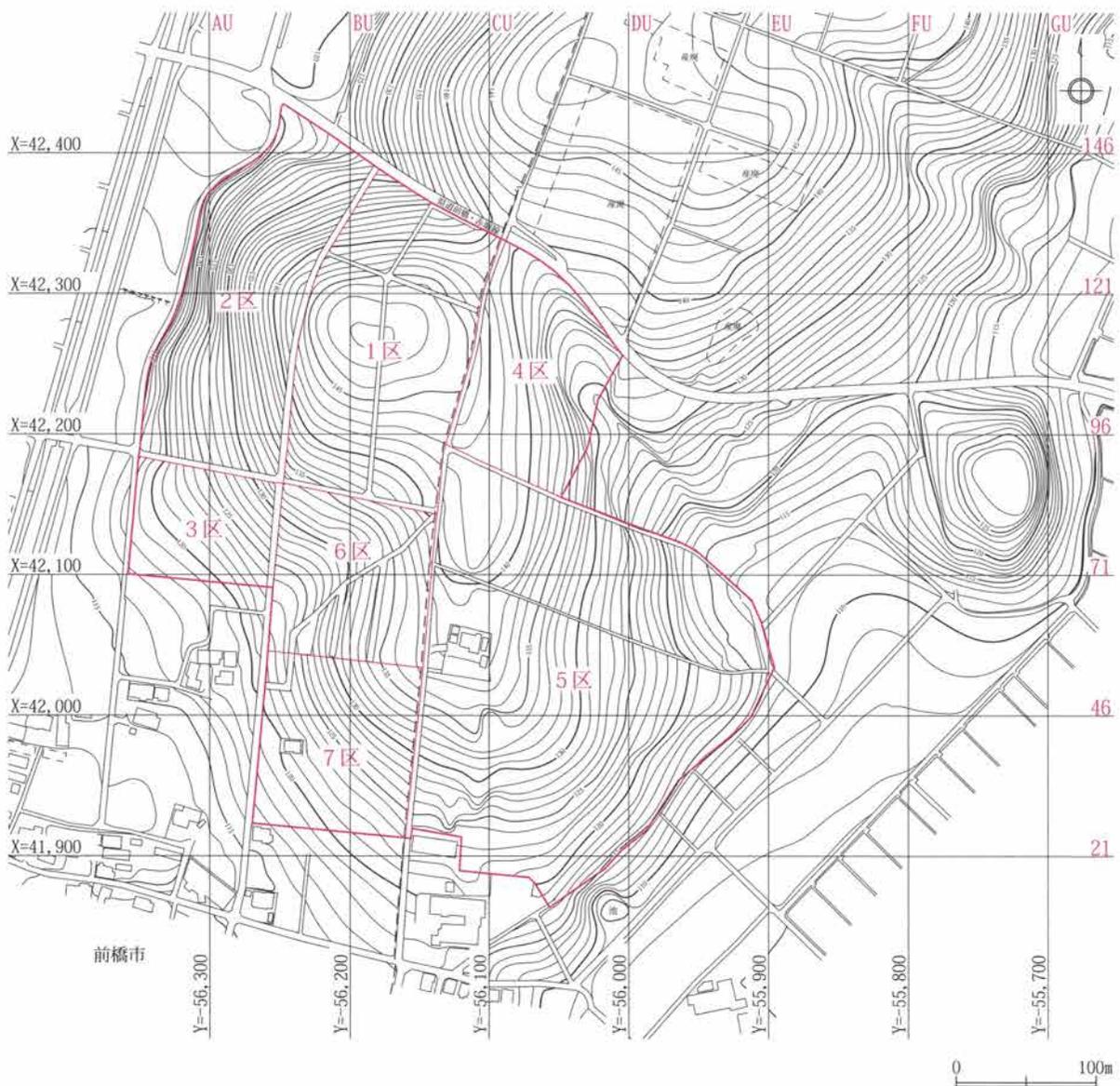
I 遺跡と調査の概要

1. 遺跡の立地

本遺跡は、赤城山・南麓端部の尾根状丘陵上に立地する。遺跡の所在する丘陵は「多田山丘陵」と呼ばれる南麓端部に点在する独立丘陵のひとつであり、前橋市粕川町深津付近を北端として南北2kmに連なっている。本遺跡はほぼその南端に位置しており、丘陵は調査地南側で傾斜を弱め、徐々に低平な

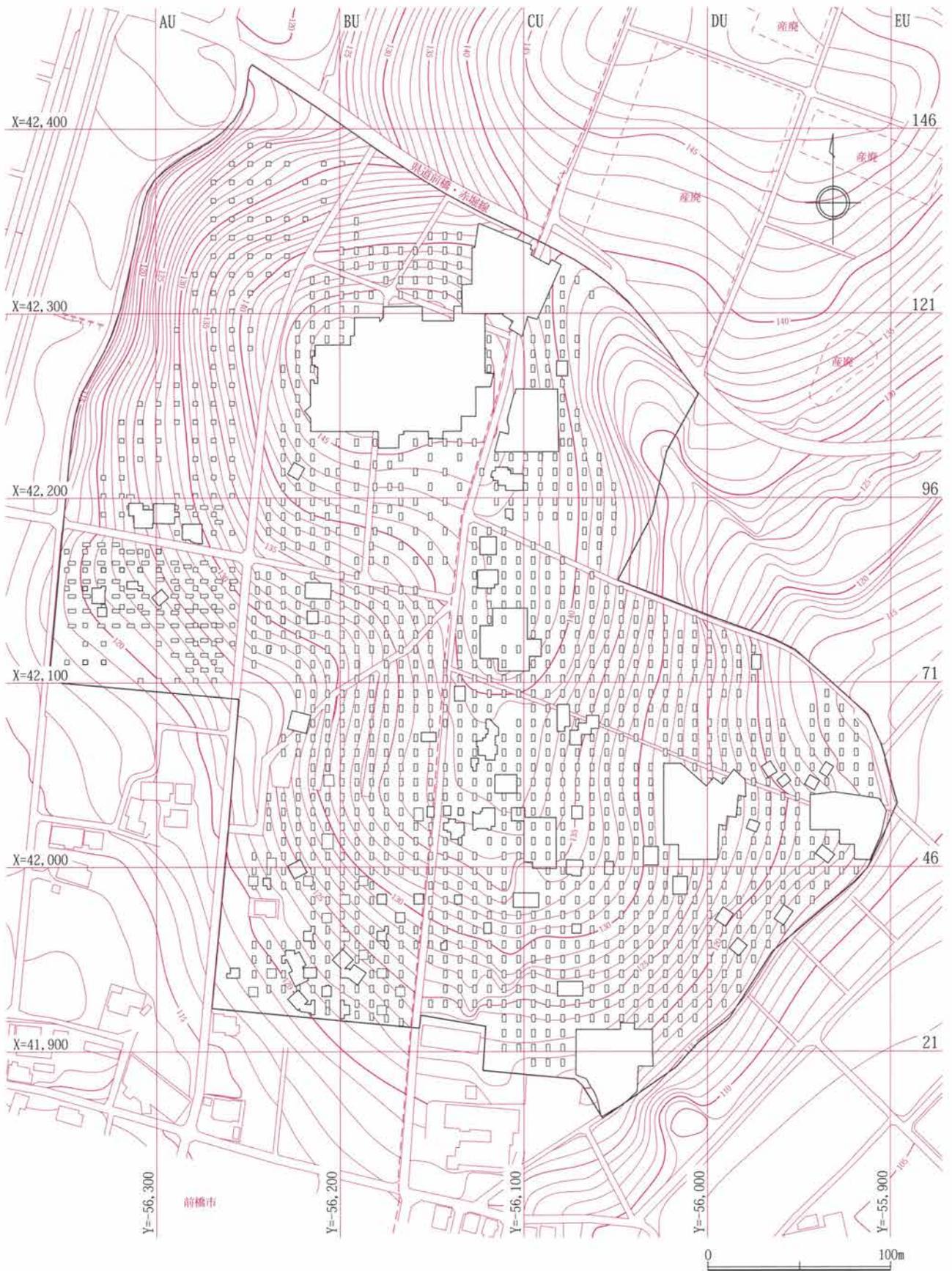
台地地形に移行する。

約20万年前の火砕流堆積物に由来する丘陵は浸食され、幅の狭い尾根状丘陵になっており、また、丘陵は途中分断され、数ヶ所で丘陵鞍部を形成している。この鞍部は丘陵を横切る際のルートであったことは確実で、本遺跡北側の丘陵鞍部も赤堀・桐生方面に抜ける県道になっている。丘陵鞍部の両側が旧石器遺跡となっているその様子は岩宿遺跡のそれと



第1図 遺跡と区の名称

I 遺跡と調査の概要



第2図 旧石器調査区とトレンチ配置図

同様で、遺跡立地・文化層の重複について示唆的である。周辺域には産泰・石山・堂山といった独立丘陵が散在しており、大間々扇状地I面（桐原面）にある権現山丘陵が最南端の独立丘陵となっている。平野部の伊勢崎市街地から北を眺めたとき、最初に見える丘陵が多田山丘陵をはじめとする丘陵群で、そしてさらに、その奥で赤城山本体に移っていく、これが平野部からみた赤城山麓の景色である。

丘陵の最高点は今井三騎堂遺跡・北側の丘陵頂部にあり、三角点（標高159.1m）が置かれている。調査地の最高点は1a地点・丘陵頂部の標高148mであり、丘陵端部の標高120m付近まで、30m弱の標高差がある。旧石器の出土地点は丘陵頂部、及び、丘陵頂部から続く尾根の平坦面を主体に丘陵東側の斜面に分布、東側に比べて傾斜の急な西側斜面の旧石器分布は希薄であった。

2. 調査の方法

本遺跡の発掘調査は平成9年から同12年の4ヶ年に及んだ。群馬県教育委員会が平成9年2月より試掘調査を行い、丘陵頂部を主体に旧石器時代から近世まで各種遺構の存在することが確認されていた。県教育委員会の試掘中、丘陵西側斜面で近世炭窯、及び、旧石器が確認され、それらについては本調査を終えていた。

平成9年9月より、当事業団が県企業局と契約、発掘調査を実施することになり、調査を引き継いだ。

試掘結果を検討した結果、旧石器調査の調査精度が粗く、調査計画を練り直して、試掘密度を上げることにした。最終的には83ヶ所で旧石器分布が確認され、これまでにない調査規模となった。

丘陵頂部における旧石器調査は2m×4mのトレンチを4グリッドに1ヶ所の割合で設定、確認調査を進めた。旧石器分布は丘陵平坦部を主体に濃密に分布、丘陵頂部から北側斜面で4文化層・3500点を超える旧石器の出土を確認、平成9年度の調査を終えた時点で、遺跡西側の斜面部（I・II区）を工事

側に引き渡した。

工事工程の関係から2年目の発掘調査は県道北側の今井三騎堂遺跡の調査を優先、北側の調査チームに合流、本遺跡の発掘調査は3年目の平成11年に再開した。旧石器調査は古墳・縄文時代の遺構調査を終えた地点から随時試掘を行い、旧石器分布を確認するごとに、調査地を拡張して旧石器分布を確認していった。

3年目以後の旧石器調査は、それまでの調査成果を踏まえ、何ヶ所か試掘してAs-BP（IX層）より上位の石器群が出土する可能性が少ない場合には、試掘段階から重機を用いて当該ローム層を掘削、下層を試掘しているようである。そのかわりに、1点でも石器が出土したなら、最低でも周辺2mを広げ、少なくとも石器ブロックだけは洩らさないよう配慮した。旧石器の分布状況からみて、試掘調査や拡張調査に問題がないわけではないが、全域で1646ヶ所のトレンチ（12496m²）を入れ、最終的には30518m²（本調査分18022m²）を発掘することになった。

出土した石器は地点毎に1から順に番号を与えて取り上げ、調査区が広範な場合に限り、任意の集中地点毎に、おのおのに1から番号を与えた。石器は基本的に光波測量により取り上げ、平板測量して取り上げた地点の石器については後日デジタル化して、整理作業に備えた。（第1・2図）

3. 基本土層

丘陵上に堆積していたローム層は、南麓端部の旧石器遺跡と基本的に何ら変わるところはなかったが、地点により微妙にローム層の堆積が相違したようである。具体的には、丘陵斜面部のローム層の堆積が不安定で、特に、X層より上位のローム層が不安定であった。暗色帯が水平堆積するのに対して、それより上位のロームが傾斜して堆積する状況は榛名山東南麓（北陸新幹線・白岩民部遺跡・2000年）などでもみられる現象であり、AT降下以後の気候変動がX層より上位のローム層の堆積に影響したも

I 遺跡と調査の概要

のと想定している。同様に、暗色帯についても上下二層に細分が可能であったが、それも局所的であった。これらのことは、丘陵を分断する鞍部や東西から入り込む浅い埋没谷を考えるなら、当然と言えば当然で、尾根状丘陵地の地層対比が難しいことを改めて再認識した。ここでは、台地西側斜面(2区AQ-94G、第IV文化層・第2地点)におけるローム層の堆積状況を示しておく。(第3図)

I層 表土層

V層 暗黄褐色(風化・土壌化が進み、やや砂質。縄文包含層)

VI層 黄褐色硬質ローム層(As-YPを含む)

VII層 黄褐色硬質ローム層(As-Ok 1を含む)

VIII層 黄褐色硬質ローム層(As-Ok 1を少量混入)

IX層 黄褐色硬質ローム層(As-BPを塊状に含む。パミスは攪拌状態を示す)

X層 褐色硬質ローム層(パミスは含まない。赤城山南麓では通常X層は未発達で、軟質ローム化していることが多い。)

XI層 褐色軟質ローム層(稀に、橙色パミス・As-MPを含む。大抵の場合、未確認)

XII層 暗灰褐色ローム層(暗色帯上半部、下層に比べてやや明るく軟質、XI層を斑状に含む割合の差で細分)

XIII層 黒灰褐色ローム層(暗色帯下半部、より硬質で、小礫を混入)

XIV層 暗黄褐色ローム層(XIII層の漸移層、小礫を混入)

XV層 暗黄褐色ローム層(XIV層より粘性が強い、小礫を混入)

XVI層 暗黄褐色ローム層(Hr-HP混入の量比で細分)

XVII層 Hr-HP(八崎軽石層)

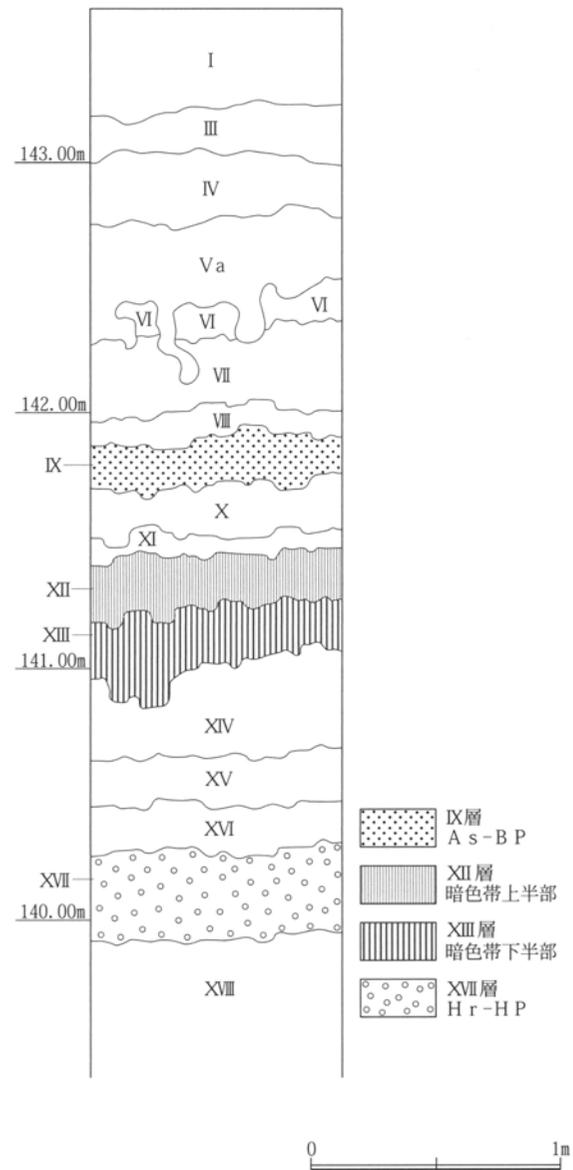
XVIII層 暗褐色ローム層

XIX層 礫層(基盤層)

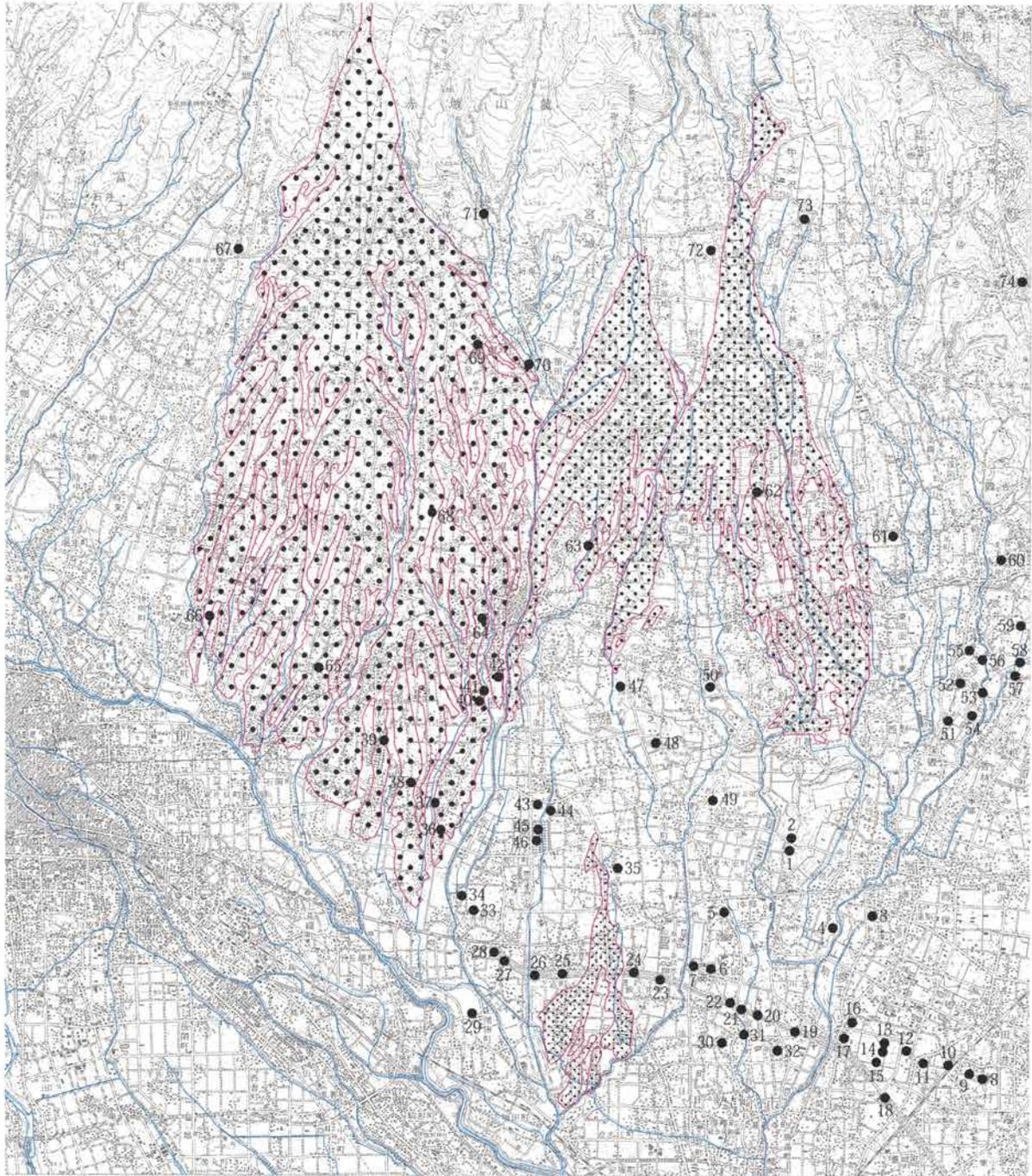
現場では専門家の助言を得てローム層を区分、石器群の層位的な把握を試みたようである。結果的に、観察地点に堆積していたロームが他地点では確認で

きないということもあって、現場が対応できないまま層位的認識が混乱してしまったようである。

地質の分層は以前に比べてより大胆に細分化する傾向は明らかであり、テフラが攪拌しているような場合でもテフラの量比を基準に分層しているようである。一方、考古では習慣的にローム層の明暗や硬軟も分層基準としてきたため、以前は地質以上に細分してしまうこともあったが、テフラが少量であるような場合には認識されないことも多く、逆転現象が生じている。



第3図 ローム層の堆積状態



- | | | | | | |
|-------------|------------|--------------|-------------|-------------|--------------|
| 1 今井見切塚遺跡 | 2 今井三騎堂遺跡 | 3 市場遺跡 | 4 南原遺跡 | 5 石山遺跡 | 6 下蝕牛伏遺跡 |
| 7 吾妻遺跡 | 8 塚下遺跡 | 9 前道下遺跡 | 10 大上遺跡 | 11 天ヶ堤遺跡 | 12 書上遺跡 |
| 13 三和工業団地遺跡 | 14 舞台遺跡 | 15 下植木老丁田遺跡 | 16 光仙房遺跡 | 17 植木光仙房遺跡 | 18 書上本山遺跡 |
| 19 五目牛南組遺跡 | 20 堀下八幡遺跡 | 21 波志江六反田遺跡 | 22 波志江天神山遺跡 | 23 飯土井二本松遺跡 | 24 飯土井中央遺跡 |
| 25 二之宮宮下遺跡 | 26 二之宮千足遺跡 | 27 二之宮谷地遺跡 | 28 今井道上道下遺跡 | 29 今井道上II遺跡 | 30 波志江西宿遺跡 |
| 31 波志江中宿遺跡 | 32 五目牛新田遺跡 | 33 荒砥三木堂II遺跡 | 34 荒砥北原II遺跡 | 35 舞台遺跡 | 36 富田宮下遺跡 |
| 37 富田高石遺跡 | 38 富田漆田遺跡 | 39 萱野II遺跡 | 40 中川原小林遺跡 | 41 三ツ屋遺跡 | 42 上ノ山遺跡 |
| 43 柳久保遺跡群 | 44 頭無遺跡 | 45 柳久保遺跡 | 46 下鶴谷遺跡 | 47 熊の穴遺跡 | 48 小稲荷遺跡 |
| 49 内堀遺跡 | 50 長岡遺跡 | 51 峰岸山古墳群 | 52 峰岸山遺跡 | 53 観音寺遺跡 | 54 十二社遺跡 |
| 55 内出遺跡 | 56 武井遺跡 | 57 北原遺跡 | 58 広間地遺跡 | 59 梨ノ木D遺跡 | 60 武井峰K遺跡 |
| 61 白藤古墳群 | 62 矢継遺跡 | 63 日光道東遺跡 | 64 矢神遺跡 | 65 荻窪南田遺跡 | 66 鳥取福蔵寺II遺跡 |
| 67 小暮東新地遺跡 | 68 堀越二本松遺跡 | 69 市ノ関前田遺跡 | 70 市ノ関ケヶ沢遺跡 | 71 柏倉落合遺跡 | 72 樹形遺跡 |
| | | | | | 73 清水沢遺跡 |
| | | | | | 74 高泉遺跡 |

第4図 周辺の遺跡

I 遺跡と調査の概要

県道北側の今井三騎堂遺跡の報告（2004年）でも指摘した通り、調査地が広範で、地形も複雑であるということ考えたなら、あくまでも考古学的手法に従いローム層を区分した上で、地質学的検討を加えるというのが基本であり、共通認識化は調査中に行えるよう計画することが必要ということだろう。

4. 周辺遺跡

本遺跡が所在する赤城山南麓は、旧石器研究の初期からその濃密な分布域として知られ、岩宿・武井といった学史的に著名な遺跡も多い。ここ二十年來の発掘でも、赤城山南麓では旧石器遺跡の発見が相次いでおり、相当量の旧石器が蓄積されつつある。

（第4図を参照）

その大半は標高100m前後の低平な丘陵性台地に立地しており、その具体像が詳細に判明する地域のひとつになっているが、湧水や河川等の情報以外、取り立てて遺跡立地を特徴づけるようなものはないというのが実情であろう。たとえば、三和工業団地遺跡（13）や大上遺跡（10）などのように湧水を控えた遺跡としてその立地理由が説明されても、どれを採っても石器群は短期的であり、遺跡の継続性は窺われない。県内の旧石器遺跡全般について言えることであるが、調査地の偏在性が著しく、特に垂直方向からみた遺跡分布については言及できないのが現状であり、山麓特有の地域特性が記述できないでいる。

また、関越その他の幹線道の発掘で旧石器遺跡が発見・調査されても、その後の旧石器調査が進まず、遺跡分布の実態が読み取り困難になっているというのが現状である。具体的には県北の石材潤沢地帯の様相、山麓の標高500m前後の地域、火山灰が厚く堆積している西毛地域における遺跡立地・石器群の重複等が課題となっている。

そうしたなかで、赤城山南麓の独立丘陵上に立地する旧石器遺跡の発掘として本遺跡発掘が加わったことは、南麓域の遺跡動向を占う有力な資料になる

だろうことは明らかである。学史上名高い岩宿遺跡の発見も大間々扇状地内の独立丘陵・鞍部であり、遺跡立地や文化層の重複状況が本遺跡のそれと相同であり、偶然として単純に見過ごすことはできないだろう。

赤城山南麓の旧石器分布については、今井三騎堂遺跡の報告（2004年）で触れたとおりであり、その後、改めて付け加えることはないが、平成17年度の砂押遺跡（前橋市粕川町室沢、74）発掘調査で、標高500m付近の丘陵部に立地する旧石器遺跡の存在が明らかになった。出土した旧石器の詳細は不明であるが、As-BP 下位から AT より上位の石器群であるようで、石器ブロック数ヶ所からなる単位的石器群であった。遺跡地は「粕川扇状地」の扇頂部に当たる。扇状地の形成時期は縄文時代中期以前と見られ、遺跡は深い谷を見下ろす丘陵上に立地していたということになるだろう。これより上位の丘陵は比較的平坦になっており、そこには縄文前期集落が発見されていることでも明らかかなように、集落を維持する上で必要な資源環境にあったということは確実である。

赤城山南麓の旧石器遺跡の動向については AT 降下以後小規模化する傾向にあるが、同時期の石器群が標高500m近い赤城山南麓に発見されたことは注目しておきたい。砂押遺跡の旧石器は地球規模で寒冷化が進む時期の石器群であり、周辺域の旧石器遺跡の存在は確実となった。高原山黒曜石の原産地遺跡発見の例を挙げるまでもなく、周辺域の旧石器調査の進展が期待されるところである。

II 調査の成果

II-1 第I文化層

(1) 1 b地点

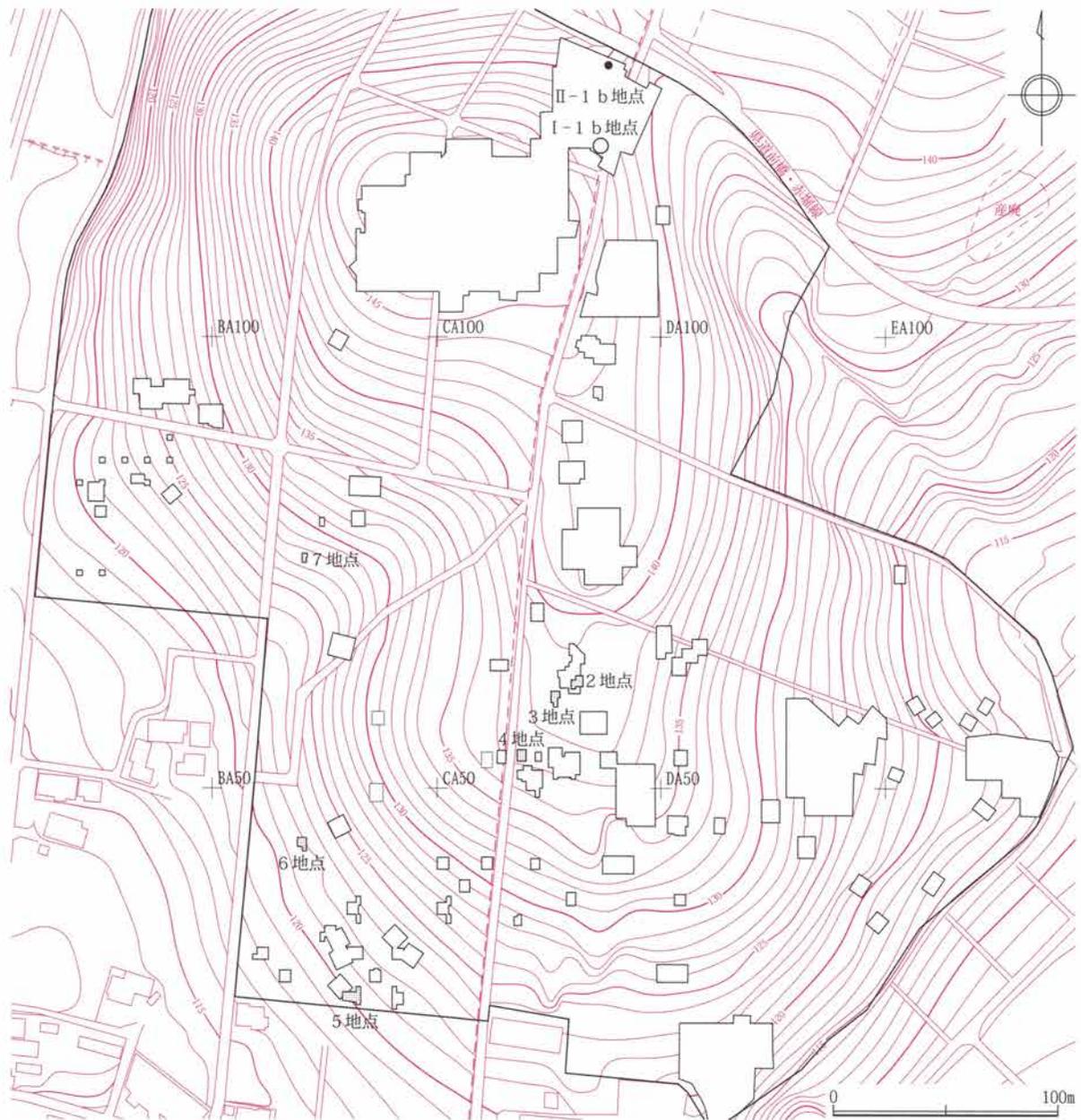
概要

当該期石器群は、調査区北・丘陵鞍部に近い斜面部（標高144m付近、第5図を参照）に出土した。

石器の分布範囲は約75m²と狭く、総計48点（配石礫14点を含む）の石器が出土したのにすぎない。

石器ブロックは5ヶ所（第6図）を認定、その分布は比較的散漫であった。5ヶ所の石器ブロックは直線的に存在、3ヶ所で配石と重複していた。

配石は4ヶ所を（第6図）認定した。1ヶ所のみ単独分布した配石には、配石礫中最大重量を測る礫



第5図 石器の出土地点(第I・II文化層)

II 調査の成果

(12.8kg)が存在しており、特徴的であった。

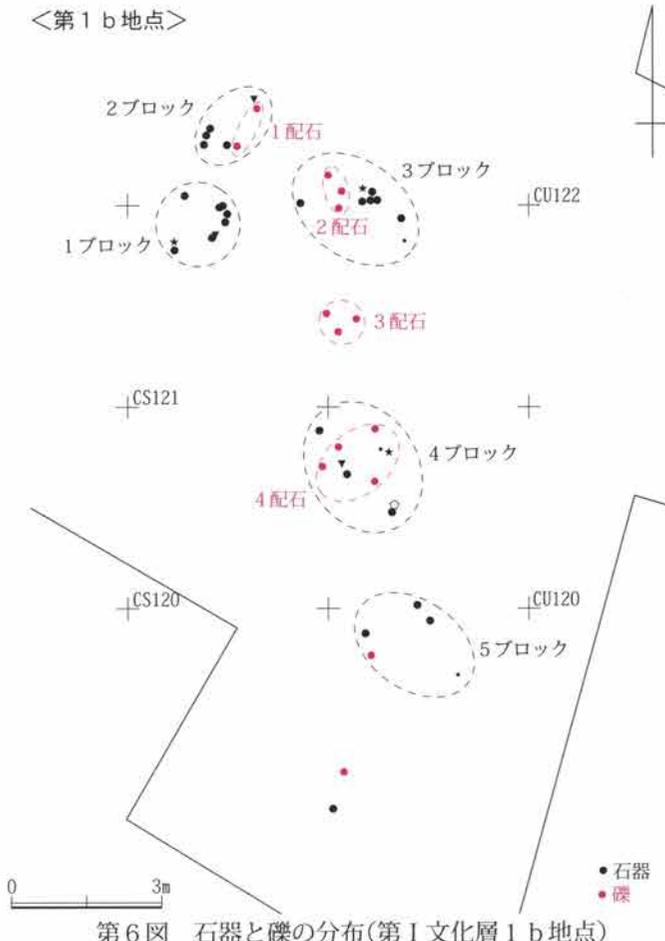
石器の出土層位については、取り上げ段階の所見でVI層18点・VII層29点・VIII層1点となっていた。石器・礫の出土状況については、写真(PL2)を見る限り、配石礫より上位から出土した石器は概して少なく、垂直分布図(第11図)を見ても、石器は配石礫の下面付近に多出しているようであり、出土量のピークはVII層の中程と捉えた。

石器石材は、ホルンフェルスが15点と最も多く、

第1表 器種・石材構成 (I文化-1b地点)

	細石核	加工痕	石核	剥片	敲石	台石	碎片	礫	合計
黒安	0	0	1	9	0	0	1	0	11
チャート	1	2	0	2	0	0	1	1	7
珪頁	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ホルン	0	1	2	12	0	0	0	0	15
砂岩	0	0	0	0	0	0	1	0	1
溶凝	0	0	0	0	0	1	0	1	2
粗安	0	0	0	0	1	0	0	10	11
合計	1	3	3	24	1	1	3	12	48

<第1b地点>



黒色安山岩が11点で続いている。その他の石材については1・2点が出土している程度であり、単独出土に近い。

接合資料については、ホルンフェルス製剥片の接合資料のみ3例9点を確認した。

現状の石器分布を見る限り、石器分布が調査区外へ広がる可能性については、ほとんどないのではないかと考えている。直線的に並ぶ5ヶ所の石器ブロックについては、石器石材、及び、接合資料の分布(接合資料の分布、石材分布の項を参照)からみて、単独分布した配石(3号)を境に南北両群に二分して捉えることができるかもしれない。

出土石器

総計34点の石器(14点の礫を除く)が出土している。細石刃核1点を含む石核類4点・剥片類27点が出土しており、加工石器は3点と少ない。比率を単純に見れば活発な剥片生産も想定可能だが、石器の出土量は少なく、石核を部分的に消費、剥片を少量生産したものと理解している。

示準的の石器は細石刃核であるが、細石刃は出土していない。

細石刃核 (第7図1、PL25)

1点のみ出土した。角柱状を呈する細石刃核。細石刃剥離は石核両側面・中央付近まで及んでおり、その剥離範囲は打面調整範囲に一致している。石核に残る剥離面構成から、少なくとも11枚の細石刃を剥離したようである。石核正面で剥離した細石刃は最大幅が7mmと若干幅広だが、剥離した細石刃の平均的サイズは長さ2.5cm・幅5mm程度と考えている。左右両側面、及び、裏面側には、石核整形時の剥離面が残る。打面調整は作業面に対し直交しており、その切り合い関係から細石刃を剥離するたびに打面調整を施し、打点を大きく移動して細石刃を剥離していることが分かる。最初期の打面は石核を

斜め後方(50°)に大きく打ち欠き、細石刃剥離時に打面調整を行って、直角に近い打面を作出している。4号ブロック出土。チャート製。

加工痕ある剥片(第7図2~4、PL25)

3点が出土している。2は、素材剥片の打面部を粗く加工したもの。三角形状を呈する小形剥片を用いる。加工意図については不明だが、打点を大きく移動させ中央付近は突出している。直線状を呈する右側縁には小剥離痕が生じている。3号ブロック出土。チャート製。3は、2と同様に剥片の打面部を除去するよう粗く打ち欠いたもの。左側縁には連続的に小剥離痕が生じており、刃部と認定できよう。刃部部角は60~70°を測り、刃部角の厚い側縁を用いる点でも2に類似する。2・3は同一母岩に分類が可能かもしれない。4号ブロック出土。チャート製。4は、左右両側縁に極めて粗い加工したもの。素材剥片は左側縁が膨らみ、右側縁が直線的形状を示す縦長剥片と見られ、やや外側に膨らむ左側縁を裏面側から粗く、直線的な右側縁には背面側から浅い剥離を加えて石器を作出したもの、と考えている。1号ブロック出土。ホルンフェルスー1。

石核(第7図5、PL25)

3点が出土している。1点を図示した。残る2点の石核については接合資料として図示しているので第9・10図を参照されたい。

5は、板状剥片を石核素材に用いる。石核の表裏両面で小形剥片を剥離しており、正面右下の剥離で破損した可能性が高い。破損したのち石核は、やや厚い角度の側縁加工を施し、削器に転用している。

2号ブロック出土。黒色安山岩ー1。

剥片(第7図6、第8図1~5、PL25)

24点が出土している。ホルンフェルス製の剥片を除き、遺跡内剥離した可能性は低い。

第7図6は、平坦打面より剥離した縦長の剥片。左側縁の刃部角は厚く、その縁辺には小剥離痕が生じている。5号ブロック出土。黒色安山岩。第8図1・2は、平坦打面より作出した縦長の剥片。1の側縁形状は石刃に近く、2は若干幅広の剥片形状を

呈している。1・2とも頭部調整が著しい。1は5号ブロックより、2は4号ブロックより出土した。黒色安山岩。4は、幅広の小形剥片。剥片の断面形状は「し」の字状を呈し、板状石核から剥離した可能性が高い。3号ブロック出土。黒色安山岩ー2。3・5は、幅広の大形剥片。3は、接合資料2例(第8図)と同一の母岩から剥離している可能性が高い。1号ブロック出土。ホルンフェルスー1。5は打点を大きく移動させ剥離した幅広の剥片。背面に残る剥離面構成からみて、求心状剥離する石核から剥離している可能性が高い。ブロック外。黒色安山岩ー2。

敲石(第9図1、PL25)

1点のみ出土している。長さ15.6cm・幅10.6cm・重さ1506gを測る河床礫を用いる。礫の小口部分が人為的に加撃され、破損している。2号配石を構成する礫のひとつであるが、先端の加撃痕を重視して敲石として機能した可能性も想定しておきたい。

台石(第9図2、PL25)

1点のみ出土。長さ23.9cm・幅10.9cm・重さ3288gを測る河床礫を用いる。礫は冷却節理面で大きく割れた片側の礫で、分割面には小剥離面が存在したほか、エッジが潰れていた。3号配石を構成する礫のひとつであるが、小剥離痕や打痕を重視するなら、台石的機能も想定が可能である。分割面は若干磨耗しているようにも見えたが、同種石材の新鮮な分割面については確認していないため断言できない。

接合資料

接合資料は3例9点を確認している。剥片類は34点が出土、うち9点が接合関係(接合率は26.5%)を有したことになる。

接合資料ー3(第9図、PL26)

2点からなる接合資料。高さ4.8cm・幅9.8cm・長さ12.6cmを測る偏平礫を石核素材に用いる。打点を大きく左右に振り、横長剥片を剥離しており、後退したように石核消費するタイプの剥片剥離と理解している。剥片は3号ブロック、石核は4号ブロック

II 調査の成果

から出土。ホルンフェルスー2。

接合資料ー1 (第10図、PL26)

石核1・剥片3からなる接合資料。裏面側に礫面を残していることから、石核消費の最終段階を示す接合資料と理解している。剥離面構成からみて頻繁に打面転移する剥離法が想定可能で、3点(剥片1~3)とも打点が異なっている。剥離面構成から見ると、最終的に剥離した剥片の形状(接合資料・正面)は小形・幅広剥片と見られ、縦長剥片を剥離しようとする意識は弱い。1号ブロック出土。ホルンフェルスー1。

接合資料ー2 (第10図、PL26)

剥片2点からなる接合資料。接合資料ー1と同一母岩に分類可能で、基本的に剥離法も同様と考えている。剥片1・2は長さ5cm・幅2cm程度であり、やや幅広だが縦長剥片を剥離しようとする意図を感じる。2号ブロック出土。ホルンフェルスー1。

石器と礫の分布

石器群は丘陵鞍部に近い斜面部に分布した。出土地点は概ね北東側に緩く傾斜しており、総計48点の石器・礫類が石器ブロック5ヶ所・配石4ヶ所を形成して出土した。これらはコンタ(標高141m付近)に沿って直線的に分布、石器ブロック3ヶ所が配石と重複していた(PL2)。

1号ブロック (第12図)

位置 丘陵北東側斜面部 (CS-121G)
規模 長軸1.3m・短軸1.0m
分布状態 散漫に分布した。
出土層位 VI~VII層
出土点数 9点
器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片7
石材構成 ホルンフェルス8、黒色安山岩1
その他 接合資料1例(接-1)を確認した。

2号ブロック (第12図)

位置 丘陵北東側斜面部 (CS-122G)
規模 長軸1.4m・短軸0.5m
分布状態 ホルンフェルスがブロックの南側に分

布した。黒色安山岩が1点のみ離れて北側に分布。

出土層位 VI~VII層に出土している。

出土点数 5点

器種構成 石核1、剥片4

石材構成 ホルンフェルス4、黒色安山岩1

その他 接合資料1例(接-2)を確認した。
1号配石と重複。

3号ブロック (第11図)

位置 丘陵東側斜面部 (CT-121・122G)

規模 長軸2.2m・短軸0.7m

分布状態 散漫に分布した。

出土層位 VI~VII層

出土点数 8点

器種構成 加工痕ある剥片1、剥片6、碎片1

石材構成 チャート3、ホルンフェルス2、砂岩1、珪質頁岩1、黒色安山岩1、

その他 接合資料1例(接-3)を確認した。
2号配石と重複。珪質頁岩製の碎片は左側縁に礫表皮を大きく残す。長さ2.6cm・0.9cmを測る細石刃様の小形品だが、細石刃としては断面(厚さ0.7cm)が厚過ぎる。剥片端部に石核下面を取り込んで剥離。石器は単独出土であり、その性格等については明確ではない。

4号ブロック (第11図)

位置 丘陵東側斜面部 (CT-120G)

規模 長軸2.3m・短軸0.9m

分布状態 散漫に分布した。

出土層位 VI~VIII層

出土点数 7点

器種構成 細石刃核1、加工痕ある剥片1、石核1、剥片3、碎片1

石材構成 黒色安山岩4、ホルンフェルス1、
チャート2

その他 接合資料なし

5号ブロック (第11図)

位置 丘陵東側斜面部 (CT-119・120G)

規 模 長軸2.0m・短軸0.9m
 分布状態 散漫に分布した。
 出土層位 VI～VII層
 出土点数 5点
 器種構成 剥片3、碎片1、礫1
 石材構成 黒色安山岩3、チャート1、粗粒輝石安山岩1
 そ の 他 本ブロックには、単独で礫1点が出土した。角礫が丸味を帯びた程度の亜角礫であり、礫重量は6850gを測る。

配石礫と捉えることもできたが、特に広い平坦面を有するというわけでもないことから、積極的に配石とは認定しなかった。

1号配石 (第12図)

位 置 丘陵北東側斜面部 (CS-121G)
 規 模 長軸2.0m・短軸0.9m
 出土層位 VII層

出土点数 2点
 石材構成 粗粒輝石安山岩
 そ の 他 1点は河床より採取した亜円礫 (礫重量2400g、チャート製)、残る1点は粗粒輝石安山岩製の亜角礫 (礫重量1700g)。2点の礫は0.9mほど離れて出土。2号ブロックと重複分布。

2号配石 (第11図)

位 置 丘陵北東側斜面部 (CS-121G)
 規 模 長軸2.0m・短軸0.9m

出土層位 VII層
 出土点数 3点
 石材構成 粗粒輝石安山岩
 そ の 他 南北方向に並んで出土。中央に出土した礫は最も大形で、礫重量は9950gを測る亜角礫、北側の礫は1506gを測る円礫 (第9図1)、南側の礫は1364gを測る亜角礫 (礫形状については表皮が

第2表 ブロック・配石別器種構成 (I文化-1b地点)

	細石核	加工痕	石核	剥片	敲石	台石	碎片	礫	合計
1号ブロック	0	1	1	7	0	0	0	0	9
2号ブロック	0	0	1	4	0	0	0	0	5
3号ブロック	0	1	0	6	0	0	1	0	8
4号ブロック	1	1	1	3	0	0	1	0	7
5号ブロック	0	0	0	3	0	0	1	1	5
ブロック外	0	0	0	1	0	0	0	1	2
1号配石	0	0	0	0	0	0	0	2	2
2号配石	0	0	0	0	1	0	0	2	3
3号配石	0	0	0	0	0	1	0	2	3
4号配石	0	0	0	0	0	0	0	4	4
合計	1	3	3	24	1	1	3	12	48

第3表 ブロック別石材構成 (I文化-1b地点)

	黒安	チャート	珪頁	ホルン	砂岩	溶凝	粗安	合計
1号ブロック	1	0	0	8	0	0	0	9
2号ブロック	1	0	0	4	0	0	0	5
3号ブロック	1	3	1	2	1	0	0	8
4号ブロック	4	2	0	1	0	0	0	7
5号ブロック	3	1	0	0	0	0	1	5
ブロック外	1	0	0	0	0	0	1	2
1号配石	0	1	0	0	0	1	0	2
2号配石	0	0	0	0	0	0	3	3
3号配石	0	0	0	0	0	1	2	3
4号配石	0	0	0	0	0	0	4	4
合計	11	7	1	15	1	2	11	48

II 調査の成果

剥がれ落ち不明)であった。礫はそれぞれ0.3~0.5m離れて出土。3号ブロックと重複して分布。

3号配石 (第11図)

位置 丘陵東側斜面部 (CT-121G)
規模 長軸0.6m・短軸0.3m
出土層位 VII層
出土点数 3点
石材構成 粗粒輝石安山岩
その他 3点の礫が0.6cmほど離れて出土。北東側に出土した礫は溶結凝灰岩製の円礫(第9図2)で、台石的機能が想定可能。残る2点は角礫、及び、亜角礫で、2点とも破損していた。

4号配石 (第11図)

位置 丘陵東側斜面部 (CT-120G)
規模 長軸1.3m・短軸1.0m
出土層位 VII層
出土点数 4点
石材構成 粗粒輝石安山岩
その他 北西側中央の礫は礫重量7700gを測る完形の亜角礫。南東側の礫も6663gを測る完形の亜角礫。残る礫2点は1200g前後を測る礫である。

接合資料の分布

1・2号ブロックで各1例のブロック内接合を、3・4号ブロック間で1例のブロック間接合を確認した。3例とも接合資料はホルンフェルス製の剥片類の接合(第13図を参照)である。

ブロック内接合した2例の接合資料(接-1・2)については接合関係こそないが、近接して分布することから断続的な石核消費を反映している可能性も否定できない。

3号ブロックの剥片と4号ブロックの大形石核がブロック間接合した接-3(第9図)については、遺跡内消費したものであるが、出土した2点以外に剥片類が出土していないため、剥離地点については

特定できなかった。

石材分布

当該期石器群においては、5種類の石材(配石礫を除く、第3表を参照)からなるということが判明した。ホルンフェルスが15点と最も多く出土、続いて黒色安山岩11点が出土している。砂岩・珪質頁岩については剥片(各1点)のみ単独出土、その性格について現状では判断できない。

ホルンフェルス (第13図)

母岩2個体を確認した。分布状況は特徴的で、1点を除いて、すべて3号配石より北側に分布した。ホルンフェルス-1は1・2号ブロックに12点が、3号ブロックに1点のみ分布した。3号ブロックの1点は、形態的には不要剥片であり、移動理由は明確ではない。ホルンフェルス-2は配石を挟む南北2ヶ所のブロックに分布した。2点(石核1・剥片1)のみからなる母岩で、剥離地点は特定できない。

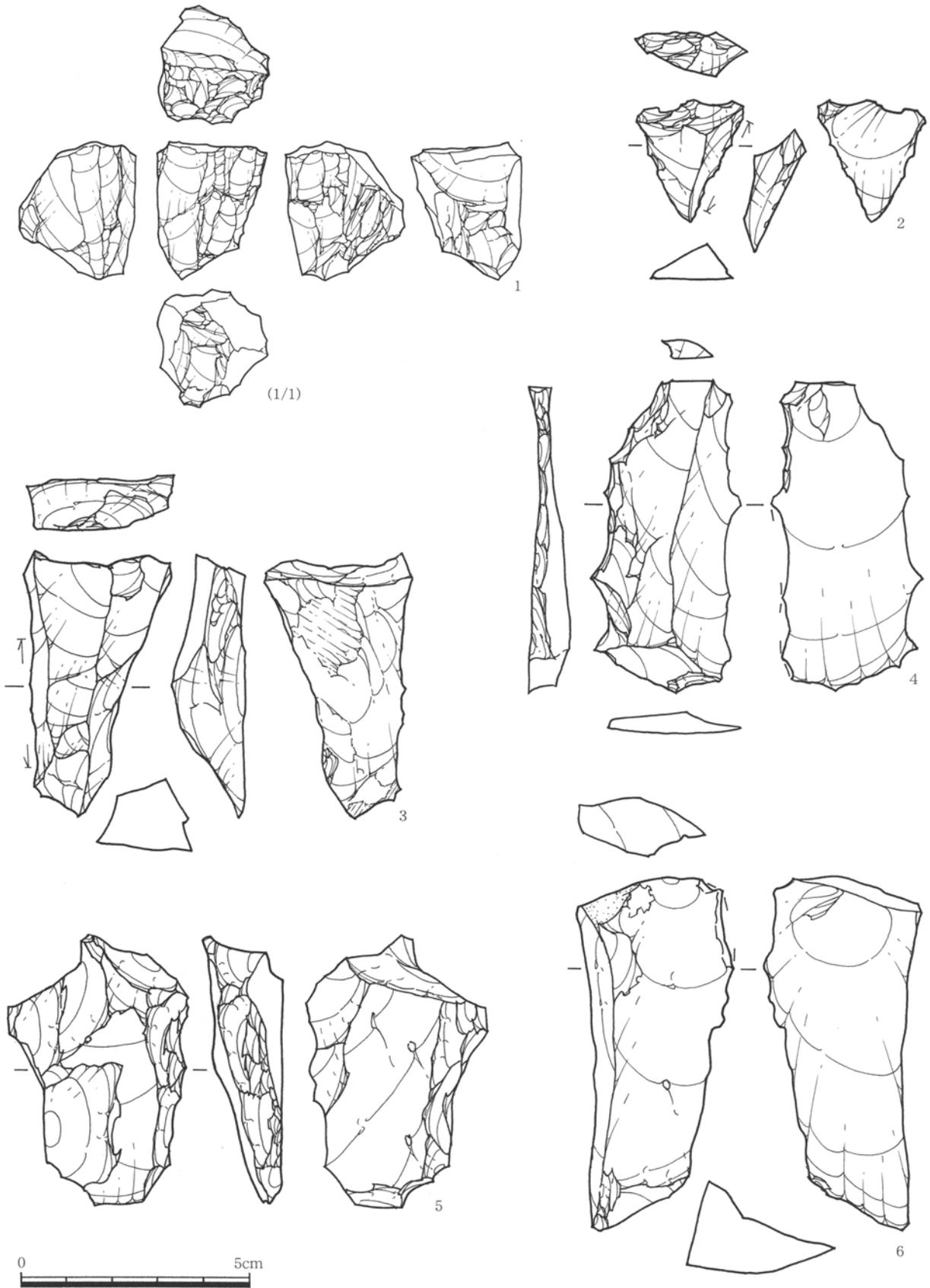
黒色安山岩 (第13図)

母岩2個体を確認した。3号配石より南側に多く分布しており、北側では1点が2号ブロックから出土しただけであった。

黒色安山岩-1は4号ブロックに3点が、2号ブロックに1点が分布した。4号ブロックの3点は剥片類であり、少量の剥片生産を示唆している。2号ブロックの1点は、石核を転用した削器的な石器(第7図5)。搬入石器の可能性が高い。黒色安山岩-2は3・5号ブロック、ブロック外に各1点が出土。3点とも鈍角剥離する点で共通する。分類不能な黒色安山岩は3号配石より南に多く、搬入石器と理解している。

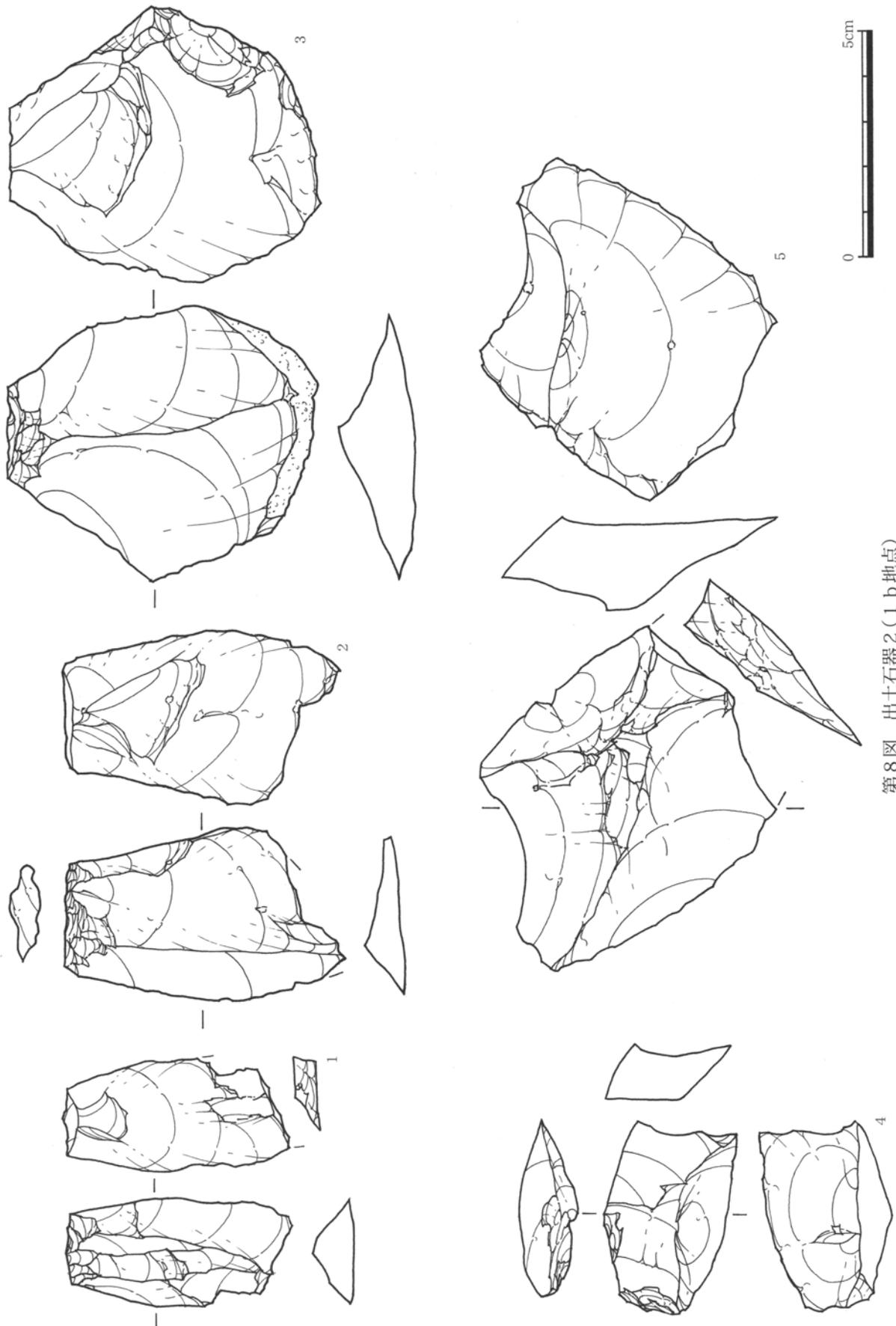
チャート (第13図)

3号ブロックに3点、4号ブロックに2点が分布したほか、5号ブロックに剥片1点が出土した。3・4号ブロックの加工痕ある剥片(第7図2・3)以外は単独母岩である。5号ブロックの剥片については単独出土であり、評価できない。

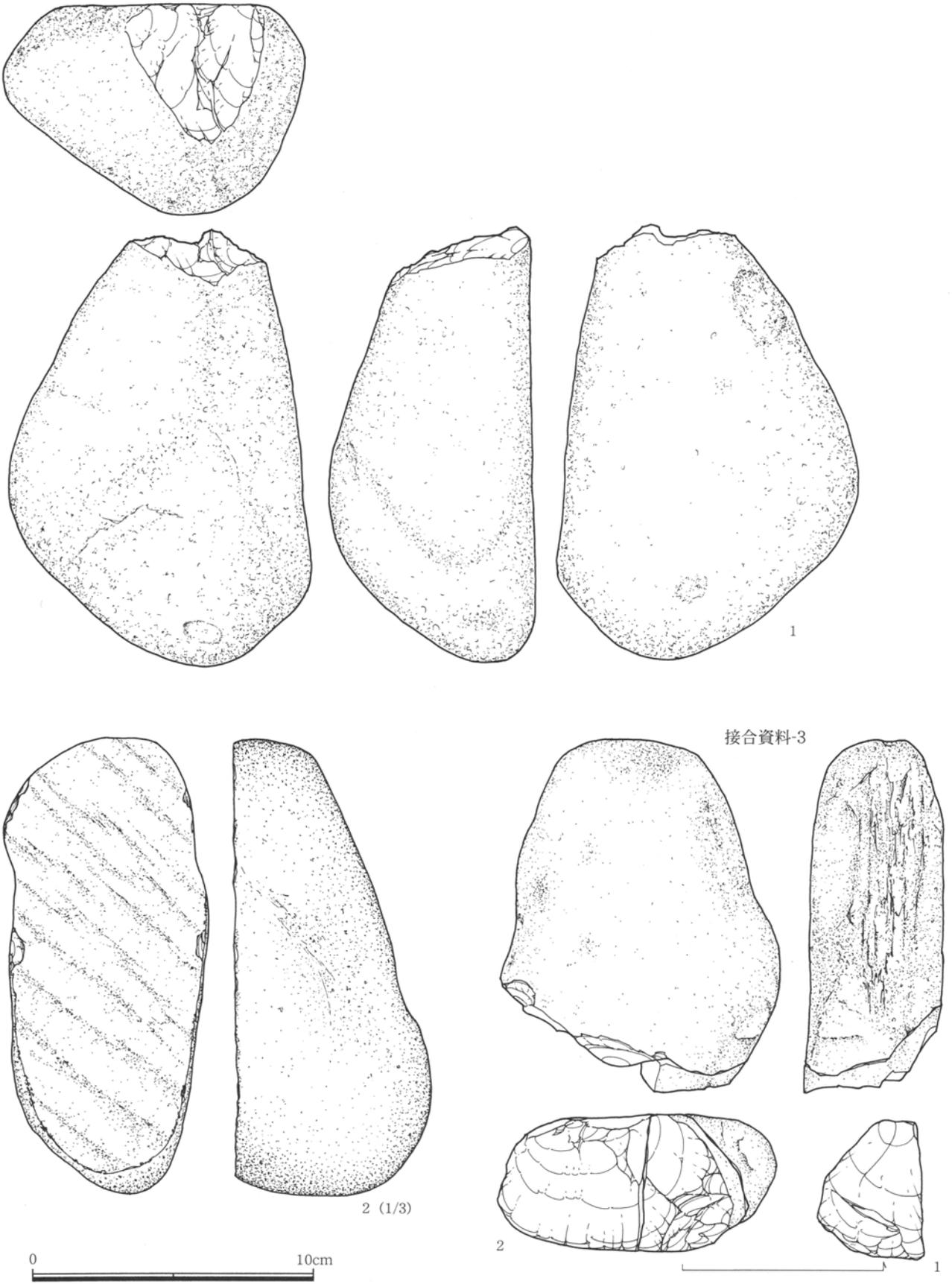


第7图 出土石器1(1 b地点)

II 調査の成果

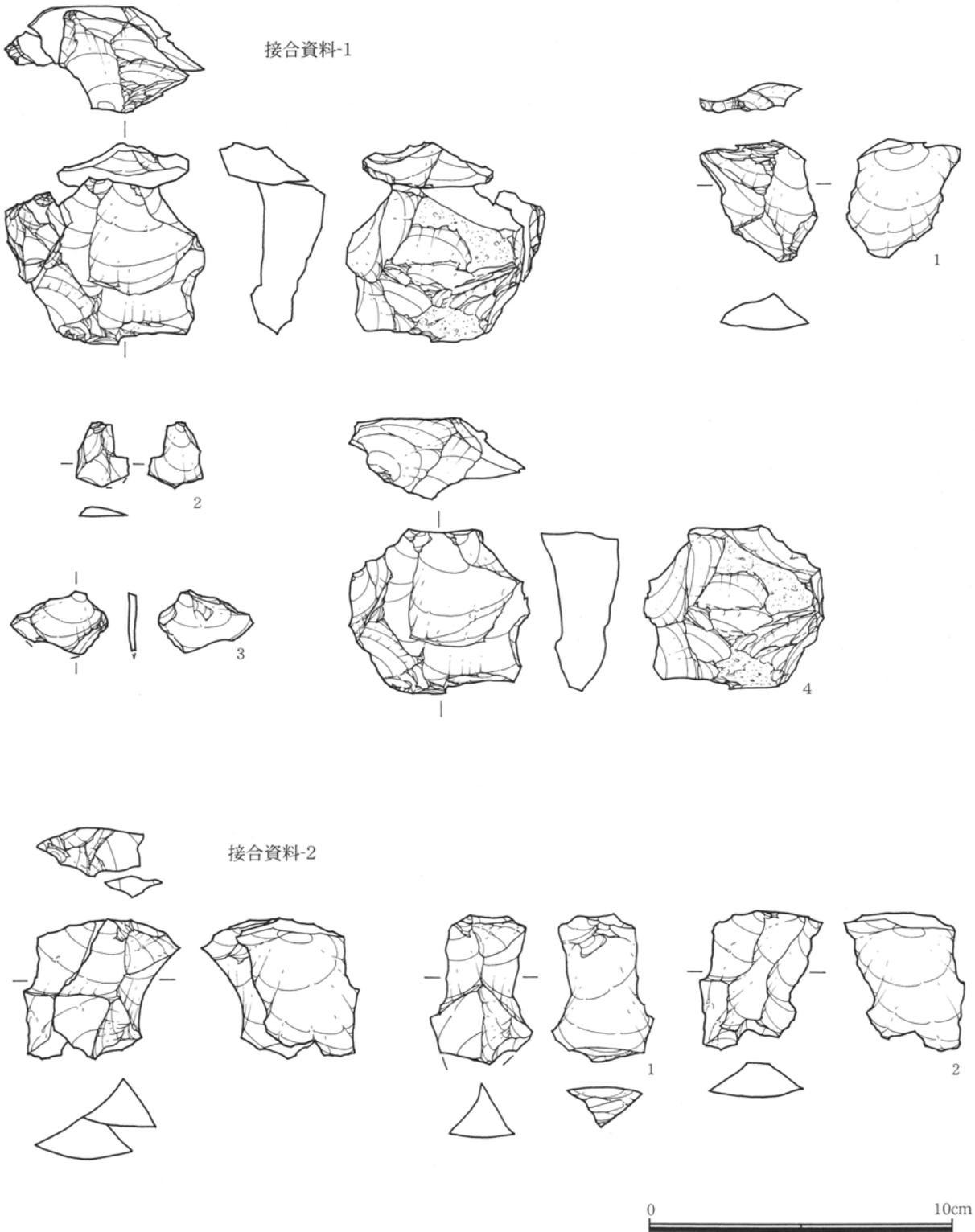


第8図 出土石器2 (1 b地点)



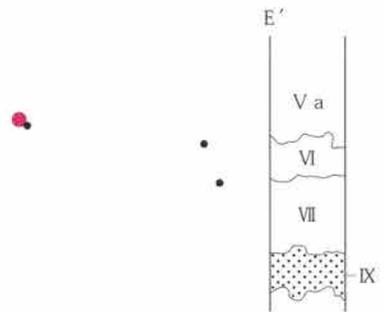
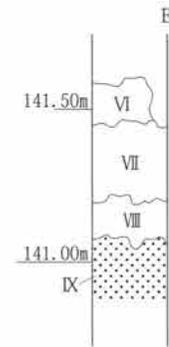
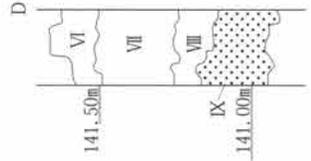
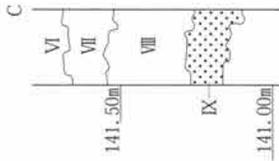
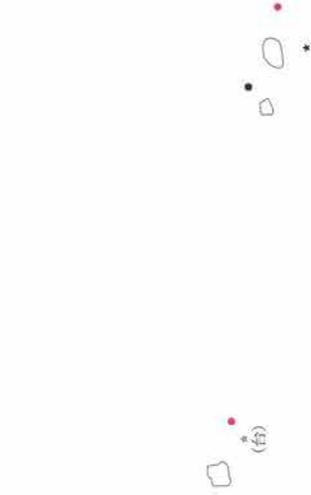
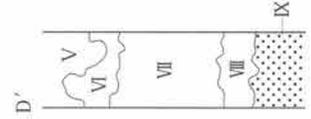
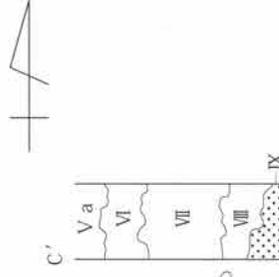
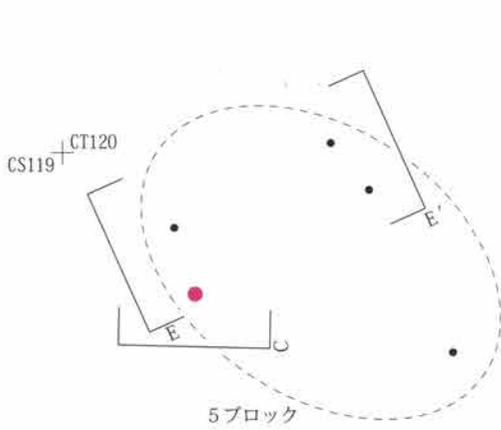
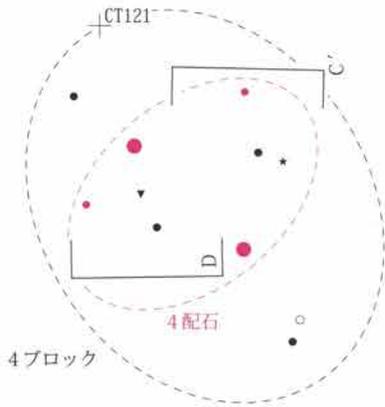
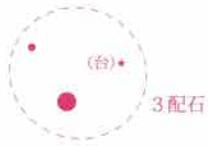
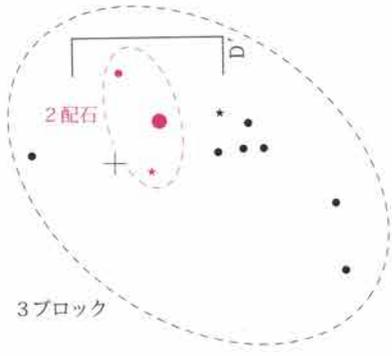
第9図 出土石器3(1 b地点)

II 調査の成果



第10図 接合資料(1 b地点)

<3・4・5号ブロック>



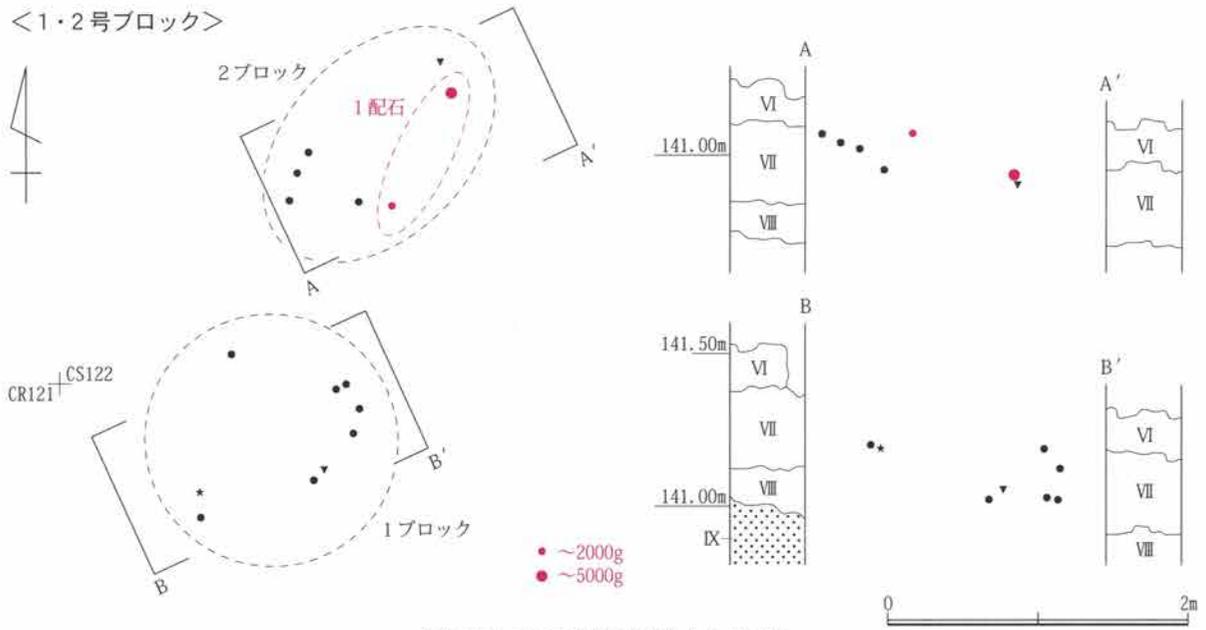
- ~2000g
- ~5000g
- ~10000g
- 10000g~



第11図 石器の分布1 (1 b地点)

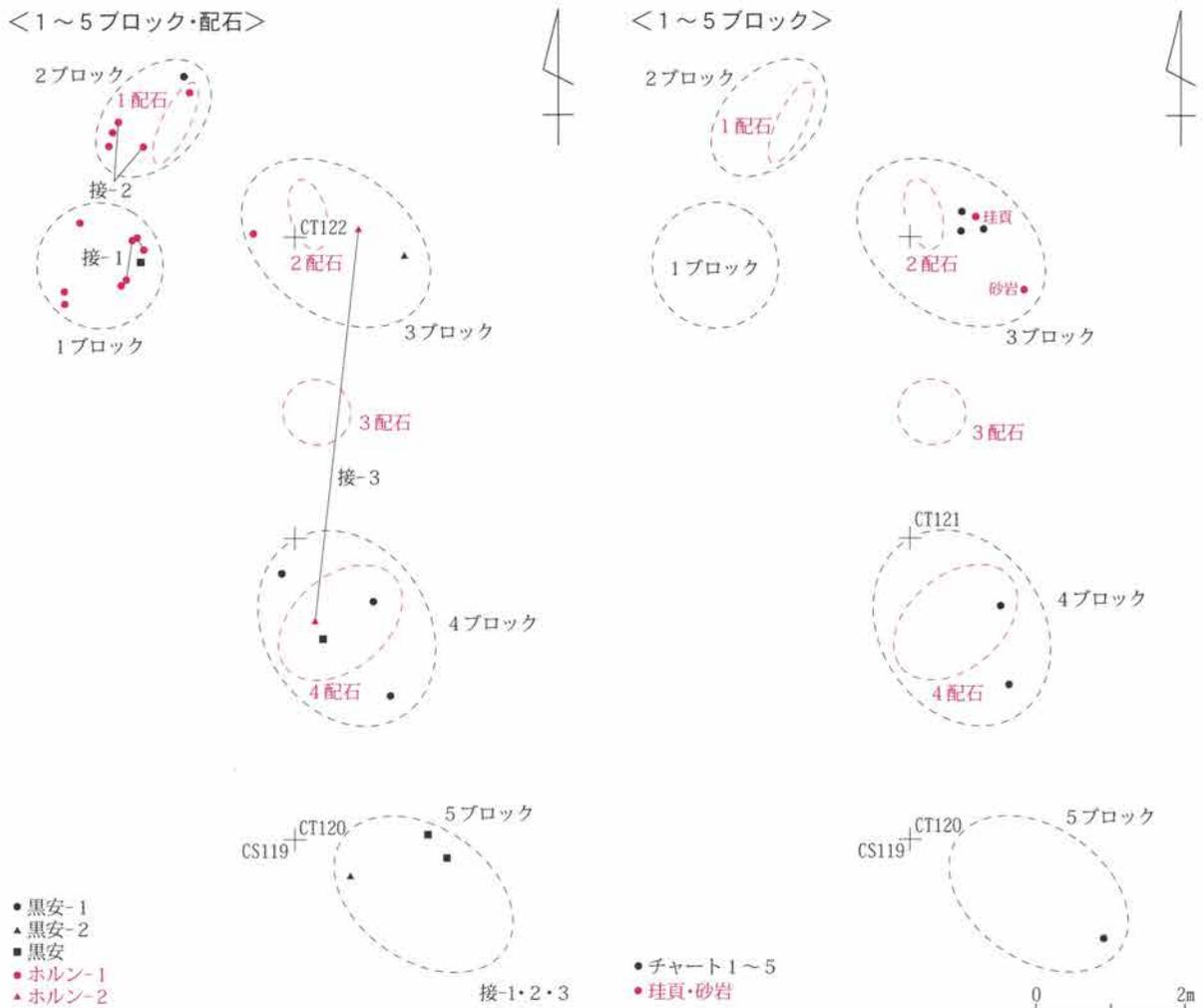
II 調査の成果

<1・2号ブロック>



第12図 石器の分布2(1 b地点)

<1~5ブロック・配石>



第13図 接合資料と石器石材の分布(1 b地点)

II-2 第II文化層

当該期石器群は、7地点に分布（第5図を参照）した。微視的に見た石器の出土地点は、比較的平坦な尾根上の先端部に3ヶ所（第2～4地点）、丘陵の南西側斜面部に2ヶ所（第5・6地点）、西側斜面部（第7地点）、及び、北側斜面部（1b地点）に各1ヶ所となっており、調査区中央より南側に分布する傾向を示していた。丘陵南西側斜面の第5地点を除いて、各地点とも1～2点が単独出土しているのにすぎない。

石器の出土層位はVI～VIII層に収まっているようだが、調査時の層位的所見が地点毎に異なっていること、1b地点から単独出土した尖頭器（第21図1）を除き剥片類の出土が主体となっており、示準的石器に乏しいことから、現状では石器群の同時性については確定できない。

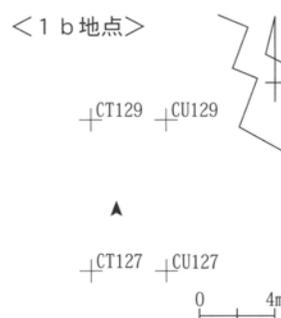
なお、第5地点の石器群については石器群の層位的所見がなく、ここでは整理作業を通じて得た層位的所見（第24図を参照）、及び、スライド写真から判定して、当該期石器群と捉えた。

(1) 1b地点

1点のみ単独出土した。石器の出土地点は調査区北端に近い丘陵の北側斜面で、第III・IV文化層出土の石器群と重複して出土した（第14図）。石器はVIII層から出土した。

出土した石器の形態的特徴が明瞭であったこと、石器の出土層位・使用する石器石材とも周辺石器群とは明らかに異なっており分離は容易であった。第21図1（PL27）は、縦長剥片を用いて全面加工を施し作出した槍先形尖頭器。側縁形状は左右で異なっており、左側縁が弧状を呈するのに対して、右側縁は直線的であり、全体として略「木葉形状」を呈している。

石器の断面形状は素材となった剥片の断面形状を



第14図 石器の分布1（1b地点）

第4表 地点別器種構成（II文化）

	1b地点	2地点	3地点	4地点	5地点	6地点	7地点	合計
尖頭器	1	0	0	0	0	0	0	1
削器	0	1	0	0	2	0	0	3
石核	0	0	0	0	1	0	0	1
剥片	0	1	1	1	32	1	1	37
破片	0	0	0	0	10	0	0	10
礫片	0	0	0	0	1	0	0	1
合計	1	2	1	1	46	1	1	53

第5表 地点別石材構成（II文化）

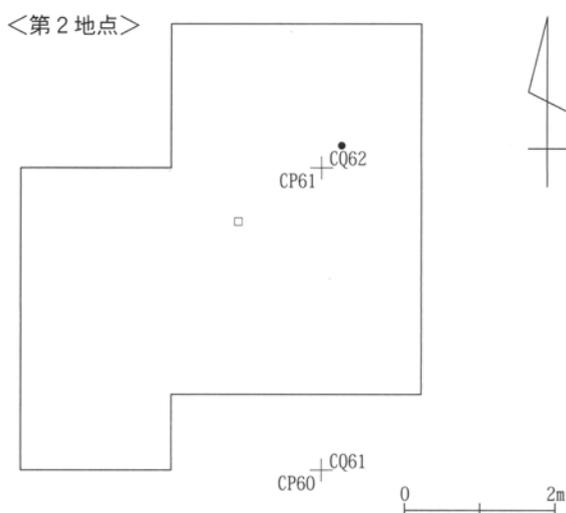
	1b地点	2地点	3地点	4地点	5地点	6地点	7地点	合計
黒安	0	1	0	0	0	0	0	1
黒頁	0	0	0	0	7	1	0	8
黒曜石	0	1	1	0	0	0	0	2
硬頁	1	0	0	0	0	0	0	1
チャート	0	0	0	0	0	0	1	1
ホルン	0	0	0	1	38	0	0	39
粗安	0	0	0	0	1	0	0	1
合計	1	2	1	1	46	1	1	53

II 調査の成果

反映して、三角形を呈する。調整加工は、背面側では部分的に階段状剥離となっているが、裏面側では平坦剥離となっている。背面側・左側縁下部や右側縁中央には部分的に1次剥離面が残る他、裏面側にも1次剥離面を大きく残している。背面側の稜線は器体上半と下半では異なっているようだが、素材剥片の剥離軸、及び、剥離面構成が背面側稜線の形成に大きく影響したのではないだろうか。CT-127 G出土。油脂光沢の強い、チョコレート色をした硬質頁岩。

(2) 第2地点

比較的平坦な尾根の南側先端に位置(第15図、PL 2)している。出土した石器は黒曜石製の削器1点(第21図2)と、黒色安山岩製の剥片1点(未掲載)である。調査時の所見では石器の出土層位はVI層となっているが、縄文包含層の調査を終えて旧石器の試掘調査を行った経緯からみて、この地点のVI層は「硬質ローム層」としてのそれというより、土壌化した「軟質ローム層」と理解すべきであり、旧石器調査はVII層から始めたというのが実態だろう。また、周辺域のロームはVII層が10cm前後と薄く、VI層がVIII層まで達していることを踏まえるならば、本来的にはVII層に包含した石器であろう。



第15図 石器の分布2(第2地点)

2は、小形・横長剥片を用いた削器。打面側に刃部を設定、ノッチ状に機能部を作出している。石器は中央より左側を大きく欠損している。切り合い関係からみて、刃部作出段階に破損した可能性が強い。背面側に比べ、裏面側の剥離面は微妙に擦れており、「剥片の状態を持ち込み、削器として加工した」か、「削器として持ち込み、刃部を再生した段階で破損・廃棄した」可能性が想定されよう。CP-61G・VI層から出土。黒曜石。残る1点は、黒色安山岩製の剥片。左側縁には礫面が大きく残る反面、側縁は直線的であり、剥片形状は良好である。剥片上半部を欠いている。CQ-62G・VI層から出土。黒色安山岩。

(3) 第3地点

1点のみ出土した(第16図)。出土地点は尾根上の平坦地に位置し、第2地点から10mほど南西に離れている。

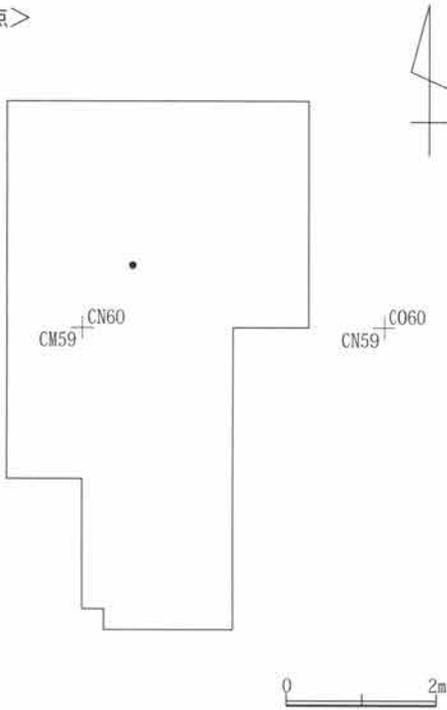
第21図3は、大形の幅広剥片。背面側の剥離面構成からみる限り、この大形剥片は両設打面を準備、石核消費の初期段階で剥離した剥片であることが分かる。剥片剥離の際には、丁寧な頭部調整を施している。打面調整は施されない。長さ・幅とも10cmを超える大形の石核が想定可能。CN-60G・VII層から出土。黒曜石。

(4) 第4地点

1点のみ出土した。比較的平坦な尾根が南西側に緩く傾斜する斜面に位置する(第17図)。位置的に最も近い第3地点とは約30mの距離を隔てる。

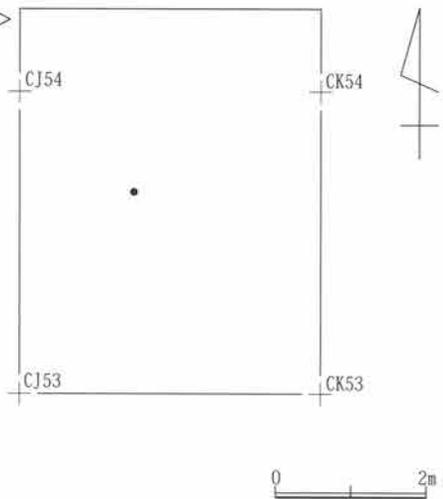
第21図6は、平坦打面より剥離した小形剥片。背面側には、広い平坦な剥離面を取り込んでいる。ホルンフェルス。

<第3地点>



第16図 石器の分布3(第3地点)

<第4地点>



第17図 石器の分布4(第4地点)

(5) 第5地点

概要

調査区南端に近い、丘陵南西側斜面部に分布した。石器群は東西5m・南北2mの範囲に広がり、礫片1点を含む46点の石器が出土した。石器ブロックは3ヶ所を確認した(第18図、PL2)。

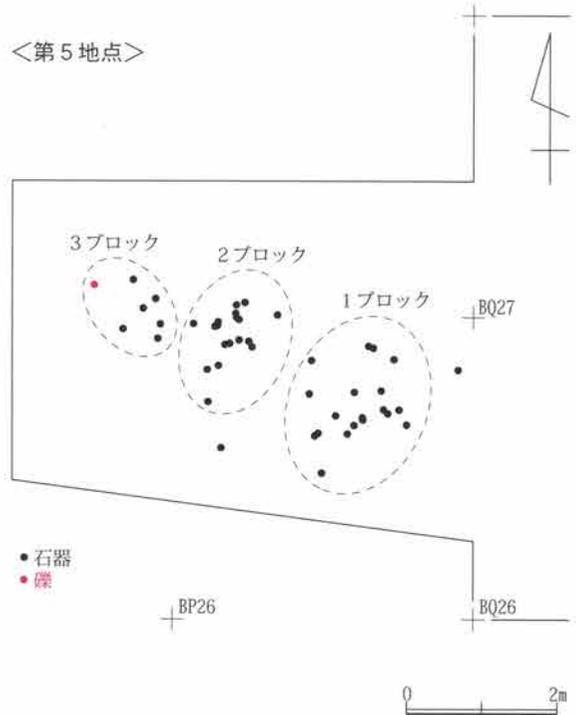
出土層位については調査時の所見を欠いており、明確ではない。整理作業では石器ブロック周辺域の地形的要素を勘案して垂直分布図を作成、併せて、モノクロ・スライド写真から出土状況の情報を得て出土層位をVI~VIII層と判断した。

石器石材は、礫片1(粗粒輝石安山岩)を除けばホルンフェルス(38点、82.6%)と黒色頁岩(7点、15.2%)からなり、単相的様相を呈していた。

出土石器

剥片類主体の石器群で、削器1(第22図1)を除き定形石器は見られない。ホルンフェルス製の石器は総て同一母岩であり、38点中23点が接合する良好

<第5地点>



第18図 石器の分布5(第5地点)

第6表 器種・石材構成(II文化-5地点)

	削器	石核	剥片	碎片	礫片	合計
黒頁	2	0	2	3	0	7
ホルン	0	1	30	7	0	38
粗安	0	0	0	0	1	1
合計	2	1	32	10	1	46

II 調査の成果

な接合資料となった。黒色頁岩製の石器は7点だが、母岩的には2種類程度が認識できそうである。

この地点から出土した黒色頁岩に限って言えば、組成的（削器1・剥片2・碎片3）には少量の剥片類剥離か、持ち込んだ剥片を用いた削器を作出した可能性が想定されよう。

削器（第22図1、PL27）

1点のみ出土した。第22図1は、打点中央で左右に破損した石器の接合資料。石器下端にノッチ状の刃部を作出。破損部は剥片打面部に一致しているようだが、刃部作出時の衝撃で破損したものと理解すべきだろう。3号ブロック出土。黒色頁岩。

剥片（第22図2、PL27）

32点が出土した。ここでは比較的大形の剥片1点を図示しておく。

第22図2は、礫面を大きく残す幅広剥片。剥離面打面より剥離。剥片端部の使用痕は見られない。3号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料

接合資料は4例を確認した。1例（第22・23図）が黒色頁岩の、3例がホルンフェルス製の接合資料。接合資料一2（第22・23図、PL27）

石核1・剥片22点からなる接合資料。高さ8.4cm・幅9.1cm・厚さ3.8cmを測る扁平礫を石核に用いる。剥離は基本的に扁平礫の右側から始まり、90°打面転移を繰り返し進む。最初期の剥離は、石核の幅を狭めるよう行われ、幅広剥片（剥片1～5）を剥離している。以後、剥離は石核正面、及び、上面の小口部分を交互に作業面とする剥離が行われ、上面で剥片6～8を、90°打面転移して正面で大形剥片を剥離する。剥片9～12は、再び、打面を元に戻して剥離したものである。最終的に石核が小さくなった段階での剥離は、作業面を固定した剥離を許さなくなったようで、頻りに打面と作業面を入れ替える剥離が行われたようである。ホルンフェルス。

○○○→○○○⇒2⇒3⇒4⇒○○○⇒5⇒6・
7⇒8⇒○⇒9→10→11→12⇒13⇒14⇒15→16

接合資料一4（第23図、PL27）

背面側に礫面を残す小形剥片2点の接合資料。礫面の残存位置からみて、礫の小口部分（扁平礫の薄い部分）に相当する剥離と理解している。剥片2点に残るバルブの位置から、打点を大きく振り剥離を行う剥離様相が想定可能である。ホルンフェルス。1号ブロック出土の剥片とブロック外の剥片の接合。接合資料一3（未掲載）

剥離時に縦位破損した剥片の接合例。ホルンフェルス。1号ブロック出土。

石器と礫の分布

石器群は丘陵性台地の南西側斜面に分布していた。石器群は東西5m・南北2m程の範囲に広がり、計46点の石器類が出土、石器ブロックを3ヶ所で確認した。礫群については未確認である。

1号ブロック（第24図）

位置 丘陵性台地の南西側斜面（BP-26G）

規模 長径1.9m・短径1.6m

分布状態 やや散漫に分布する。

出土層位 VI～VIII層

出土点数 19点

器種構成 剥片13・碎片6

石材構成 ホルンフェルス17・黒色頁岩2

その他 接一2は、剥離の初期段階の剥片。

2号ブロック（第24図）

位置 丘陵の南西側斜面（BP-26・27G）

第7表 ブロック別器種構成（II文化一5地点）

	削器	石核	剥片	碎片	礫片	合計
1号ブロック	0	0	13	6	0	19
2号ブロック	0	1	16	1	0	18
3号ブロック	2	0	2	2	1	7
ブロック外	0	0	1	1	0	2
合計	2	1	32	10	1	46

第8表 ブロック別石材構成（II文化一5地点）

	黒頁	ホルン	粗安	合計
1号ブロック	2	17	0	19
2号ブロック	1	17	0	18
3号ブロック	4	2	1	7
ブロック外	0	2	0	2
合計	7	38	1	46

規 模 長径1.5m・短径0.75m
 分布状態 比較的集中して分布する。
 出土層位 VI～VIII層
 出土点数 18点
 器種構成 石核1・剥片16・碎片1
 石材構成 ホルンフェルス17・黒色頁岩1
 その他 接-2の後半段階の剥離地点か？

3号ブロック (第24図)

位 置 丘陵の南西側斜面 (BO-26・27G)
 規 模 長径1.1m・短径0.6m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 VI～VIII層
 出土点数 7点
 器種構成 削器2・剥片2・碎片2・礫片1
 石材構成 黒色頁岩4・ホルンフェルス2・粗粒輝石安山岩1
 その他 黒色頁岩が他のブロックに比べ多い。

接合資料の分布

接合作業の結果、4例28点の接合資料を得た。接合資料は、ブロック内で接合するもの2例(接-1・3)、ブロック間で接合するもの1例(接-2)、ブロック外の石器と接合関係を有するもの1例(接-4)であった。部分的接合が多く、特に黒色頁岩の来歴については判然としない。接合点数の多い接-2については、母岩分類を加味して理解するのが妥当であり、次項に記していきたい。

黒色頁岩

1例(接-1)のみ確認した。ブロック内の接合であり、ブロックには同一母岩に分類可能な剥片類も分布していた。原則的には、少量の剥片生産を想定すべきであるが、剥離時の破損というより刃部作出段階か再生段階の破損と見られ、この場合、碎片類など該当資料が出土資料に見られないのが疑問として残る。

ホルンフェルス

3例(接-2～4)を確認した。ホルンフェルス製の石器類は各ブロックに分布しており、特に1・

2号ブロックの集中性が高い。3号ブロックには2点しか分布せず、分布論的には剥片類を持ち出したという状況になっている。3号ブロックに出土した黒色頁岩製剥片類は4点とも搬入石器であり、剥離痕跡がないという点で、ホルンフェルスとは対照的であった。接-2は1～3号ブロックに分布。接合資料は部分的に空洞となっており、この地点以外に剥片類を持ち出している可能性が高い。

石材分布

石器群はホルンフェルスを主体に、黒色頁岩が組成するという極めて単相的な石材組成を示していた。断定は困難だが、接合状態が示す礫形状・質感からみて、ホルンフェルス製の接合資料は3例とも同一母岩である可能性が高い。黒色頁岩についてもその母岩的特徴から母岩2個体が想定可能となっており、1個体は接-1を含む剥片類で同一地点(3号ブロック)に、残る1個体は第22図2に類似した碎片で1号ブロックに分布した。以下、ホルンフェルスについて母岩分類を加味して分布状況を記す。

ホルンフェルスについては、接合資料3例を確認した。最も良好な接合資料が接-2であり、その質感は接-3・4に酷似、ほぼ同一母岩と考えてよいものであった。従って、この地点から出土した石器群については、石材構成のみならず母岩構成という点でも極めて単相的であるという評価が妥当と理解している。以上の母岩認識を基にして、剥離順に見たホルンフェルスの分布状況を見ていく。

図示(第24図を参照)したとおり1号ブロックには16点のホルンフェルスが分布した。このうち、7点について接合関係を確認した。半数以上の剥片類について接合関係が確認できないのは少々不安であるが、1号ブロックの剥片は5点とも剥離初期の剥片(第22図を参照、接-2・1～5の剥片)であった。これら5点の剥片は接合資料・正面右上で接合したものであり、剥離順は右上の剥離が右下の剥離に先行するものであった。接合関係の確認できない剥片類は9点とも小破片であり、礫面を部分的に残

II 調査の成果

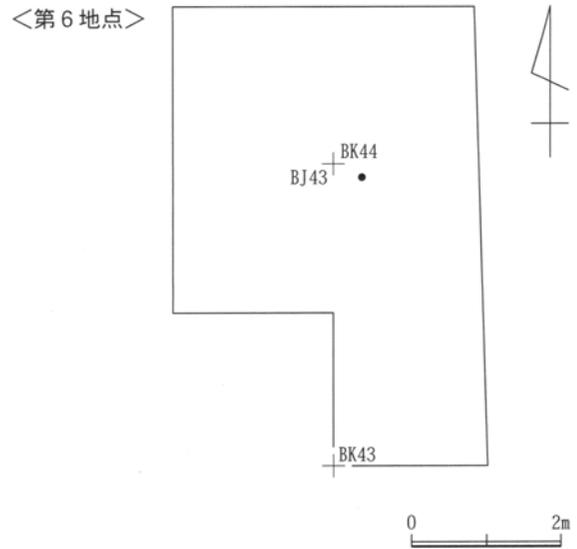
す剥片であることなどから、石核正面右下で剥離した可能性を想定している。以後剥離した剥片については2号ブロックに分布、剥離地点を1号ブロックから2号ブロックへ移したものと理解している。

3号ブロックに分布した剥片については、剥離順で言えば、6番目に剥離した剥片（横位折断された剥片下半部）と、16番目に剥離した剥片であった。これら2点の剥片については、出土位置と剥離工程に明確な相関性は指摘できないため、これとは別の要因（石器素材として選択・移動した可能性、偶然的・人為的移動の可能性など）を探る必要がある。

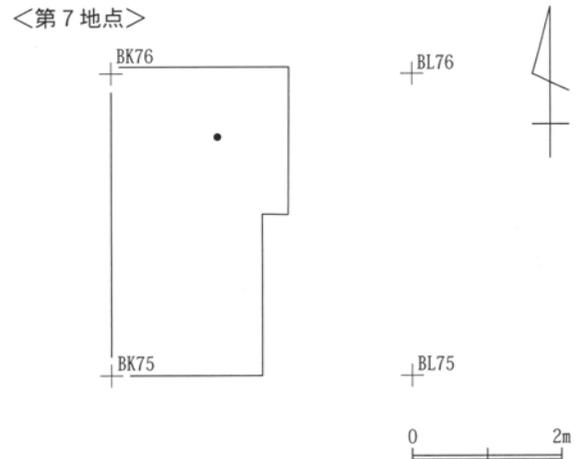
(6) 第6地点

1点のみ出土した(第19図)。丘陵の南西側斜面に位置する。最も近い第5地点とは約70mの距離を隔てている。

第21図4は、幅広の小形剥片。背面側には平坦面が見られ、円礫を分割して石核に用いた可能性が強い。剥片剥離の詳細は不明であるが、背面構成を見る限り打点を大きく振るタイプの剥離を想定しておきたい。剥片頭部には小剥離痕が連続、その稜線(面界線)は著しく磨耗している。この稜線が磨耗する原因については、可能性としては以下の指摘が可能と考えている。ひとつは石核運搬途中のスレ。もうひとつは打製石斧の調整剥片、あるいは、削器等の刃部再生剥片としての可能性である。前者の可能性については分割面や剥離面の磨耗が見られないことから否定的にならざるを得ない。残る刃部再生の可能性であるが、剥離面構成や剥離角(=刃部角、 51° を測る)、その他の属性は打製石斧的でもなく、削器的でもない。剥片打面部と背面側のスレを重視して判断するなら削器の刃部再生剥片である可能性が指摘できそうだが、削器の刃部としては刃部角(51°)が厚すぎ、むしろ搔器的である。BK-43G。VII層から出土。黒色頁岩。



第19図 石器の分布6(第6地点)

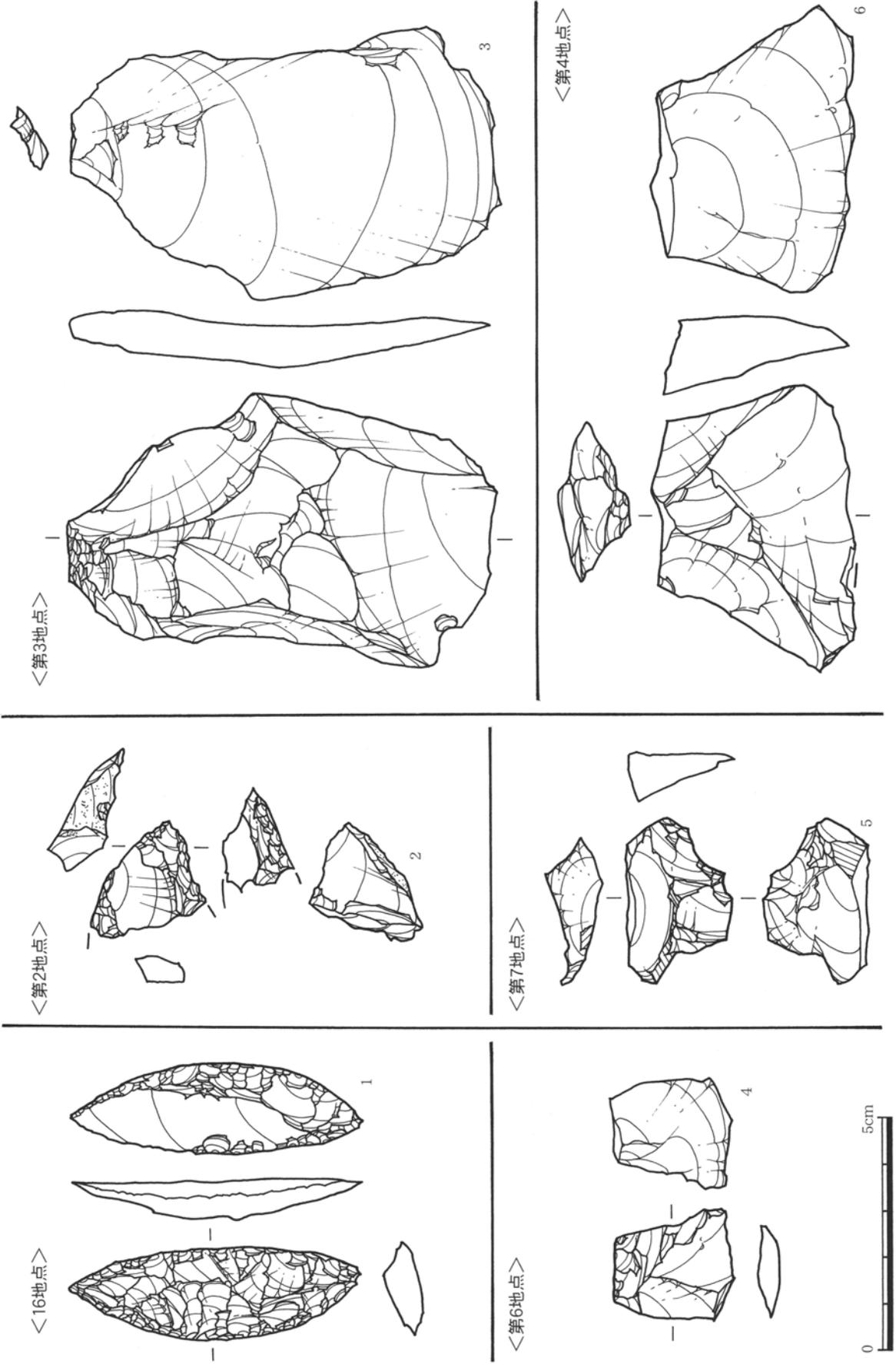


第20図 石器の分布7(第7地点)

(7) 第7地点

1点のみ出土した(第20図)。丘陵の南西側斜面に位置する。同時期の石器群とは最も近い調査地点(丘陵頂部の第2～4地点)からでも100m以上の距離を隔てており、孤立した状況となっている。

第27図5は、チャート製の小形剥片。葉脈の発達著しく、打面部も明確でなく、横長剥片なのか、単なる幅広剥片なのか、判断が難しい。石器石材として使用するのとは適当とはいえない。BK-75G。VII層から出土。

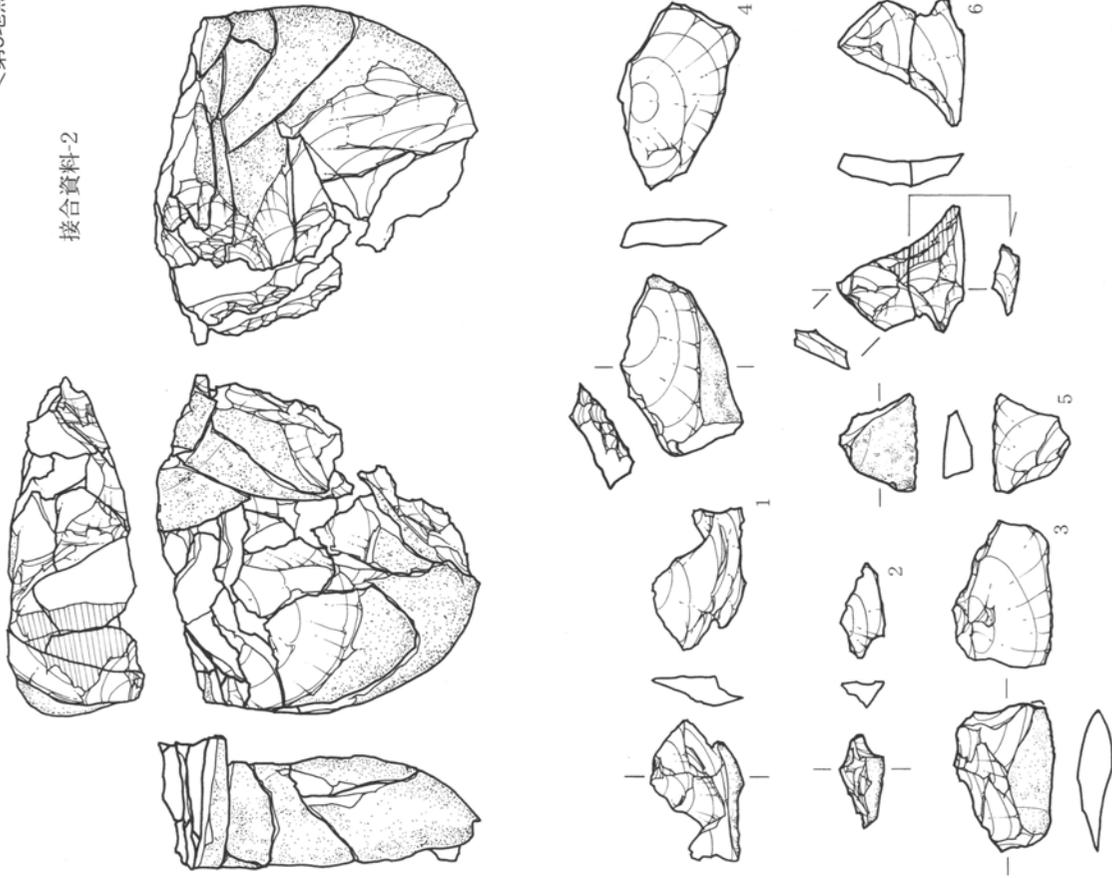


第21图 出土石器1 (1 b・第2~4・6・7 地点)

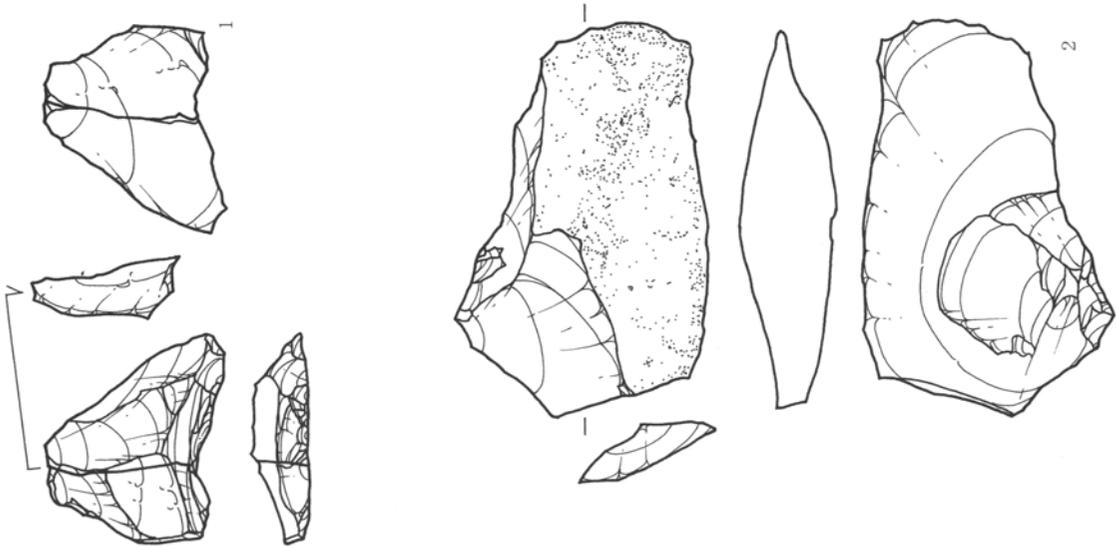
II 調査の成果

〈第5地点〉

接合資料-2



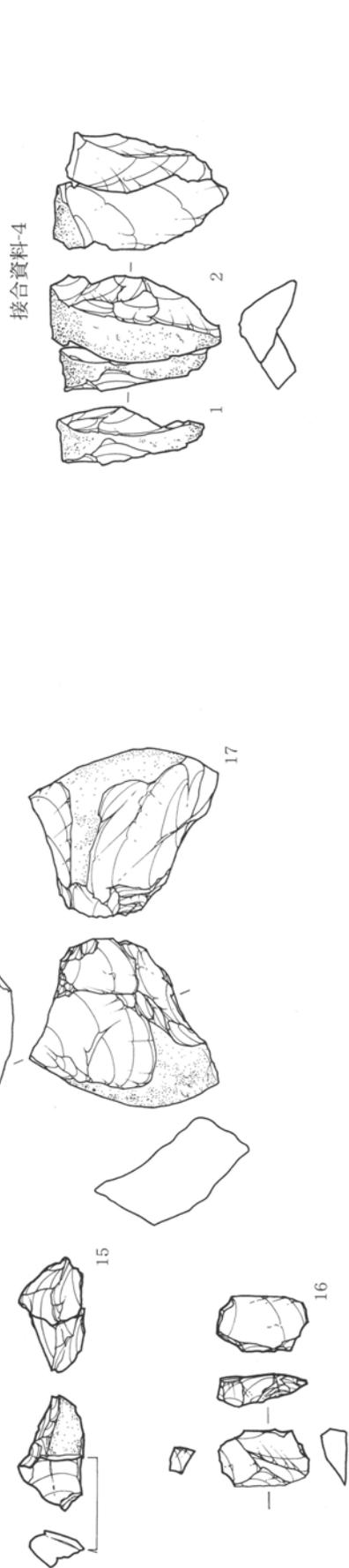
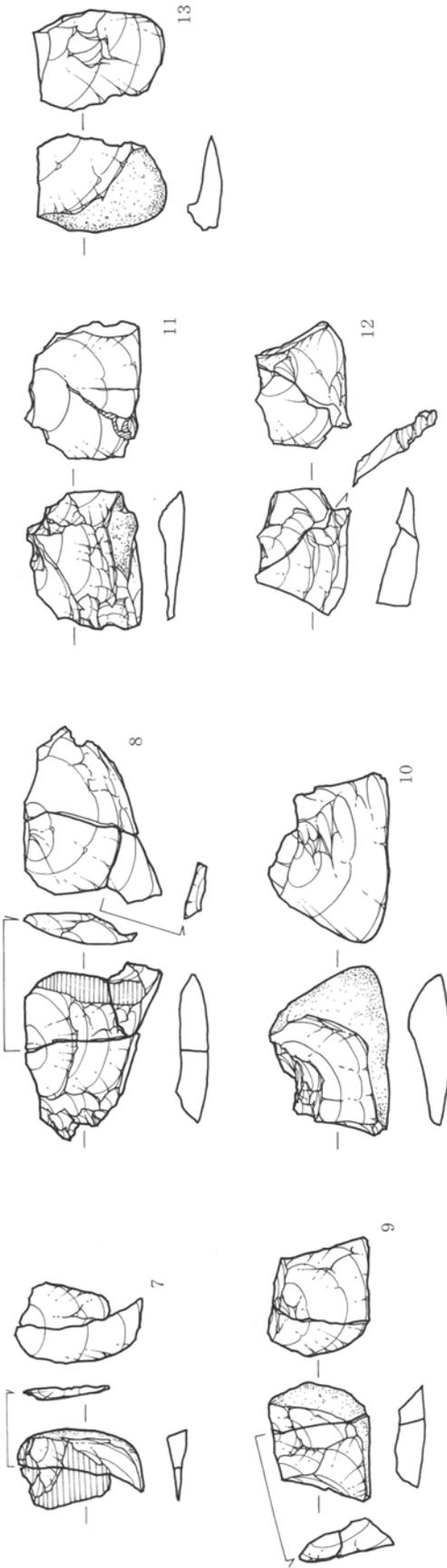
0 10cm



0 5cm

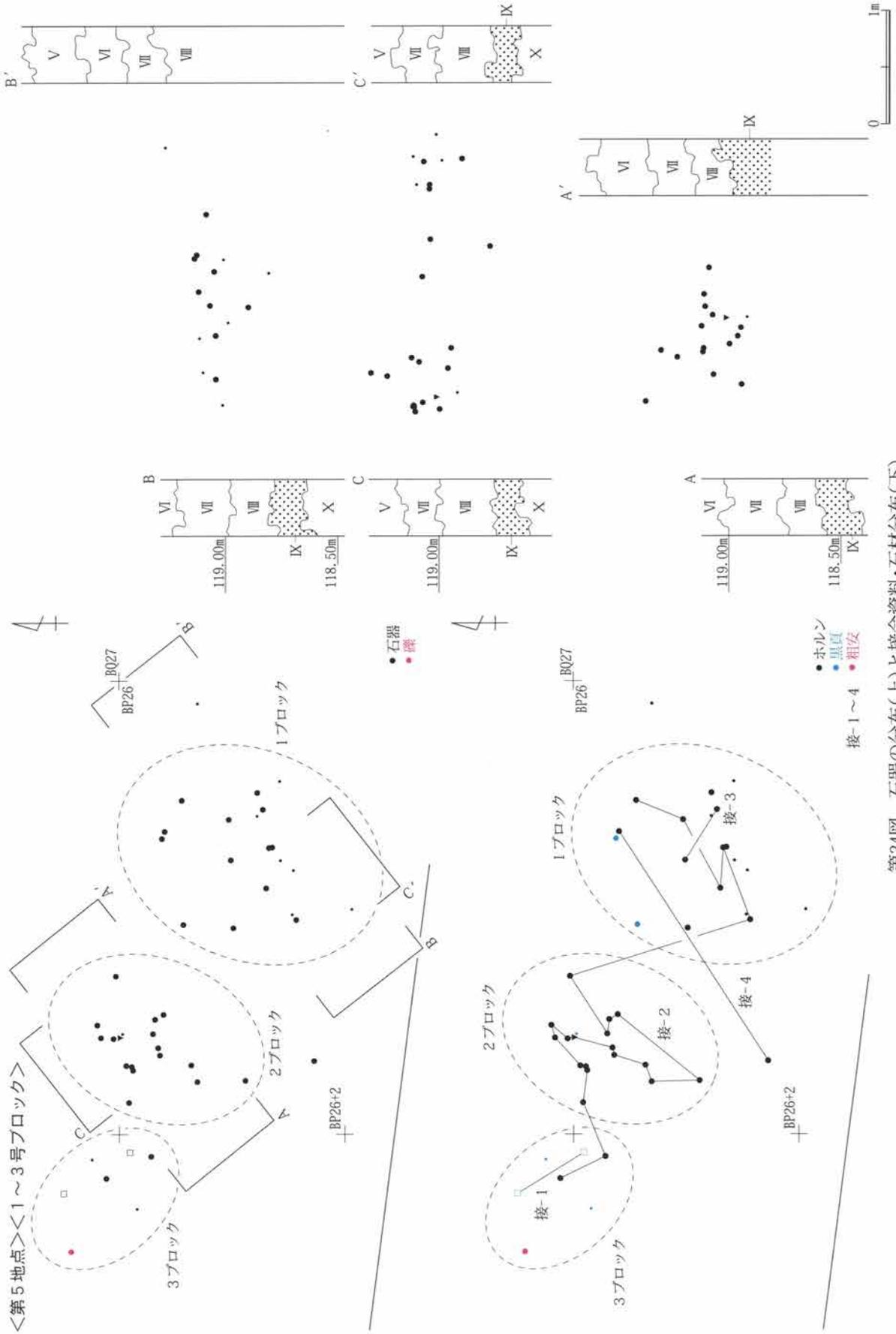
第22図 接合資料 1 (第5地点)

<第5地点>



第23図 接合資料 2 (第5地点)

II 調査の成果



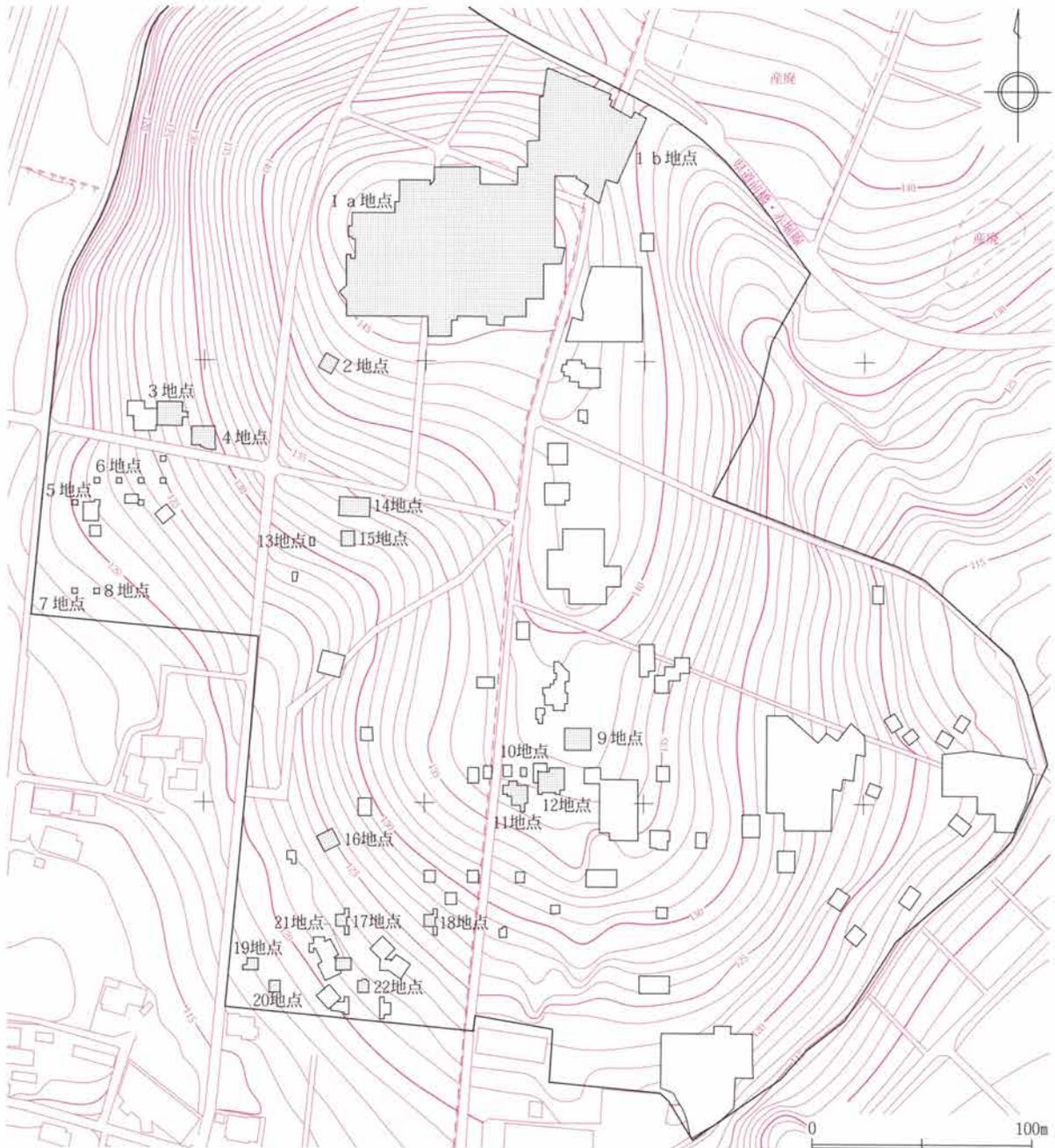
II-3 第III文化層

当該期石器群は、24の地点に分布(第25図を参照)した。角錐状石器や切出形石器を示準石器とする石器群で、出土量のピークはIX～X層であった。

第III文化層に帰属する石器群については、IX層が出土量のピークとなる石器群(第9・11・12・14地点など)と、X層が出土量のピークとなる石器群(1a・1b地点など)が見られ、文化層の分離を視野

に入れ、石器の出土層位・石器の形態的特徴・接合関係・同一母岩の分布について検討した。

出土量のピークが異なるというような場合、まず、通常は石器群の段階差を想定する。今井見切塚の調査所見ではVI層から石器が出始めた地点(第9・11地点など)もあったようだが、丘陵性台地ではローム層の堆積状態は局所的に異なるということが、同じ多田山丘陵に立地する今井三騎堂遺跡(県道を挟んで北側に所在)でも明らかとなっており、層位的



第25図 石器の出土地点(第III文化層)

II 調査の成果

第9表 地点別器種構成 (Ⅲ文化)

	I a 地点	I b 地点	2 地点	3 地点	4 地点	5 地点	6 地点	7 地点	8 地点	9 地点	10 地点	22 地点	合計
ナイフ	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3
切出形	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	5
角錐状	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
搔器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
楔形	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
削器	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
加工痕	19	1	0	2	3	0	0	0	0	2	0	0	27
使用痕	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
敲石	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
石核	13	3	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	19
石刃	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
剝片	153	51	1	13	25	1	0	1	0	17	0	1	263
砕片	168	12	0	9	81	0	1	0	0	122	1	1	395
加工礫	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
礫	10	27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37
礫片	14	63	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	79
合計	393	165	1	24	109	1	1	1	1	148	1	2	847

第10表 地点別石材構成 (Ⅲ文化)

	I a 地点	I b 地点	2 地点	3 地点	4 地点	5 地点	6 地点	7 地点	8 地点	9 地点	10 地点	22 地点	合計
黒安	29	21	1	0	0	0	0	0	0	80	0	1	132
黒頁	12	40	0	1	0	0	0	1	0	2	0	1	57
黒曜石	314	8	0	23	109	0	0	0	0	39	0	0	493
硬頁	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
褐碧	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
赤碧玉	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
チャート	5	6	0	0	0	0	0	0	0	22	1	0	34
珪頁	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	3
珪変	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ホルン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
溶凝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
細安	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
粗安	24	90	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	116
雲石片	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
変安	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	393	165	1	24	109	1	1	1	1	148	1	2	847

な所見のみから石器群の段階差を指摘することは避けなければならなかった。接合関係や母岩分布、石器の形態的特徴を詳細に検討した。検討の結果、剥片類は自然層位を跨いで接合関係を有しており、基本的に、各地点の石器群は単位の石器群であることが判明した。常識的に見て、23ヶ所に及んだ当該期石器群のすべてが同時存在した可能性は低く、時間差を想定するべきであるが、段階差等について本文中では具体的検討を行っていない。

出土層位の微妙な相違については、三騎堂遺跡(平成15年度報告済み)同様、ここでも丘陵地形に起因するローム層の流出や土壌化の相違等が影響しているのは明らかであるが、担当者が行うローム層の分層については問題を残している。その最大の理由はローム層の分層に際して担当者の主観や解釈が入り込むことによる。経験的には、軽石等のキー層がない限り担当者間でローム層の区分が一致することはない。周水河現象を挙げるまでもなく、多様な環境

下一ヒト・動植物・雨水などの影響も含む一では、石器は廃棄されたとおり発見されるということはないようである。斑状に見えるロームの生成要因などを考えれば、ローム層の区分については、現状では担当者を固定するしかないだろう。とはいえ、石器の出土層位については調査時に記載しておくべき重要なデータのひとつであることは明らかである。石器の3次元データから石器の出土層位が復原できるというのも、ローム層の堆積が均質であるということをも前提とする石器投影作業の成否にかかわっており、本遺跡などのように丘陵傾斜地に立地する遺跡では何地点にも及んでローム層の堆積状態を確認していなければ、正確な石器群の出土層位認定も難しいからである。

各地点の石器群については、地形的に4~5ヶ所に大別して理解できよう。まず、第1に丘陵頂部の平坦地で、1a地点と呼称した。1a地点は本報告の中で最も広い調査地点であるが、全域に石器群が

第11表 地点別石器出土層位 (Ⅲ文化)

	5層	6層	6'層	7層	7・8層	8層	9層	10層	11層	12層	不明	合計
1 a 地点	0	0	0	0	0	0	45	283	51	14	0	393
1 b 地点	0	0	0	0	0	6	57	98	1	3	0	165
2 地点	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
3 地点	0	0	0	1	0	2	3	16	1	1	0	24
4 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	108	109
5 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
6 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
7 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
8 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
9 地点	0	11	0	0	25	0	109	3	0	0	0	148
10 地点	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
11 地点	1	13	0	0	27	0	270	30	8	0	0	349
12 地点	0	0	1	0	12	0	30	8	0	0	0	51
13 地点	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
14 地点	0	0	0	2	0	1	27	22	9	2	0	63
15 地点	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
16 地点	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
17 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
18 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
19 地点	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
20 地点	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
21 地点	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
22 地点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
合計	1	24	1	3	64	10	546	464	71	20	116	1320

II 調査の成果

分布していたわけではない。石器分布は1 a地点の北東側が主体であり、その他の地点ではブロックが単独分布する程度であった。1 b地点は1 a地点に隣接、北東側に延びる調査地だが、ここでも石器群は偏在して分布した。主な分布域は調査区北端に近い丘陵鞍部であった。これらは約15mの距離を置いて3群に分離できそうだが、報告済みの今井三騎堂・第III文化層（第1地点）とともに、谷頭を取り巻く同一石器群として捉えるべきかもしれない。

次なる集中域は、1 a地点から続く尾根の先端である。4ヶ所（第9・10～12地点）で石器群の存在を確認、第10地点を除く各地点に複数のブロックが分布していた。この地点の石器の出土層位はIX層であり、X層が出土量のピークを示す1 a・1 b地点とは異なっていた。

その他、石器群の集中域として丘陵の南西側斜面2ヶ所がある。二ヶ所の集中域の間には南西から浅い谷が入り込んでおり、地形的区分の目安になっている。両集中域間の関連性については接合や同一母岩の存在が確認できないことから、希薄であると考えられる。石器分布は散漫で、17ヶ所で石器を確認した。石器ブロックは、このうち3地点（3・4・14地点）に存在した。

礫群は1 b地点のみ存在、2地点で7基の礫群を確認した。

(1) 1 a 地点

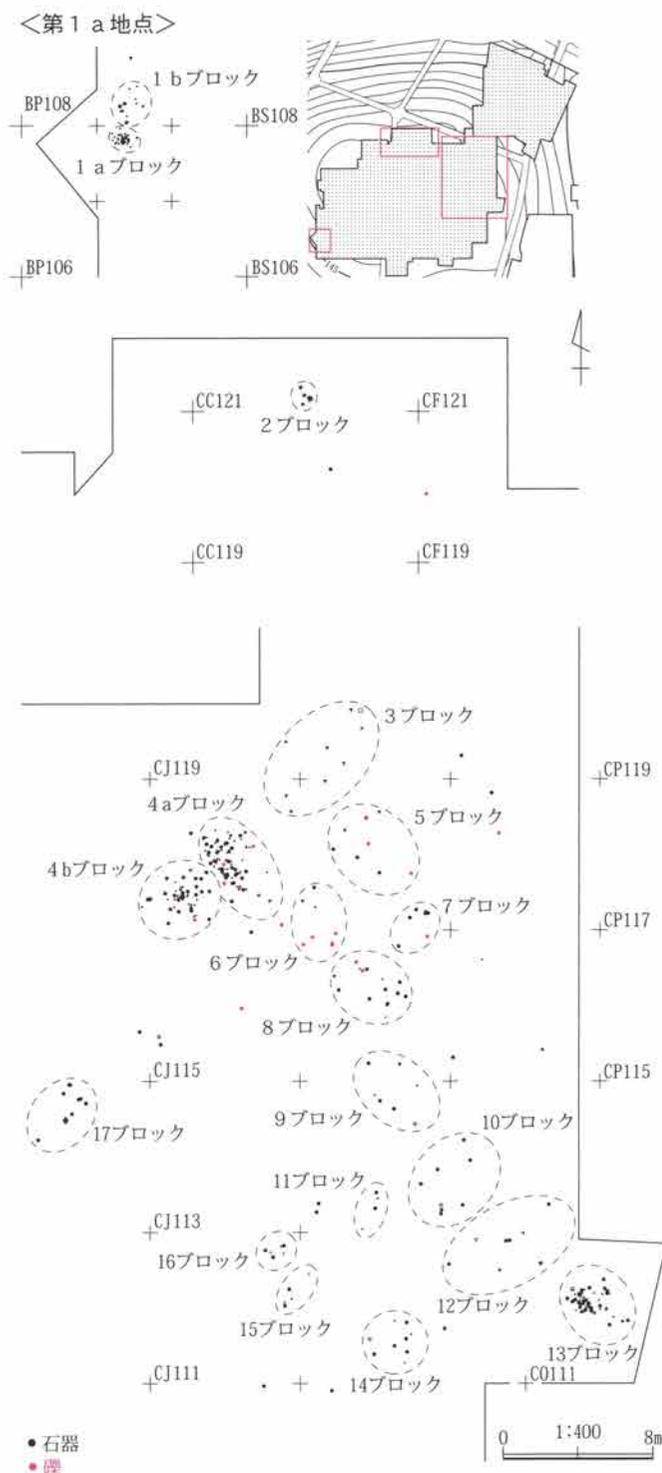
概要

調査区内で最も標高の高い丘陵頂部（147m）に位置する。当該期石器群は地点内に均質に分布せず、3ヶ所に分布した。1つは調査区西の、1つは調査区北の丘陵平坦地から斜面部の地形変換点であり、残る1ヶ所は調査区北東側の地形変換点であった。調査区西と北には孤立してブロックが存在したのみであって、既存の剝片を使い、石器を少量だけ集中製作していた。北東側には15ヶ所で石器ブロックを確認、この地点のブロックは概ねコンタに沿って並

んでいた（第26図、PL 3）。

石器はIX層から45点が、X層から283点が、XI層から51点が、XII層から14点が出土しており、出土量のピークはX層ということになる。

石器石材は黒曜石が314点（79.9%）と圧倒的に多



第26図 石器と礫の分布(第III文化層1 a地点)

第12表 器種・石材構成（Ⅲ文化-1a地点）

	ナイフ	切出形	角錐状	楔形	削器	加工痕	使用痕	石刃	石核	敲石	剥片	碎片	礫	礫片	合計
黒安	0	0	0	0	0	2	1	1	2	0	17	6	0	0	29
黒頁	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	6	2	0	0	12
黒曜石	1	1	2	1	2	12	4	0	9	0	123	159	0	0	314
硬頁	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
褐碧	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
赤碧玉	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	3	0	0	0	5
チャート	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	0	1	5
変安	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
粗安	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	10	13	24
合計	1	2	2	1	2	19	5	1	13	2	153	168	10	14	393

く、石器群の特徴となっている。黒色安山岩黒色頁岩等の在地系石材は10～15%程度出土量に留まっている。硬質頁岩や碧玉等の希少石材も少量であるが、2%（8点）程度が見られ、AT降下以後の石器群における使用石材の多様性を示唆している。

接合資料は、33例103点を確認した。

出土石器

総計393点が出土した。碎片を含む剥片類が321点（81.7%）と多数を占めている。加工石器も安定して組成しており、生活感に溢れている。石器群の主たる組成器種は、切出形石器と角錐状石器の2種類である。

角錐状石器（第27図1・4、PL28）

2点が出土している。二次加工の様相は異なるが、両者とも素材を縦に用いること、剥片の縁辺を石器先端に残す点で共通している。

第27図1は縦長剥片を用い、左右の両側縁を加工したもの。石器先端部には意識的に未加工の剥片端部を残している。調整加工は剥離角が浅い点を除けば、bluntingと大きく異なるものではない。母岩的に搬入石器と捉えた。17号ブロック出土。黒曜石製。4は、左側縁に未加工の縁辺を残したものの。礫面（風化平坦面）より剥離した大形の幅広剥片を素材に用いる。この剥片は剥離段階で斑晶が原因して横位破損したもの（第36図を参照、接-20の7と9が本来は1枚の剥片）であり、粗く折断面を加工して石器を作出している。側縁部に接合した碎片（接-20、8）を見る限り、素材となった剥片を大きく変形さ

せ石器を作出していることが分かる。概して調整加工は粗く、側縁形状は鋸歯状となっている。13号ブロック出土。黒曜石-4b。

ナイフ形石器（第27図2、PL28）

1点のみ出土した。第27図2は小形幅広剥片を用い作出した、二側縁加工のナイフ。背面側に残る剥離面、及び、剥片の剥離軸とも石器長軸に一致している。右側縁側の調整加工は深く、素材の変形度が高い。石器は小形品の部類に入る。4b号ブロック出土。黒曜石-7。

切出形石器（第27図3・5、PL28）

2点が出土している。素材剥片の用い方、調整加工の様相とも大きく異なる。

第27図3は平坦剥離面より剥離した小形剥片を横位に用い、両側縁を加工したもの。素材となった剥片の打面部、及び、剥片端部に調整加工を加えて石器を作出している。この調整加工は、左右両側縁で異なっており、左側縁に施した加工が浅い剥離であったのに対して、右側縁の加工は典型的な bluntingであった。1b号ブロック出土。油光沢の強い硬質頁岩。5は小形の幅広剥片を縦位に用い、両側縁を加工したもの。左側縁の加工は小さく安定しているのに対して、右側縁では粗い加工となっている。4a号ブロック出土。黒曜石。

楔形石器（第27図6、PL28）

1点が出土している。第27図6は、石器正面に上下方向から対向した剥離痕を持つ。正面側上端には剥離に伴う「潰れ」が著しい。裏面側の剥離面は方向性が不安定で、両極剥離に伴う剥離とは異なるよう

II 調査の成果

であるが、ここでは正面の対向する剥離面を重視して、楔形石器の範疇で捉えた。小形石核の吝嗇的利用法のひとつとしての「両極剥離」と見る見方も可能と理解している。4 a号ブロック出土。黒曜石—1 a。

削器 (第27図7、PL28)

1点が出土している。第27図7は、幅広剥片を用いたもの。剥片端部を粗く打ち欠いた後に、微細剥離を加えて石器刃部を作出している。剥片形状は略直線的であったはずだが、刃部作出(再生?)に際しては、それほど直線性を意識しているようにはみえない。

加工痕ある剥片 (第28、29図1~3、PL28)

第28図1は、左右両側縁を丁寧加工した石器。調製加工は両側縁とも丁寧であったが、右側縁の加工が直線的であったのに対し、左側縁は直線性に欠け、やや雑であった。石器上端を欠損するため不明だが、石器下端に小剥離痕が連続することからみて、石器刃部は右側縁下端部と捉えている。石器素材には礫面が大きく残っているほか、背面側の中央右に風化剥離面(?)が広がっている。この風化剥離面は光沢が強く、比較的容易に見分けることが可能であった。この石器は折れ面の古い打撃痕が影響して破損した可能性が強いが、光沢は古い打撃面だけでなく折れ面にも及んでおり、剥離以前から存在した光沢(円礫化の過程で生じた)と捉えた。完成度の高い石器の形状(丁寧な細部加工と石器の対称性)から判断して、定型化した石器であるという印象が強かったが、分類呼称するのが難しい石器であった。甲高であるという形態観は角錐状石器そのものの特徴であり、石器先端部に未加工の縁辺を残すという在り方も、この種の石器(第29図1の石器先端に類似)に見られる特徴のひとつになるかもしれない。折れ面には小剥離痕が連続的に見られ、破損した後に再加工している可能性も否定できないため、ここでは加工痕ある剥片として便宜的に呼称しておきたい。4 aブロック出土。赤碧玉。2は、側縁、及び、剥片端部を粗く加工したもの。剥離面のスレ具合から考えて、遺跡外部から持ち込んだ剥片を石器とし

て再加工したものであろう。3号ブロック出土。黒曜石。3は、裏面側の剥片端部を加工したもの。剥片端部の小剥離痕は1次剥離面より新鮮であり、剥離の時間差が想定できよう。石器の断面形状は台形状を呈しており、両側縁には使用痕が著しい。12号ブロック出土。黒曜石—9。4は、横位折断した剥片の1片を用いる。石器は裏面側から一撃して二分され、この折れ面に微細な剥離を加えている。4 bブロック出土。黒色安山岩。5は、礫面を大きく残す幅広剥片を用いる。石器裏面側上端の剥離は、小形剥片を連続剥離しているようにも見え石核的である。石器の主たる機能部は剥片端部と左側縁にあったようであり、特に、剥片端部の加工は弧状になっており、搔器的に見える。5号ブロック出土。黒色頁岩。

第29図1は、小形・幅広剥片を用いる。裏面側から左側縁の下部を一撃、ノッチ状の機能部を作出している。この部分の裏面側には連続的に小剥離痕が生じている。4 aブロック出土。黒曜石—2 b。2は、縦位破損した折断剥片を用いている。左側縁側下部を微細剥離して刃部を作出しており、左側縁全体が刃こぼれしている。剥片端部は背面側の斑晶が影響・破損しているが、剥離時の破損というより使用中に欠損したように見える。4 aブロック出土。黒色安山岩。3は、縦長剥片を用いたもの。右側縁基部、及び、先端部に微細剥離を施す。剥片先端・右側縁には小剥離痕が見られ、主たる石器の機能部を暗示している。搬入石器か。ブロック外の出土。蓼科産黒曜石。

使用痕ある剥片 (第29図4・5~7、PL28)

4点(接—21の1点を含む、第29図を参照)が出土している。第29図4は、小形・幅広剥片を用いる。右側縁に小剥離痕が連続する。剥片端部には打面に並行する節理面を残しており、板状剥片を石核に用い剥離したものと思われる。9号ブロック出土。黒曜石—2 a。5は、小形縦長剥片を用いる。左右両側縁に「刃こぼれ」が生じている。剥片上半を欠損している。刃こぼれ、及び、折れ面等の状況から剥離段階に欠損した可能性を想定しておきたい。ブ

ロック外。黒曜石-1 a。7は、横位折断した剥片の上半を用いたもの。左側縁に「刃こぼれ」が生じている。剥離面構成からみて、剥片を供給した石核は幅5cmを想定。10号ブロック出土。黒曜石。6は、大形剥片を用いる。剥片端部が刃こぼれしている。最終的に正面上端で小形剥片を剥離していることから、臨機的に石核に転用している可能性を残している。14号ブロック出土。黒色安山岩。

石核 (第30図、PL29)

31点が出土している。ここでは、接合関係が確認できなかった石核について図示した。

第30図1は、90°打面転移して幅広剥片を剥離した石核。石核正面右下や右側縁に素材段階の古い剥離面を残す他、裏面側上端にも素材段階に遡る古い剥離面を残しており、厚い板状剥片を石核素材に用いる。打面調製その他の石核調製は見られない。3号ブロック出土。黒曜石。2は、表裏両面で小形剥片を剥離した石核。石核正面・左下に平坦面を残しており、大形剥片を石核に用い、小形剥片を剥離した石核の最終的状況を示している。ブロック外。黒色安山岩。3は、厚い剥片を石核に用いる。裏面側は磨耗した剥離面となっており、左・右・中の順に剥離を進めている。最終的に剥離した小形剥片は中央に稜を持つ断面三角形状を呈する剥片と考えている。6号ブロック出土。黒曜石-1 a。4は、角礫を素材とする石核である。90°打面転移を行い、幅広剥片を剥離している。剥片剥離は石核の右側・上面・正面の順に進めている。3号ブロック出土。大形の斑晶を多く含む黒曜石。搬入石器か。

剥片類 (第31~33図1、PL29・30)

154点が出土した。約80% (124点) を黒曜石製剥片が占めており、黒色安山岩が17点(11.0%)、黒色頁岩が6点(3.9%)と在地系石材が占める割合は低い。剥片5点(3.2%)からなる碧玉類は大部分が搬入石器と理解している。

剥片類については、接合関係の確認できなかったものから石刃等形状を優先して石材等を踏まえ選択的に図示した。結果的に、掲載した剥片類は類石刃

(第31図1・2) や縦長志向の強い剥片類(第31図6~9・第32図3) ということになった。このほか、小形幅広剥片(第32図4) や大形の幅広剥片(第32図5・第33図1) も相当数が出土している。現状では掲載剥片20点中13点を搬入石器と捉えている。結論的には、石刃以外にも小形剥片(第31図10・11) や幅広剥片(第32図5) を搬入していたようである。形態的には多様でも、石材の希少性その他の理由で直線的側縁を有する剥片類については選択的に持ち運ばれ、石器の素材となったのだろう。剥片類の多様な実態については、接合資料の項を併せ判断されたい。

敲石 (第33図2・3、PL30)

2点が出土している。第33図2は棒状礫を用いた敲石。上下両端の小口部分に打痕が集中している。3号ブロック出土。変質安山岩。重さ166g。3は、偏平礫を用いた敲石。集合打痕は礫の上下両端に見られ、特に下端側の打痕が著しい。上からみた打痕は、上端側に比べて下端側の打痕は礫形状に沿っており、礫の平坦面は磨り石として機能した可能性も否定できない。13号ブロック出土。粗粒輝石安山岩。重さ356g。

接合資料

接合資料は33例103点の接合資料を確認した。全石器の出土量は393点となっており、26.2%の石器や石片類が接合関係を有したということになる。全体の3/4 (25例) が黒曜石の接合資料であり、黒色安山岩の接合は5例、黒色頁岩の接合は1例と少ない。接合資料-4 (第34図、PL30)

石核1・剥片2からなる接合資料。長さ11cm・幅10cm・厚さ4.5cmを測る分割礫を石核に用いる。剥離は石核上面で開始、小形剥片1枚を剥離した後に剥片1を連続剥離する。以後の剥離は打面と作業面を入れ替え、剥片を連続剥離する。打面調製等は見られない。7・9・10号ブロック間で接合。黒色安山岩。接合資料-6 (第35図、PL31)

石核1・加工痕ある剥片1・剥片2からなる接合

II 調査の成果

資料。接合資料の正面や左側側面等に分割面に似た古い平坦な剥離面が見られ、このことから推定して、石核消費の最終段階に近い接合資料と理解している。剥片剥離は90°の打面転移を繰り返し、小形剥片を剥離するタイプの石核である。剥片1を上端から剥離したのち、主に石核の右側と接合資料正面で打面と作業面を入れ替える小形剥片の剥離が続いたようである。2号ブロック内の接合資料。黒色頁岩。

1 ⇒ ○ ⇒ … ⇒ … ⇒ … ⇒ ○ ⇒ 2 ⇒ 3 ⇒ ○ ⇒ ○ ⇒ 4

接合資料—33 (第35図、PL31)

石核1・剥片2からなる接合資料。長さ6cm・幅3.5cm・厚さ4.2cmを測る、角柱状亜角礫を石核に用いる。剥片剥離は礫の長軸に並行する側縁で開始、打点を左右に振り徐々に後退するよう石核を消費していく。縦長志向の強い剥離を進める。10・11号ブロック間の接合。赤碧玉。

接合資料—22 (第36図、PL31)

使用痕ある剥片1・石核2からなる接合資料。斑晶の凝集する層理面が上下両面に残る亜角礫を石核に用いる。剥片剥離は比較的単純で、石核上面で剥片を剥離したのちに、これを打面に縦長志向の強い小形剥片を剥離する。3a・4号ブロック間の接合。黒曜石—5a。

接合資料—20 (第36図、PL31)

角錐状石器1を含む9点からなる接合資料。石核高が6cm程度の角礫を石核に用いる。作業面の幅は現状で約5cmだが、少なくとも剥片1枚を正面左側で剥離、幅7cm程度の石核(角礫?)を想定することができよう。剥片剥離は上端の角礫面に打面を固定、打点を左右に大きく振り、小形剥片を剥離している。稜上を狙って剥離した剥片は予想以上に幅広であったようで、横位切断した1枚の剥片(長さ・幅とも5cm程度の幅広剥片。裏面側の接合図を参照)を利用して加工痕ある剥片7と角錐状石器9を作出する。13号ブロック出土。黒曜石—4b。

接合資料—19 (第37図、PL31)

剥片5からなる接合資料。剥離は正面で小形幅広剥片1を剥離することからはじまる。剥離法は、打

面と作業面を頻繁に入れ替えるもので、剥離した剥片形状は概して幅広である。剥片3・4の剥離間で石核高が1.5cmほど減じている。接合資料の底面には礫面を残しており、石核消費の最終段階に近い接合資料と捉えている。5号(剥片1)、8号(剥片2)ブロックから各1点、残る3点が7号ブロックの出土。黒曜石—4a。

1 ⇒ ○ ⇒ ○ ⇒ 2 ⇒ 3 ⇒ … ⇒ … ⇒ 4 ⇒ 5

接合資料—16 (第37図、PL31)

加工痕ある剥片1・剥片4からなる接合資料。打面と作業面を交互に入れ替えて小形剥片を連続剥離している。打面調製、及び、頭部調製は施されない。剥片3・4の剥離間に石核高を大きく減じており、この間の剥離で相当量の小形剥片を剥離しているようである。13号ブロック出土。黒曜石—2c。

1 ⇒ 2 ⇒ ○ ⇒ 3 ⇒ … ⇒ … ⇒ 4 ⇒ 5

接合資料—9・10・12・17・24・25・30・31 (第38図、PL31)

小形剥片類の接合資料を一括した。剥離の部分的段階を示す資料が多く、打点を大きく振り剥離するものが多い。石核形状については不明であるが、接—12・25は角礫を分割し、90°打面転移して小形剥片を、接—31は板状剥片の側縁(小口部分)を利用して小形剥片を剥離している。接—9・10・12が4aブロック、接—24が4bブロック、接—30が8号ブロック、接—17・31が13号ブロック内の接合で、接—25のみがブロック間(4a・4bブロック)で接合した。接—12が黒曜石—1dを、接—9・10が黒曜石—1cを、接—17が黒曜石—2cを、接—24が黒曜石—6を、接25・30が黒曜石—8を用いていた。

石器と礫の分布

1a地点では、石器ブロック17ヶ所を確認した。石器群が出土した1a地点は、丘陵全域で最も広い平坦面を有する丘陵の頂部にあたるが、微視的には平坦面から緩斜面に移行する地点に分布する傾向が強い。石器ブロックは北東側緩斜面に石器ブロック15ヶ所が存在したほか、調査区の南西側と北側に孤

立して石器ブロック各1が存在した。これら3地点では、地点間接合や同一母岩の分布が指摘されないため石器群の同時性については保証できない。

1 a号ブロック (第40図)

位置 丘陵頂部・南西側緩斜面 (BQ-107G)
 規模 長径1.4m・短軸0.8m
 分布状態 密集分布する。
 出土層位 X層～XI層
 出土点数 51点
 器種構成 碎片51
 石材構成 黒曜石
 その他 黒曜石のみからなる。全点同一母岩か。最大重量0.61gを測る。49点がX層から出土。

1 b号ブロック (第40図)

位置 丘陵頂部・南西側緩斜面 (BQ-108G)
 規模 長径2.0m・短径1.1m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層～XI層 (X層から8点出土)
 出土点数 11点
 器種構成 切出形石器1、加工痕ある剥片1、剥片3、碎片6

石材構成 黒曜石4、黒色頁岩1、黒色安山岩5、硬質頁岩1

その他 黒色安山岩5点がブロックの西側に、黒曜石4点がブロックの東側に分布、ブロックの細分が可能かもしれない。

2号ブロック (第40図)

位置 丘陵頂部・北側緩斜面 (CD-121G)
 規模 長径1.0m・短径0.6m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層～X層 (X層から9点出土)
 出土点数 10点
 器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片4、碎片4

石材構成 黒曜石1、黒色頁岩8、黒色安山岩1
 その他 碎片のみブロックのみ南側に集中。

3号ブロック (第41図)

位置 丘陵北東側斜面 (CK・CL-119・120G)
 規模 長径6.6m・短径3.1m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X層～XI層 (X層から6点出土)
 出土点数 9点
 器種構成 削器1、加工痕ある剥片2、敲石1、

第13表 ブロック別器種構成 (Ⅲ文化-1 a地点)

	ナイフ	切出形	角錐状	楔形	削器	加工痕	使用痕	石刃	石核	敲石	剥片	碎片	礫	礫片	合計
1 a号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	51	0	0	51
1 b号ブロック	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	6	0	0	11
2号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	4	4	0	0	10
3号ブロック	0	0	0	0	1	2	0	0	5	1	0	0	0	0	9
4 a号ブロック	0	1	0	1	0	4	1	0	2	0	30	46	3	2	90
4 b号ブロック	1	0	0	0	0	2	0	1	2	0	22	22	1	2	52
5号ブロック	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0	3	1	9
6号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	4	8
7号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	1	7
8号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8	5	0	2	16
9号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3	2	0	0	7
10号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7	0	0	0	8
11号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	4
12号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	5	0	0	0	8
13号ブロック	0	0	1	0	1	4	0	0	0	0	28	19	0	0	53
14号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	3	0	0	9
15号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	5
16号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	6
17号ブロック	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	9
ブロック外	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	13	1	2	2	21
合計	1	2	2	1	2	19	5	2	13	2	153	168	10	14	393

II 調査の成果

石核 5

石材構成 黒曜石 7、赤碧玉 1、変質安山岩 1
 その他 ブロック内の剝離痕跡は見られない。
 黒曜石製石核 2 がブロック内で接合、
 赤碧玉製の石核 1 が 4 a・17号ブロッ
 ク出土の剝片と接合。

4 a号ブロック (第42図)

位 置 丘陵北東側斜面 (CJ・CK-117・118G)
 規 模 長径4.9m・短径2.4m
 分布状態 密集分布する。
 出土層位 IX層~XII層 (X層から53点出土)
 出土点数 90点
 器種構成 切出形石器 1、楔形石器 1、石核 2、
 加工痕ある剝片 4、使用痕ある剝片 1、
 剝片30、碎片46、礫 3、礫片 2
 石材構成 黒曜石75、黒色安山岩 5、赤碧玉 3、
 チャート 2、粗粒輝石安山岩 5
 その他 礫類は最大2680gを測る。台石的機能
 が想定可能。

4 b号ブロック (第42図)

位 置 丘陵北東側斜面 (CJ-117G)
 規 模 長径3.9m・短径3.1m

分布状態 密集分布する。

出土層位 IX層~XII層 (X層から38点出土)

出土点数 52点

器種構成 ナイフ形石器 1、加工痕ある剝片 2、
 石核 2、剝片22、碎片22、礫 1、礫片 2

石材構成 黒曜石47、黒色頁岩 1、黒色安山岩 1、
 粗粒輝石安山岩 3

その他 礫 1 は318gを測る。礫片 2 は礫重量
 10g以下。

5号ブロック (第43図)

位 置 丘陵北東側斜面 (CL・CM-117・118
 G)
 規 模 長径4.1m・短径3.1m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X層
 出土点数 9点
 器種構成 加工痕ある剝片 2、剝片 3、礫 3、礫
 片 1
 石材構成 黒曜石 4、黒色頁岩 1、粗粒輝石安山
 岩 4
 その他 ブロックの北東側に礫が、南西側に剝
 片が分布する傾向が指摘可能。

第14表 ブロック別石材構成 (Ⅲ文化-1 a地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	硬頁	褐碧	赤碧玉	チャート	粗安	変安	合計
1 a号ブロック	0	0	51	0	0	0	0	0	0	51
1 b号ブロック	5	1	4	1	0	0	0	0	0	11
2号ブロック	1	8	1	0	0	0	0	0	0	10
3号ブロック	0	0	7	0	0	1	0	0	1	9
4 a号ブロック	5	0	75	0	0	3	2	5	0	90
4 b合ブロック	1	1	47	0	0	0	0	3	0	52
5号ブロック	0	1	4	0	0	0	0	4	0	9
6号ブロック	0	0	3	0	0	0	0	5	0	8
7号ブロック	2	0	4	0	0	0	0	1	0	7
8号ブロック	0	0	14	0	0	0	0	2	0	16
9号ブロック	2	0	4	0	0	0	1	0	0	7
10号ブロック	3	0	5	0	0	0	0	0	0	8
11号ブロック	0	0	4	0	0	0	0	0	0	4
12号ブロック	1	0	5	0	0	0	1	1	0	8
13号ブロック	3	0	50	0	0	0	0	0	0	53
14号ブロック	1	0	8	0	0	0	0	0	0	9
15号ブロック	2	0	3	0	0	0	0	0	0	5
16号ブロック	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6
17号ブロック	1	0	7	0	0	1	0	0	0	9
ブロック外	2	1	12	0	2	0	1	3	0	21
合 計	29	12	314	1	2	5	5	24	1	393

6号ブロック (第44図)

位置 丘陵北東側斜面 (CL-116・117G)
 規模 長径3.3m・短径1.8m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X層~XI層
 出土点数 8点
 器種構成 石核1、剥片1、碎片1、礫1、礫片4
 石材構成 黒曜石3 粗粒輝石安山岩5
 その他 ブロックの北側に剥片類が、南側に礫類が分布(1.8m×0.7m)する傾向が強い。礫は総て破損礫。最大重量826gを測る。

7号ブロック (第43図)

位置 丘陵北東側斜面 (CL-118G)
 規模 長径2.4m・短径0.6m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X層~XI層
 出土点数 7点
 器種構成 剥片6、礫片1
 石材構成 黒曜石4、黒色安山岩2、粗粒輝石安山岩1
 その他 礫片1は亜角礫(破損礫)で、礫重量は24gを測る。

8号ブロック (第44図)

位置 丘陵北東側斜面 (CL・CM-116G)
 規模 長径4.0m・短径2.0m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層~XI層 (X層から10点出土)
 出土点数 16点
 器種構成 加工痕ある剥片1、剥片9、碎片4、礫片2
 石材構成 黒曜石14 粗粒輝石安山岩2
 その他 礫片は2点とも破損した亜角礫。礫重量は1点が171g、1点が12gを測る。

9号ブロック (第45図)

位置 丘陵北東側斜面 (CM-114・115G)
 規模 長径4.1m・短径2.1m

分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層~X層・XI層 (X層から10点出土)
 出土点数 7点
 器種構成 使用痕ある剥片1、石核1、剥片2、碎片1
 石材構成 黒曜石4、黒色安山岩2、チャート1
 その他 接合資料2例を確認している。

10号ブロック (第45図)

位置 丘陵北東側斜面 (CM・CN-113・114G)
 規模 長径4.1m・短径2.5m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X層
 出土点数 10点
 器種構成 使用痕ある剥片1、剥片7
 石材構成 黒曜石5、黒色安山岩3
 その他 黒曜石製剥片1点を除いて、接合資料6例を確認した。

11号ブロック (第46図)

位置 丘陵北東側斜面 (CL・CM-113G)
 規模 長径2.1m・短径0.25m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層~XI層 (X層から2点出土)
 出土点数 4点
 器種構成 剥片2、碎片2
 石材構成 黒曜石4
 その他 剥片と碎片は別母岩。

12号ブロック (第46図)

位置 丘陵北東側斜面 (CN-112、CO-112・113G)
 規模 長径6.2m・短径3.1m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層~XI層
 出土点数 8点
 器種構成 加工痕ある剥片1、石刃1、剥片5、敲石1
 石材構成 黒曜石5、黒色安山岩1、チャート1、粗粒輝石安山岩1

II 調査の成果

その他 ob-9 に分類した 4 点の黒曜石以外は総て搬入石器。

13号ブロック (第47図)

位置 丘陵北東側斜面 (CO・CP-112・113G)

規模 長径3.5m・短径1.9m

分布状態 集中分布する。

出土層位 IX層～XII層 (X層から44点出土)

出土点数 54点

器種構成 角錐状石器 1、削器 1、加工痕ある剥片 4、剥片28、碎片19、敲石 1

石材構成 黒曜石50、黒色安山岩 3、粗粒輝石安山岩 1

その他 接合資料 8 例は基本的にブロック内で接合。

14号ブロック (第47図)

位置 丘陵北東側斜面 (CM-111G)

規模 径2.3m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X層

出土点数 9点

器種構成 使用痕ある剥片 1、剥片 5、碎片 3

石材構成 黒曜石 8、黒色安山岩 1

その他 使用痕ある剥片は黒色安山岩製で搬入石器か。黒曜石製石器 8 点中 2 点は搬入石器。

15号ブロック (第48図)

位置 丘陵北東側斜面 (CK-112G)

規模 長径2.1m・短径0.3m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX層～XI層 (X層から 3 点出土)

出土点数 5点

器種構成 剥片 2、碎片 3

石材構成 黒曜石 3、黒色安山岩 2

16号ブロック (第48図)

位置 丘陵北東側斜面 (CK-112G)

規模 長径1.0m・短径0.5m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX・X・XII層 (X層から 3 点出土)

出土点数 6点

器種構成 剥片 3、碎片 3

石材構成 黒曜石 6

その他 出土状態は土壌攪乱等の影響で乱れており、高低差が激しい。

17号ブロック (第48図)

位置 丘陵平坦部 (CH・CI-114G)

規模 長径3.3m・短径1.4m

分布状態 集中分布する。

出土層位 X層～XI層 (X層から 8 点出土)

出土点数 9点

器種構成 ナイフ形石器 1、剥片 8

石材構成 黒曜石 7、黒色安山岩 1

その他 唯一、台地の平坦部に位置した。黒曜石は 3 母岩以上が存在。

接合資料の分布

接合作業の結果、33例103点の接合資料を確認した。接合資料の約 7 割が剥片類数点 (平均3.1点) からなるものであり、全体としては石核を部分消費するものが多かった。

調査区の西側や北側のブロックには接合資料も少なく、孤立的であった。接合資料の大部分は調査区・北東側の出土であって、33例中31例が北東側に偏在した。33例中24例がブロック内の接合、同じく33例中9例がブロック間の接合 (第49～51図) であった。調査区の北東側では、出土点数の多い 4 a・4 b ブロックと13号ブロックに接合資料が集中、活発な石核消費が見て取れた。

調査区西端の 1 b ブロック、及び、調査区北端の 2 号ブロックでは、それぞれ 1 例の接合資料を確認した。1 b ブロック出土の接合資料 (接-3、PL40) は黒色安山岩製の小形剥片 3 点からなり、2 号ブロック出土の接合資料 (第35図の接-6 を参照されたい、黒色頁岩製) は剥片 3 点・石核 1 点からなる接合資料。1 b ブロックの接合例はブロック内で少量の剥片類を剥離、石核をブロック外へ持ち出し、移動先で石核消費を予定 (碎片類の中には明らかに

黒曜石製の blunting-chip 数点があり、少量の剥離作業の他に若干の石器製作を行っている可能性が高い) しているのに対して、2号ブロックの接合例は相当量の剥片類をブロック外へ持ち出していることは明らかであり、その様相は大きく異なる。

当該期石器群が濃密に分布した調査区北東側ではブロック内接合資料24例・ブロック間接合資料9例(第49・50図を参照)を確認した。ブロック内接合資料は集中域の北側(4a・4bブロック)と南側(13号ブロック)に集中分布しており、大部分が黒曜石製剥片類の接合例(13号ブロックの接-2を除く)であった。ブロック間接合資料については、9例中3例(接-1・4・5)が黒色安山岩の接合例であった。基本的に、その分布は中央域に偏る傾向が指摘され、黒曜石製剥片類の分布傾向とは対照的であった。

母岩別資料の分布

9種類の石材(配石礫に用いた粗粒輝石安山岩を含む)を確認した。黒色安山岩(7.4%)や黒色頁岩(3.1%)の組成率は約10%と低く、非在地系の石材(黒曜石79.9%、硬質頁岩0.3%、碧玉類1.8%、第14表を参照)が主体を占めた。

調査区西端の1aブロックや北端の2号ブロックには、それぞれ黒曜石と黒色頁岩が偏在分布した。blunting-chip 数点を含む黒曜石製破片類(51点)のみ集中分布(第52図を参照)した1aブロックでは少量の剥片生産、及び、狩猟具類の二次加工が想定され、また、2号ブロックでは少量の剥片類の生産が想定可能であった。1aブロックに隣接する1bブロックは石器の分布密度も薄く、石材構成も多様で、1aブロックが石器製作跡的であるのに対して、1bブロックは石器の使用空間としての機能を想定することができるだろう。

当該期石器群が多量に出土した北東側緩斜面には、黒曜石製石器群が多量に分布した。この地点から出土した黒曜石は基本的に斑晶・気泡を多く含む特徴的のものであり、10個体の母岩が想定可能で

あったが、分類不可能な破片類も多く、314点中145点(46.2%)が分類不能であった。各母岩の特徴は下記のとおりであった。

ob-1 黒色ガラス透明で、気泡状に斑晶(ϕ 1mm未満)を含む。縞状構造の見られないものを1a類、細かい縞状構造を有するものを1b類、絹雲状の縞状構造を有するものを1c類、斑晶の混入量が多く、かつ、絹雲状の縞状構造を有するものを1d類に細分した。蓼科。

ob-2 斑晶はob-1と同様か、それよりやや大きく、また、斑晶の混入量も少ない。縞状構造が発達する。黒色ガラス透明。蓼科。

ob-3 斑晶は ϕ 2~3mmで、その混入量は少ない。黒色ガラス透明というよりやや濁っている。蓼科。

ob-4 1mm大の斑晶を多量に含む。透明感に乏しく、黒味が強い。細かい縞状構造が発達する4a類と、黒色ガラス透明の4b類、絹雲状の縞状構造を有する4c類に細分が可能。蓼科。

ob-5 黒色ガラス透明で良質な部分(約4cm)と、斑晶を多量混入する不良部分からなる。原石は良質部分と不良部分の互層からなる可能性が高い。蓼科。

ob-6 黒色ガラス透明。感覚の広い縞状構造が見られる。斑晶は全く含まれないもの(6a、和田峠系)と、斑晶を含む(6b、蓼科)からなる。

ob-7 1点のみ出土した。黒色ガラス透明で、良質の黒曜石。斑晶は全く含まれない。和田峠。

ob-8 ごく少し斑晶を含む。石材観はガラス透明というよりやや白く濁っている。蓼科。

ob-9 黒漆色の黒曜石で、茶褐色の縞が入る。和田峠。

ob-10 縞状構造が顕著に発達した黒曜石。1mm以下の斑晶を僅か含む。縞状構造が剥離面で白く濁って見える。蓼科。

各母岩の構成比はob-1が63点(20%)と最も多く、ob-2が35点・11%を占めた。これ以外の黒曜石は量的には少なく、ob-4・6・10が3.5~6.1%、

II 調査の成果

その他の母岩は1%内外であった。ob-1・2・4・6については縞状構造の在り方から細分も可能であったが、確実性に乏しく大別レベルで分布(第54・55図)を示した。

黒曜石製石器群は、北側の4 a・4 bブロックと南側の13号ブロックに集中分布、周辺ブロックに散漫に分布していた。この分布傾向から南北両地点で剥離、周辺ブロックには石器や剥片を持ち出すという行動論的理解が可能であった。以下、母岩分布について具体的に説明していきたい。

4 a・4 bブロックには6母岩(ob-1・2・5・7~9)が分布、他のブロックにはob-1・2・5の3母岩が分布した。接合関係を確認したわけではないのであくまでも推定の域を出ないが、周辺ブロックには比較的大形の剥片類が分布する傾向が指摘され、資料数の多いob-1・2・10については4 a・bブロックで剥離、より大形の剥片を周辺ブロックに持ち出し加工・使用する、という理解が妥当と考えている。南側のob-1・2についても4 a・4 bブロックと同様な傾向が見られ、13号ブロックに集中分布、周辺ブロックに散漫に分布した。

その他の黒曜石で集中分布したのは、ob-4・5・8の3母岩で、ob-4は7・13号ブロックに、ob-5は4 a・4 b・8号ブロックに、ob-8は4 a・4 bブロックに集中分布する傾向を示していた。その他の黒曜石(ob-36・7)は、ほぼ単独出土に近い状態であった。母岩の分類結果は南北両地点で均質に母岩を消費するという可能性を示唆するが、母岩分類の妥当性の問題もあって断言することはできないというのが現状である。

黒曜石を除く各種石材は搬入石器、及び、少量の剥片類からなる。これらについては剥離地点の特定が困難であったが、以下その概要を記す。

黒色安山岩については4 a・4 bブロック、13号ブロックの分布が目立ち、全体として南側ブロックに散漫に分布する傾向を示していた。母岩は1母岩のみ認定した。黒色安山岩-1には接合資料2例があり、1例(接-1)が10号ブロックの剥片と接合

した。なお、40mほど離れた2号ブロックに分布した剥片については同一母岩に認定が可能であったが、肉眼観察によるものであるため、分類の確証は弱い。

赤碧玉については1母岩を認定、赤碧玉-1が3・4 a・17号ブロック(各1点)が分布した。石核1・剥片2という構成であり、これらが剥片剥離されたことは明らかであり、分類不能な赤碧玉の分布が4 a地点にあることや、4 a地点が黒曜石消費の中心地であったなどを重視するなら、4 a地点を剥離地点とすることもできよう。

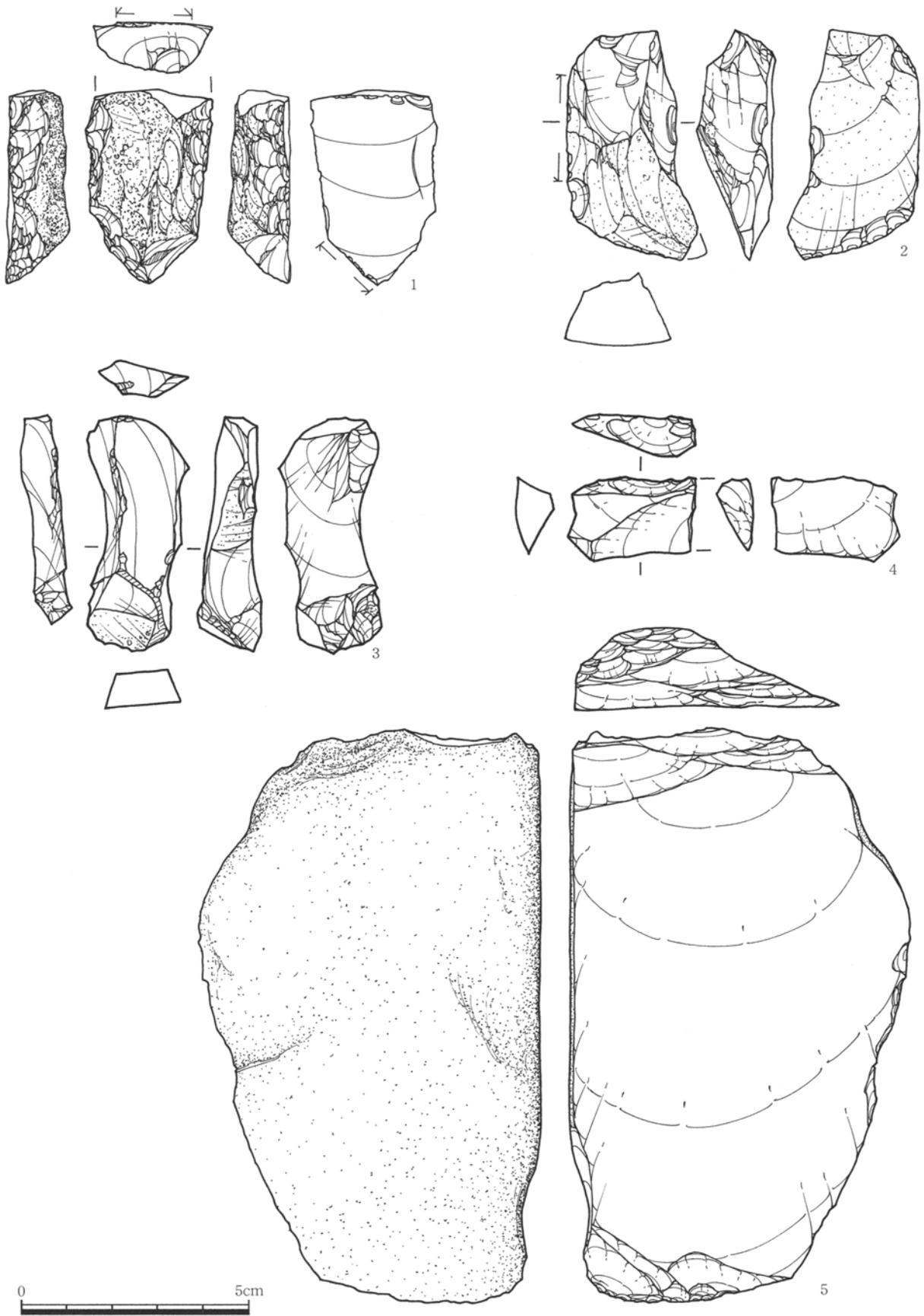
黒色頁岩については4 a・5号ブロックに各1点が分布したほか、ブロック外(CN-115G)にも1点が分布した。3点とも搬入石器であったが、加工石器は5号ブロックに分布した1点(第28図5)のみであった。

配石礫等(第57図)については調査区北東側の黒曜石製石器群に重複して分布した。礫重量は平均300g程度で、特に北側に集中分布した。3~8号ブロックには50g以下の礫片が分布したが、これらについての接合関係は確認できなかった。

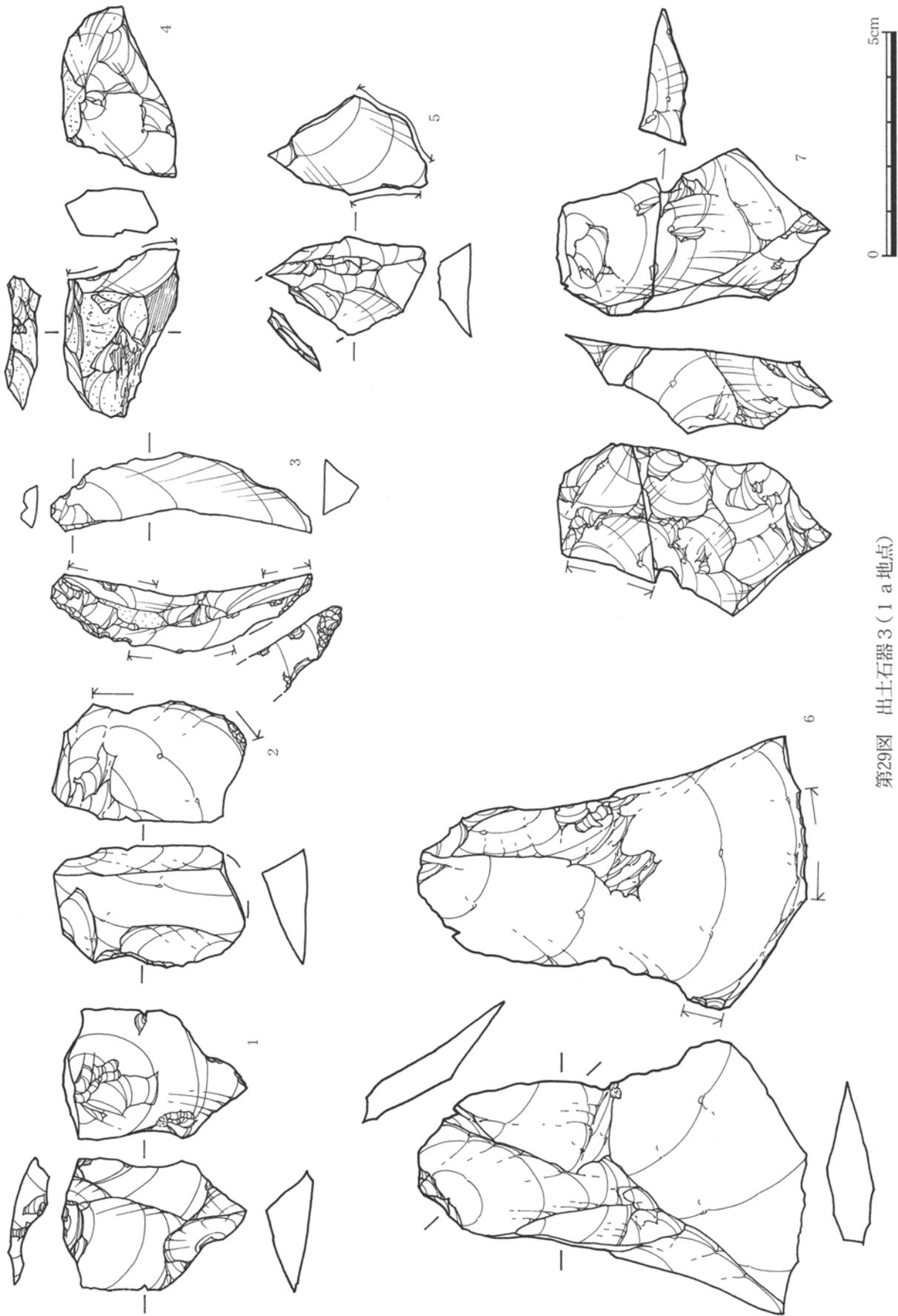


第27图 出土石器1(1 a地点)

II 調査の成果

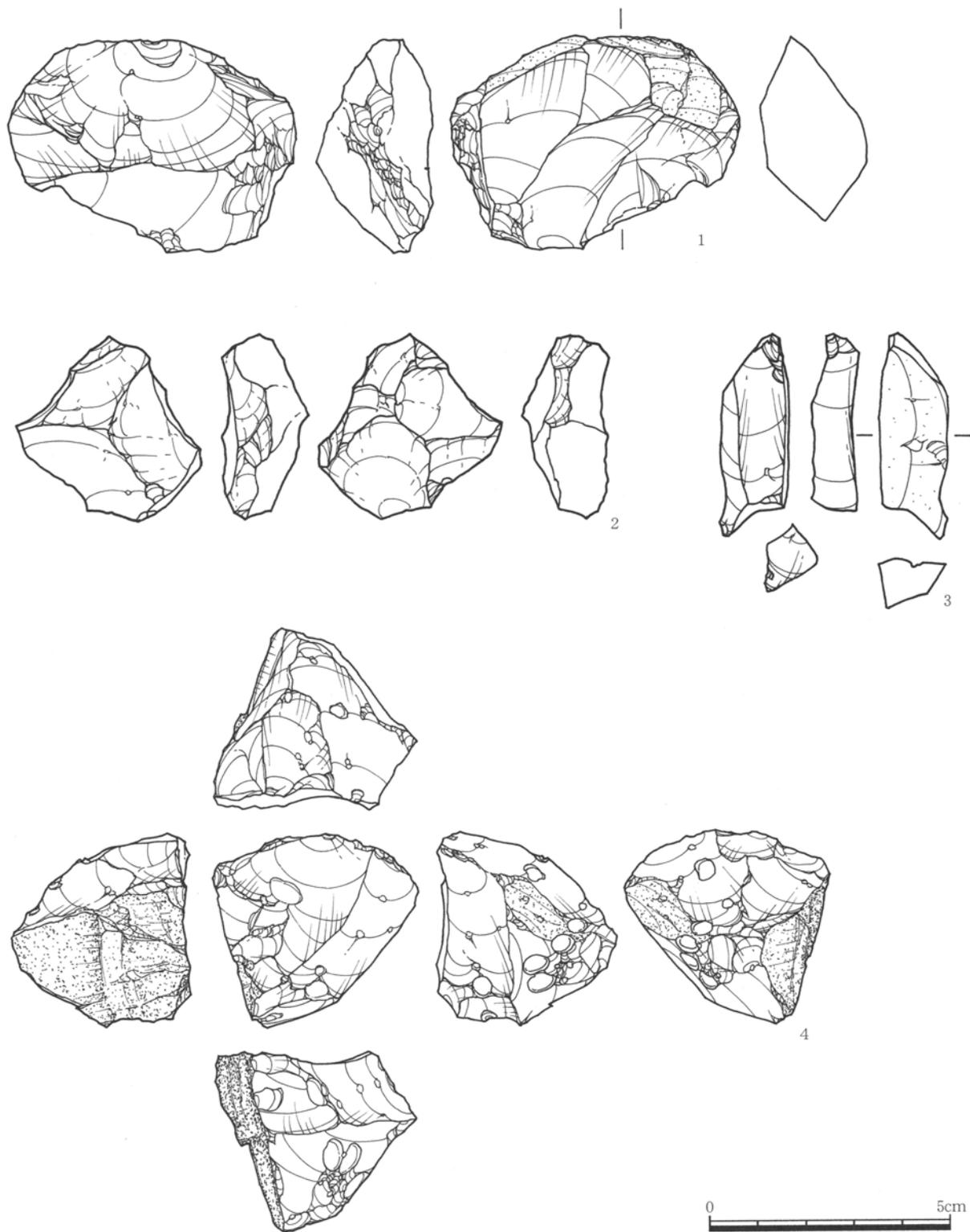


第28図 出土石器2(1 a地点)

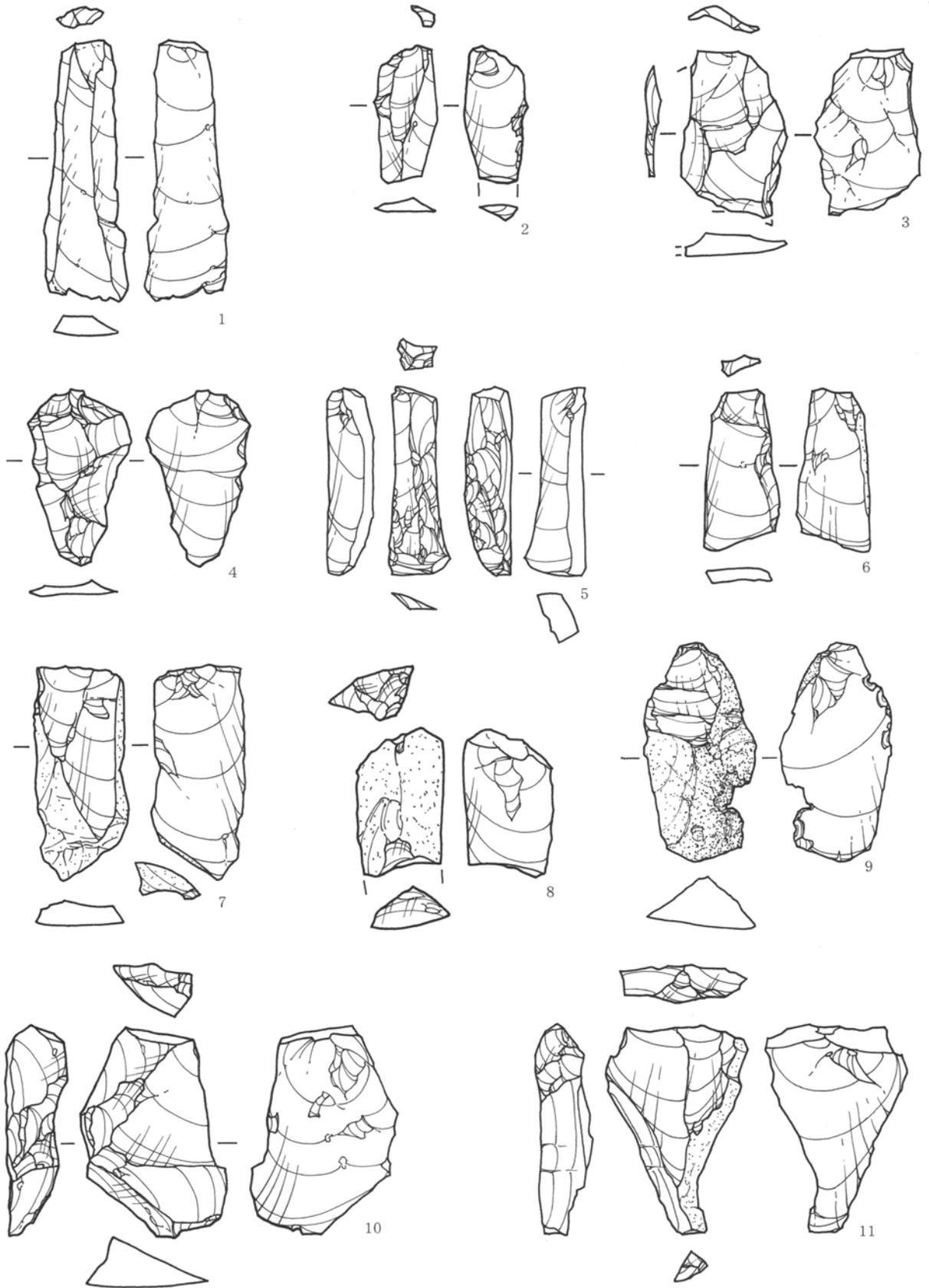


第29图 出土石器3 (1 a 地点)

II 調査の成果



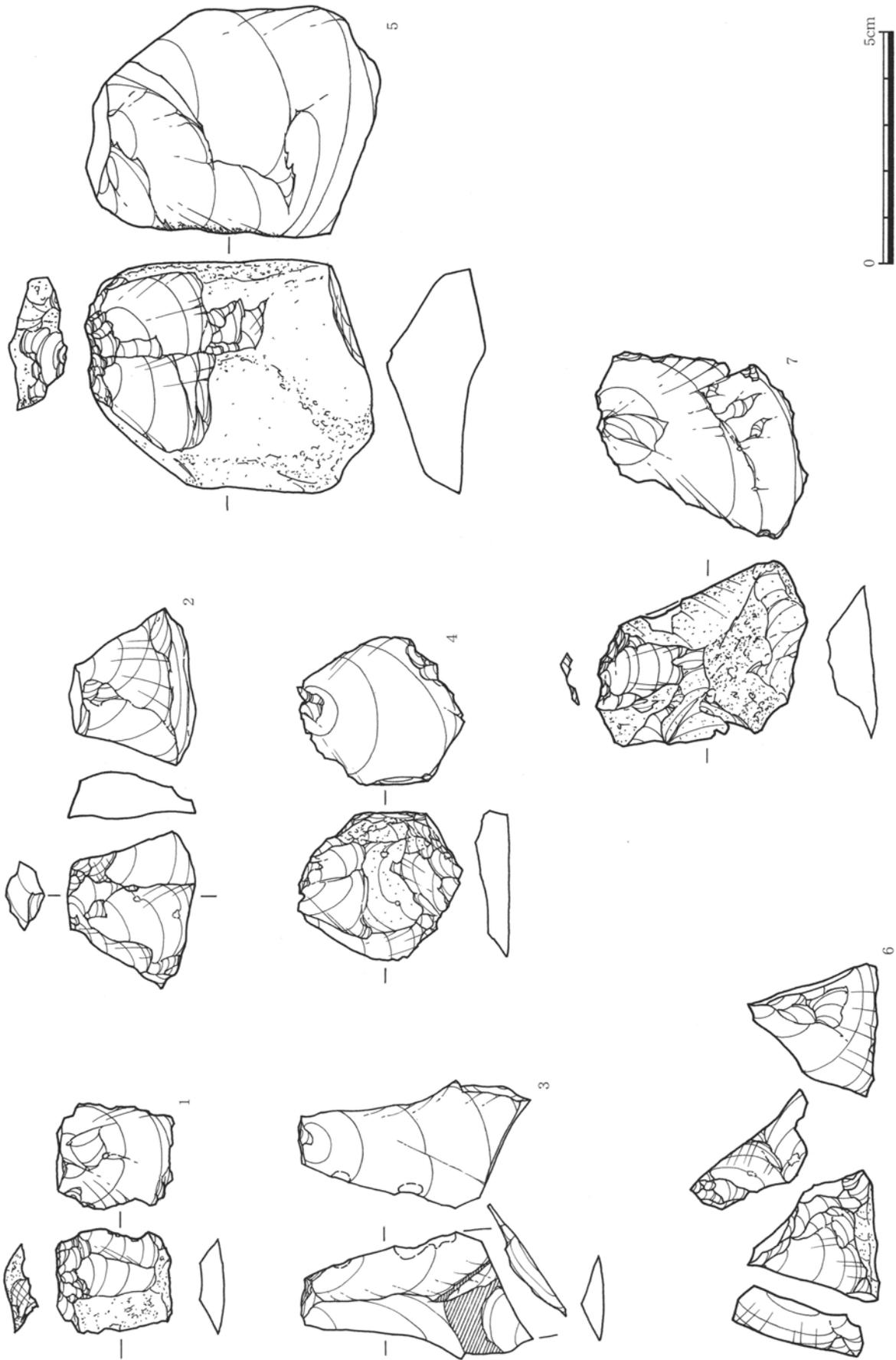
第30図 出土石器4(1 a 地点)



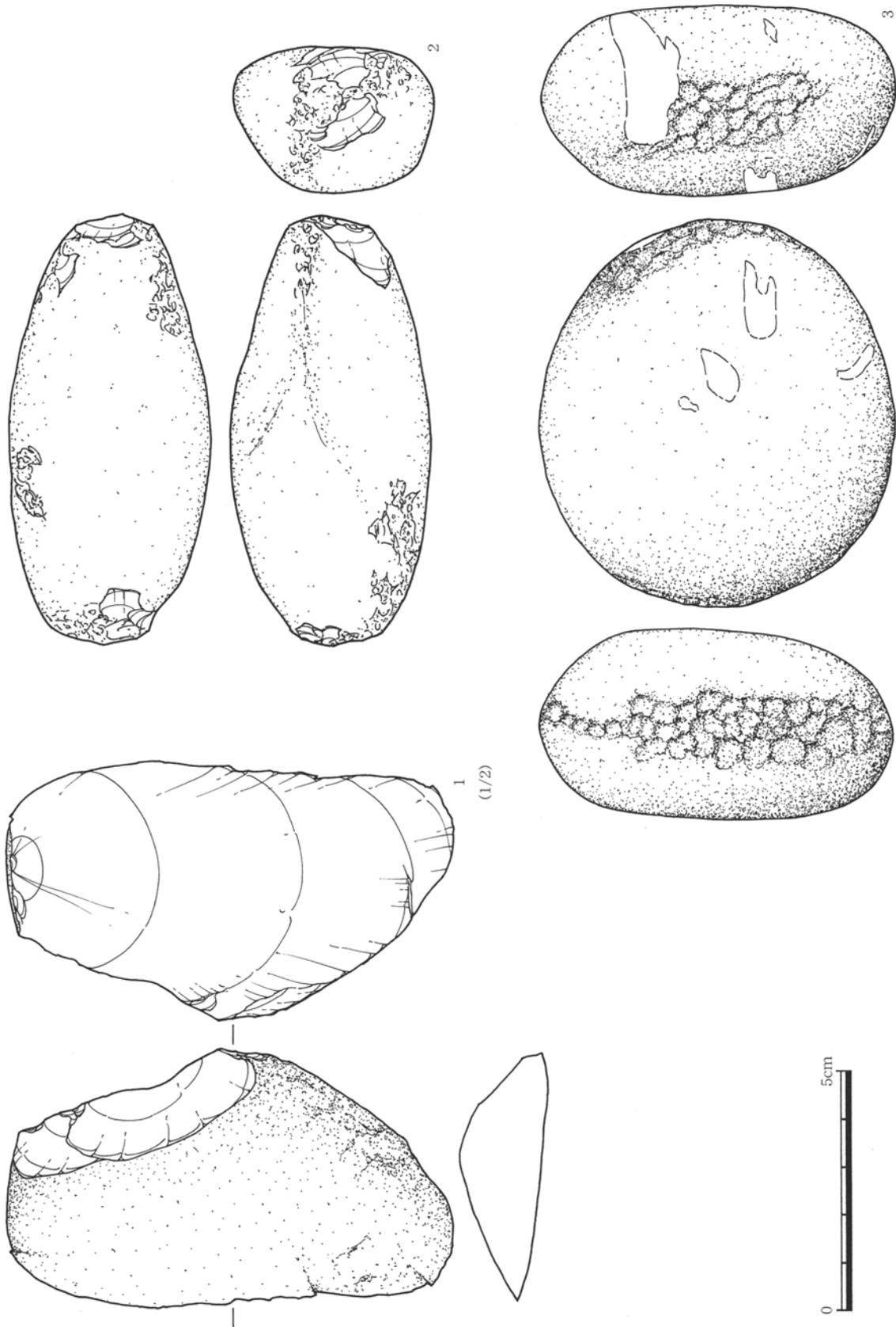
第31图 出土石器5(1 a地点)

0 5cm

II 調査の成果

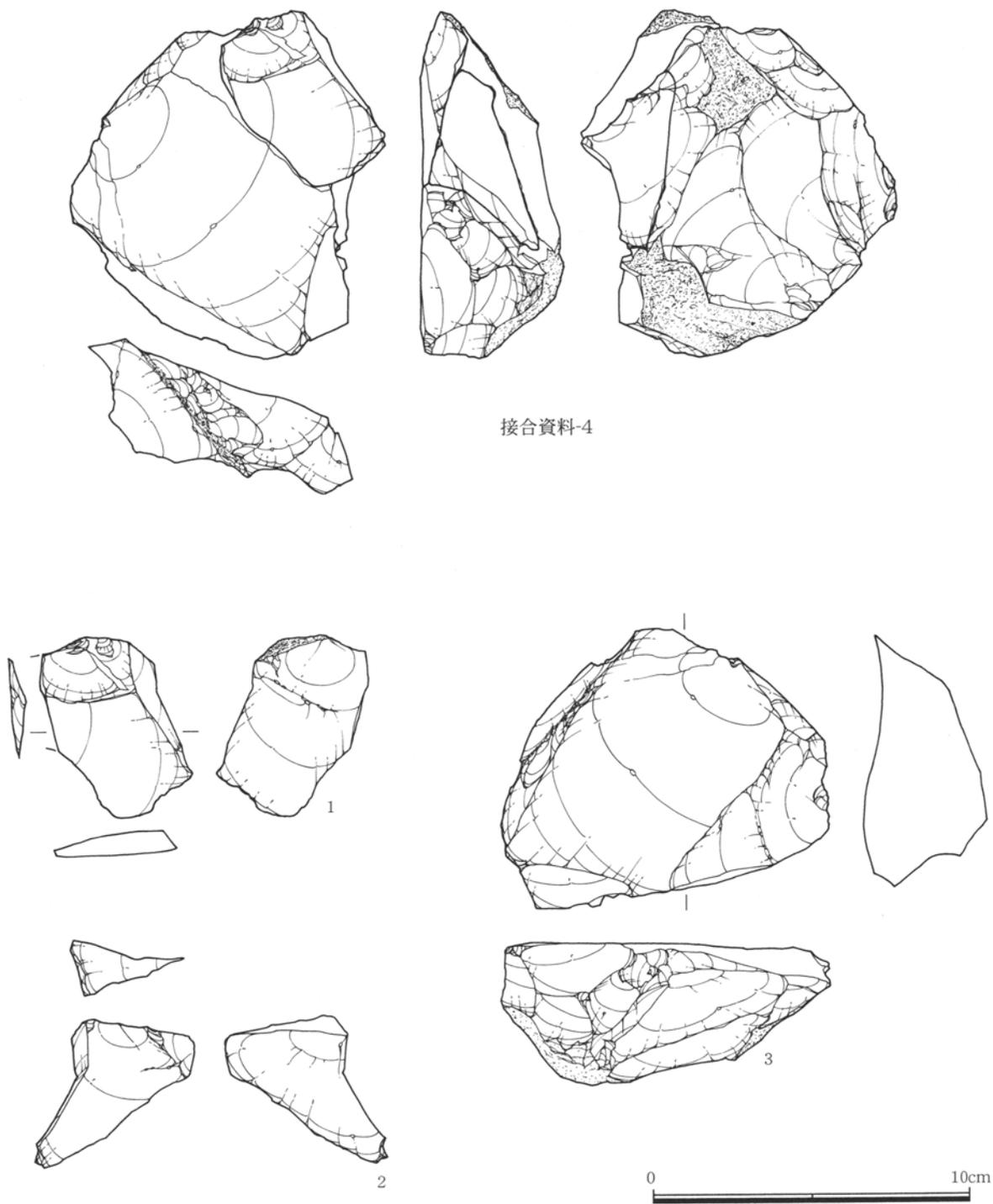


第32図 出土石器6 (1 a 地点)

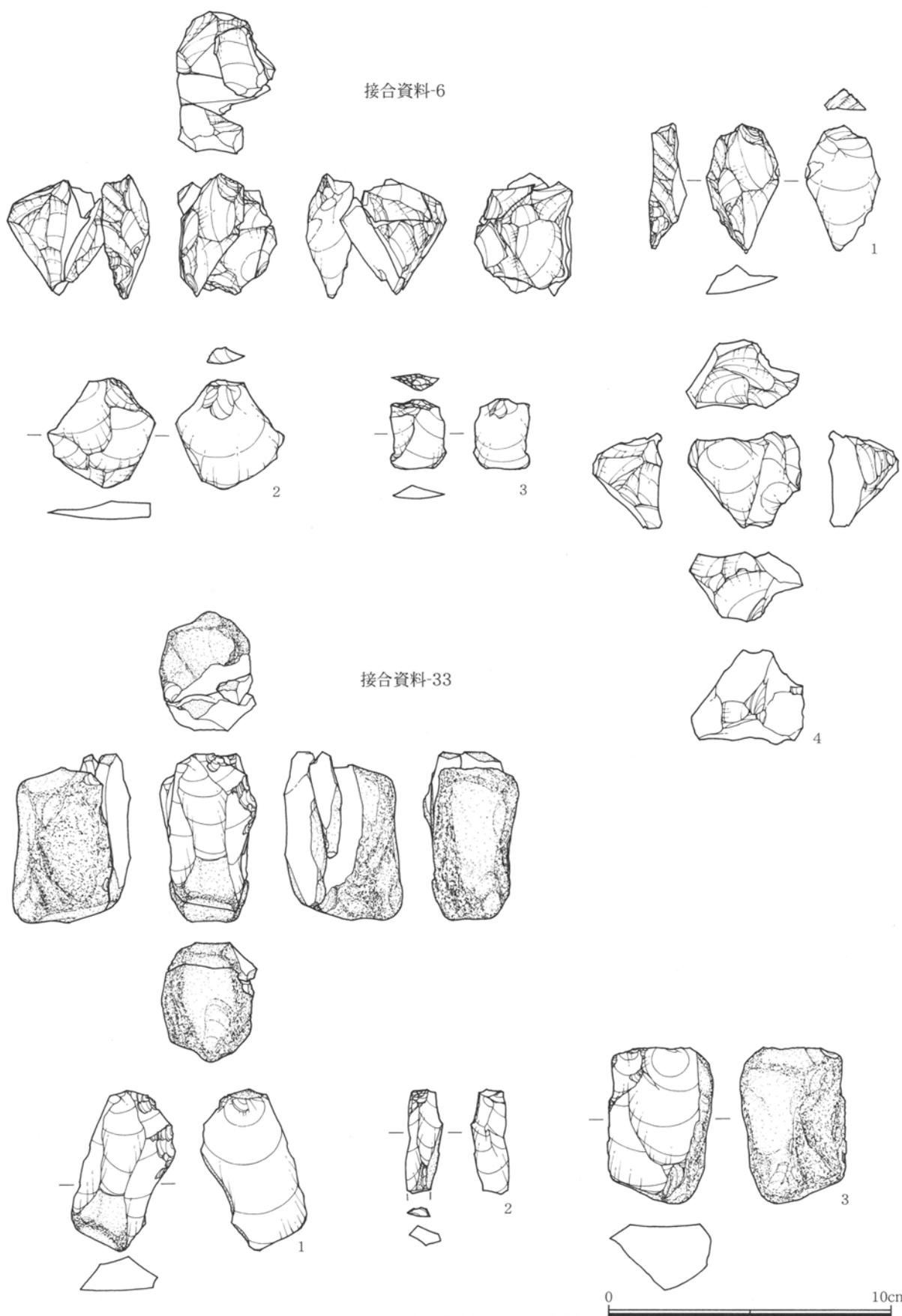


第33图 出土石器7(1 a地点)

II 調査の成果

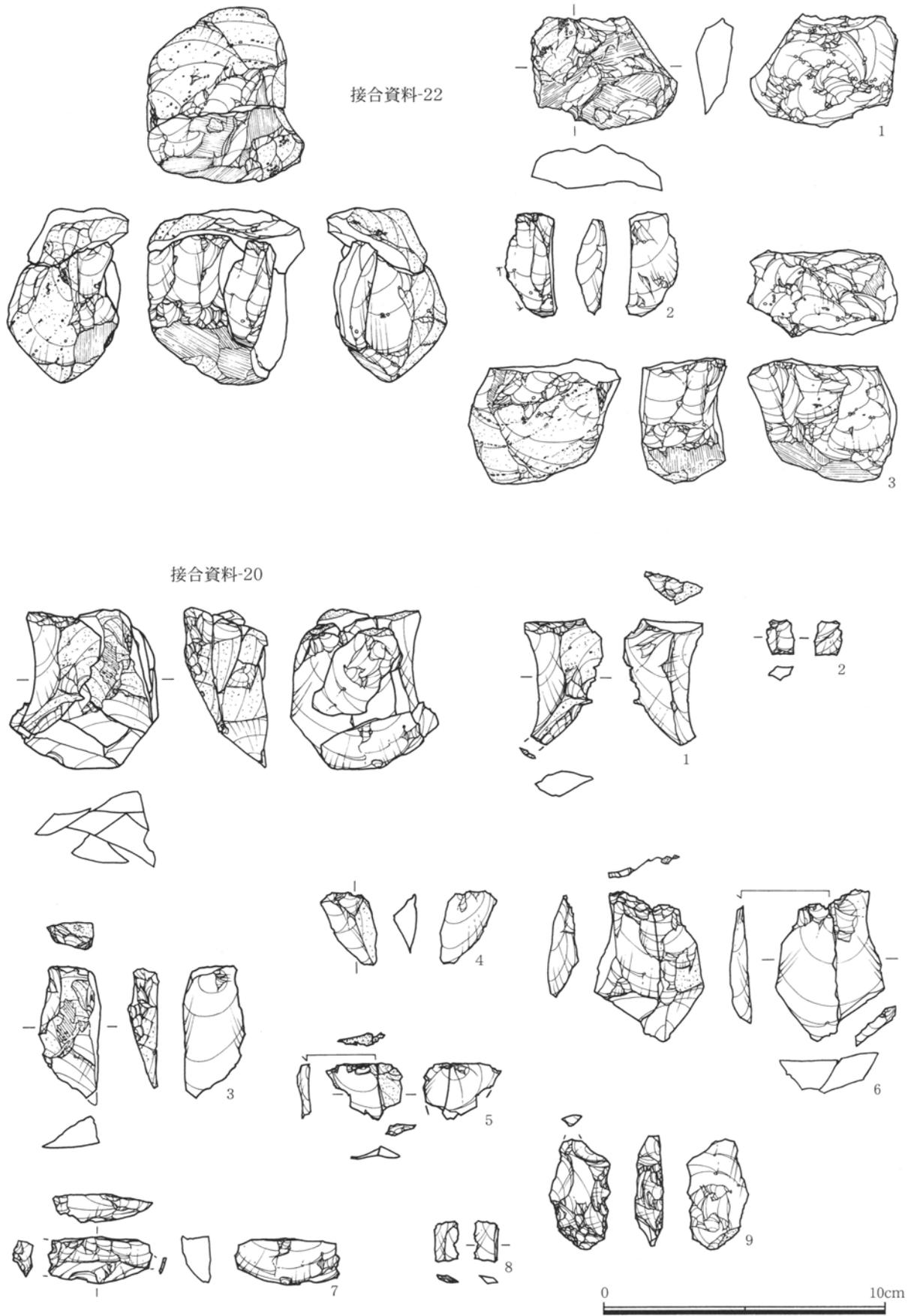


第34図 接合資料1 (1 a 地点)

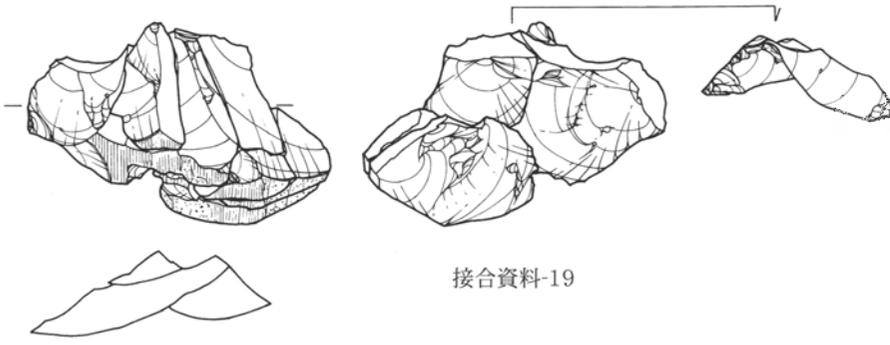


第35圖 接合資料2(1 a地点)

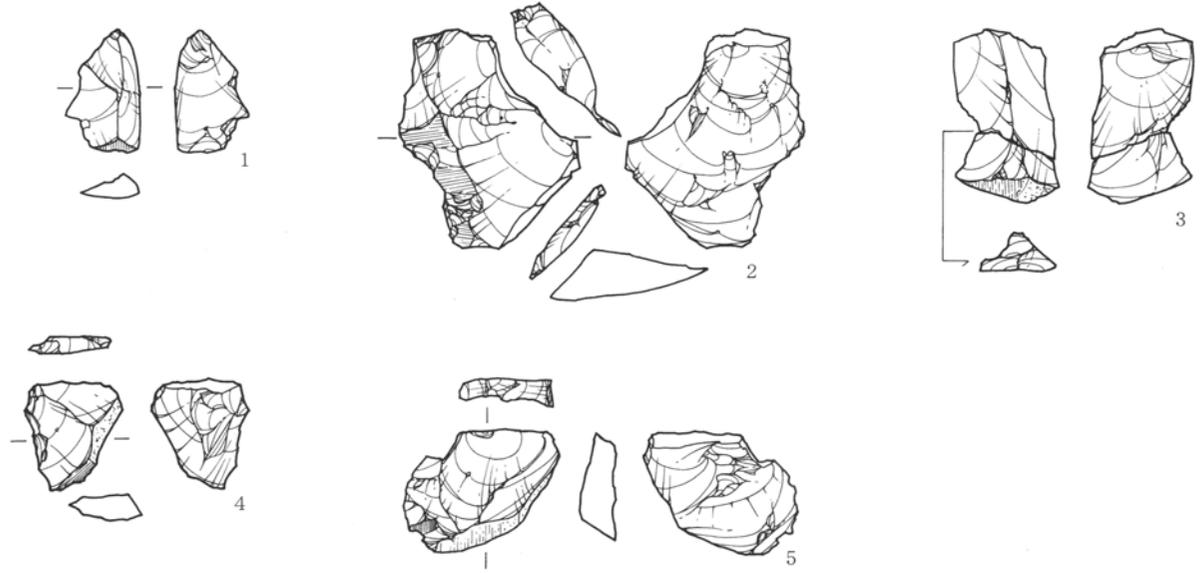
II 調査の成果



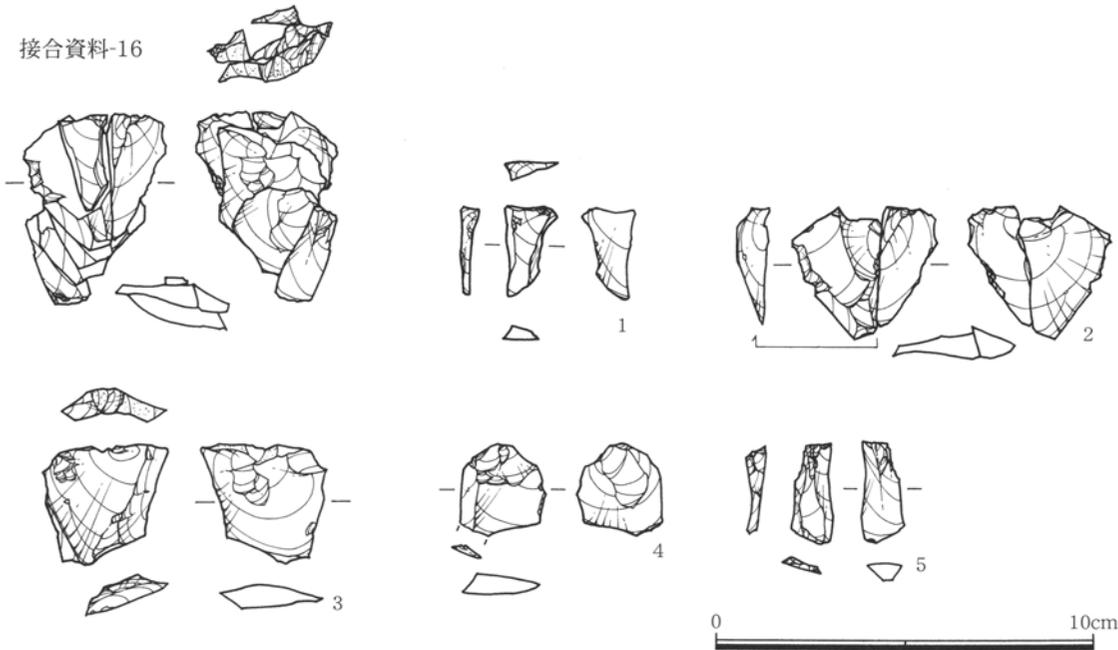
第36図 接合資料3 (1 a地点)



接合資料-19

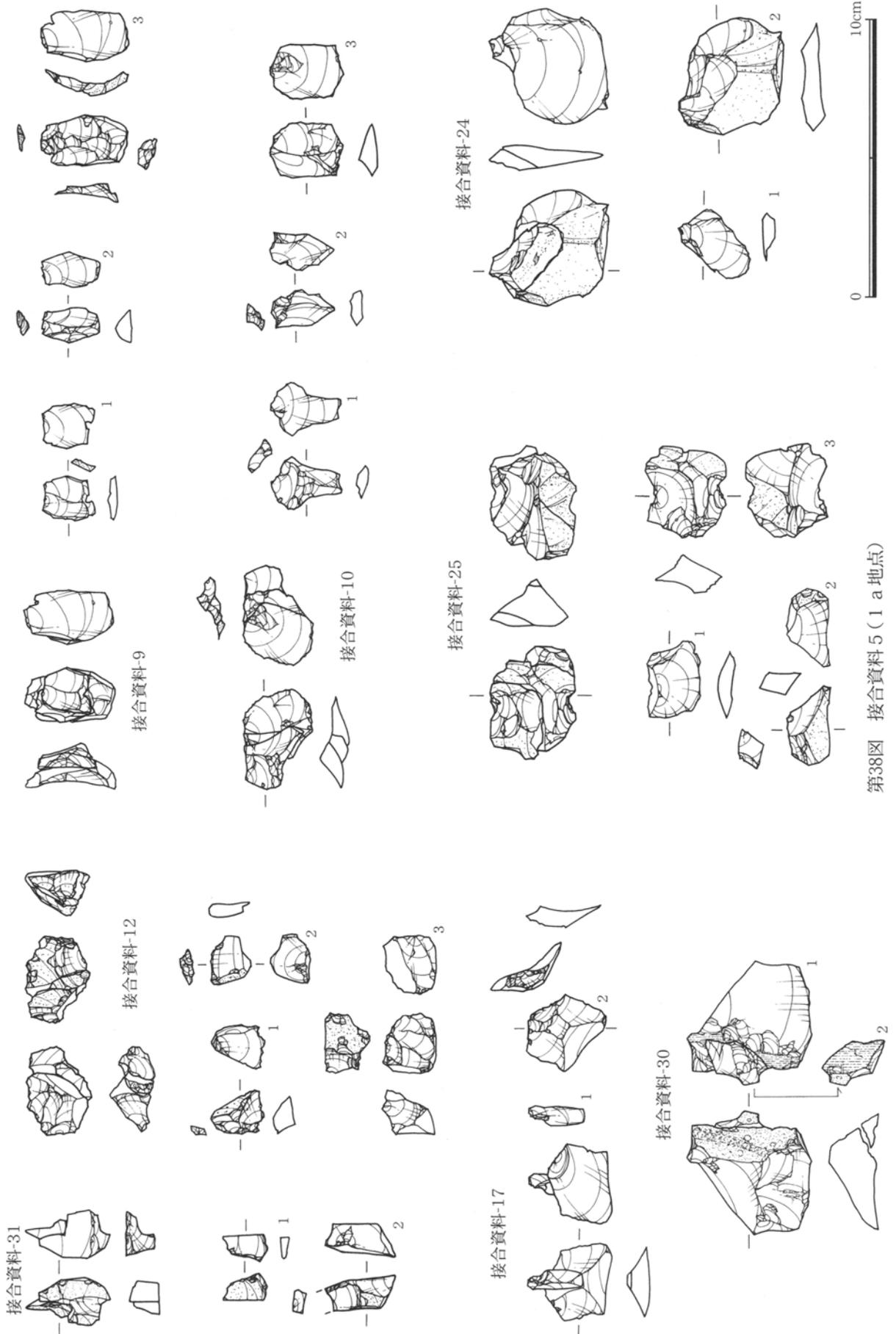


接合資料-16

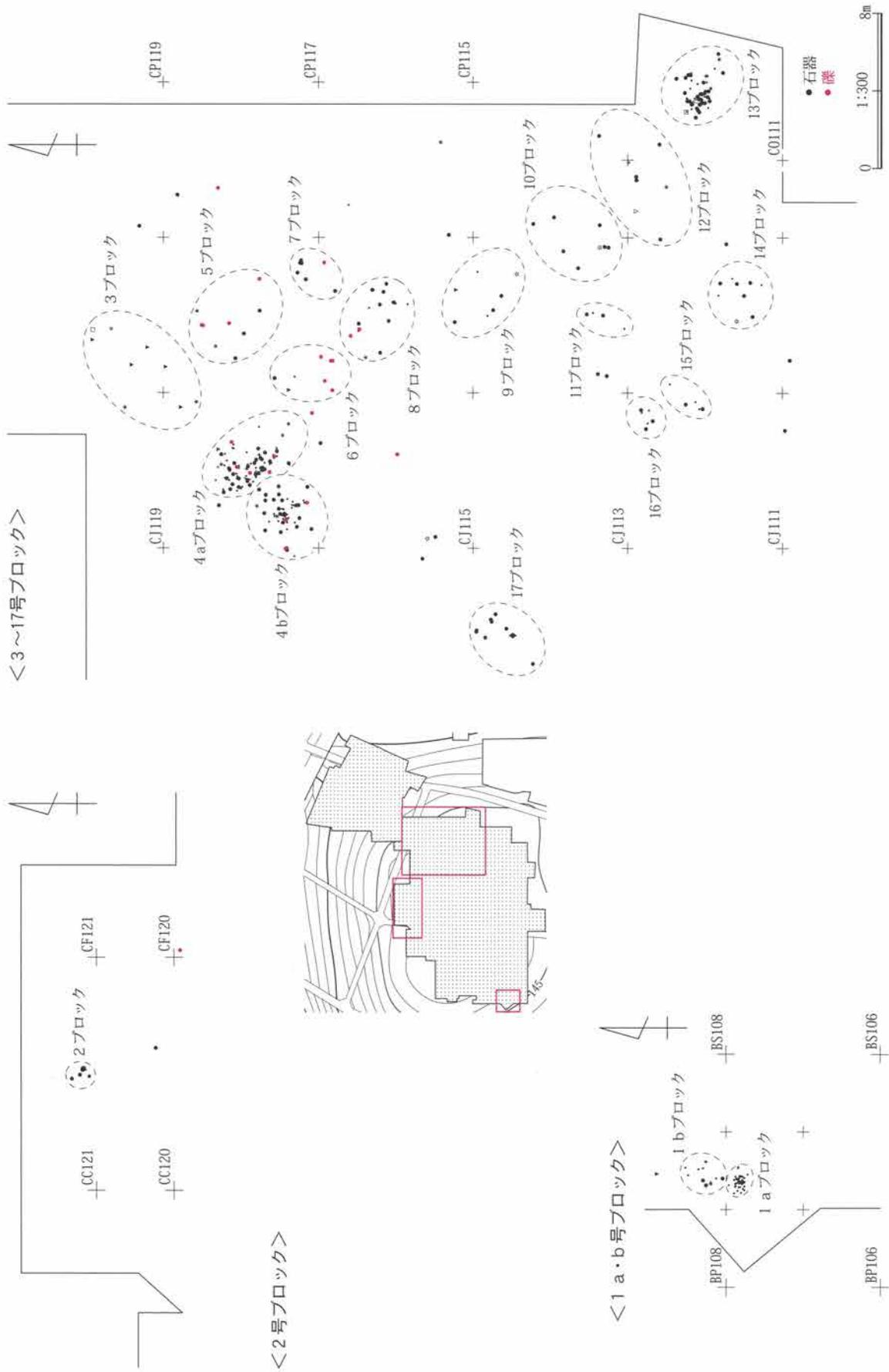


第37図 接合資料4 (1 a 地点)

II 調査の成果



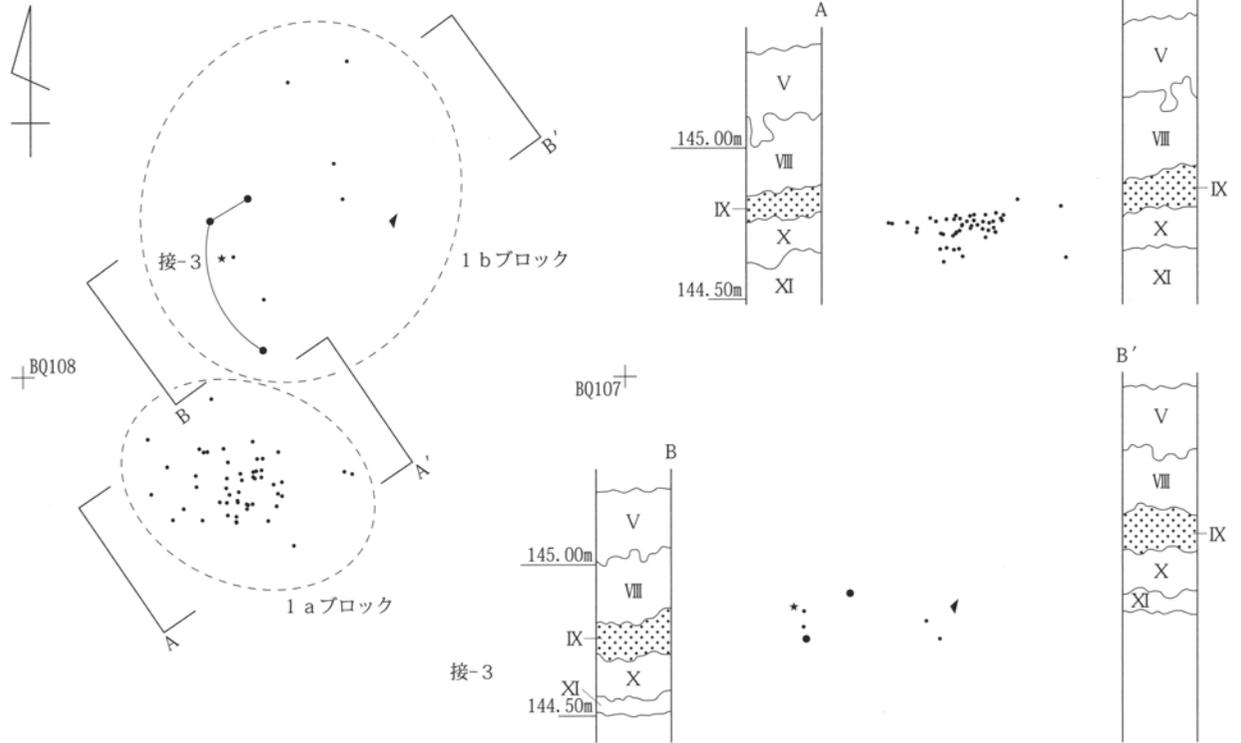
第38図 接合資料5(1 a 地点)



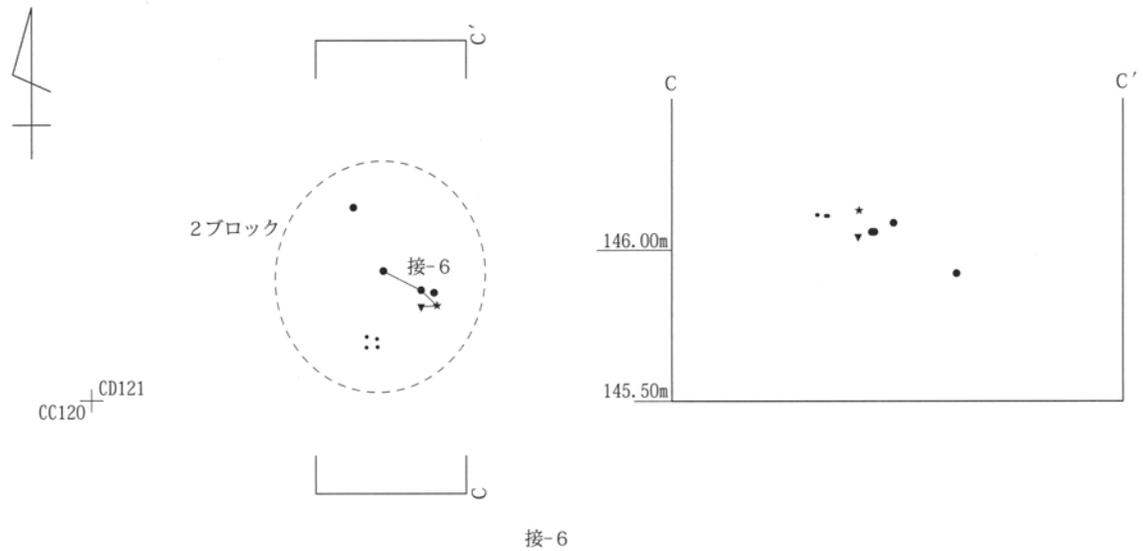
第39図 石器と磁の分布(第三文化層1 a地点)

II 調査の成果

<1 a・b号ブロック>

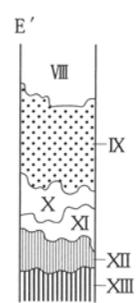
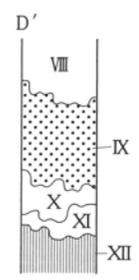
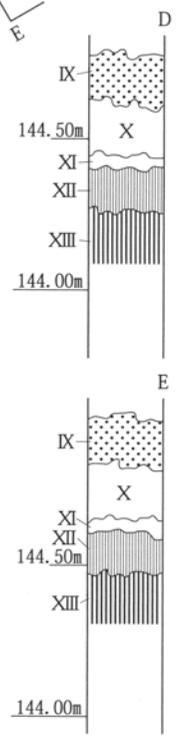
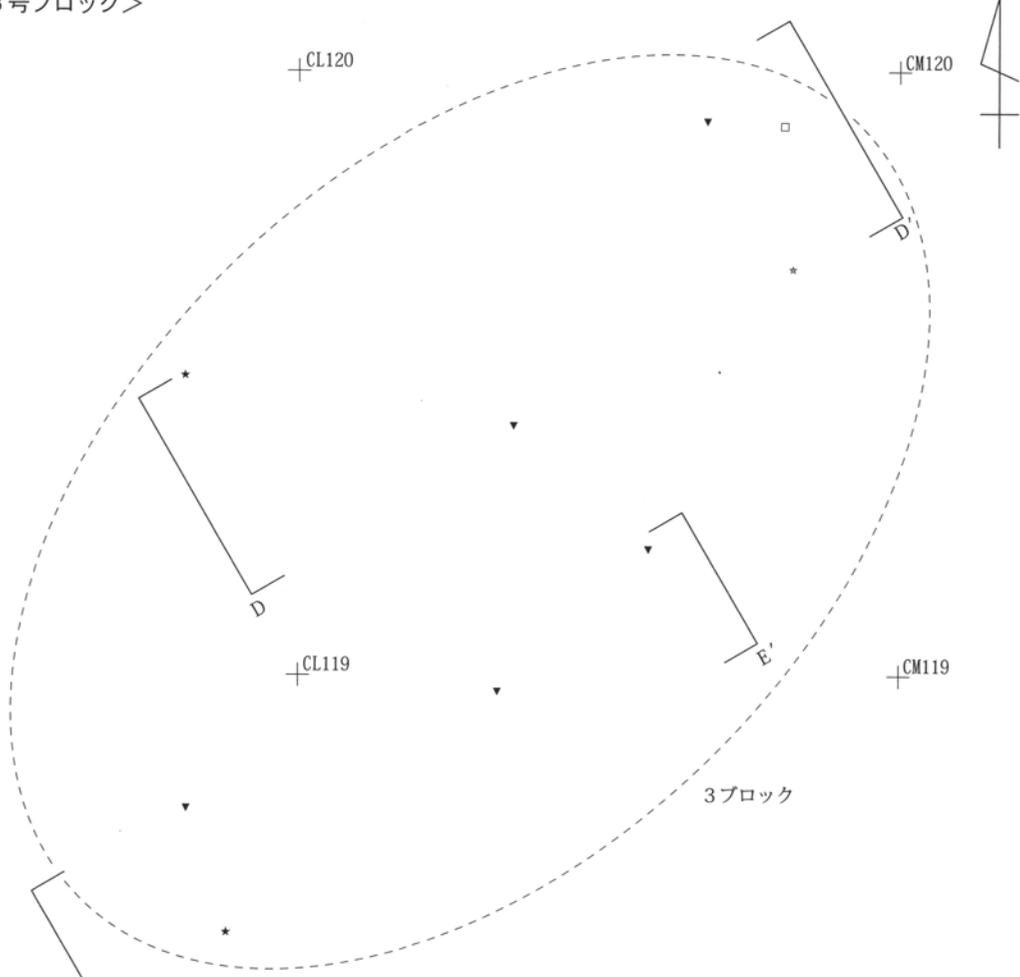


<2号ブロック>



第40図 石器の分布1(1 a地点)

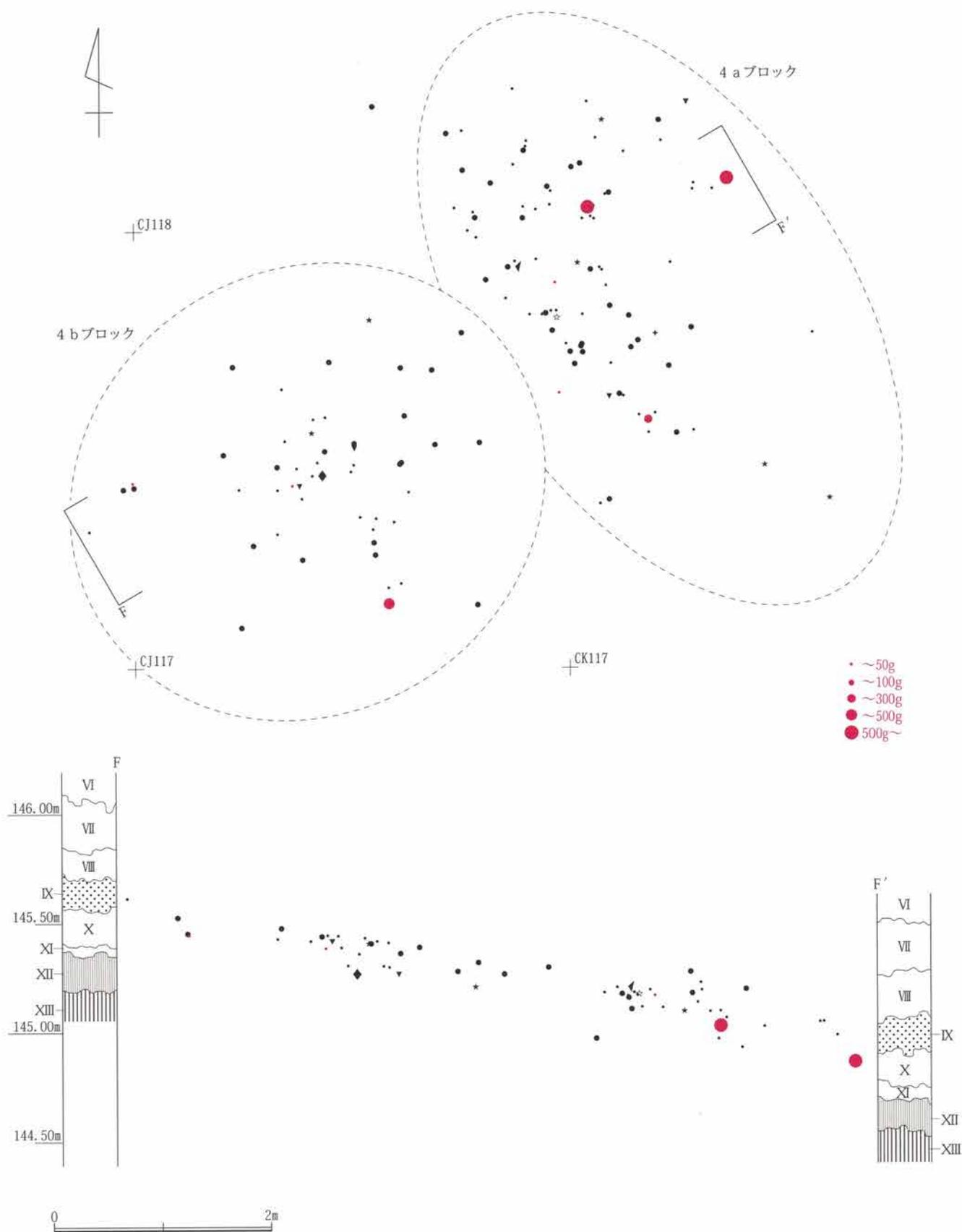
<3号ブロック>



第41図 石器の分布2 (1 a地点)

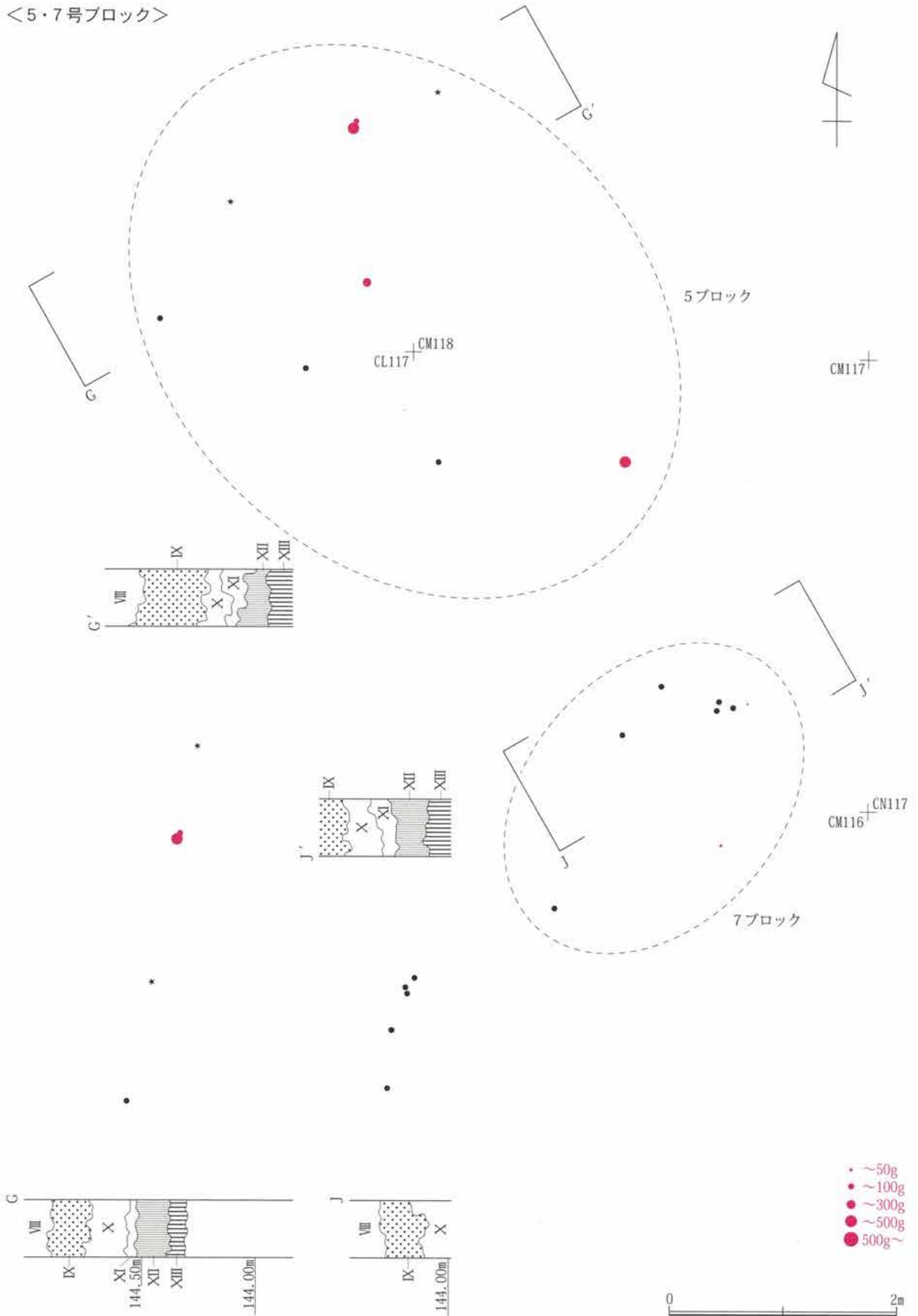
II 調査の成果

<4 a・b号ブロック>



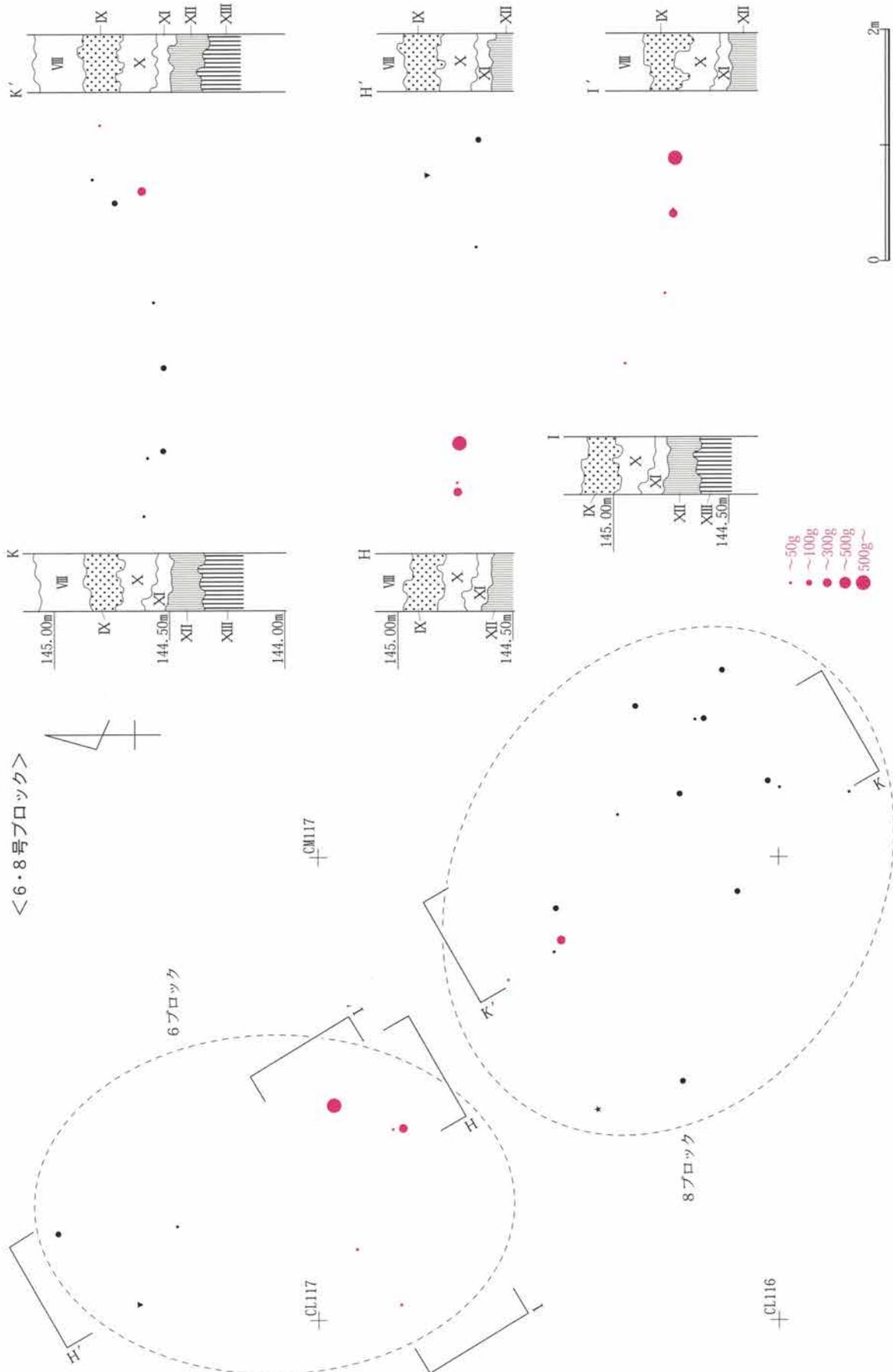
第42図 石器の分布3(1 a地点)

<5・7号ブロック>

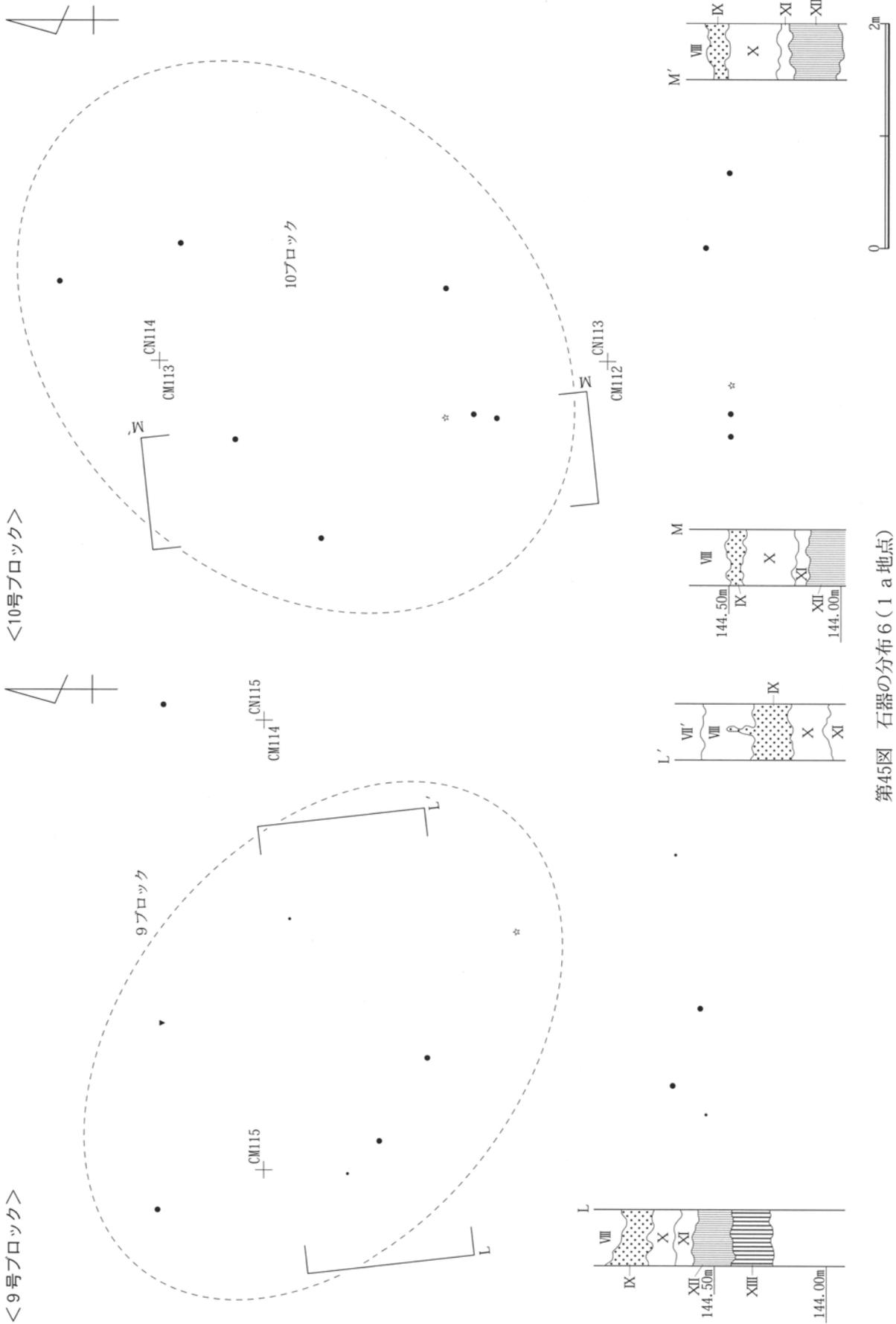


第43図 石器の分布4(1 a地点)

II 調査の成果

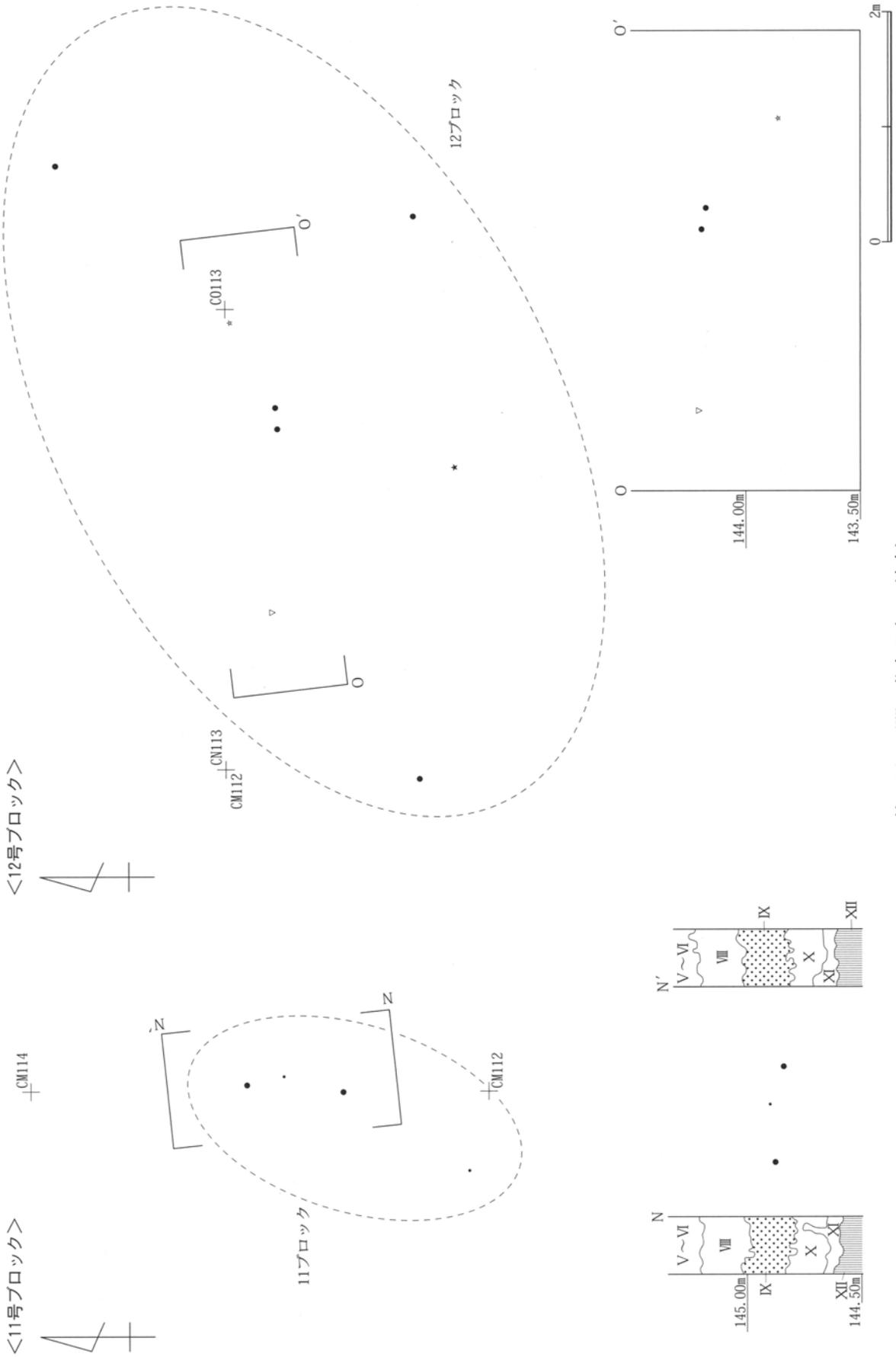


第44図 石器の分布5(1 a地点)

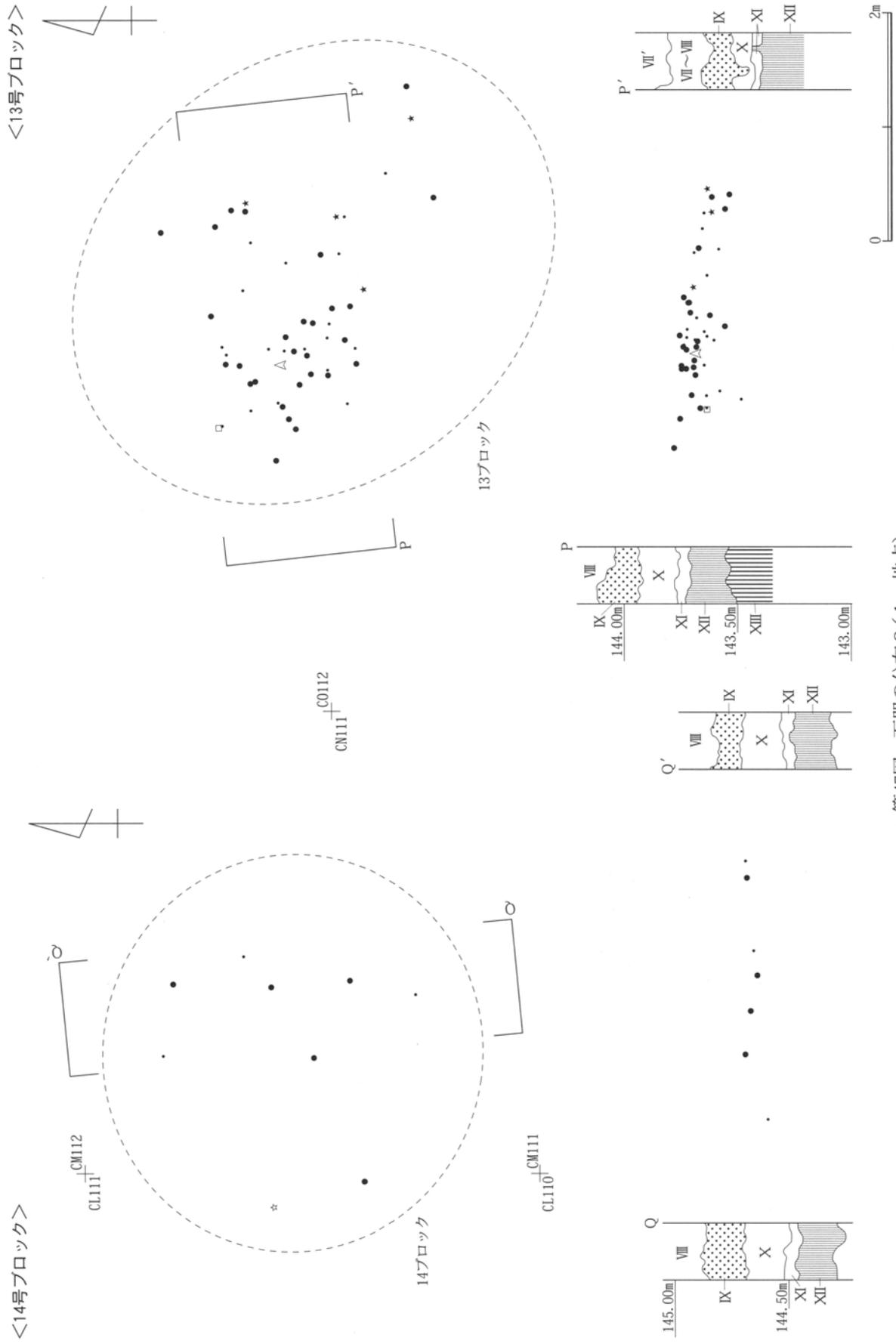


第45図 石器の分布6 (1 a 地点)

II 調査の成果

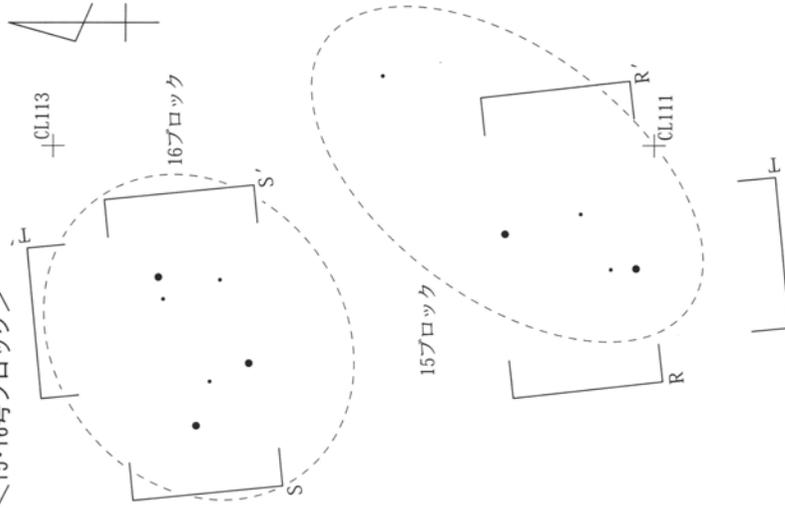


第46図 石器の分布7(1 a地点)

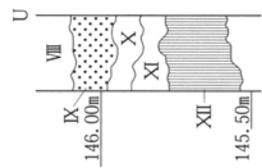
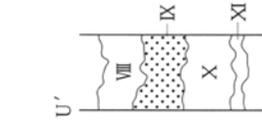
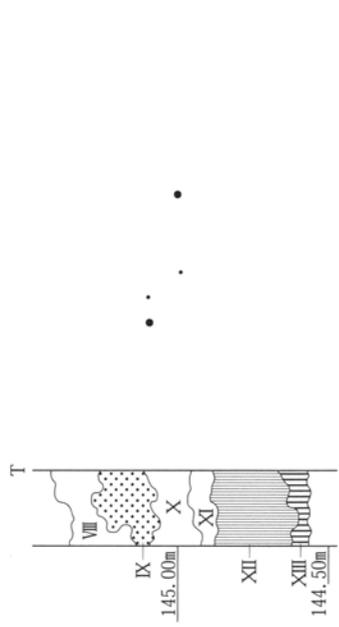
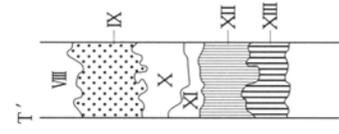
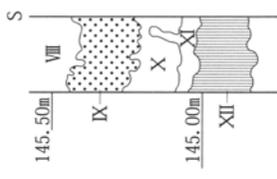
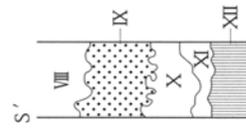
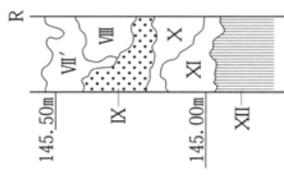
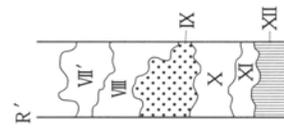
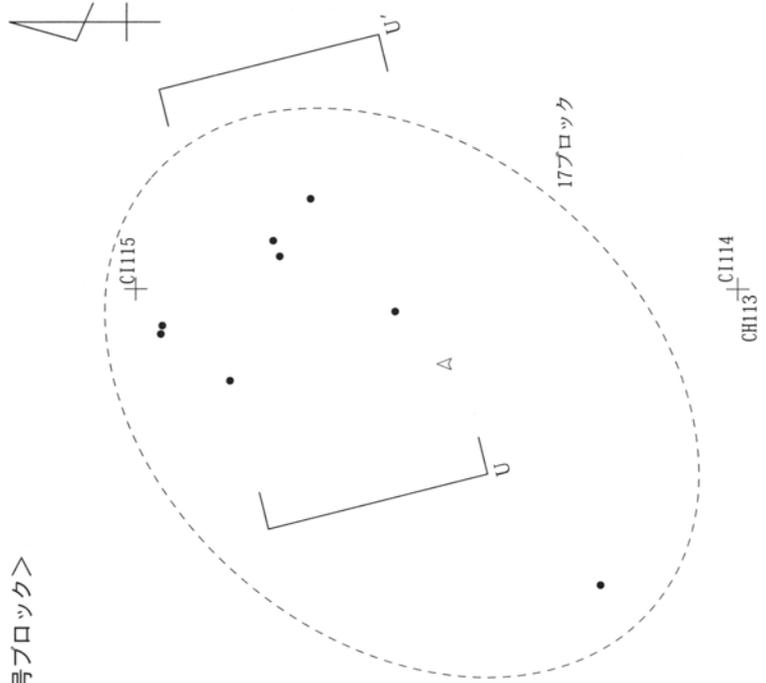


第47図 石器の分布8(1 a地点)

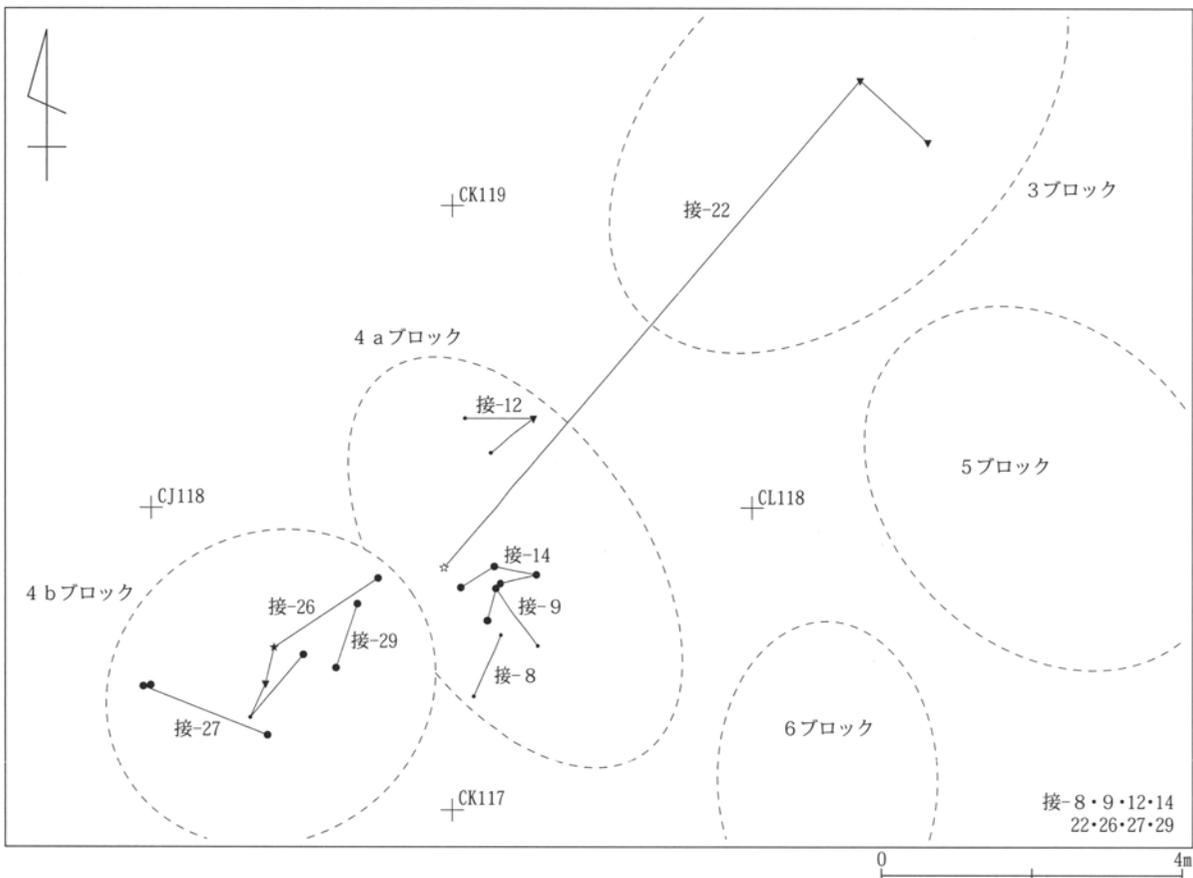
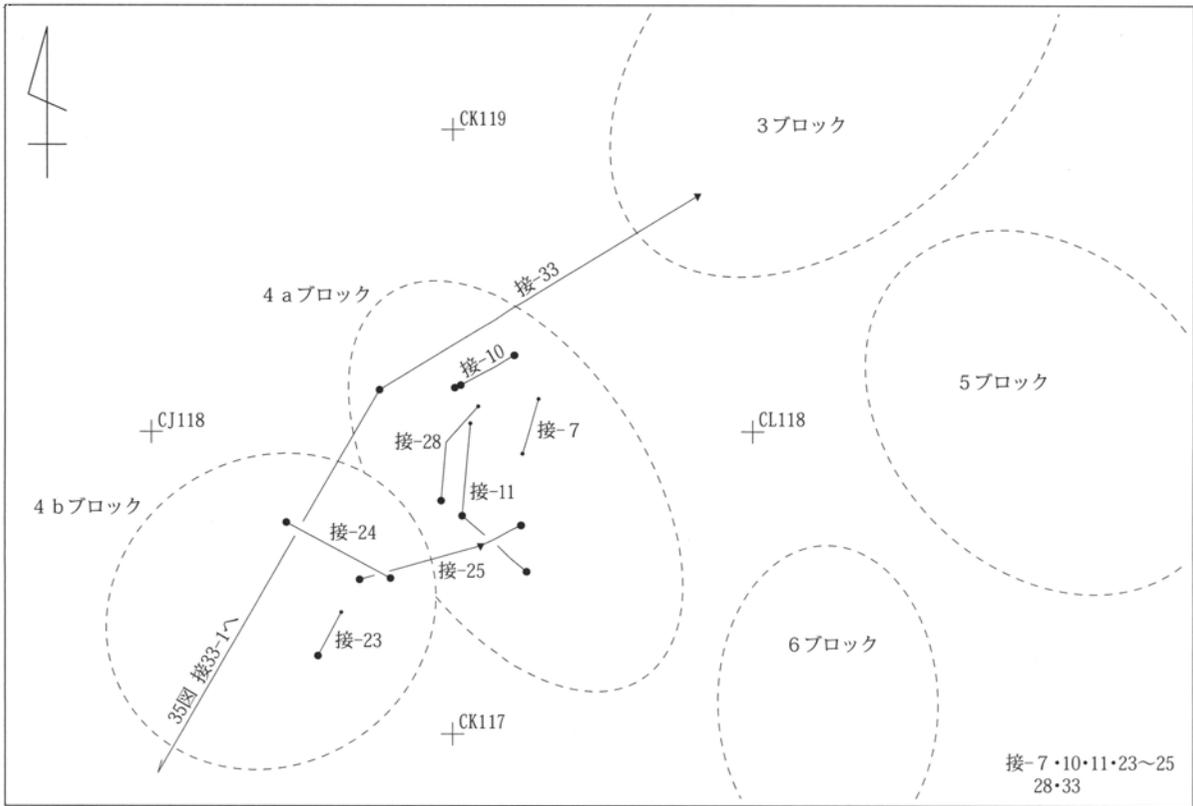
<15・16号ブロック>



<17号ブロック>

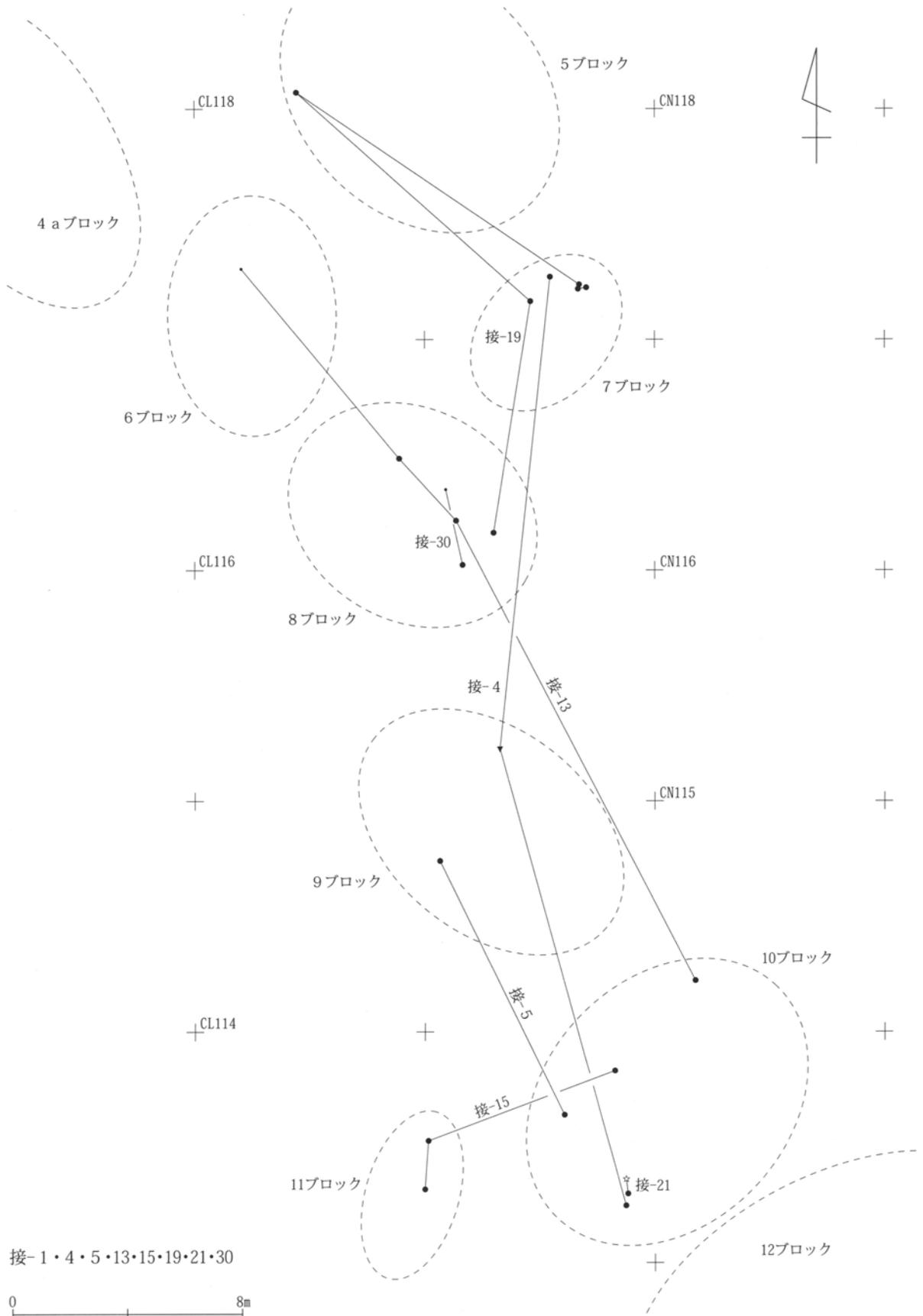


第48図 石器の分布9(1 a地点)

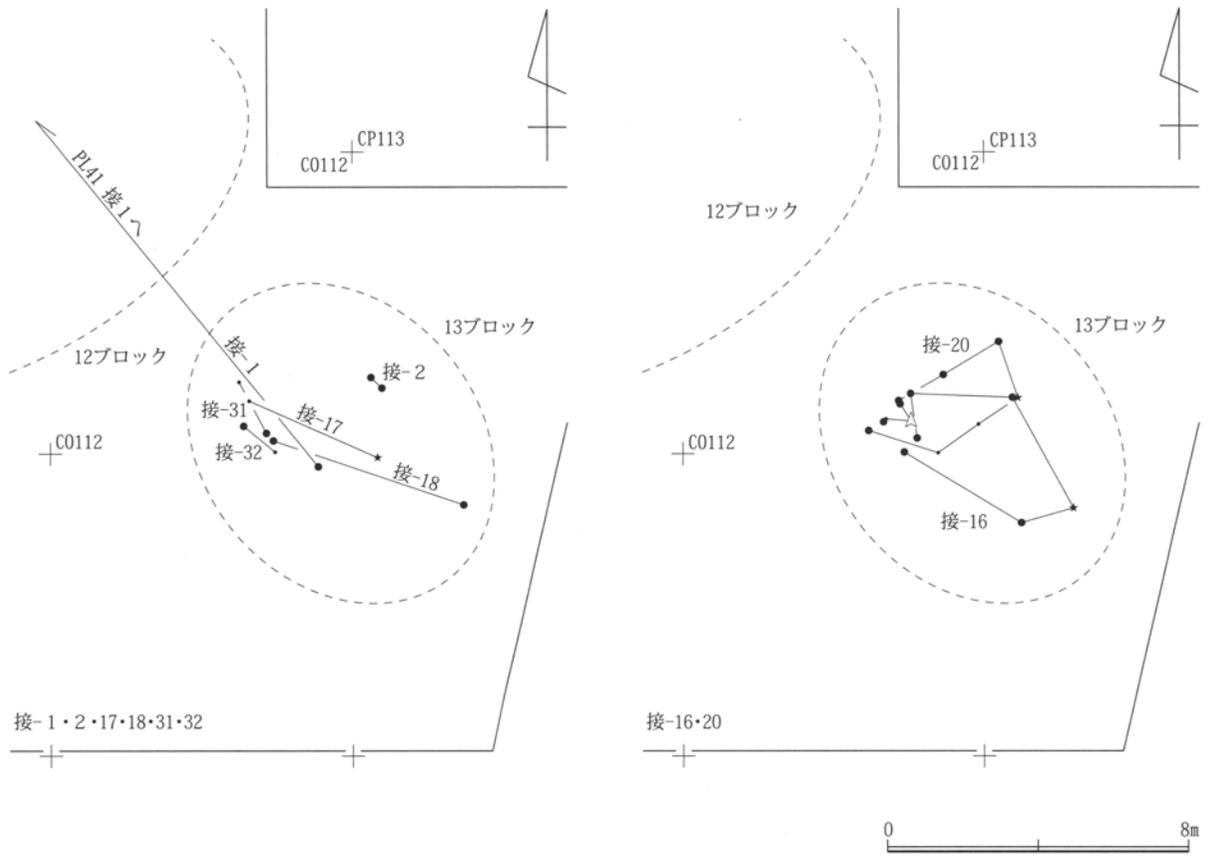


第49図 接合資料の分布1 (1 a地点)

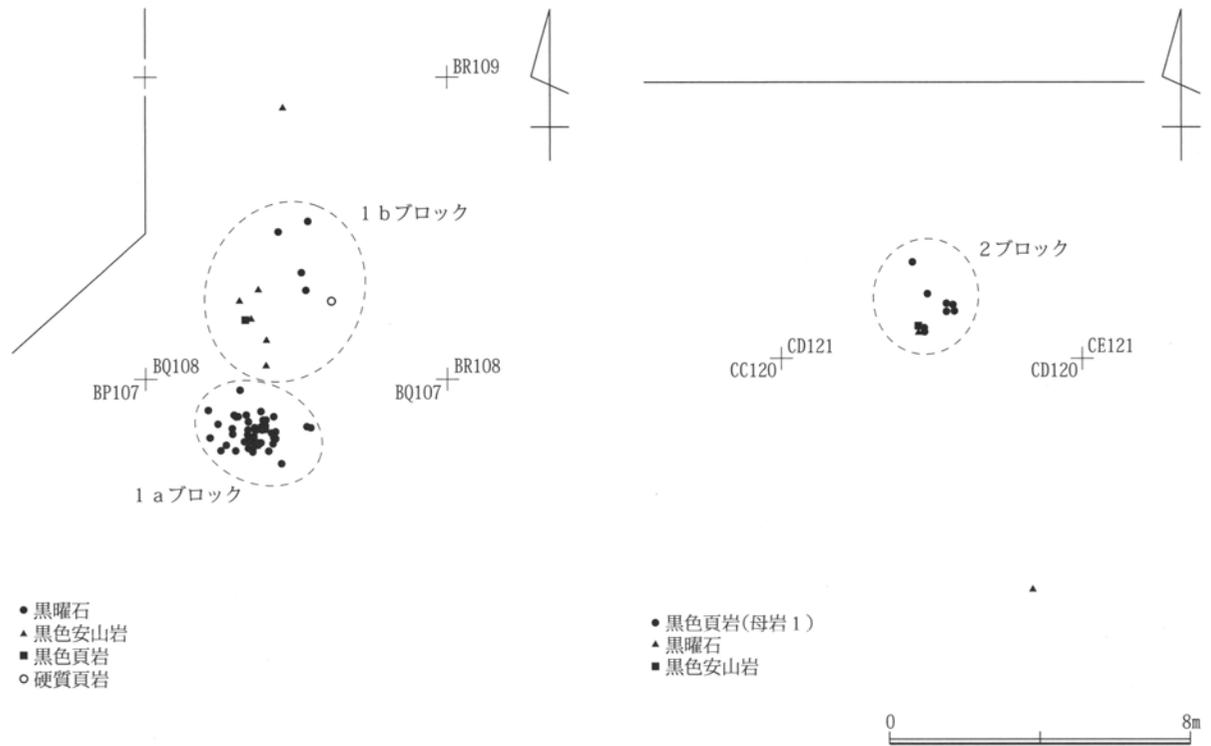
II 調査の成果



第50図 接合資料の分布 2 (1 a 地点)

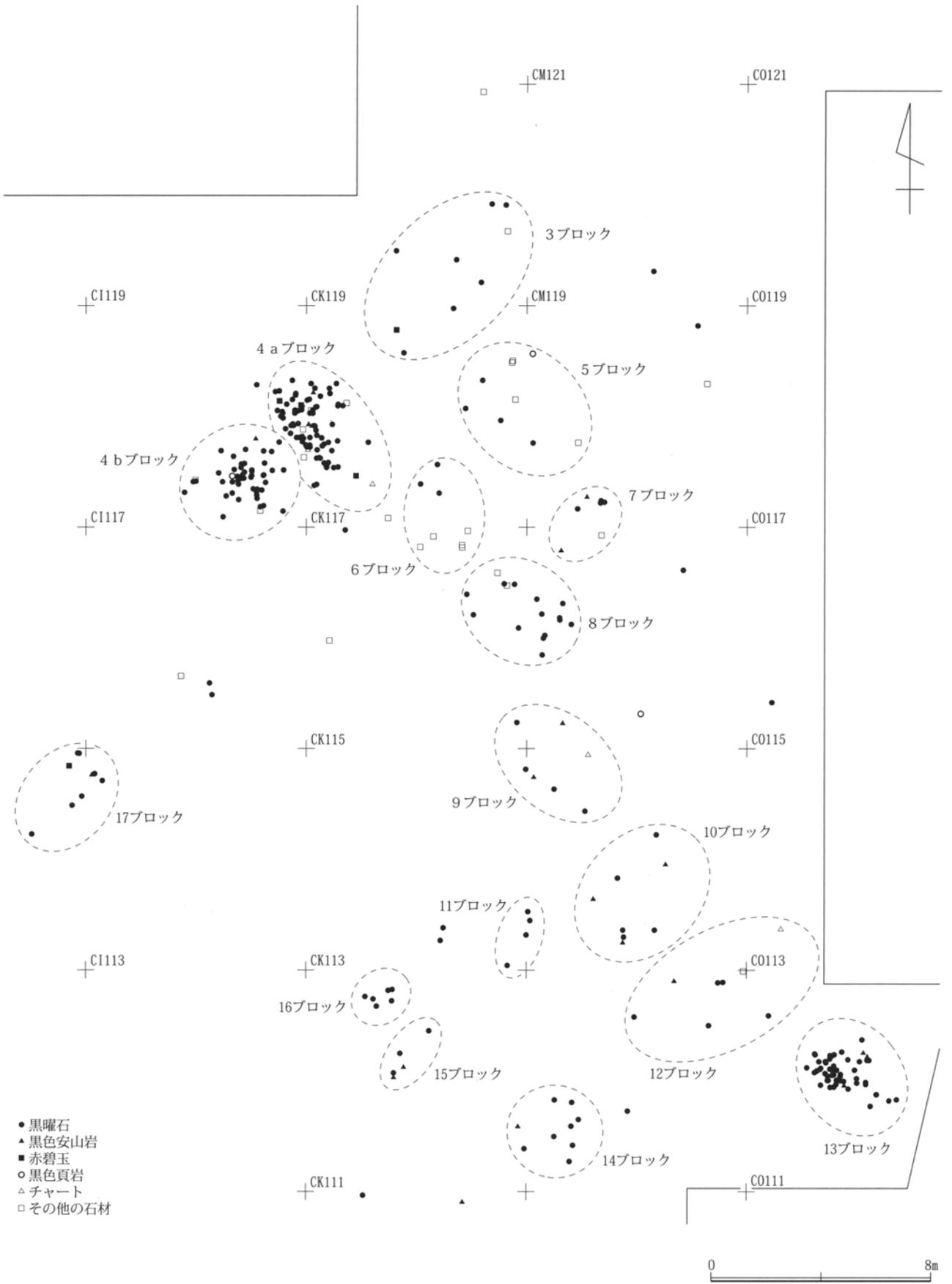


第51図 接合資料の分布3(1 a地点)



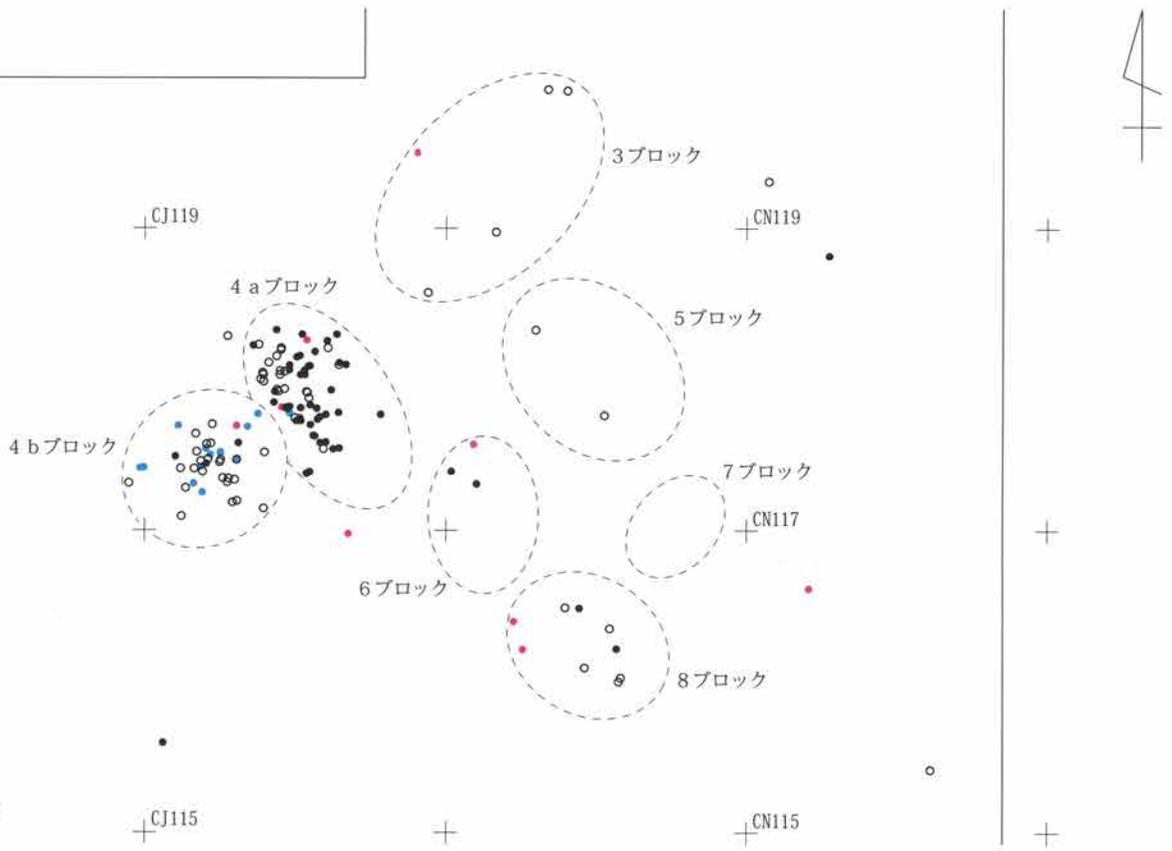
第52図 石材別分布図1(1 a地点)

II 調査の成果

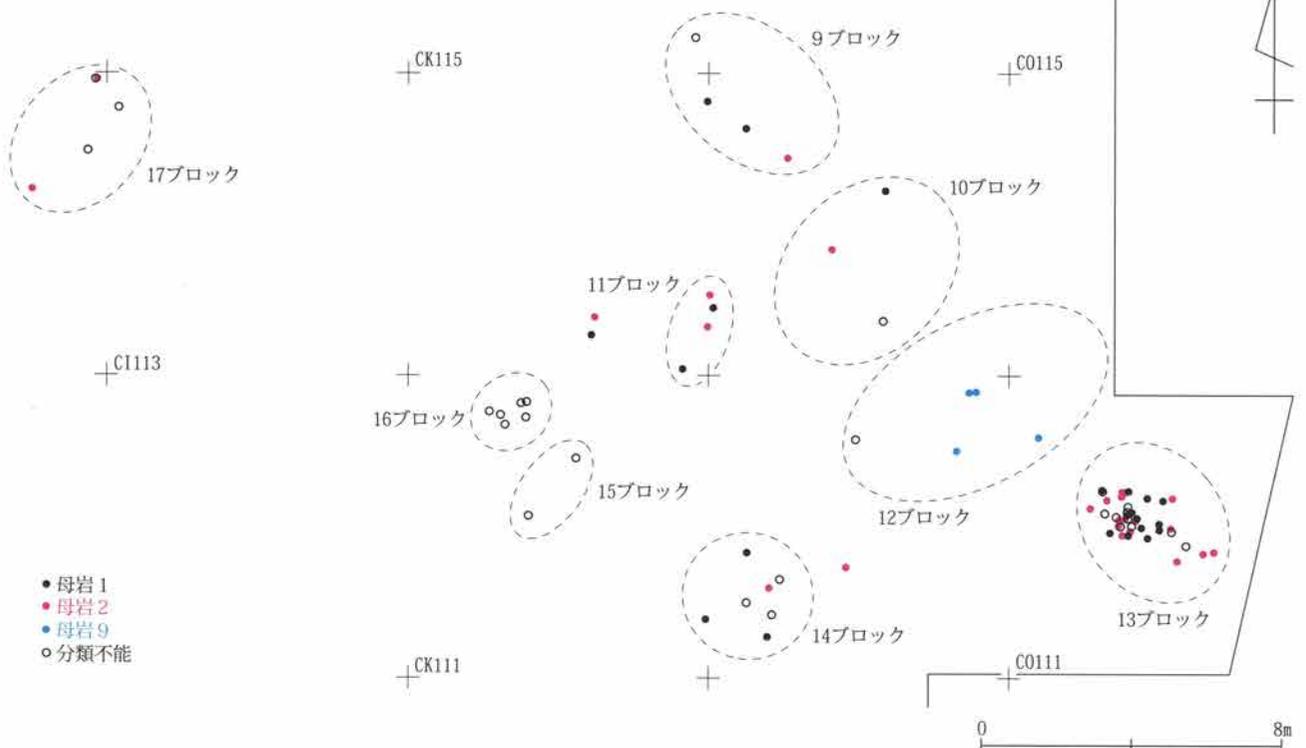


第53図 石材別分布図2 (1 a 地点)

<黒曜石>



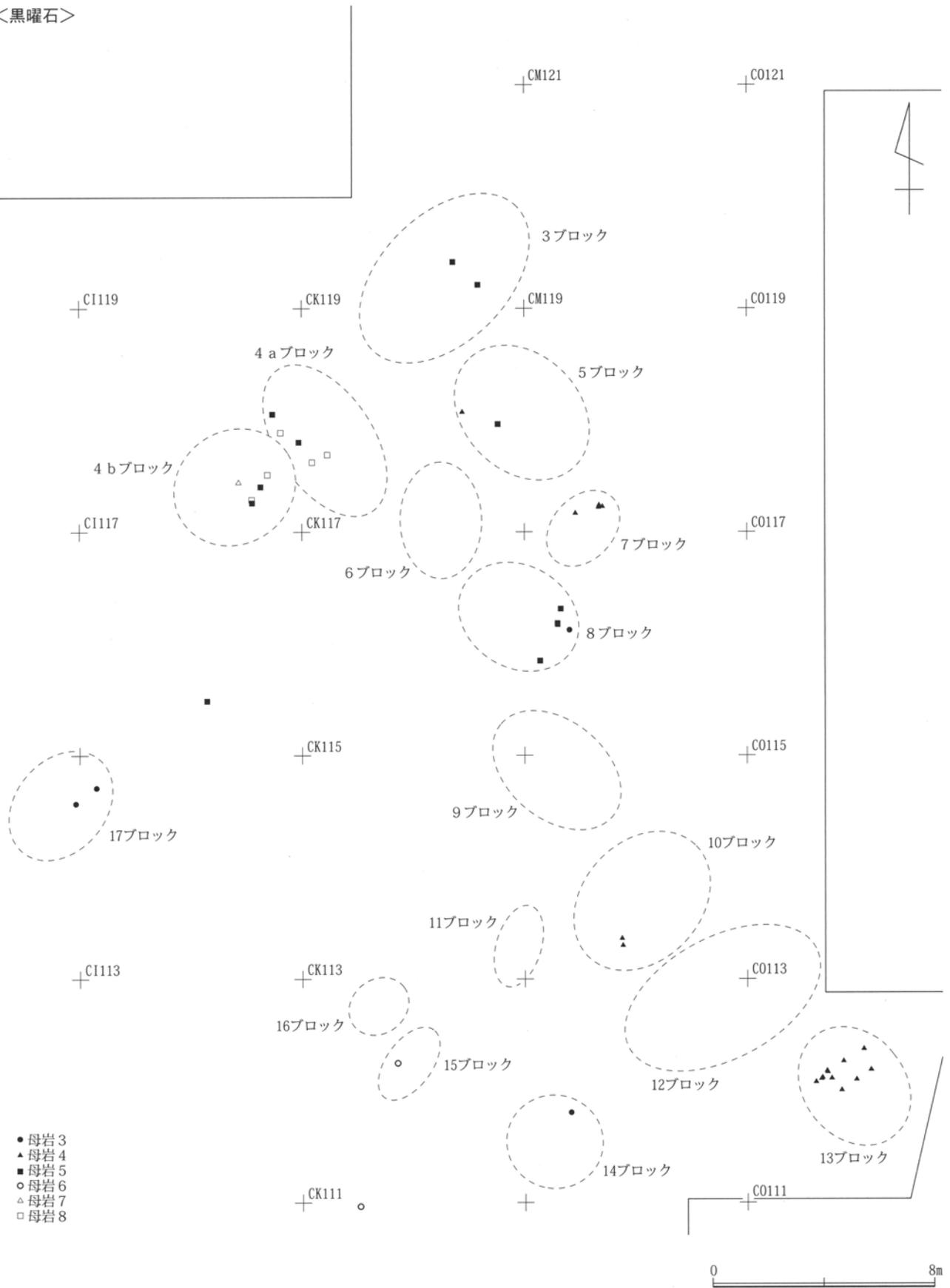
<黒曜石>



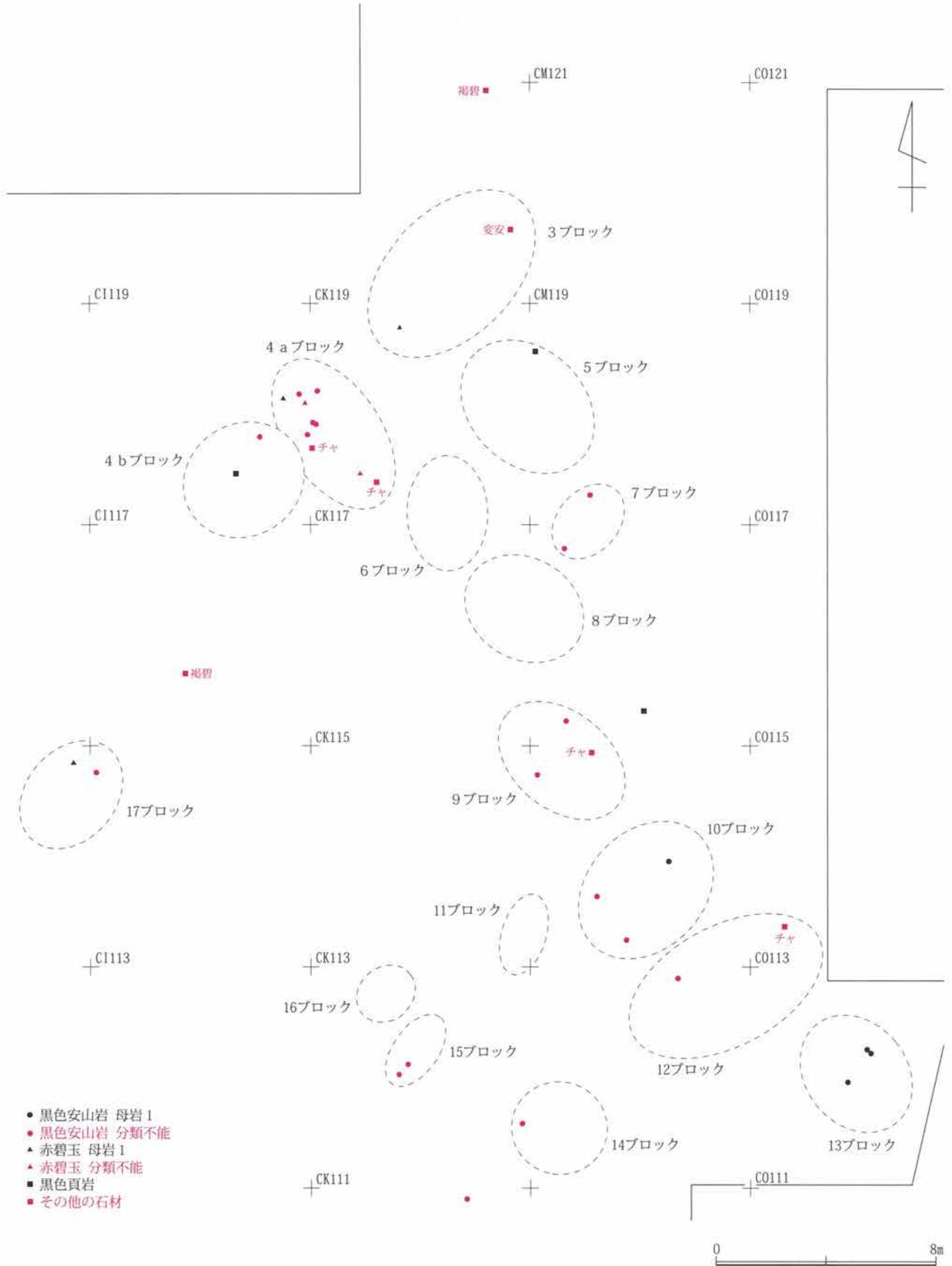
第54図 母岩別分布図1(1a地点)

II 調査の成果

<黒曜石>

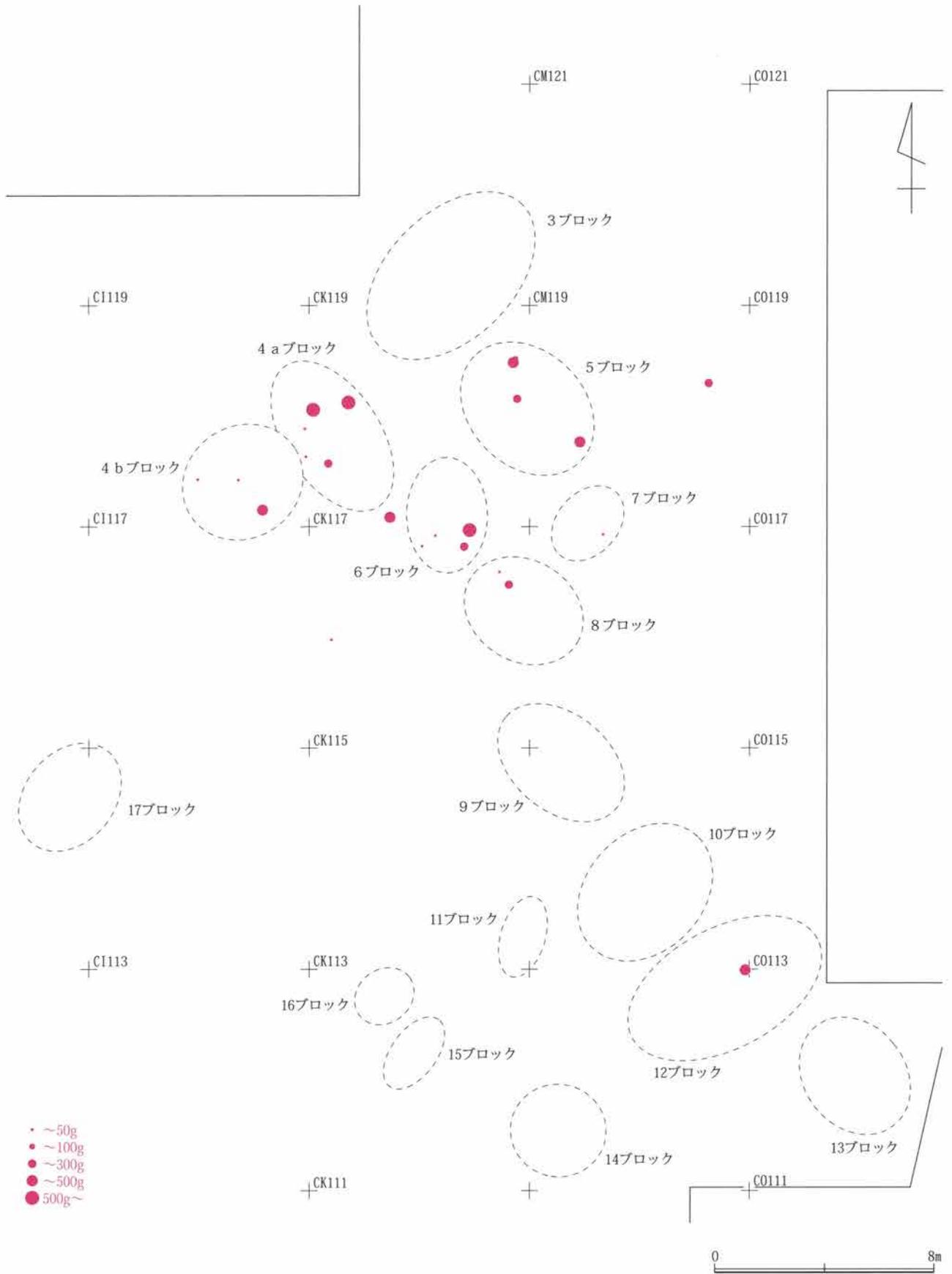


第55図 母岩別分布図2(1a地点)



第56図 母岩別分布図3(1 a地点)

II 調査の成果



第57図 配石重量別分布図(1 a 地点)

(2) 1 b 地点

概要

県道前橋・今井線に近い遺跡北端に位置する。当該期石器群は調査区の北東側に集中しており、丘陵北側斜面から丘陵鞍部に分布していた。その分布範囲は400m²程度で、石器ブロック7・礫群7を確認した。微視的には谷頭に近い丘陵鞍部に位置する石器群と、丘陵斜面に位置する石器群に大別して理解することができる（第58図）。

石器はVIII層から6点、IX層から57点（礫・礫片12点を含む）、X層から98点（礫・礫片74点を含む）、XI層から1点（礫片1）、XII層から3点（礫・礫片3）が出土しており、X層が出土量のピークということになる。出土層位がVIII層となっている石器が特定ブロック（ブロック外の1点を除いて5点が黒曜石

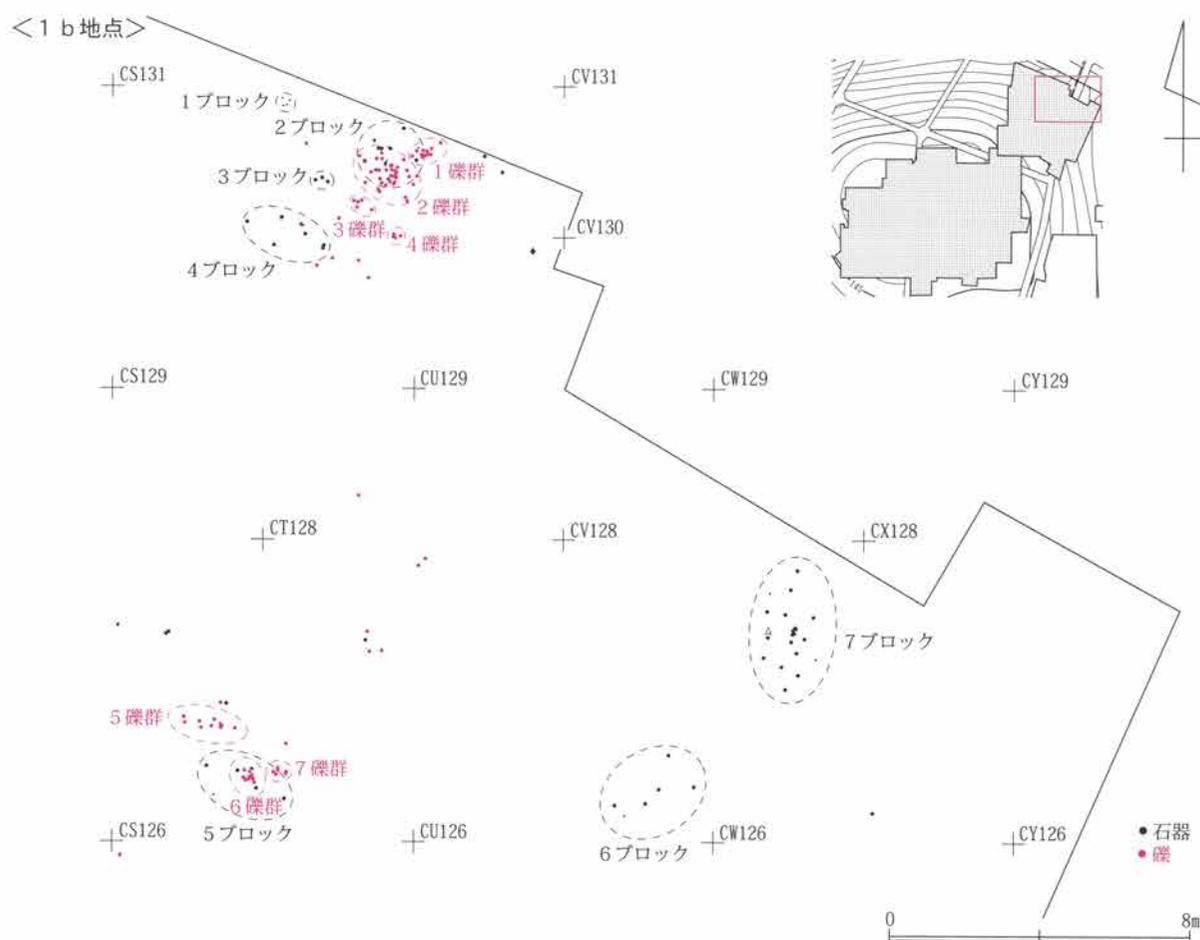
製の剥片類）に偏っており、文化層認定について問題を残している。

石器石材は、黒色頁岩（40点）と黒色安山岩（21点）2種類の石材で約80%を占めている。残り20%が黒曜石（8点）とチャート（6点）で、特に黒曜石の偏在性が指摘されよう。

接合資料はブロック間の接合を2例、ブロック内の接合を4例、併せて6例23点の接合資料を確認した。

出土石器

総計165点の石器（礫・礫片90点を含む）が出土した。碎片を含む剥片類が63点と多数を占めている。石器群には、ナイフ形石器1・切出形石器1・角錐状石器1・削器類として加工痕ある剥片1が組成した。このほか特殊な石器として加工礫を挙げること



第58図 石器と礫の分布(第三文化層 1 b 地点)

II 調査の成果

第15表 器種・石材構成（Ⅲ文化ー1b地点）

	ナイフ	切出形	角錐状	加工痕	加工礫	石核	剥片	碎片	礫	礫片	合計
黒安	0	0	0	0	0	1	19	1	0	0	21
黒頁	1	1	1	1	0	1	25	10	0	0	40
黒曜石	0	0	0	0	0	1	6	1	0	0	8
チャート	0	0	0	0	5	0	1	0	0	0	6
粗安	0	0	0	0	0	0	0	0	27	63	90
合計	1	1	1	1	5	3	51	12	27	63	165

ができる。この加工礫は68点が出土した礫片から抽出したものであり、チャート製の礫片周辺に加工痕を有するというものであった。礫片そのものはローム層中に混入するものであったが、剥離痕が人為的である可能性も否定できなかったため、図示（第59図5・6、PL32参照）した。

ナイフ形石器（第59図1、PL32）

1点のみ出土した。1は、剥片端部が切出状を呈する小形の縦長剥片を選択的に用いる。調製加工は形状修正的で、左側縁については平坦剥離気味に一撃したのち縁辺を微細剥離、右側縁については表裏両面から粗く剥離、石器基部は裏面側から剥離して打面部を除去している。この種の石器に典型的な blunting に比べ、その加工状態は概して粗く、剥片形状に応じて多様な加工を施す角錐状石器の加工法に近い。規格的剥片の剥離や、剥片形状を重視した剥片選択を行うナイフ形石器の製作において、角錐状石器の柔軟な加工法を取り入れるという上記製作手法は、剥片類の効率的消費を実現したはずである。ブロック外の出土。黒色頁岩ー4。

切出形石器（第59図2、PL32）

1点のみ出土した。2は、小形の台形状剥片を用いたもの。石器は左側縁が弧状に、基部側右側縁が内湾気味に加工され、先端側右側縁は未加工の直線的刃部となっており、切出形石器の典型的な形状を備えている。調整加工は右側縁が薄い剥離になっているのに対し、左側縁は急峻となっており、加工量の違いを示している。2号ブロック出土。黒色頁岩。

角錐状石器（第59図3、PL32）

1点のみ出土した。3は、角錐状石器の先端部・破片。横長の幅広剥片を横位に用いて、左右両側縁を

粗く打ち欠き、石器を作出している。同一母岩に分類可能な剥片類が多数出土しており、遺跡内製作の石器と捉えている。7号ブロック出土。黒色頁岩ー2。

加工痕ある剥片（第59図4、PL32）

1点のみ出土している。背面側に礫面を大きく残す幅広剥片を用いる。石器先端の加工は比較的急峻で、連続的である。石器の平面的形態、及び、先端部を断ち切る加工法は「端辺加工」のナイフ形石器に類似している。加工も粗く、ナイフ形石器として分類するのは適切ではないと考え、加工痕ある剥片に便宜的に分類した。2号ブロック出土。黒色頁岩。

加工礫（第59図5・6、PL32）

5点が出土、うち2点を図示した。5は、節理面で剥れた板状の礫片。表裏両面（節理面）とも磨耗して稜が丸くなっているが、上端小口部分の剥離面はシャープである。この部分の剥離は、刃部を作出しているようには見えないものの、節理面に接した小剥離痕は明瞭な打点を有していた。CT-127G出土。チャート。6は、礫片の小口部分に小剥離痕を有するもの。この部分の剥離は頭部調製のだが、現状ではその加工意図について判断できなかった。CU-127G出土。チャート。残る3点についても大なり小なり小剥離痕を確認しており、出土地点（第58図を参照）も限定的であり、敢えて取り上げた。

整理作業では、発掘調査で取り上げた石器から202点の自然礫を分離、整理対象から省いた。調査時にも相当数の自然礫を廃棄しているため、データ化は困難だが、整理対象から省いた自然礫は、粗粒輝石安山岩・チャート・溶結凝灰岩・ホルンフェルス等からなること、礫形状は破碎礫から完形礫までさまざまであること、礫サイズは1cm未満の礫片から最

大6cmの円礫(平均で3cm程度)まで多様である。1tを超える巨礫が地面に顔を出す経緯については山体崩壊や浸食が原因している可能性が高い。こうして基盤層を離れた礫・礫片類が周氷河現象で移動、暗色帯から出土したのではないだろうか。ローム層中から出土する礫・礫片については、結論から言えば丘陵の基盤を形成した火砕流堆積物中の構成礫が二次的に移動したものであり、取り上げた2点の加工礫は、地面に顔を出していた礫を意識的に拾い加工したものでだろうと想定している。

石核 (第59図7~9、PL32)

3点が出土した。第59図7は、礫面を大きく残す板状剥片を用いたもの。裏面側の礫面を打面に、小形・幅広剥片を石核の上下両端で剥離している。石核下端右下の折断面は剥片剥離を開始した時点には存在した可能性が高い。4号ブロック出土。黒色安山岩-1。8は、サイコロ状を呈した小形石核。頻りに90°打面転移を行い、小形剥片を剥離する。類似母岩が見られないことから搬入石器と理解している。極小化(高さ2cm・幅2.4cm・厚さ1.2cm)するまで石核を消費したうえ、さらに消費しようとしたのであろうが、これ以上剥片は剥離しなかったようである。ブロック外の出土。黒曜石。9は、正面・左の平坦剥離面を打面に剥離した幅広剥片を用いる。裏面側で小形剥片を剥離したのち、石核を90°回転、剥離を試みている。この部分(石核右下)の剥離は執拗で、同じ箇所を繰り返し打撃しており、その正面観はノッチ状になっている。削器的機能を意識した剥離であるかもしれない。2号ブロック出土。黒色頁岩。

剥片 (第60・61図、PL32・33)

51点が出土した。出土した剥片は大小さまざまだが、剥片形状は概して幅広である。ここでは、14点の剥片類を図示した。

第60図1・5・6は、黒色頁岩製の小形剥片。背面側の剥離面構成からみて頻繁な打面転移が想定され、また、剥片を連続剥離する場合も左右に打点を大きく振り剥離したことが読み取れる。5は縦位折

断した、6は左右両辺から斜め折断した小形剥片。1はブロック外の出土。5・6は、それぞれ5・6号ブロックから出土した。2~4・7は黒曜石製の小形剥片。剥離様相は不明だが、黒色頁岩製の剥片類と同様の剥離手法によったものだろう。母岩的には、2・3を黒曜石-2、4を黒曜石-1として捉えた。7は背面側に礫面を残したもので、黒曜石-3に分類。4点とも6号ブロックから出土している。8は、縦位・横位折断した小形剥片(接-36)。端部に平坦な石核底面を取り込んでおり、本来的には台形状を呈する幅広剥片であった可能性が高い。横位破損は斑晶が原因している。2号ブロック出土。黒色安山岩-2。9・10は、平坦打面から剥離した幅広剥片。2点とも背面に礫面を残している。9はブロック外の、10は4号ブロックの出土。

第61図1は、縦位・横位折断した縦長剥片(接-35)。背面側に礫面を大きく残していることから石核消費の初期段階に剥離した可能性が高い。3・4号ブロック間の接合。黒色安山岩-1。2~4は、黒色頁岩製の幅広剥片。2は2号ブロックから、3は5号ブロック、4は4号ブロックから出土。

接合資料

6例21点(グリッド出土の剥片との接合1例を含む、第63・65図を参照)が接合した。石器類は75点が出土しており、接合率は28%ということになる。接合資料-37(第62図、PL33)

9点の剥片からなる接合資料。長さ2.5cm・幅8.5cmを測る盤状石核を用いる。接合資料の正面には礫面を残す小形剥片が接合しており、石核消費の初期段階を示している。剥片剥離は打面と作業面を固定して、左右に打点を大きく振り小形剥片を剥離している。7号ブロック出土。黒色頁岩。

1→2→○3→○4→○5→○6→○7→8→9
接合資料-34(第62図、PL33)

3点の剥片からなる接合資料。厚さ4cmほどの盤状石核を石核素材に用いる。剥片3の打面が剥離で弾け飛んでいるため不明であるが、剥片2と90°剥離

II 調査の成果

軸が異なっているようで、作業面のみ移動する剝離が想定できよう。3・4号ブロック間で接合。黒色安山岩-1。

1→○○○→2⇒○○○→3

接合資料-54 (第62図、PL33)

角錐状石器1・剝片1からなる接合資料。1は、幅広剝片を素材に用い、加工段階途中で破損したものと捉えた。破損した器体(下部)の再加工を試みたようであるが、実態については断定できない。7号ブロック出土。黒色頁岩-2。

第16表 ブロック・礫群別石材構成 (Ⅲ文化-1b地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	チャート	粗安	合計
1号ブロック	0	4	0	0	0	4
2号ブロック	3	7	0	0	0	10
3号ブロック	3	0	0	0	0	3
4号ブロック	6	2	0	0	0	8
5号ブロック	2	4	0	0	0	6
6号ブロック	0	0	6	0	0	6
7号ブロック	4	19	0	0	0	23
ブロック外	3	4	2	1	0	10
1号礫群	0	0	0	0	11	11
2号礫群	0	0	0	0	35	35
3号礫群	0	0	0	0	5	5
4号礫群	0	0	0	0	3	3
5号礫群	0	0	0	0	10	10
6号礫群	0	0	0	0	9	9
7号礫群	0	0	0	0	6	6
礫群外	0	0	0	5	11	16
合計	21	40	8	6	90	165

第17表 ブロック・礫群別器種構成 (Ⅲ文化-1b地点)

	ナイフ	切出形	角錐状	加工痕	加工礫	石核	剝片	碎片	礫	礫片	合計
1号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0
2号ブロック	0	1	0	1	0	1	6	1	0	0	10
3号ブロック	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3
4号ブロック	0	0	0	0	0	1	7	0	0	0	8
5号ブロック	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	6
6号ブロック	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	6
7号ブロック	0	0	1	0	0	0	18	4	0	0	23
ブロック外	1	0	0	0	0	0	7	1	0	0	9
1号礫群	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
2号礫群	0	0	0	0	0	0	0	0	4	10	14
3号礫群	0	0	0	0	0	0	0	0	1	31	32
4号礫群	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4
5号礫群	0	0	0	0	0	0	0	0	7	3	10
6号礫群	0	0	0	0	0	0	0	0	7	3	10
7号礫群	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
礫群外	0	0	0	0	5	0	0	0	6	5	16
合計	1	1	1	1	5	3	51	12	27	63	165

石器と礫の分布

第Ⅲ文化層に帰属する石器群が調査区の北東側に分布した。石器群の分布域は約400㎡と狭く、石器ブロック7・礫群7が分布した。これらは3群に大別が可能で、3群中2群で石器ブロックと礫群が重複分布していた。

1号ブロック (第63図)

位置 丘陵北東側緩斜面 (CT-130G)

規模 径0.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX層～X層 (X層から3点出土)

出土点数 4点

器種構成 碎片4

石材構成 黒色頁岩4

その他 4点とも総て同一母岩に分類した。

2号ブロック (第63図)

位置 丘陵北東側緩斜面 (CT-130G)

規模 長径1.4m・短径1.1m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX層～X層 (X層から6点出土)

出土点数 10点

器種構成 切出形石器1、加工痕ある剝片1、石核1、剝片6、碎片1

石材構成 黒色頁岩7、黒色安山岩3

3号ブロック (第63図)

位 置 丘陵北東側緩斜面 (CT-130G)
 規 模 長径0.4m・短径0.2m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層～X層 (X層から2点出土)
 出土点数 3点
 器種構成 剥片3
 石材構成 黒色安山岩3
 その他 4号ブロックと接合関係を有する接合資料2例を確認。

4号ブロック (第63図)

位 置 丘陵北東側緩斜面 (CT-129・130G)
 規 模 長径2.2m・短径0.8m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層～X層 (X層から5点出土)
 出土点数 8点
 器種構成 石核1、剥片7
 石材構成 黒色頁岩2、黒色安山岩6
 その他 3号ブロックと接合関係を有するもの2例を確認。

5号ブロック (第63図)

位 置 丘陵北東側緩斜面 (CS・CT-126G)
 規 模 長径2.2m・短径1.0m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX層～X層 (X層から5点出土)
 出土点数 6点
 器種構成 剥片5、碎片1
 石材構成 黒色頁岩4、黒色安山岩2

6号ブロック (第65図)

位 置 丘陵北東側緩斜面 (CV-126G)
 規 模 長径2.0m・短径1.1m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 VIII層～IX層 (VIII層から5点出土)
 出土点数 6点
 器種構成 剥片5、碎片1
 石材構成 黒曜石6
 その他 現場所見では、石器はVIII層から最も多く出土している。

7号ブロック (第65図)

位 置 丘陵北東側緩斜面 (CW-127G)
 規 模 長径3.1m・短径1.5m
 分布状態 やや集中して分布する。
 出土層位 IX層
 出土点数 23点
 器種構成 角錐状石器1、剥片18、碎片4
 石材構成 黒色頁岩19、黒色安山岩4

1号礫群 (第66図)

位 置 調査区北東・丘陵鞍部 (CU-130G)
 規 模 長径0.88m・短径0.3m
 分布状態 2号ブロックに重複、比較的集中して分布する。
 出土層位 X層
 出土点数 11点
 石材構成 粗粒輝石安山岩11
 接合資料 2例4点 (1例が2号礫群と接合)
 その他 礫重量100g以下の礫が6点と半数を占める。礫の最大重量は761gを測る。11点中10点が破損礫。

2号礫群 (第66図)

位 置 調査区北東・丘陵鞍部 (CT-130G)
 規 模 長径1.8m・短径1.1m
 分布状態 2号ブロックに重複、集中分布する。
 出土層位 IX層・X層・XII層
 出土点数 35点
 石材構成 粗粒輝石安山岩35
 接合資料 8例26点
 その他 27点がX層から出土。礫重量100g以下の礫が35点中27点を占める。礫の最大重量は519g。大部分が破損面を有する亜角礫。円礫は見られない。

3号礫群 (第66図)

位 置 丘陵北東・丘陵鞍部 (CT-130G)
 規 模 長径0.6m・短径0.2m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X・XI層
 出土点数 5点

II 調査の成果

石材構成 粗粒輝石安山岩 5
接合資料 2例4点
その他 礫の最大重量は642gを測る。この礫を除く4点が受熱。

4号礫群 (第66図)

位置 丘陵北東・丘陵鞍部 (CT-130G)
規模 径0.2m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 X層
出土点数 3点
石材構成 粗粒輝石安山岩 3
接合資料 1例3点
その他 礫重量は1点が30gと小形、残る2点は300g前後。3点とも受熱。亜角礫・破損礫。

5号礫群 (第66図)

位置 丘陵北東・丘陵鞍部 (CS-126G)
規模 長径1.5m、短径0.4m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 X層
出土点数 10点
石材構成 粗粒輝石安山岩10
接合資料 1例3点
その他 礫重量は500~1000gと大形。礫形状は角礫~亜角礫。円礫含まれず。

6号礫群 (第66図)

位置 調査区北東・丘陵斜面 (CS-126G)
規模 長径0.4m・短径0.3m
分布状態 集中分布する。
出土層位 IX・X層
出土点数 9点
石材構成 粗粒輝石安山岩 9
接合資料 3例8点 (1例が7号礫群と接合)
その他 礫重量は100~500g。200g台の礫が多い。

7号礫群 (第66図)

位置 調査区北東・丘陵斜面 (CT-126G)
規模 長径0.4m・短径0.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX・X層

出土点数 6点

石材構成 粗粒輝石安山岩 6

接合資料 1例3点

その他 礫形状は亜角礫~亜円礫。礫重量は100g未満が4点。

接合資料の分布

6例23点の接合資料を確認した。折断剥片類の接合例が半数を占めており、概して剥片生産は低調であったようである。7ヶ所の石器ブロックは視覚的に3群に分離が可能で、各群を跨ぐ接合関係は確認できなかった。

調査区北端に位置する一群。1~4号ブロックが該当、礫群の分布域と重複する。接合資料3例(接-34~36、第63図を参照)を確認した。3例とも黒色安山岩の接合資料である。黒色安山岩は総計12点と少なく、全般的に同種石材を用いた剥片の生産量は概して低調であった。

同じく、調査区北端に位置する石器群。6・7号ブロックが該当する。礫群は伴わず、孤立気味に分布する。接合資料は、2例13点(接-37・54、第65図を参照)を確認した。2例とも7号ブロックの出土であり、母岩を同じくする(黒色頁岩-2)。

調査区北端からやや内側に入った、丘陵斜面部に位置する石器群。5号ブロックが相当する。この地点には3基の礫群(5~7号)が重複分布していたが、接合資料はなく、孤立気味である。

母岩別資料の分布

4種類の石器石材(第15表を参照)を確認した。単独出土したチャートを除く、それぞれ3種類の石材に母岩を認めた。

黒曜石 (第67図右)

母岩3種類を認定した。ob1~3は3例とも6号ブロックの出土であるが、その形状は不良剥片の類に近い。

ob-1 表裏両面に層理面を有するもの。黒色・ガラス透明で、層理面を除けば良質。接合資料2例（接-38・39）からなる。本来的には、1枚の板状剥片に還元可能と捉えている。蓼科産。

ob-2 小剥片2点からなる母岩別資料。1点は横位折断剥片だが比較的形状が整っていること、残る1点も幅広だが頭部調整を行う打面管理の行き届いた剥片であり、少量の剥片剥離作業が想定可能となっている。蓼科産。

ob-3 礫面（風化剥離面、リングの痕跡あり）を大きく残す黒色・ガラス透明の黒曜石。母岩構成点数は3点と少量で、うち1点にはob-1と同様な層理面（幅2・3mm）を有する。資料中には打面調整剥片を含む。蓼科産。

母岩分類不能な黒曜石 5号礫群北側（CS-126G、CS-127G）に2点の黒曜石が分布した。黒色で透明感はなく、斑晶を多量に含む。石核1（第59図8）と剥片1（第60図9）が出土したが、剥片に比べて石核の斑晶量は少なく、やや良質といった石材観を呈し、周辺域に同種黒曜石はまったくないことから、搬入石器と捉えた。畑宿産。

黒色頁岩（第67図左）

母岩4種類を確認した。黒頁-1が1号ブロックに、黒頁-2が7号ブロックに集中分布する傾向を示していた。

黒頁-1 3点中2点が剥片端部に石核？底面を取り込んだ小片であった。打面角は120°に近く、この打面と剥片端部は並行していた。2点とも高さ7mmを測る小片であることから小形石器の加工に伴う小片である可能性が想定されよう。同一母岩の出土量が少量であるということ踏まえれば、石器の刃部作出に伴う小片（調整剥片？）であるという可能性を想定しておきたい。

黒頁-2 石核底面を部分的に取り込んだ典型的な幅広剥片の接合例（接-37）と角錐状石器の接合例（接-54）からなる。

黒頁-3 4号ブロックに2点が分布した。2点とも大形剥片であり、遺跡内には剥離痕跡は見られ

ないことから、搬入石器と捉えた。

黒頁-4 2号ブロックに1点・ブロック外（CT-129G）に1点（加工痕ある剥片、第59図1）が分布した。ほぼ単独出土に近く、破片類もないことから搬入石器である可能性が強い。

黒頁-5 調査区北端の2号ブロック東側に分布した。2点とも不良剥片類であり、この地点で剥片生産があった可能性を示唆しているが、分布は調査区外に延びており、詳細は不明。

黒色安山岩（第67図右）

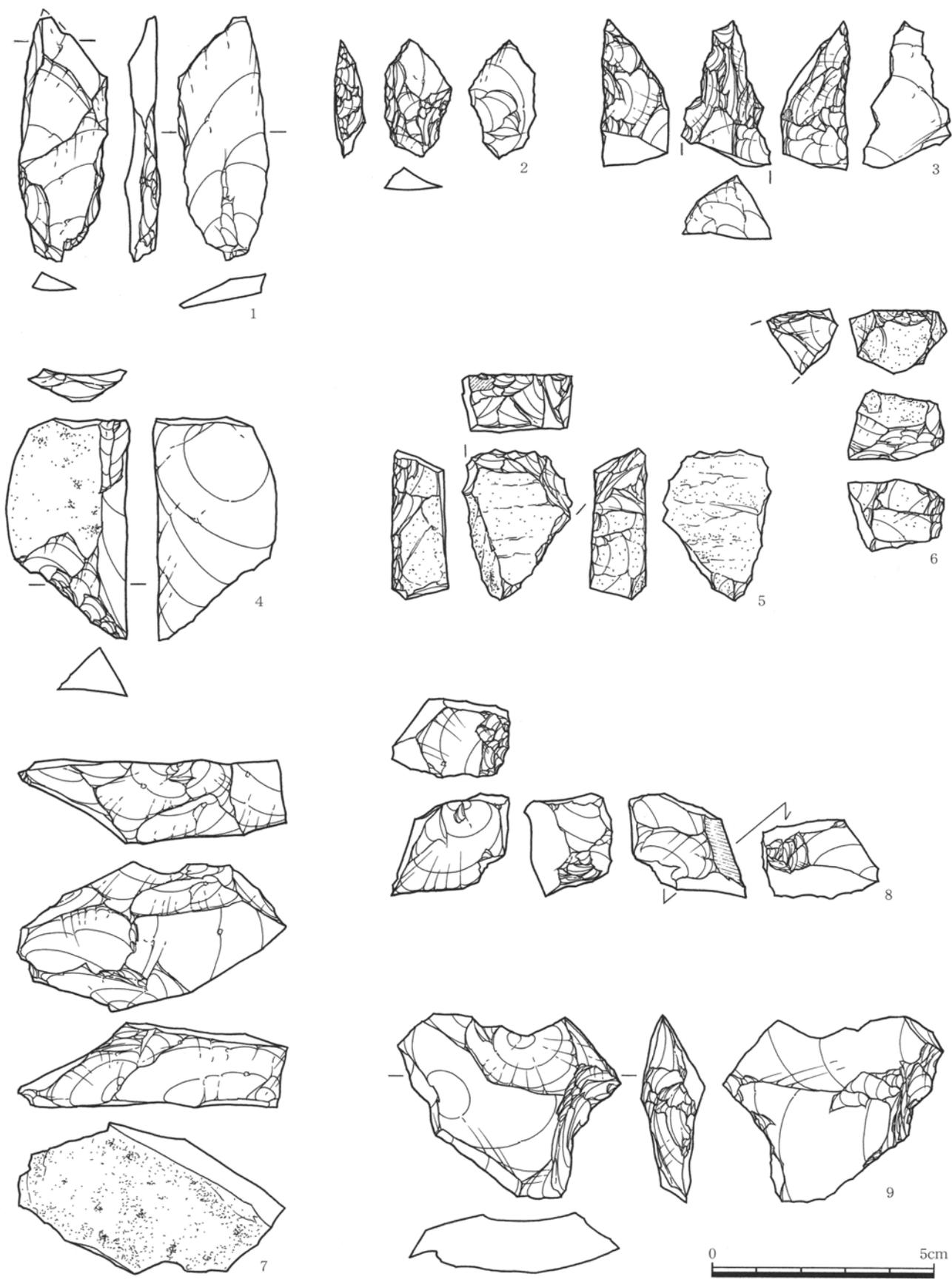
母岩2種類を確認した。母岩分類可能な黒色安山岩は調査区北端の石器ブロックに集中しており、南側の石器ブロックに分布した黒色安山岩については、ほとんど母岩分類ができなかった。

黒安-1 4号ブロックに3点が分布した。石核1（第59図7）・剥片2（折断剥片の接合例、接-35、第61図1）からなり、接合関係こそ確認できなかったが、少量の剥片生産と剥離地点を示唆するものであろう。

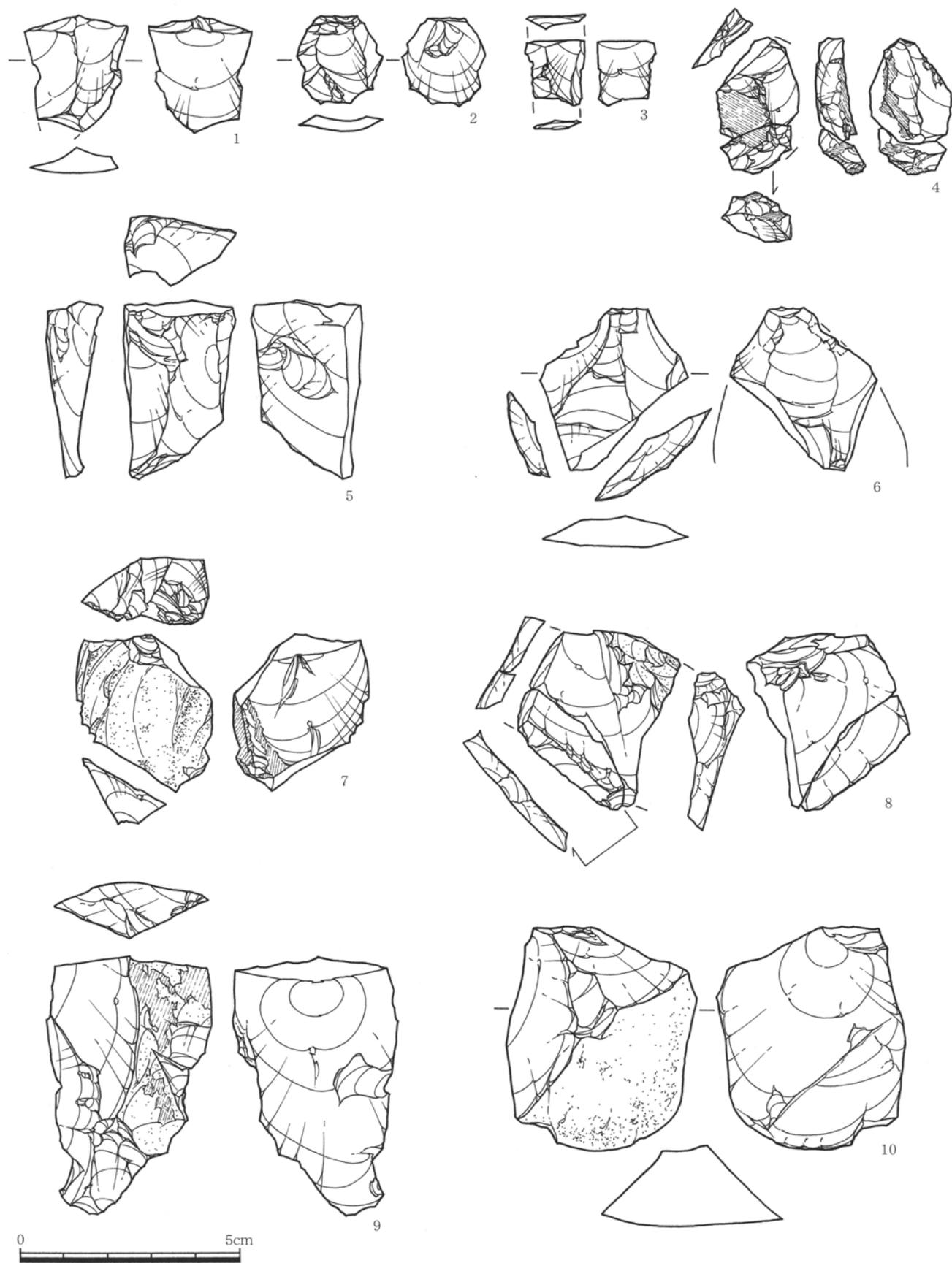
黒安-2 2号ブロックに3点が分布した。3点とも剥片（第60図8は折断剥片の接合例、接-36）であり、ここでも少量の剥片生産が想定されよう。

その他 上記母岩2種類以外に、分類不能な黒色安山岩製の剥片類が1・6号ブロックを除く各ブロックに分布した。各ブロックの黒色安山岩製剥片類は量的に少なく、本格的な剥片生産は想定できない状況にある。

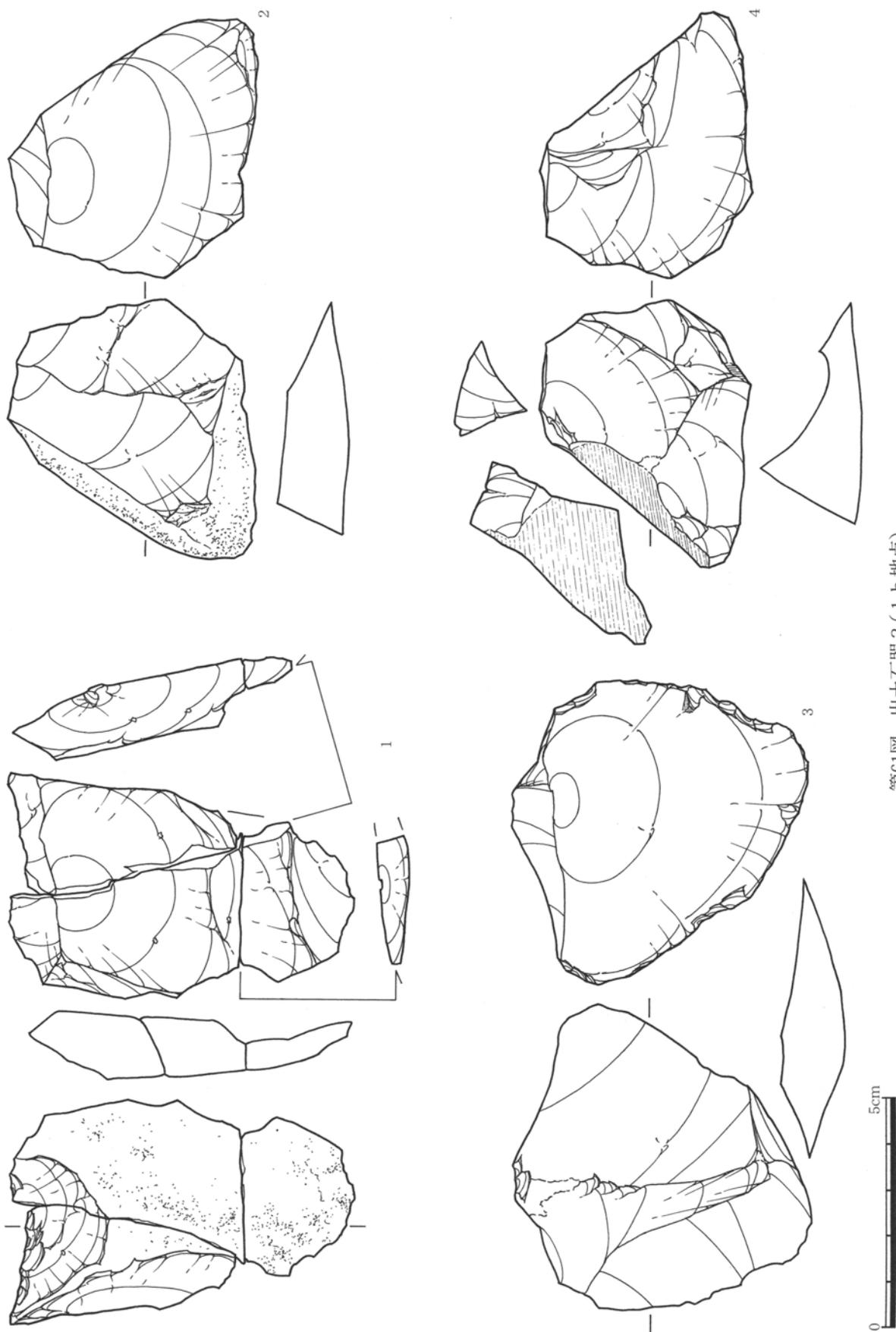
II 調査の成果



第59図 出土石器1(1b地点)

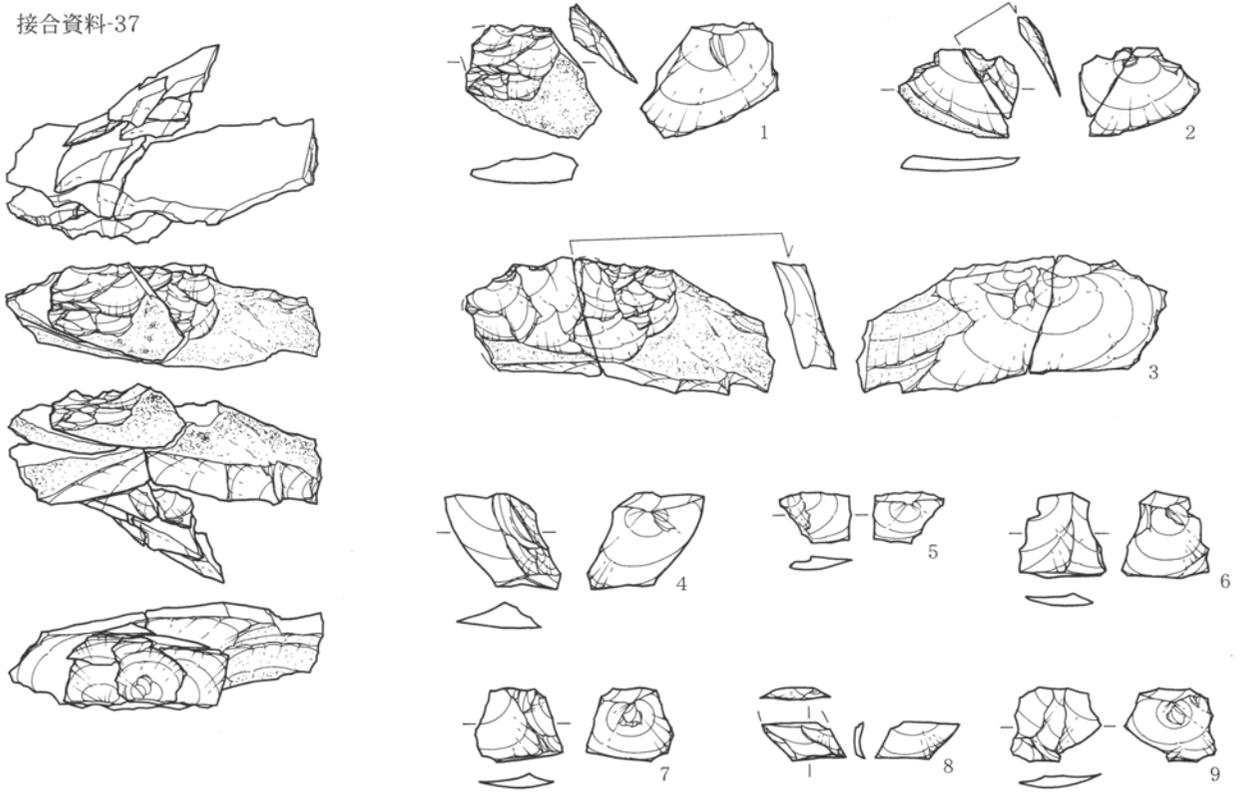


第60圖 出土石器2(1 b地点)

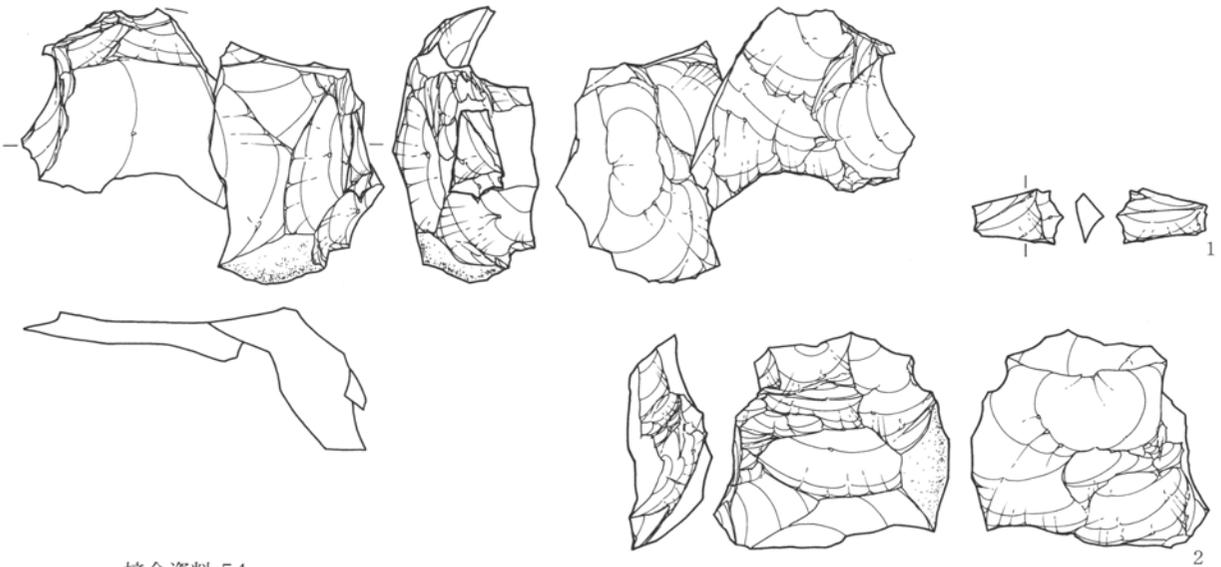


第61図 出土石器3(1 b地点)

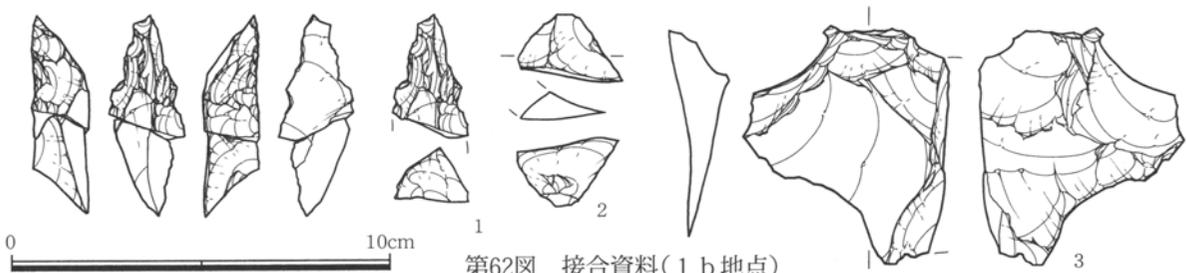
接合資料-37



接合資料-34



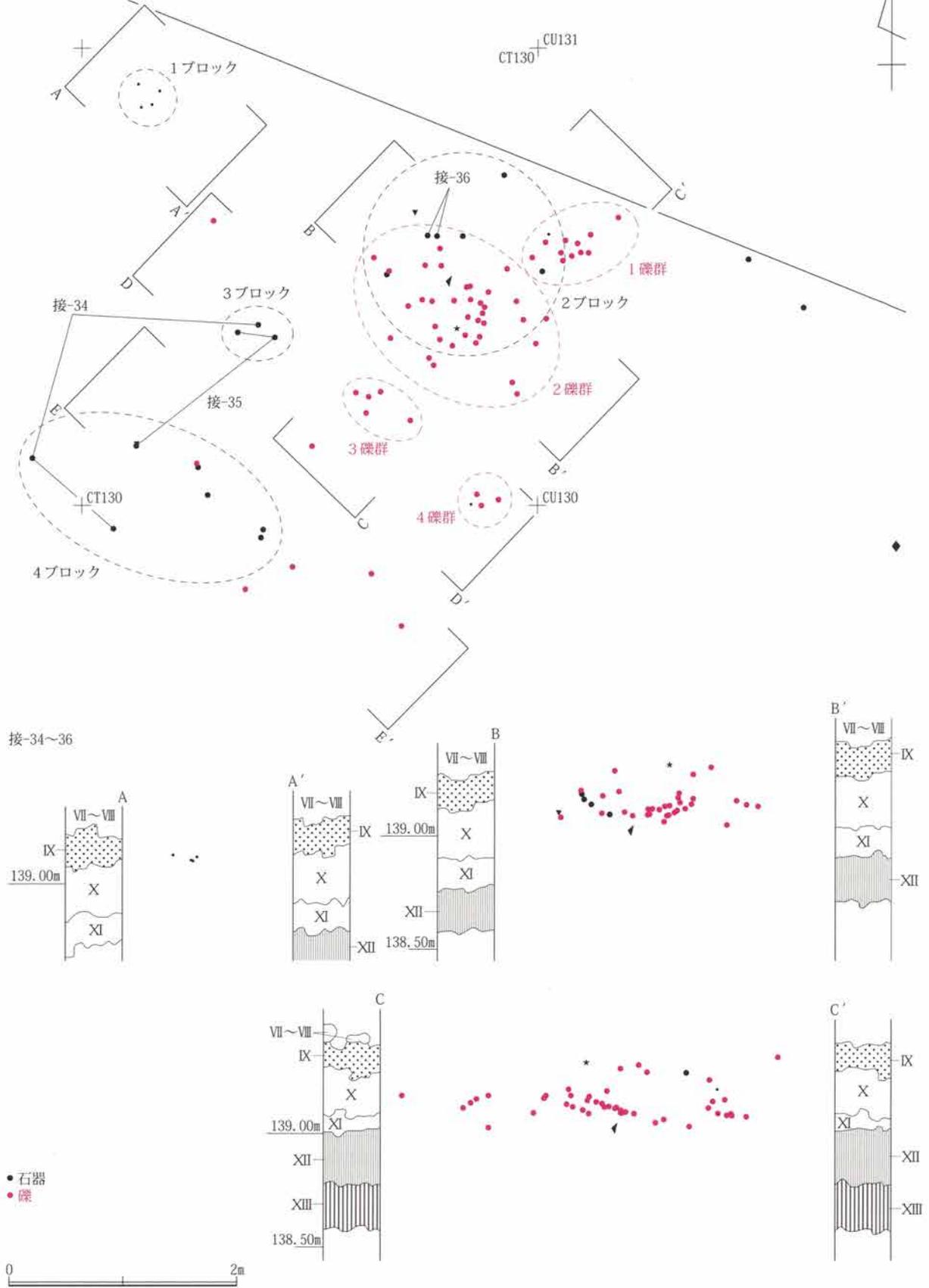
接合資料-54



第62圖 接合資料(1 b地点)

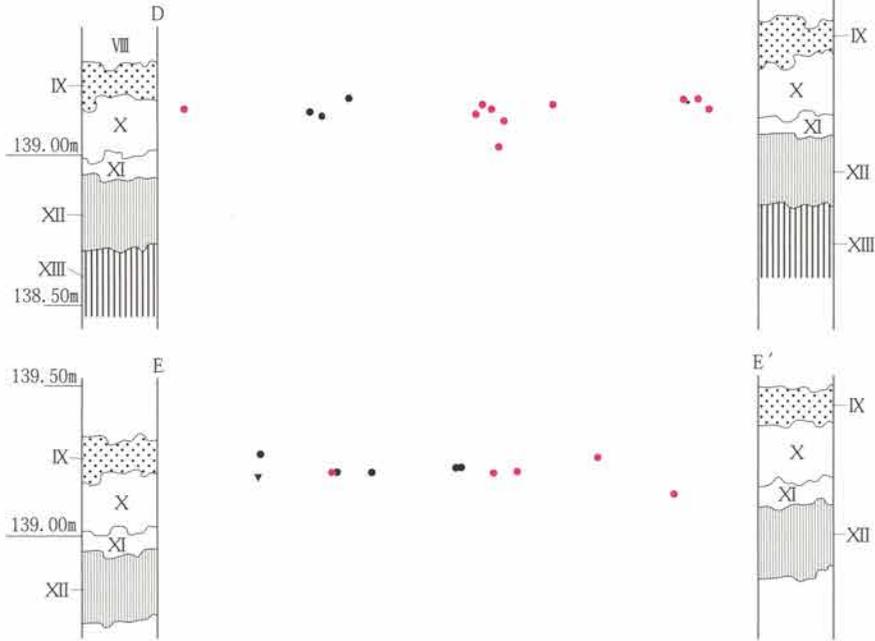
II 調査の成果

<1~4号ブロック・1~4号礫群>

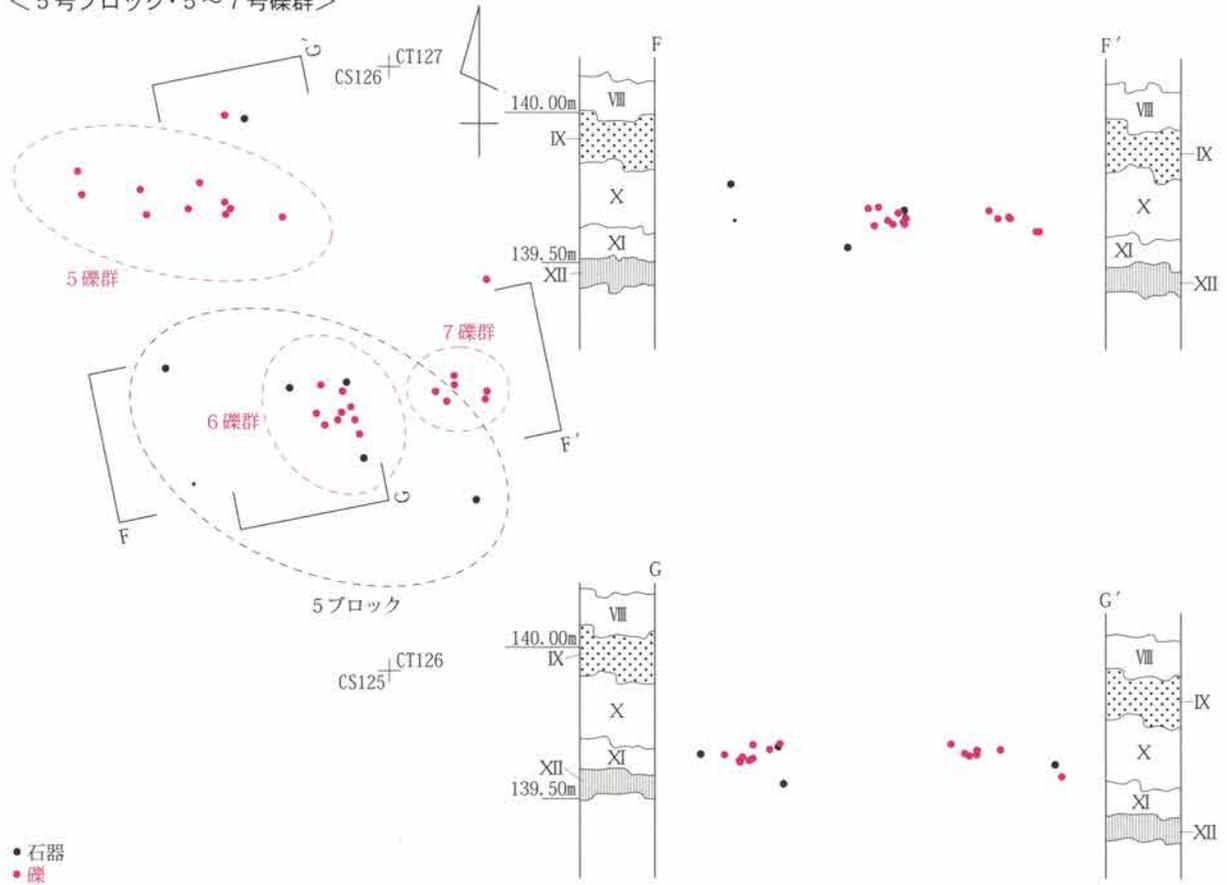


第63図 石器の分布1 (1 b地点)

<1~4号ブロック・1~4号礫群>



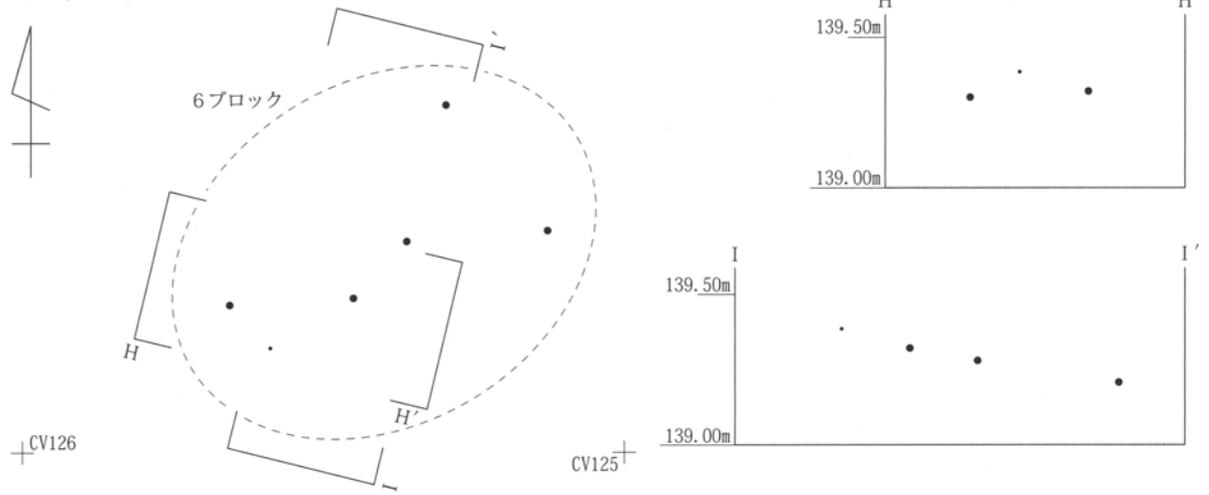
<5号ブロック・5~7号礫群>



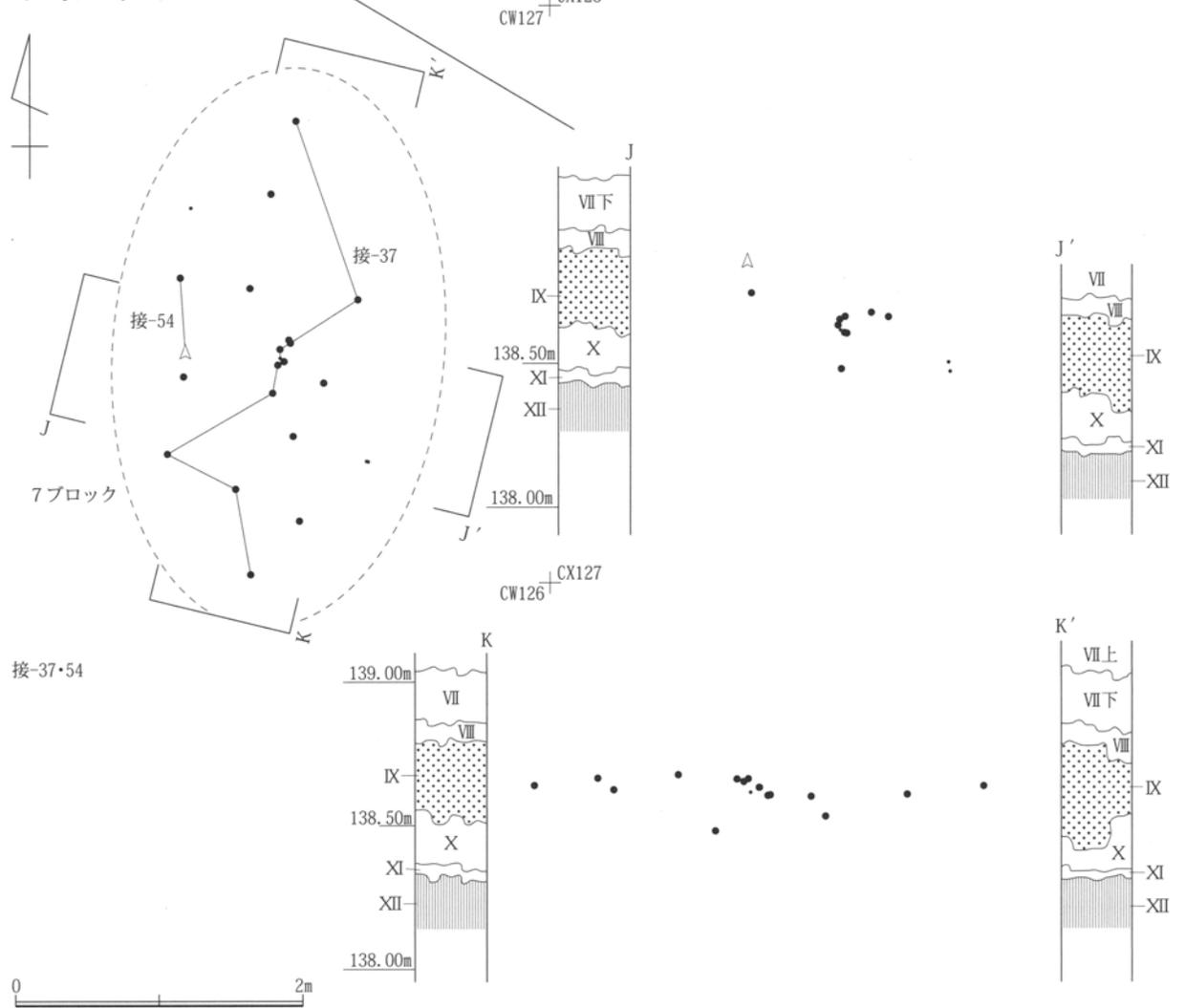
第64図 石器の分布2(1 b地点)

II 調査の成果

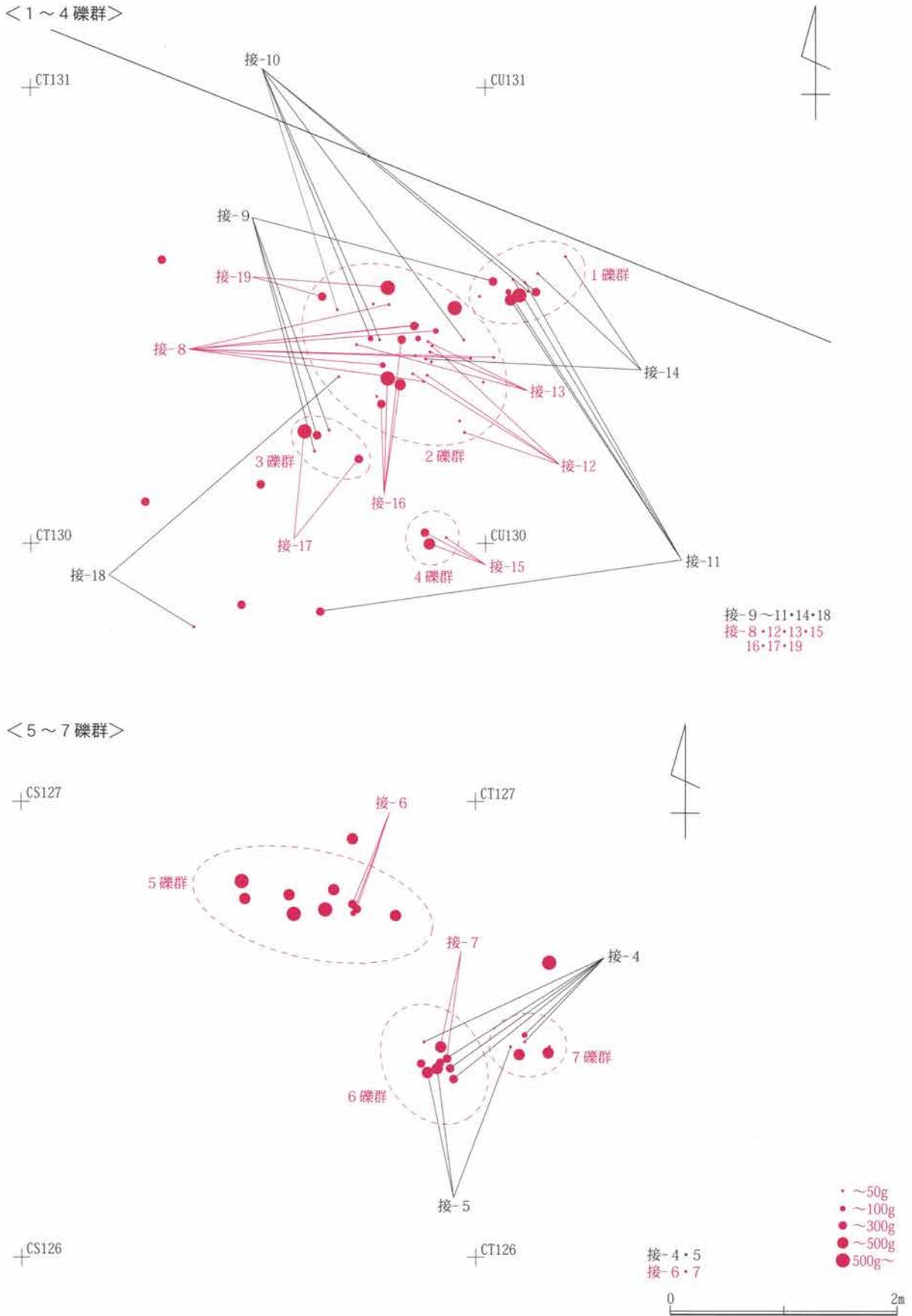
<6号ブロック>



<7号ブロック>

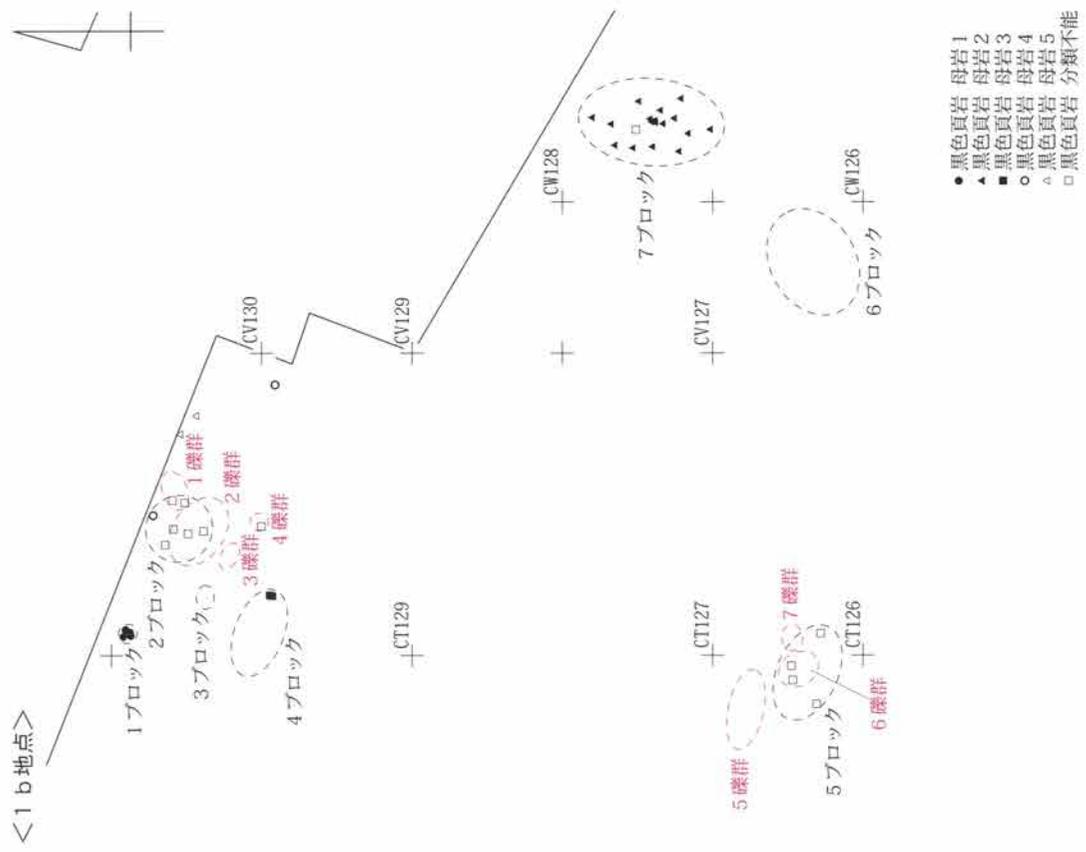
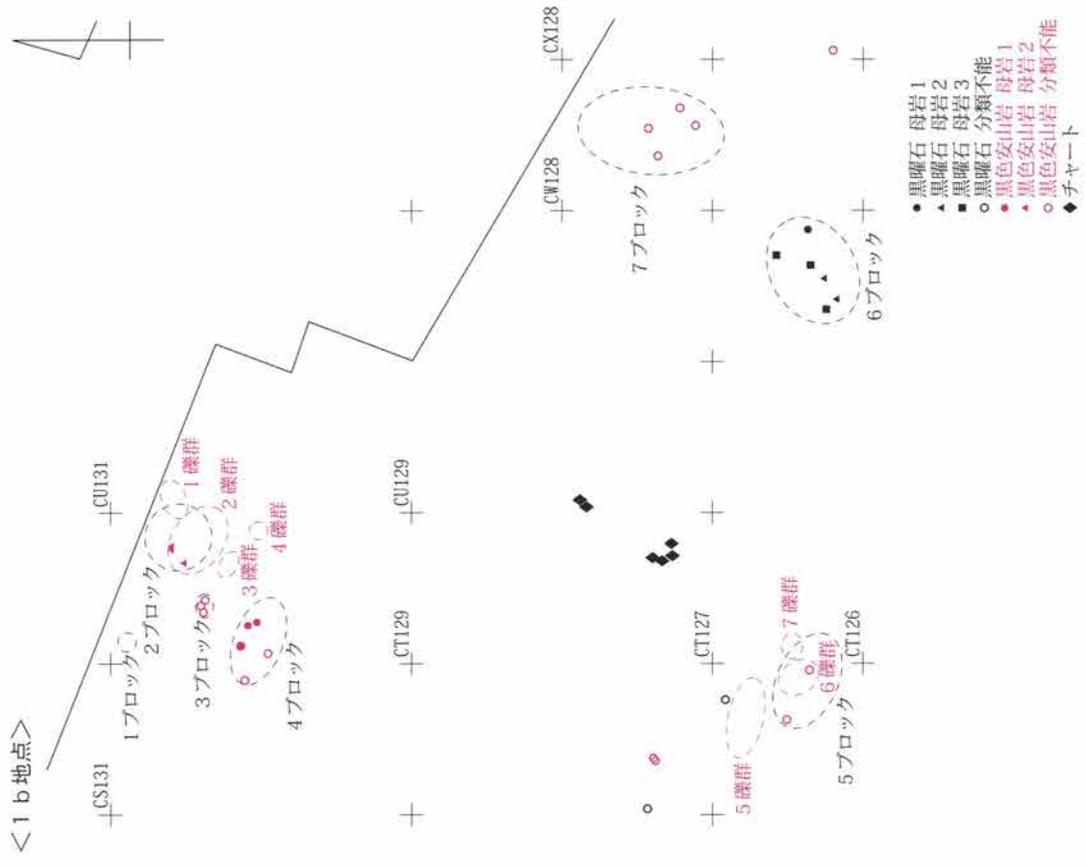


第65図 石器の分布3(1b地点)



第66図 碟群重量別分布と碟接合(1 b地点)

II 調査の成果



第67図 石材別分布図(1 b 地点)

(3) その他の地点

1 a・1 b地点を除く当該期石器群の分布は、1 a地点から南側に延びた丘陵先端や南西側斜面部に分布した。大部分がIX層に出土量のピークを有する石器群であったが、なかには、X層にピークを示す石器群もあって、石器群の同時性については検討の余地を残している（第25図）。

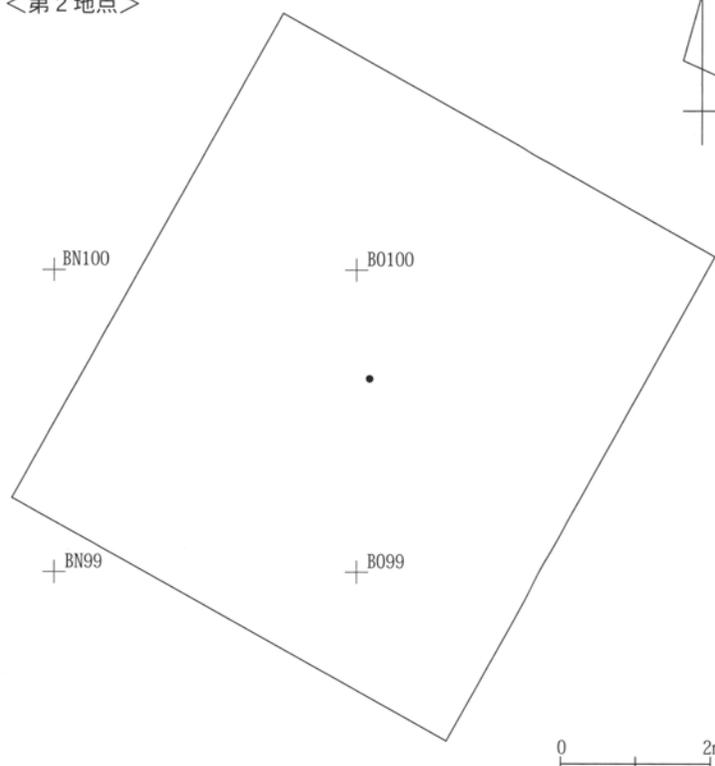
各地点の石器群については、地点間相互の関係が現状では明確ではなく、ここでは地点単位に概要を示し、記述していきたい。

<第2地点>

1 a地点から南へ30mほど離れた丘陵南西側斜面に位置する。石器は1点のみ出土、周辺域に石器群は確認できなかった（第68図、PL4）。

石器は黒色安山岩製の幅広剥片（第79図1、PL34）で、背面側には広い礫面を有している。

<第2地点>



第68図 石器の分布1（第2地点）

<第3地点>

概要

1 a地点から100mほど離れた丘陵南西側斜面に位置（第69図、PL4）しており、石器ブロック1を確認した。石器ブロックは長径3.8m・短径2.1m程の範囲に広がり、比較的散漫に分布していた。

石器の出土量のピークはX層（VII層1点・VIII層2点・IX層3点・X層16点・XI層1点・XII層1点）という所見になっていたが、斜面部に分布した石器群ということもあって、整理作業で行った石器の投影作業では先の調査所見を裏付けることはできなかった。

石器石材は、24点中23点が黒曜石、残る1点が黒色頁岩となっており、その石材組成は極めて単純であった。

接合資料は3例12点を確認している。第3・4地点では地点間接合、及び、母岩の共有関係を確認しており、本来的には同時性の高い石器群と考えている。

第3・4地点間の試掘では旧石器が発見できなかったため、それぞれ別個に地点名を付けたが、本

来的には1ヶ所の調査地点として扱い調査すべき地点であった。

接合資料や母岩別資料の分布については少量だが第4地点出土の石器と接合関係を確認しており、ここでは<第4地点>の項に一括記載した。

出土石器

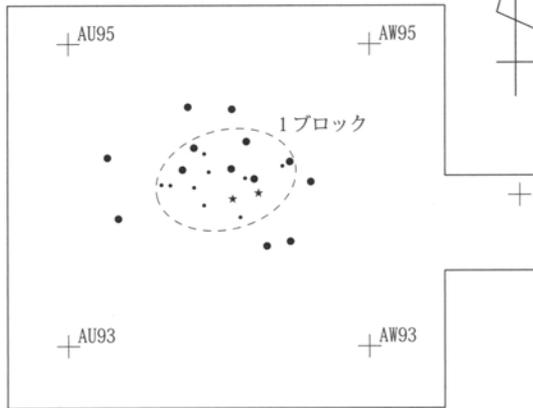
24点の石器が出土している。剥片類主体の石器群であり、若干の加工具類（加工痕ある剥片2点）が少量組成した。

加工痕ある剥片（第79図2・3、PL34）

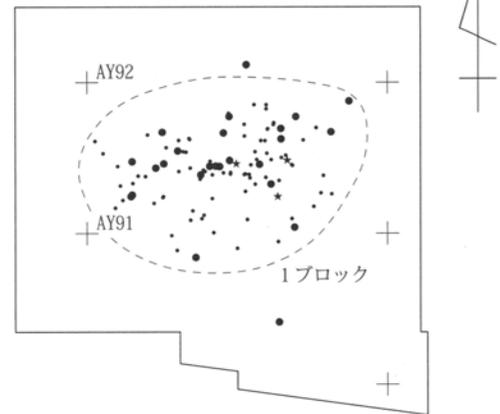
2点のみ出土した。第79図2は、小形の縦長剥片を用いたもの。剥片裏面側の側縁部を連続して加工しており、直線的刃部を作出している。黒曜石製。3は、背面側に礫面を残した縦長剥片を用いたもの。加工部は、剥片裏面側の端部にあり、2に比べ

II 調査の成果

<第3地点>



<第4地点>



第69図 石器の分布2(第3・4地点)

て加工状態は粗い。黒曜石製。

剥片 (第79図4・5、PL34)

2点を図示した。第79図4は、礫面を大きく残す幅広剥片。石核消費初期の剥片で、平坦打面より剥離。背面側中央には角礫の礫面を取り込んでおり、そこにはその平坦面を打面に剥片剥離しようとした痕跡が残る。黒曜石製。5は背面側右側縁に礫面を大きく残す縦長剥片。背面側の剥離面構成からみて、縦長剥片を志向して剥離しているようであり、打点を大きく左右に振り剥片を連続剥離している。黒色頁岩製。

接合資料

3例13点(接-44には第4地点から出土した剥片1点が接合している)を確認した。3例とも打面を固定して連続的に剥片を剥離している。

接合資料-45 (第84図、PL36)

3点の横位切断した剥片からなる接合資料。打面調整その他の調製技術については接合資料が打面部を欠いているため不明であるが、剥片2に打面調整を施していること、稜上に打点を選択していること、3点とも両側縁が並行していることなどから石刃として理解した。背面側の剥離面構成から見れば、石刃剥離の初期段階に位置づけることができるだろう。剥片3を除いて、折断は斑晶部分ではないことから意図的な折断と捉えられよう。黒曜石-5。

接合資料-46 (第84図、PL36)

3点の剥片からなる接合資料。3点とも礫面を大きく残しており、剥離初期段階の資料と理解した。接合状態から判明した礫面は、亜角礫(長さ5cm・幅3.5cmを測る。リングが痕跡程度に残る)であること、同一母岩である接-45が長さ8cmの作業面を有していることを考え併せるなら、接-46は作業面調

製に伴う剥片というより、打面作出に伴う剥片類の接合資料と理解すべきだろう。

第18表 器種・石材構成（Ⅲ文化—3地点）

	加工痕	剥片	碎片	合計
黒 頁	0	1	0	1
黒 曜 石	2	12	9	23
合 計	2	13	9	24

第19表 ブロック別器種構成（Ⅲ文化—3地点）

	加工痕	剥片	碎片	合計
1号ブロック	2	6	9	17
ブロック外	0	7	0	7
合 計	2	13	9	24

第20表 ブロック別石材構成（Ⅲ文化—3地点）

	黒頁	黒曜石	合計
1号ブロック	0	17	17
ブロック外	1	6	7
合 計	1	23	24

石器と礫の分布

調査区西端に近い丘陵西側の斜面に石器ブロック1を確認した。

1号ブロック（第95図）

位 置 丘陵の西側斜面（AU・AV—93・94G）

規 模 長径3.5m・短径2.1m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 VII～XII層（X層から11点出土）

出土点数 17点

器種構成 加工痕ある剥片2・剥片6・碎片9

石材構成 黒曜石17

そ の 他 第4地点と接合関係を有する石器2を確認。石器は最大で96cmの高低差を有した。

<第4地点>

概要

第3地点の西側に隣接しており、石器ブロック1を確認した（第69図、PL4）。

石器の分布範囲は、長径6.9m・短径4.7mを測り、コンタに直交するよう分布していた。

石器の出土層位については台帳から漏れており、整理時の投影作業でもその出土層位を確定することはできなかった。少量であるが、第3地点出土の石器と接合関係を確認していることや、両地点間には同一母岩が分布することから、第3地点出土の石器群と同様に、X層に出土量のピークを有したのではないかと考えている。

石器石材は107点が総て黒曜石であり、単相的な石材構成を示していた。

接合資料は5例12点を確認した。

出土石器

石器・石片類107点が出土している。石器組成は石片類主体だが、加工石器も少量組成した。

加工痕ある剥片（第80図1・6、PL34）

第80図1は、石器下端部の折れ面に微細な加工を施したものの。その方向は「折れ」の方向に一致、剥片が折れた際に小剥離痕が生じた可能性を残している。1号ブロック出土。ob-2。6は、石刃様の縦長剥片を用いて、打面側に近い左側縁を浅く加工したものの。石器は基部側に近い部分で横位に折れている（接-41）。1号ブロック出土。ob-1。

剥片（第80図2～5・7、PL34）

25点が出土している。ここでは、比較的形状の整った剥片5点を図示した。

第80図2は、背面側に礫面を残す縦長剥片。礫面には斑晶が抜けた大きな窪みが残っている。背面側に残る剥離面の剥離方向と剥片の剥離方向は180°異なる。1号ブロック出土。ob-2。和田峠。3は、剥片の端部を欠く小形の縦長剥片。表裏両面とも剥離軸が一致する。打面は剥離時に弾け飛んでおり、不明。1号ブロック出土。ob-4。和田峠1。4は、横位接合した縦長剥片（接-43）。剥離段階で打面、及び、剥片端部を欠損する。1号ブロック出土。ob-4。和田峠1。5は、小形の幅広剥片。剥離時に打面部を欠く。1号ブロック出土。ob-1。和田峠1。7は、幅5.7cmを測る横長剥片（接-40）。部分的に礫面が剥片端部に残る。1号ブロック出土。ob

II 調査の成果

一 1. 和田峠 1 ?

接合資料

5例12点（第3地点と接合関係を有する接-44を含む）を確認した。複数の剥片からなる接合例は2例と少ない。

接合資料-42（第84図、PL36）

2点の剥片からなる接合資料。剥離は上面の平坦打面から剥片1を剥離、90°打面転移して剥片2を剥離する。ob-3。和田峠1。

接合資料-44（第84図、PL36）

剥片2点からなる接合資料。剥片2の打面は弾け飛んでおり不明だが、剥片1・2は作業面を固定、連続剥離した可能性が高い。剥片1は第3地点から出土。移動理由は明確ではない。ob-4。和田峠1。

第21表 器種・石材構成（Ⅲ文化-4地点）

	加工痕	剥片	碎片	合計
黒曜石	3	25	81	109
合計	3	25	81	109

第22表 ブロック別器種構成（Ⅲ文化-4地点）

	加工痕	剥片	碎片	合計
1号ブロック	3	23	81	107
ブロック外	0	2	0	2
合計	3	25	81	109

第23表 ブロック別石材構成（Ⅲ文化-4地点）

	黒曜石	合計
1号ブロック	107	107
ブロック外	2	2
合計	109	109

石器と礫の分布

第3地点の東側に15mほど離れて、1ヶ所に集中分布した。109点からなる石器群。石器石材は黒曜石のみで構成され、単相の様相を呈していた。

礫・礫片等の分布は、まったく見られなかった。

1号ブロック（第96図）

位置 丘陵の西側斜面（AY・BA-90・91G）

規模 長径6.8m・短径4.4m

分布状態 集中分布する。

出土層位 不明（記載なし）

出土点数 107点

器種構成 加工痕ある剥片3・剥片25・碎片81

石材構成 黒曜石107

その他 石器分布はコンタに直交するように東西方向に広く分布。集中部2ヶ所が重複しているよう見えるが、雨水等で流出しているかもしれない。

接合資料の分布

第3地点で3例12点を、第4地点で5例12点を確認（第97図を参照）した。地点間（ブロック間）接合した接-44は剥片の接合例である。出土点数の割には第3地点の接合率は高い。器種構成、及び、石材構成の様相から、第3・4地点間には機能差が想定されよう。

母岩別資料の分布

第3・4地点とも、ほぼ黒曜石のみからなる単相的の石器群で、第3地点に3母岩（ob-2・4・5）が、第4地点に4母岩（ob-1～4）が分布した。両地点の共有母岩はob-2・4の2個体であった。共有母岩について両地点の保有量を比較した場合、第4地点に比べて第3地点の出土量が少なく、第4地点を剥離地点・第3地点を使用空間と捉えるのが一般的であるが、ob-5のように第3地点に偏在し、石核消費する母岩も共存するので、単純に機能差として単純に理解するのは難しいかもしれない。

（第97図を参照）

<第5地点>

調査区西端に近い丘陵の南西側斜面に位置する。石器は1点のみ出土した。調査会当時の試掘であり、拡張調査は行われなかったようである。後日、周辺域を試掘した（第70図）。

石器は雲母石英片岩製の剥片(?)の類であるが、石器か単なる礫片か、判断が難しい。

<第6地点>

第5地点から20mほど北東側に離れた、丘陵斜面部に位置する。石器は1点のみ出土。調査会当時の試掘であり、拡張調査は行われなかったようである。後日、周辺域を試掘した(第70図)。

出土した石器は、表面に礫面を残す珩質頁岩製の碎片。背面側は礫面であり、点状打面となっていることから、敲石の破片である可能性が高い。重さ1.08g。

<第7地点>

調査区西端に近い丘陵の南西側斜面に位置する。石器は1点のみ出土した。調査会当時の試掘であり、拡張調査は行われなかったようである(第70図)。

出土した石器(第80図8、PL34)は、黒色頁岩製の剥片。調査時に裏面側の大部分を欠損、剥片の形状等は明らかではない。重さ5.12gを測る。

<第8地点>

第7地点から10mほど東に離れた、丘陵南西側斜面に位置する。石器は1点のみ出土した。この地点でも拡張調査は行われていない(第70図)。

出土した石器は、溶結凝灰岩製の礫片(PL40)である。先端、及び、裏面側には新鮮な剝離面が残る。同種石材が丘陵の基盤層中に存在する。重さ34.58gを測る。

<第9地点>

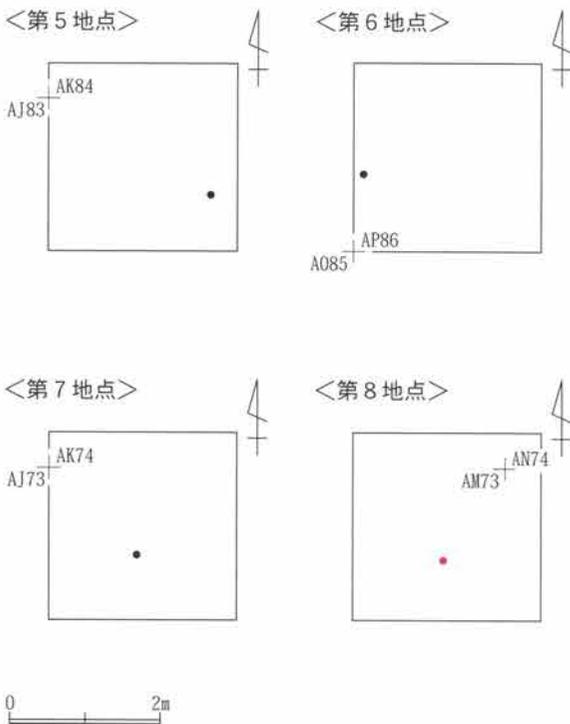
概要

1a地点から南へ続く尾根の先端に位置する。石器の出土地点を中心に拡張調査して、最終的に石器ブロック5を確認した。その分布範囲は約30m²と狭く、コンパクトに並んでいた(第71図)。

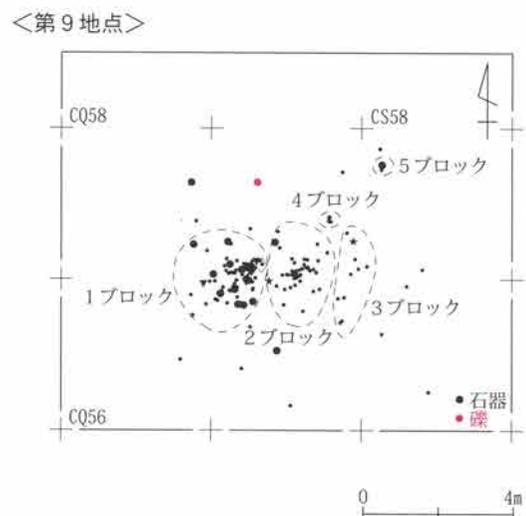
石器はVI層に11点、VII・VIII層に25点、IX層に109点、X層に3点が出土しており、IX層に出土量のピークを有する石器群と判断した。

石器石材は黒色安山岩(80点)・黒曜石(39点)・チャート(22点)が主体となっており、これら3種類の石材で95%以上を占めた。

接合資料は4例8点を確認している。



第70図 石器の分布3(第5～8地点)



第71図 石器の分布4(第9地点)

II 調査の成果

出土石器

総計148点の石器が出土した。碎片を含む剥片類が141点と圧倒的多数を占めた。

ナイフ形石器 (第80図9、PL34)

1点のみ出土した。石器は厚い幅広剥片を用いた二側縁加工のナイフ形石器。調整加工は主に左側縁で行われ、左側縁上半には粗い retouch を、左側縁下半には素材を表面側から折り取るようにして側縁部を作り出している。切断面については背面側に浅い剥離を加えて形状を整えている。右側縁については下半部に微細な剥離を加えるほかには、加工することなく、そのまま刃部としたようである。背面側には節理面を部分的に残している。全く同じ特徴が第11地点の接-62に見られ、両者とも同一母岩に認定した。

切出形石器 (第80図10・12、PL34)

2点が出土している。第80図10は、幅広の台形状剥片を用いたもの。石器は右側縁に平坦剥離を施し、左側縁には折断手法を摘要することによって、切出状の石器を作出している。1号ブロック出土。蓼科系黒曜石。12は、小形幅広剥片を用いたもの。剥片を横位に用い、左側縁を粗く打ち欠き石器を作出している。1号ブロック出土。黒色安山岩。

加工痕ある剥片 (第80図11、PL34)

表裏両面とも両側縁に平坦剥離を施したものの。左側縁の平坦剥離は典型的なものであり、側縁を折り取り平坦面を作出した後に表裏両面に浅い剥離を加えている。右側縁には折断手法が摘要されなかったようで、やや粗く剥離している。基部破片であり不明であるが、本来的には切出様の石器形態であった可能性も否定できない。3号ブロック出土。チャート。

第24表 器種・石材構成 (Ⅲ文化-9地点)

	ナイフ	切出形	加工痕	石核	剥片	碎片	礫片	合計
黒安	1	1	1	3	16	58	0	80
黒頁	0	0	0	0	1	1	0	2
黒曜石	0	1	0	0	0	38	0	39
珪頁	0	0	0	0	0	2	0	2
チャート	0	0	1	0	0	21	0	22
細安	0	0	0	0	0	1	0	1
粗安	0	0	0	0	0	1	1	2
合計	1	2	2	3	17	122	1	148

第25表 ブロック別器種構成 (Ⅲ文化-9地点)

	ナイフ	切出形	加工痕	石核	剥片	碎片	礫片	合計
1号ブロック	1	2	0	3	13	49	0	68
2号ブロック	0	0	1	0	1	43	0	45
3号ブロック	0	0	1	0	0	9	0	10
4号ブロック	0	0	0	0	0	5	0	5
5号ブロック	0	0	0	0	1	5	0	6
ブロック外	0	0	0	0	2	11	1	14
合計	1	2	2	3	17	122	1	148

第26表 ブロック別石材構成 (Ⅲ文化-9地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	珪頁	チャート	細安	粗安	合計
1号ブロック	63	0	2	1	1	1	0	68
2号ブロック	8	0	34	0	3	0	0	45
3号ブロック	3	1	2	0	4	0	0	10
4号ブロック	0	0	0	1	4	0	0	5
5号ブロック	0	1	0	0	5	0	0	6
ブロック外	6	0	1	0	5	0	2	14
合計	80	2	39	2	22	1	2	148

接合資料

6例32点の接合資料を確認した。剥片剥離の概要の分かる接合資料は2例ほどであり、他の4例は碎片レベルの接合資料であった。

接合資料-58 (第85図、PL36)

9点からなる接合資料。厚さ2cm程の盤状剥片を石核素材に用いている。盤状石核の側縁で小形横長剥片1を剥離した後で、対辺に打面を移し、石核2を剥離する。剥片3・4は、再び打面を元に戻して剥離、この直後に石核5が分断。以後の詳細は不明だが、打面転移を行い剥片7・8を剥離した可能性が高い。1・2号ブロック間で接合する。黒色安山岩。

○⇒○→1⇒2⇒3→4・5⇒6
→○→7→8

接合資料-57 (第85・86図、PL36)

15点からなる接合資料。拳大の河

床礫を二分して石核に用いる。剥片剥離は、まずこの分割面を打面として、剥片1・2を連続剥離する。続いて、剥片3を90°打面転移して剥離、再び剥離作業面と打面を入れ替え剥片4～6を剥離する。以後の剥離は打面と作業面を交互に入れ替え進み、規則的な剥離が続く。剥片7～15は90°の打面転移を伴い、連続剥離した剥片である1・2号ブロック間で接合。黒色安山岩1。

(原石を二分割)

1→2⇒3⇒4→5→6⇒7→8⇒9→10→11→
12→13→14→15

石器と礫の分布

石器群は1a地点から南へ延びる尾根の先端部に分布した。石器は礫片1を含む148点が出土、石器ブロック5を確認した。その分布範囲は東西・南北とも5m程で、同時期の石器群(第12地点)が約20m南西に分布している。

1号ブロック(第98図)

位置 尾根状丘陵先端(CQ・CR-56・57G)
規模 長径2.4m・短径2.2m
分布状態 集中分布する。
出土層位 VI～X層(IX層から57点出土)
出土点数 148点
器種構成 ナイフ形石器1・切出形石器2・石核1・剥片15・碎片49
石材構成 黒色安山岩63・黒曜石2・チャート1・珪質頁岩1・細粒輝石安山岩1
その他 接合資料4例28点(うち、2例は2号ブロックと接合関係を有する)を確認した。

2号ブロック(第98図)

位置 尾根状丘陵先端(CQ・CR-56・57G)
規模 長径2.2m・短径1.4m
分布状態 集中分布する。
出土層位 VI～X層(IX層から38点出土)
出土点数 45点
器種構成 加工痕ある剥片1・剥片1・碎片43

石材構成 黒曜石34・黒色安山岩8・チャート3
その他 接合資料1例15点を確認した。

3号ブロック(第98図)

位置 尾根状丘陵先端(CR・CS-56・57G)
規模 長径2.4m・短径0.8m
分布状態 散漫に分布する。
出土層位 VI～IX層(IX層から5点出土)
出土点数 10点
器種構成 加工痕ある剥片1・碎片9
石材構成 チャート4・黒色安山岩3・黒曜石2・黒色頁岩1
その他 接合資料は確認できなかった。

4号ブロック(第98図)

位置 尾根状丘陵先端(CR-57G)
規模 径0.2m
分布状態 集中分布する。
出土層位 VII・VIII～IX層(VII・VIII層から4点出土)
出土点数 5点
器種構成 碎片5
石材構成 チャート4・珪質頁岩1
その他 碎片のみが小範囲にスポット的に出土。

5号ブロック(第98図)

位置 尾根状丘陵先端(CS-58G)
規模 径0.2m
分布状態 集中分布する。
出土層位 VI～IX層(IX層から3点出土)
出土点数 6点
器種構成 剥片1・碎片5
石材構成 チャート5・黒色頁岩1
その他 接合資料1例2点を確認した。剥片類のみ、スポット的に出土。

接合資料の分布

6例32点の接合資料を確認した。その内訳は、ブロック内で接合するもの4例、ブロック間で接合するもの2例(接-57・58)で、4例とも黒色安山岩であった。黒色安山岩分布の主体は1号ブロックで

II 調査の成果

あり、この地点に剝離地点を求めることが可能であった（第99図上）。

ブロック間接合した接合資料についても同様で、加工石器（加工痕ある剥片、第85図6）や、形状の整う剥片（同図4）が2号ブロックに分布したというのも選択的に石器類を持ち出し使用するという点で示唆的であるが、2号ブロックは黒曜石製の碎片類が集中する地点でもあり、様相は複雑である。

母岩別資料の分布

母岩5種類を確認した。以下、石材別に母岩分布を踏まえ、その分布状況（第99図）を記す。

黒色安山岩

母岩1種を確認した。黒安-1は、ナイフ形石器1点（第80図9）のみからなる搬入品。この石器中央には特徴的な節理があり、同じ節理を持つ石片類が多量に出土した第11地点（第9地点から40mほど南西に離れている）から搬入した石器であるということは明らかであった。

黒曜石

碎片類が主体であり、母岩は区分できなかった。2号ブロックに集中しており、母岩1個を集中的に消費、廃棄した可能性が強い。

チャート

母岩4種を確認した。その分布状況は概して散漫であった。

チャート-1は、2・3号ブロックに各2点が分布した。その内訳は、加工痕ある剥片1・碎片3となっている。石器の部分的加工を示唆する。

チャート-2は3号ブロックに1点、ブロック外に1点が分布した。2点とも碎片で、その分布理由は不明である。

チャート-3は、2・4号ブロック・ブロック外に各1点が分布した。3点とも碎片で、分布の理由は不明である。

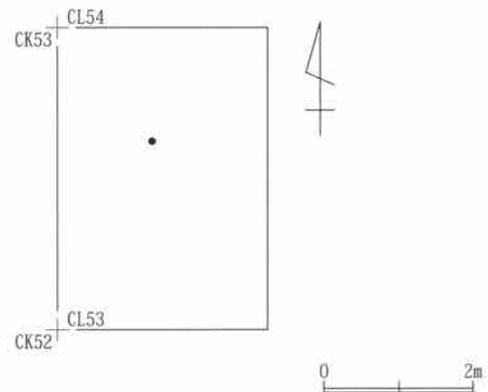
チャート-4は、5号ブロックに分布した。2点とも碎片だが、接合関係（接-59）を確認した。小形剥片を部分的に生産したもの、と捉えている。

<第10地点>

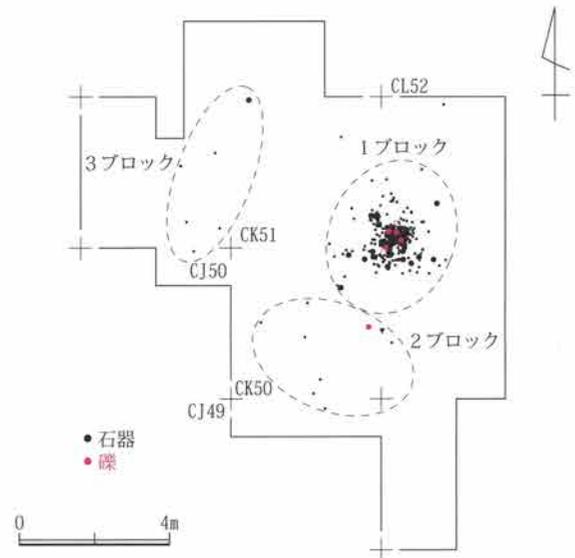
最も石器の多く出土した1a地点から南に続く、尾根の先端付近に位置する。石器は1点のみ出土、周辺域に石器は確認できなかった（第72図）。

出土した石器はチャート製の碎片（第81図1、PL34）である。背面側に葉理面を大きく残す小形剥片で、縦位に破損している。右側縁には、微細な刃こぼれが見られる。重さ1.97g。

<第10地点>



<第11地点>



第72図 石器の分布5（第10・11地点）

<第11地点>

概要

1 a 地点から南へ続く尾根の先端付近に位置する。第10地点の南に隣接、3ヶ所の石器ブロックを確認した(第72図)。

石器はV層に1点・VI層に13点、VII・VIII層に27点、IX層に270点、X層に30点・XI層に8点が出土、IX層に出土量のピークを有する石器群と判断した。

石器石材は黒色安山岩が324点(92.6%)と最も多く出土しており、その他の石材は各々1%前後と偏っていた。

接合資料は10例112点を確認した。10例とも1号ブロックに分布しており、極めて偏在的であった。

各ブロックの石器の出土状況は若干相違しており、1号ブロックが典型的なヴィーナス曲線を描いて出土(VI~XI層まで出土)したのに対し、2号ブロックではVI層・IX層のみ石器が出土、3号ブロックではIX層より下層の石器は見られなかった。検討の結果、3号ブロックのみ孤立、分離も可能であったが、資料点数も少なく決定的根拠に乏しいためここでは、その可能性についてだけ指摘するにとどめておきたい。

出土石器

総計349点の石器が出土した。碎片を含む剥片類が329点と圧倒的多数を占めた。

角錐状石器(第81図2・4、PL34)

第81図2は、やや厚い小形の幅広剥片を横位に

用いたもの。側縁加工はナイフの加工よりやや粗く、加工前には折断手法(左側縁先端)を用いたようであり、未加工の剥片縁辺を取り込み、厚い石器先端を作出している。搬入石器。1号ブロック出土。和田峠2。4は、やや厚い幅広剥片を横位に用いる。左側縁の調整加工はbluntingに近いが、右側縁の加工は粗く剥離各は浅い。石器刃部を素材となった剥片の打面側の側縁に設定して、石器を作出している。搬入石器。1号ブロック出土。蓼科系。

切出形石器(第81図3・6、PL34)

第81図3は、小形幅広剥片を横位に用いたもの。調整加工は基部側・左側縁に限定して施され、剥片形状を巧み取り込んで石器を作出している。接-64。1号ブロック出土。黒色安山岩-1。6は、台形状を呈する幅広剥片を用いたもの。剥片を横位切断して、基部側の切断面に調整加工を加え、細身の石器基部を作出しようとしたようである。このとき石器は破損した可能性が高い。接-63。1号ブロック出土。黒色安山岩-1。

搔器(第81図5、PL34)

第81図5は、幅広剥片を用いてその剥片端部に急斜度加工を加えたもの。刃部作出段階で石器は破損しており、意図した刃部形状等の詳細は明確ではない。接-63。1号ブロック出土。黒色安山岩-1。

削器(第81図7~9、PL35)

第81図7は、幅広剥片を用いて、その剥片端部を粗く打ち欠き、やや浅い角度の刃部を作出する。石器刃部の作出は、特に左側縁側に未加工部分を残しており、充分ではない。接-62。1号ブロック出土。

黒色安山岩-1。8は、小形縦長剥片を用いたもの。右側縁に石器刃部を作出する段階で、先端部を欠損する。接-62。1号ブロック出土。黒色安山岩-1。9は、小形剥片を用いたもの。右側縁に浅い加工を施して、刃部を作出している。刃部形状は緩く弧状を呈する。石器先端を

第27表 器種・石材構成(Ⅲ文化-11地点)

	角錐状	切出形	搔器	削器	加工痕	石核	剥片	碎片	礫片	合計
黒安	0	3	2	3	1	5	45	264	1	324
黒頁	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
黒曜石	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
珪頁	0	0	0	0	0	1	2	2	1	6
チャート	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
細安	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
粗安	0	0	0	0	0	0	0	4	3	7
合計	2	3	2	3	1	6	47	280	5	349

II 調査の成果

欠損する。接—64。1号ブロック出土。黒色安山岩—1。

加工痕ある剥片 (第81図10、PL35)

第81図10は、折断剥片を用いたもの。やや粗い剥離を左側縁に加えて石器刃部を作出する。刃部はノッチ状を呈する。1号ブロック出土。黒色安山岩。

剥片 (第81図11、82図1～3、PL35)

47点が出土しており、47点中45点が黒色安山岩製であった。剥片類は小形剥片が多く、石器製作も剥片形状を巧く石器に取り込んでいた。出土した剥片の大部分は第88～90図(接—62、65点が接合)に掲載されているので、参照されたい。

第81図11は、小形の縦長剥片。左右両側縁には腹面に直交する広い平坦剥離面を有しており、盤状石核の小口部分で剥離した剥片と理解している。1号ブロック出土。黒色安山岩—2。

第82図1は、小形の縦長剥片。やや鋭角に平坦打面より剥離。1号ブロック出土。黒色安山岩—2。2は、礫面を背面側に残す縦長剥片。打面部は点状打面となっているほか、剥片先端部を欠損する。1号ブロック出土。珪質頁岩。3は、礫面を大きく残す幅広剥片。打面部は剥離時に弾け飛んでいる。1号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料

接合資料は10例112点を確認した。分割礫を石核に用いるものや、盤状石核を用いるものが見られ、石核形状に則した剥離が展開する。

接合資料—64 (第86図、PL38)

切出形石器1・削器1・石核1・剥片1・碎片5からなる接合資料。厚さ3cmの盤状石核を用いる。剥離は底面部で小形剥片1(削器を作出)剥離することからはじまり、剥片2・大形剥片ほか(3～9が接合)・剥片10の順で、剥離が進む。

(盤状石核)

1→2→(○→3⇒4→5、6→7→8→9)⇒10

接合資料—62 (第87～89図、PL37)

計67点からなる接合資料。長さ13.5cm、幅10.9cm、

高さ6.4cmを測り、裏面側には大きく礫面を残す。径15cm程度の円礫か、長さ20cmを越える長円礫を二回に分け分割、石核としている。剥片剥離は頻繁な打面転移を繰り返し進む。

剥片1は、原石の分割によって生じた低い稜上を狙って剥離した小形剥片。碎片2・削器3も剥片1と同様に石核の稜上を狙って剥離した剥片であるが、両者とも打面を欠き、同時剥離した可能性が高い。

剥片4・5は、1～3の対辺で剥離した小形幅広剥片。この剥離によって礫面を大きく除去することに成功、以後の石核消費を容易にしている。剥片4は節理面で破損している。剥片6・碎片7は、再び作業面を元に戻して剥離した幅広剥片。剥片4・5と同様に、礫面を大きく除去しており、その剥離は打面作出を明確に意図している。剥片4・5と剥片6・碎片7の剥離の前後関係については、明確に捉えられなかったが、剥片9の剥離段階で石核は二分してしまっており、この時点で剥片4・5の剥離が終わっている必要があるため、ここでは対辺に作業面を移動して剥片4・5を剥離、再び打面を元に戻して石核消費を進めた、と理解した。石核の破損面は横位切断した剥片6・7の折れ面に一致しており、原石採取時点か、原石分割段階の衝撃痕が影響、石核が二分したものと想定している。剥片8は剥片6・7に引き続く剥離で、典型的な打面作出剥片と理解している。

碎片12以後の剥離は、石核下端に打面を移し90°の打面転移を行い、これ以前より大形の剥片を剥離しているようである。18は剥片19と同時に剥離したやや縦長の剥片であったが、側縁を粗く剥離(14～17)、ここでは加工痕ある剥片として取り扱ったが、角錐状石器(未製品)ともとれるのではないかと考えている。石核28は礫面を一部に残す程度に剥離が進んでおり、最終的には多面体石核に近い状況となっている。

途中破損してしまったもうひとつの石核39も頻繁な打面転移を繰り返し、石核を消費している。剥片29は石核左側の礫面を除去するように剥離した幅広

剥片。続いて、この剥離によって生じた剥離面を打面に剥片30・碎片31（同時剥離？）を剥離。削器32は打面を対辺に移動して剥離した剥片の端部を加工した削器であるが、この剥離で石核は節理面で再び破損したようである。やや大形の剥片33と碎片34は、この時の剥離で同時剥離したようである。

破損した石核39は長さ・幅とも5～6cmと小型化してしましたが、35以下の剥片は90°打面転移して剥離したようである。黒色安山岩。

原石の分割→1→2・3

- ・4→5
- ・6・7→8⇒9（原石二分？）→10→11⇒○→12⇒13⇒（14→15→16→17→18）・19→20・21⇒22⇒○⇒23・24→25→26→27→28
- ・29⇒30・31⇒（対辺へ打面を移動）32（節理面で石核二分？破損）
- ・33・34
- ・35⇒（打面のみ移動）36→○⇒37⇒38→39

接合資料—63（第90図、PL38）

計20点からなる接合資料。厚さ4cmを測る盤状剥片を石核素材に用い、小形・幅広剥片を剥離している。剥片剥離は厚い板状剥片の側面で開始、3枚ほど剥片を剥離したのち、打点を石核の右側に移し剥片1～6を剥離する。次いで、作業面を対辺に移し、7・8（8は7の腹面側から剥離した搔器作出に伴う碎片？）を、7・8の対辺で剥片9～11を剥離している。剥片11を剥離した時点で剥片12も剥離したようであるが、12は意図的剥離というより偶発的剥離というべきであろう。12の裏面側では小形剥片を剥離しているが、剥離順については判断できなかった。碎片13・剥片14の2点は剥片9～碎片11の作業面を打面に石核15の小口部分で剥離したもの。1号ブロック出土。黒色安山岩—1。

- ・○○○→1→2・3→4→5→6
- ・⇒7→8⇒9→10→11・（○→12）→13→14→○→15

接合資料—65（第91図、PL38）

2点の剥片からなる接合資料。最初、剥離は背面

に礫面を残す小形剥片を剥離、打面転移して2枚の剥片を剥離したのち、剥片2を剥離する。1号ブロック出土。黒色安山岩—1。

接合資料—66（第91図、PL38）

縦位折断した剥片を含む4点の剥片からなる接合資料。盤状剥片を石核素材に用いたもの。剥片剥離は打点を左右に大きく振り、小形剥片を剥離する。1号ブロック出土。黒色安山岩—1。

接合資料—71（第91図、PL38）

石核1・剥片1からなる接合資料。石核は拳大の円礫を4分割した程度の大きさで、頻りに打面転移を繰り返し小形剥片を剥離する。1は1号ブロックから、2は2号ブロックから出土した。珪質頁岩。

石器と礫の分布

石器群は1a地点から南へ延びる尾根の先端部に分布した。石器は礫片5を含む349点が出土、石器ブロック3を確認した。その分布範囲は径8m程で、同時期の石器群（第12地点）が約10m離れて東側に分布している。

1号ブロック（第100・101図）

位置 尾根状丘陵先端（CK・CL—50・51G）
規模 長径4.0m・短径3.0m

分布状態 集中分布する。

出土層位 VI～XI層（IX層から267点出土）

出土点数 332点

器種構成 ナイフ形石器1・角錐状石器1・削器4・石核9・剥片47・碎片268

石材構成 黒色安山岩317・珪質頁岩3・黒曜石2・チャート2・黒色頁岩1・珪質変質岩1・粗粒輝石安山岩6

その他 接合資料10例112点（うち、2例は2号ブロックと接合関係を有する）を確認した。接—62にはVI～XI層出土の剥片が接合するとともに、2号ブロック出土の剥片（VI層出土）とも接合関係を有していた。

II 調査の成果

2号ブロック (第100・101図)

位 置 尾根状丘陵先端 (CK-50G)
 規 模 長径3.6m・短径2.4m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 VI・IX層 (VI層から6点出土)
 出土点数 9点
 器種構成 石核1・碎片7・礫片1
 石材構成 黒色安山岩5・珪質頁岩2・チャート1・黒色頁岩1
 その他 石器はVII・VIII層から出土せず、出土量もVI層に多い。出土状況は文化層が重複している可能性を示唆していたが、1号ブロック (IX層に出土量のピーク) の石器とVI層出土の碎片が接合、ここでは同一文化層として理解した。

3号ブロック (第100図)

位 置 尾根状丘陵先端 (CJ-51G)
 規 模 長径4.3m・短径1.6m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 V～VII・VIII層 (VI層から4点出土)
 出土点数 6点
 器種構成 剝片1・碎片5
 石材構成 黒色安山岩2・黒色頁岩2・珪質頁岩1
 その他 明らかに母岩の異なる黒色安山岩製の碎片1点があり、礫片 (V層出土) も上層から混入した可能性が否定できな

い。接合関係も見られないことから、状況的には第3文化層から分離して捉えるべき石器群であるかもしれない。分離した場合には、碎片のみ単独分布する石器群ということになる。

接合資料の分布

10例112点の接合資料を確認した。接合資料は10例とも1号ブロックに分布 (第102図を参照) した。接合資料はブロック内で完結するものが圧倒的に多く、ブロック間で接合関係を有するものは2例と少なかった。

黒色安山岩製の石器類については剝離地点を1号ブロックに求めることが可能であるが、少量出土した珪質頁岩製石器の接合資料 (接-71) については資料点数が少なく、断定できない。

母岩別資料の分布

石材構成は黒色安山岩 (2母岩を確認) に偏っており、その他の石材は概ね単独出土という状況 (第103図) であった。

黒色安山岩

黒安-1は126点からなる、黒安-2は2点のみからなる母岩であった。大部分が1号ブロックに分布しており、2号ブロックに分布した黒色安山岩は1点 (接-62) のみであった。黒安-2も1号ブロックから出土。搬入石器であるが、1点のみ集中部を

第28表 ブロック別器種構成 (Ⅲ文化-11地点)

	角錐状	切出形	搔器	削器	加工痕	石核	剝片	碎片	礫片	合計
1号ブロック	2	3	2	3	1	5	46	266	4	332
2号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	7	1	9
3号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	5	0	6
ブロック外	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
合計	2	3	2	3	1	6	47	280	5	349

第29表 ブロック別石材構成 (Ⅲ文化-11地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	珪頁	チャート	珪変	砂岩	細安	粗安	合計
1号ブロック	317	1	2	3	2	1	0	0	6	332
2号ブロック	5	1	0	2	1	0	0	0	0	9
3号ブロック	2	2	0	1	0	0	0	0	1	6
ブロック外	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2
合計	324	4	2	6	3	1	1	1	7	349

避けるように分布した。

その他の石材

1号ブロックの石器集中部に黒曜石・チャート・粗粒輝石安山岩・珪質変質岩が分布した。黒曜石製石器類(明確な搬入石器)を除く、各種石材は1g未満の碎片が多く、石器刃部作出に伴う二次加工、あるいは、部分的な剥片生産に伴う碎片類であろう。粗粒輝石安山岩製碎片類などについては、石器と石材の選択傾向からみて、敲石の存在を想定すべきだろう。

<第12地点>

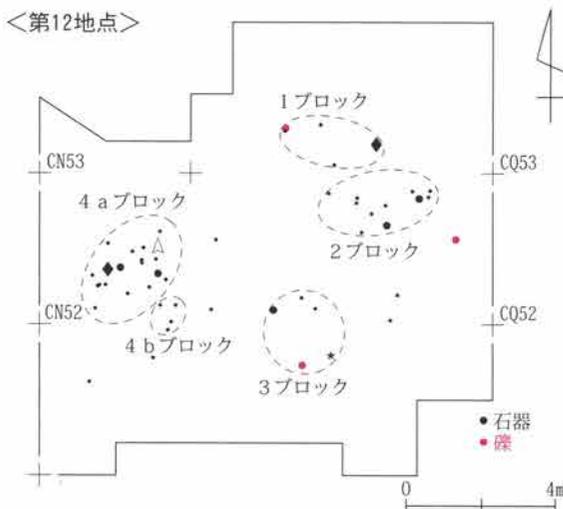
概要

1a地点から南へ続く尾根の先端に位置する。第11地点の東に10mmほど離れて分布、3ヶ所の石器ブロックを確認した(第73図、PL5)。

石器はVI層に1点、VII・VIII層に12点、IX層に30点、X層に8点が出土、IX層に出土量のピークを有する石器群と判断した。

石器石材は黒曜石(17点)・チャート(16点)が主体を占め、黒色安山岩(8点)・黒色頁岩(5点)と続く。

接合資料は1例2点を確認したのみである。



第73図 石器の分布6(第12地点)

出土石器

総計51点の石器(礫・礫片3点を含む)が出土している。碎片類が圧倒的に多く、全体の3/4を占める。主な石器としてナイフ形石器・角錐状石器を上げることができる。

角錐状石器(第82図6、PL35)

1点のみ出土した。やや大形の幅広剥片を横位に用いる。石器は、剥片の両辺を折断したのち、左側縁に blunting 状の剥離を、右側縁に平坦剥離を加え石器を作出。4aブロック出土。黒色安山岩。

ナイフ形石器(第82図4・5、PL35)

第82図4は、背面に礫面を大きく残す幅広剥片を横位に用いたもの。左側縁、及び、右側縁下半部に blunting 状の加工を施している。4aブロック出土。黒曜石製(和田峠2)。5は、小形縦長剥片を用いたもの。右側縁、及び、左側縁下半部を blunting しており、細身の典型的な二側縁加工のナイフとなっている。石器中央より下半部の細部加工面は剥離面が新鮮で、再生を受けている可能性が高い。石器中央付近を境に剥離面の光沢が異なり、興味を引く。1号ブロック出土。黒曜石製(蓼科系)。

削器(第82図9、PL35)

第82図9は、幅広剥片を用いたもの。石器刃部を剥片端部に作出する。接-61。CP-52G出土。黒色安山岩。

加工痕ある剥片(第82図10、PL35)

1点のみ出土した。背面側の上端、及び、裏面側下端に石器の長軸に対向する剥離痕がある。一見、剥離は両極剥離的であるが、上下両端の剥離軸が異

第30表 器種・石材構成(Ⅲ文化-12地点)

	角錐状	ナイフ	加工痕	剥片	碎片	礫	礫片	合計
黒安	1	0	0	2	5	0	0	8
黒頁	0	0	0	0	5	0	0	5
黒曜石	0	2	0	1	14	0	0	17
チャート	0	0	1	1	14	0	0	16
ホルン	0	0	0	0	1	0	0	1
珪頁	0	0	0	1	0	0	0	1
雲石片	0	0	0	0	0	0	1	1
粗安	0	0	0	0	0	2	0	2
合計	1	2	1	5	39	2	1	51

II 調査の成果

なり、錯交剝離的であるというべきだろう。油光沢の強い良質なチャートを用いる。3号ブロック出土。

剥片・碎片 (第82図7・8・11、PL35)

第82図11は、大形の幅広剥片。側縁に礫面を大きく残す。剥片形状は台形状に近い。剥片端部は末端の斑晶部分からヒンジ状に剝離。2号ブロック出土。黒色安山岩。10は、左右両辺に黒曜石形成時の crush 面を取り込んだ碎片か？左側縁側の先端を浅く加工するほか、裏面側の折れ面にも剝離意図不明な剝離痕が見られる。形態的には、角錐状石器等の先端部破片に似る。4 a ブロック出土。黒曜石。

接合資料

1例3点(接-61)を確認した。剥片の出土量に比べて、碎片の出土量が多い。剥片生産より石器の二次加工に比重を置いている。

接合資料-61 (第91図、PL38)

3点からなる接合資料。拳大程度 of 円礫を石核に用いて、上面の平坦面(礫面)から打点を左右に振り、小形剥片を剝離している。碎片1は、1号ブロック、他の2点はグリッド出土。黒色安山岩。

石器と礫の分布

石器群は1 a 地点から南へ長く延びる尾根の先端部に分布した。石器は礫・礫片3を含む51点が出土、

第31表 ブロック別器種構成 (Ⅲ文化-12地点)

	角錐状	ナイフ	加工痕	剥片	碎片	礫	礫片	合計
1号ブロック	0	1	0	0	3	1	0	5
2号ブロック	0	0	0	2	9	0	0	11
3号ブロック	0	0	1	1	2	0	1	5
4 a ブロック	1	1	0	2	15	0	0	19
4 b ブロック	0	0	0	0	4	0	0	4
ブロック外	0	0	0	0	6	1	0	7
合計	1	2	1	5	39	2	1	51

第32表 ブロック別石材構成 (Ⅲ文化-12地点)

	チャート	ホルン	雲石片	珪頁	黒安	黒頁	黒曜石	粗安	合計
1号ブロック	2	0	0	0	0	1	1	1	5
2号ブロック	4	0	0	0	7	0	0	0	11
3号ブロック	3	0	1	0	0	1	0	0	5
4 a ブロック	6	1	0	1	1	0	10	0	19
4 b ブロック	0	0	0	0	0	3	4	0	7
ブロック外	1	0	0	0	0	0	2	1	4
合計	16	1	1	1	8	5	17	2	51

石器ブロック4を確認した。その分布範囲は径10m程であり、周辺域に同時期の石器群(第9~11地点)が3ヶ所に分布している。

1号ブロック (第104図)

位置 尾根状丘陵の先端 (CO・CP-53G) 規模 長径2.4m・短径1.0m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 VI・IX層 (IX層から4点出土)

出土点数 5点

器種構成 ナイフ形石器1・碎片3・礫1

石材構成 チャート2・黒曜石1・黒色頁岩1・粗粒輝石安山岩1

その他 礫1はVI層に出土。礫重量は64g。

2号ブロック (第104図)

位置 尾根状丘陵の先端部 (CP-52)

規模 長径2.8m・短径1.1m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 VII・VIII~X層 (7点の石器がIX層から出土)

出土点数 11点

器種構成 剥片2・碎片9

石材構成 黒色安山岩7・チャート4

その他 黒色安山岩は少量の剥片生産が想定可能であるが、チャートについては

のみ出土しており、黒色安山岩と同様な少量の剥片生産が想定可能か、現状では判断できない。

3号ブロック (第104図)

位置 尾根状丘陵の先端 (CO-51・52G)

規模 長径2.0m・短径1.5m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 VII・VIII層・X層 (VII・VIII層から4点が出土)

出土点数 5点

器種構成 加工痕ある剥片

1・剥片1・碎片2・礫片1

石材構成 チャート3・黒色頁岩1・雲母石英片岩1

その他 X層出土の礫片（雲母石英片岩製）は、基盤層中に起源する礫の可能性あり。

4 a号ブロック（第105図）

位置 尾根状丘陵の先端（CN-51G）

規模 長径2.8m・短径1.9m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 VII・VIII層～X（IX層から12点出土）

出土点数 19点

器種構成 ナイフ形石器2・剥片2・碎片15

石材構成 黒曜石10・チャート6・黒色安山岩1・珪質頁岩1・ホルンフェルス1

その他 黒曜石製碎片類の出土量が多い。出土したナイフ形石器（第82図4・5）は4 aブロックで製作？

4 b号ブロック（第105図）

位置 尾根状丘陵の先端（CN-51G）

規模 長径0.8m・短径0.5m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX～X層（IX層から3点出土）

出土点数 4点

器種構成 碎片4

石材構成 黒色安山岩5・珪質頁岩2・チャート1・黒色頁岩1

接合資料の分布

1例（接-61）のみ確認した。剥片3点からなる接合資料であり、1点は2号ブロックの出土であるが、残る2点は上層の包含層調査時に出土したものであった。出土地点はCP-52G。

石材分布

石器石材は8種類を確認した。遺跡内で剥片生産に供した石材は半数ほど（黒曜石・黒色頁岩・チャート・黒色安山岩）で、珪質頁岩・ホルンフェルス等は単独で出土した。出土資料は母岩的特徴に乏しく

分類が困難であったため、以下、石材別の見た分布状況を記していきたい。

黒曜石（第105図）

4 a・4 bブロックに集中分布した。その他の地点では、1号ブロックに1点・ブロック外に2点が分布した。4 a・4 bブロックの黒曜石は碎片類が主体を占めており、少量の剥片生産か、石器の二次加工に伴う可能性が指摘されよう。同地点には同種石材を用いたナイフ形石器が出土しており、示唆的である。1号ブロックの1点については蓼科系黒曜石を用いたナイフ形石器であり、搬入石器と考えてよい。ブロック外の2点については4 a・4 bブロック周辺に出土していることから、人為的に持ち出した可能性は少ないのではないかと考えている。

黒色頁岩（第105図）

5点とも碎片であり、分布も散漫であり、ここでは評価を保留しておきたい。

チャート（第105図）

黒色頁岩同様、碎片類が主体を占めており、その評価は難しい。分布論的には、黒色頁岩より集中性があり、1～4号ブロックに2～6点が分布する。少量の剥片生産、あるいは、石器の二次加工ということになるだろうが、詳細については不明。

黒色安山岩（第105図）

2号ブロックに集中分布したほか、4 aブロックにナイフ形石器1点が分布した。4 aブロックの1点は風化状態が2号ブロックの石片類とは明らかに異なる。搬入石器。

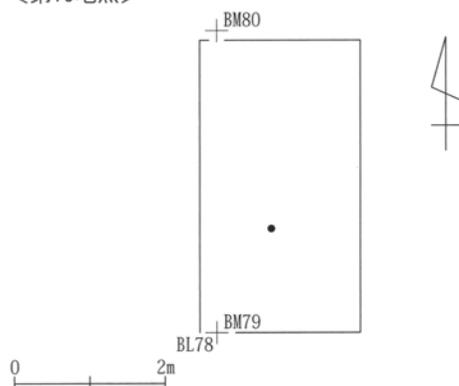
<第13地点>

丘陵南西側から入り込んだ凹地に臨む丘陵南西側斜面に位置する。石器は1点のみ出土（第74図）。

石器（第83図1、PL35）は、黒曜石製の切出形石器。小形の幅広剥片を横位に用い左右の両側縁に加工、石器を作出している。珪晶の含有量が少なく、透明感は乏しい。重さ1.74gを測る。高原山。

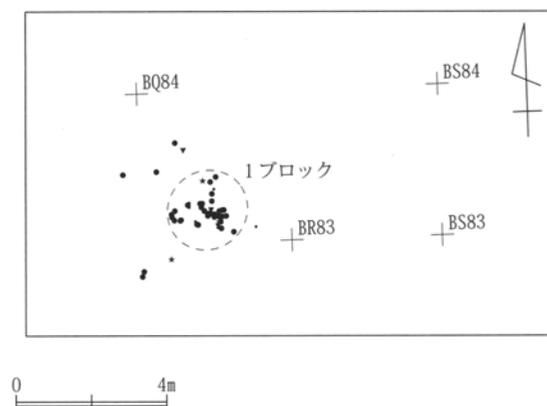
II 調査の成果

<第13地点>



第74図 石器の分布7(第13地点)

<第14地点>



第75図 石器の分布8(第14地点)

<第14地点>

概要

丘陵の西側から入り込む浅い谷頭に近い丘陵の南西側斜面に位置する。第13地点の北に隣接、3ヶ所の石器ブロックを確認した(第75図、PL5)。

石器はⅦ層に2点・Ⅷ層に1点、Ⅸ層に27点、Ⅹ層に22点・Ⅺ層に9点・Ⅻ層に2が出土、Ⅹ層に出土量のピークを有する石器群と判断した。

石器石材は黒色頁岩(63点)のみで構成され、他の石材については全く確認できなかった。

接合資料は7例38点を確認した。接合資料7例は90°打面転移を行い、幅広剥片を剥離するものが主体を占めた。

出土石器

総計63点の石器が出土している。石核・剥片類の出土が圧倒的多数を占め、活発な剥片生産を予想することができる。主な石器としてナイフ形石器・加工痕ある剥片が出土している。

ナイフ形石器(第83図2、PL35)

1点のみ出土した。石器下半部を欠損する。調整加工は典型的な blunting であり、剥片の打面部が石器の先端側となる素材剥片の用い方からみて、典型的な二側縁加工のナイフ形石器と理解できよう。1号ブロック出土。黒色頁岩。

石核(第83図3、PL35)

やや扁平な河床礫を分割して石核素材としたものの。剥離は剥離面と打面を交互に入れ替え行われ、幅広剥片を剥離する。1号ブロック。黒色頁岩。

接合資料

7例38点の接合資料を確認した。打面転移を繰り返し行う接合資料が多く、小形剥片を剥離する。

接合資料—47(第92図、PL39)

計17点からなる接合資料。径10cm・厚さ5cmを測る河床礫を石核素材に用いる。当初、剥離を原石の正面右側で開始する。小形剥片を剥離した後、やや厚い幅広剥片1を剥離、90°打面転移して2・3を連続剥離する。これ以後の剥離は打面と作業面を交互に入れ替えており、大振りの剥片剥離が展開(4~7)する。8から10の剥離は約1/3に減じた石核の最終的な消費状況ということになる。剥離に際し、基本的に打面調整は行わないようであるが、剥片11・12は打面調整的になっている。その他の剥片は1枚毎に打面転移して剥離している。1号ブロック出土。黒色頁岩—1。

- ○○○1
- 2→3⇒4⇒5→6⇒7⇒○⇒8⇒9→10
- 11→12⇒13→○ • 14→15

接合資料—48(第93図、PL38)

計8点からなる接合資料。石核素材は、河床礫を1/4程度に分割したものを用いている。剥片剥離

は正面で小形剥片を剥離したのち、上面で剥片1・2（1は剥離後、側縁を粗く加工）を剥離、続いて作業面を90°横に振り剥片3～5を剥離する。剥片6・7は剥片1の剥離面から連続剥離している。2～8は1号ブロック出土。1の加工痕ある剥片のみブロック外から出土。黒色頁岩—2。

接合資料—51（第94図、PL39）

石核1、剥片2点からなる接合資料。片側に礫面を大きく残す幅広剥片を石核素材に用いて、石核の側縁部分で剥片1を剥離、時計の針と反対方向に打点を移動させ、幅広剥片2を剥離する。ブロック外の3点が接合。黒色頁岩—3。

1→○○○→2→○○→3

接合資料—52（第94図、PL39）

4点の剥片からなる接合資料。上面の礫面を打面に剥片1を剥離、打面を右側縁に移し、剥片1と同一の作業面で剥片2・3を剥離する。1号ブロック出土。黒色頁岩—4。

1⇒2→3→4

接合資料—53（第94図、PL39）

4点の剥片からなる接合資料。4点中3点が礫面を残している。残存する礫表皮からみて、原石は20cm前後の河床礫が想定されよう。剥片1が平坦打面を有していることから、原石を分割してえた大形の剥片を石核としたものと理解している。剥片1を剥離してから剥片2を剥離する間の剥離については打面高差が2.5cmほどあって、複数枚の剥片を剥離した可能性が高い。剥片2～4は、高さ5cm・厚さ2.5cmの大形剥片を石核に選択、90°打面転移を行い剥離する。1号ブロックの剥片3点とブロック外の1点が接合する。黒色頁岩—4。

（原石の分割）

1⇒○○⇒（2⇒3→4）

石器と礫の分布

石器群は丘陵の西側斜面に分布した。石器63点が出土、石器ブロック1を確認した。その分布範囲は径3m程であり、周辺には同時期の石器群（第13・

15地点）が分布した。

1号ブロック（第106図）

位置 丘陵の西側斜面（BQ—83G）

規模 径1.6m

分布状態 集中分布する。

出土層位 VII～XII層（IX層から27点が、X層から22点が出土）

出土点数 55点

器種構成 ナイフ形石器1・加工痕ある剥片2・石核3・剥片32・碎片17

石材構成 黒色頁岩55

その他 第15地点と接合関係（接—47）を確認した。

接合資料の分布

接合資料7例を確認した。1例を除いて、総て1号ブロックに分布しており、基本的にブロック内で消費が完結していた。直線距離で12mほど離れて接合した第15地点の石器は剥離順で4番目の背面に礫面を大きく残す打面作出剥片である。剥片が単独出土した理由については明確ではなく、判断を保留しておきたい。

母岩別資料の分布

分析の結果、石器群は4母岩からなることが判明した。石器群は石器ブロック1ヶ所のみからなり、これら4母岩の集中消費地点ということが出来る。石器分布は見た目極めて単純であったが、各母岩の分布は偏在傾向が指摘可能で、以下その分布傾向について指摘しておきたい。

認定した石器ブロックは径1.6mほどであった。小規模であったが、満遍なく石器石片類が分布するというより、濃密な分布域（ブロックの中央付近、第106図を参照）と、散漫な分布域からなることが分かる。分布論的にはブロック中央部に黒色頁岩—3を除く各母岩が分布すること、器種レベルでは中央の分布域には剥片のみならず碎片も多く分布すること、ブロックの北辺や西辺の散漫な分布域には剥片

II 調査の成果

のみ偏在することが理解されよう。簡単に言えば、「石器石片類が密集するブロック中央部で剥離してから、周辺部に持ち出す」という行動論的理解が可能であり、ブロック外に出土した加工痕ある剥片(第93図1、接-48)は、そうした典型例なのであろう。

唯一、ブロック外に分布したのが接-51(黒頁-3)であり、同一母岩に分類した剥片1点(接-50)がブロック内に分布した。これについては、従来の「密集部で剥離、周辺部に持ち出した」という理解は妥当性を欠く。この点については、遺跡において展開した諸活動の継続的・累積的所産、時間差など、別の理由を求めなければならないだろう。

<第15地点>

第13地点から東側に15mほど離れた地点に位置する(第76図)。石器2点が出土した。

1点(第83図4、PL36)は左側縁に礫面を残す小形剥片。平坦な剥離面打面より剥離、パルプの発達は弱い。石器の断面形状は三角形状を呈する。斑晶の少ない良質な黒色安山岩を用いる。

残る1点は、第14地点出土の石器と接合関係を有

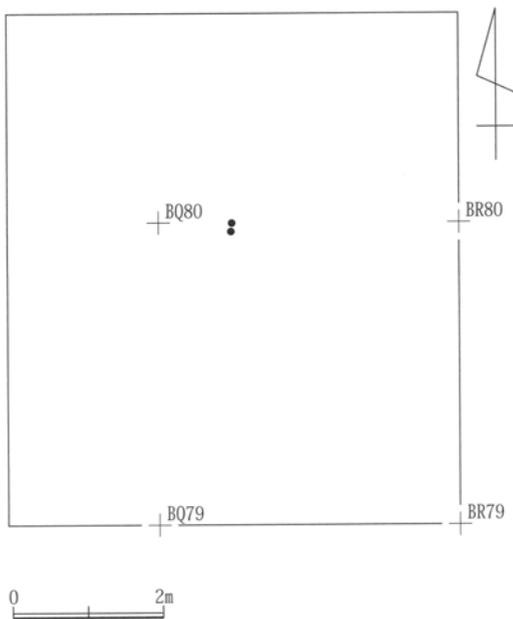
する幅広剥片(第92図4、接-47)で、その背面には礫面を大きく残している。剥片の剥離地点は第14地点と考えるのが妥当であるが、剥片は甲高(厚さ2cm)であり、石器素材として適当ではなく、剥離地点から移動する理由については明確には判断できなかった。黒色頁岩。

<第16地点>

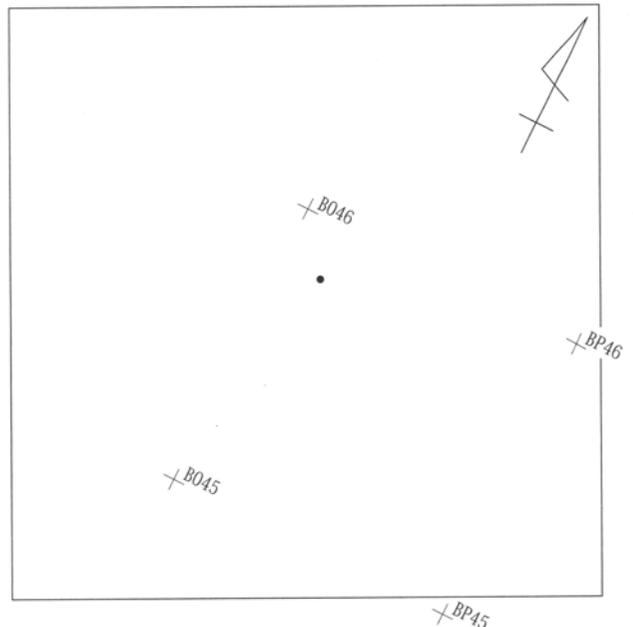
調査区南西端に近い丘陵南西側斜面に位置する(第76図)。石器は1点のみが出土、周辺域には石器が確認できなかった。

第83図5(PL36)は、背面側に礫面を大きく残す幅広剥片。調査時に背面側の右側縁を欠損する。礫面は平坦であるが、その表面は激しく円礫化する。下端部に風化剥離面を取り込んでいる。激しく円礫化した礫面には多数の「割れ円錐」が重複した状態を観察することができるが、その礫面は河床で採取できるような黒曜石原石の礫面に似る。石材は良質で、斑晶等の不純物は含まれないことから、その採取地は露頭直下というより、数キロ程度河川を流下したのち採取されたものだろう。黒曜石製。蓼科。

<第15地点>



<第16地点>



第76図 石器の分布9(第15・16地点)

<第17地点>

調査区南西端に近い、丘陵南西側斜面に位置する(第77図)。周辺域には当該期石器群の出土地点が点在している。石器は1点のみが出土、周辺域には石器が確認できなかった。

出土した石器は、重さ0.17gを測る破片である。小片だが打面もバルブも良好に残存しており、形態的属性は通常の破片と変わらない。石器石材は粗粒輝石安山岩を用いている。

通常、この種の石材は礫群や敲石・磨石・その他の礫石器に用い、石器素材として用いるということではないが、出土石器に限って言えば、礫群構成礫や敲石に用いる典型的な粗粒輝石安山岩(ヤマ石、赤城のバカ石と呼称)とは違って、石材観は緻密であり、良質に見える。この破片が単独出土した理由については現状では断定できないが、小破片であるために良質石材に見えたということなら、敲石の破片として理解すべきであり、また、石器製作に耐え得る良質石材が含まれるということならば、破片として理解すべきである。この点については、実際に採取して、評価したい。

<第18地点>

第17地点から東に40mほど離れた、丘陵の斜面部(厳密に言えば、丘陵の南西側斜面ということになる)に位置する。石器は1点のみ出土しただけであり、周辺域に石器は確認できなかった(第77図)。

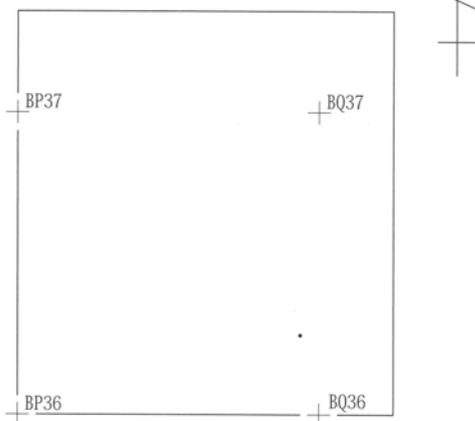
出土した石器は、粗粒輝石安山岩製の破片。小片であり断定は困難だが、裏面側は明瞭にリングが見られ、敲石の破片である可能性が高い。

<第19地点>

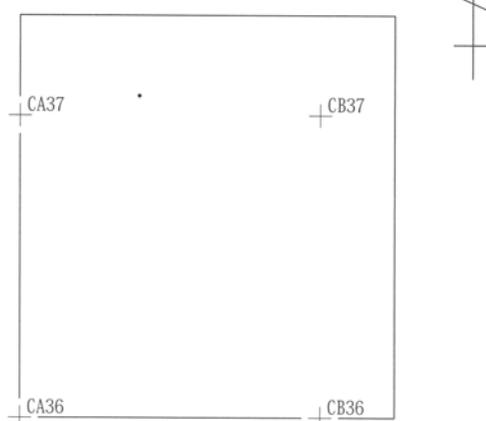
調査区南西端に近い丘陵の斜面部に位置する。第17地点から南西に40mほど離れており、石器1点が単独出土している(第78図)。

第83図6は、黒曜石製の剥片。剥片は剥離段階で打面部を欠損しており、鋭いエッジとなっている。このエッジには刃こぼれが連続的に並んでおり、剥片は「便宜的石器」として選択対象となったのかもしれない。重さ1.72gを測る。和田峠2。

<第17地点>



<第18地点>



0 2m

第77図 石器の分布10(第17・18地点)

II 調査の成果

<第20地点>

第19地点から南東側へ10mほど離れた地点に位置する。石器は1点のみ出土、周辺域に石器は確認できなかった(第78図)。

出土した石器は、黒色頁岩製碎片。その形状から周辺域に石器ブロックの存在も想定可能だが、周辺域の試掘が甘く、未調査部分に別の石器ブロックがあった可能性も否定できない。重さ0.23gを測る。

<第21地点>

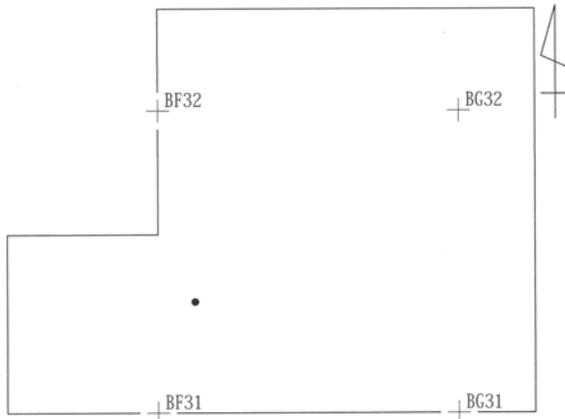
第17地点の南側、約15mの地点に位置する。1点(第83図7)は二側縁加工のナイフ形石器で、左右両側縁に急峻な調整加工を施す他に、石器基部に典

型的な裏面加工を施している。剥片剥離軸は背面側のそれに一致、素材は石刃というより幅広の縦長剥片というべきであろう。技術形態学的には、やや後出するかもしれない。IX層から出土。黒曜石製。和田峠1。残る1点は、黒曜石製碎片。重さ0.76gを測る。黒曜石として良質であるが、上記石器とは母岩が異なる。IX層から出土。

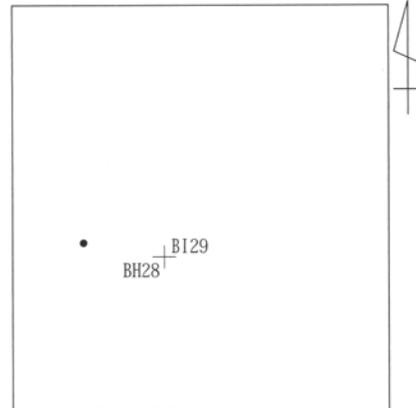
<第22地点>

第21地点から南東側に10mほど離れた、丘陵の斜面部に位置する。石器は2点が出土、周辺域から石器は確認できなかった。出土した石器は2点とも碎片で、黒色安山岩製のそれはポイントフレイク様を呈しており、黒色頁岩製のそれとは若干相違する。

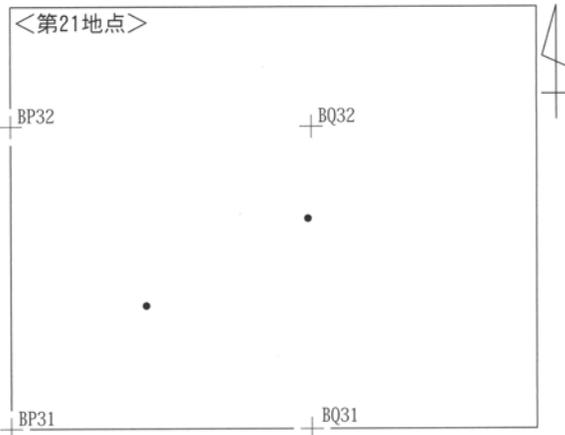
<第19地点>



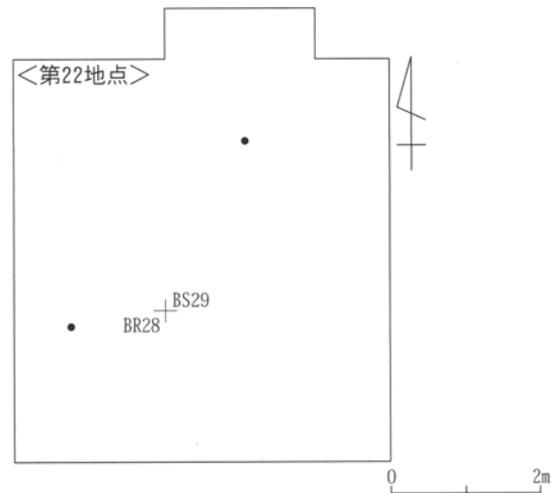
<第20地点>



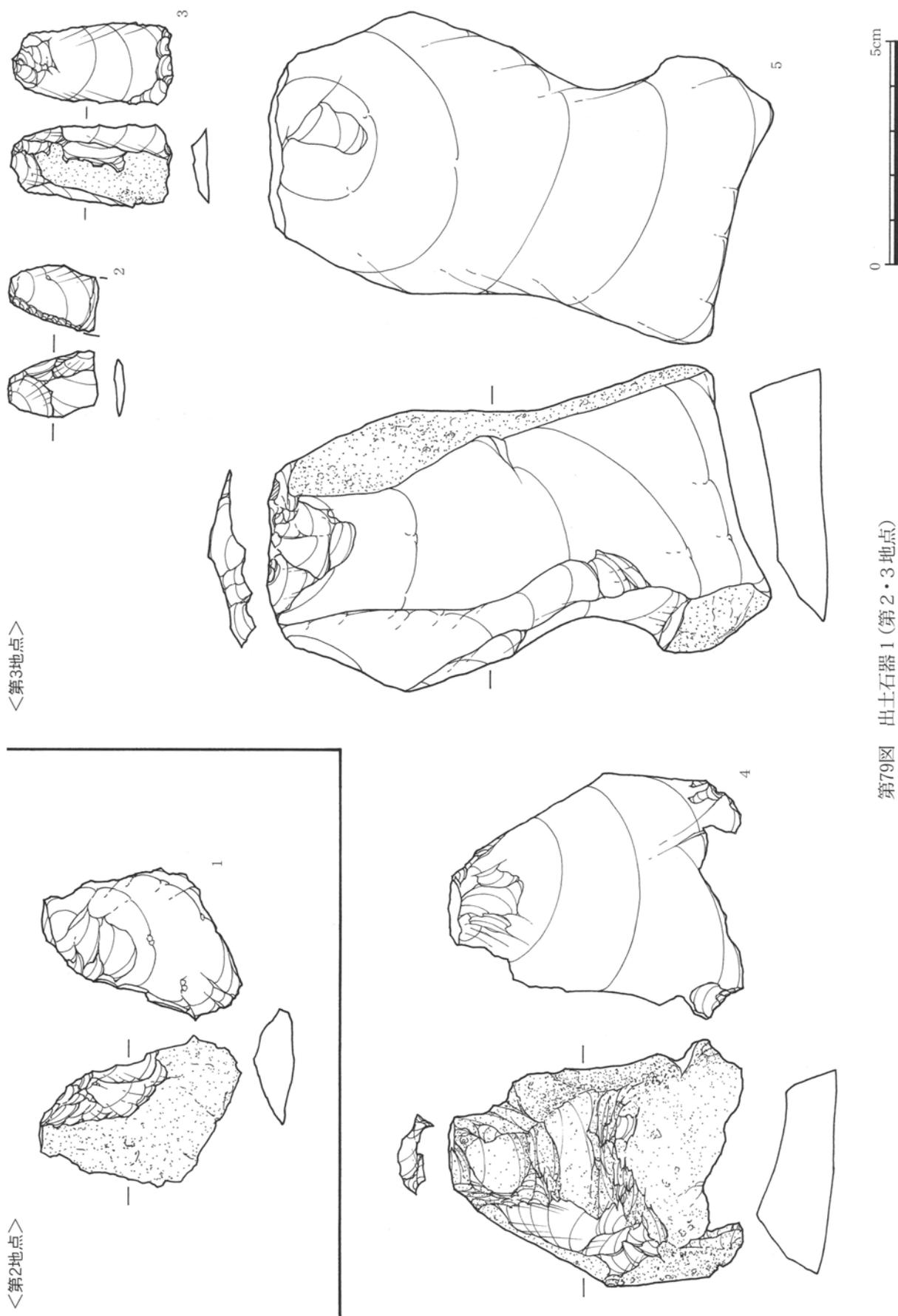
<第21地点>



<第22地点>



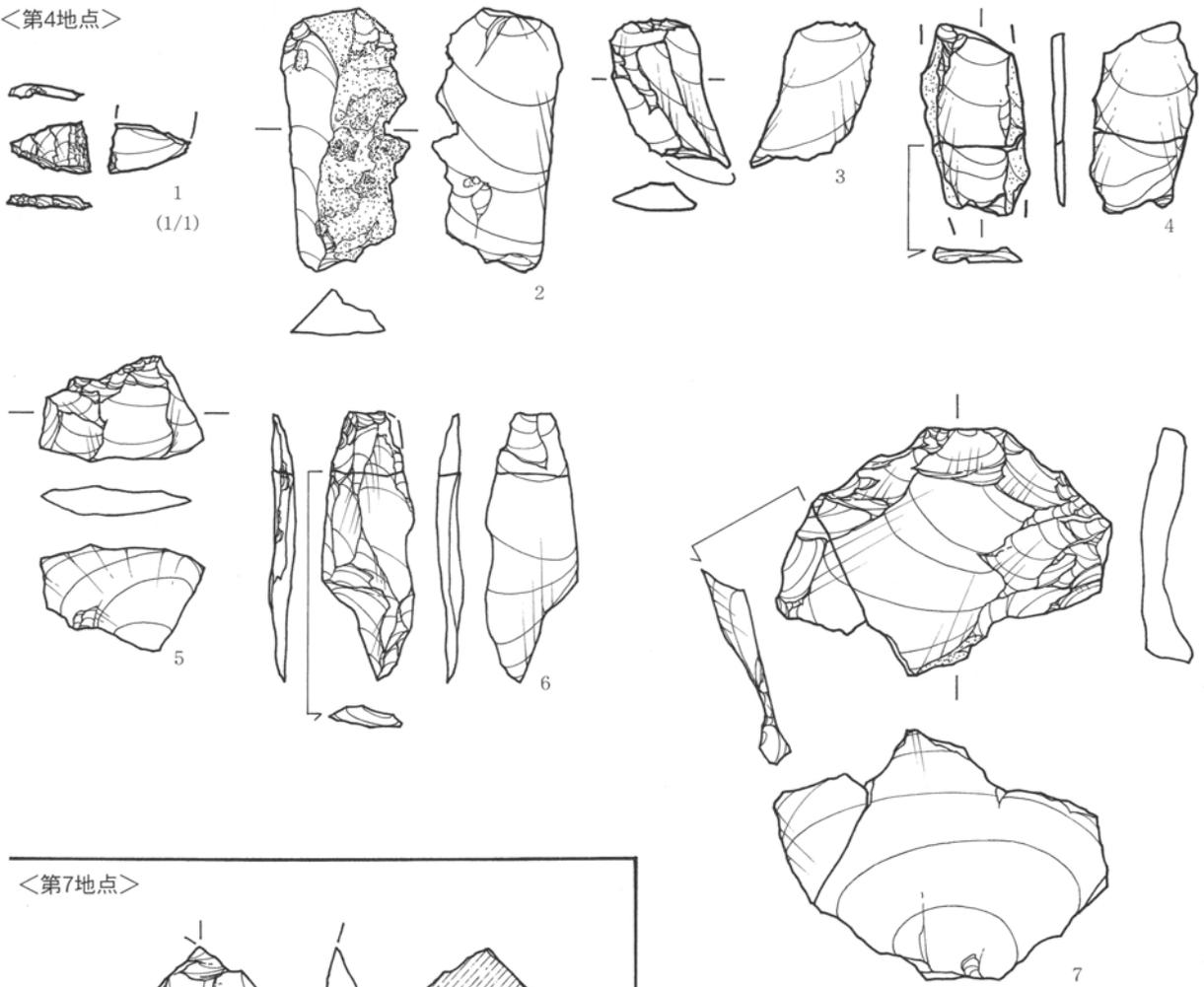
第78図 石器の分布11(第19~22地点)



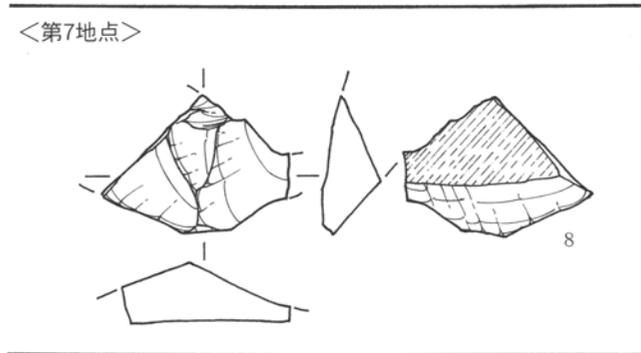
第79図 出土石器 1 (第2・3地点)

II 調査の成果

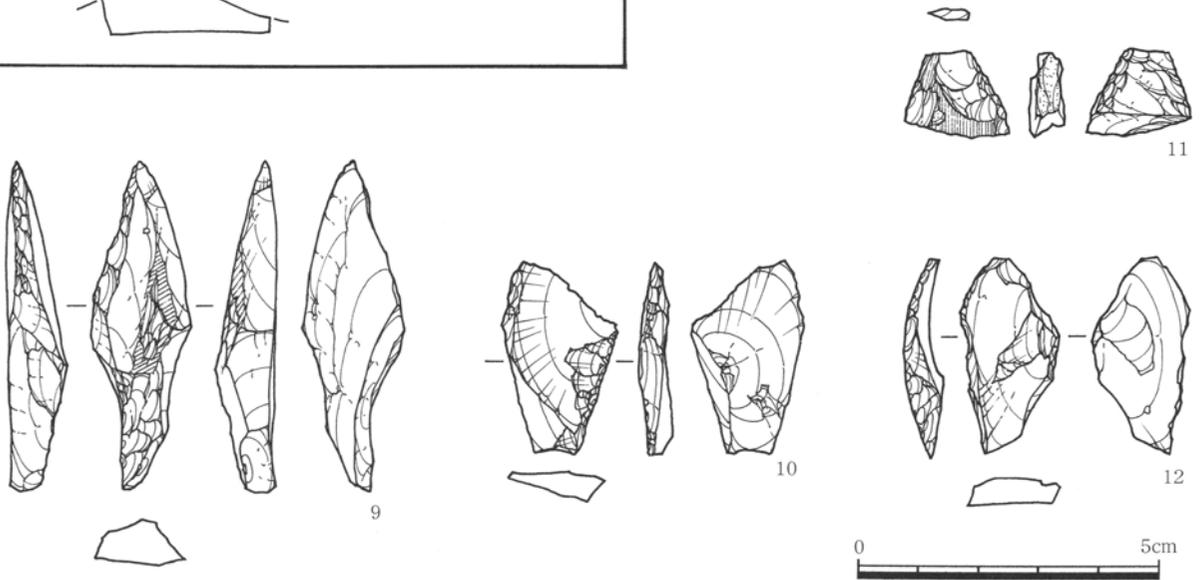
<第4地点>



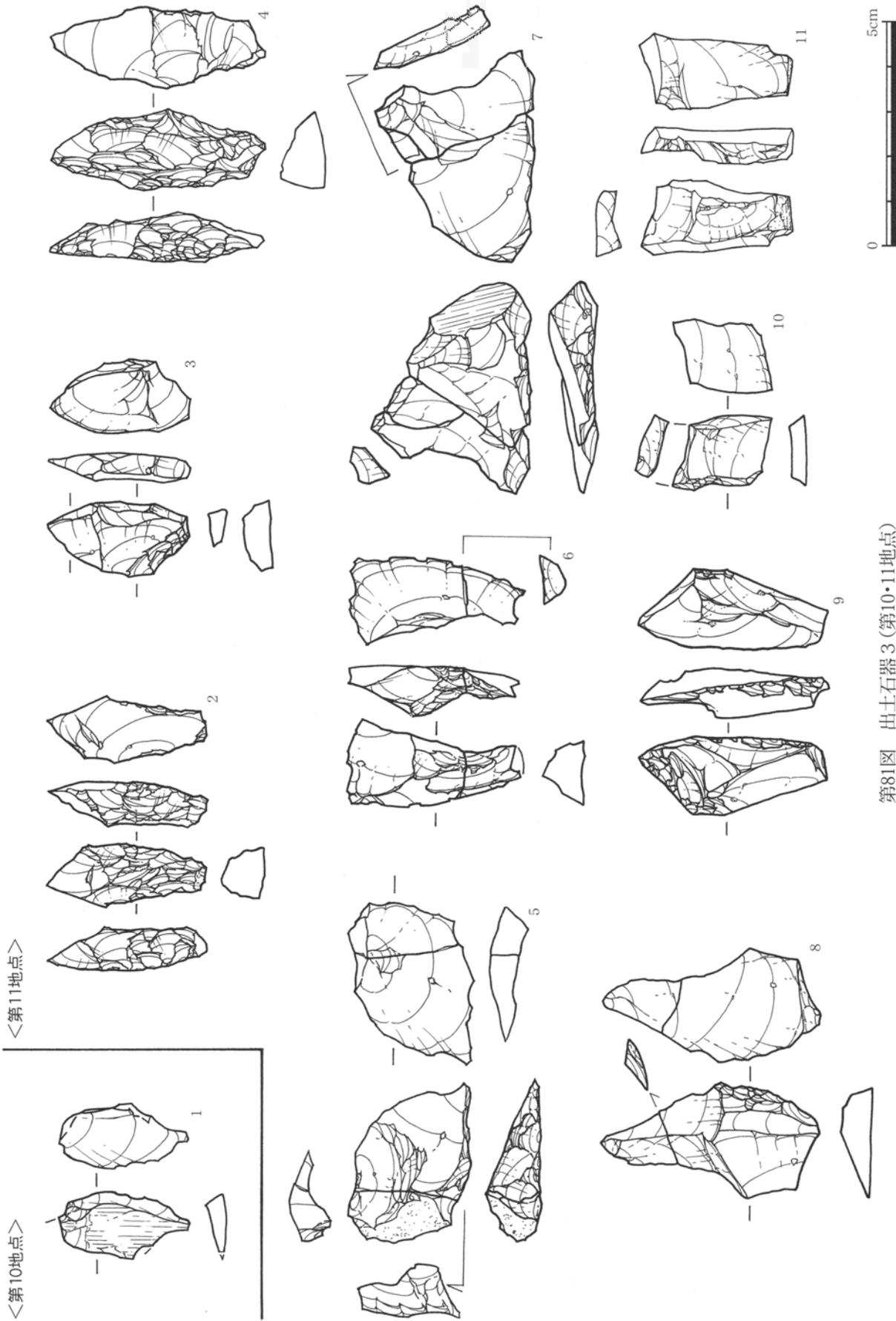
<第7地点>



<第9地点>

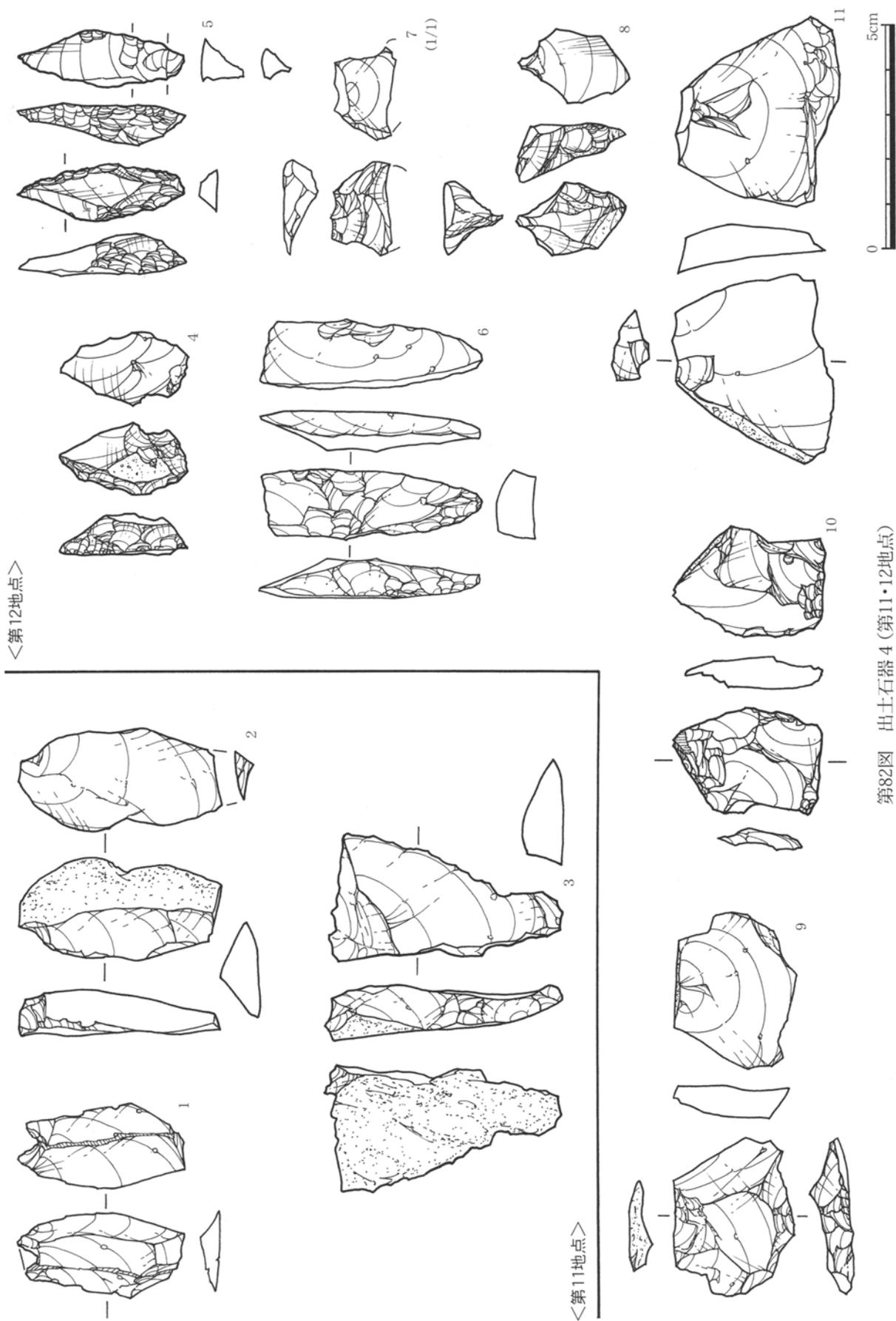


第80図 出土石器2(第4・7・9地点)



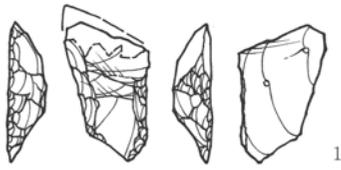
第81图 出土石器3 (第10·11地点)

II 調査の成果

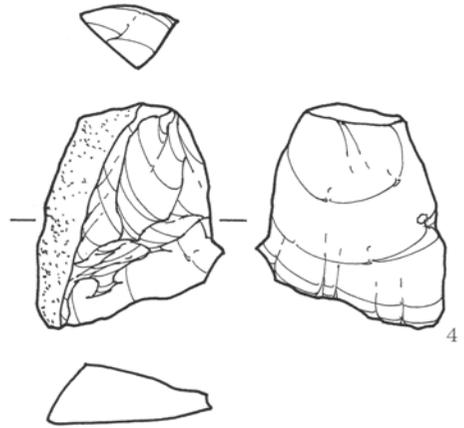


第82図 出土石器4 (第11・12地点)

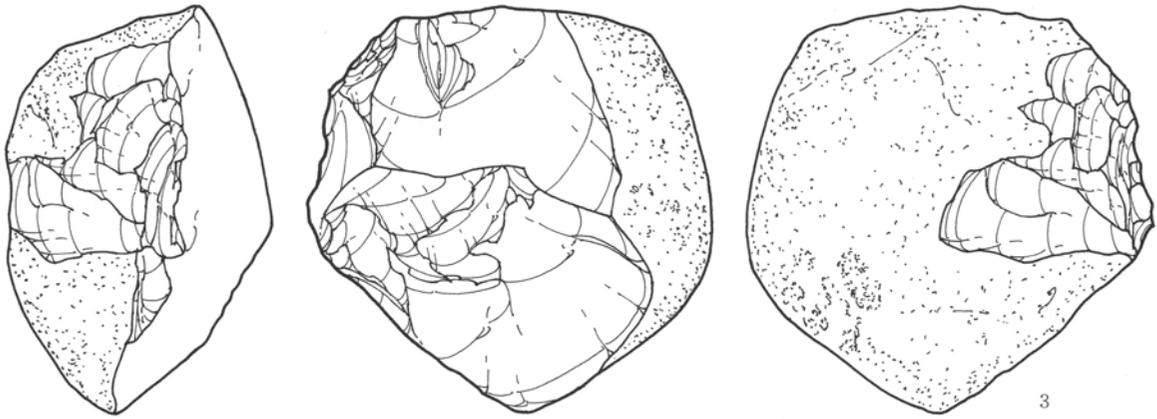
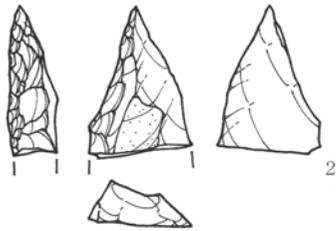
<第13地点>



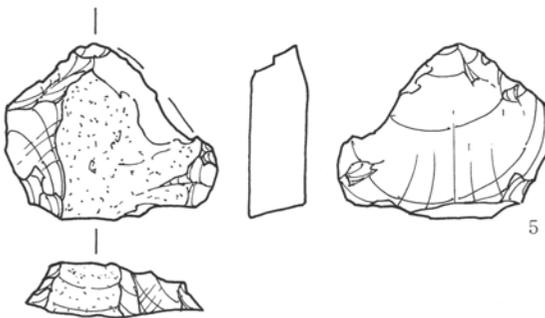
<第15地点>



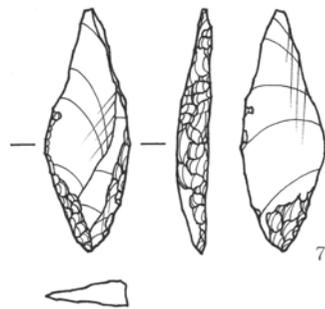
<第14地点>



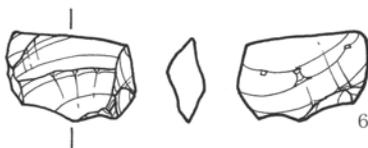
<第16地点>



<第21地点>



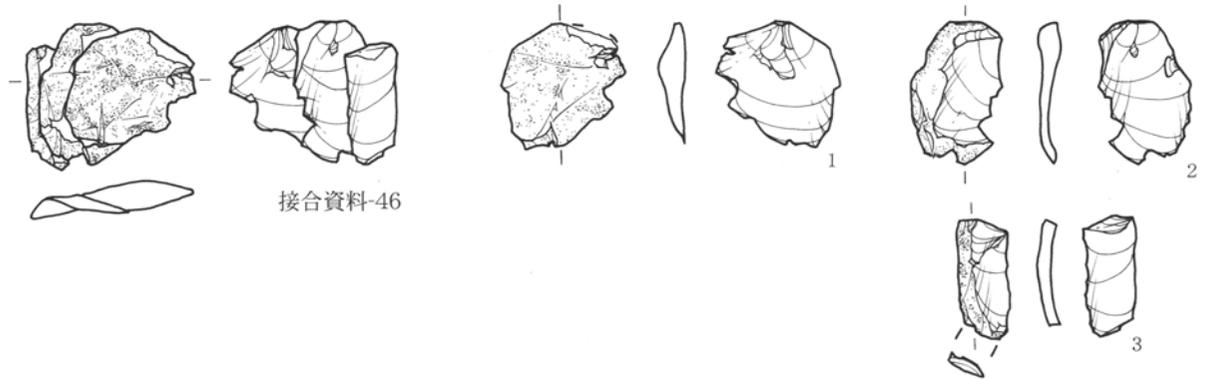
<第19地点>



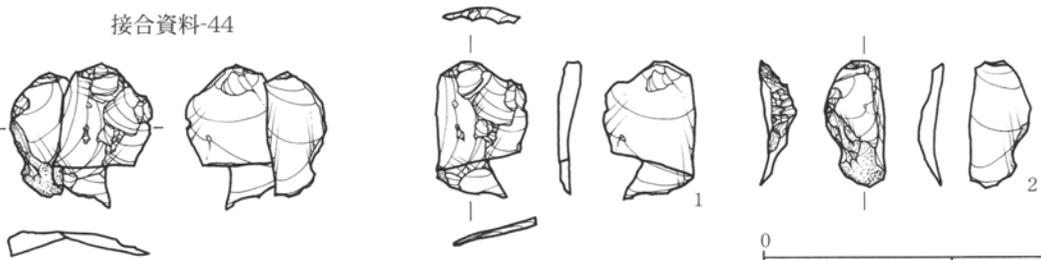
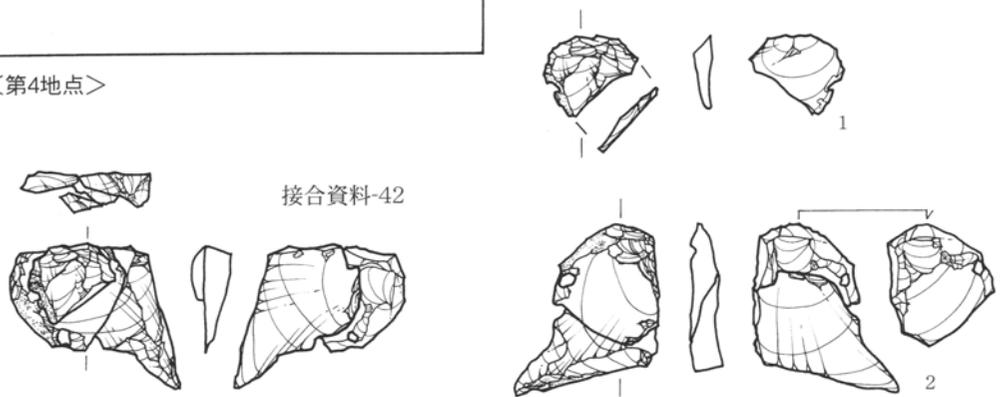
第83图 出土石器5 (第13~16·19·21地点)

II 調査の成果

<第3地点>



<第4地点>

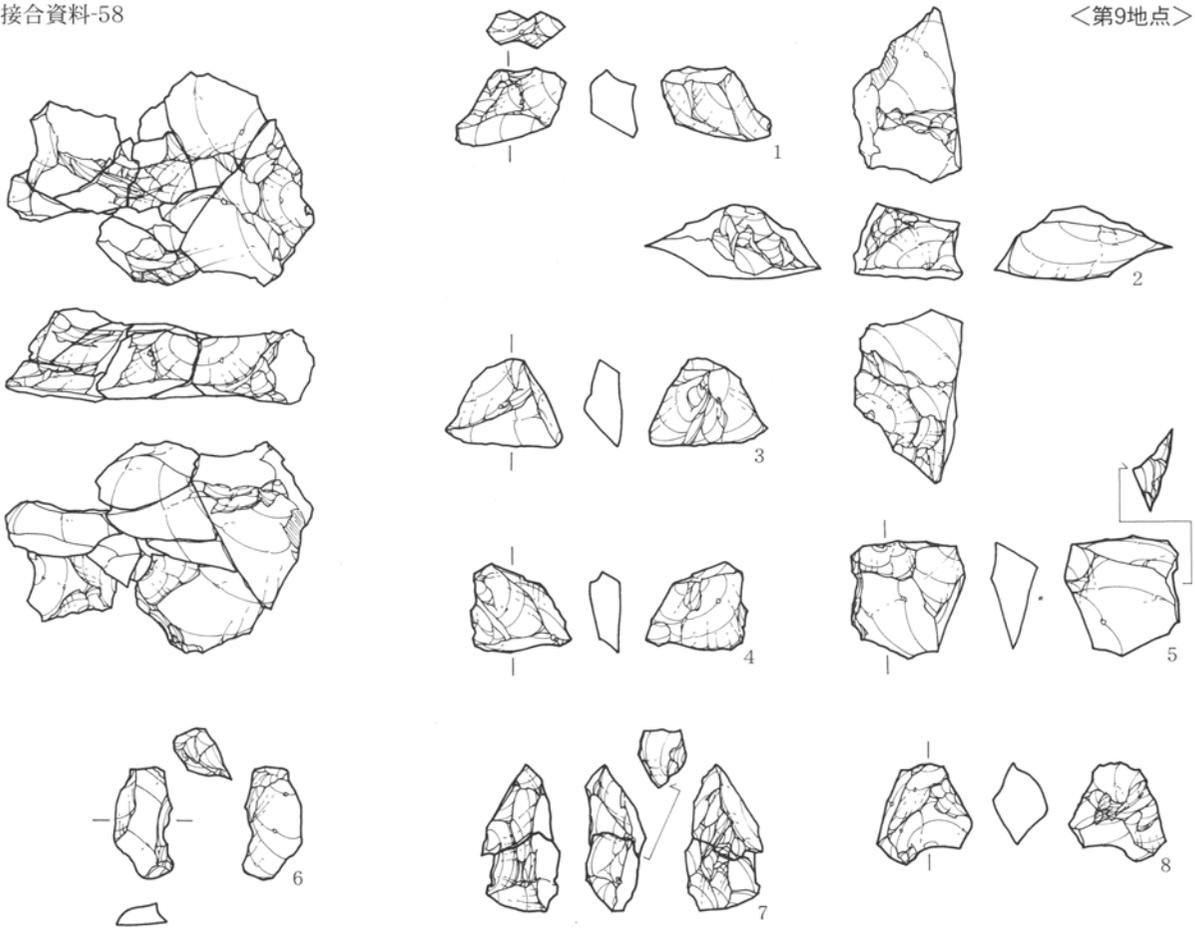


0 10cm

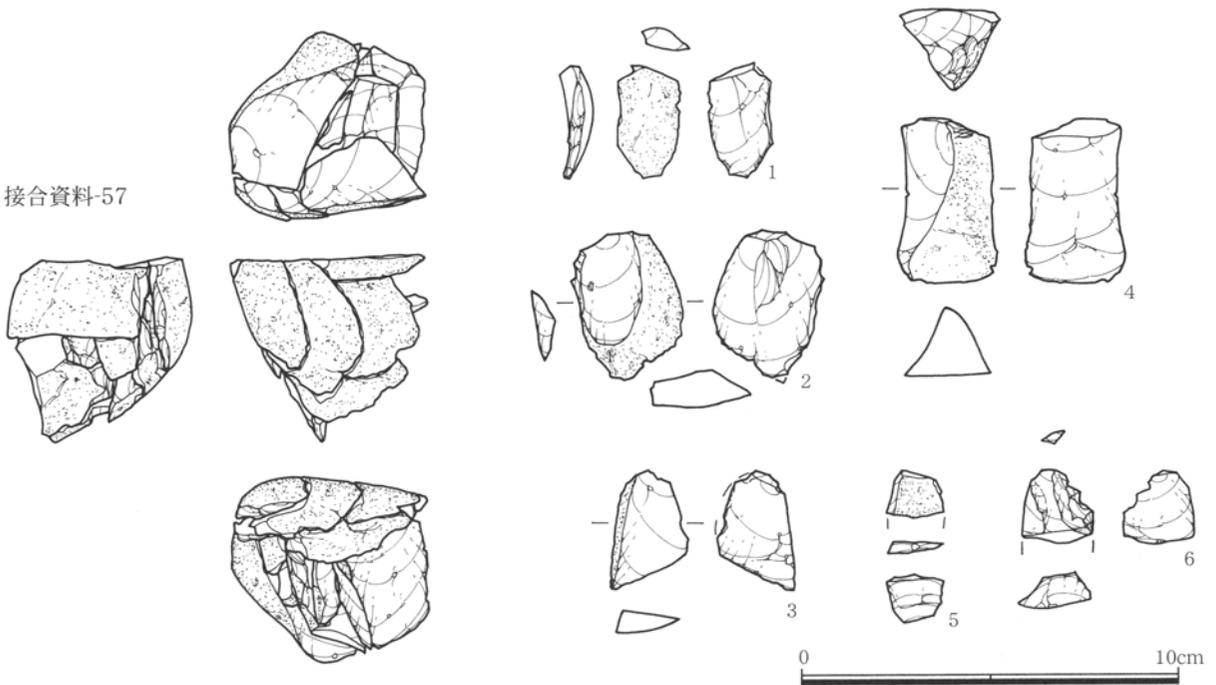
第84図 接合資料1(第3・4地点)

<第9地点>

接合資料-58

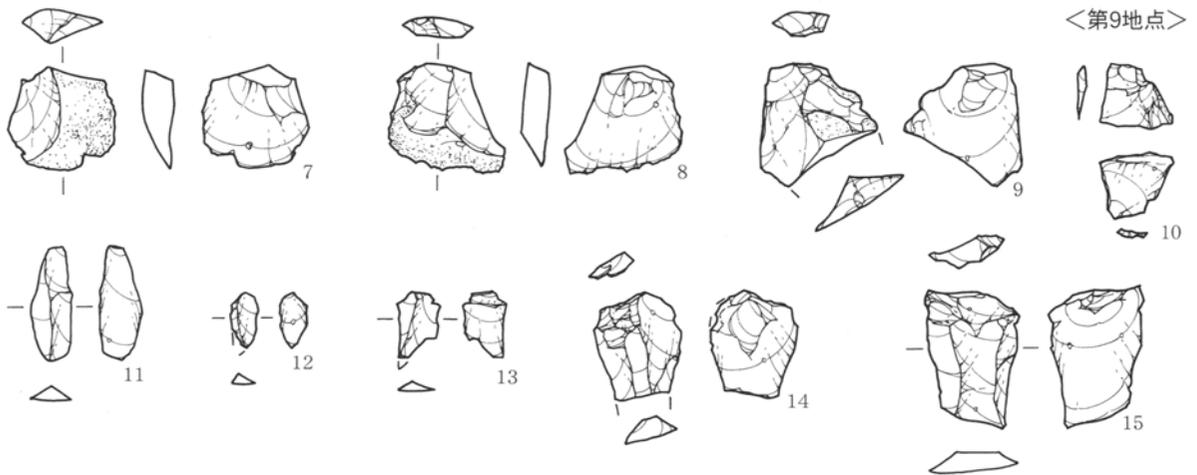


接合資料-57

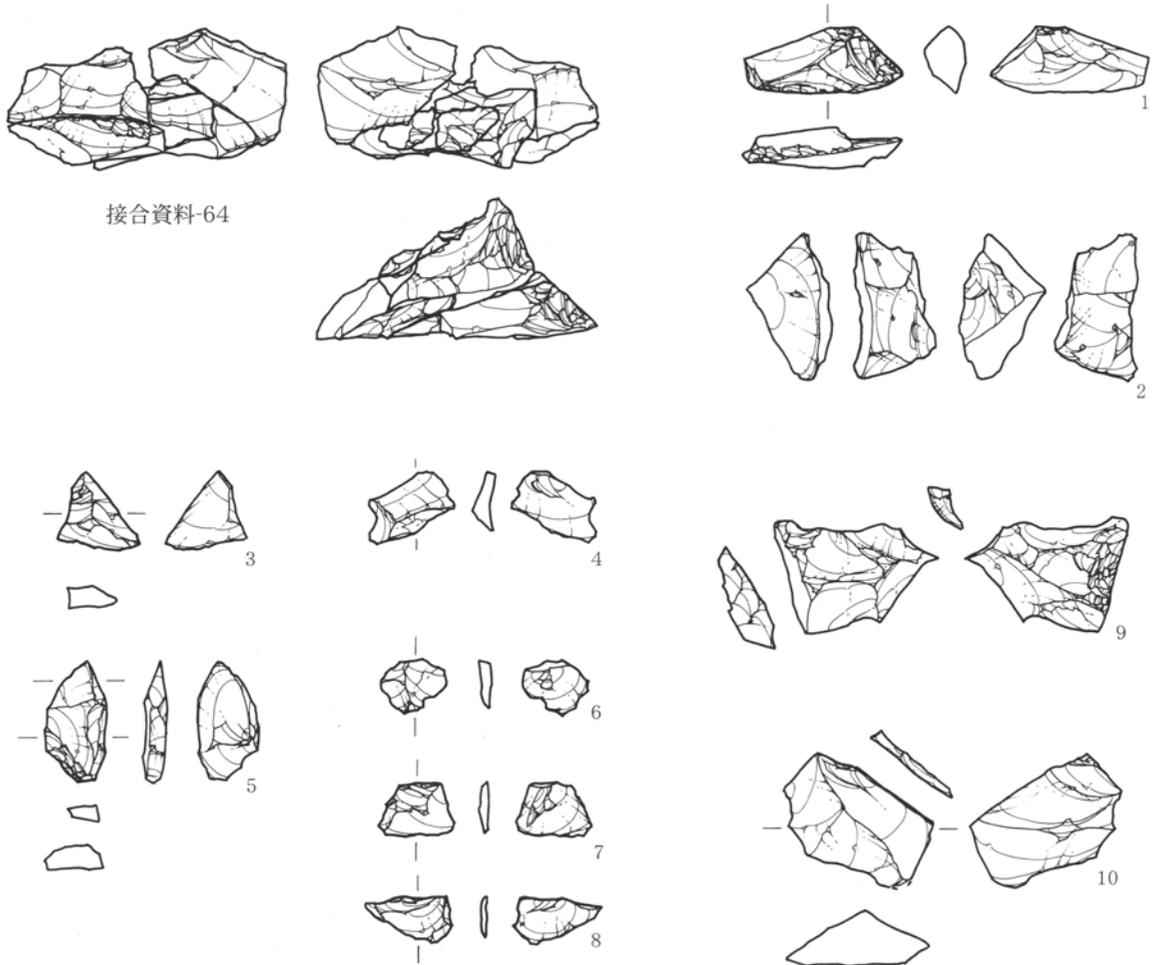


第85図 接合資料2 (第9地点)

II 調査の成果



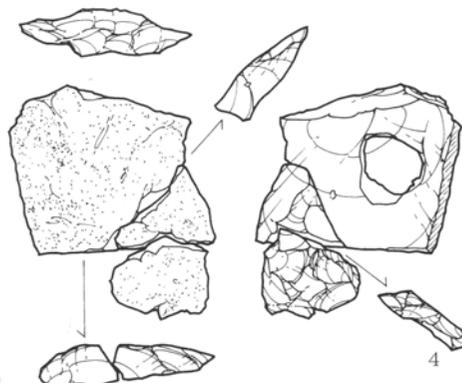
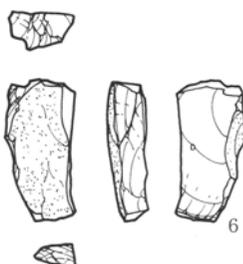
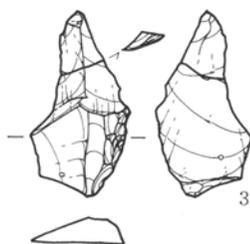
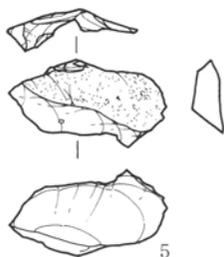
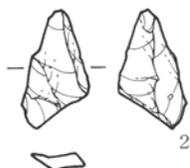
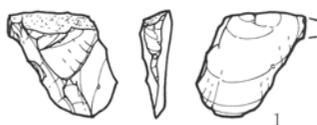
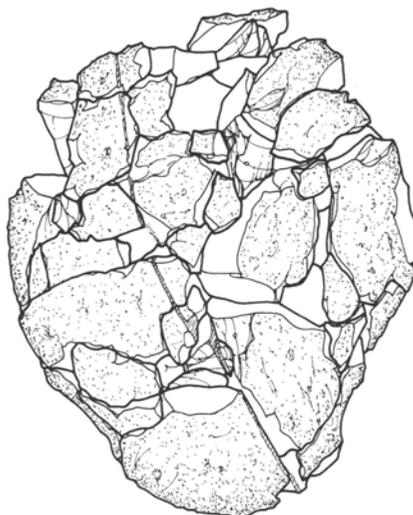
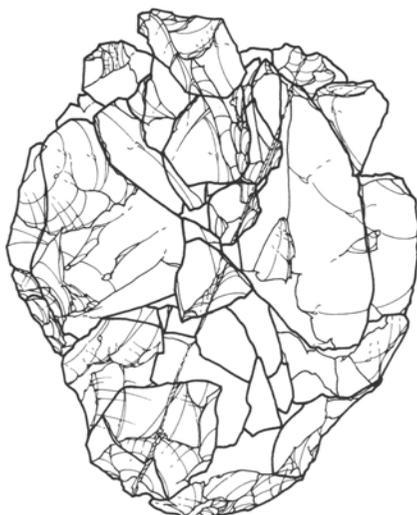
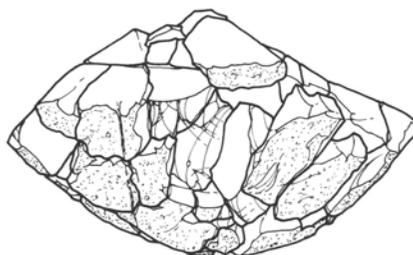
<第11地点>



第86図 接合資料3(第9・11地点)

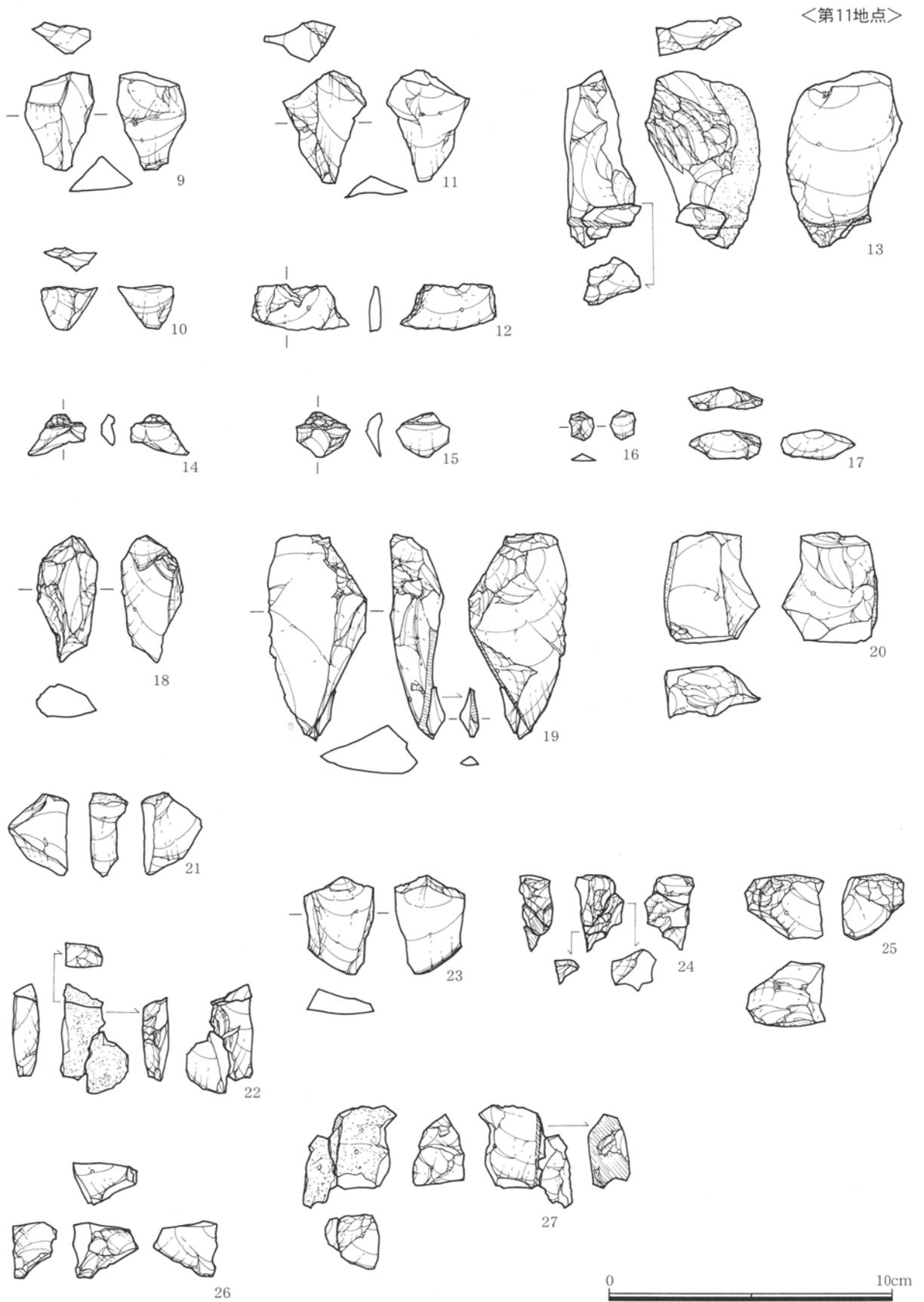
<第11地点>

接合資料-62



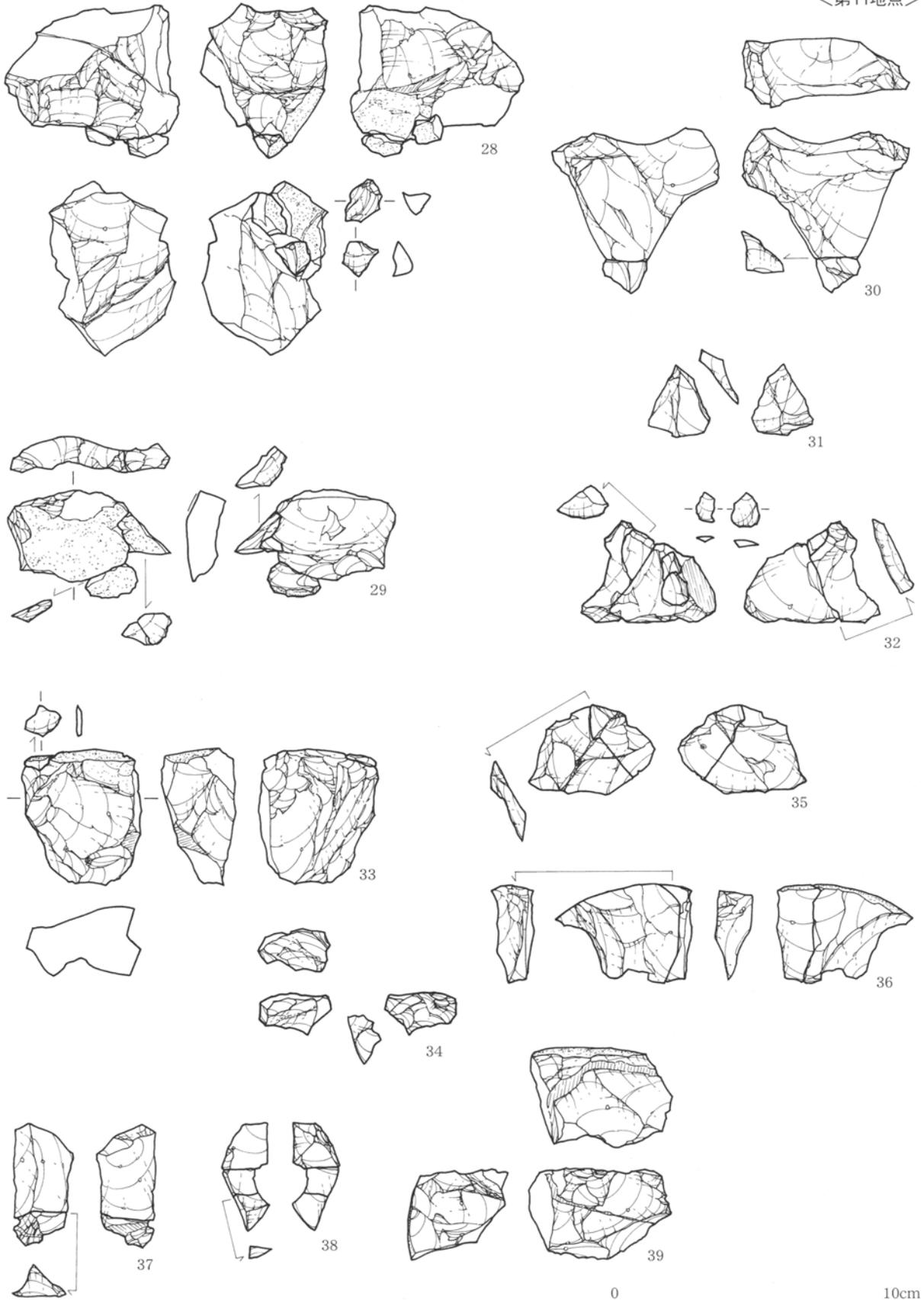
第87図 接合資料4 (第11地点)

II 調査の成果



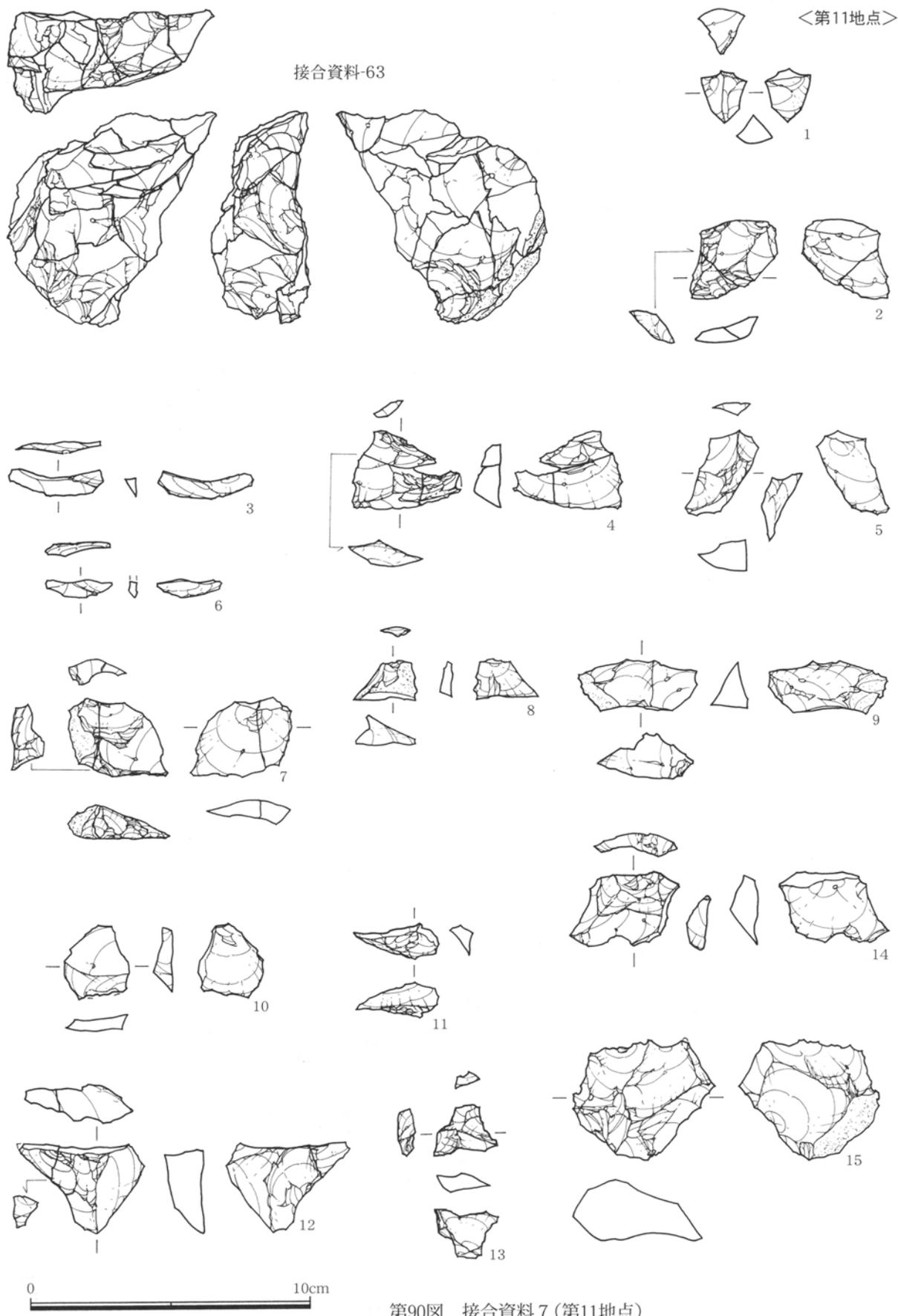
第88図 接合資料5(第11地点)

<第11地点>



第89図 接合資料6(第11地点)

II 調査の成果

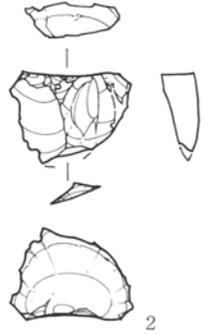


第90図 接合資料7 (第11地点)

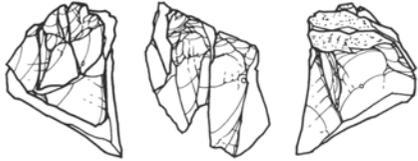
<第11地点>



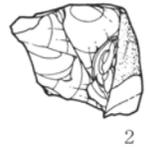
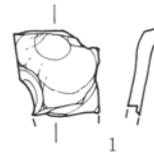
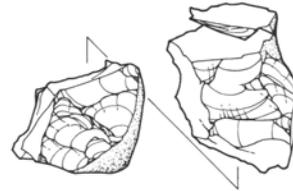
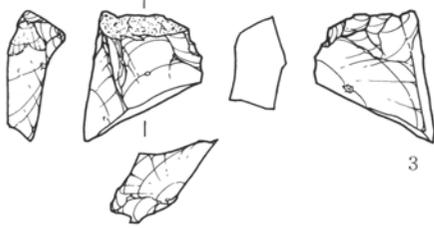
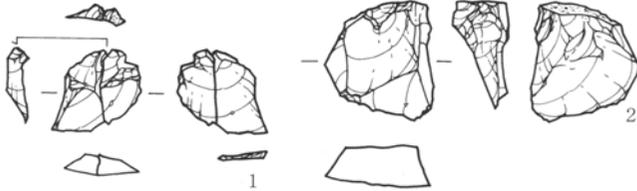
接合資料-65



接合資料-66



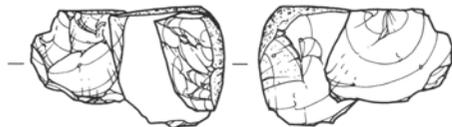
接合資料-71



<第12地点>

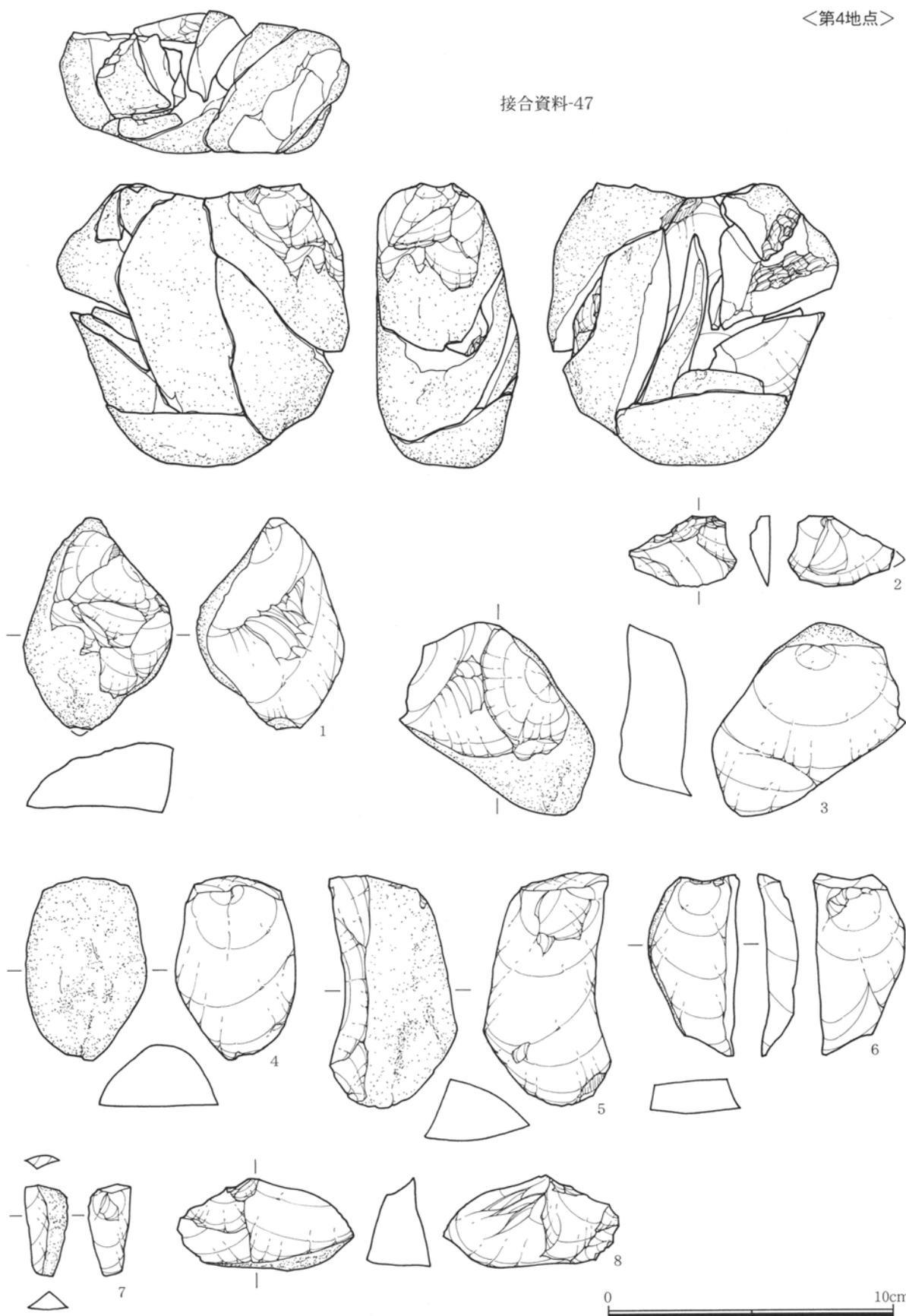


接合資料-61



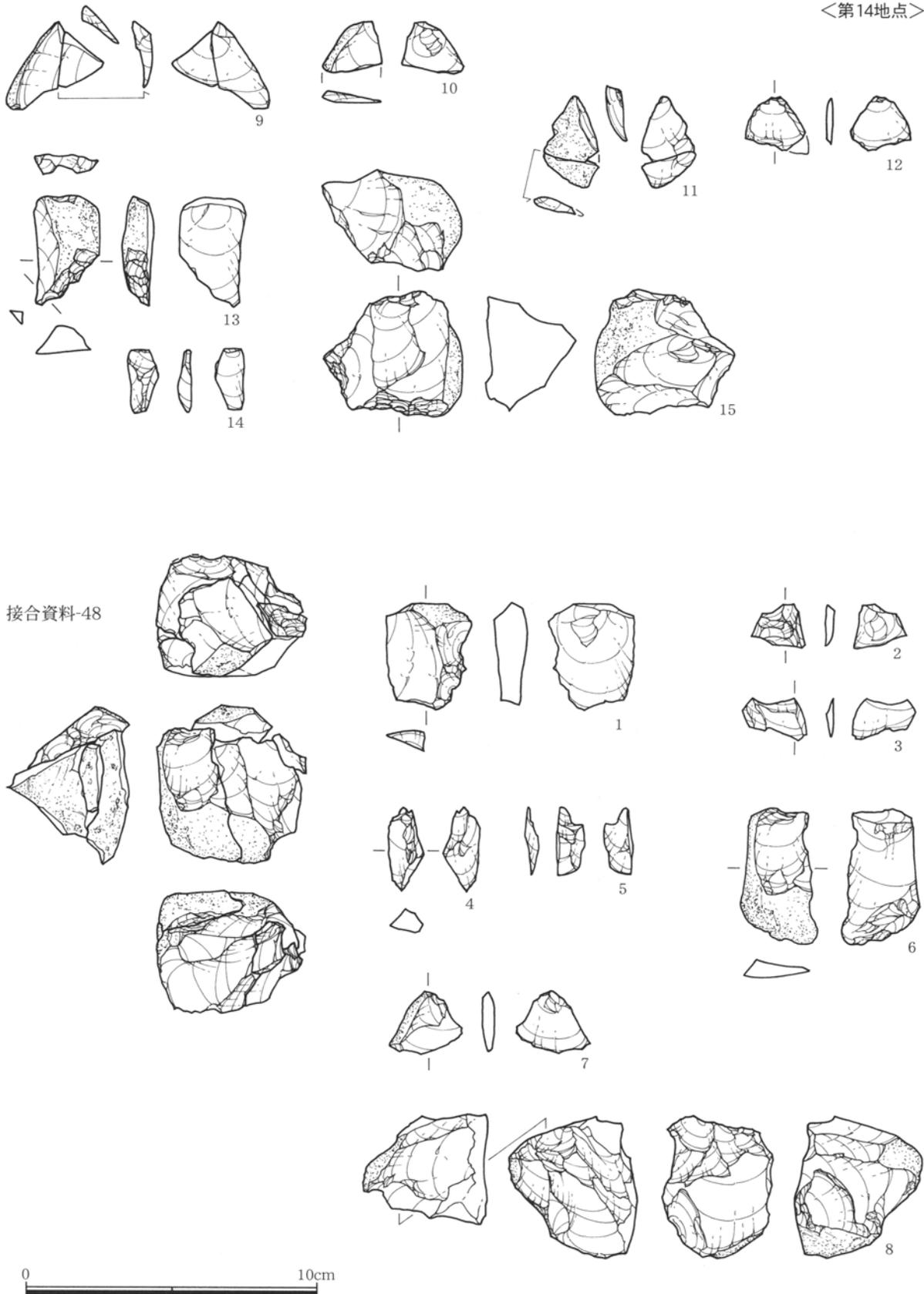
第91図 接合資料8(第11・12地点)

接合資料-47



第92図 接合資料9 (第14地点)

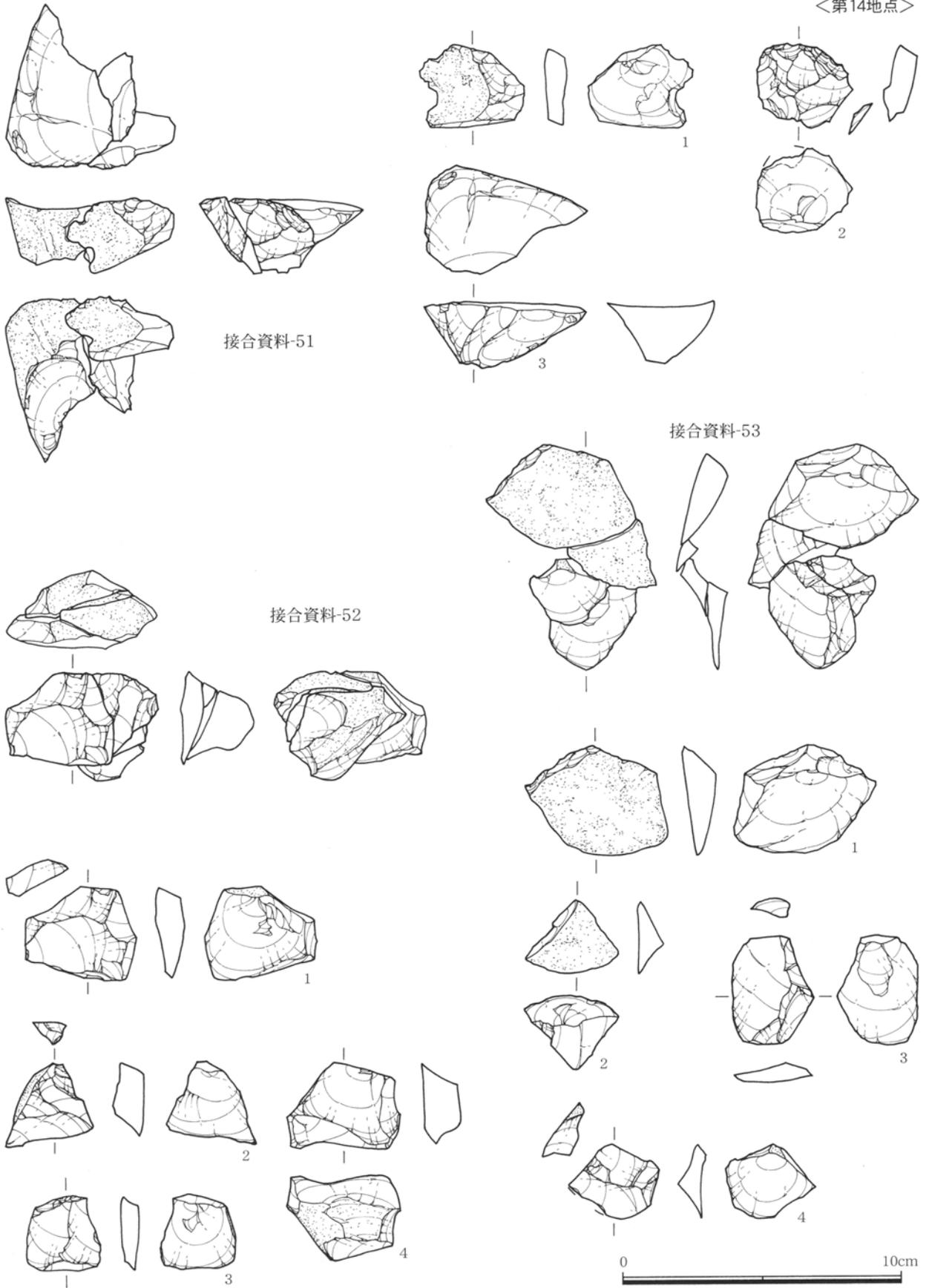
<第14地点>



第93図 接合資料10(第14地点)

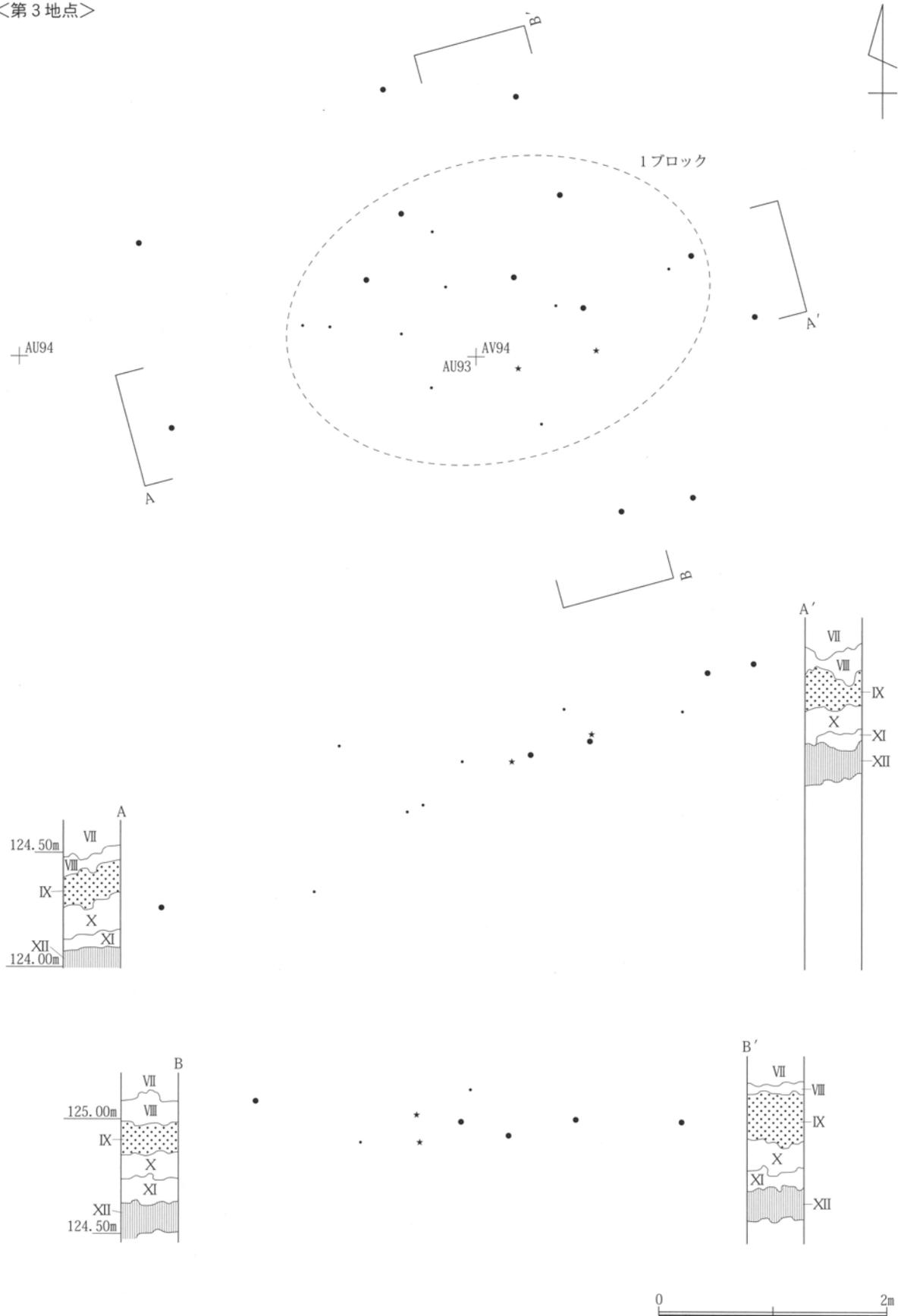
II 調査の成果

<第14地点>



第94図 接合資料11(第14地点)

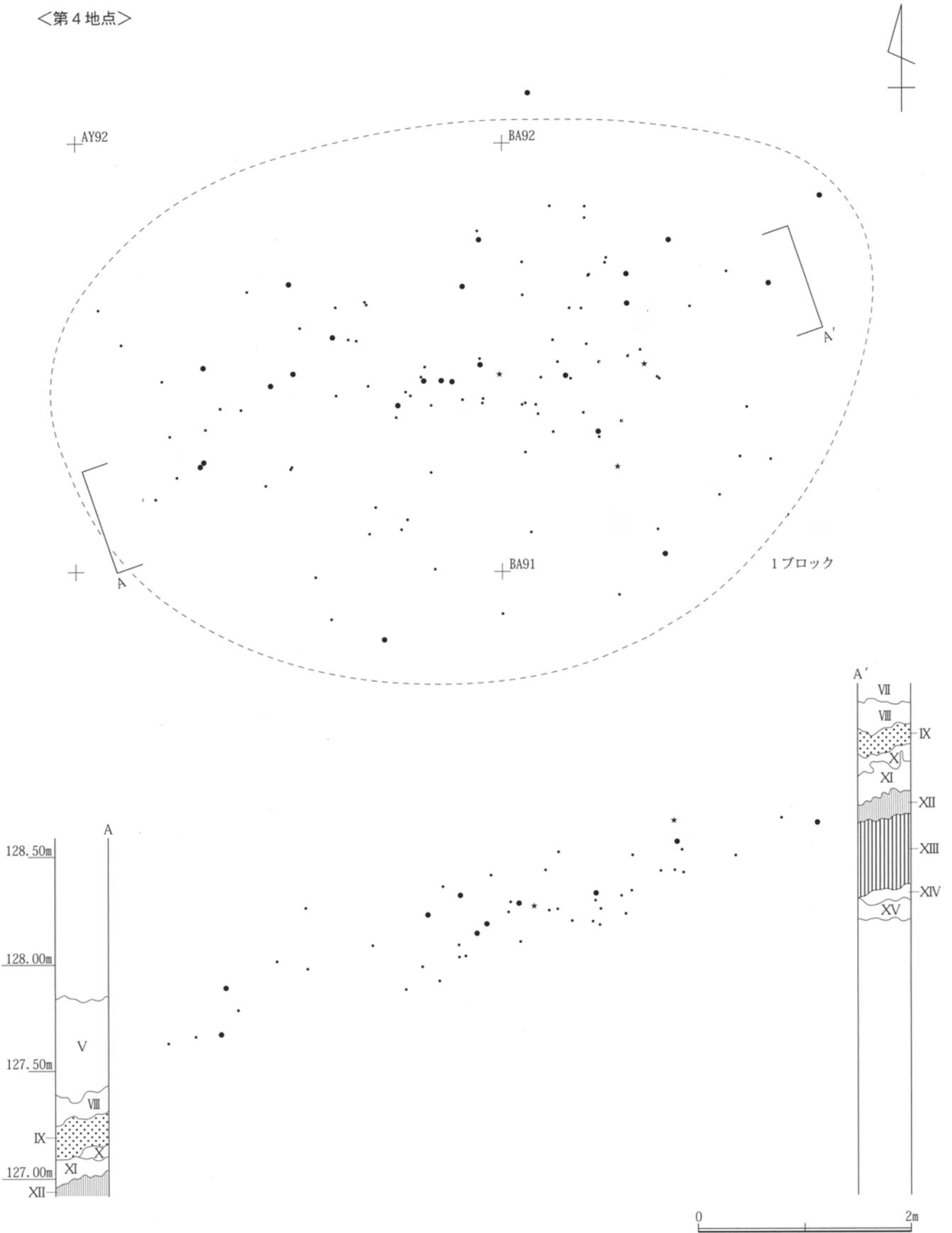
<第3地点>



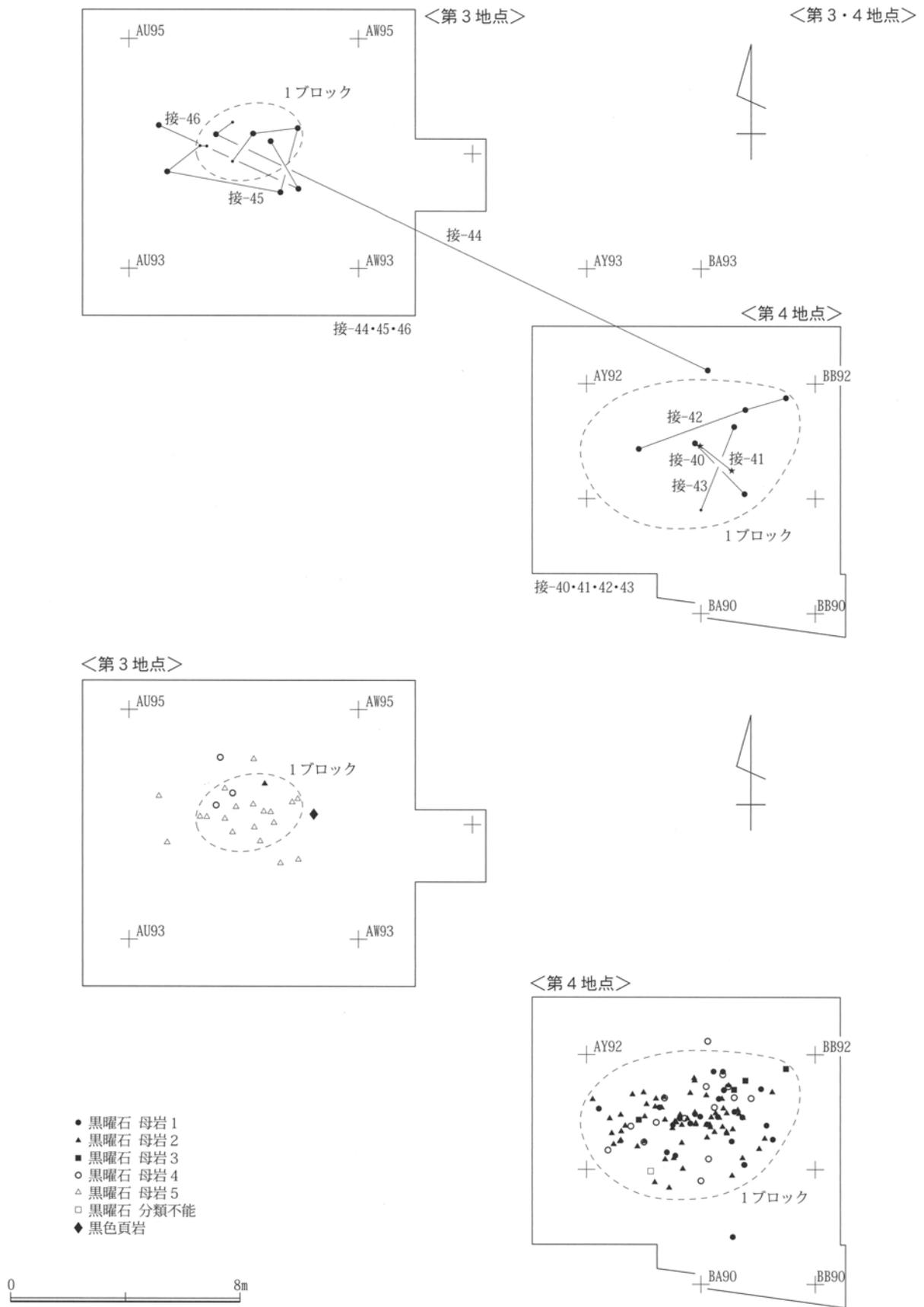
第95図 石器の分布(第3地点)

II 調査の成果

<第4地点>



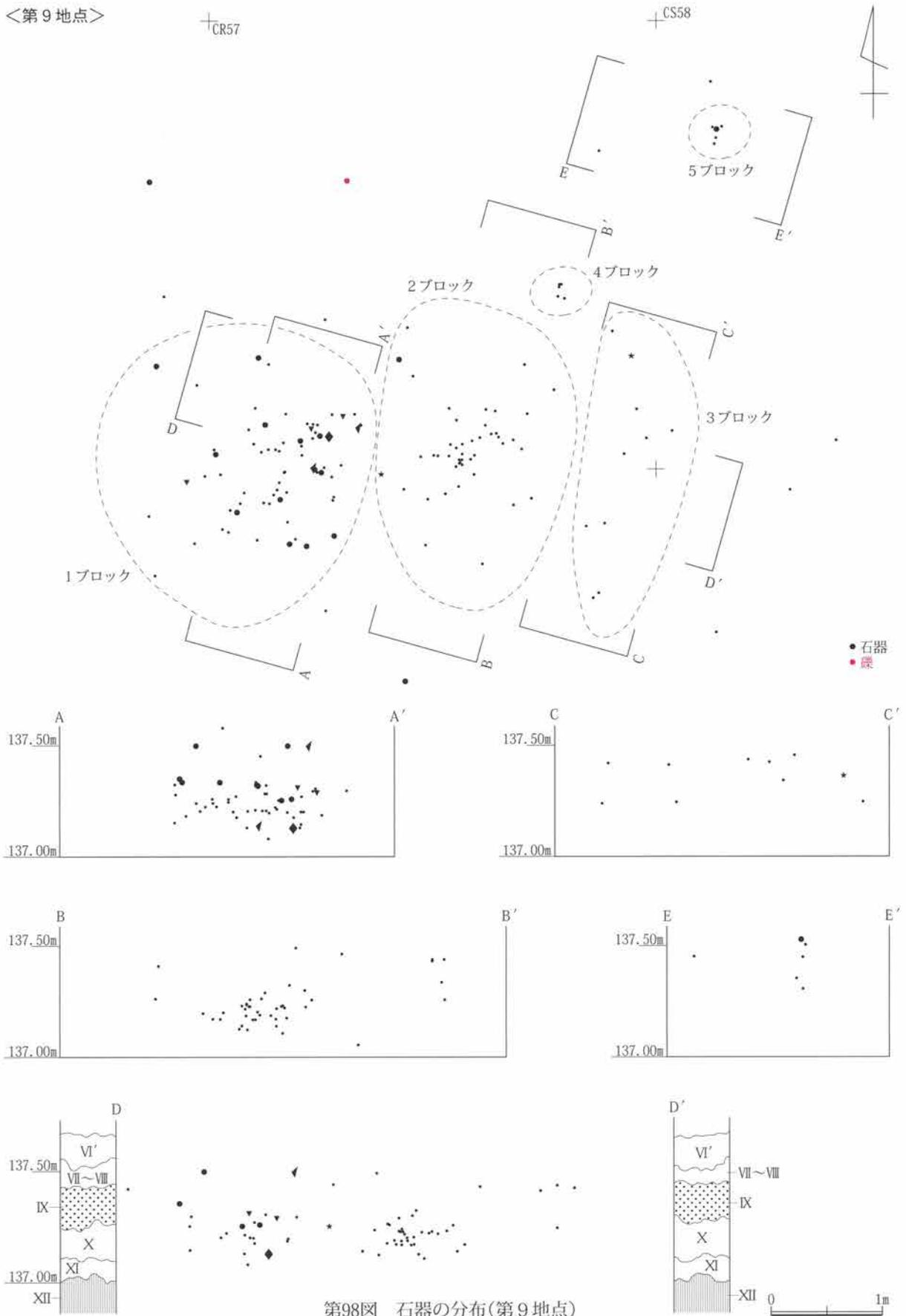
第96図 石器の分布(第4地点)

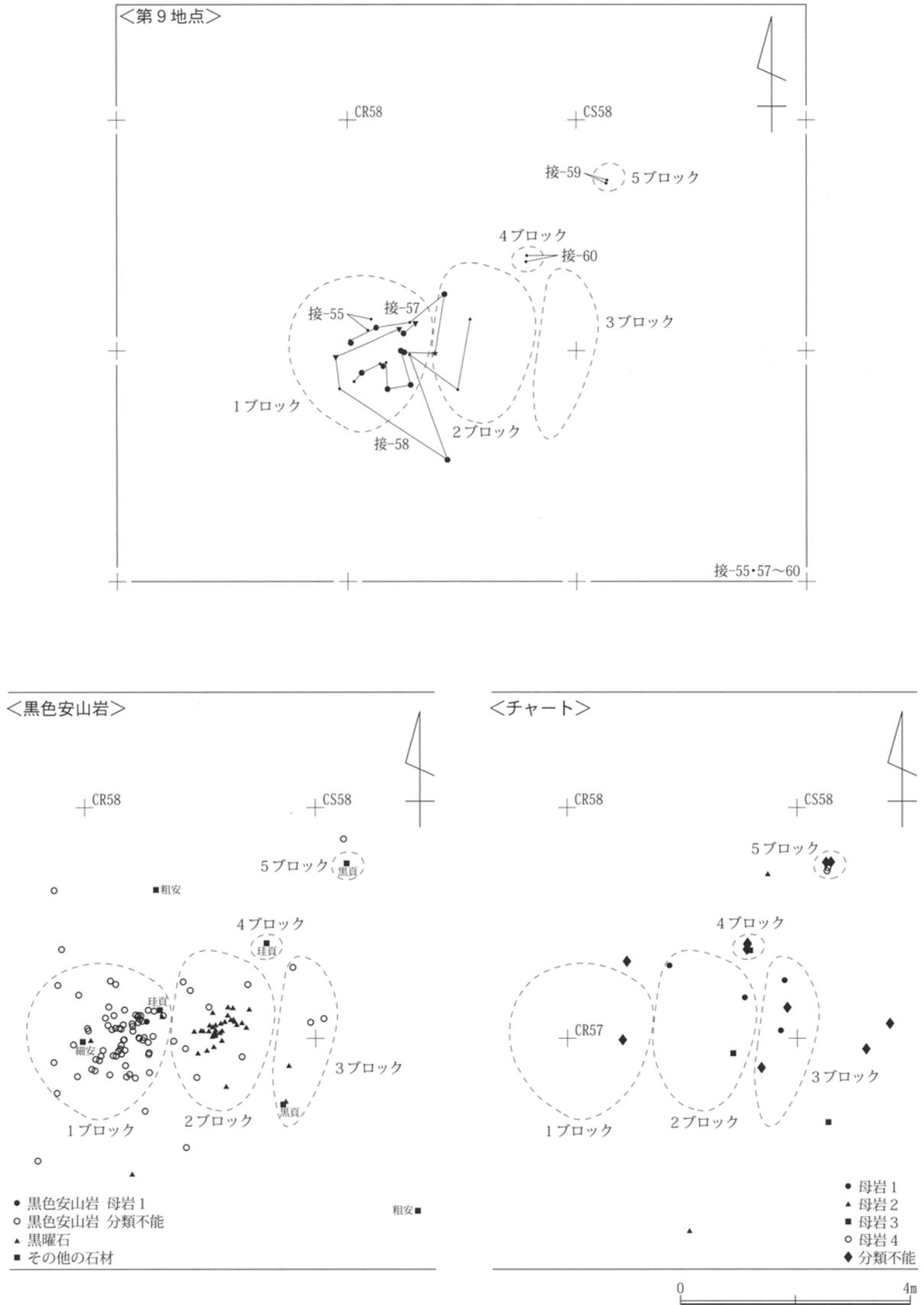


第97図 接合資料と母岩別資料の分布(第3・4地点)

II 調査の成果

<第9地点>

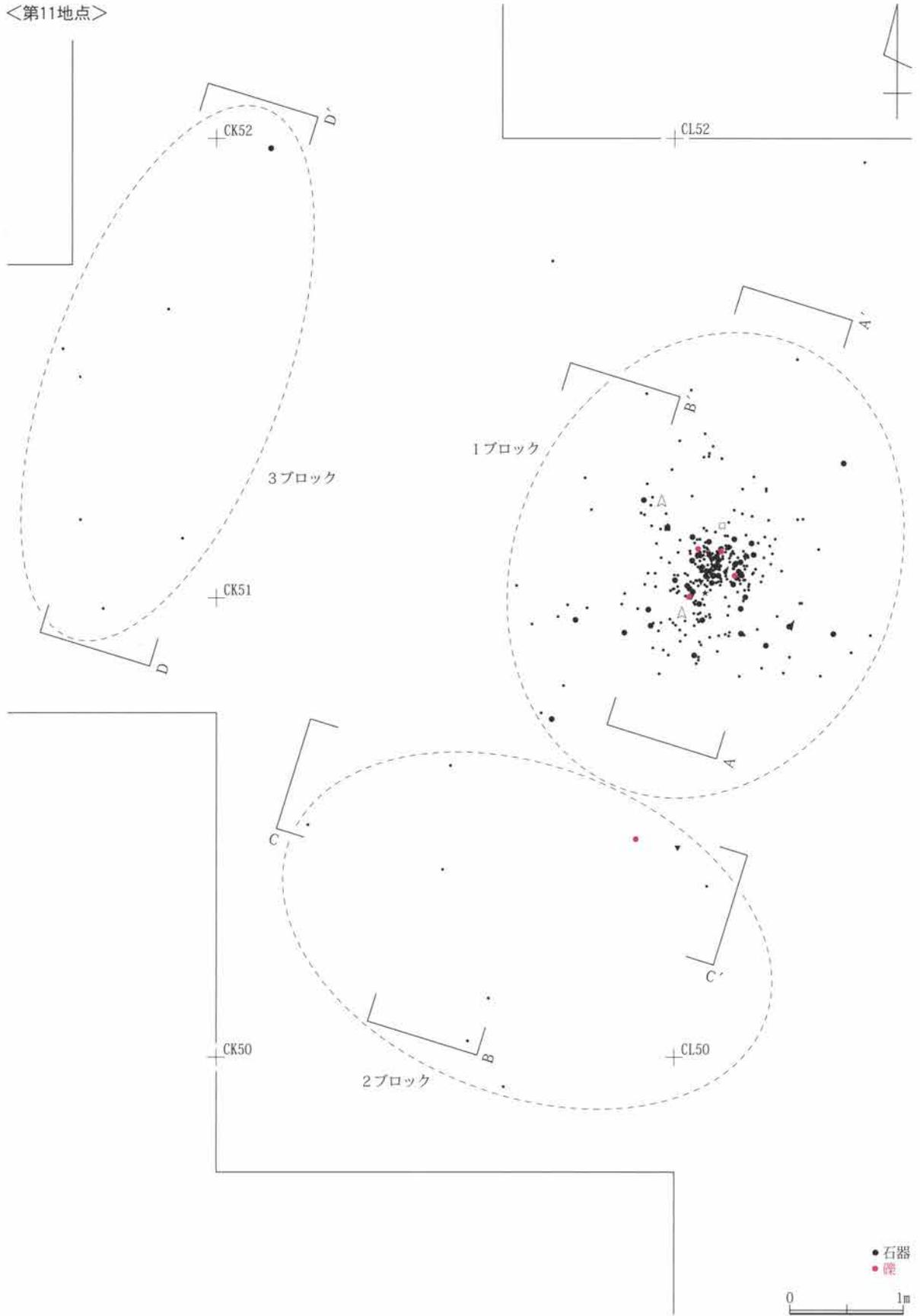




第99図 接合資料と母岩別資料の分布(第9地点)

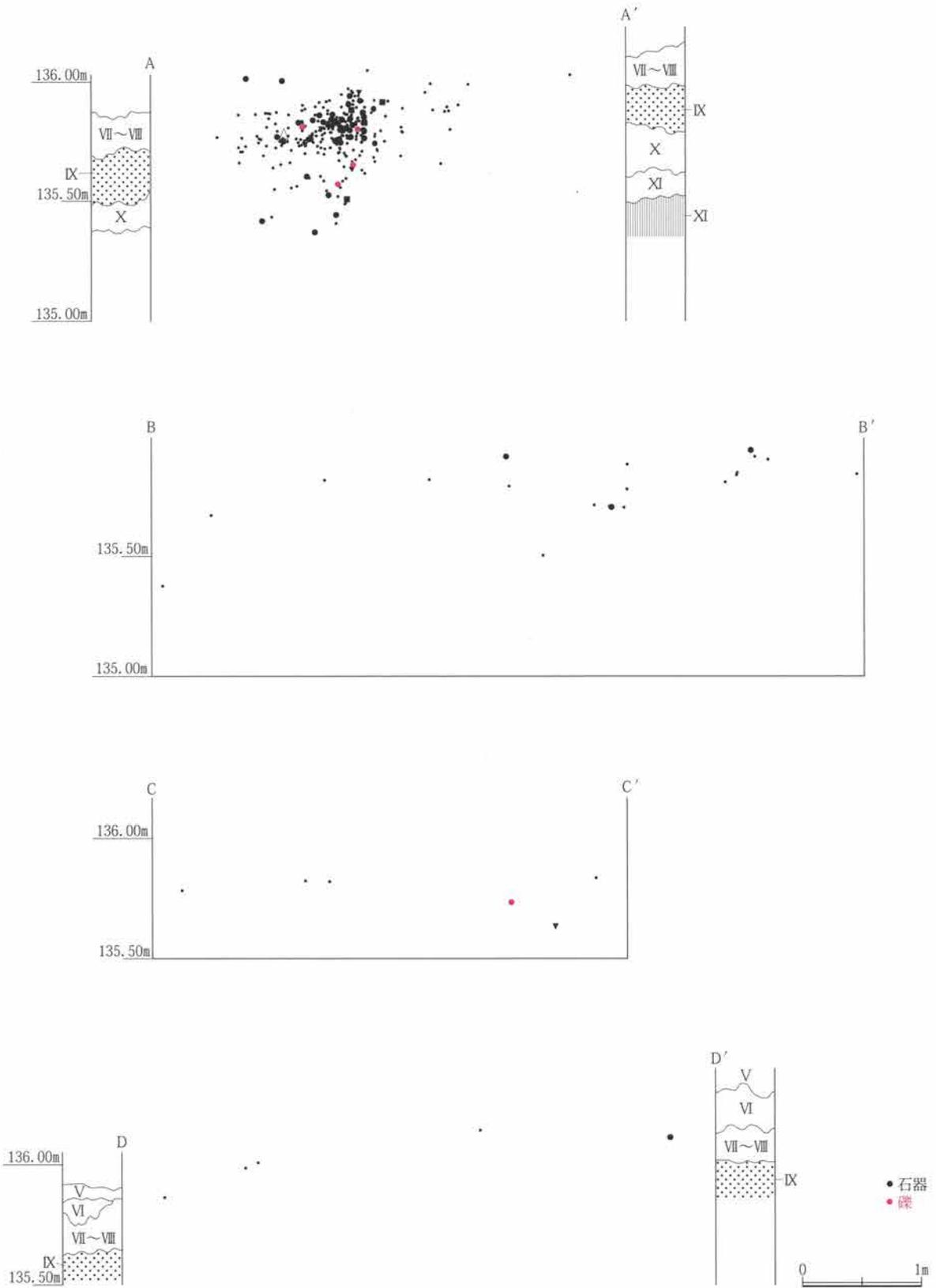
II 調査の成果

<第11地点>



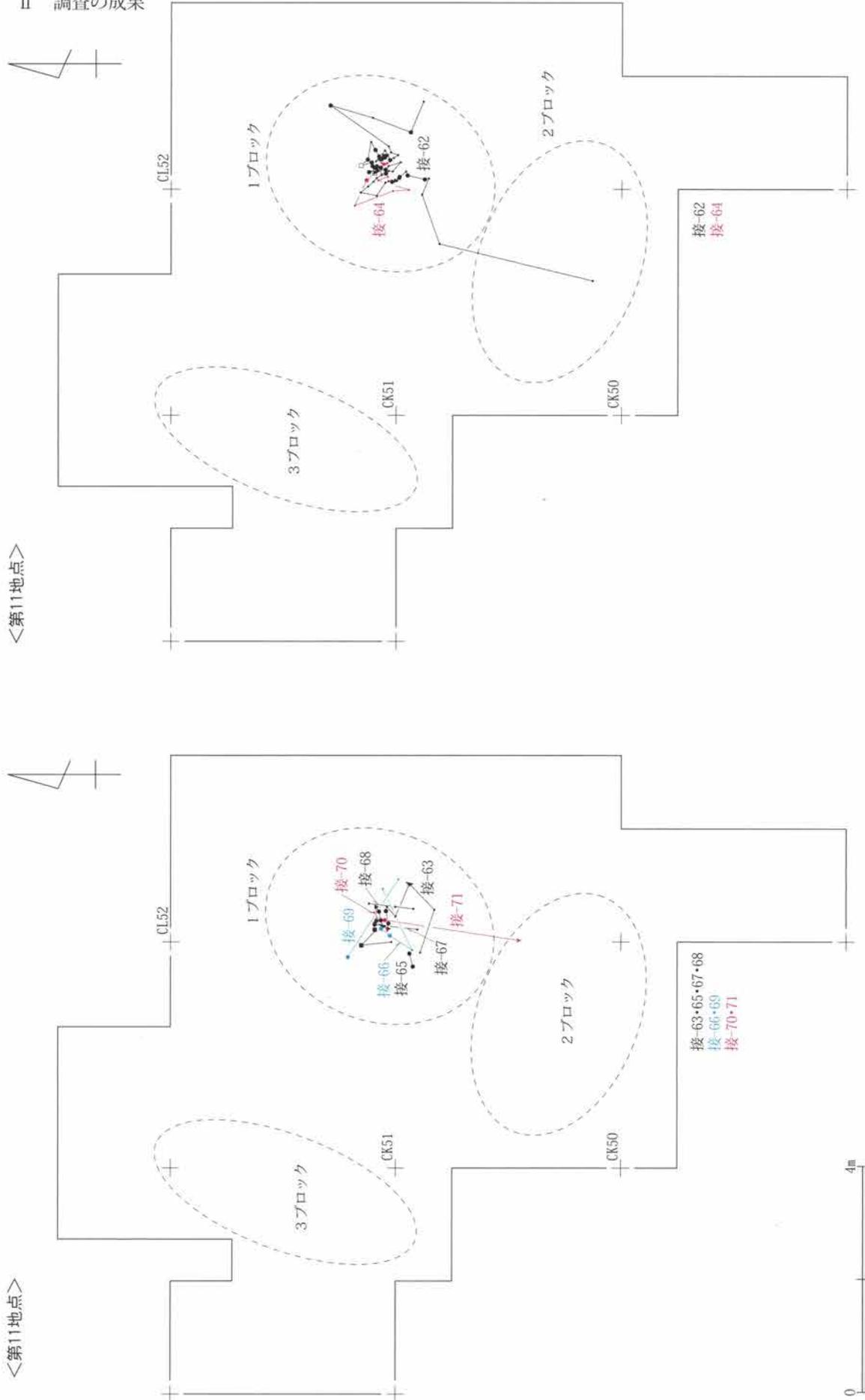
第100図 石器の分布1 (第11地点)

<第11地点>

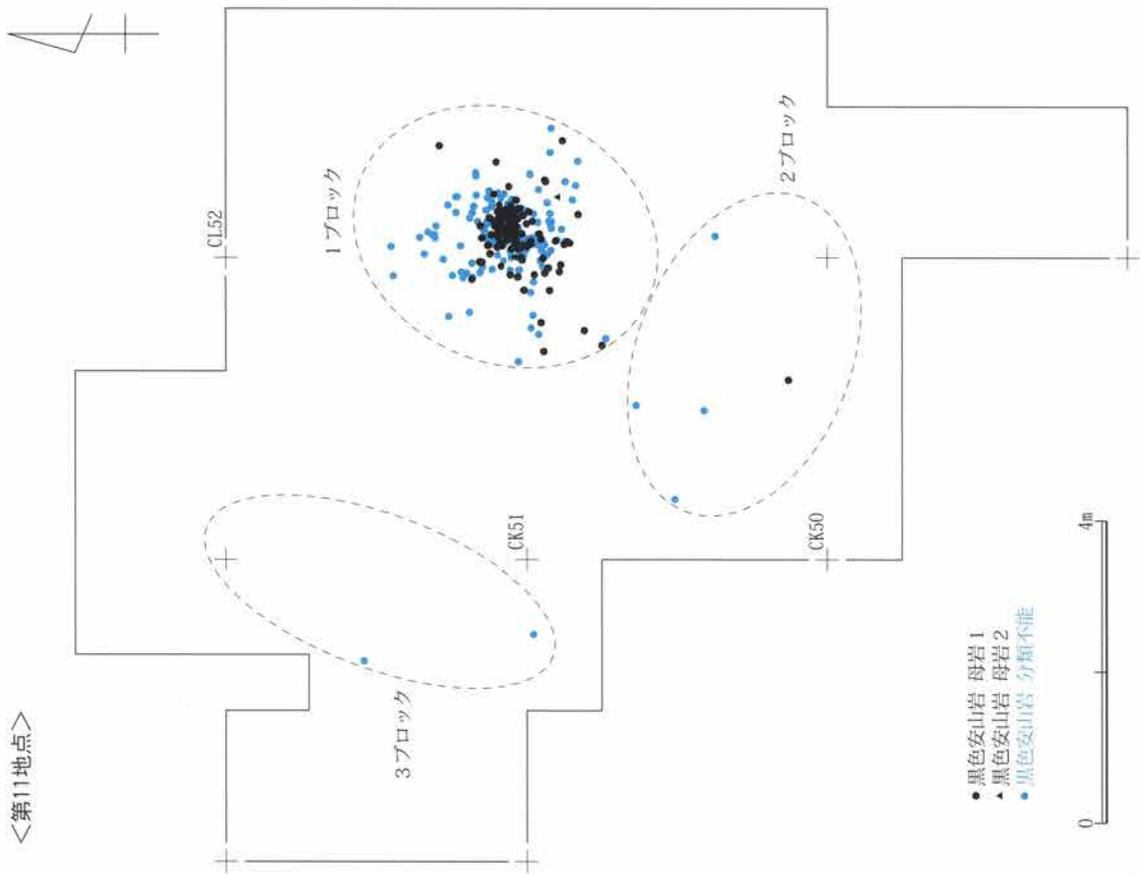
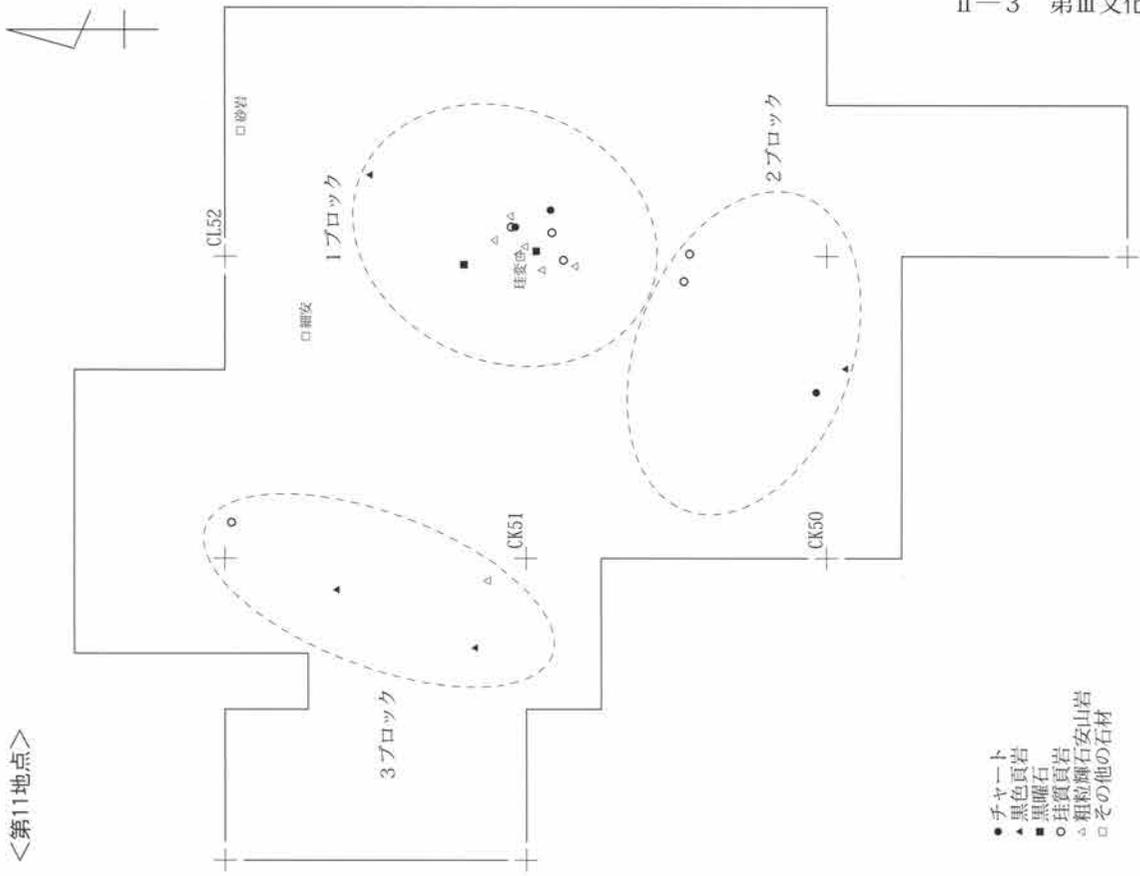


第101図 石器の分布2 (第11地点)

II 調査の成果

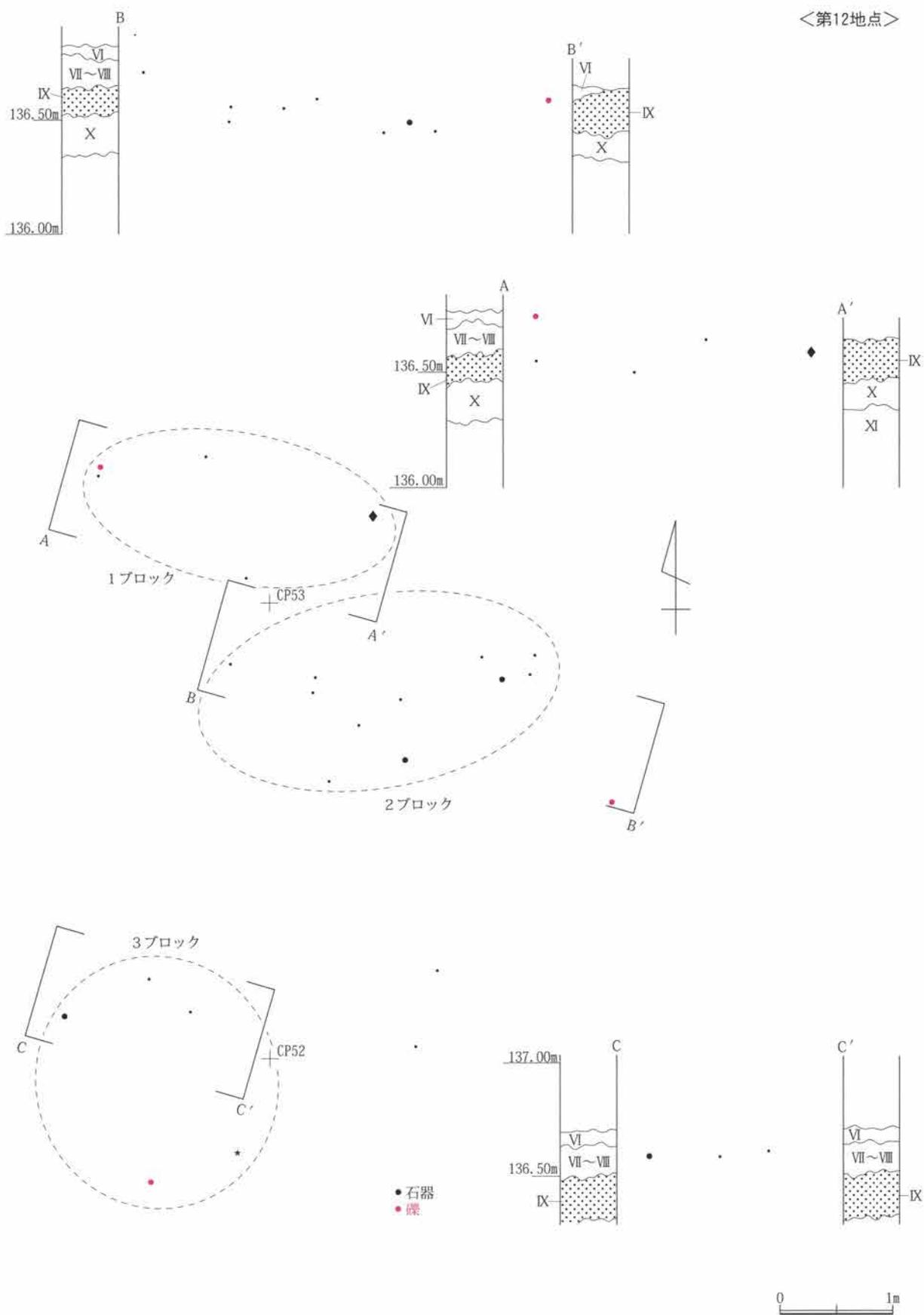


第102図 接合資料の分布(第11地点)



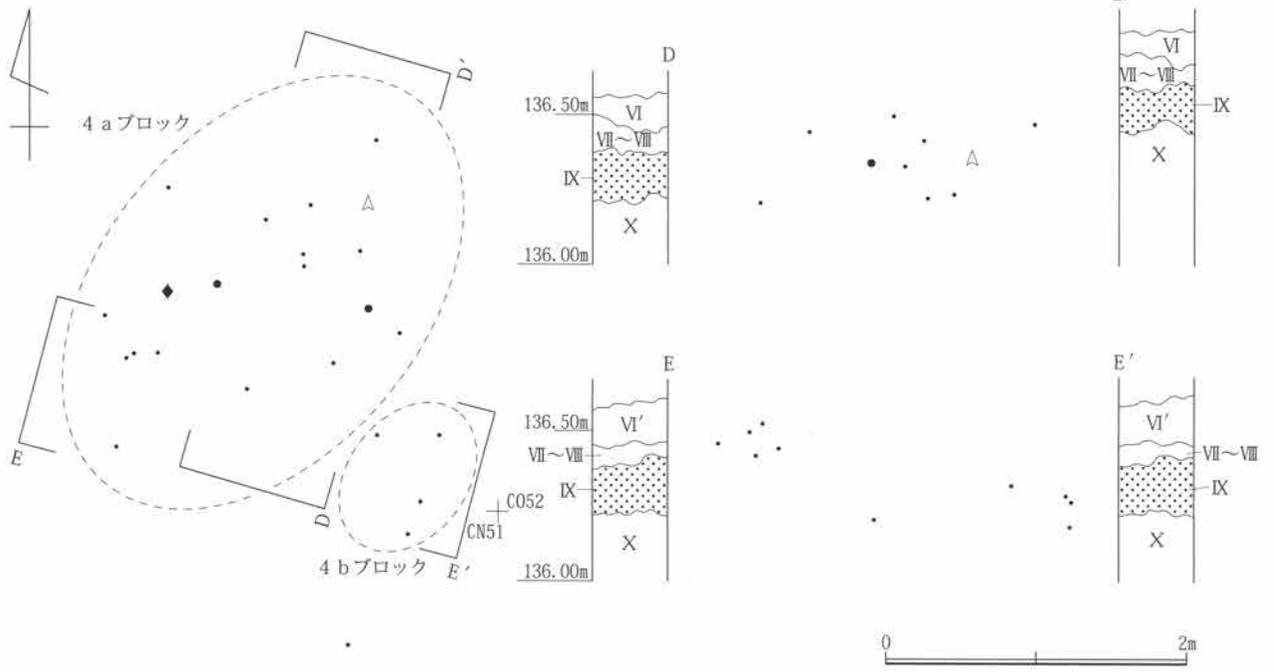
第103図 石材料別分布図(第11地点)

II 調査の成果

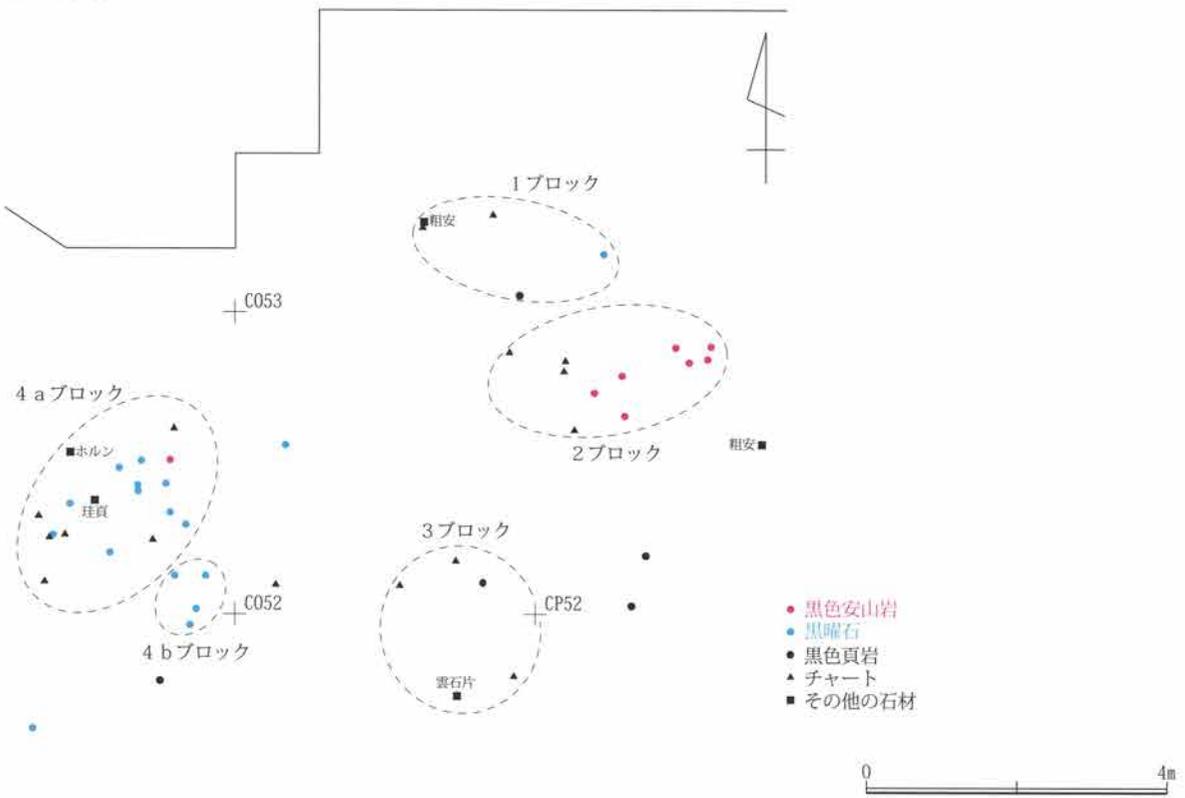


第104図 石器の分布(第12地点)

<第12地点>



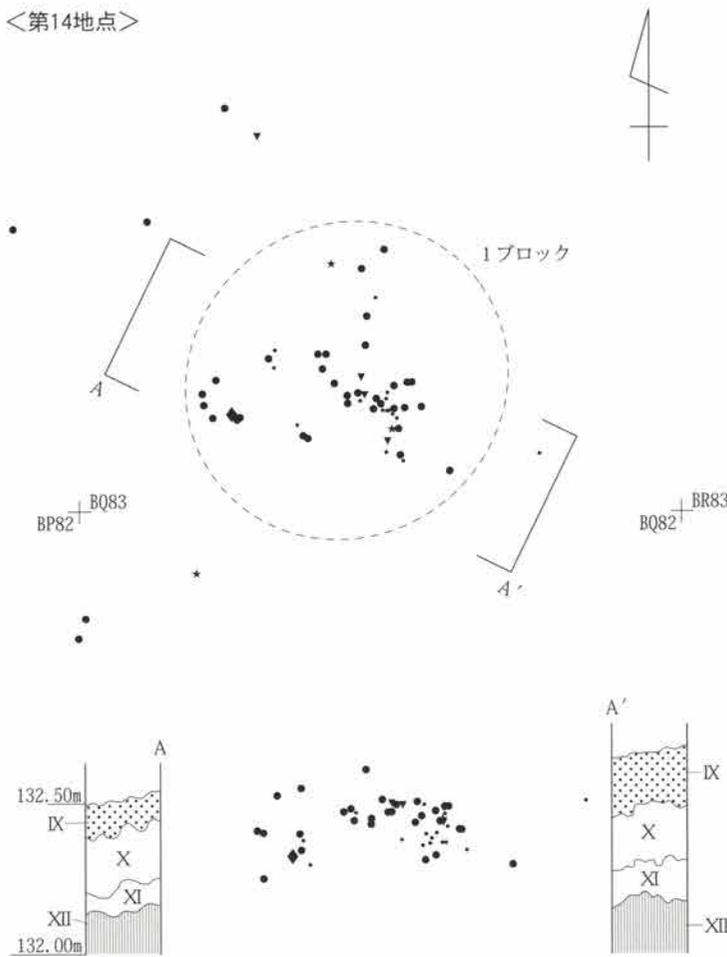
<第12地点>



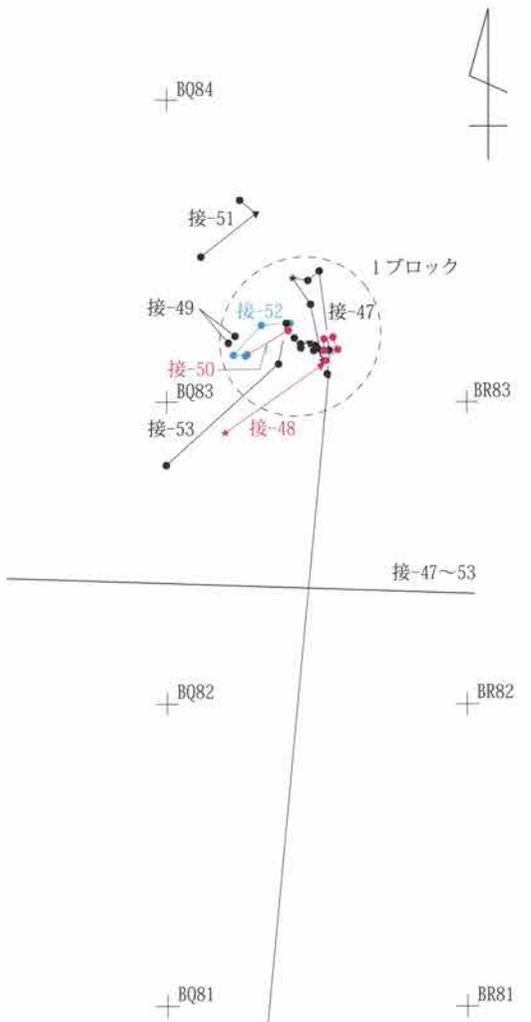
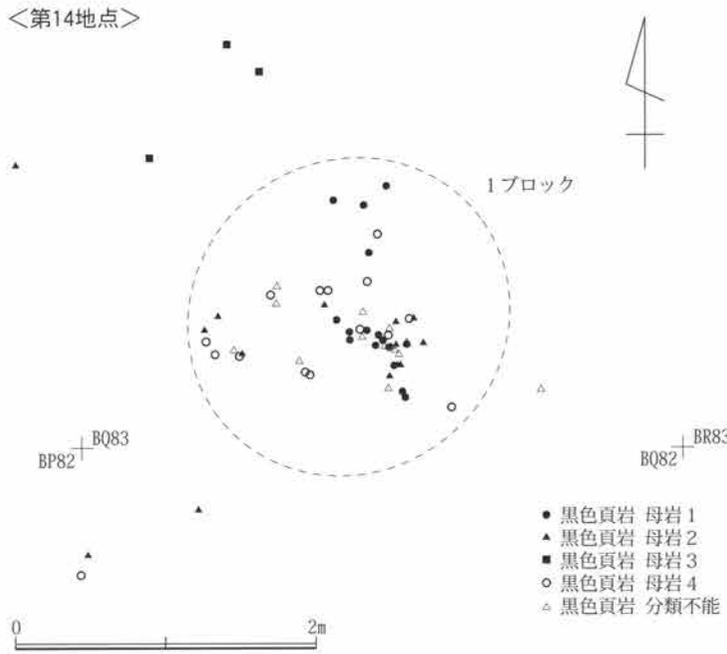
第105図 石器分布と石材別分布(第12地点)

II 調査の成果

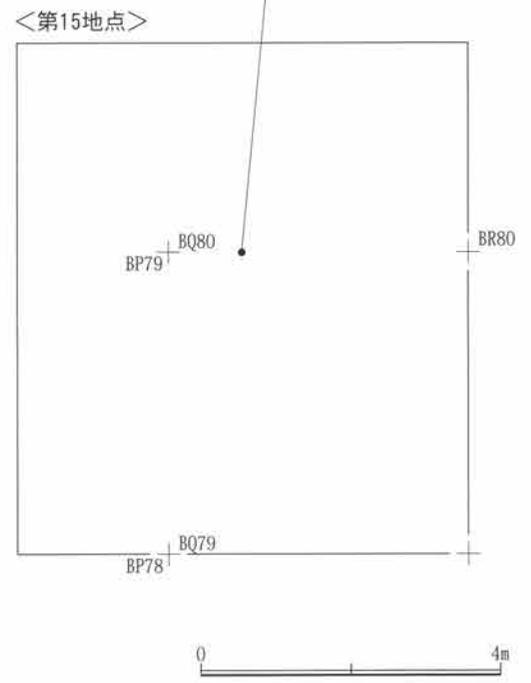
<第14地点>



<第14地点>



<第15地点>



第106図 石器・石材別・接合資料の分布(第14・15地点)

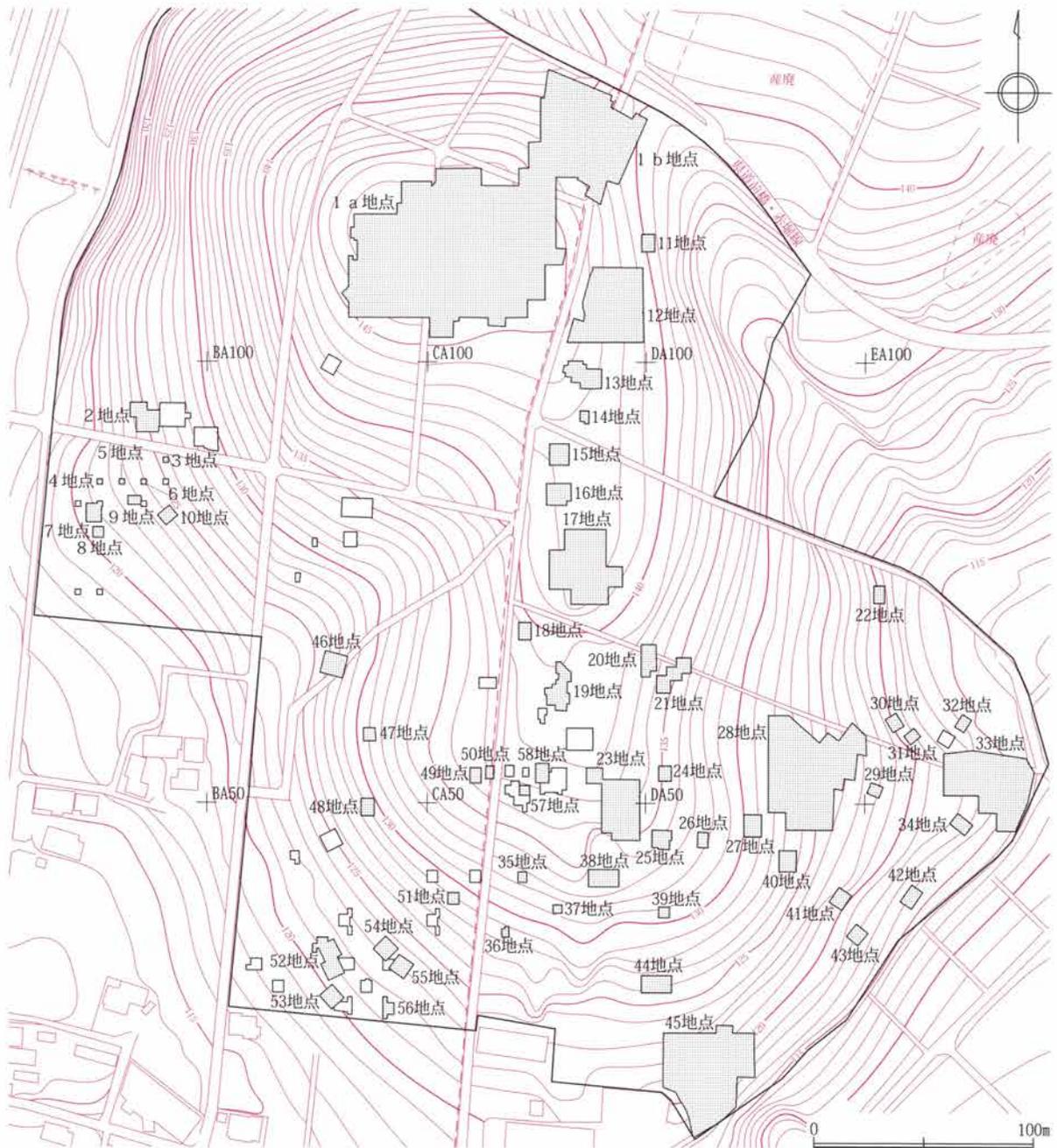
II-4 第IV文化層

当該期石器群は58地点に分布（第107図を参照）していた。大部分がIX層～XII層に出土しており、XII層に出土量のピークを示す石器群（63.1%）であった。

石器群は丘陵の北西側斜面部を除く調査区全域に出土しており、分布状況は濃淡が明瞭で、丘陵頂部・

平坦部（I a・I b地点）に密集分布する傾向が明らかであった。その他の地点では南東側斜面（第33地点）に石器が濃密に分布したが、概してその分布は散漫であった。

石器群は多地点に及んでおり、地点毎に石器群の性格を明らかにした上で、評価しなければならないが、加工石器が少量を占め、剥片類（4068点、85%）



第107図 石器の出土地点(第IV文化層)

II 調査の成果

第33表 器種・石材構成 (IV文化)

	ナイフ	台形様	彫器	楔形	挿器	削器	加工痕	使用痕	石刃	局磨斧	蔽石	石核	台石	砥石	剝片	削片	裂片	片石	礫	礫片	不明	合計
黒安	14	19	0	0	0	1	34	0	3	0	0	119	0	0	1846	0	562	0	0	0	0	2603
黒頁	11	0	0	1	2	1	29	5	16	4	6	60	0	0	703	0	76	1	1	1	0	917
黒曜石	14	2	2	3	0	0	25	4	3	0	0	6	0	0	201	2	167	0	0	0	0	429
硬頁	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	6
褐碧	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	17	0	0	0	0	0	0	23
赤碧玉	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	7	0	2	0	0	0	0	14
チャート	4	4	2	0	3	5	13	10	1	0	1	16	0	0	176	0	86	4	20	0	0	345
珪頁	4	1	0	0	0	2	7	2	5	0	0	3	0	0	79	0	4	0	0	6	0	113
ホルン	0	0	0	0	0	1	2	0	1	0	0	1	0	0	40	0	26	3	12	3	0	89
輝緑岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
輝凝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
凝泥	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
玉ずい	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	14	0	1	0	0	0	0	16
珪凝	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
珪変	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	0	7
黒片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5
砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	1	2	0	0	4	15	0	0	28
砂頁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
細安	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	7
石英	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
石斑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
溶凝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	11	5	0	0	19
変安	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
粗安	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	56	53	0	113
泥岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
点頁	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	4
白凝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
文象	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
頁岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
変珪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1
変輝	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
変玄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
流紋岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
緑片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
雲英片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	1	0	0	2	0	9
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
合計	49	28	4	4	5	12	116	22	33	4	26	211	1	1	3119	2	928	80	130	4775	0	4793

が圧倒的多数を占めるという器種組成の在り方は、典型的な「暗色帯」出土の石器群のそれであった。

I a・I b地点出土の石器群は略「環状分布」するようにも見えるが、詳細については各地点の記述を参照していただきたい。

58ヶ所に及んだ石器群には接合関係・母岩レベルで直接的に石器群の同時性を裏付ける材料はなく、また、層位的にも微妙に異なるため、地点間の関係については現状では言及できない。(岩崎)

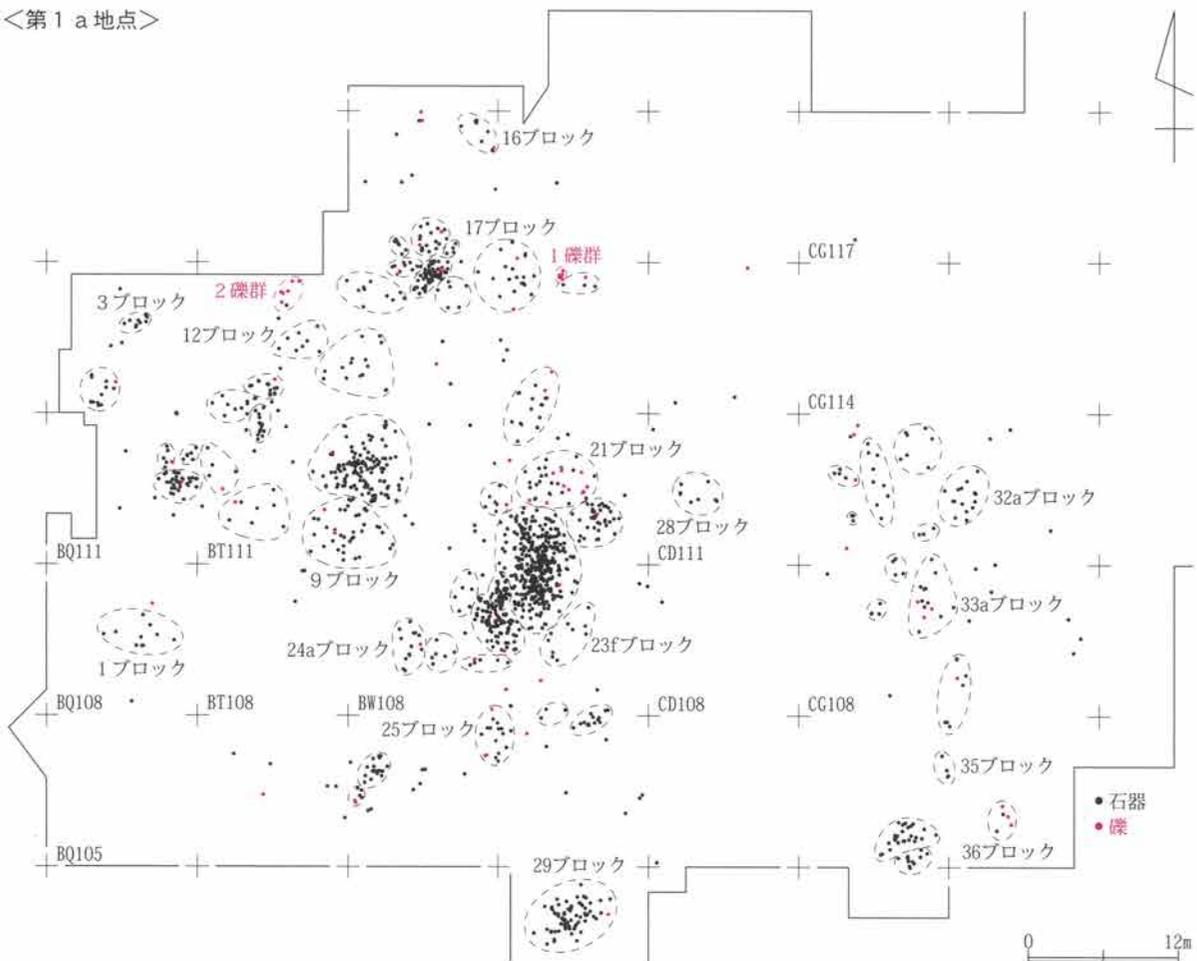
(1) 1 a 地点

概要

石器群は、丘陵性台地の頂部に分布した。石器は全部で1487点が出土した。最も多用されている石材は黒色安山岩であり、804点(54.1%)が認められる。以下、黒曜石374点(25.2%)・黒色頁岩120点(8.1%)となっており、黒曜石製の石器が多いことが一つの特徴となっている。(第108図)

接合資料は、110例を確認した。そのうち、黒色安山岩製石器の接合例が50例で、最も多く認められた。黒色安山岩は、自然面を多く残す大形の接合資料がいくつも観察されることから、原石に近い形状、たとえば分割礫のような状態で遺跡内に持ち込まれたと考えられる。

<第1 a 地点>



第108図 石器と礫の分布(第IV文化層1 a 地点)

II 調査の成果

第34表 器種・石材構成 (IV文化-1 a地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	硬頁	チャート	珪頁	ホルン	珪変	砂岩	溶凝	粗安	雲石片	その他	合計
ナイフ	5	5	10	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	44
台形様	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
楔形	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
加工痕	7	1	22	1	3	4	0	0	0	0	0	0	玉随1	39
局磨	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
削片	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
敲石	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	4
石核	20	4	3	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	31
石刃	0	11	3	0	0	2	1	0	0	0	0	0	点紋1	18
搔器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
台石	0	0	0	0		0	0	0	0	1	0	0	0	1
彫器	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
剥片	563	83	173	1	30	42	3	0	2	0	0	3	白凝2	902
砕片	206	10	157	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	377
礫	0	0	0	0	1	0	1	0	1	4	24	0	0	31
礫片	0	0	0	0	6	0	2	2	2	2	29	0	変珪1	42
合計	804	120	374	2	44	54	9	2	9	7	54	3	5	1487

出土石器

ナイフ形石器 (第109～110図、PL42)

ナイフ形石器は、全部で24点出土した。

第109図1～10は、黒曜石製である。黒曜石製のナイフ形石器は縦長の剥片を素材としており、比較的小形である。1～3は面的な二次加工が、基部の主要剥離面側にも施されている。

第109図11・12は、珪質頁岩製である。12は、幅広剥片を素材としており、二次加工が主要剥離面側と背面側の二方向から施されている。

第110図1～4は、黒色頁岩製である。黒色頁岩製のナイフ形石器は、石刃あるいは縦長剥片を素材としており、比較的大形である。1は、二次加工が主要剥離面側と背面側の二方向から施されており、基部を明確に作出する特徴がみられる。

第110図5～9は、黒色安山岩製である。黒色安山岩製のナイフ形石器は、石刃あるいは縦長剥片を素材としており、大形から小形まで比較的大きさが多様である。5は、面的な二次加工痕が基部の主要剥離面側に施されている。

第110図10～11は、チャート製である。10は小形の幅広剥片を素材として、11は縦長剥片を素材として

いる。

台形様石器 (第111図1～4、PL43)

4点が出土。第111図1は小形剥片を素材とし、基部に急角度の二次加工痕が認められる。黒色安山岩製。第111図2は小形剥片を素材とし、剥片を折断するような二次加工により、台形様に成形されている。黒色安山岩製。第111図3は、小形剥片を素材とし、急角度の二次加工痕が認められる。珪質頁岩製。第111図4は、石器の中央で折断されたもの。基部に面的な二次加工と急角度の二次加工の両方が認められる。黒色安山岩製。

エンドスクレイパー (第111図5、PL43)

1点が出土した。厚手の石刃を素材とする。黒色頁岩製。

彫刻刀形石器 (第111図6・7、PL43)

2点が出土した。いずれも黒曜石製である。第111図6は、小形の縦長剥片を素材とする。第111図7は、小形の不定形剥片を素材とする。

彫刻刀削片 (第111図8・9、PL43)

2点が出土した。いずれも黒曜石製である。

局部磨製石斧 (第111図10、PL43)

1点が出土した。分割した後、それぞれの個体に二次的な加工を施している。黒色頁岩製。

楔形石器 (第112図1~3、PL43)

3点が出土した。第112図1・2は、黒曜石製。1は、両極打撃時に生じたと考えられる折断痕が認められる。第112図3は、小形の扁平礫を素材としており、両極打撃により成形し、何らかの器種を製作しようとする意図が感じられる。

二次加工ある剥片 (第112図4~8、第113・114図、PL44・45)

二次加工ある剥片は、全部で39点が出土した。第112図4~6は、黒曜石製である。黒曜石製の二次加工ある剥片は22点が出土しているが、そのうち3点を図示した。この3点はいずれも石刃あるいは縦長剥片を素材としている。

第112図7は、玉ずい製である。小形の不定形剥片を素材としている。

第112図8は、硬質頁岩製である。縦長剥片を素材としている。

第113図1~3は、珪質頁岩製である。珪質頁岩製の二次加工ある剥片は4点出土しているが、そのうち3点を図示した。

第113図4~5は、チャート製である。チャート製の二次加工ある剥片は3点出土しているが、そのうち2点を図示した。いずれも、石刃あるいは縦長剥片を素材としている。

第113図6・第114図1~13は、黒曜石製である。黒曜石製の二次加工ある剥片は22点出土しているが、そのうち14点を図示した。

石刃 (第115・116図、PL45・46)

石刃は、全部で18点が出土した。

第115図1・2は、珪質頁岩製である。1の背面には180度方向の先行剥離痕が認められ、両設打面による石刃技法の存在が浮かび上がる。2には作業面の稜形成痕がある。

第115図3は、点紋頁岩製である。

第115図4は、ホルンフェス製である。

第115図5は、黒曜石製である。黒曜石製の石刃は3点が出土したが、そのうち1点を図示した。

第115図6・第116図1~8は、黒色頁岩製石刃で

ある。黒色頁岩製の石刃は10点出土したが、そのうち9点を図示した。打面調整・部調整・作業面の稜形成等は認められず、調整技術の未発達な石刃技法の存在が浮かび上がる。

剥片・碎片 (第117~124図、PL46~49)

剥片は902点、碎片は377点が出土した。剥片の形態は、非常に多様性に富んでいる。その中でも、類似した形態的特徴をもつ資料をグループ化して、図示した。

第117図1~7は、黒曜石製の縦長剥片である。黒曜石製の縦長剥片は、他の石材の縦長剥片と比較して小形である。

第117図8~10はチャート製、第118図1はホルンフェルス製の縦長剥片である。

第118図2は、白色凝灰岩製の縦長剥片である。中央で折断された資料である。

第118図3~7は黒色安山岩製、第119図1~5は黒色頁岩製の縦長剥片である。黒色頁岩製の縦長剥片は、他の石材の縦長剥片と比較して大形である。

第120図1~6・第121図1~6は、黒色安山岩製の不定形剥片である。

第122図1~7、第123図1~14、第124図1~9は、黒曜石製の不定形剥片である。

第124図10は砂岩製の、第124図11は珪質頁岩製の、第124図12は硬質頁岩製の、第124図13~16はチャート製の不定形剥片である。

石核 (第125図1・2、PL50)

石核は、全部で26点が出土した。他の石器と接合関係を持たない石核2点を図示した。1は黒曜石製、2は珪質頁岩製である。

敲石 (第125図3、第126図1~3、PL50・51)

4点出土。第125図3は、粗粒安山岩製である。第126図1~3は、砂岩製である。

台石 (第126図4、PL51)

溶結凝灰岩製のものが1点出土した。

<接合資料 黒色安山岩製の石器>

接合資料は110例を確認した。以下、石材別に各接

II 調査の成果

合資料について、その概要を記す。

母岩 1・接合 1 (第127図、PL52)

剥片 8 点からなる接合資料。90°方向の打面転移を繰り返し、剥片を剥離している。剥片の形態は、不定形である。

母岩 2・接合 2 (第128・129図、PL52)

石核 3 点・剥片 14 点からなる接合資料。大形剥片を 4 つに分割した後、それぞれの個体で剥片を剥離している。剥片の形態は不定形である。

母岩 3・接合 3 (PL64)

剥片 2 点からなる接合資料。不定形剥片を剥離。

母岩 3・接合 4 (第129図、PL53)

石核 1 点・剥片 4 点からなる接合資料。石核は大形で厚手の剥片を素材とし、小形不定形剥片を生産している。この剥片素材の石核以外は、不定形の剥片で構成される。

母岩 4・接合 5 (第130～132図、PL54)

石核 1 点・剥片 30 点からなる接合資料。大形で厚手の剥片を素材とし、剥片剥離を進行させている。不定形の剥片が剥離された後、最終的に、石核が残されている。剥片剥離は打面位置が一定せず、頻繁に打面転移を繰り返すものである。

母岩 4・接合 6 (第133図、PL53)

石核 2 点・剥片 5 点からなる接合資料。厚手の大形剥片を 2 つに分割し、それぞれの個体で剥片剥離作業をおこなう。そこから生産された剥片は、小形不定形な剥片である。

母岩 4・接合 7 (PL64)

剥片 1 点が、折断面で接合した資料である。

母岩 5・接合 8 (第134図、PL53)

石核 1 点・剥片 5 点の接合資料。大形で厚手の剥片を素材とし、剥片剥離を行っている。打面位置は一定せず、不定形の剥片を隔離し、最終的に小形の石核が残されている。

母岩 5・接合 9 (PL64)

剥片 2 点の接合資料。不定形な剥片どうしが接合する。

母岩 6・接合 10 (第134図、PL53)

石核 1 点・剥片 3 点の接合資料。小形の石核から不定形の剥片が剥離される様子が観察される。石核の素材は不明である。

母岩 7・接合 11 (第135図、PL55)

石核 1 点・剥片 4 点の接合資料。打面と作業面とを交互に入れ替える剥離によって、不定形剥片を生産している。最終的に残される石核は大形である。

母岩 7・接合 12 (PL64)

剥片 2 点の接合資料。剥片の形態は不定形である。

母岩 8・接合 13 (第136図、PL55)

剥片 3 点の接合資料。剥片形態は不定形である。

母岩 8・接合 14 (PL64)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は不定形である。

母岩 9 a・接合 15 (第136図、PL55)

石核 1 点・剥片 4 点の接合資料。大形で厚手の剥片を素材とし、断面を固定せず、小形の不定形剥片を生産している。最終的に、石核が残されている。

母岩 9 b・接合 16 (第137図、PL55)

剥片 5 点の接合資料。打面を固定し、小形の剥片を剥離する様子が観察される。

母岩 9 b・接合 17 (第137図、PL55)

剥片 2 点の接合資料。剥片の形態は不定形である。

母岩 9 b・接合 18 (PL64)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。折断面は、剥片の打点から打面と直交する方向に走っており、剥片剥離時の同時割れと考えられる。

母岩 9 b・接合 19 (PL64)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は不定形である。接合 20 (PL64)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。折断面は、剥片の打点から打面と直交する方向に走っており、剥片剥離時の同時割れと考えられる。

接合 21 (PL64)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。

接合22 (PL64)

剥片 2 点の接合資料。いずれも、小形で不定形な剥片である。

接合23 (第138~141図、PL56)

石核 3 点・剥片67点の接合資料。剥片の形態は不定形であり、最終的に 1 つの石核が残されている。生産された剥片の中で、厚手で大形の剥片を素材として、剥片剥離をおこなう個体が 2 つ認められる。この 2 個体からは、それぞれ石核が 1 つずつ残されている。

接合24 (第142~144図、PL57)

台形様石器 1 点・加工ある剥片 1 点・剥片40点の接合資料。大形の円礫を 2 つに分割した後、その一方の分割礫をさらに 2 つに分割し、それぞれ個体で剥片剥離を展開させている。この 2 個体からは、それぞれ石核が 1 つずつ残されている。また、もう一方の分割礫では、石核が残されていない。全般的に生産された剥片は、不定形であり、その中の小形剥片が台形様石器の素材となっている。

接合25 (第145図、PL58)

石核 1 点・剥片 8 点の接合資料。打面位置は一定せず、不定形の剥片を剥離する様相が観察される。この剥片剥離に関係した石核が、1 点残されている。

接合26 (第146図、PL58)

剥片 5 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合27 (PL64)

剥片 3 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合28 (PL64)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。折断面は、剥片の打点から打面と直行する方向に走っており、剥片剥離時の同時割れと考えられる。

接合29 (第146図、PL58)

石核 1 点・剥片 1 点の接合資料。石核の素材は不明である。

接合30 (PL64)

剥片 3 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合31 (PL65)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合32 (PL65)

剥片 3 点の接合資料。厚手で大形の剥片を素材とする石核から、小形の不定形剥片を生産する様子が観察される。石核は残されていない。

接合33 (PL65)

剥片 2 点の接合資料。剥片の形態は不定形である。

接合34 (第146図、PL58)

剥片 3 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合35 (PL65)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合36 (PL65)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合37 (PL64)

二次加工ある剥片 1 点に二次加工時に生じた剥片 1 点が接合した資料。

接合38 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。折断面は剥片の打点から打面と直交する方向に走っており、剥片剥離時の同時割れと考えられる。

接合39 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。

接合40 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、小形剥片 1 点が復元された。

接合41 (PL65)

剥片 2 点の接合資料。剥片の形態は、小形で不定形である。

接合42 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。

接合43 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片 1 点が復元された。

II 調査の成果

接合44 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片1点が復元された。

接合45 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片1点が復元された。

接合46 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片1点が復元された。

接合47 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片1点が復元された。

接合48 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片1点が復元された。折断面は、剥片の打点から打面と直交する方向に走っており、剥片剥離時の同時割れと考えられる。

接合49 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片1点が復元された。

接合50 (PL64)

剥片2点の接合資料。剥片の形態は、小形で不定形である。

<接合資料 黒色頁岩製の石器>

母岩1・接合51 (第147図、PL43)

刃部磨製石斧1点が復元された接合資料。この資料は折断面によって接合しているのではなく、石斧を素材として、剥片剥離をする様子が観察される。

母岩2・接合52 (第147図、PL58)

剥片3点の接合資料。打面を固定し、剥片剥離をする様子が観察される。剥片の形態は不定形である。

母岩2・接合53 (第148図、PL58)

剥片4点の接合資料。打面は一定せず、不定形剥片を剥離する様子がみられる。

母岩3・接合54 (第148図、PL59)

剥片4点の接合資料。打面は一定せず、不定形な剥片を剥離する様子がみられる。

接合55 (第149図、PL59)

剥片3点の接合資料。剥片の形態は大形で不定形である。

接合56 (第149～150図、PL59)

石核1点・剥片9点の接合資料。剥片剥離により生産された厚手で大形の剥片を素材として小形不定形剥片を生産する様子がみられる。この個体から、石核1点が残されている。

接合57 (PL65)

石核1点・剥片3点の接合資料。節理面での分割後、それぞれの個体で剥片剥離を展開させている。一方の個体では、小形の不定形剥片を生産する様子がみられ、石核は残されていない。もう一方の個体では、厚手の剥片を石核の素材として、小形の剥片が生産されている。この個体からは剥片素材の石核1点が残されている。

接合58 (PL65)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

接合59 (第150図、PL60)

剥片3点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合60 (PL65)

剥片3点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

接合61 (PL65)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

接合62 (PL65)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

接合63 (PL65)

折断面による接合資料。接合によって、剥片1点が復元された。

接合64 (PL66)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

接合66 (第110図、PL42)

折断面の接合によって、ナイフ形石器1点が復元

された。ナイフ形石器は、石刃を素材としている。
接合67 (第151図、PL60)

石刃2点の接合資料。この資料からは、打面調整は観察されず、単設打面より石刃が生産される様子がみられる。

接合68 (第151図、PL60)

石核1点・剥片2点の接合資料。剥片剥離時に生じた厚手で大形の剥片を石核の素材とし、小形剥片を生産している。この個体から石核1点が残されている。

<接合資料 黒曜石製の石器>

母岩1 a・接合69 (第152図、PL60)

石核2点・剥片7点の接合資料。剥片形態は、不定形であり、石核1点が残されている。また、剥片剥離時に生じた厚手で大形の剥片を石核の素材とし、小形の剥片を生産している。この個体からは石核1点が残されている。

母岩2・接合70 (第152図、PL61)

剥片1点、ナイフ形石器1点の接合資料。ナイフ形石器は、不定形剥片を素材としている。

母岩3 b・接合71 (第153図、PL61)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

母岩3 b・接合72 (PL66)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

母岩3 c・接合73 (PL66)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

母岩3 d・接合74 (PL66)

折断面の接合により、小形剥片1点が復元された資料である。

母岩4 a・接合75 (PL66)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

母岩4 a・接合76

折断面の接合により、小形剥片1点が復元された資料である。

母岩4 b・接合77 (第153図、PL61)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

母岩4 c・接合78 (第153図、PL61)

剥片2点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

母岩4 e・接合79 (第153図、PL61)

剥片3点の接合資料。剥片の形態は縦長であり、打面調整が観察される。

母岩5 a・接合80 (第153図、PL61)

折断面の接合により、石刃1点が復元された資料である。この石刃には打面調整があり、単設打面により石刃を生産する様子が観察される。

母岩5 a・接合81 (PL66)

折断面の接合により、剥片1点が復元された資料である。

母岩5 b・接合82 (PL66)

折断面の接合により、剥片1点が復元された資料である。

母岩6 b・接合83

折断面の接合により、剥片1点が復元された資料である。

母岩6 c・接合84 (PL66)

剥片2点の接合資料。この資料には、打面調整が観察される。

母岩8 a・接合85 (第153図、PL61)

二次加工ある剥片1点・剥片1点・破片1点からなる接合資料。二次加工ある剥片に二次加工時に生じた微細剥片1点が接合している。

母岩8 a・接合86 (第154図、PL61)

剥片3点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

母岩8 a・接合87 (PL66)

折断面により、剥片1点が復元された資料である。

接合88 (PL66)

折断面により、剥片1点が復元された資料である。

母岩5 a・接合89

折断面によって、剥片1点が復元された資料。

母岩5 a・接合90 (PL66)

折断面により剥片1点が復元された資料である。

II 調査の成果

母岩 5 b ・接合91 (PL66)

折断面により剥片 1 点が復元された資料である。

<接合資料 チャート製の石器>

母岩 1 ・接合92 (第154図、PL61)

剥片 2 点の接合資料。打面を固定し、縦長剥片を剥離する様子が観察される。

母岩 2 ・接合93 (第155図、PL61)

石核 1 点・剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。自然面を多く残す石核が残されている。自然面の様子からは亜角礫状の石材を利用していることがわかる。

接合94

折断面の接合により、二次加工ある剥片 1 点が復元された資料である。この二次加工ある剥片は石刃を素材としており、打面調整痕が認められる。

接合95 (PL66)

折断面の接合により、剥片 1 点が復元された資料である。

接合96

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、小形で不定形である。

<接合資料 珪質頁岩製の石器>

母岩 1 ・接合97 (PL66)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、横長である。

母岩 1 ・接合98 (第155図、PL62)

剥片 2 点の接合資料。剥片の形態は、横長である。

母岩 1 ・接合99 (PL66)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

母岩 1 ・接合100 (第156図、PL62)

剥片 5 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

母岩 2 ・接合101 (第156図、PL62)

二次加工ある剥片 1 点・剥片 3 点の接合資料。剥片の形態は、不定形である。二次加工ある剥片は、そのうちの比較的大形の剥片を素材としている。

母岩 4 ・接合102 (第155図、PL62)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、縦長である。

母岩 4 ・接合103 (PL66)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

母岩 5 ・接合104 (第155図、PL62)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

母岩 8 ・接合105 (PL67)

剥片 2 点の接合資料。剥片形態は、不定形である。

接合106 (PL67)

折断面の接合により、剥片 1 点が復元された資料である。

<接合資料 白色凝灰岩製の石器>

接合107 (第118図、PL46)

折断面の接合により、石刃 1 点が復元された資料。

<接合資料 ホルンフェルス製の石器>

接合108 (PL67)

折断面の接合により、小形で不定形な剥片 1 点が復元された資料。

<接合資料 砂岩製の石器>

接合109 (PL67)

剥片 1 点、石核 1 点の接合資料。剥片は、不定形である。石核からは、打面を固定せずに、打面転移を繰り返す剥片剥離の存在が浮かび上がる。

<接合資料 粗粒輝石安山岩製の石器>

接合110 (第125図、PL50)

折断面の接合により、ハンマーストーン 1 点が復元された資料。

石器の分布

1号ブロック (第157図)

位置 調査区西側の丘陵南西斜面

規模 長径6.8m・短径3.5m

分布状態 石器は東一西に散漫に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 二次加工ある剥片 1、剥片 10

石材構成 黒色頁岩 8、黒曜石 3

2号ブロック (第157図)

位置 調査区西側の丘陵西斜面

規模 長径3.5m・短径3.2m

分布状態 石器はほぼ円形の範囲に散漫に分布

出土層位 IX層～XII層

器種構成 ナイフ形石器 1、剥片 8、碎片 2、礫 1

第35表 ブロック別器種構成 (IV文化-1 a 地点)

	ナイフ	台形様	彫器	楔形	搔器	加工痕	敲石	石刃	局磨斧	石核	剥片	碎片	礫	礫片	その他	合計
1号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	10	0	0	0	0	11
2号ブロック	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	2	1	0	0	12
3号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10
4号ブロック	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	8	22	1	0	0	34
5a号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0	削片1	6
5b号ブロック	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	0	6
6号ブロック	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	5
7号ブロック	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	1	0	8
8a号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	9	0	0	0	0	10
8b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	10	1	0	1	0	15
8c号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	12	0	0	0	0	14
9号ブロック	2	0	0	1	0	1	0	0	4	0	21	10	1	1	0	41
10号ブロック	2	1	0	0	0	2	0	3	0	0	58	61	0	1	0	128
11号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	15
12号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3	0	0	0	8
13号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	4	0	0	0	10
14号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	2	0	0	0	6
15a号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	0	0	0	7
15b号ブロック	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	12	2	1	1	台石1	19
15c号ブロック	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	5
15d号ブロック	0	0	0	0	0	3	0	2	0	0	26	32	1	1	削片1	66
15e号ブロック	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	2	1	0	0	10
16号ブロック	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	3	0	1	0	0	9
17号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	12	2	1	1	0	20
18号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	4
19号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	10	3	0	2	0	17
20号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	0	1	0	8
21号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	16	5	0	10	0	33
22号ブロック	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	4	1	0	0	38
23a号ブロック	1	2	0	0	0	4	1	0	0	12	229	114	0	1		363
23b号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	31	9	0	0	0	43
23c号ブロック	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	50	38	0	2	0	92
23d号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	1	0	0	0	6
23e号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	0	1	0	6
23f号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	10
24a号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	2	0	1	0	14
24b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	6
25号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	11	1	2	1	0	17
26号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	3
27号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	4	0	0	0	14
28号ブロック	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5	1	0	0	0	8
29号ブロック	2	0	0	2	0	3	0	2	0	2	46	10	1	0	0	67
30a号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	15	3	0	0	0	19
30b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	2	0	0	6
31a号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	1	0	5
31b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	3
31c号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8	0	0	0	0	9
31d号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	7
32a号ブロック	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	13	0	0	0	0	15
32b号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	3
33a号ブロック	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	7	2	1	2	0	14
33b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4
33c号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	4
34号ブロック	0	0	0	0	1	0	0	6	0	0	0	0	0	1	0	8
35号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	4
36号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3	0	5
37a号ブロック	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	3	0	0	0	26
37b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	7	0	0	0	12
ブロック外	2	1	0	0	0	7	1	1	0	2	69	12	4	9	0	108
合計	24	4	2	3	1	39	4	18	4	26	902	377	31	44	3	1487

Ⅱ 調査の成果

第36表 ブロック別石材構成 (Ⅳ文化-1 a 地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	チャート	珪頁	ホルン	砂岩	溶凝	粗安	雲石片	その他	合計
1号ブロック	0	8	3	0	0	0	0	0	0	0	0	11
2号ブロック	3	3	0	3	2	0	0	0	1	0	0	12
3号ブロック	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	10
4号ブロック	2	0	31	0	0	0	0	0	1	0	0	34
5a号ブロック	0	0	5	0	0	0	0	0	1	0	0	6
5b号ブロック	1	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	6
6号ブロック	0	0	3	0	1	0	0	0	1	0	0	5
7号ブロック	1	0	3	1	2	1	0	0	0	0	珪変1	8
8a号ブロック	2	0	3	5	0	0	0	0	0	0	0	10
8b号ブロック	8	0	1	4	0	1	0	0	0	0	珪変1	15
8c号ブロック	12	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	14
9号ブロック	21	5	11	1	0	1	1	0	0	0	玉ずい1	41
10号ブロック	12	8	101	1	3	1	1	0	1	0	0	128
11号ブロック	7	0	6	0	1	0	0	0	0	0	硬頁1	15
12号ブロック	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	8
13号ブロック	2	0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	10
14号ブロック	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	6
15a号ブロック	1	0	2	0	2	0	0	0	0	0	白凝2	7
15b号ブロック	1	0	15	1	0	0	0	1	1	0	0	19
15c号ブロック	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	5
15d号ブロック	0	0	64	0	0	0	0	0	2	0	0	66
15e号ブロック	0	0	9	0	0	0	0	0	1	0	0	10
16号ブロック	0	0	2	5	1	0	1	0	0	0	0	9
17号ブロック	1	0	15	0	1	1	0	1	1	0	0	20
18号ブロック	0	1	0	0	2	0	0	0	1	0	0	4
19号ブロック	14	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	17
20号ブロック	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	珪変1	8
21号ブロック	22	1	0	0	0	1	0	0	9	0	0	33
22号ブロック	33	2	0	0	1	0	0	1	0	1	0	38
23a号ブロック	330	26	2	1	1	0	1	0	1	1	0	363
23b号ブロック	41	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	42
23c号ブロック	88	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	92
23d号ブロック	4	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	6
23e号ブロック	3	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	6
23f号ブロック	5	1	0	3	0	0	0	0	0	1	0	10
24a号ブロック	10	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	14
24b号ブロック	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6
25号ブロック	8	2	1	0	2	0	0	0	4	0	0	17
26号ブロック	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	3
27号ブロック	6	0	1	0	6	1	0	0	0	0	0	14
28号ブロック	0	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	8
29号ブロック	14	35	9	0	9	0	0	0	1	0	0	68
30a号ブロック	12	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
30b号ブロック	3	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	6
31a号ブロック	3	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	5
31b号ブロック	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
31c号ブロック	3	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	9
31d号ブロック	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7
32a号ブロック	12	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	15
32b号ブロック	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	3
33a号ブロック	4	0	7	1	0	0	0	0	2	0	0	14
33b号ブロック	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
33c号ブロック	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
34号ブロック	0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
35号ブロック	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
36号ブロック	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	5
37a号ブロック	25	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	26
37b号ブロック	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
ブロック外	45	9	27	6	3	0	3	0	12	0	珪変1 点頁1	108
合計	804	120	374	44	54	9	9	7	43	3	9	1487

石材構成 黒色安山岩 3、黒色頁岩 3、チャート
3、珪質頁岩 2、粗粒輝石安山岩 1

3号ブロック (第157図)

位置 調査区西側の丘陵西斜面
規模 長径2.7m・短径1.5m
分布状態 石器は東一西に散漫に分布
出土層位 IX層～XII層
器種構成 剥片10
石材構成 珪質頁岩10

4号ブロック (第157図)

位置 調査区西側の丘陵西斜面
規模 長径2.2m・短径1.3m
分布状態 石器は南一北に散漫に分布
出土層位 IX層～XII層
器種構成 ナイフ形石器 2、石刃 1、剥片 8、碎
片22、礫 1
石材構成 黒曜石31、黒色安山岩 2、粗粒輝石安
山岩 1

5 a号ブロック (第157図)

位置 調査区西側の丘陵西斜面
規模 長径2.7m・短径1.5m
分布状態 石器は東一西に散漫に分布
出土層位 IX層～XII層
器種構成 剥片 3、碎片 1、削片 1、礫 1
石材構成 黒曜石 5、粗粒輝石安山岩 1

5 b号ブロック (第157図)

位置 調査区西側の丘陵西斜面
規模 長径1.8m・短径1.3m
分布状態 石器は南西一北東に散漫に分布
出土層位 IX層～XI層
器種構成 碎片 3、剥片 2、彫刻刀形石器 1
石材構成 黒曜石 4、珪質頁岩 1、黒色安山岩 1

6号ブロック (第157図)

位置 調査区西側の丘陵西斜面
規模 長径4.2m・短径2.6m
分布状態 石器は北西一南東に散漫に分布
出土層位 XI層～XII層
器種構成 ナイフ形石器 1、石核 1、剥片 1、碎

片 1、礫 1

石材構成 黒曜石 3、珪質頁岩 1、粗粒輝石安山
岩 1

7号ブロック (第158図)

位置 調査区西側の丘陵南西斜面
規模 長径5.6m・短径4.4m
分布状態 石器は西一東に散漫に分布
出土層位 X層～XII層
器種構成 ナイフ形石器 1、剥片 5、碎片 1、礫 1
石材構成 黒曜石 3、珪質頁岩 2、黒色安山岩 1、
チャート 1、変珪岩 1

8 a号ブロック (第158図)

位置 調査区西側の丘陵西斜面
規模 長径4.0m・短径2.6m
分布状態 石器は西一東に散漫に分布
出土層位 IX層～XII層
器種構成 二次加工ある剥片 1、剥片 9
石材構成 チャート 5、黒曜石 3、黒色安山岩 2

8 b号ブロック (第158図)

位置 調査区西側の丘陵頂部
規模 長径3.2m・短径2.0m
分布状態 石器は西一東に散漫に分布
出土層位 XI層～XIII層
器種構成 石刃 1、石核 2、剥片10、碎片 1、礫
片 1

石材構成 黒色安山岩 8、チャート 4、黒曜石 1、
ホルンフェルス 1、珪質変質岩 1

8 c号ブロック (第158図)

位置 調査区西側の丘陵頂部
規模 長径3.1m・短径1.7m
分布状態 石器は南一北に散漫に分布
出土層位 XI層～XII層
器種構成 石核 2、剥片12
石材構成 黒色安山岩12、チャート 2

9号ブロック (第158図)

位置 調査区西側の丘陵頂部
規模 長径7.4m・短径5.7m
分布状態 石器は北西一南東に散漫に分布

II 調査の成果

出土層位 IX層～XII層

器種構成 ナイフ形石器 2、楔形石器 1、加工痕ある剥片 1、局部磨製石斧 1、剥片 21、碎片 10、礫 1、礫片 1

石材構成 黒色安山岩 21、黒曜石 11、黒色頁岩 2、チャート 1、ホルンフェルス 1、玉ざい 1、砂岩 1

10号ブロック (第158図)

位置 調査区西側の丘陵頂部

規模 長径7.4m・短径5.7m

分布状態 石器はほぼ円形の範囲に分布

出土層位 IX層～XII層

器種構成 ナイフ形石器 2、台形様石器 1、加工痕ある剥片 2、石刃 3、剥片 58、碎片 61、礫片 1

石材構成 黒曜石 101、黒色安山岩 12、黒色頁岩 8、珩質頁岩 3、チャート 1、ホルンフェルス 1、砂岩 1、粗粒輝石安山岩 1

11号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵頂部

規模 長径6.0m・短径5.6m

分布状態 石器はほぼ円形の範囲に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 剥片 15

石材構成 黒色安山岩 7、黒曜石 6、硬質頁岩 1、珩質頁岩 1

12号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵頂部

規模 長径4.6m・短径2.8m

分布状態 石器は西一東に散漫に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 剥片 5、碎片 3

石材構成 黒曜石 8

13号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵北斜面

規模 長径5.6m・短径3.0m

分布状態 石器は西一東に散漫に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 剥片 6、碎片 4

石材構成 黒曜石 7、黒色安山岩 2、珩質頁岩 1

14号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵北斜面

規模 長径3.0m・短径2.9m

分布状態 石器はほぼ円形に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 加工痕ある剥片 1、剥片 3、碎片 2

石材構成 黒曜石 6

15 a号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵北斜面

規模 長径1.9m・短径1.3m

分布状態 石器は北西一南東に散漫に分布

出土層位 IX層～XII層

器種構成 剥片 6、碎片 1

石材構成 黒曜石 2、珩質頁岩 2、白色凝灰岩 2、黒色安山岩 1

15 b号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵北斜面

規模 長径3.0m・短径2.9m

分布状態 石器はほぼ円形に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 加工痕ある剥片 2、台石 1、剥片 12、碎片 2、礫 1、礫片 1

石材構成 黒曜石 15、黒色安山岩 1、チャート 1、溶結凝灰岩 1、粗粒輝石安山岩 1

15 c号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵北斜面

規模 長径1.6m・短径0.9m

分布状態 石器は南西一北東に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 ナイフ形石器 1、加工痕ある剥片 1、石核 1、剥片 2

石材構成 黒曜石 4、チャート 1

15 d号ブロック (第159図)

位置 調査区西側の丘陵北斜面

規模 長径4.2m・短径1.9m

分布状態 石器は南西一北東に分布

- 出土層位 IX層～XII層
 器種構成 加工痕ある剥片3、削片1、石刃2、
 剥片26、碎片32、礫1、礫片1
 石材構成 黒曜石64、粗粒輝石安山岩2
- 15e号ブロック** (第159図)
 位置 調査区西側の丘陵北斜面
 規模 長径2.9m・短径1.4m
 分布状態 石器は西一東に分布
 出土層位 X層～XII層
 器種構成 ナイフ形石器3、加工痕ある剥片1、
 剥片3、碎片2、礫1
 石材構成 黒曜石9、粗粒輝石安山岩1
- 16号ブロック** (第160図)
 位置 調査区北側の丘陵北斜面
 規模 長径4.1m・短径2.2m
 分布状態 石器は北西一南東に分布
 出土層位 X層～XII層
 器種構成 ナイフ形石器1、加工痕ある剥片4、
 剥片3、礫1
 石材構成 チャート5、黒曜石2、珪質頁岩1、
 砂岩1
- 17号ブロック** (第160図)
 位置 調査区西側の丘陵北斜面
 規模 長径5.7m・短径5.5m
 分布状態 石器はほぼ円形に分布
 出土層位 IX層～XII層
 器種構成 加工痕ある剥片1、石核3、剥片12、
 碎片2、礫1、礫片1
 石材構成 黒曜石15、黒色安山岩1、珪質頁岩1、
 ホルンフェルス1、粗粒輝石安山岩1、
 溶結凝灰岩1
- 18号ブロック** (第160図)
 位置 調査区北側の丘陵北斜面
 規模 長径3.3m・短径1.6m
 分布状態 石器は西一東に散漫に分布
 出土層位 XI層～XII層
 器種構成 剥片3、礫1
 石材構成 珪質頁岩2、黒色頁岩1、粗粒輝石安
- 山岩1
- 19号ブロック** (第160図)
 位置 調査区中央の丘陵頂部
 規模 長径6.7m・短径3.4m
 分布状態 石器は南西一北東に分布
 出土層位 XI層～XII層
 器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片10、
 碎片3、礫片2
 石材構成 黒色安山岩14、黒色頁岩1、粗粒輝石
 安山岩2、
- 20号ブロック** (第162図)
 位置 調査区中央の丘陵頂部
 規模 長径2.7m・短径2.6m
 分布状態 石器はほぼ円形に分布
 出土層位 XI層～XII層
 器種構成 剥片5、碎片2、礫片1
 石材構成 黒色安山岩7、珪質変質岩1
- 21号ブロック** (第161図)
 位置 調査区中央の丘陵頂部
 規模 長径6.6m・短径4.5m
 分布状態 石器は西一東に分布
 出土層位 IX層～XII層
 器種構成 加工痕ある剥片1、石刃1、剥片16、
 碎片5、礫片10
 石材構成 黒色安山岩22、黒色頁岩1、ホルンフェ
 ルス1、粗粒輝石安山岩9
- 22号ブロック** (第161図)
 位置 調査区中央の丘陵頂部
 規模 長径4.5m・短径3.7m
 分布状態 石器は西一東に分布
 出土層位 X層～XII層
 器種構成 ナイフ形石器3、剥片30、碎片4、礫1
 石材構成 黒色安山岩33、黒色頁岩2、珪質頁岩
 1、溶結凝灰岩1、雲母石英片岩1
- 23a号ブロック** (第162図)
 位置 調査区中央の丘陵頂部
 規模 長径10.0m・短径6.7m
 分布状態 石器は南一北に分布

II 調査の成果

出土層位 IX層～XII層
器種構成 ナイフ形石器1、台形様石器2、加工痕ある剥片4、敲石1、石核12、剥片229、碎片114、礫片1
石材構成 黒色安山岩330、黒色頁岩26、黒曜石2、チャート1、珪質頁岩1、砂岩1、粗粒輝石安山岩1、雲母石英片岩1

23 b号ブロック (第162図)

位 置 調査区中央の丘陵南斜面
規 模 長径3.1m・短径2.0m
分布状態 石器は南一北に分布
出土層位 IX層～XII層
器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片31、碎片9
石材構成 黒色安山岩41、黒色頁岩1

23 c号ブロック (第162図)

位 置 調査区中央の丘陵南斜面
規 模 長径5.6m・短径3.6m
分布状態 石器は北西一南東に分布
出土層位 X層～XII層
器種構成 ナイフ形石器1、石核1、剥片50、碎片38、礫片2
石材構成 黒色安山岩88、黒色頁岩1、チャート1、砂岩1、溶結凝灰岩1

23 d号ブロック (第162図)

位 置 調査区中央の丘陵南斜面
規 模 長径3.8m・短径2.0m
分布状態 石器は南一北に分布
出土層位 XI層～XII層
器種構成 加工痕ある剥片1、剥片4、碎片1
石材構成 黒色安山岩4、黒曜石1、ホルンフェルス1

23 e号ブロック (第162図)

位 置 調査区中央の丘陵南斜面
規 模 長径4.2m・短径1.4m
分布状態 石器は西一東に散漫に分布
出土層位 X層～XII層
器種構成 剥片4、碎片1、礫片1

石材構成 黒色安山岩3、黒曜石1、ホルンフェルス1、溶結凝灰岩1

23 f号ブロック (第162図)

位 置 調査区中央の丘陵南斜面
規 模 長径5.9m・短径2.9m
分布状態 石器は南西一北東に分布
出土層位 X層～XII層
器種構成 剥片10
石材構成 黒色安山岩5、黒色頁岩1、チャート3、雲母石英片岩1

24 a号ブロック (第163図)

位 置 調査区中央の丘陵南斜面
規 模 長径4.5m・短径2.1m
分布状態 石器は南一北に分布
出土層位 XI層～XII層
器種構成 剥片11、碎片2、礫片1
石材構成 黒色安山岩10、黒色頁岩1、黒曜石2、チャート1

24 b号ブロック (第163図)

位 置 調査区中央の丘陵南斜面
規 模 長径3.1m・短径2.1m
分布状態 石器は南一北に分布
出土層位 X層～XII層
器種構成 剥片6
石材構成 黒色安山岩5、黒曜石1

25号ブロック (第163図)

位 置 調査区南側の丘陵南斜面
規 模 長径4.7m・短径3.2m
分布状態 石器は南一北に分布
出土層位 XI層～XII層
器種構成 石刃1、敲石1、剥片11、碎片1、礫片2、礫片1
石材構成 黒色安山岩8、黒色頁岩2、珪質頁岩2、黒曜石1、粗粒輝石安山岩4、

26号ブロック (第163図)

位 置 調査区南側の丘陵南斜面
規 模 長径2.5m・短径1.7m
分布状態 石器は西一東に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片2、碎片1

石材構成 珪質頁岩2、黒曜石1

27号ブロック (第163図)

位 置 調査区南側の丘陵南斜面

規 模 長径3.6m・短径1.9m

分布状態 石器は南西―北東に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片10、碎片4

石材構成 黒色安山岩6、珪質頁岩6、黒曜石1、
ホルンフェルス1

28号ブロック (第163図)

位 置 調査区中央の丘陵西斜面

規 模 長径4.0m・短径3.3m

分布状態 石器は西―東に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 加工痕ある剥片2、剥片5、碎片1

石材構成 黒曜石7、黒色頁岩1

29号ブロック (第164図)

位 置 調査区南側の丘陵南斜面

規 模 長径7.7m・短径5.3m

分布状態 石器は南西―北東に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 ナイフ形石器2、楔形石器2、加工痕
ある剥片3、石核2、石刃2、剥片46、
碎片10、礫1

石材構成 黒色頁岩35、黒色安山岩14、黒曜石9、
珪質頁岩9、粗粒輝石安山岩1

30 a号ブロック (第164図)

位 置 調査区南側の丘陵南斜面

規 模 長径3.2m・短径2.2m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 石核1、剥片15、碎片3

石材構成 黒色安山岩12、黒色頁岩7

30 b号ブロック (第164図)

位 置 調査区南側の丘陵南斜面

規 模 長径1.7m・短径1.2m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片3、碎片1、礫2

石材構成 黒色安山岩3、珪質頁岩1、溶結凝灰
岩2

31 a号ブロック (第164図)

位 置 調査区中央の丘陵東斜面

規 模 長径2.6m・短径1.3m

分布状態 石器は西―東に分布

出土層位 IX層～XII層

器種構成 剥片4、礫片1

石材構成 黒色安山岩3、チャート1、粗粒輝石
安山岩1

31 b号ブロック (第164図)

位 置 調査区中央の丘陵東斜面

規 模 長径1.0m・短径0.9m

分布状態 石器は、ほぼ円形に分布

出土層位 XII層

器種構成 剥片2、碎片1

石材構成 黒色安山岩3

31 c号ブロック (第164図)

位 置 調査区中央の丘陵東斜面

規 模 長径7.2m・短径2.3m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層

器種構成 加工痕ある剥片1、剥片8

石材構成 黒曜石6、黒色安山岩3

31 d号ブロック (第164図)

位 置 調査区中央の丘陵東斜面

規 模 長径4.0m・短径3.9m

分布状態 石器はほぼ円形に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片7

石材構成 黒色安山岩5、黒曜石2

32 a号ブロック (第166図)

位 置 調査区中央の丘陵東斜面

規 模 長径5.2m・短径3.6m

分布状態 石器は南西―北東に分布

II 調査の成果

出土層位 XI層～XII層

器種構成 石核1、彫器1、剥片13

石材構成 黒色安山岩12、黒曜石3

32b号ブロック (第166図)

位置 調査区中央の丘陵東斜面

規模 長径2.2m・短径1.3m

分布状態 石器は南西―北東に分布

出土層位 XII層

器種構成 敲石1、剥片2

石材構成 黒色安山岩1、珪質頁岩1、砂岩1

33a号ブロック (第166図)

位置 調査区中央の丘陵南東斜面

規模 長径6.8m・短径3.8m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 加工痕ある剥片1、石核1、剥片7、
破片2、礫1、礫片2

石材構成 黒曜石7、黒色安山岩4、チャート1、
粗粒輝石安山岩2

33b号ブロック (第166図)

位置 調査区中央の丘陵南東斜面

規模 長径2.2m・短径1.7m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片4

石材構成 黒色安山岩3、チャート1

33c号ブロック (第166図)

位置 調査区中央の丘陵南東斜面

規模 長径1.7m・短径1.4m

分布状態 石器は南西―北東に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片3、破片1

石材構成 黒色安山岩3、チャート1

34号ブロック (第166図)

位置 調査区南側の丘陵南東斜面

規模 長径6.4m・短径2.5m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 石刃6、搔器1、礫片1

石材構成 黒色頁岩7、チャート1

35号ブロック (第161図)

位置 調査区南側の丘陵南東斜面

規模 長径2.7m・短径1.6m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層

器種構成 剥片3、破片1

石材構成 黒色安山岩4

36号ブロック (第161図)

位置 調査区南側の丘陵南東斜面

規模 長径3.1m・短径2.2m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 剥片2、礫片3

石材構成 黒色安山岩2、チャート3

37a号ブロック (第161図)

位置 調査区南側の丘陵南東斜面

規模 長径5.4m・短径3.7m

分布状態 石器は西―東に分布

出土層位 XI層～XII層

器種構成 ナイフ形石器1、剥片22、破片3

石材構成 黒色安山岩25、珪質頁岩1

37b号ブロック (第161図)

位置 調査区南側の丘陵南東斜面

規模 長径3.0m・短径1.9m

分布状態 石器は西―東に分布

出土層位 X層～XII層

器種構成 剥片5、破片7

石材構成 黒色安山岩12

1号礫群 (第166図)

位置 調査区中央の丘陵北斜面

規模 長径1.3m・短径0.8m

分布状態 石器は南―北に分布

出土層位 XII層

石材構成 粗粒輝石安山岩5

2号礫群 (第166図)

位置 調査区北の丘陵北斜面

規 模 長径3.1m・短径2.0m
 分布状態 石器は南西―北東に分布
 出土層位 XI層～XII層
 石材構成 粗粒輝石安山岩6

接合資料の分布 (第167～172図)

1 a 地点から出土した石器群では、110例の接合資料が認められた。そのなかでも、黒色安山岩製の石器において、最も多くの接合資料が確認される。その他の石材では、黒曜石製の石器に接合資料が多く観察される。

石器の出土は広範囲に及び、接合関係も広範囲に及ぶ。また、接合関係を有しない小規模なブロックがいくつか付随する。

石器の接合関係を共有するブロックどうしがブロック形成における同時性を保証するものであると仮定すると、各群に属するブロック群どうしは同時存在の可能性が高いといえよう。しかし、小規模なブロック間の同時性については、保証すべき根拠がない。

器種別石器の分布 (第173・174図)

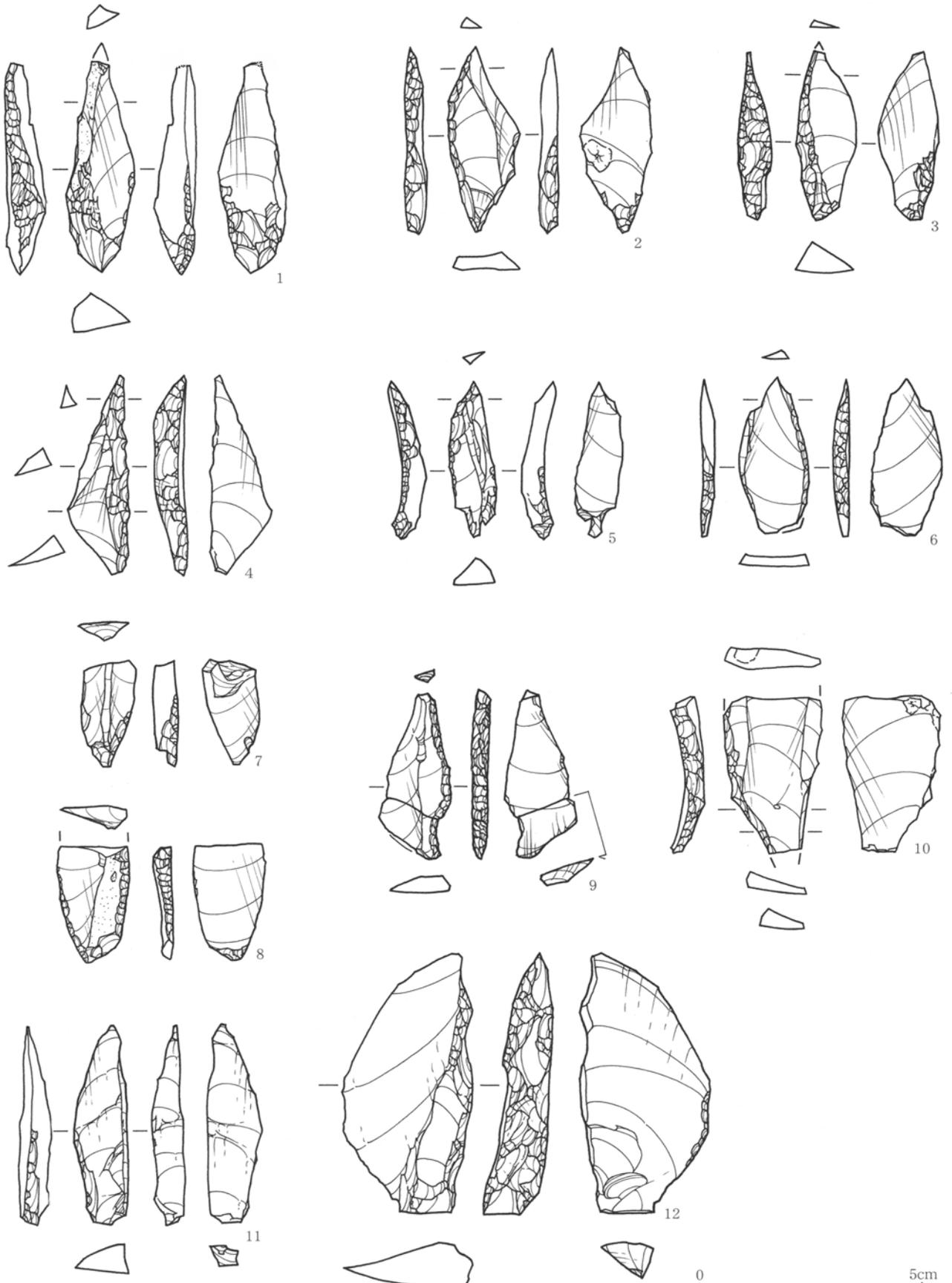
特定の器種が特定の地域に偏在するという傾向は読み取れない。各ブロックの器種組成を考えると、各ブロックの間に共通した傾向はない。その中でも、剥片や碎片を多く含むブロックが存在しているが、これらは石器製作活動を中心として形成されたものと考えられる。

各ブロックの大きさも多様性に富んでおり、前述したように器種組成にも、一定の共通性は認められないことから、ブロックの形成要因が、ある特定の人間活動の結果ではなく、さまざまな活動の累積の結果にあると考えられる。(津島)

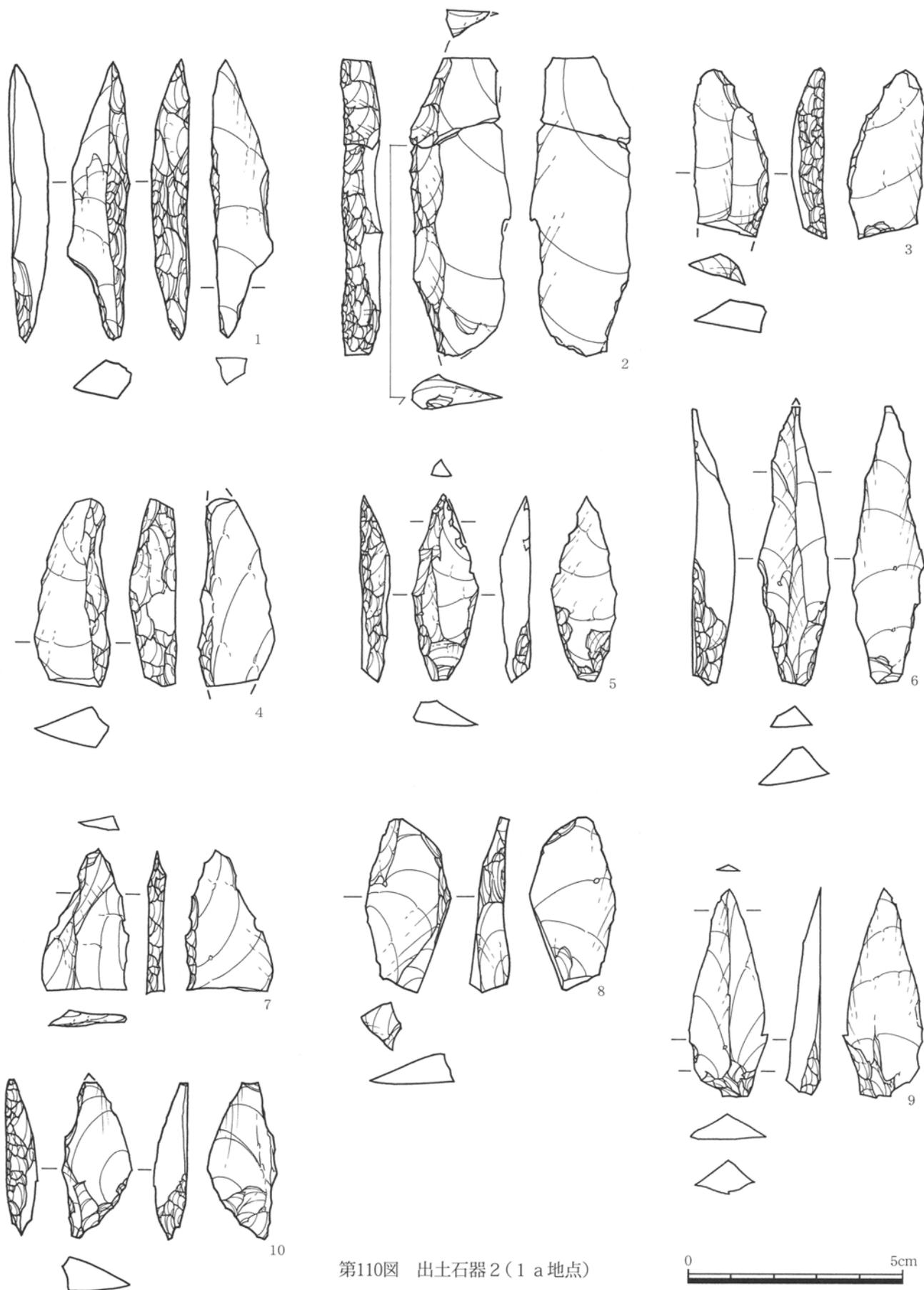
第37表 層位・ブロック別石器出土点数 (IV文化-1 a 地点)

	9層	10層	11層	12層	13層	合計
1号ブロック	0	1	4	6	0	11
2号ブロック	1	2	2	7	0	12
3号ブロック	2	0	2	6	0	10
4号ブロック	4	7	15	8	0	34
5a号ブロック	1	2	0	3	0	6
5b号ブロック	1	2	3		0	6
6号ブロック	0	0	2	3	0	5
7号ブロック	0	3	2	3	0	8
8a号ブロック	1	0	3	6	0	10
8b号ブロック	0	0	1	12	2	15
8c号ブロック	0	0	4	10	0	14
9号ブロック	3	3	7	28	0	41
10号ブロック	5	28	18	77	0	128
11号ブロック	0	4	2	9	0	15
12号ブロック	0	4	3	1	0	8
13号ブロック	0	2	4	4	0	10
14号ブロック	0	3	1	2	0	6
15a号ブロック	1	0	1	5	0	7
15b号ブロック	0	3	5	11	0	19
15c号ブロック	0	1	2	2	0	5
15d号ブロック	3	14	25	24	0	66
15e号ブロック	0	3	2	5	0	10
16号ブロック	0	4	4	1	0	9
17号ブロック	2	3	4	11	0	20
18号ブロック	0	0	3	1	0	4
19号ブロック	0	0	6	11	0	17
20号ブロック	0	0	1	7	0	8
21号ブロック	2	5	3	23	0	33
22号ブロック	0	2	5	31	0	38
23a号ブロック	2	23	56	282	0	363
23b号ブロック	1	5	10	26	0	42
23c号ブロック	0	5	20	67	0	92
23d号ブロック	0	0	1	5	0	6
23e号ブロック	0	2	2	2	0	6
23f号ブロック	0	1	5	4	0	10
24a号ブロック	0	0	6	8	0	14
24b号ブロック	0	1	3	2	0	6
25号ブロック	0	0	8	9	0	17
26号ブロック	0	0	1	2	0	3
27号ブロック	0	0	9	5	0	14
28号ブロック	0	0	7	1	0	8
29号ブロック	0	0	10	58	0	68
30a号ブロック	0	0	7	12	0	19
30b号ブロック	0	0	2	4	0	6
31a号ブロック	1	0	2	2	0	5
31b号ブロック	0	0	0	3	0	3
31c号ブロック	0	0	9	0	0	9
31d号ブロック	0	0	6	1	0	7
32a号ブロック	0	0	5	10	0	15
32b号ブロック	0	0	0	3	0	3
33a号ブロック	0	0	1	13	0	14
33b号ブロック	0	0	1	3	0	4
33c号ブロック	0	0	3	1	0	4
34号ブロック	0	0	2	6	0	8
35号ブロック	0	0	4	0	0	4
36号ブロック	0	0	3	2	0	5
37a号ブロック	0	0	7	19	0	26
37b号ブロック	0	1	0	11	0	12
ブロック外	4	8	42	54	0	108
不明	0	0	1	10	0	11
合計	34	142	367	942	2	1487

II 調査の成果

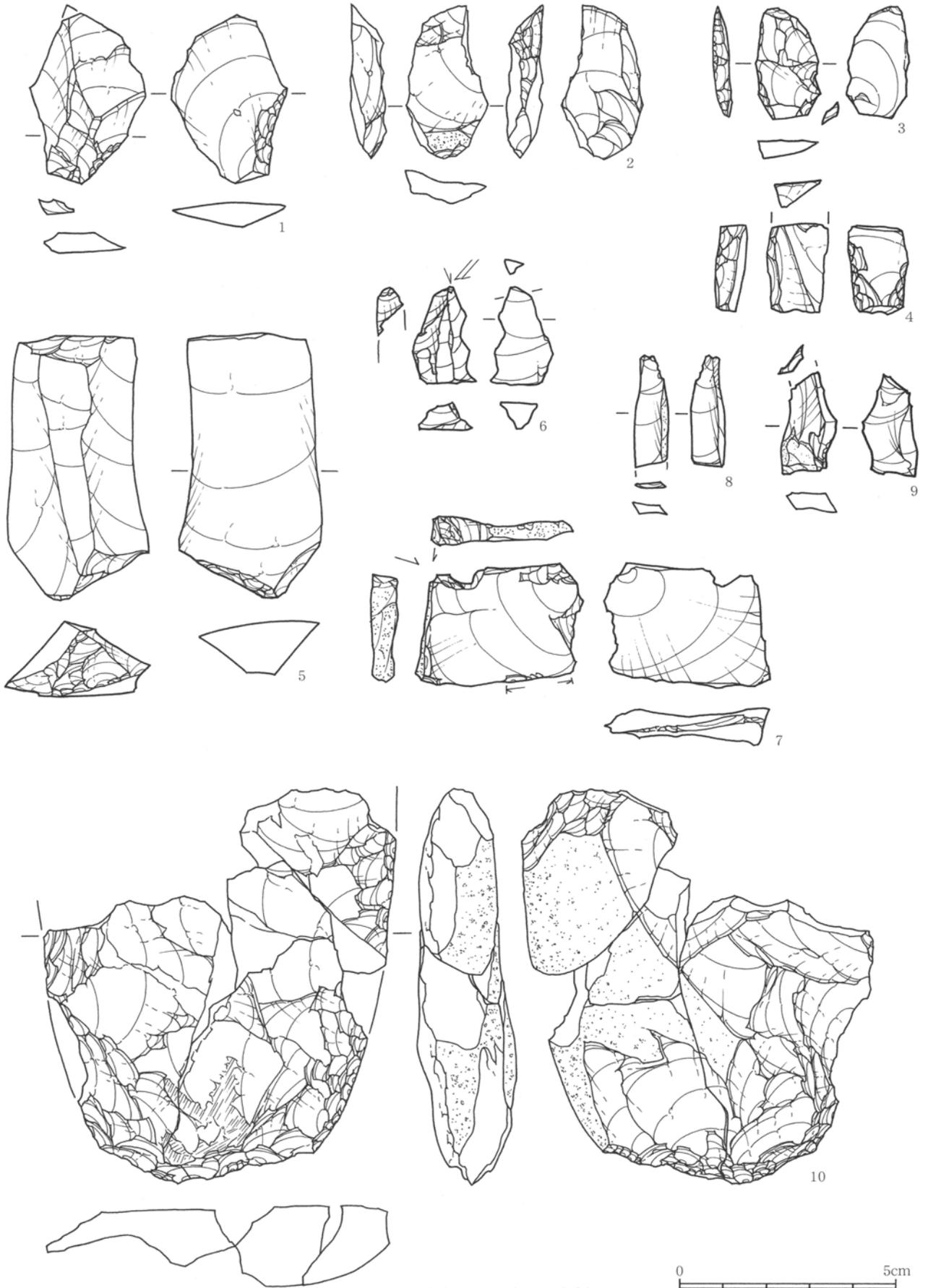


第109図 出土石器1(1 a地点)

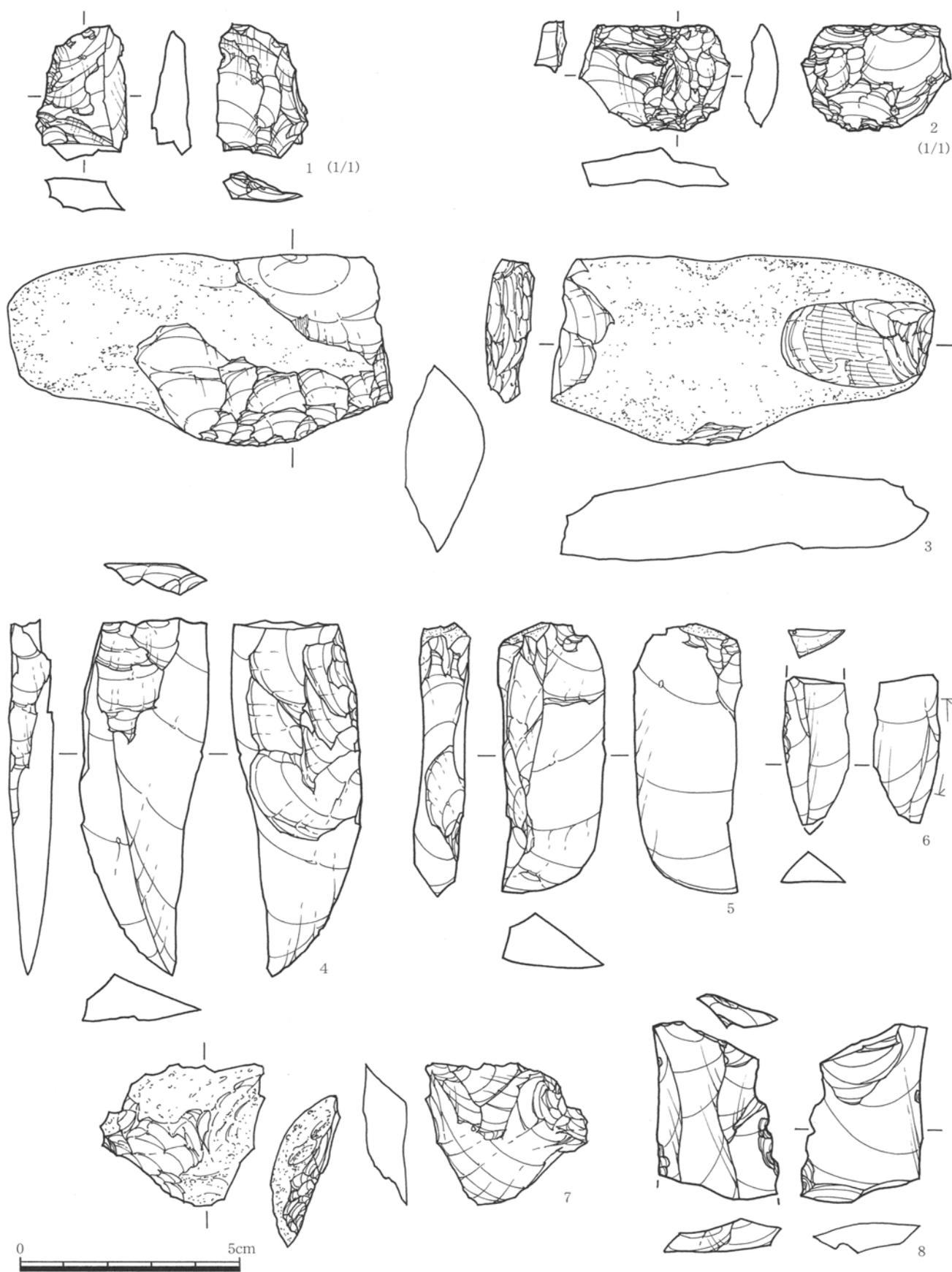


第110圖 出土石器2(1 a地点)

II 調査の成果

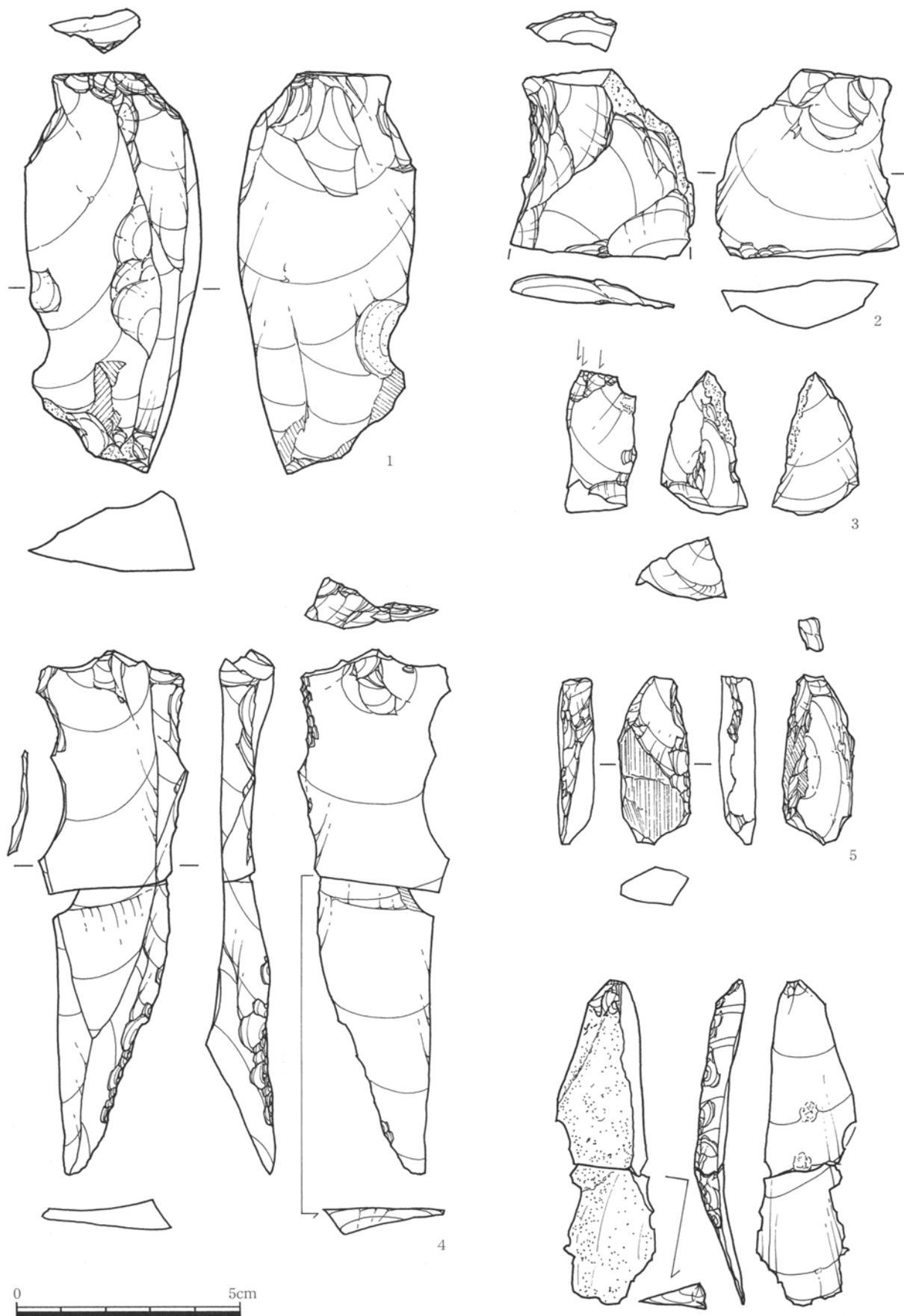


第111図 出土石器3(1 a地点)

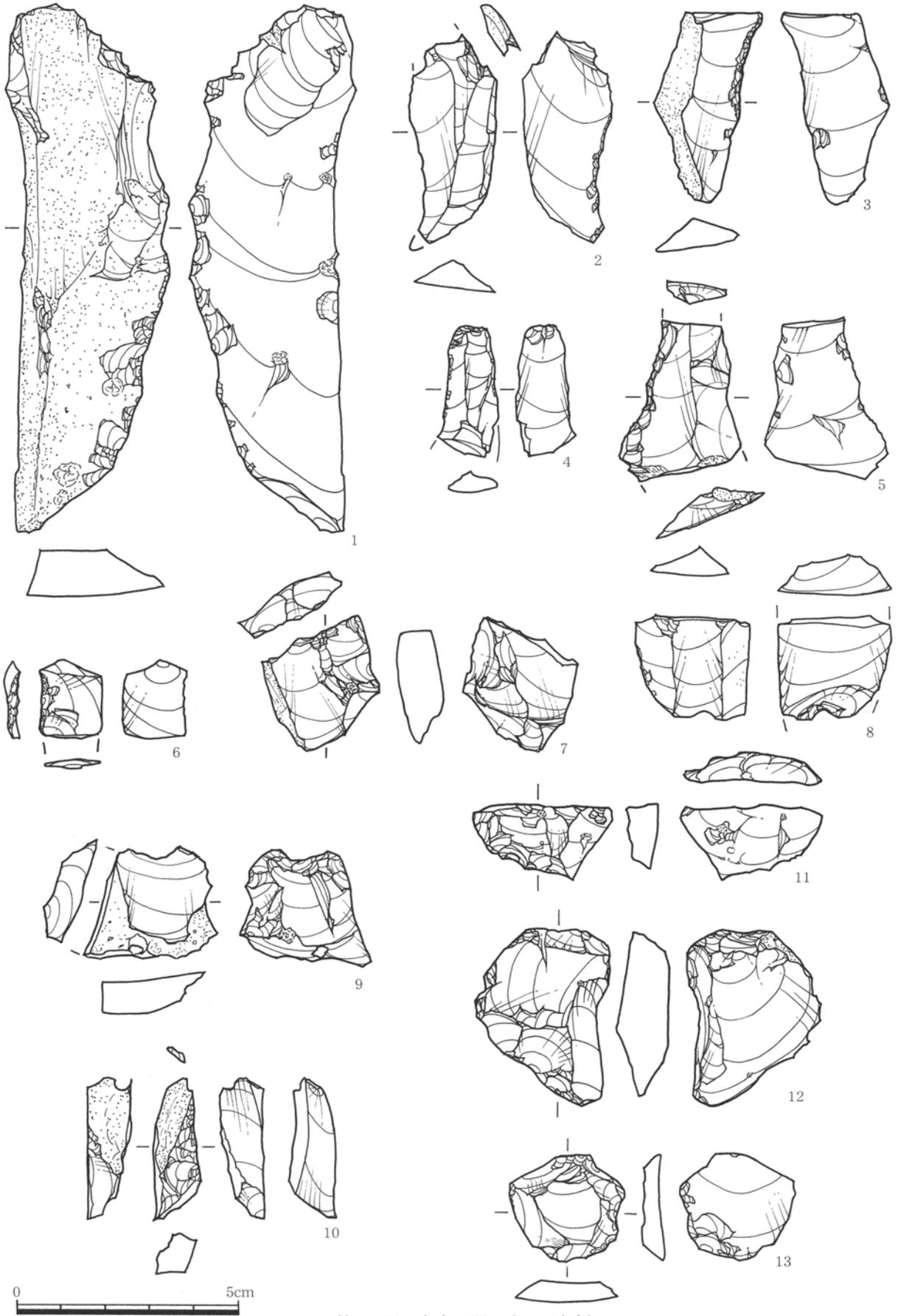


第112図 出土石器4(1 a地点)

II 調査の成果

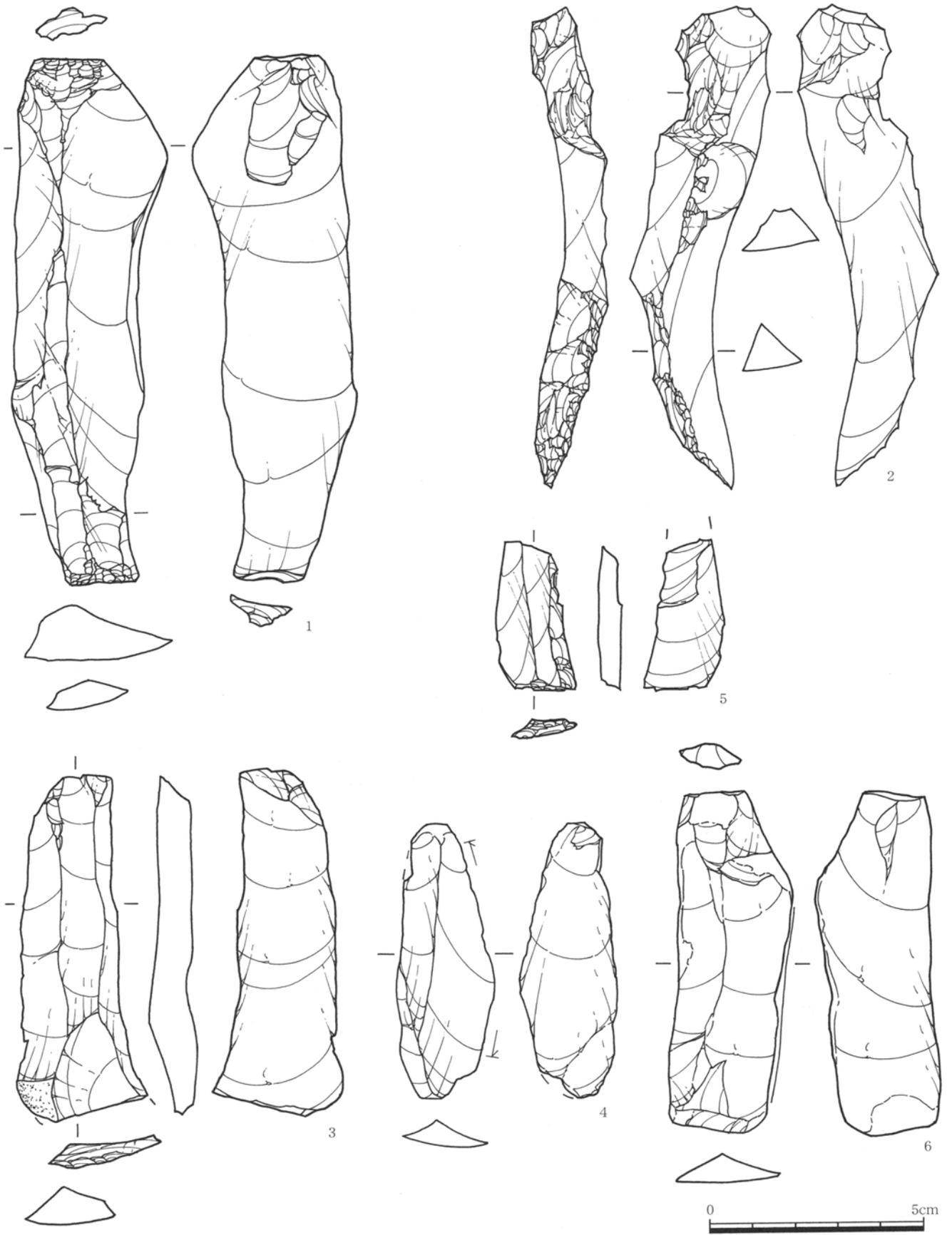


第113図 出土石器5 (1 a 地点)

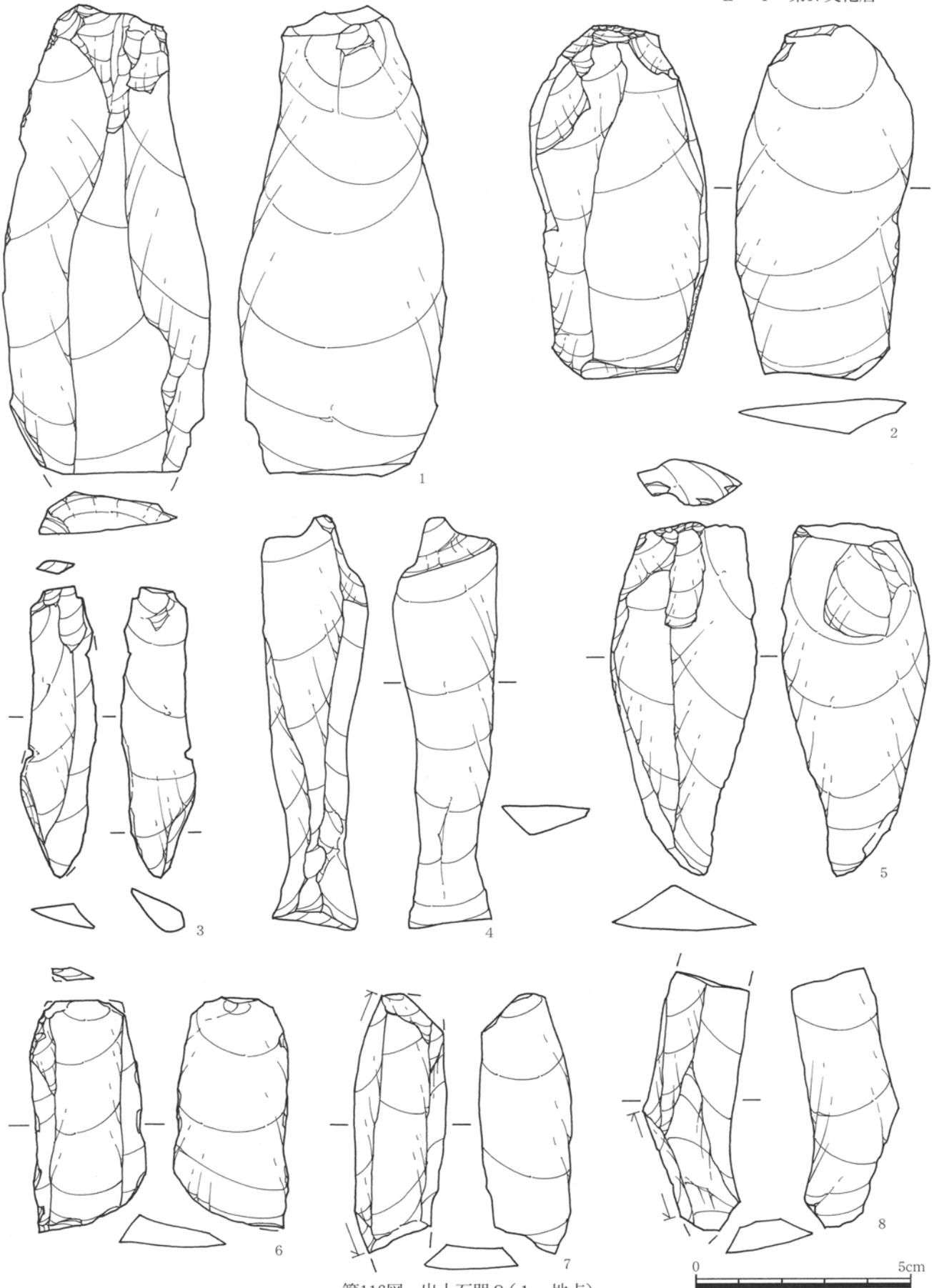


第114图 出土石器6(1 a地点)

II 調査の成果

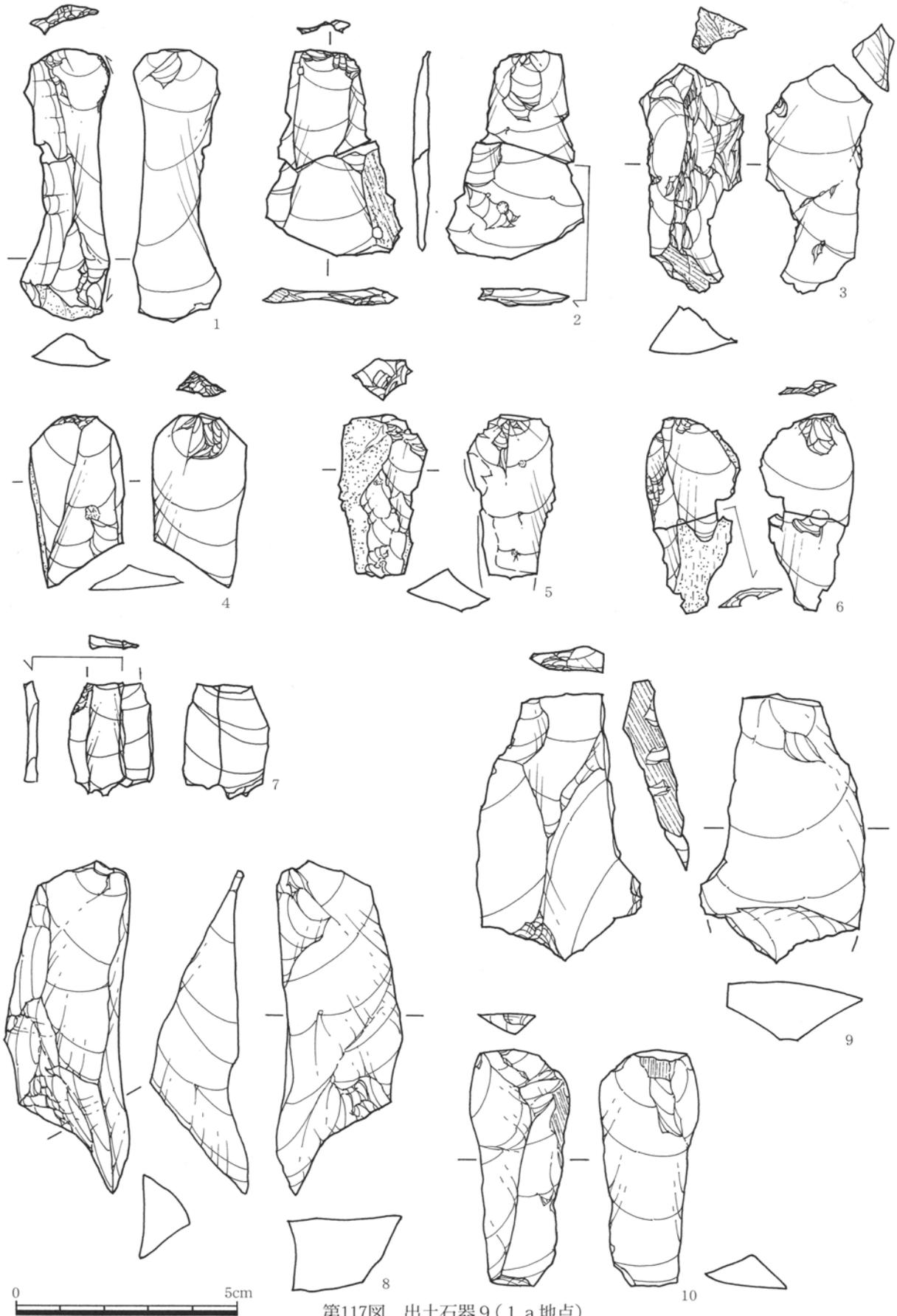


第115図 出土石器7(1 a地点)

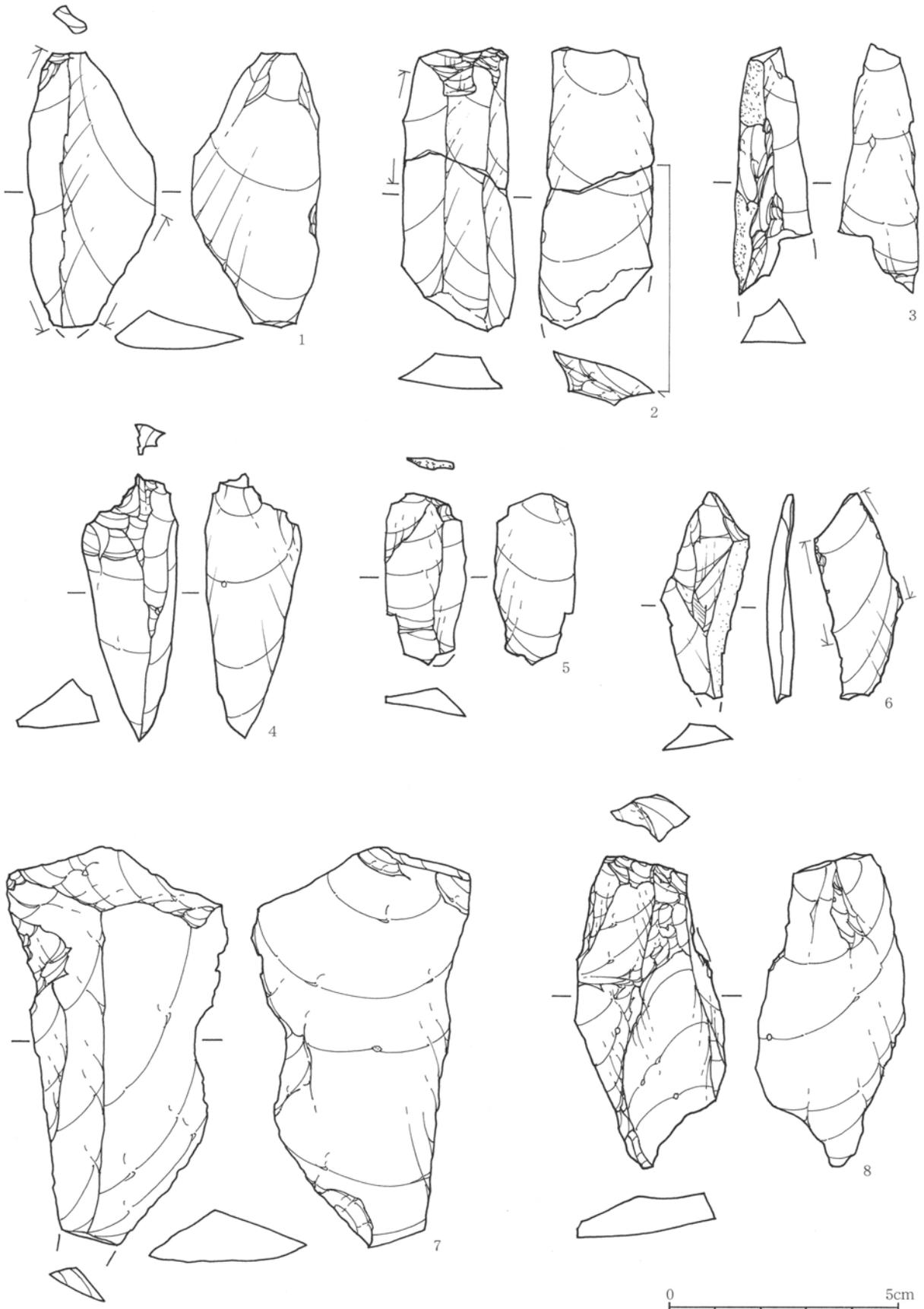


第116图 出土石器8(1 a地点)

II 調査の成果

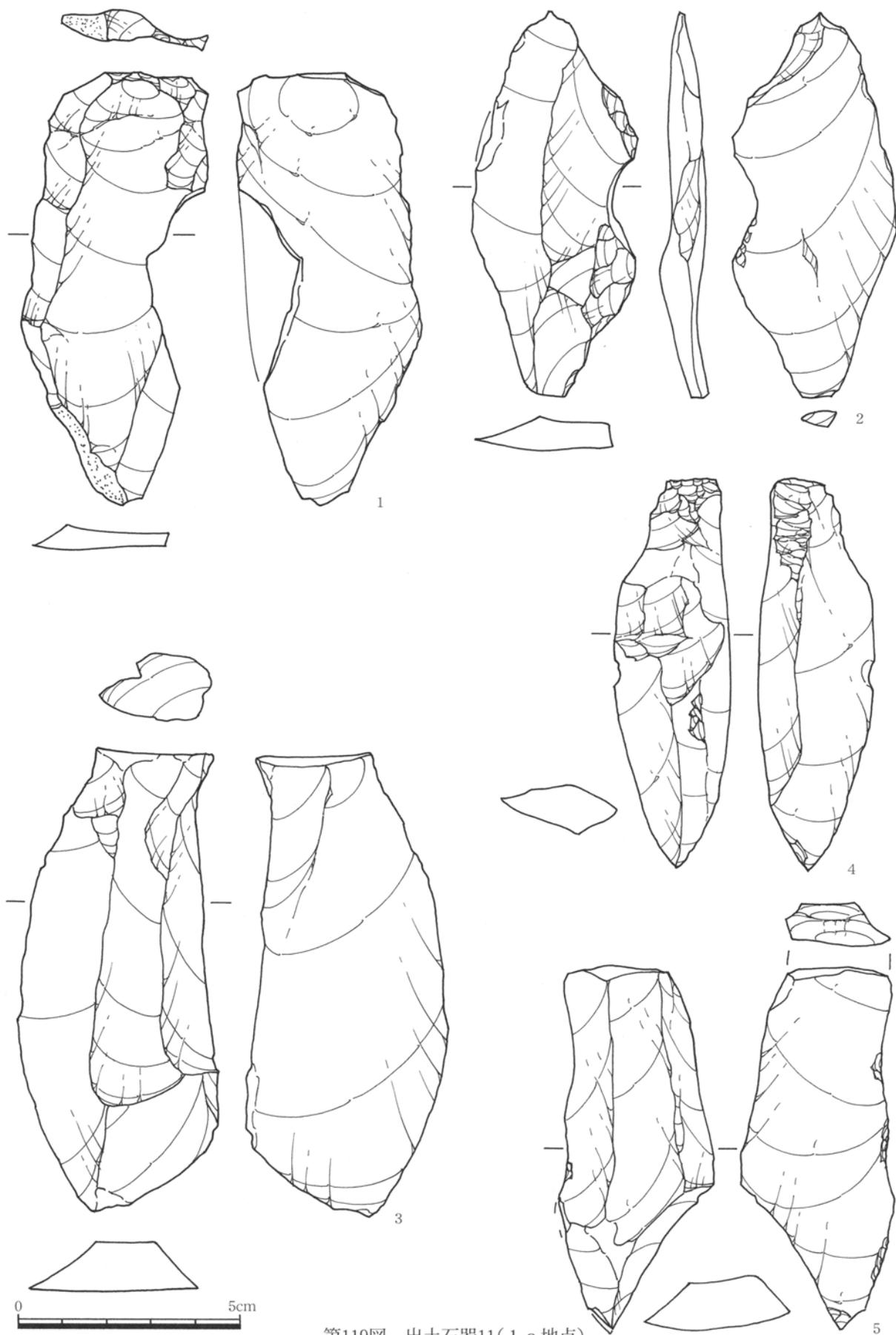


第117図 出土石器9(1 a地点)

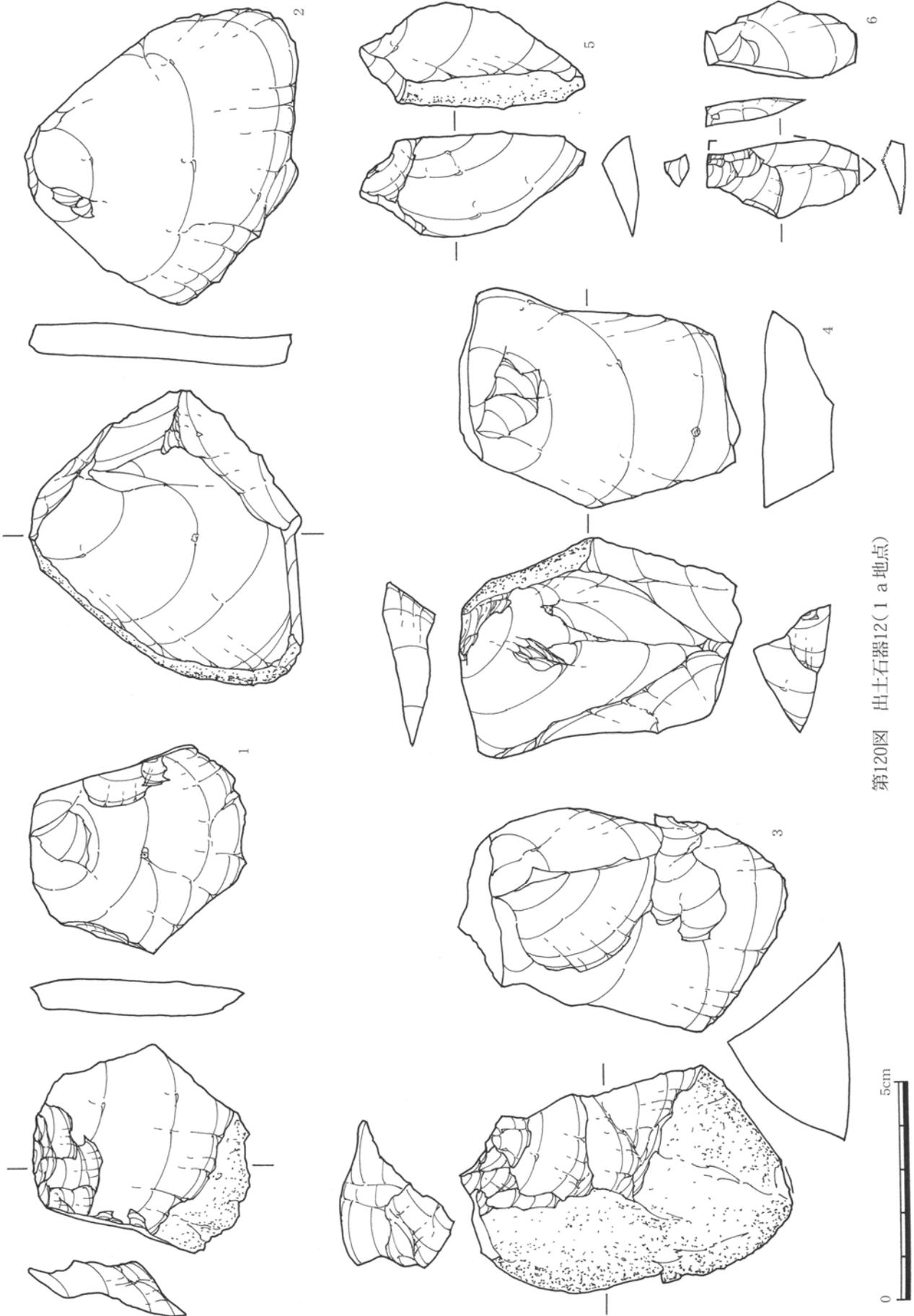


第118図 出土石器10(1 a地点)

II 調査の成果

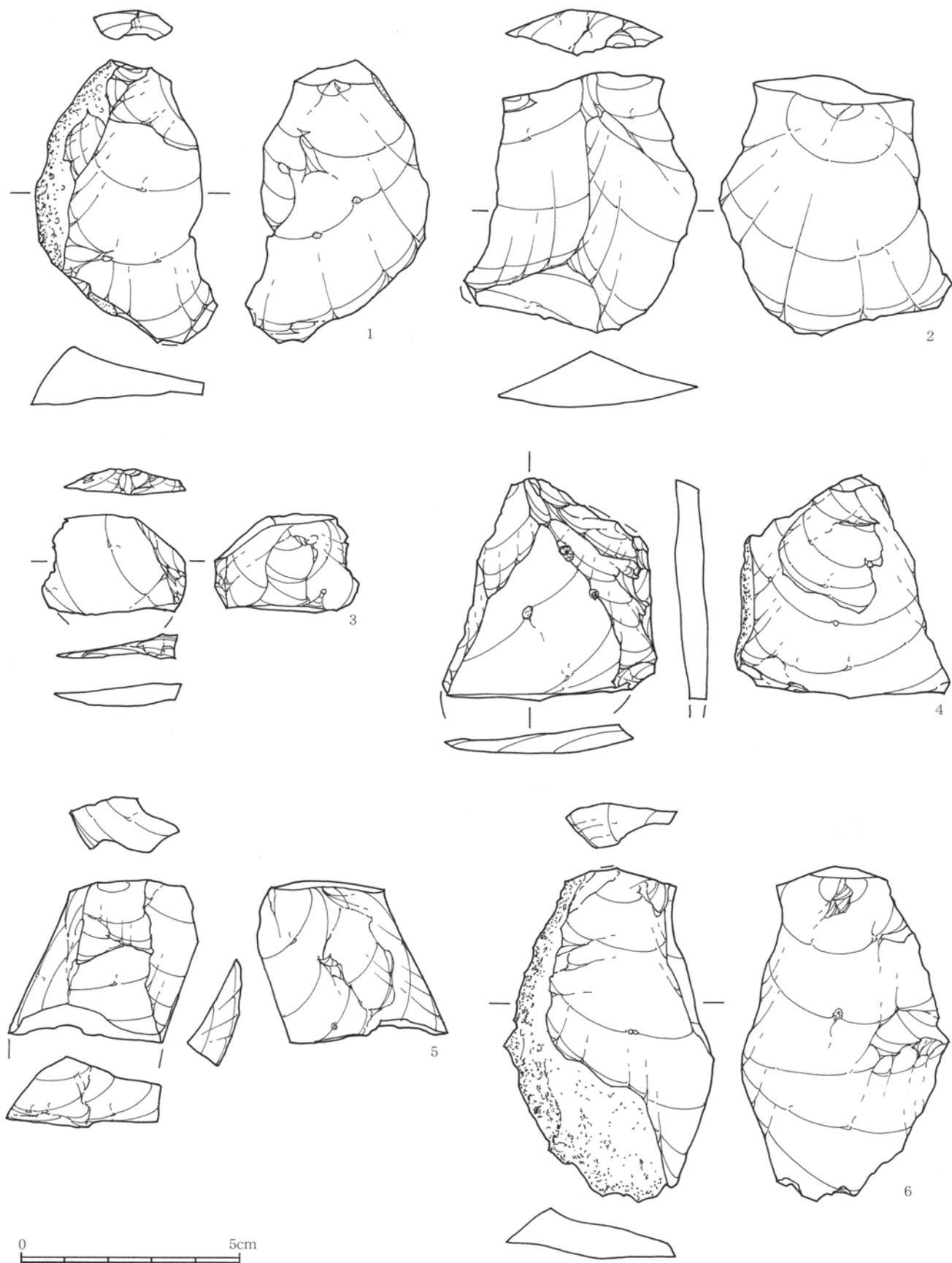


第119図 出土石器11(1 a地点)

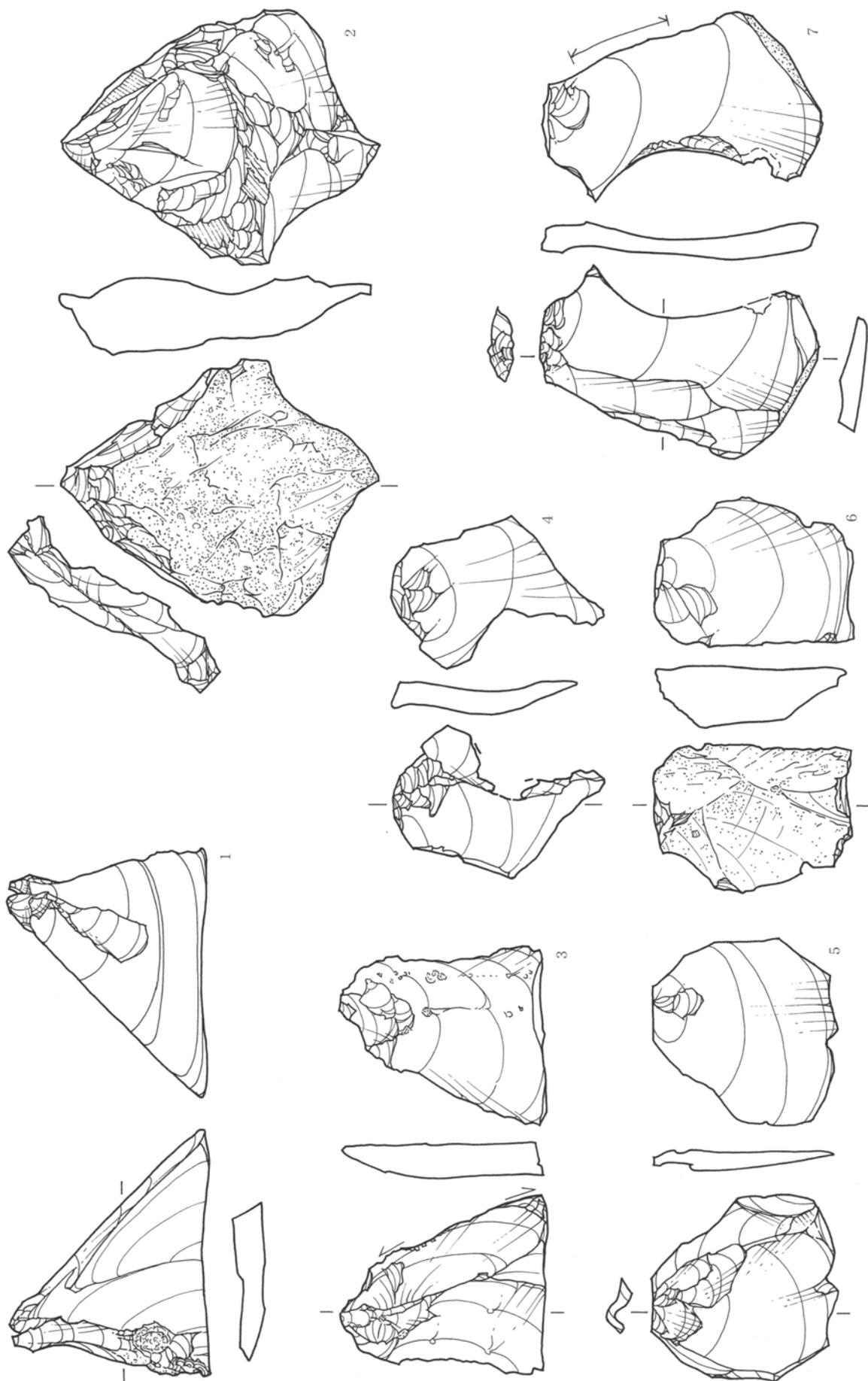


第120図 出土石器12(1 a 地点)

II 調査の成果



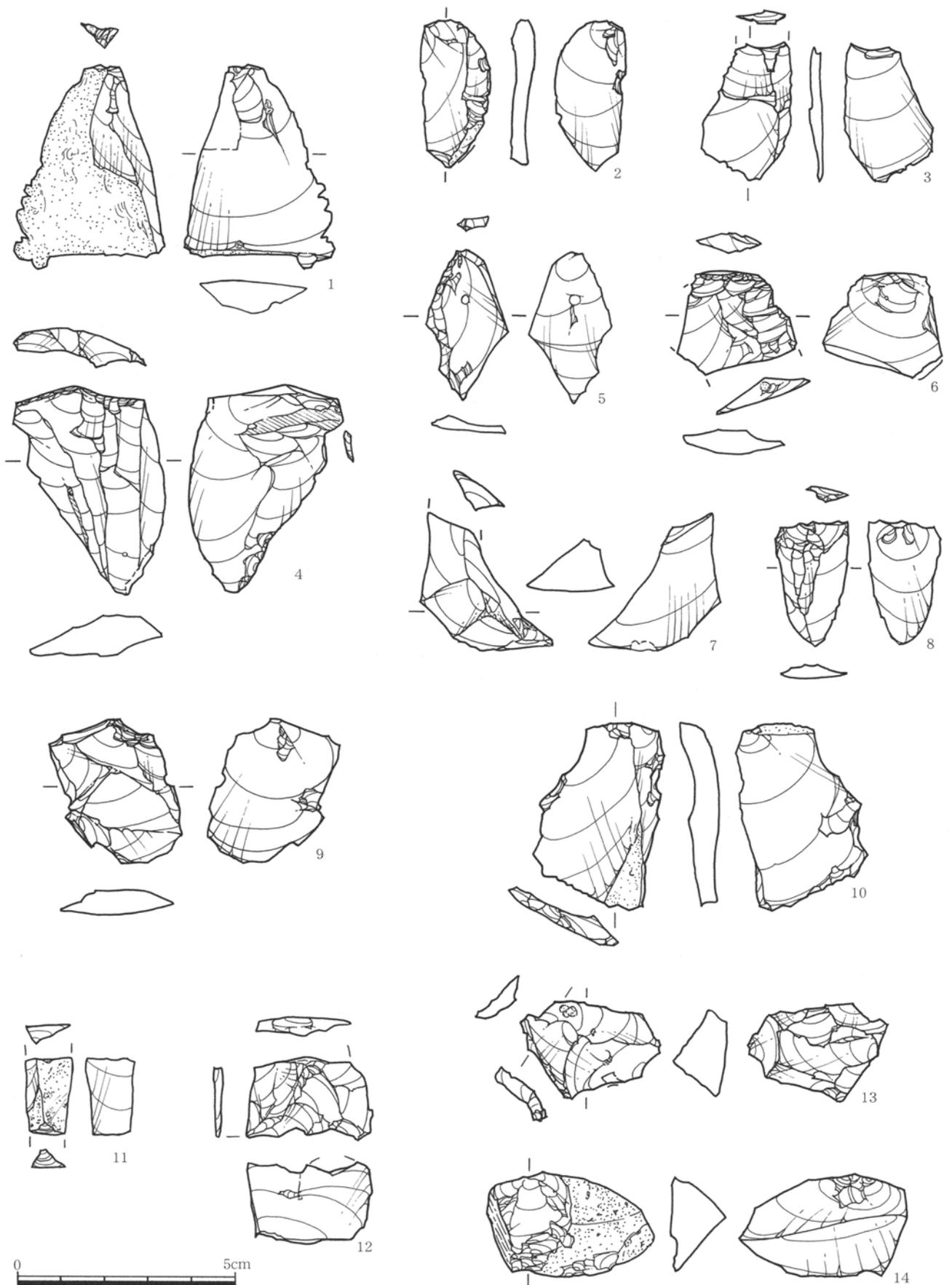
第121図 出土石器13(1 a 地点)



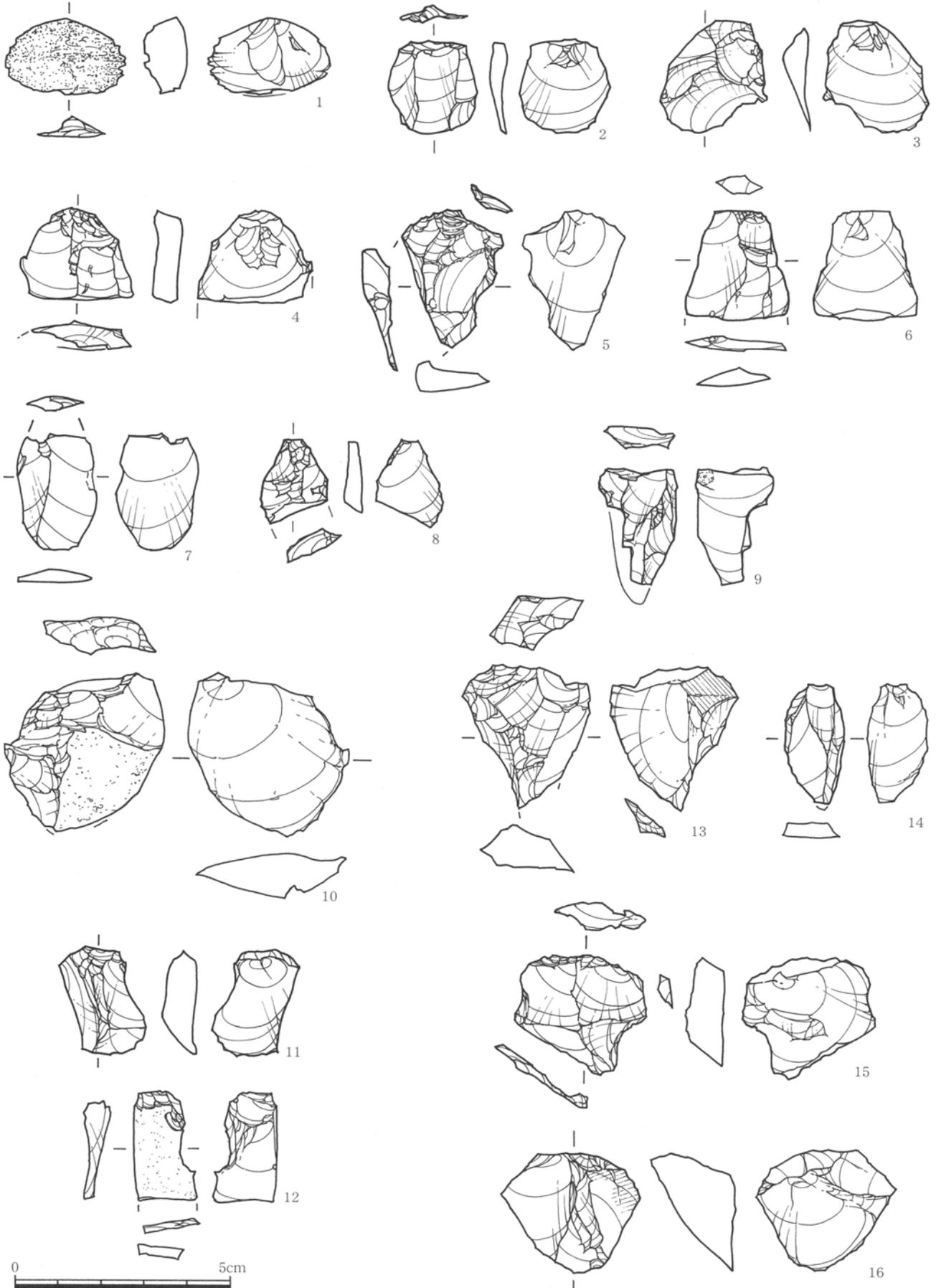
第122图 出土石器14(1 a 地点)



II 調査の成果

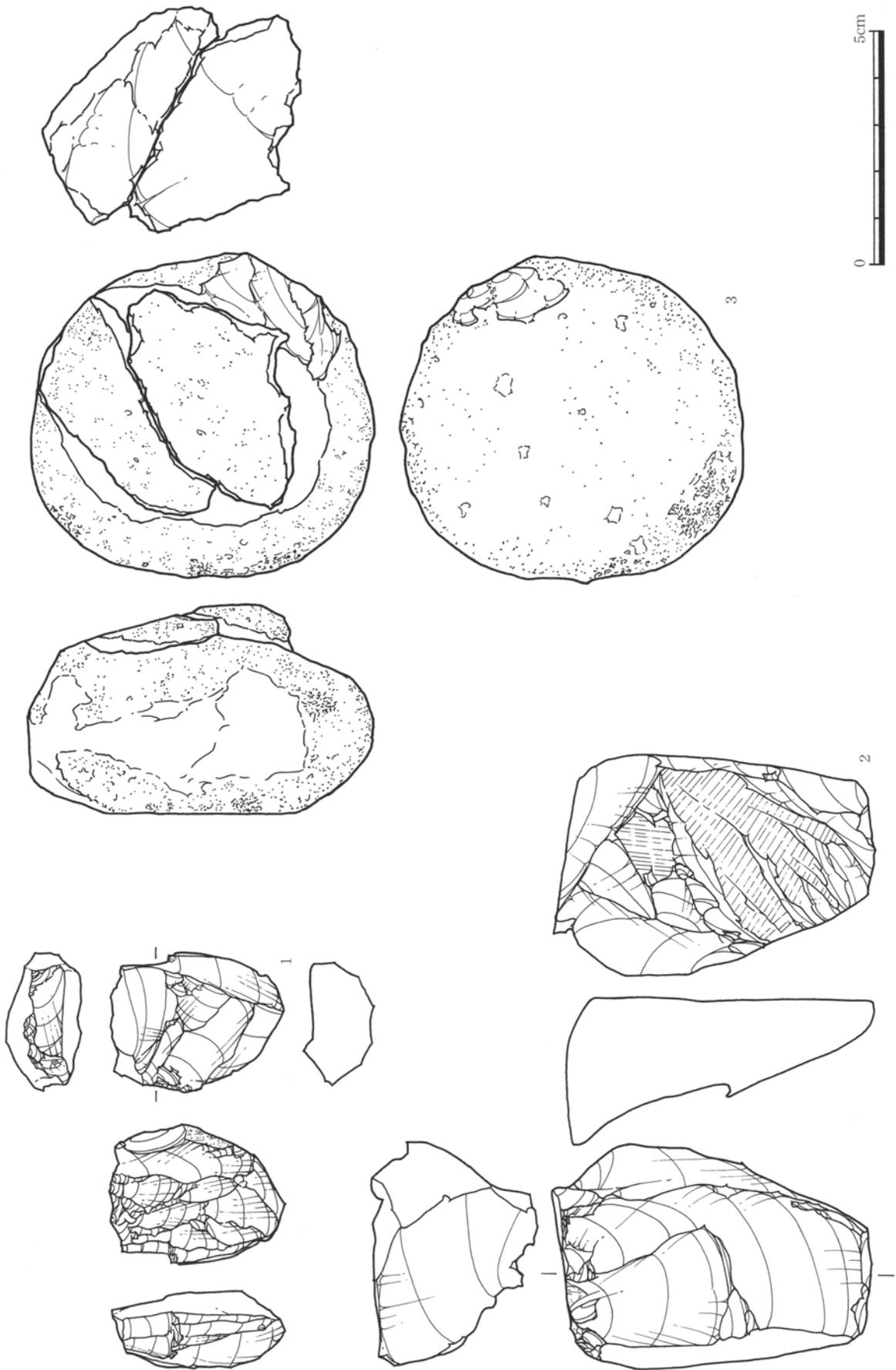


第123図 出土石器15(1 a 地点)

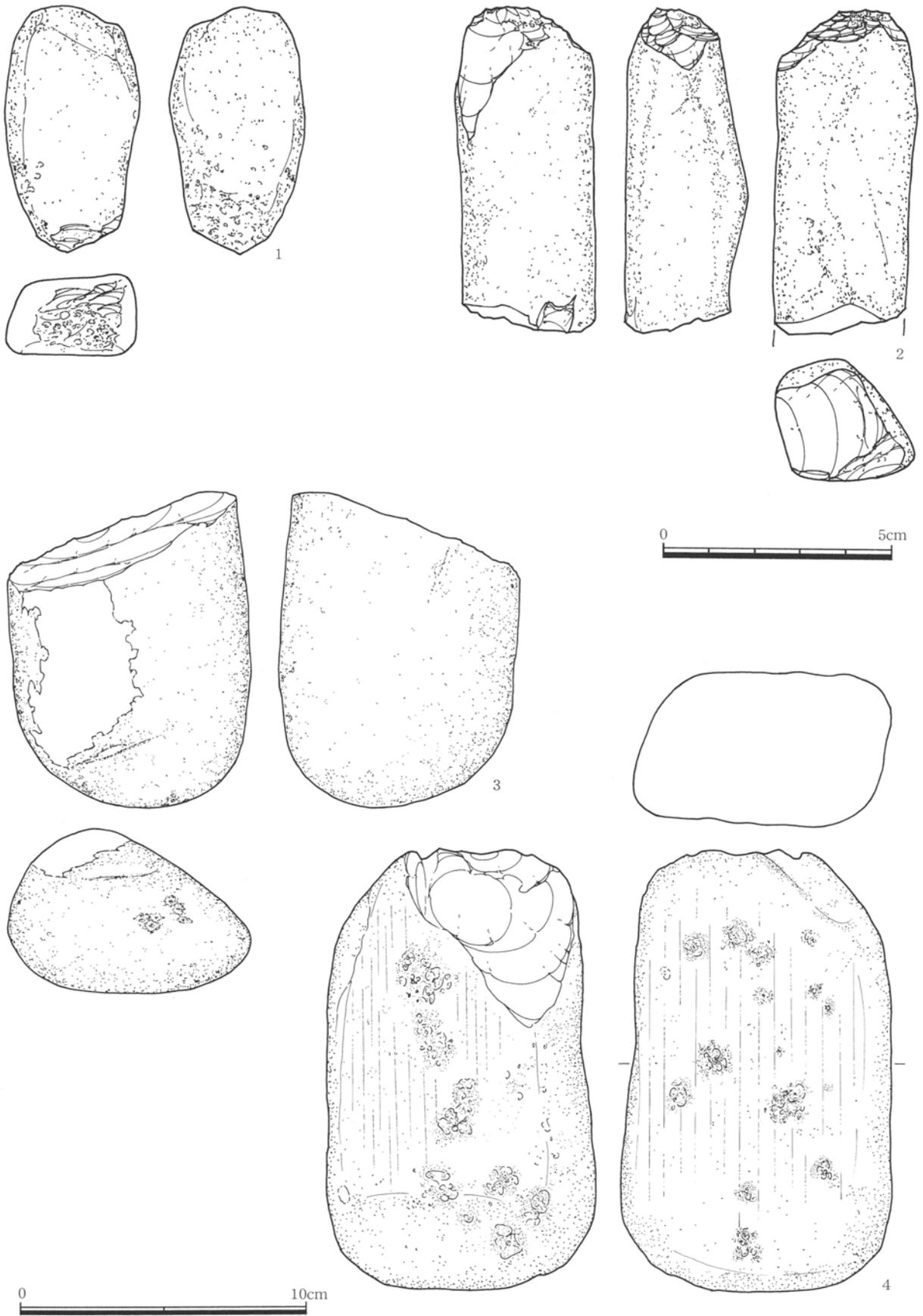


第124图 出土石器16(1 a地点)

II 調査の成果

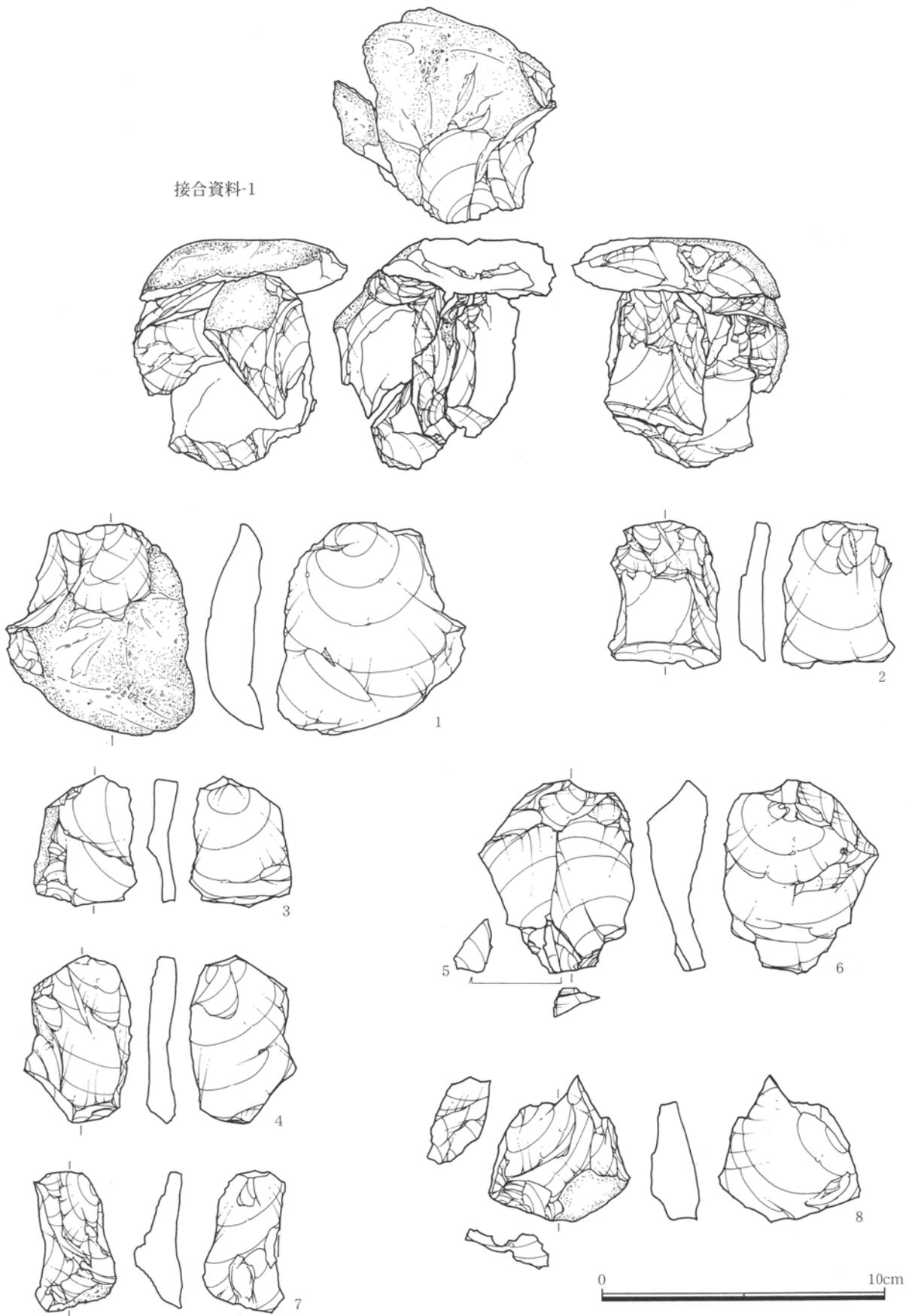


第125図 出土石器17(1 a地点)



第126图 出土石器18(1 a地点)

II 調査の成果



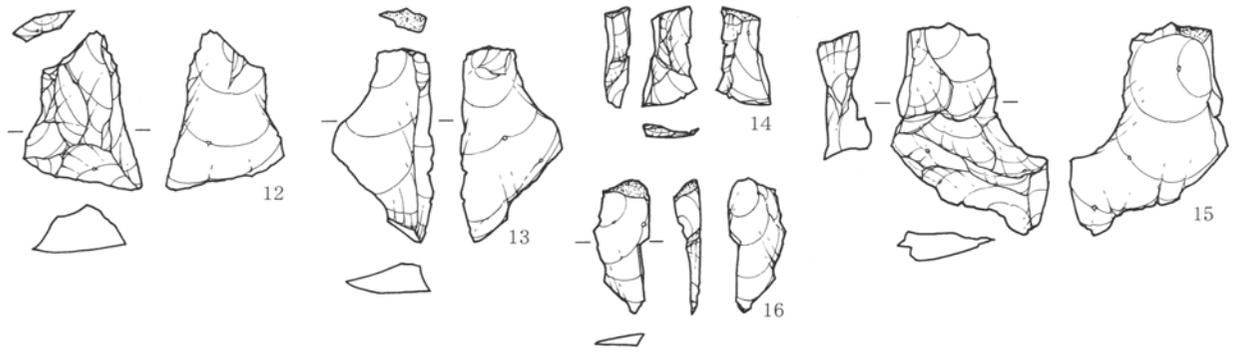
第127図 接合資料1(1 a地点)

接合資料-2

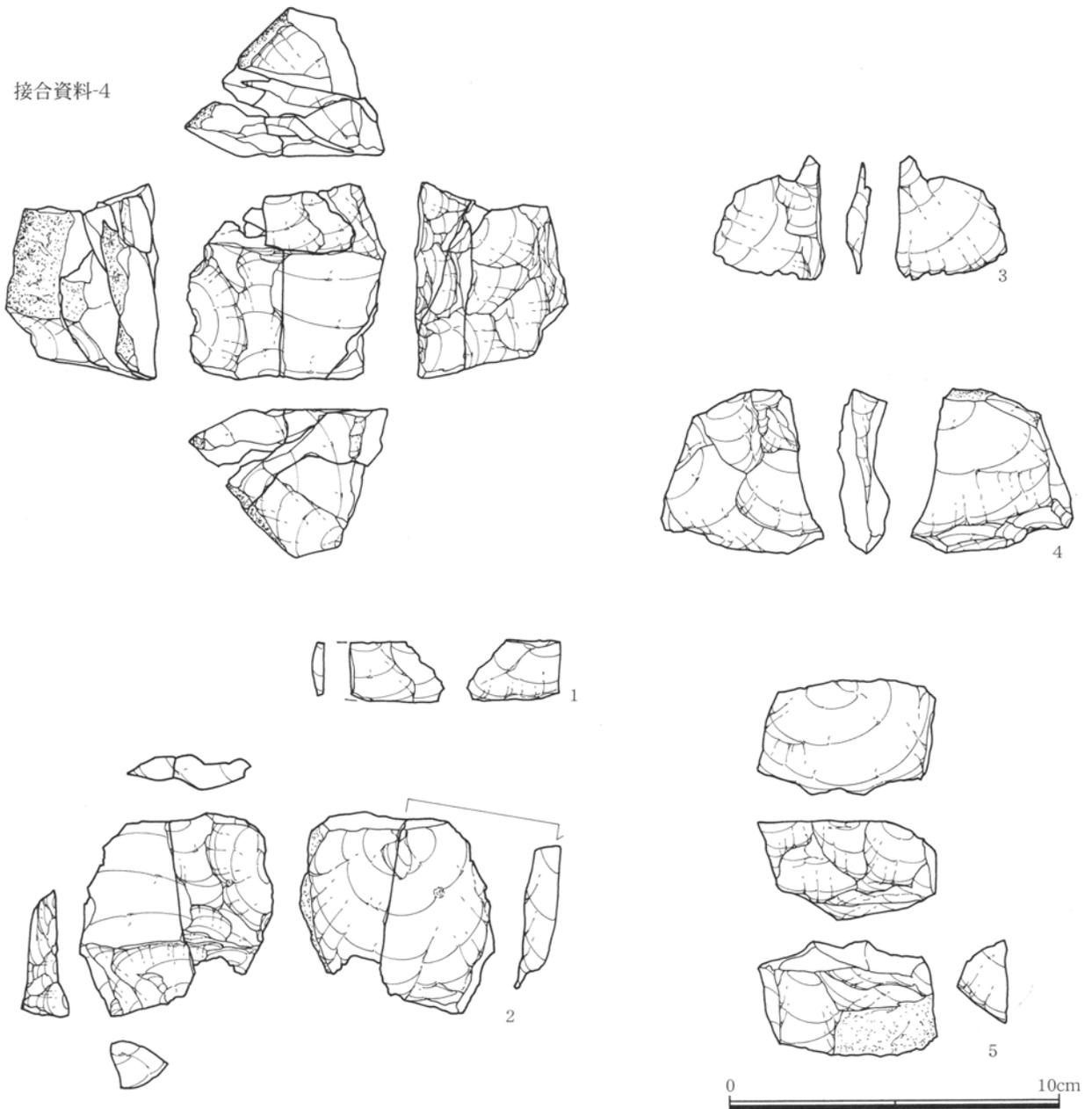


第128圖 接合資料2(1 a地点)

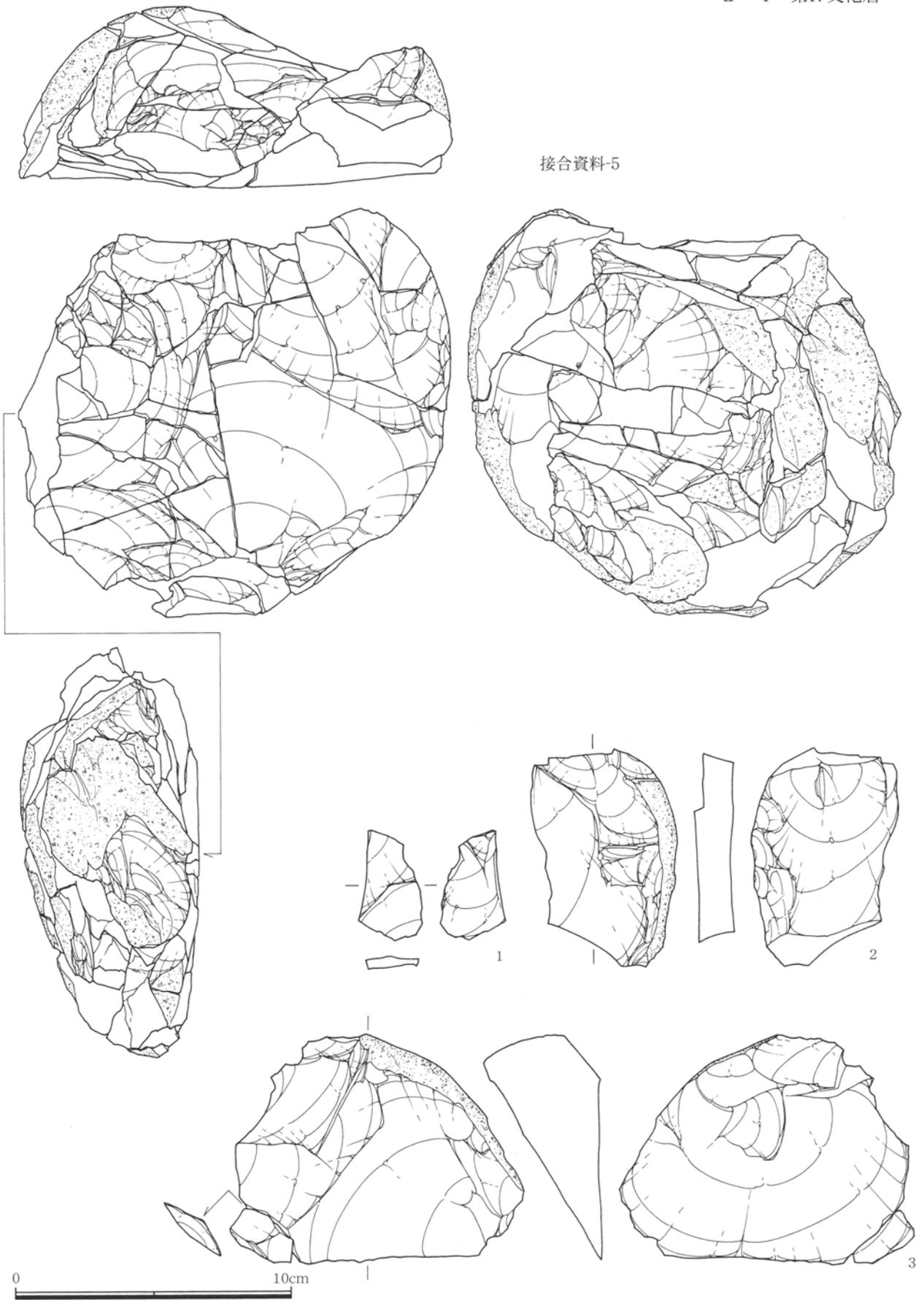
II 調査の成果



接合資料-4

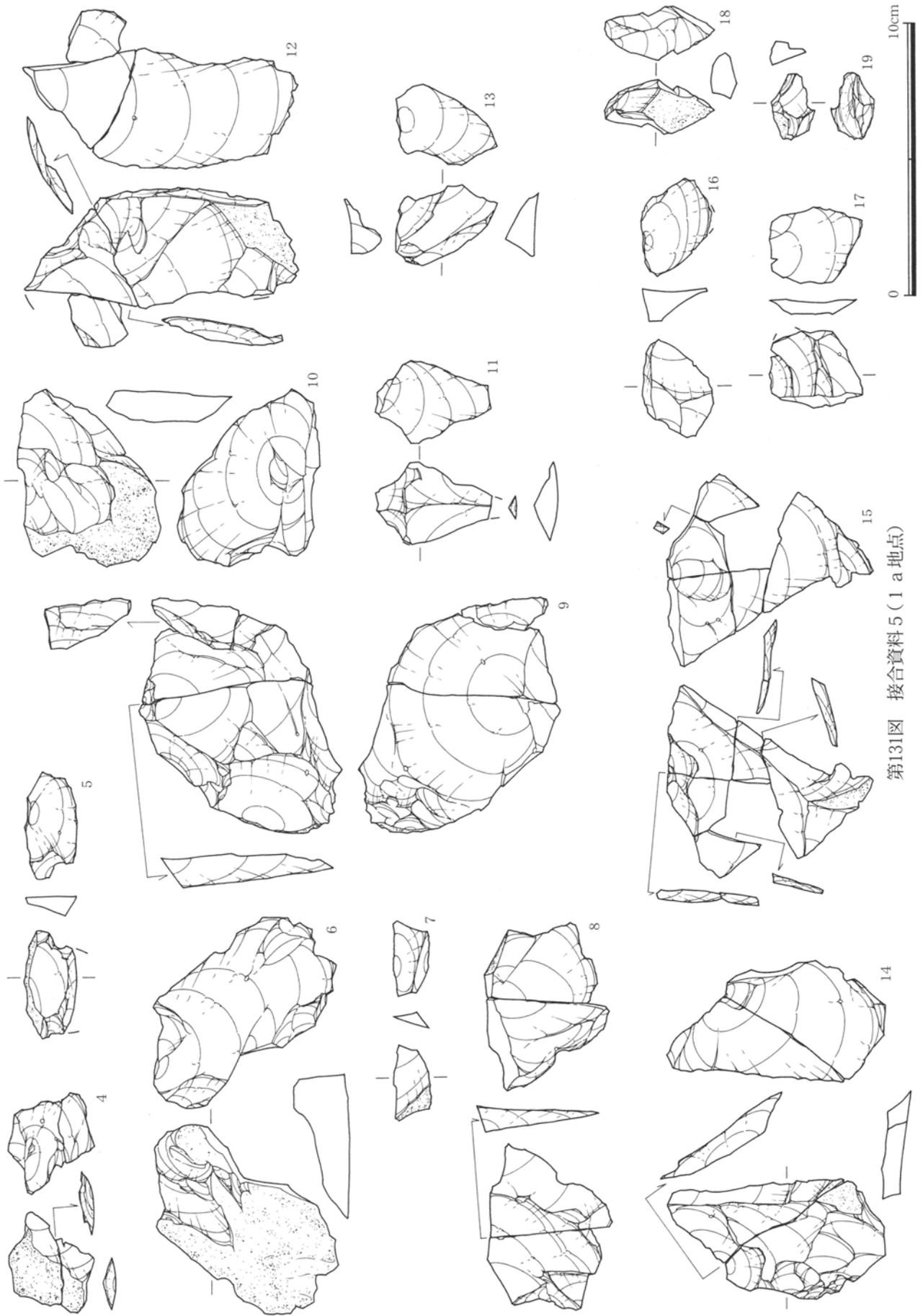


第129図 接合資料3(1 a地点)

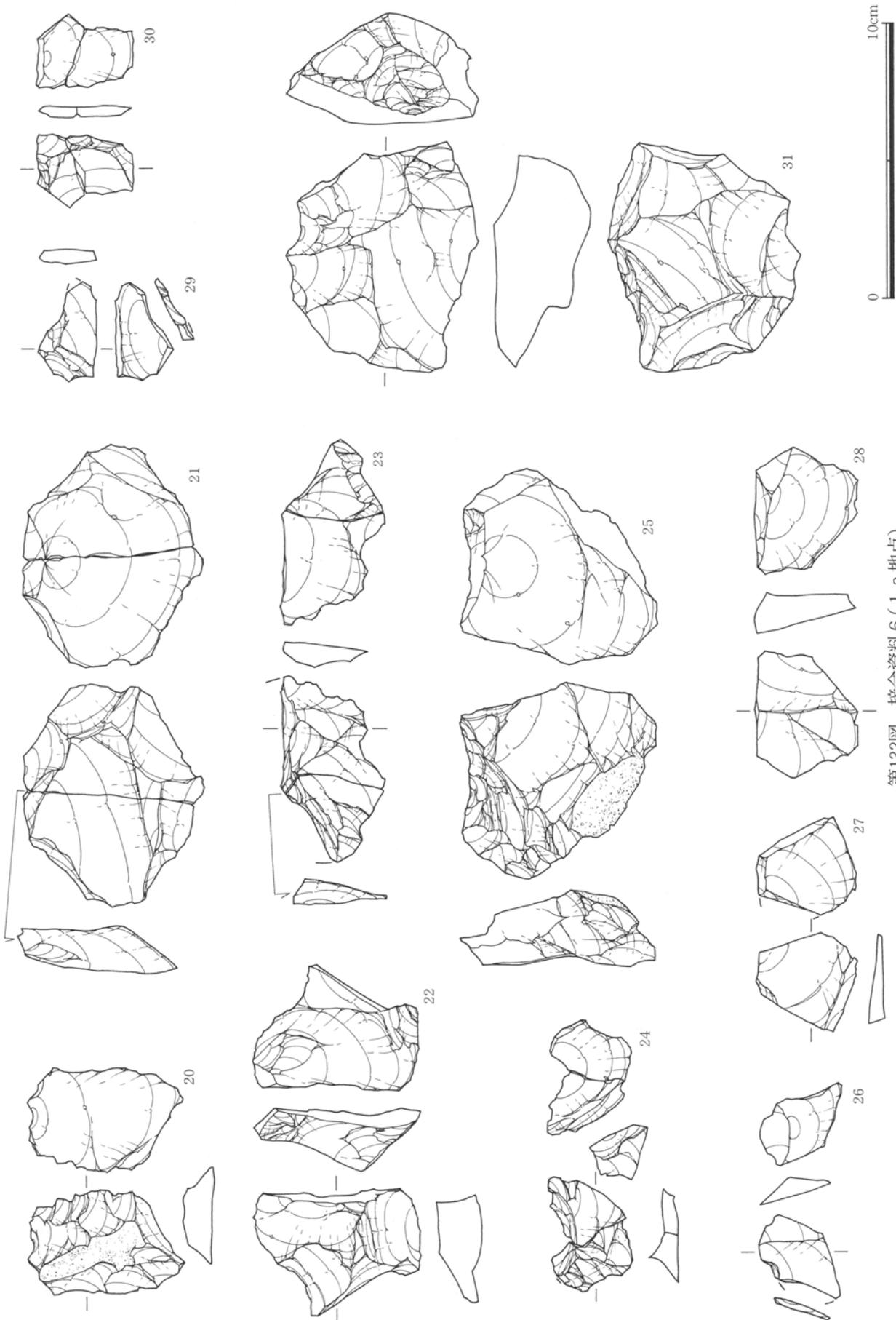


第130図 接合資料4(1 a地点)

II 調査の成果

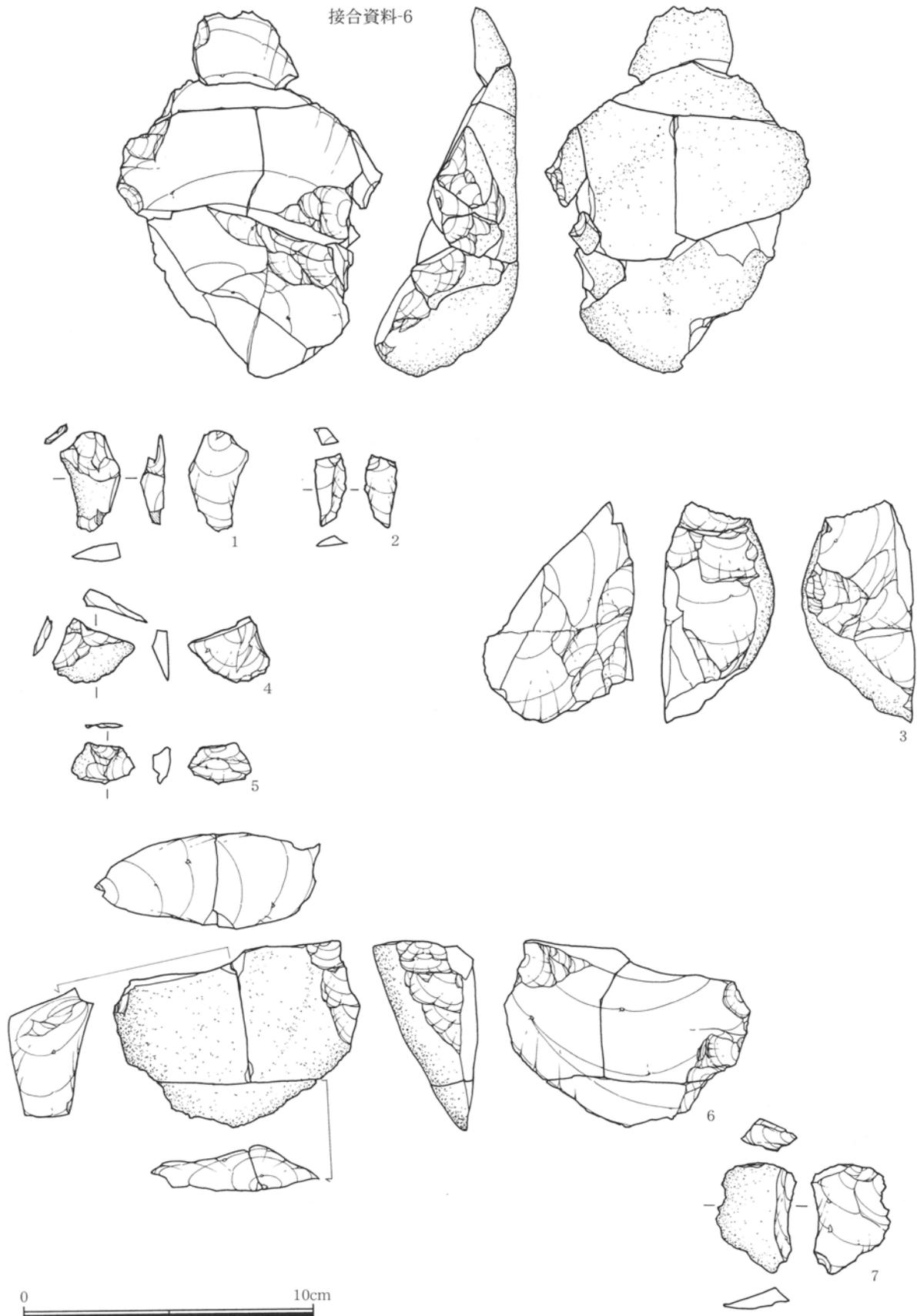


第131図 接合資料5(1 a地点)

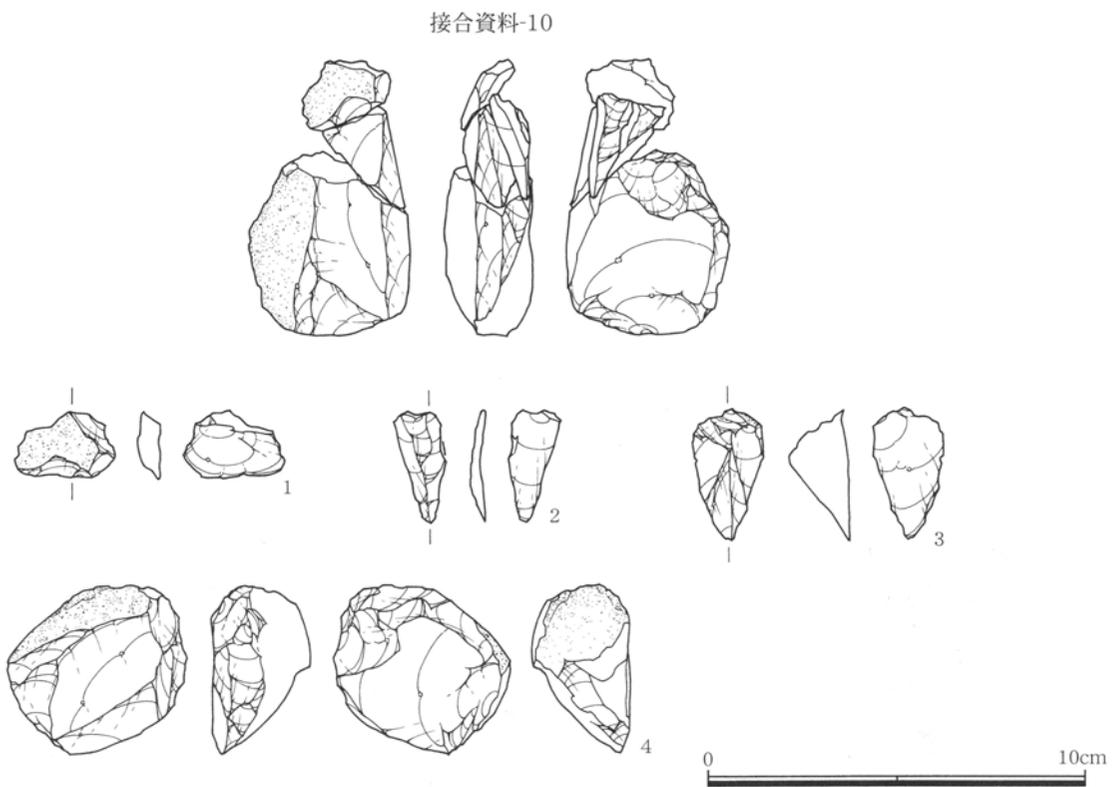
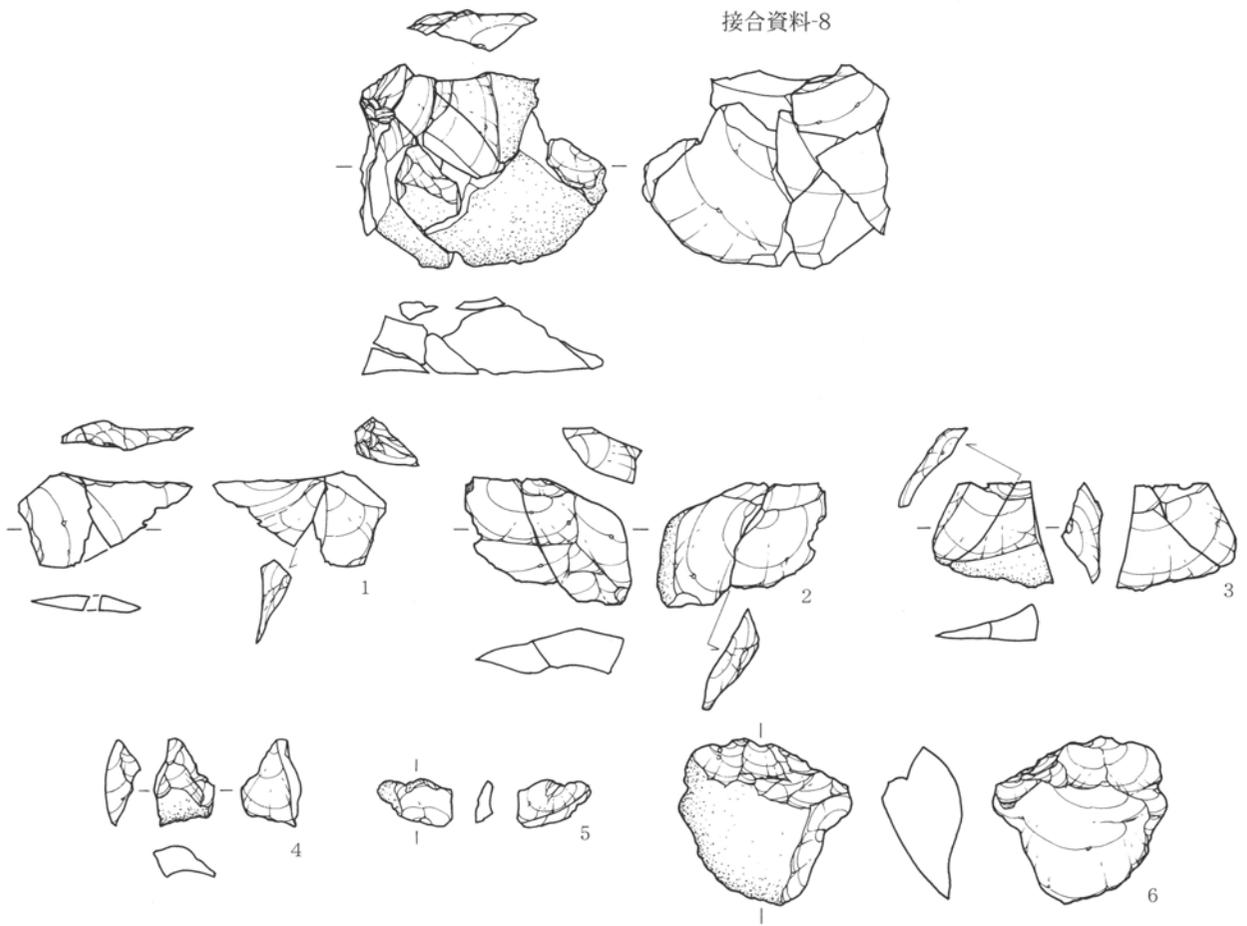


第132図 接合資料6(1 a 地点)

II 調査の成果

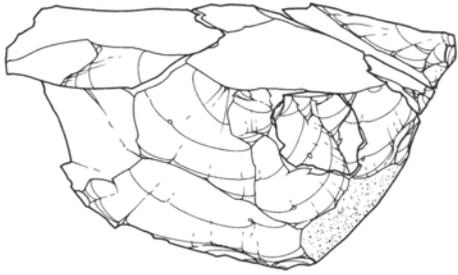


第133図 接合資料7(1 a地点)

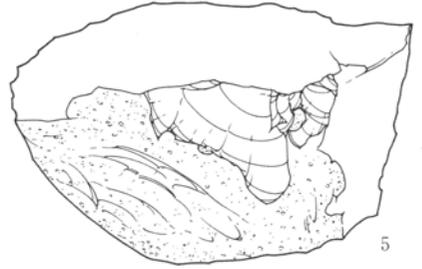
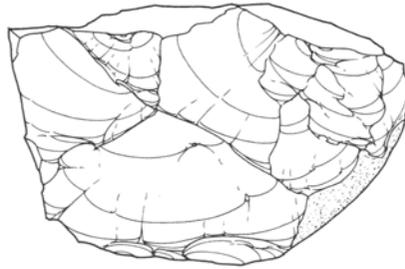
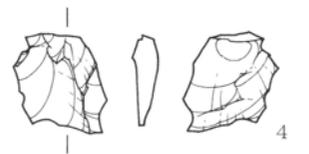
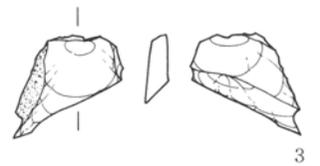
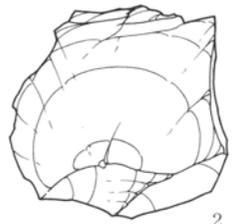
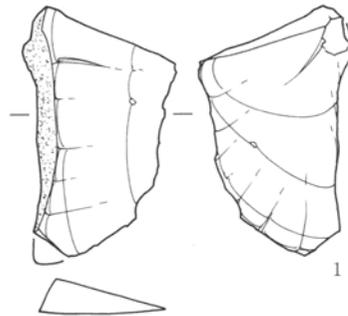
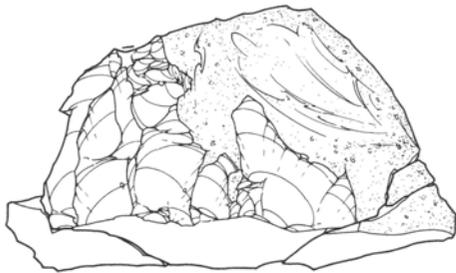
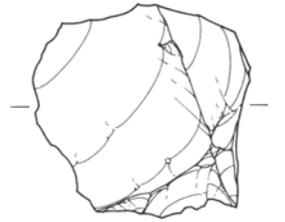
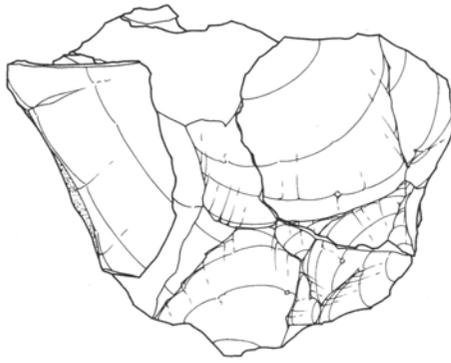
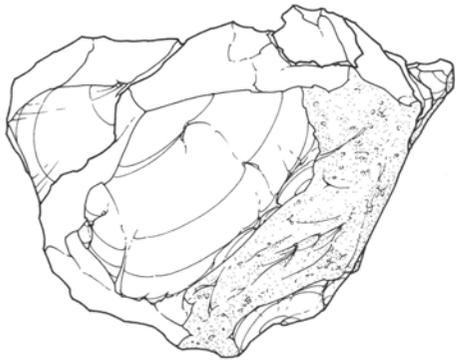


第134図 接合資料8(1 a地点)

II 調査の成果

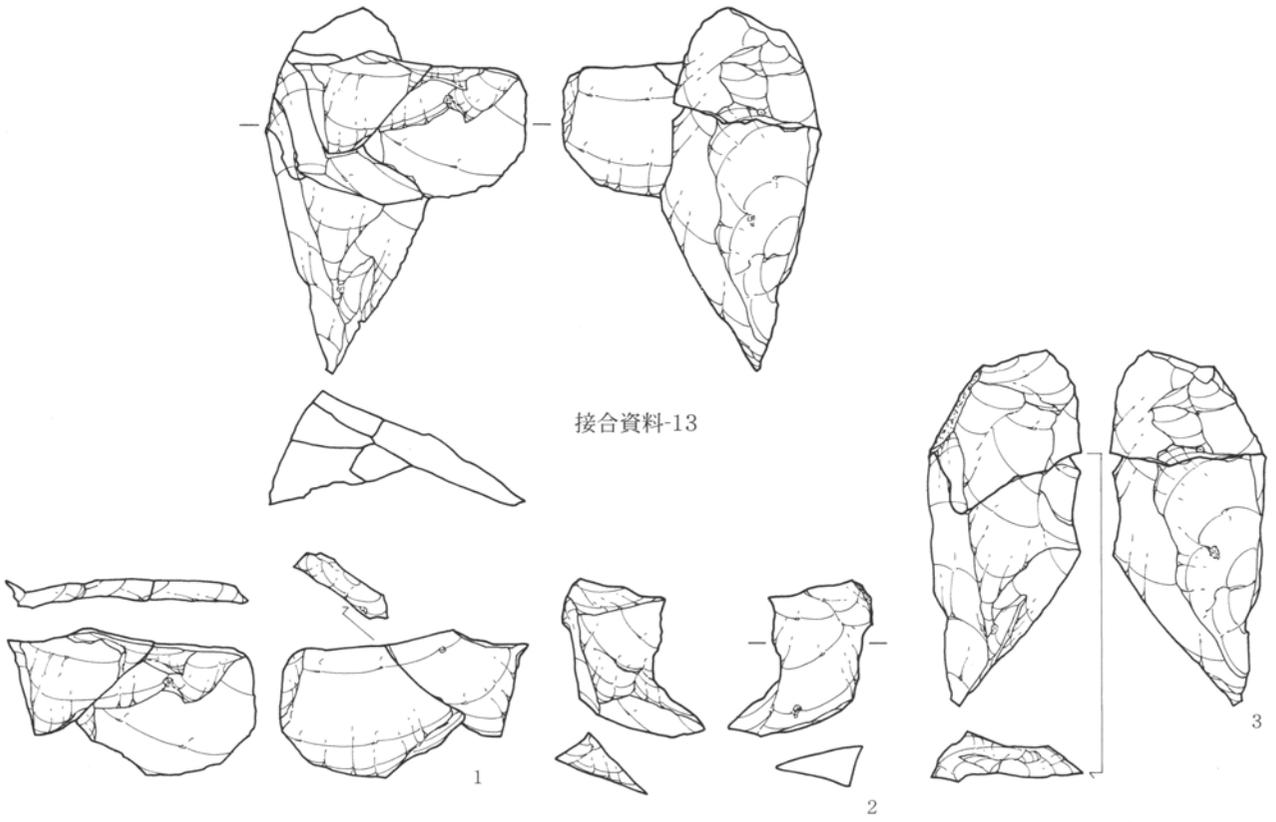


接合資料-11



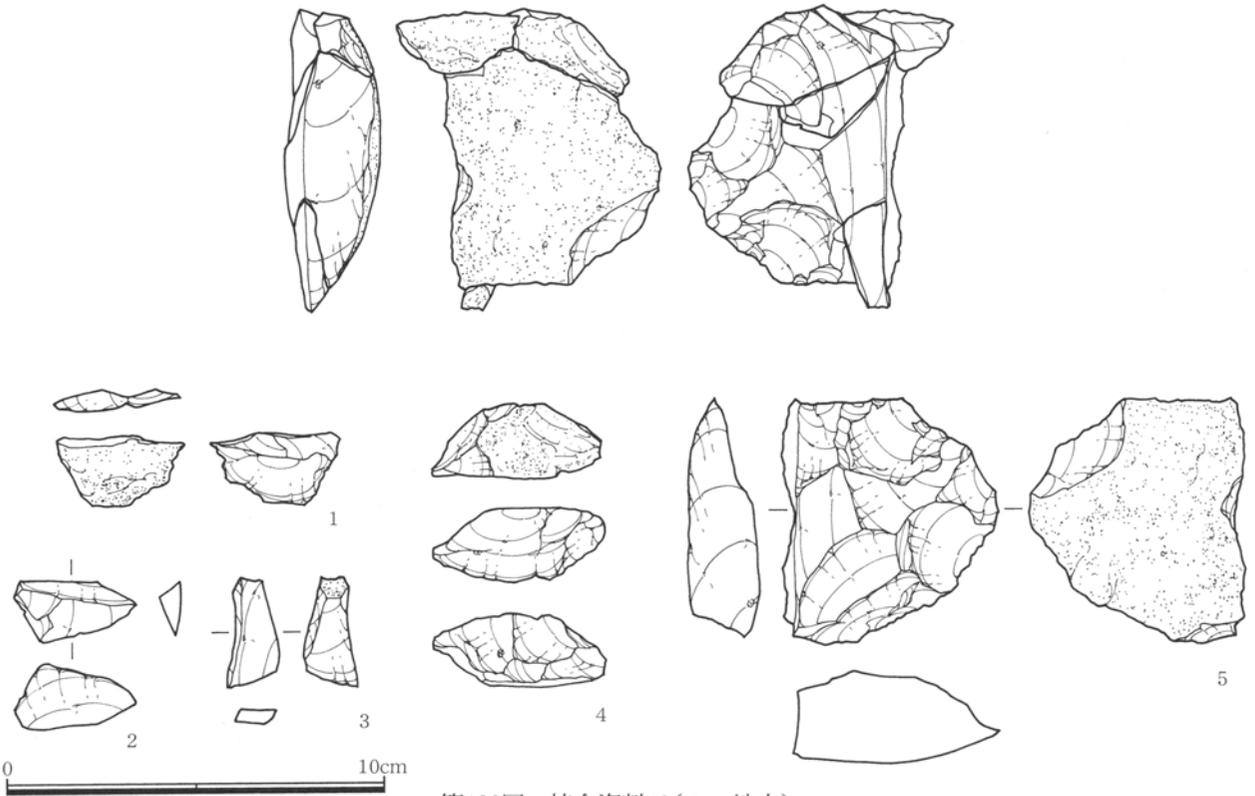
0 10cm

第135図 接合資料9(1 a地点)



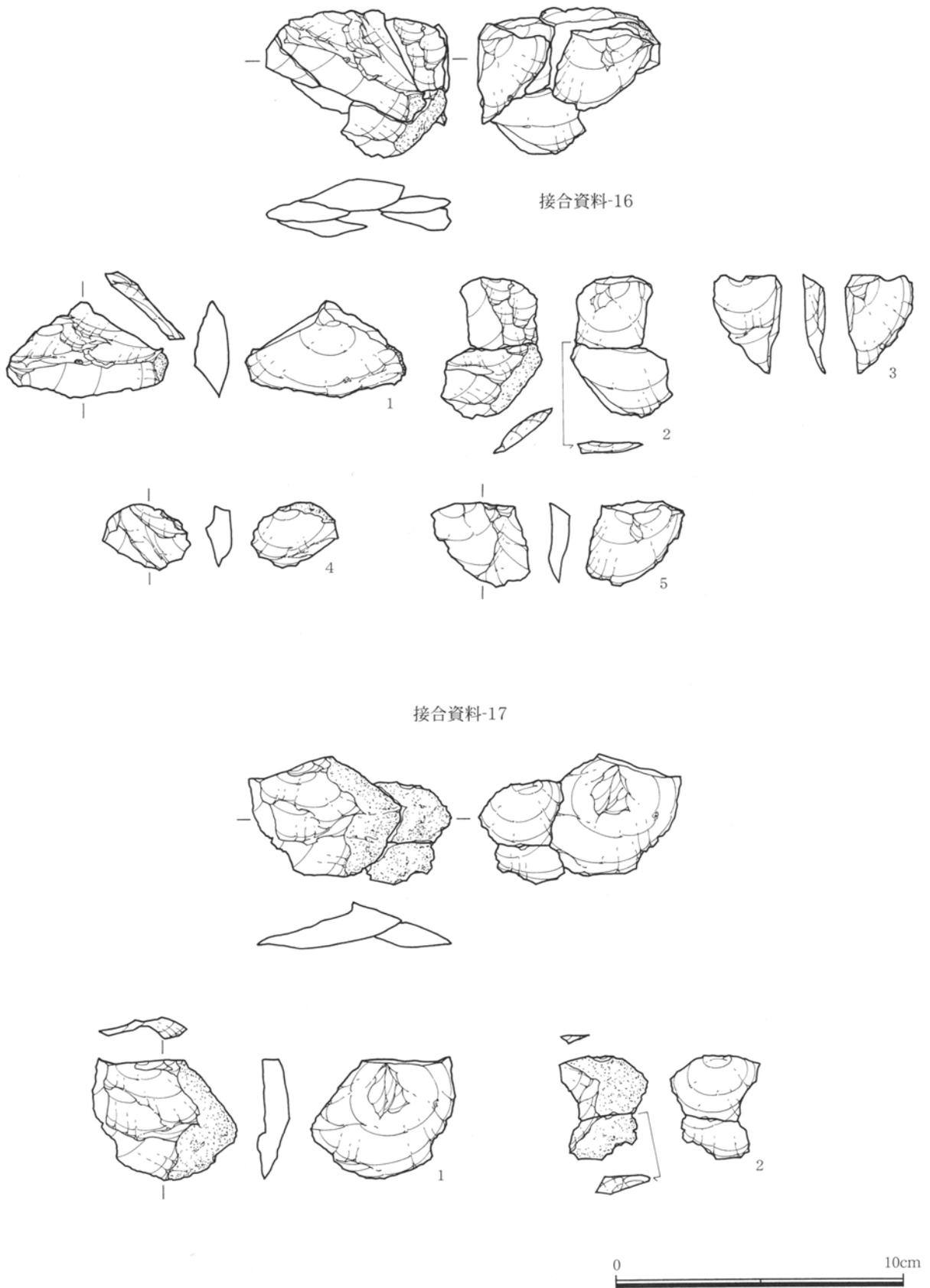
接合資料-13

接合資料-15

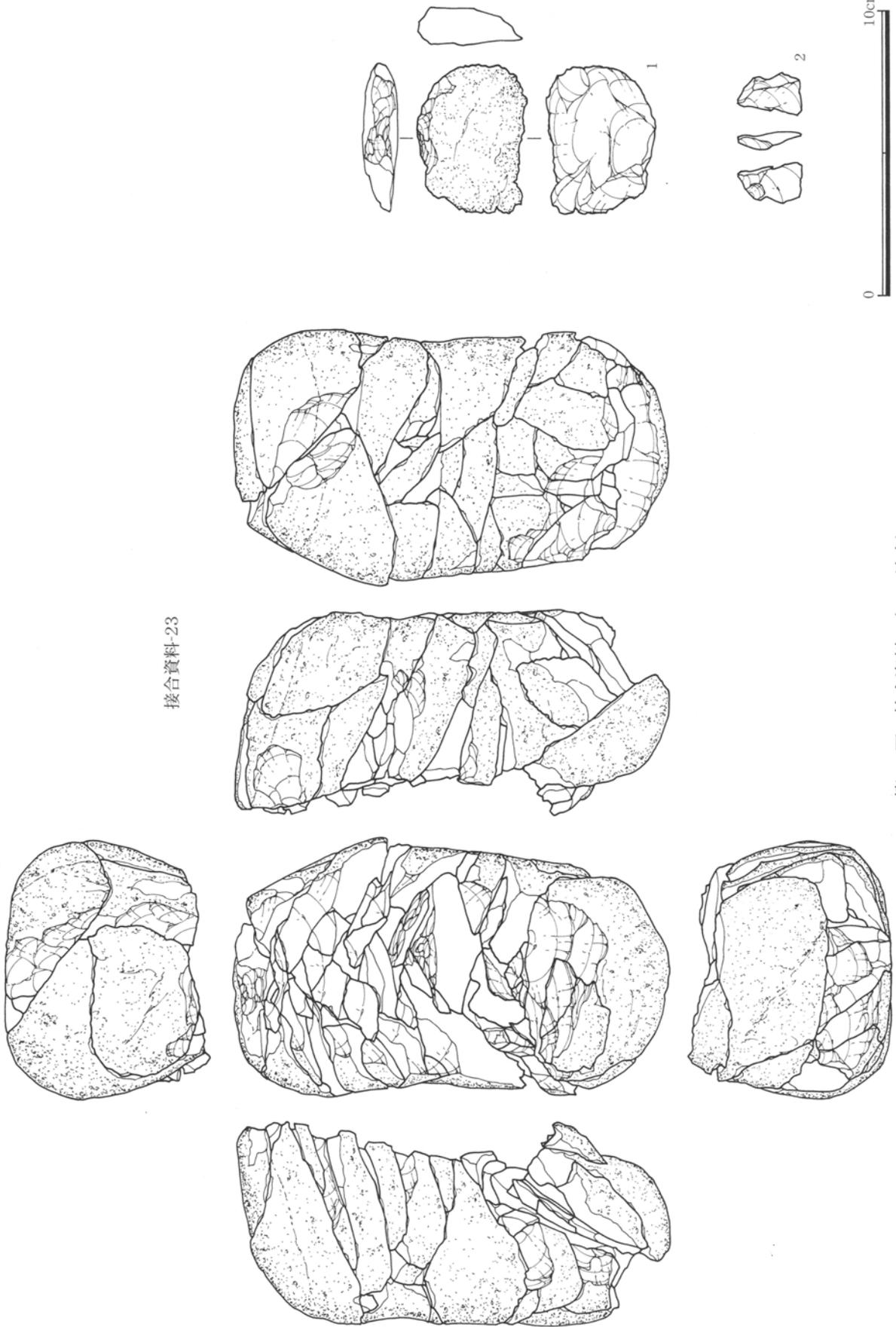


第136図 接合資料10(1 a 地点)

II 調査の成果



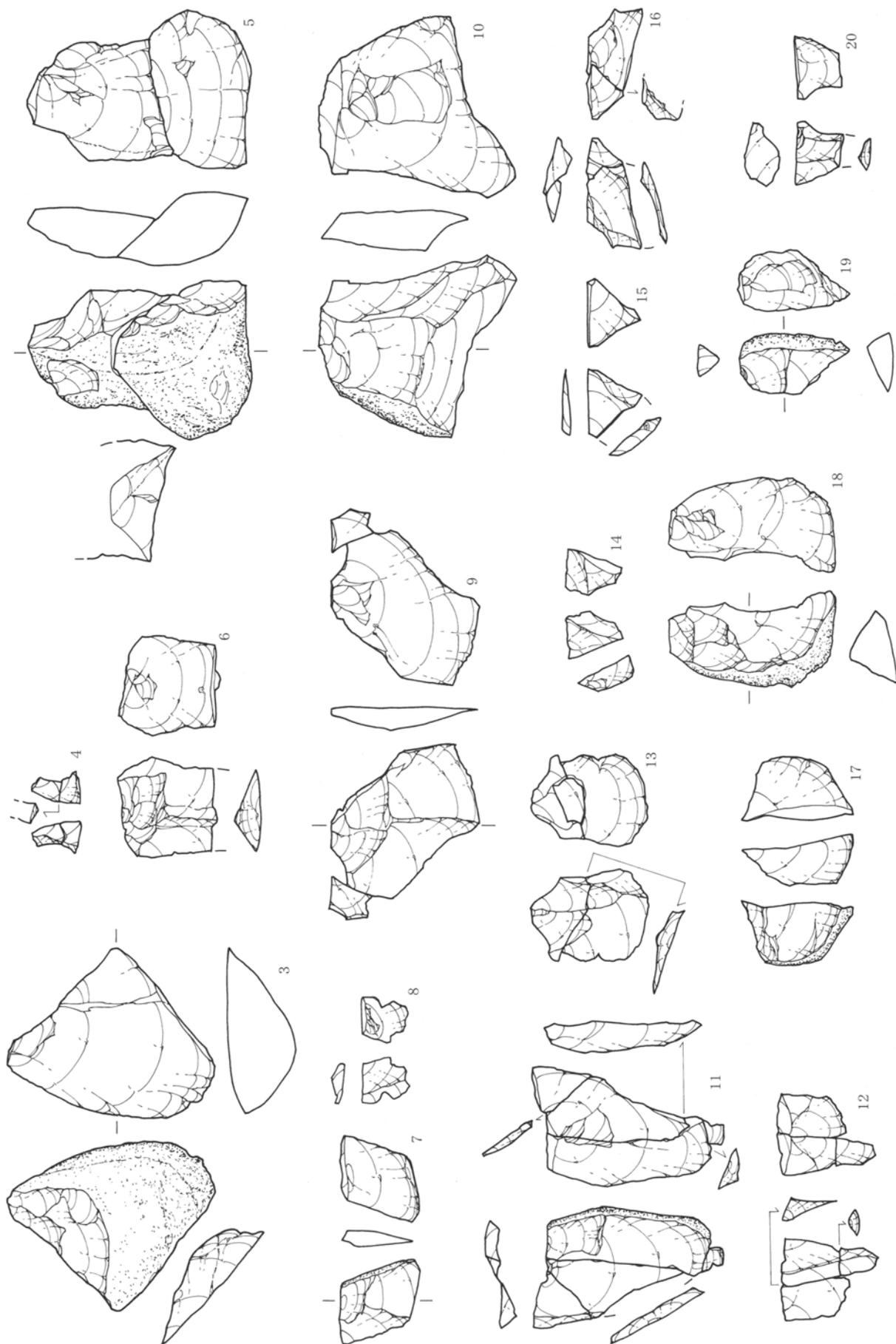
第137図 接合資料11(1 a 地点)



接合資料-23

第138図 接合資料12(1 a 地点)

II 調査の成果

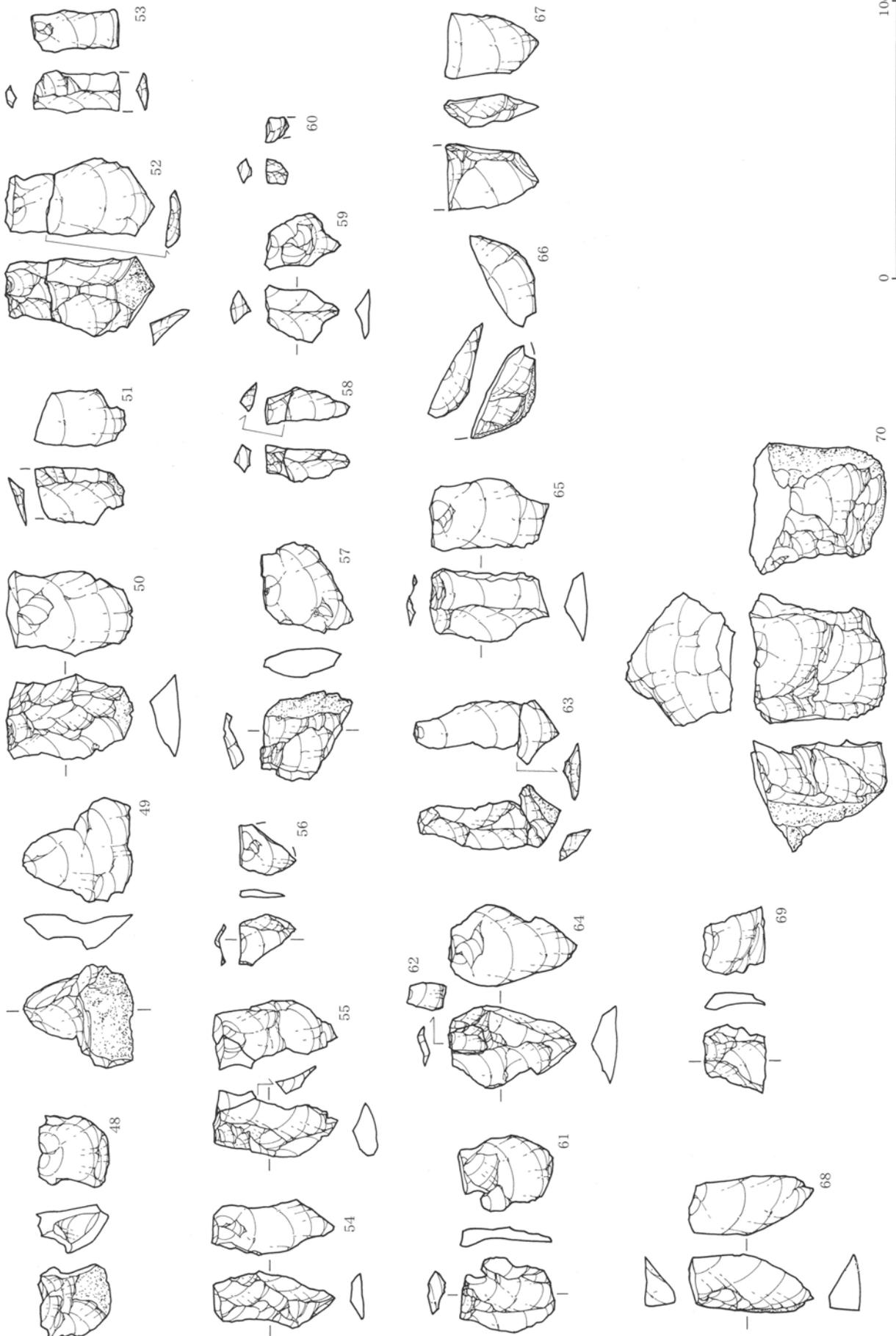


第139図 接合資料13(1 a 地点)

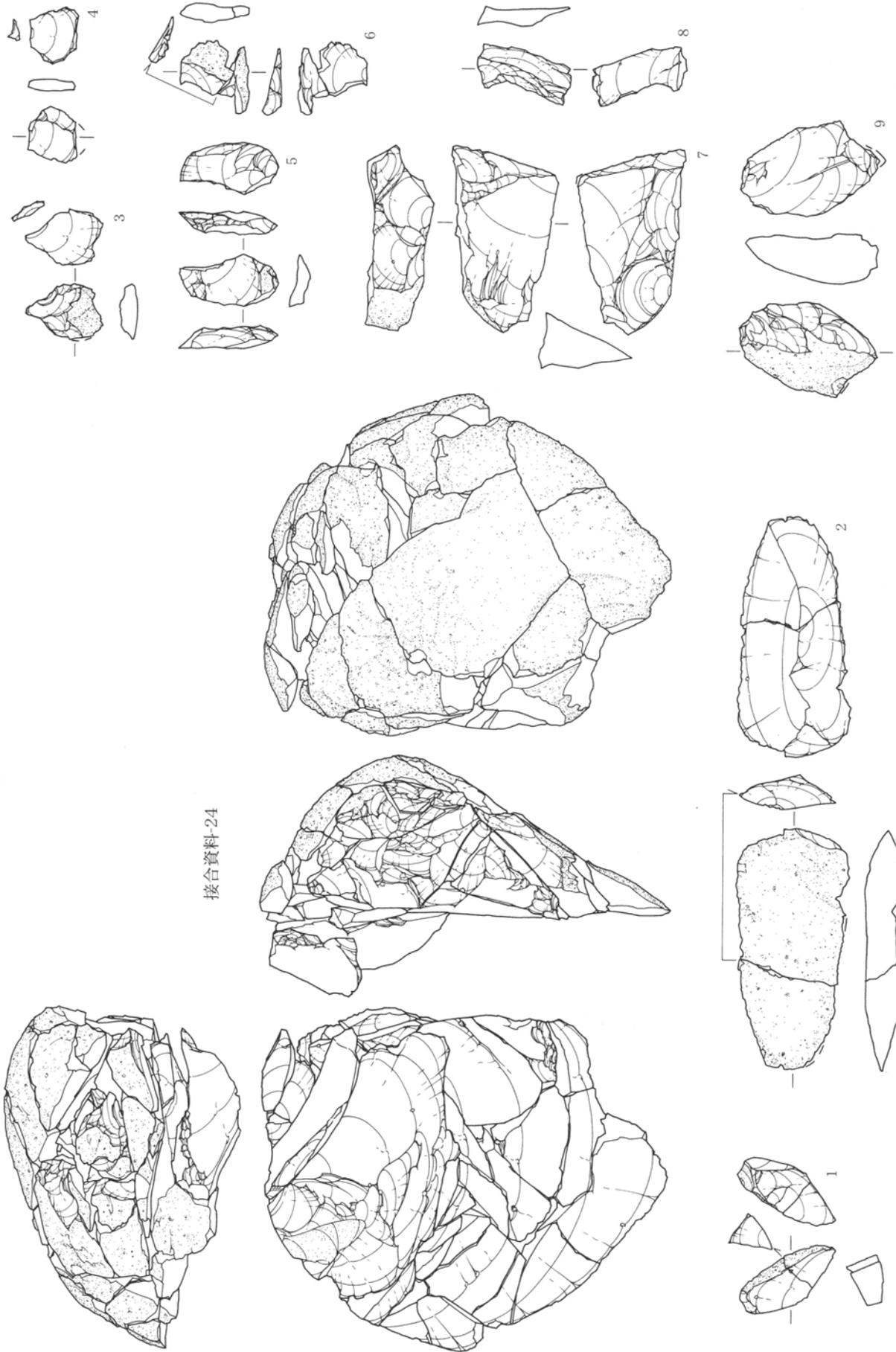


第140图 接合資料14(1 a 地点)

II 調査の成果



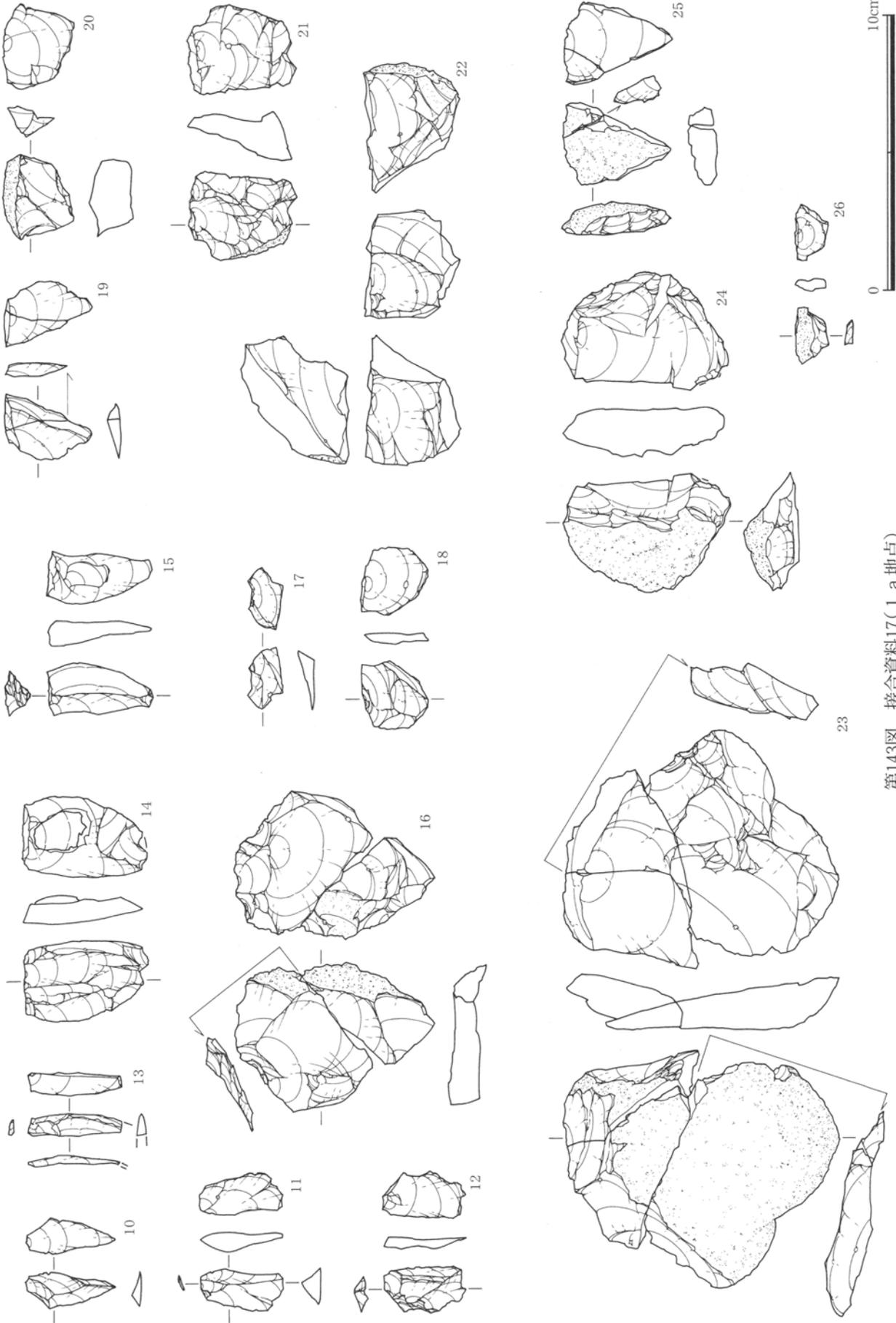
第141図 接合資料15(1 a 地点)



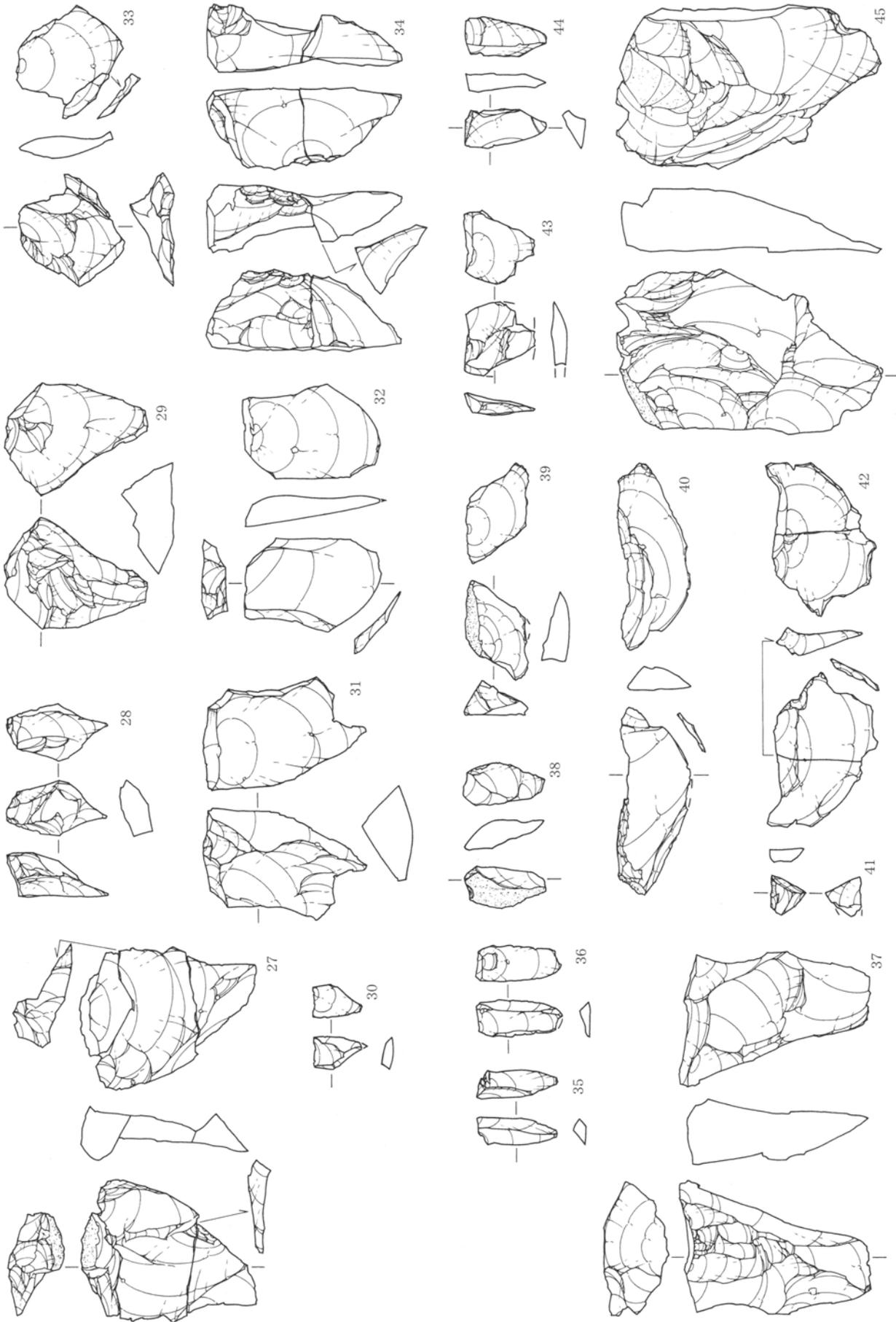
接合資料-24

第142図 接合資料16(1 a 地点)

II 調査の成果

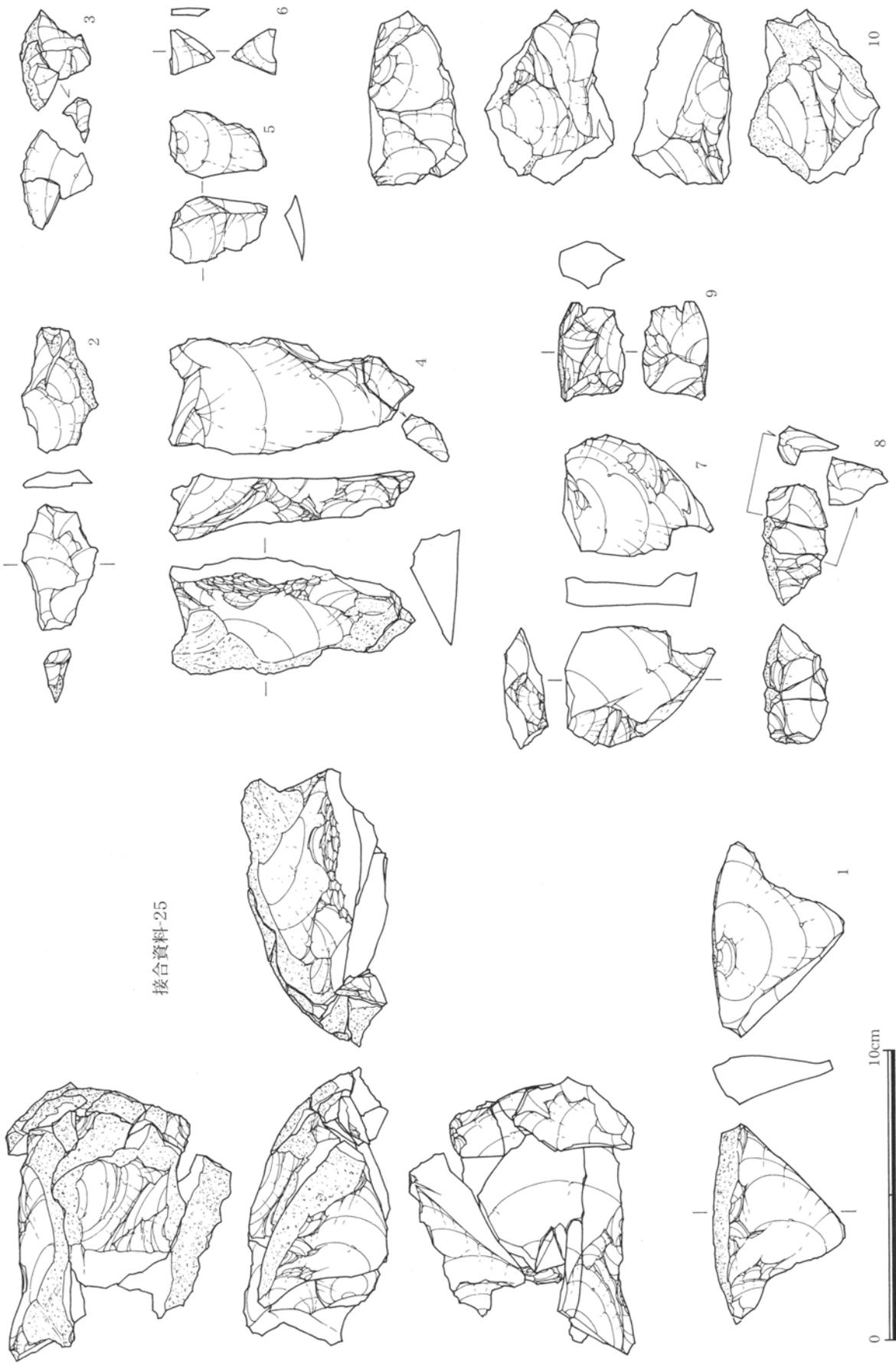


第143図 接合資料17(1 a 地点)



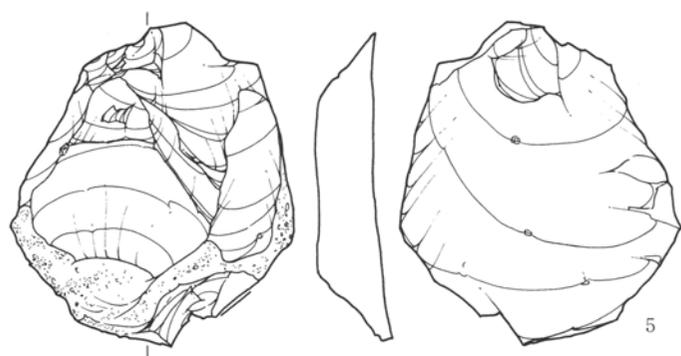
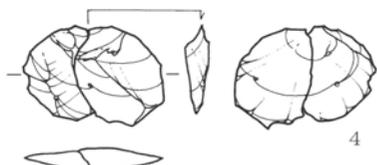
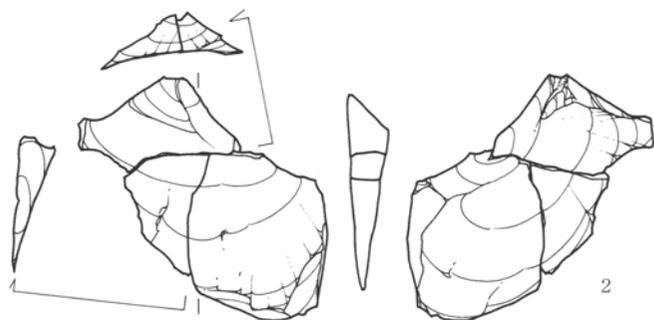
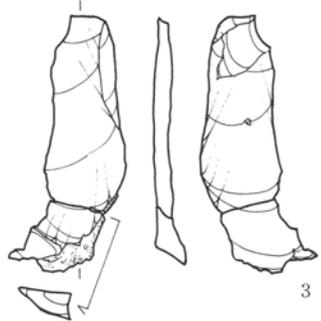
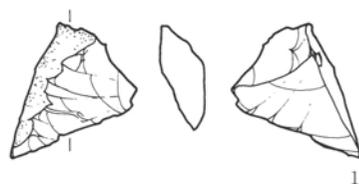
第144図 接合資料18(1 a 地点)

II 調査の成果

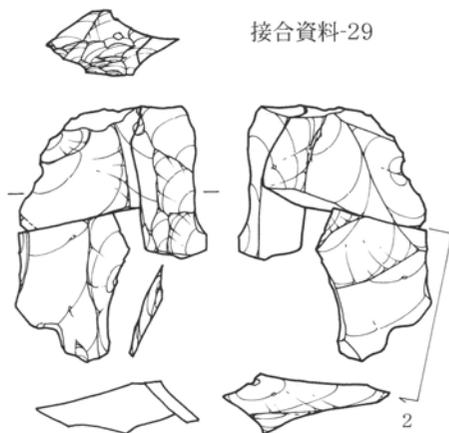


第145図 接合資料19(1 a 地点)

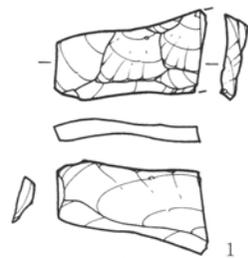
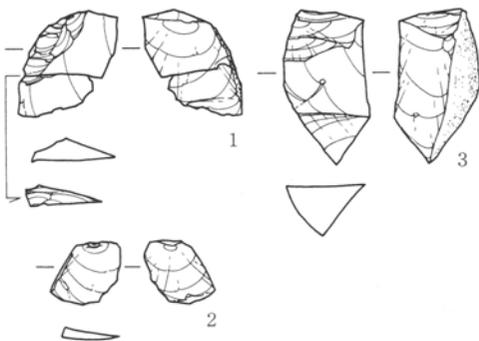
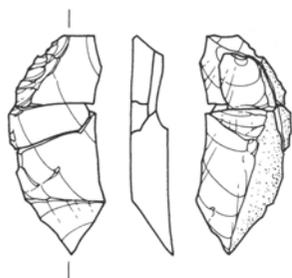
接合資料-26



接合資料-29



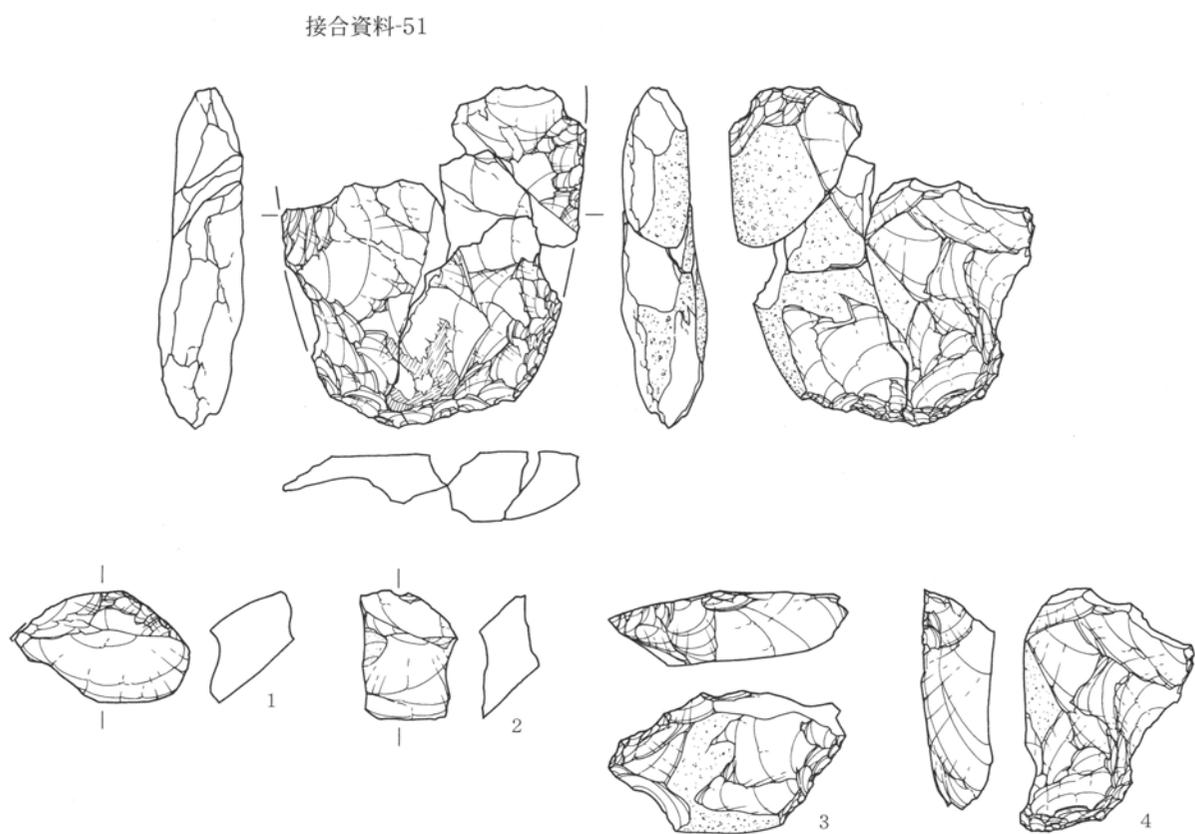
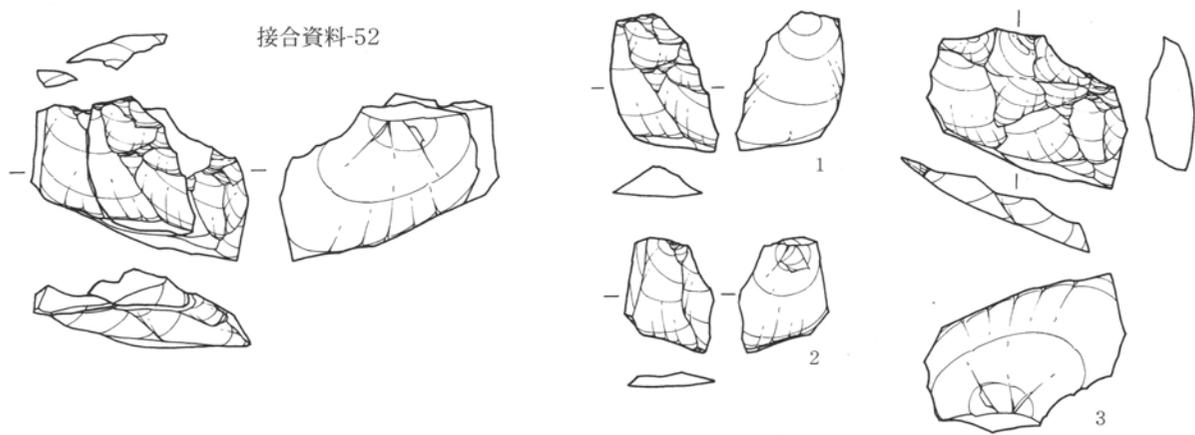
接合資料-34



第146圖 接合資料20(1 a地点)

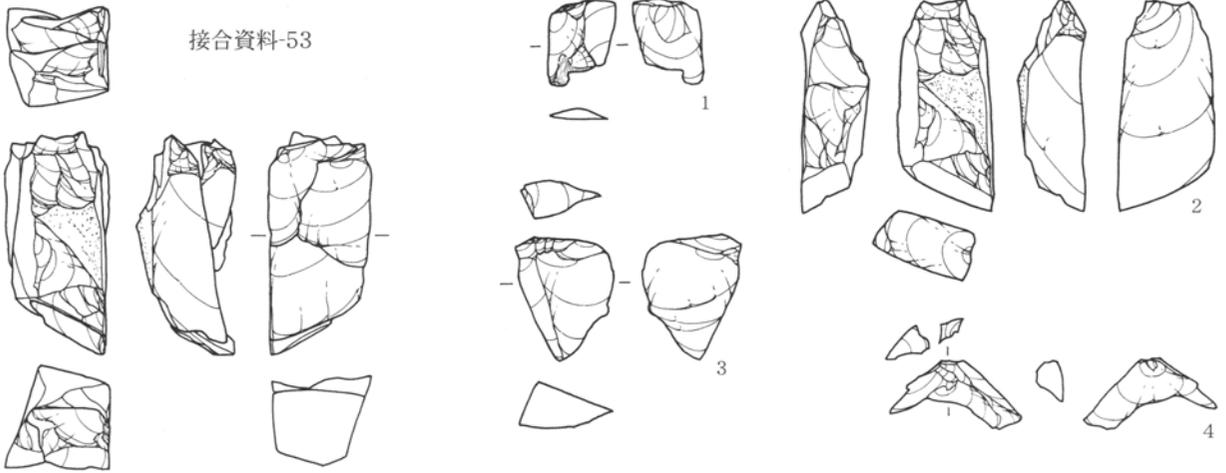


II 調査の成果

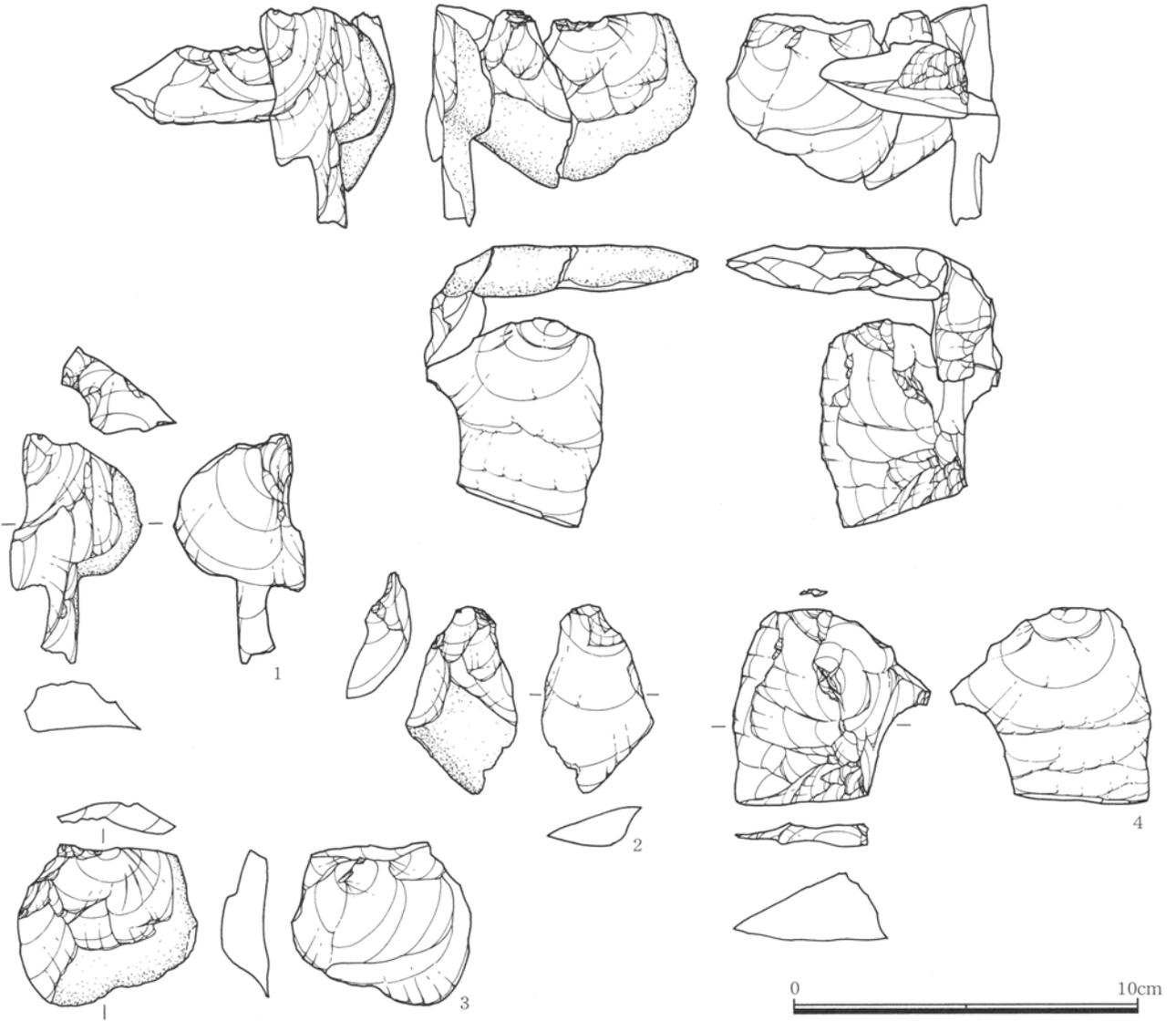


0 10cm

第147図 接合資料21(1 a地点)

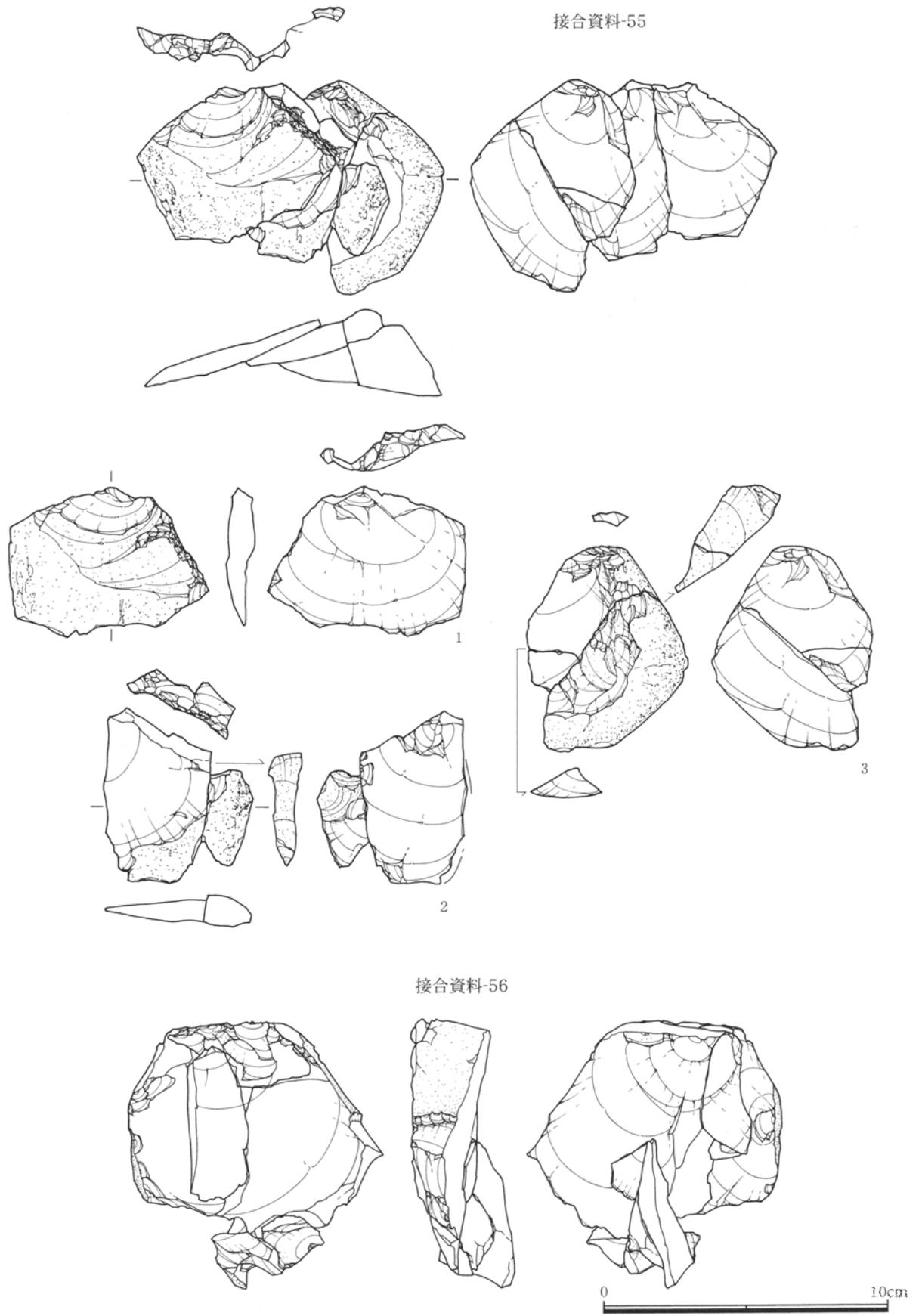


接合資料-54

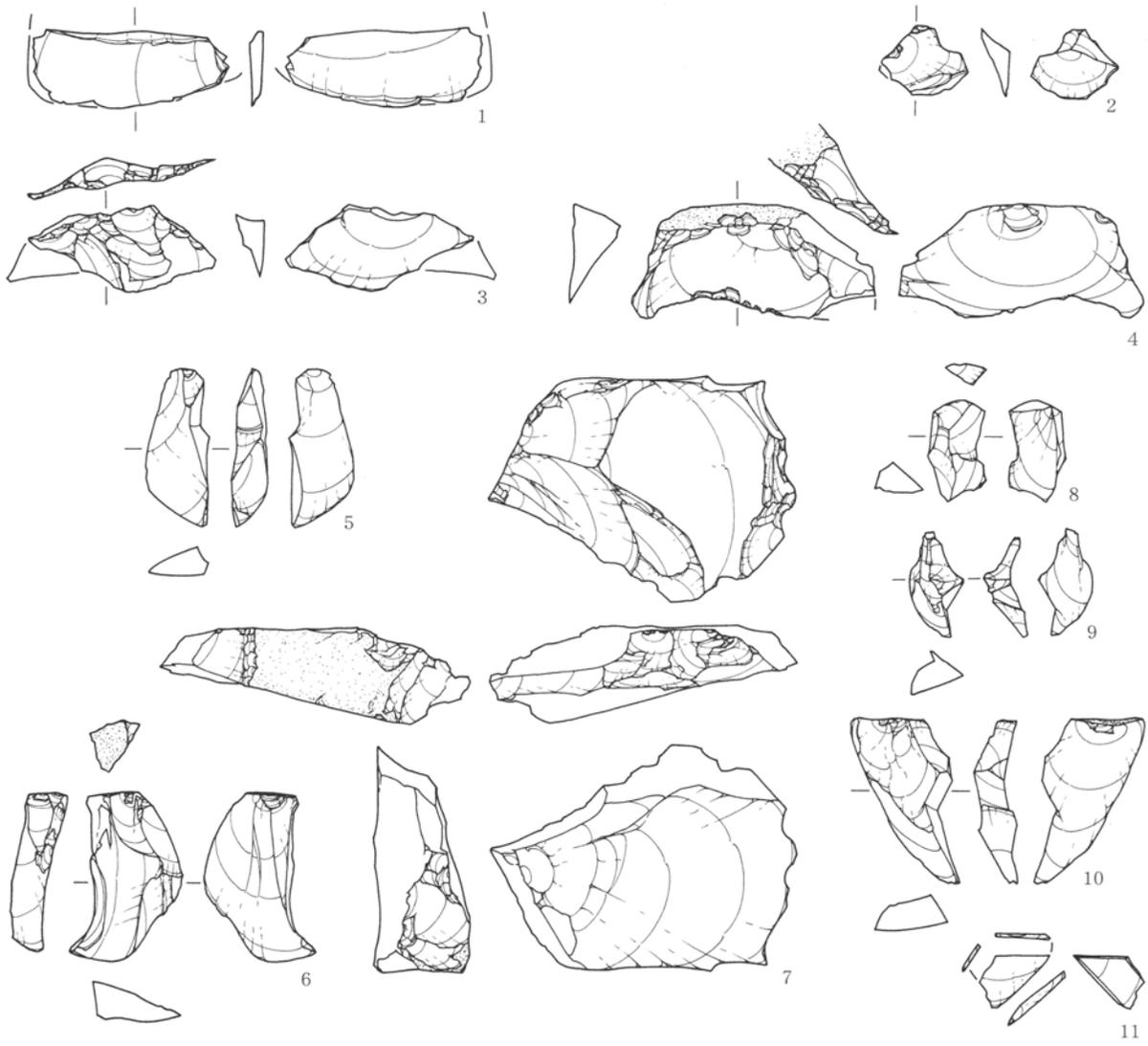


第148圖 接合資料22(1 a 地点)

II 調査の成果



第149図 接合資料23(1 a地点)



接合資料-59

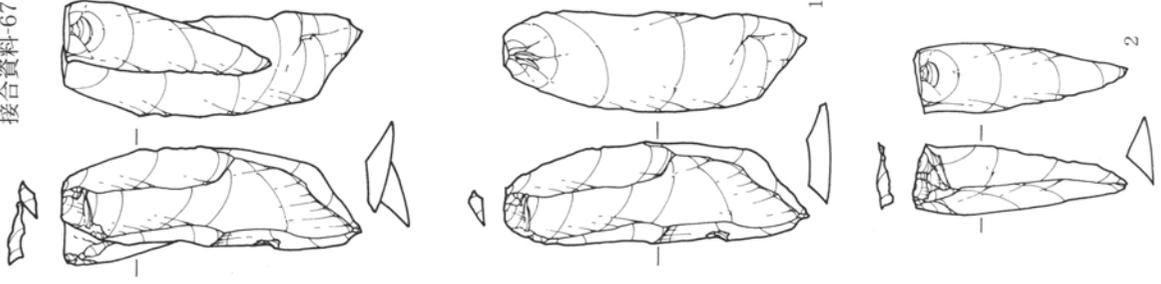


0 10cm

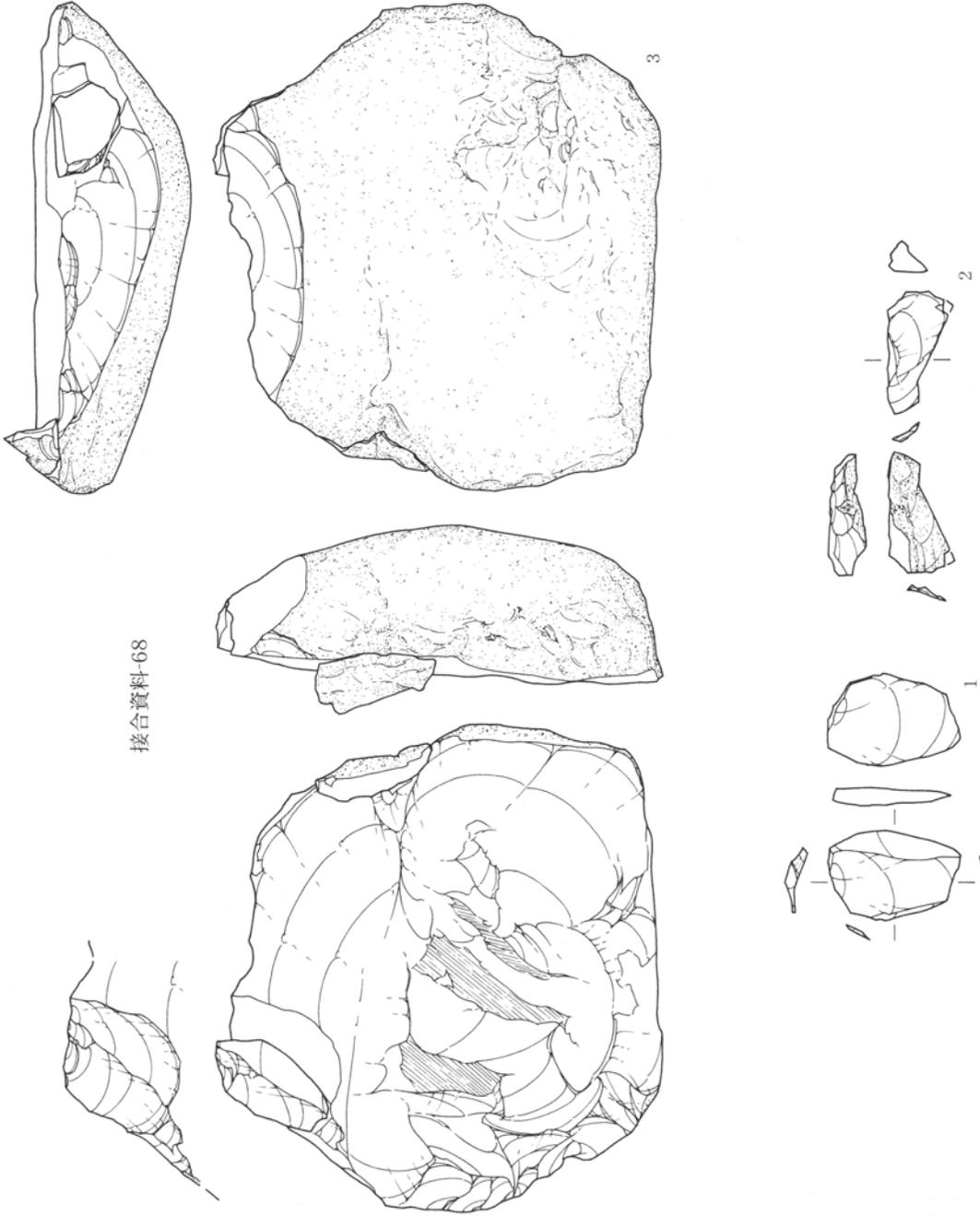
第150図 接合資料24(1 a 地点)

II 調査の成果

接合資料-67



接合資料-68

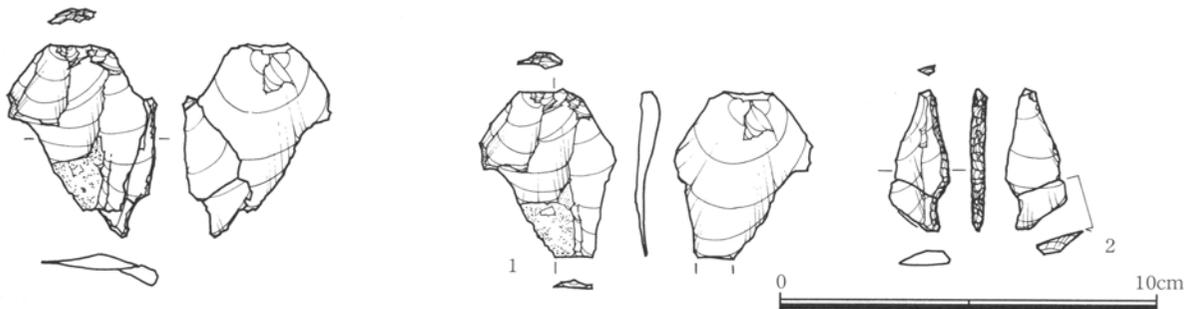


0 10cm

第151図 接合資料25(1 a 地点)

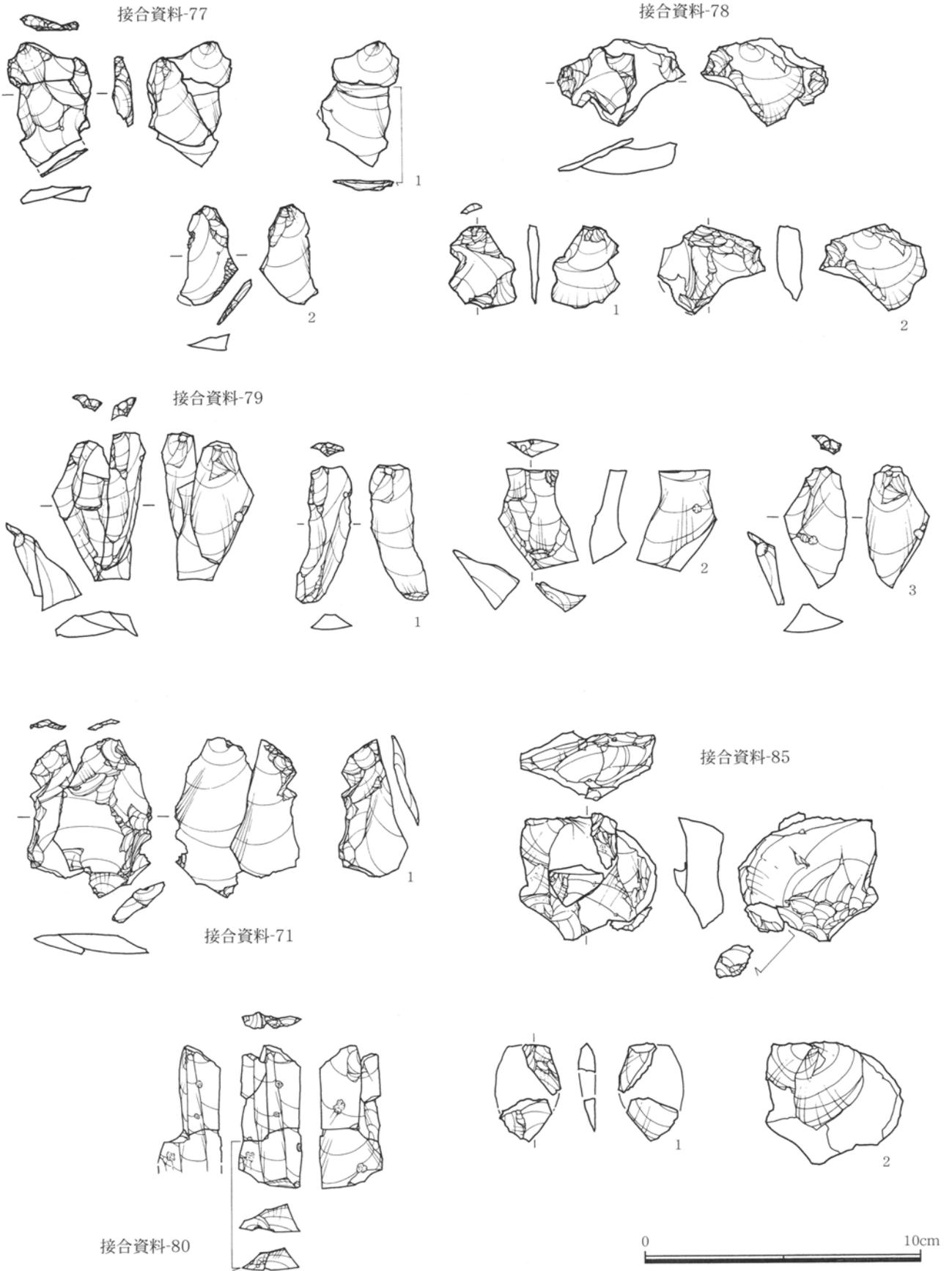


接合資料-70

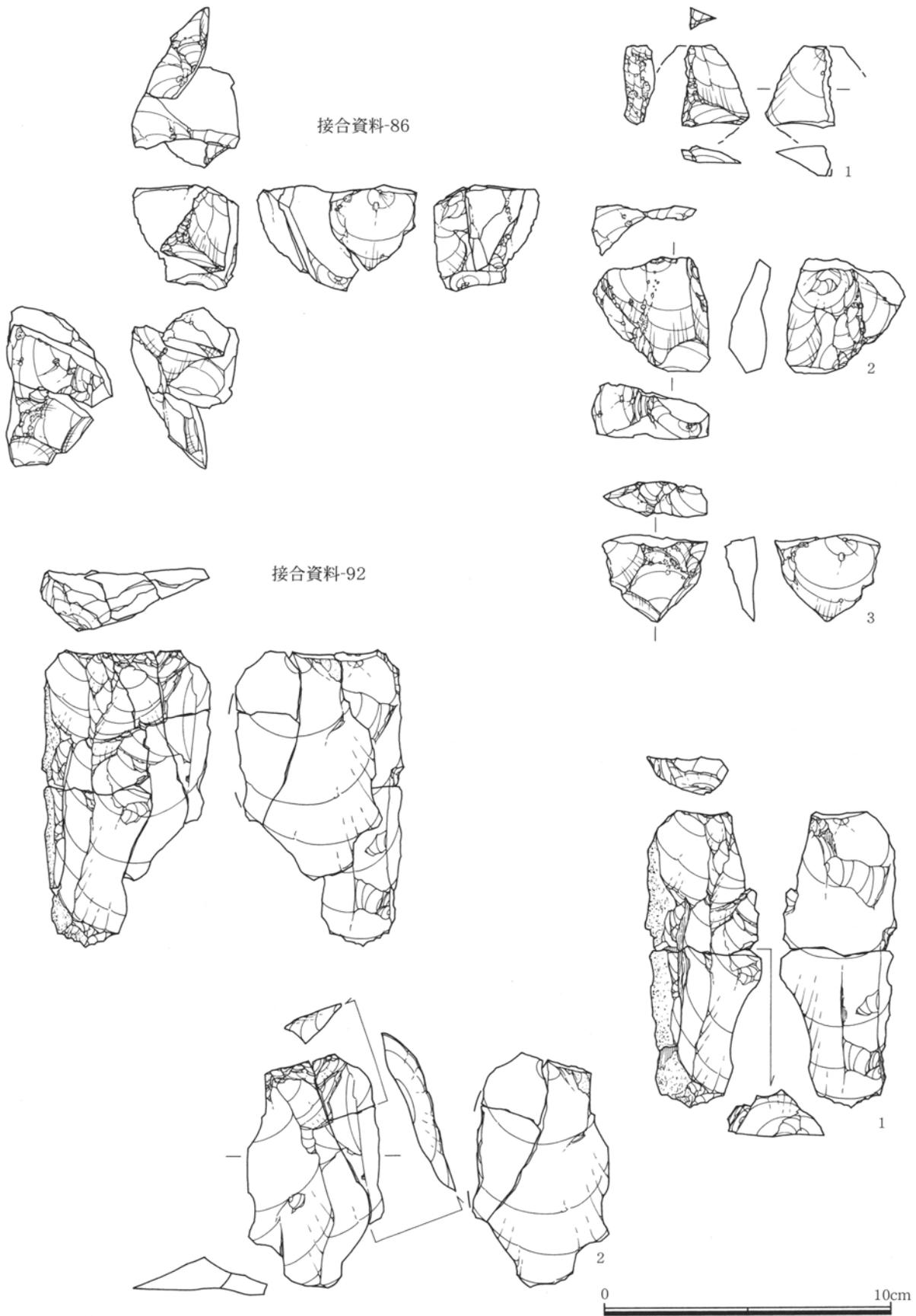


第152図 接合資料26(1 a地点)

II 調査の成果

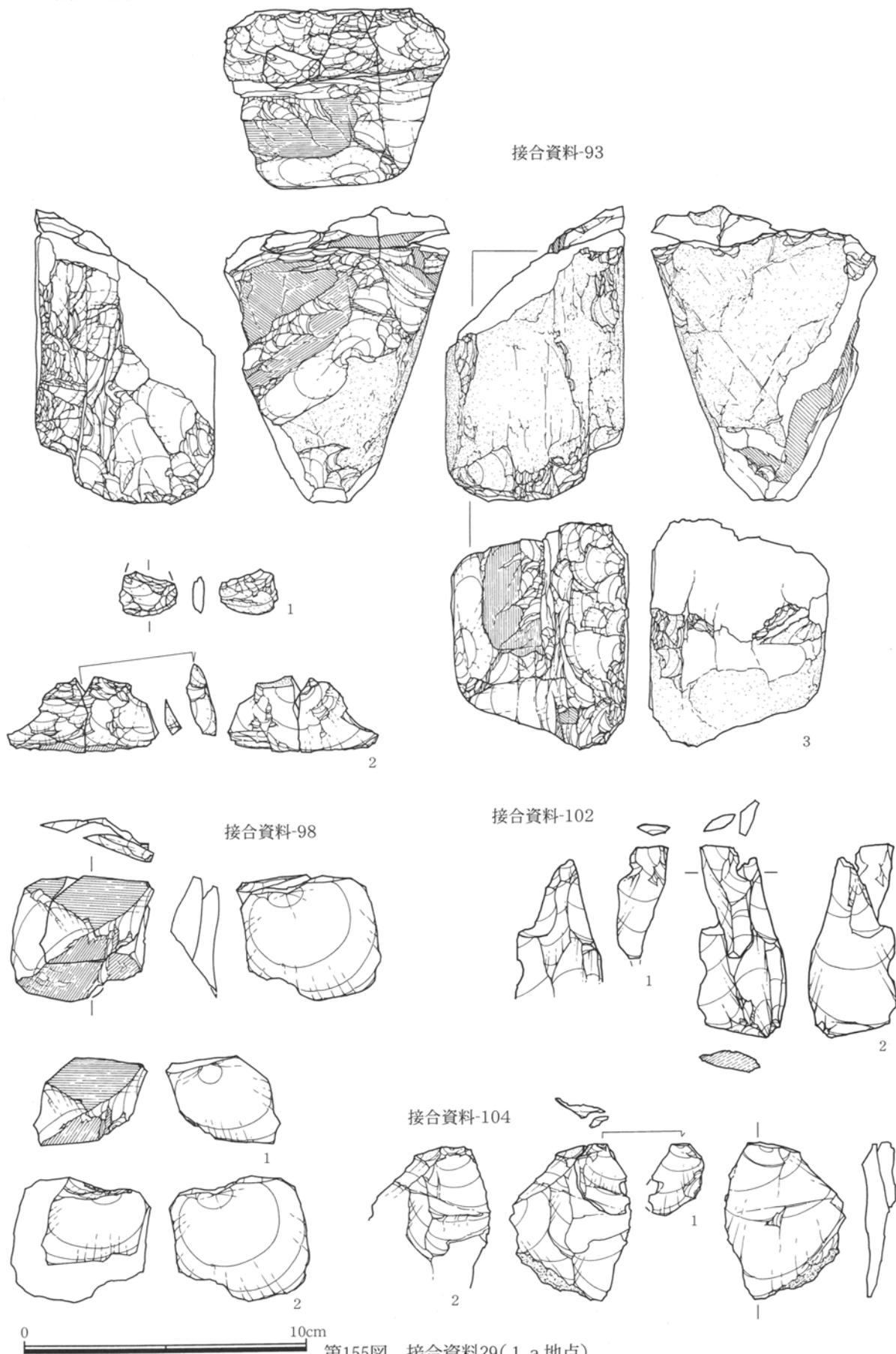


第153図 接合資料27(1 a 地点)

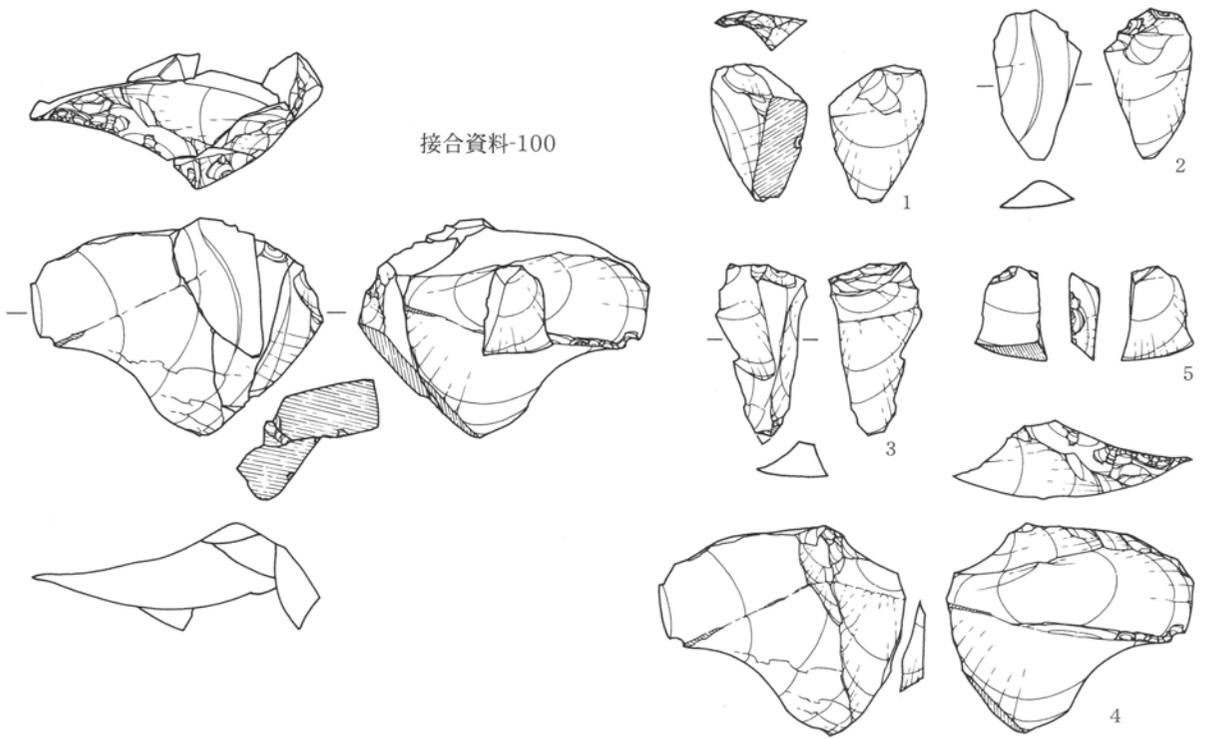


第154図 接合資料28(1 a 地点)

II 調査の成果

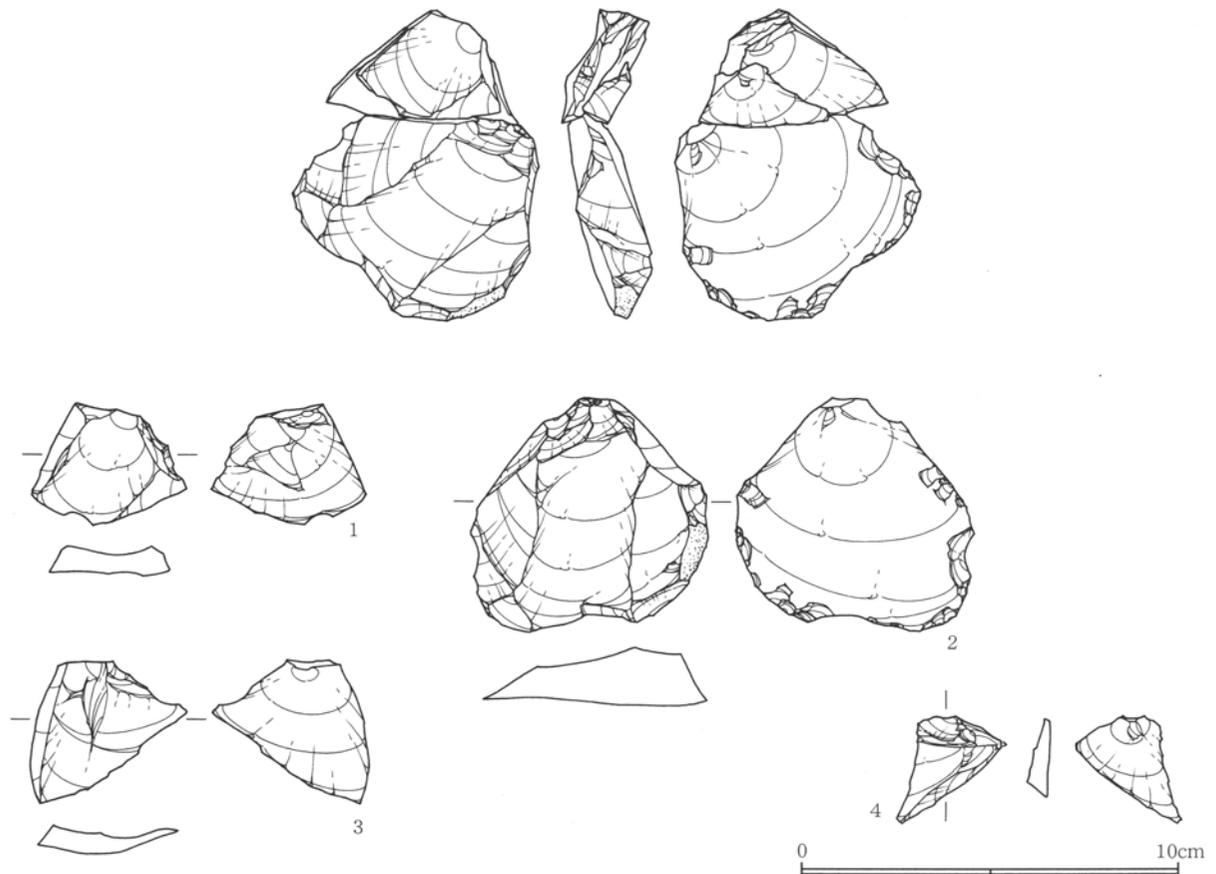


第155図 接合資料29(1 a 地点)



接合資料-100

接合資料-101



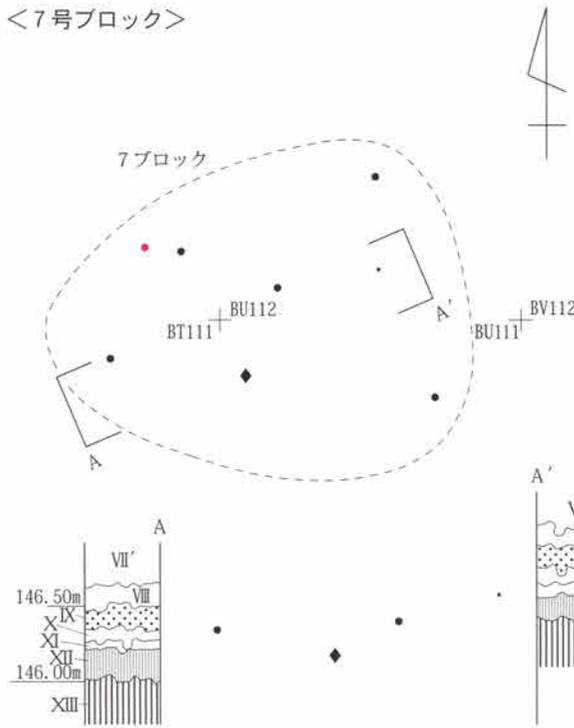
第156図 接合資料30(1 a 地点)

II 調査の成果

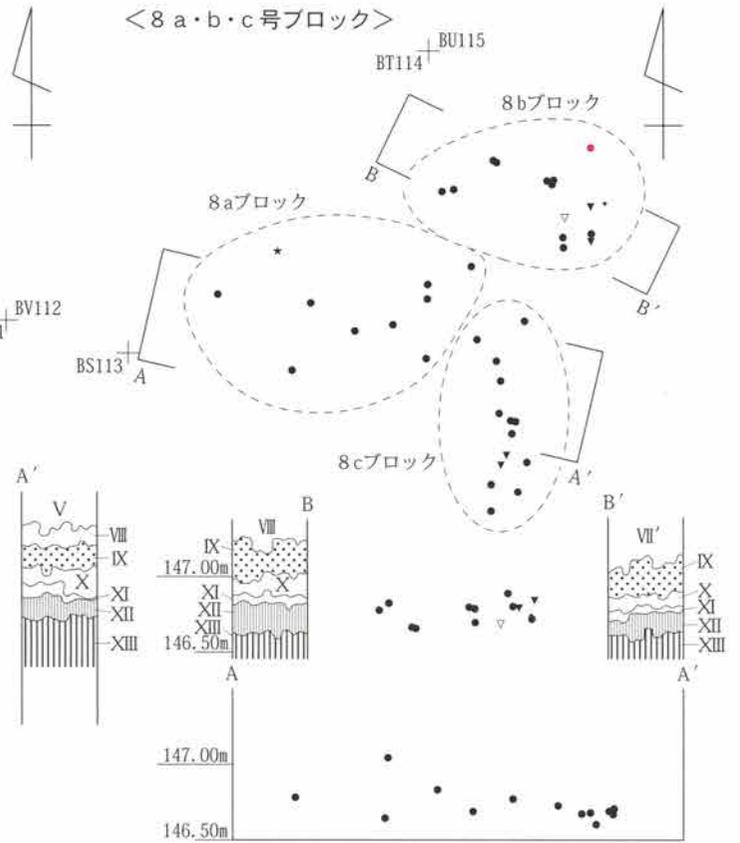


第157図 石器の分布I (1 a地点)

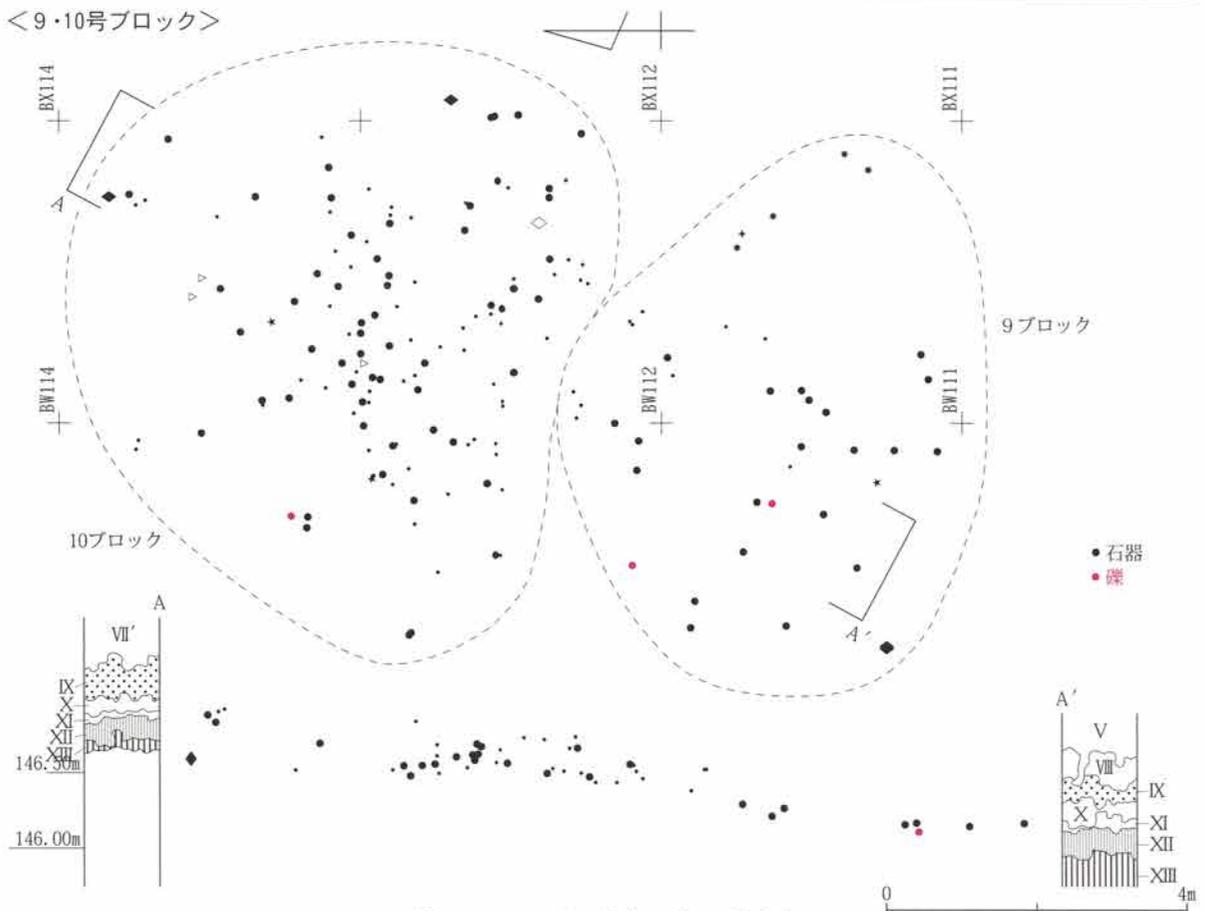
<7号ブロック>



<8 a・b・c号ブロック>

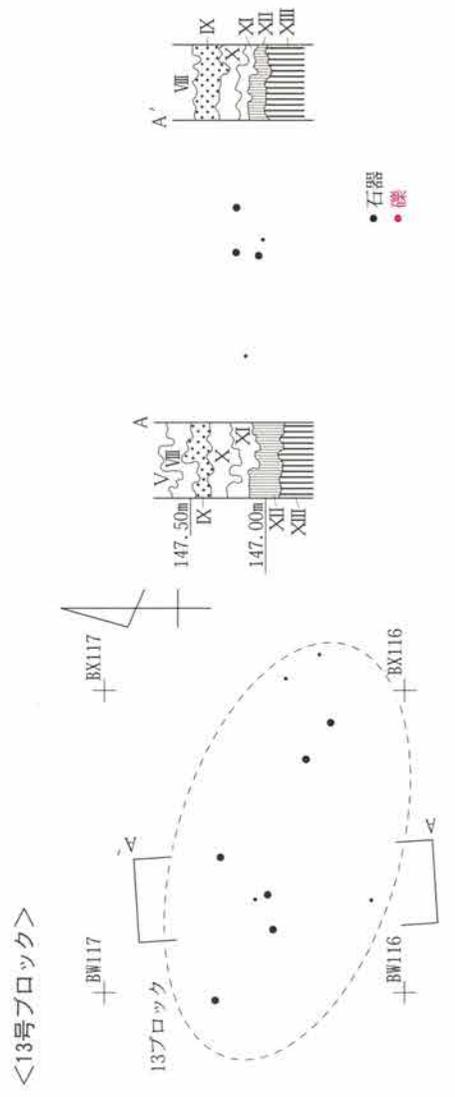
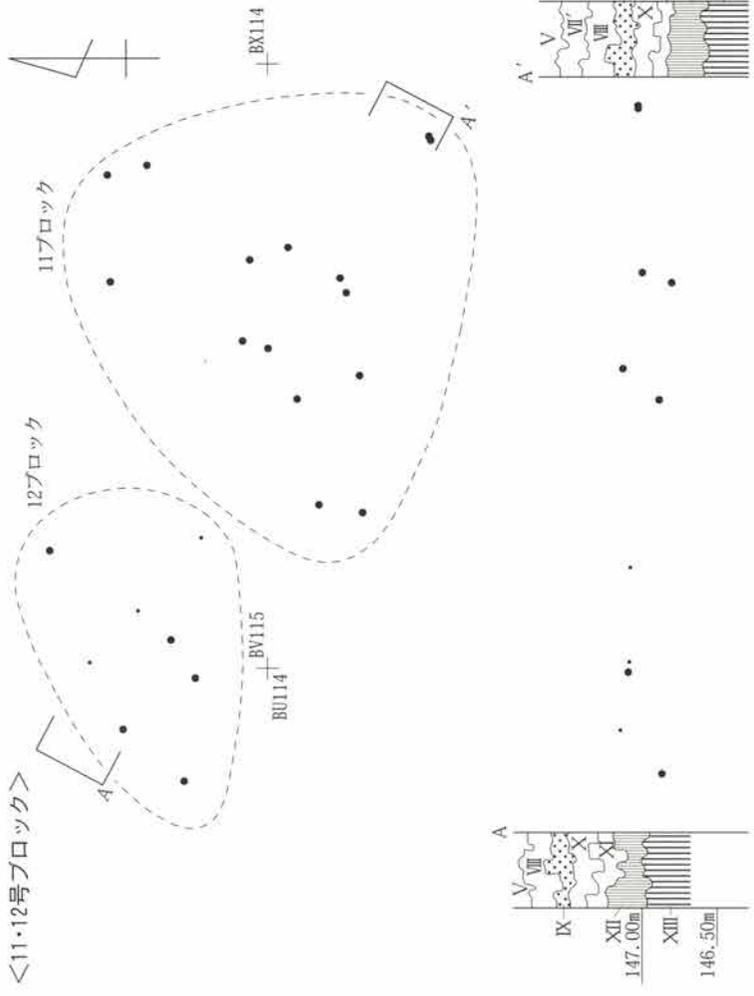
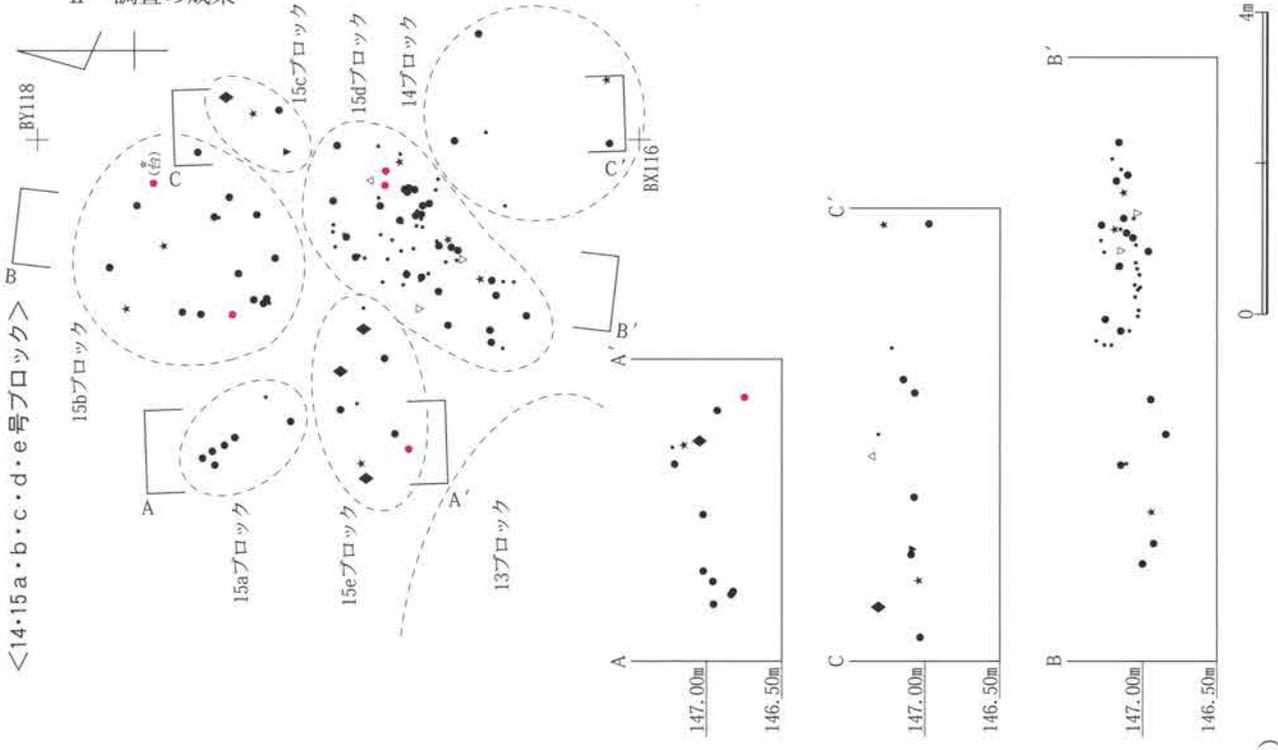


<9・10号ブロック>

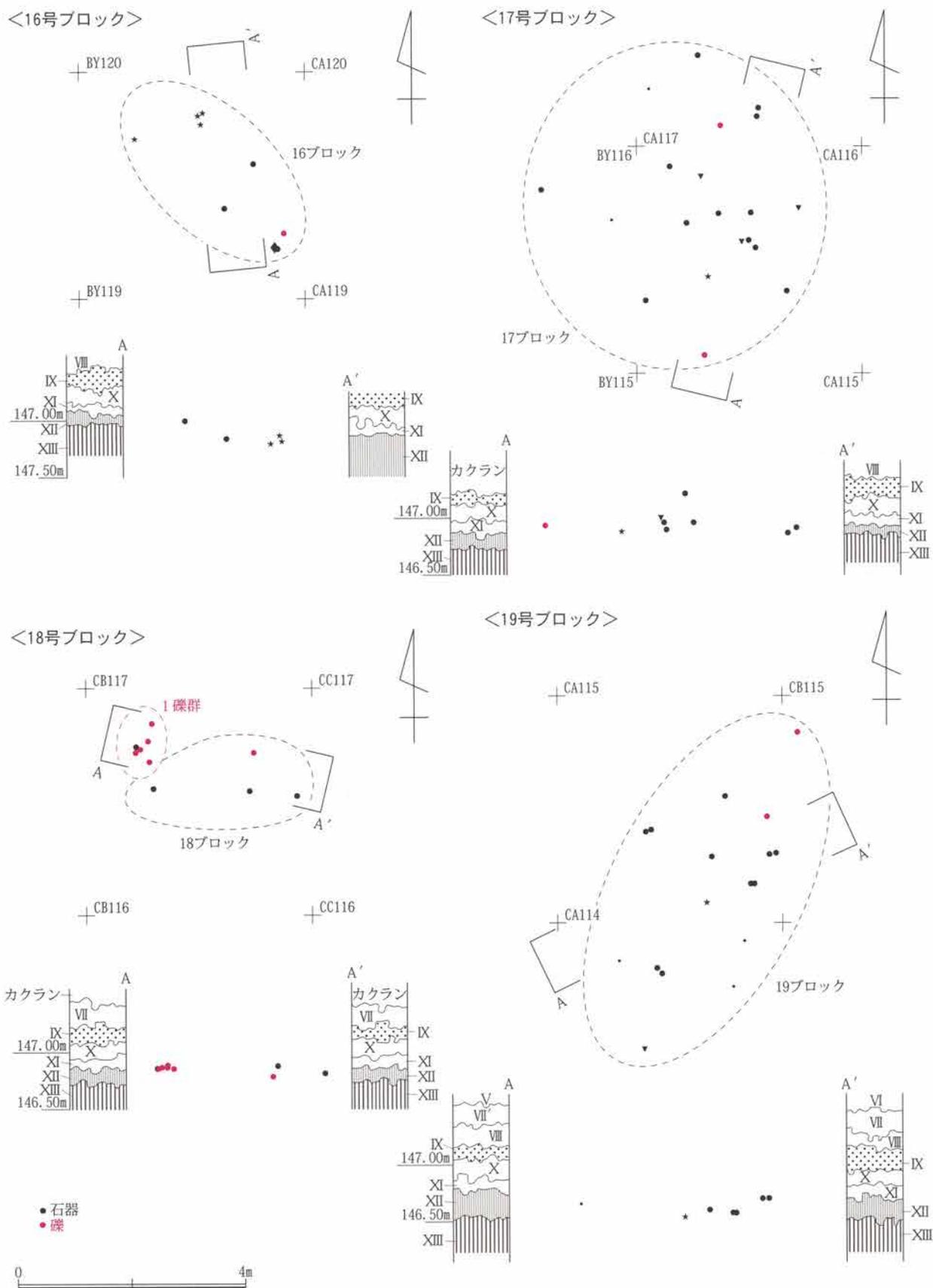


第158図 石器の分布 2 (1 a 地点)

II 調査の成果



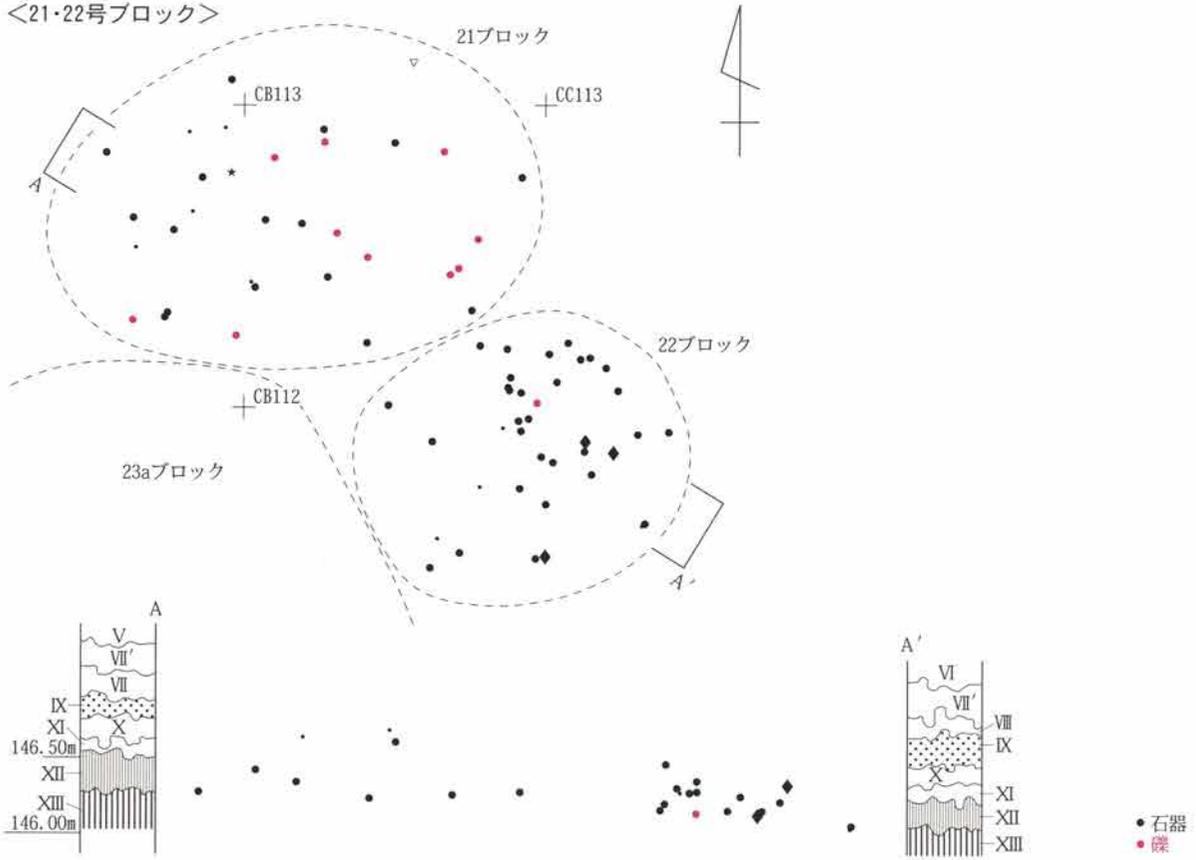
第159図 石器の分布3(1 a地点)



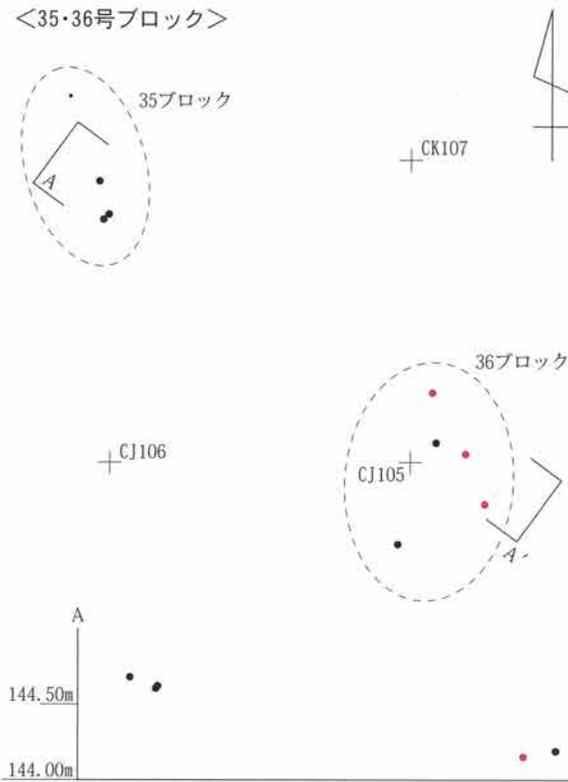
第160図 石器の分布4(1 a 地点)

II 調査の成果

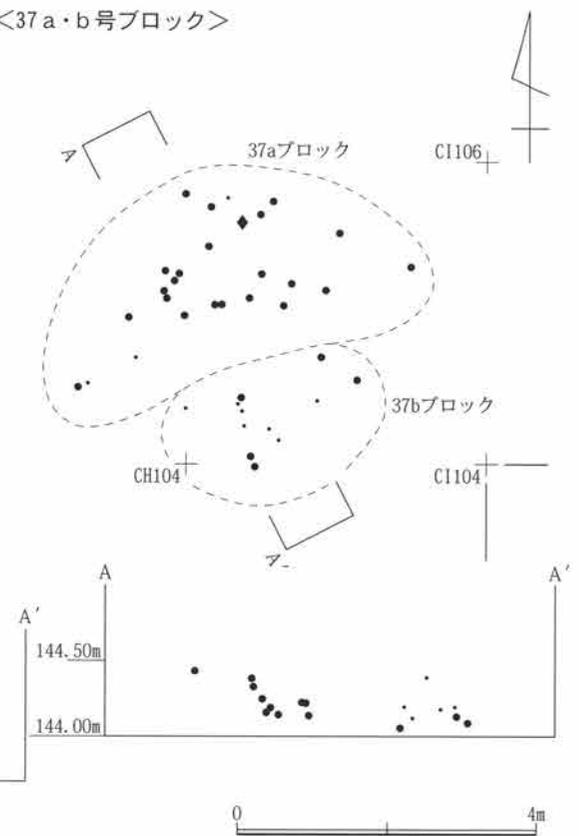
<21・22号ブロック>



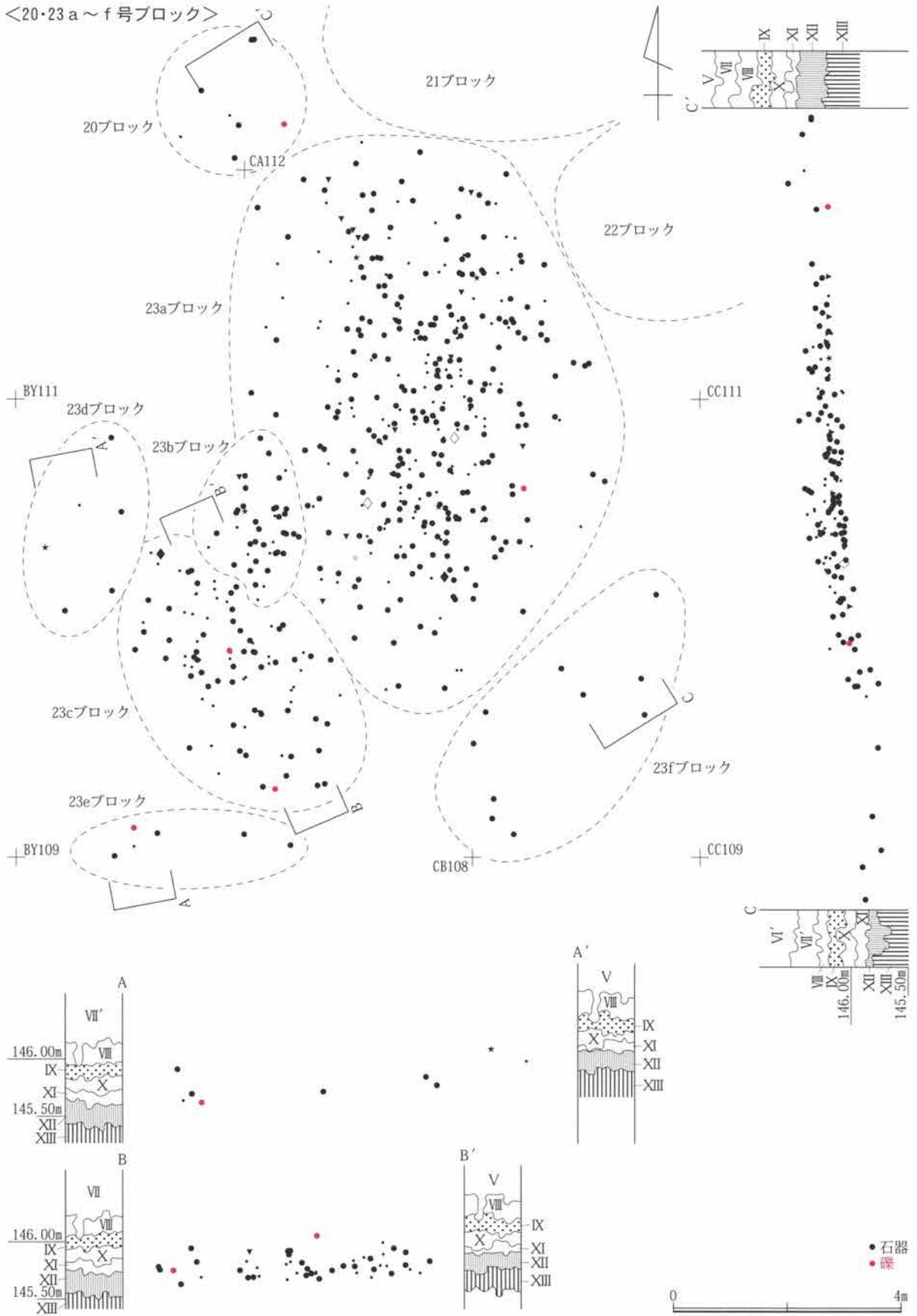
<35・36号ブロック>



<37 a・b号ブロック>



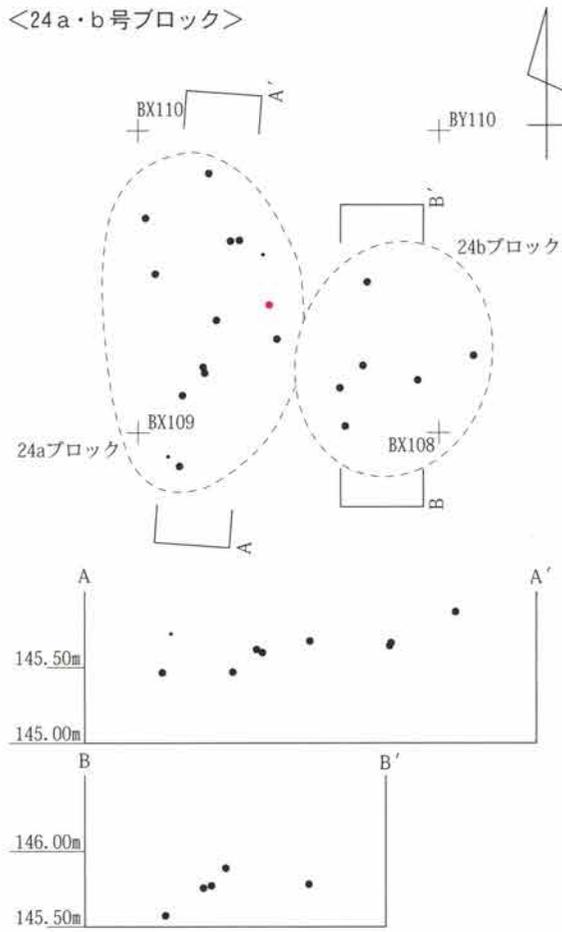
第161図 石器の分布5(1 a地点)



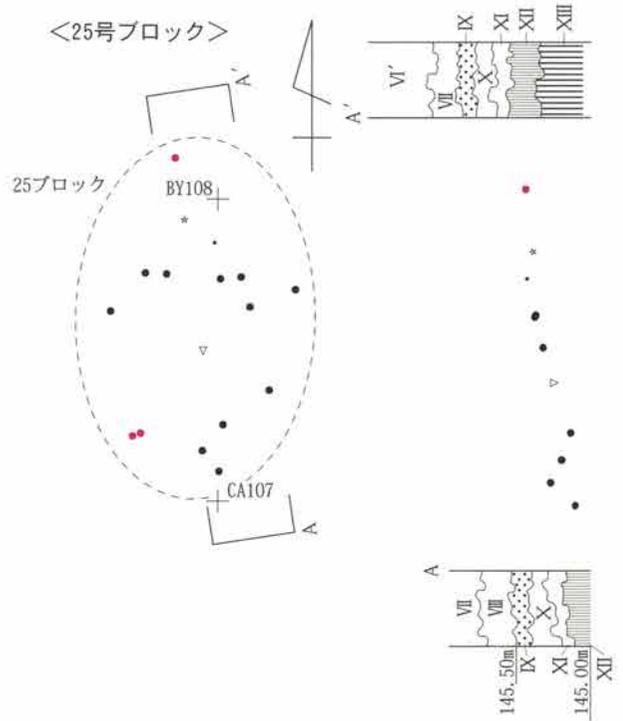
第162図 石器の分布6 (1 a地点)

II 調査の成果

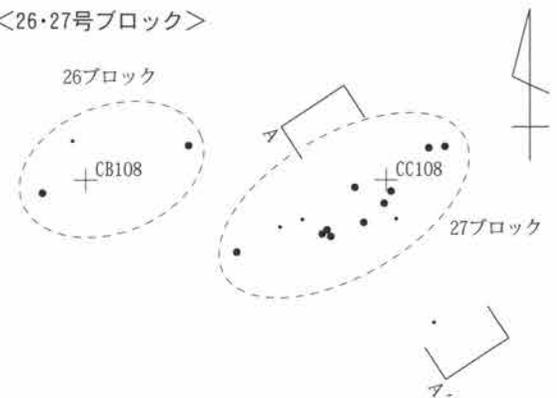
<24 a・b号ブロック>



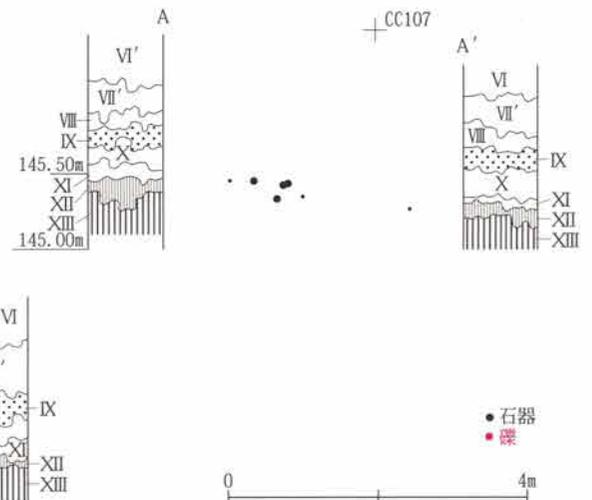
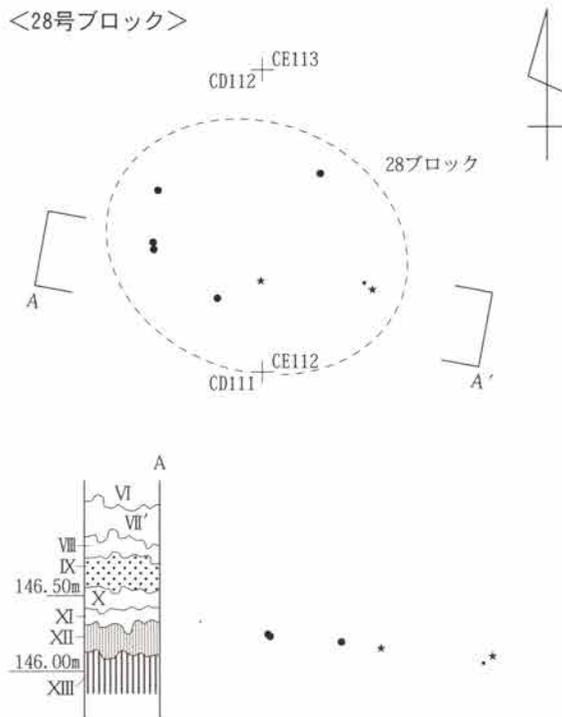
<25号ブロック>



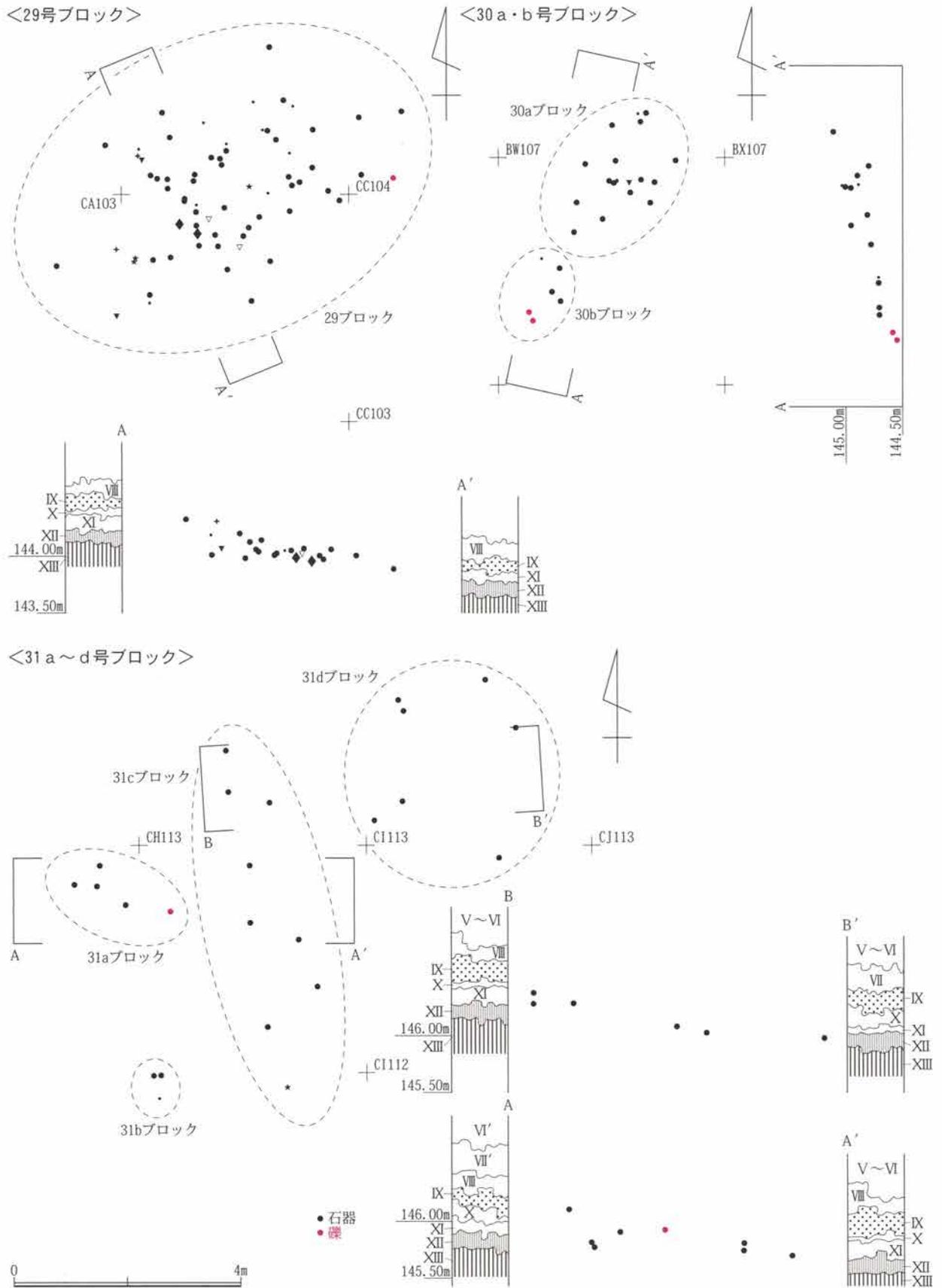
<26・27号ブロック>



<28号ブロック>



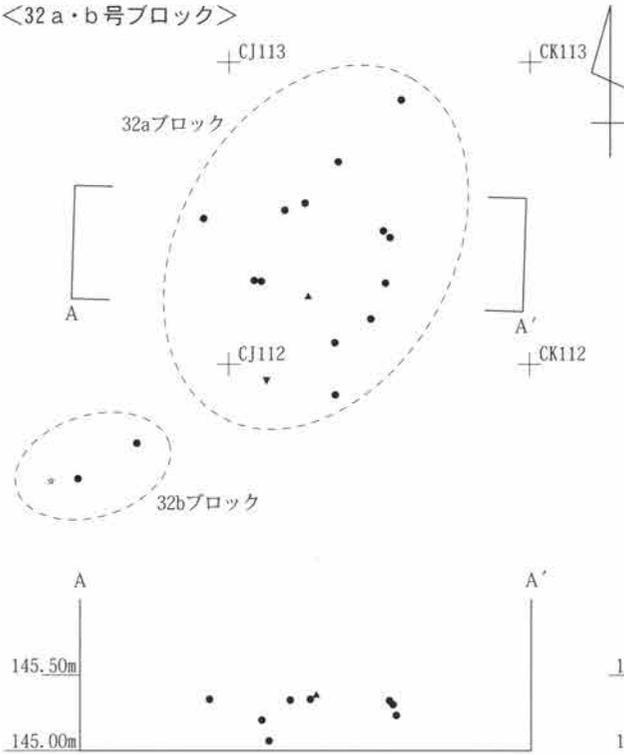
第163図 石器の分布7(1 a地点)



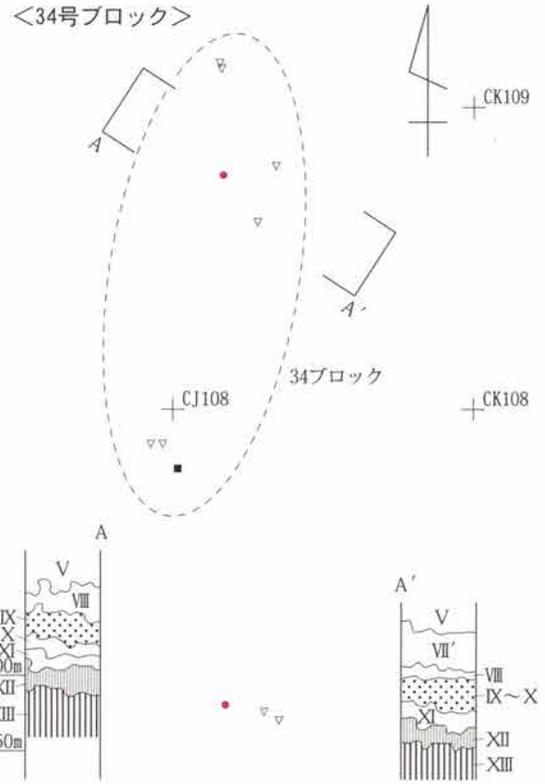
第164図 石器の分布 8 (1 a 地点)

II 調査の成果

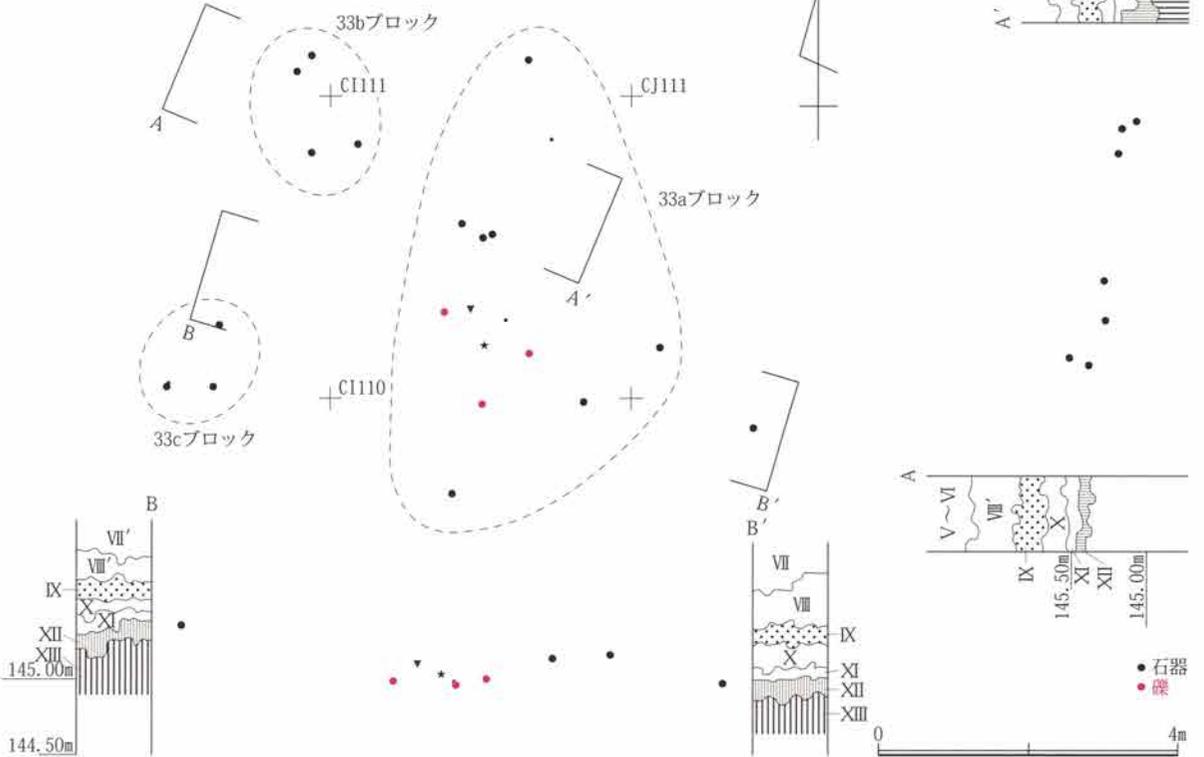
<32 a・b号ブロック>



<34号ブロック>

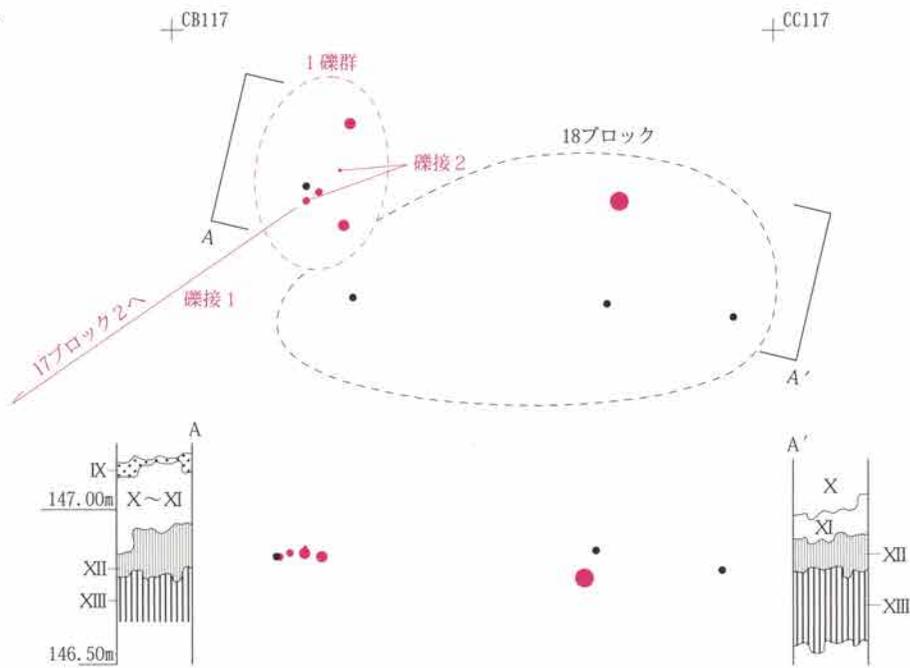


<33 a～c号ブロック>

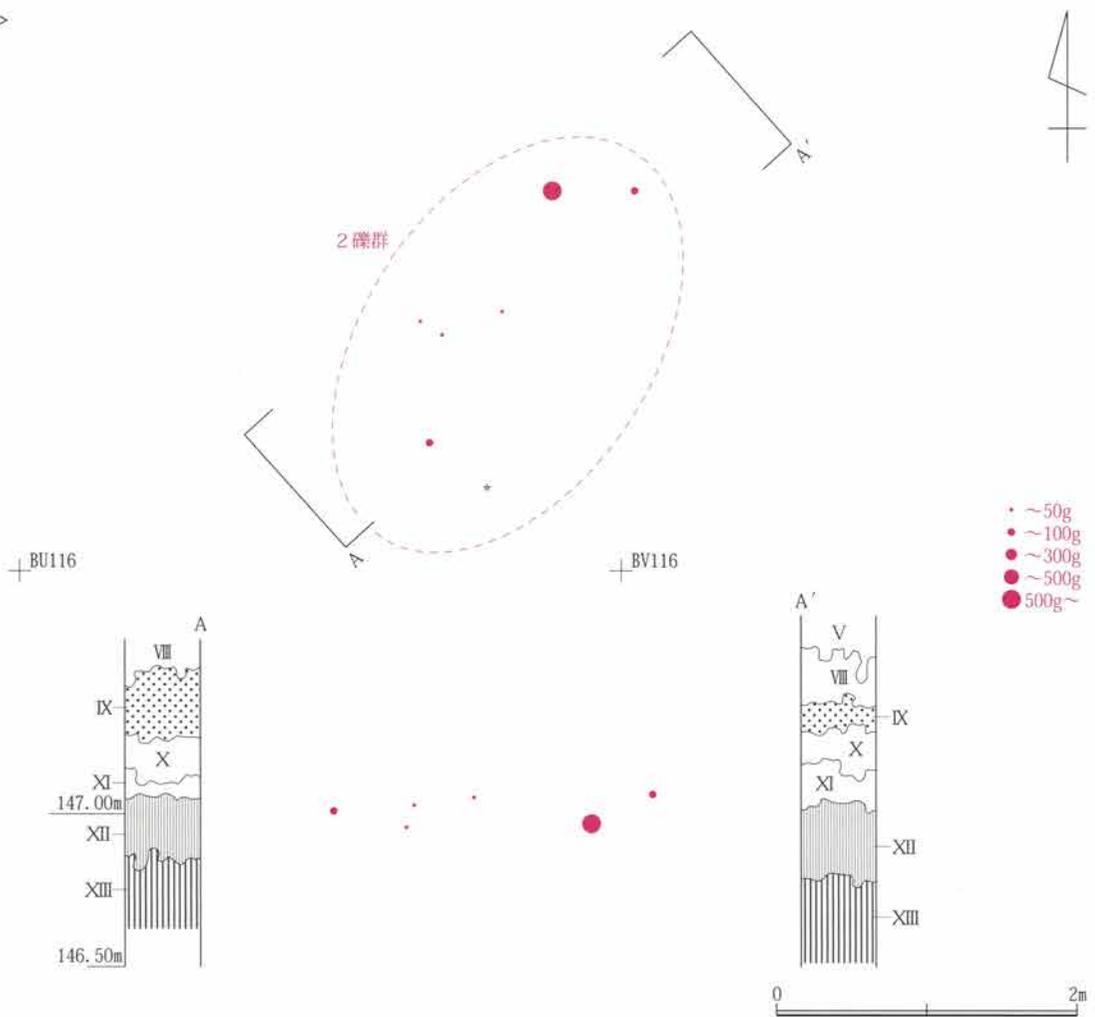


第165図 石器の分布9(1 a地点)

< 1 礫群 >

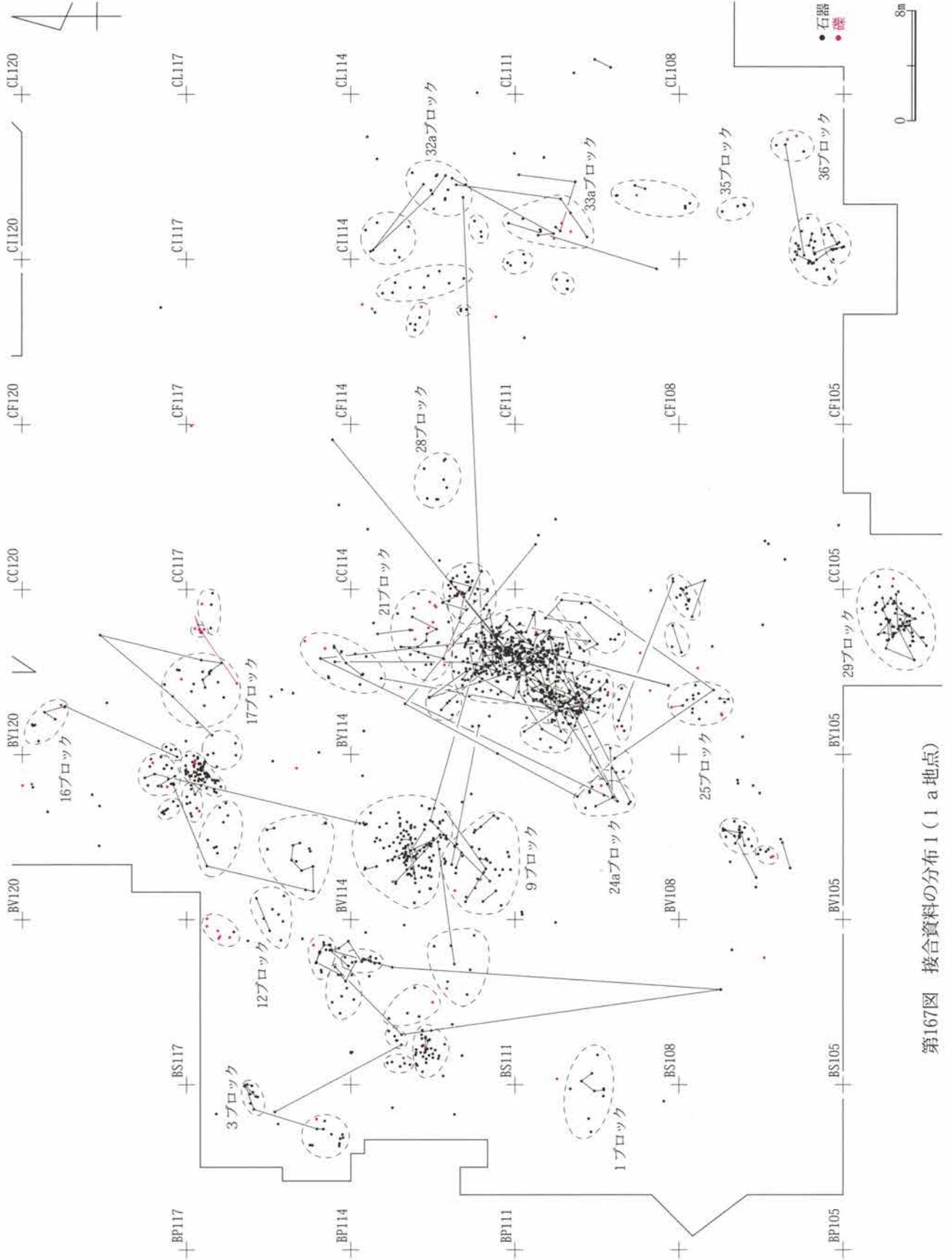


< 2 礫群 >

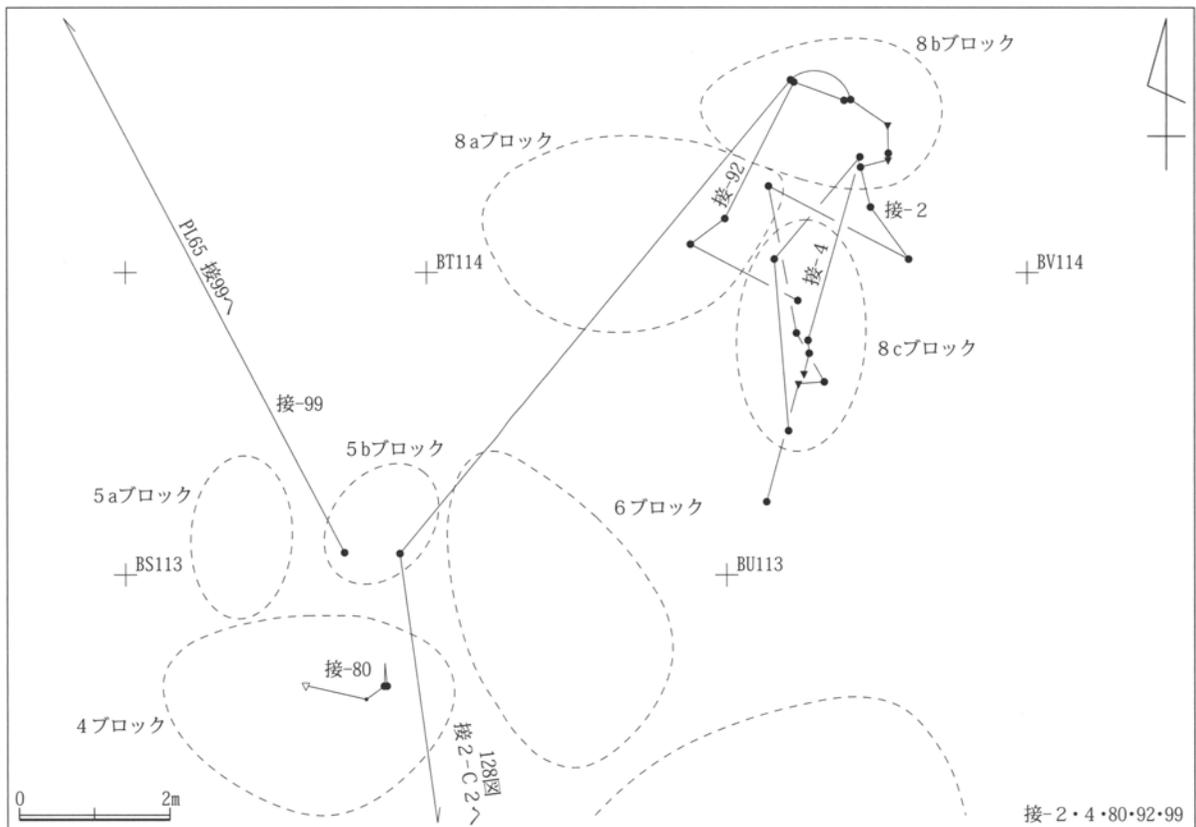
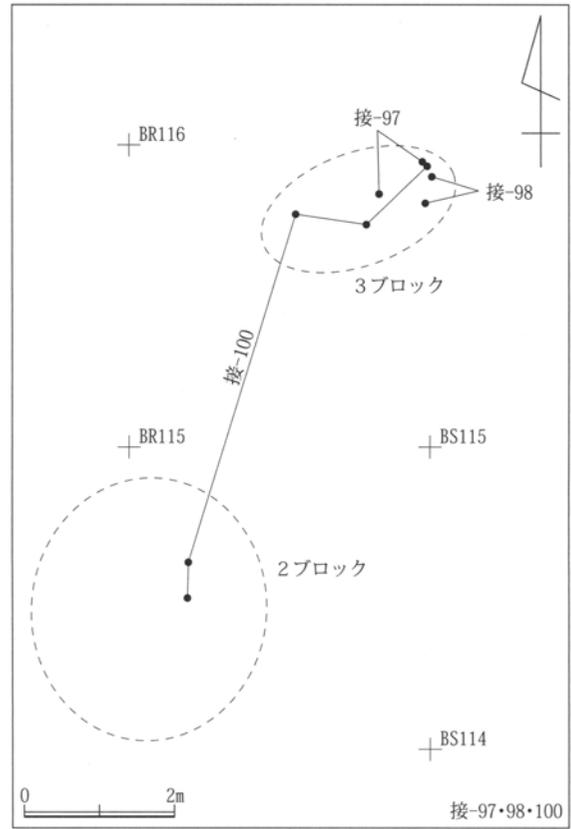
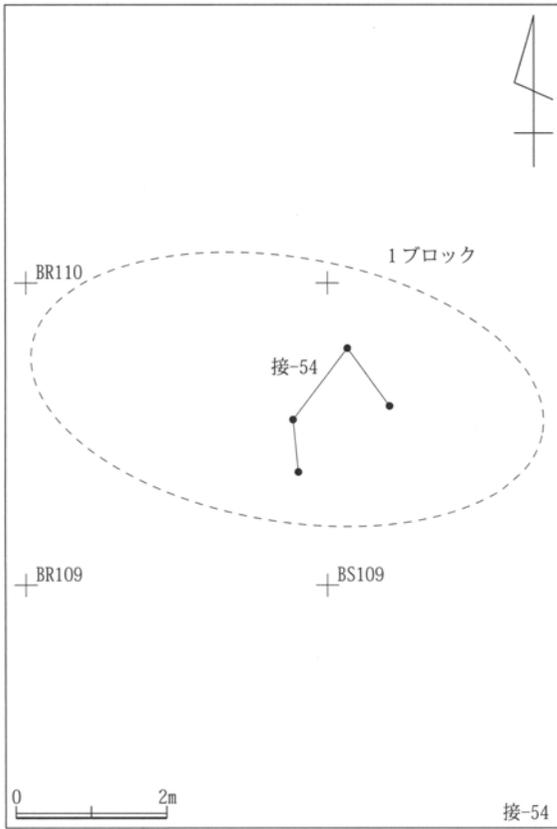


第166図 礫群重量別分布と礫接合(1 a 地点)

II 調査の成果

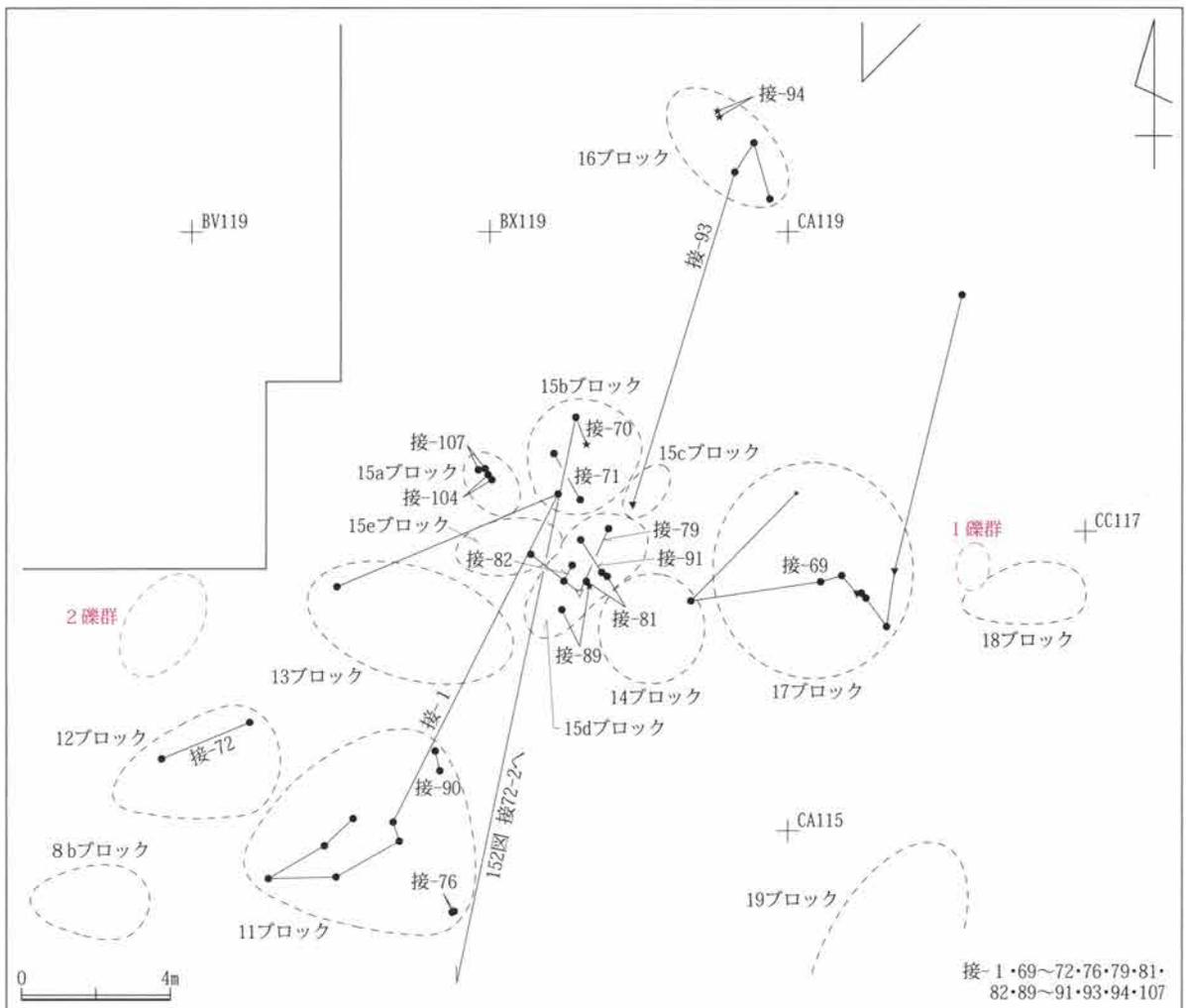
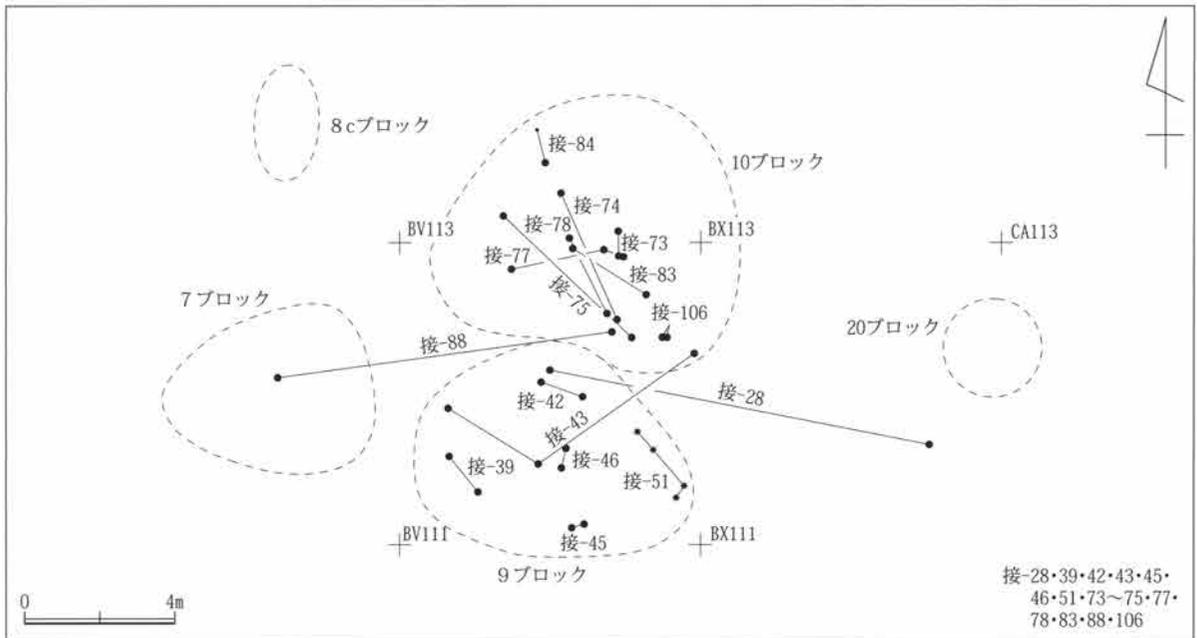


第167図 接合資料の分布1 (1 a 地点)

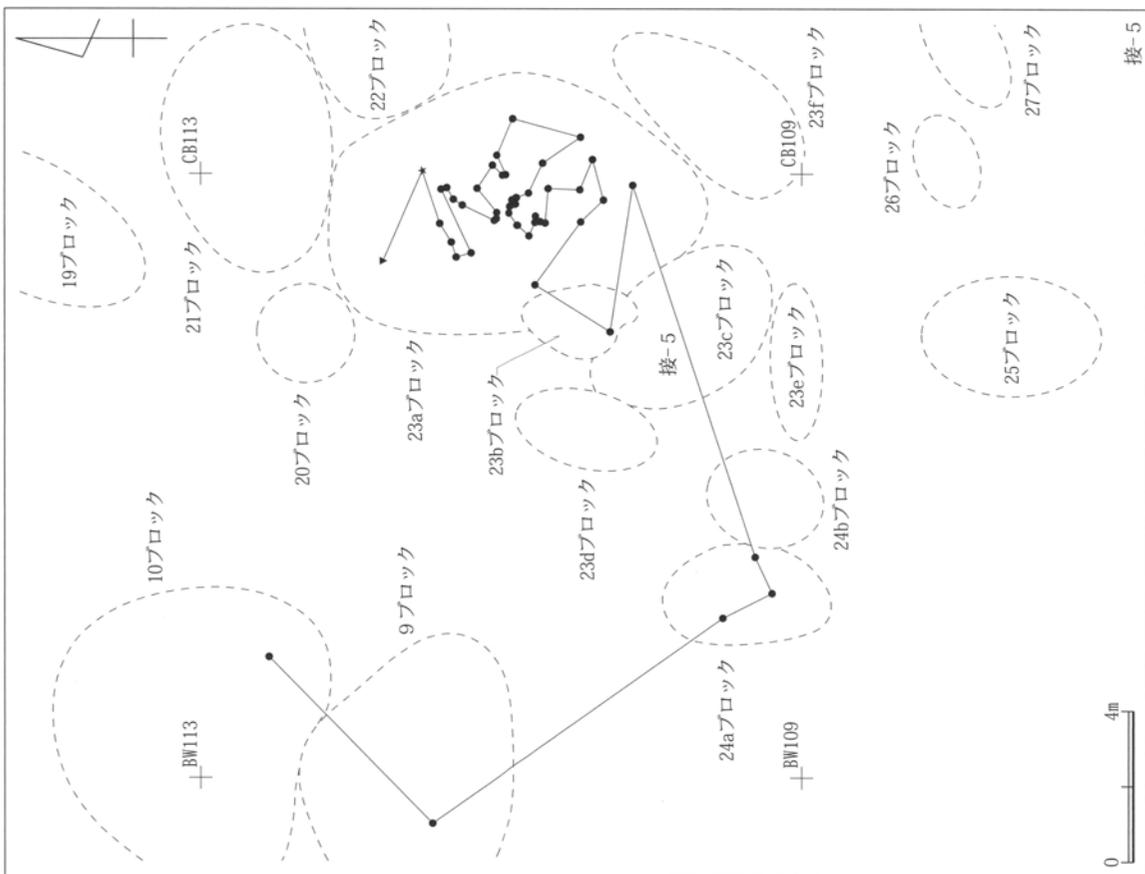
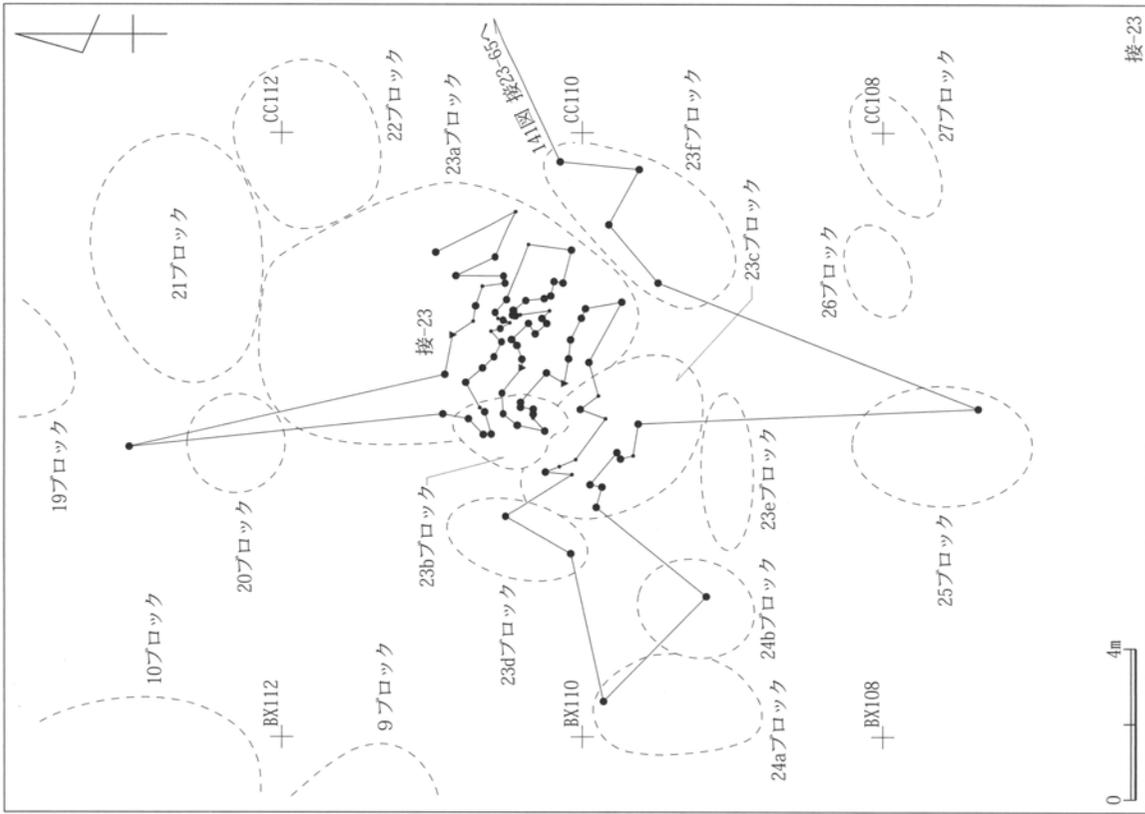


第168図 接合資料の分布 2 (1 a 地点)

II 調査の成果

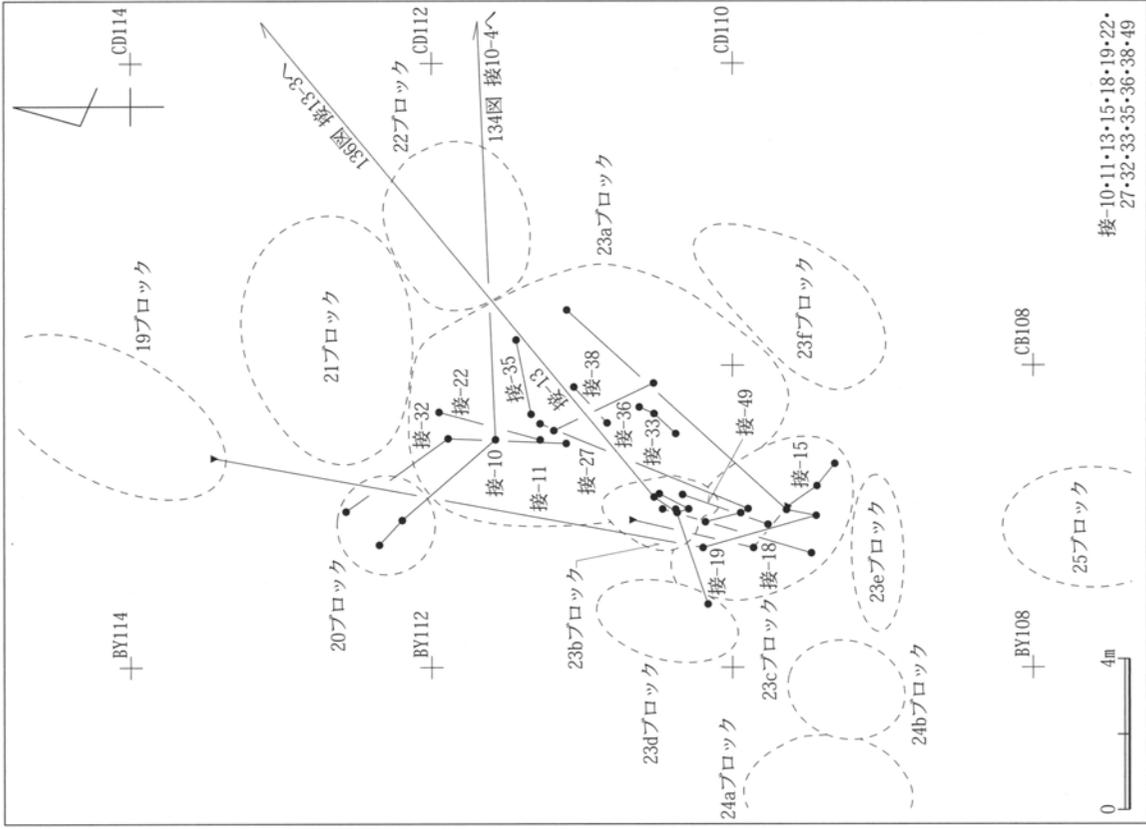


第169図 接合資料の分布3(1 a地点)

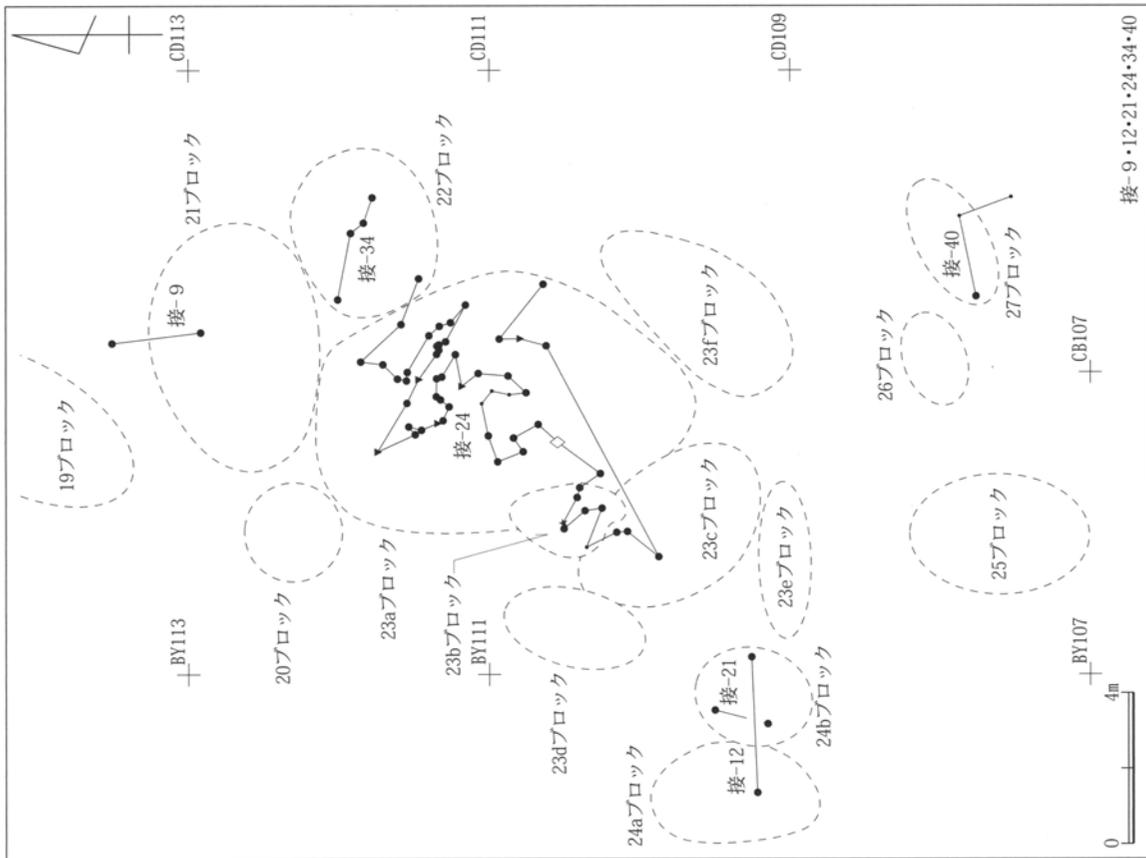


第170図 接合資料の分布4(1 a 地点)

II 調査の成果

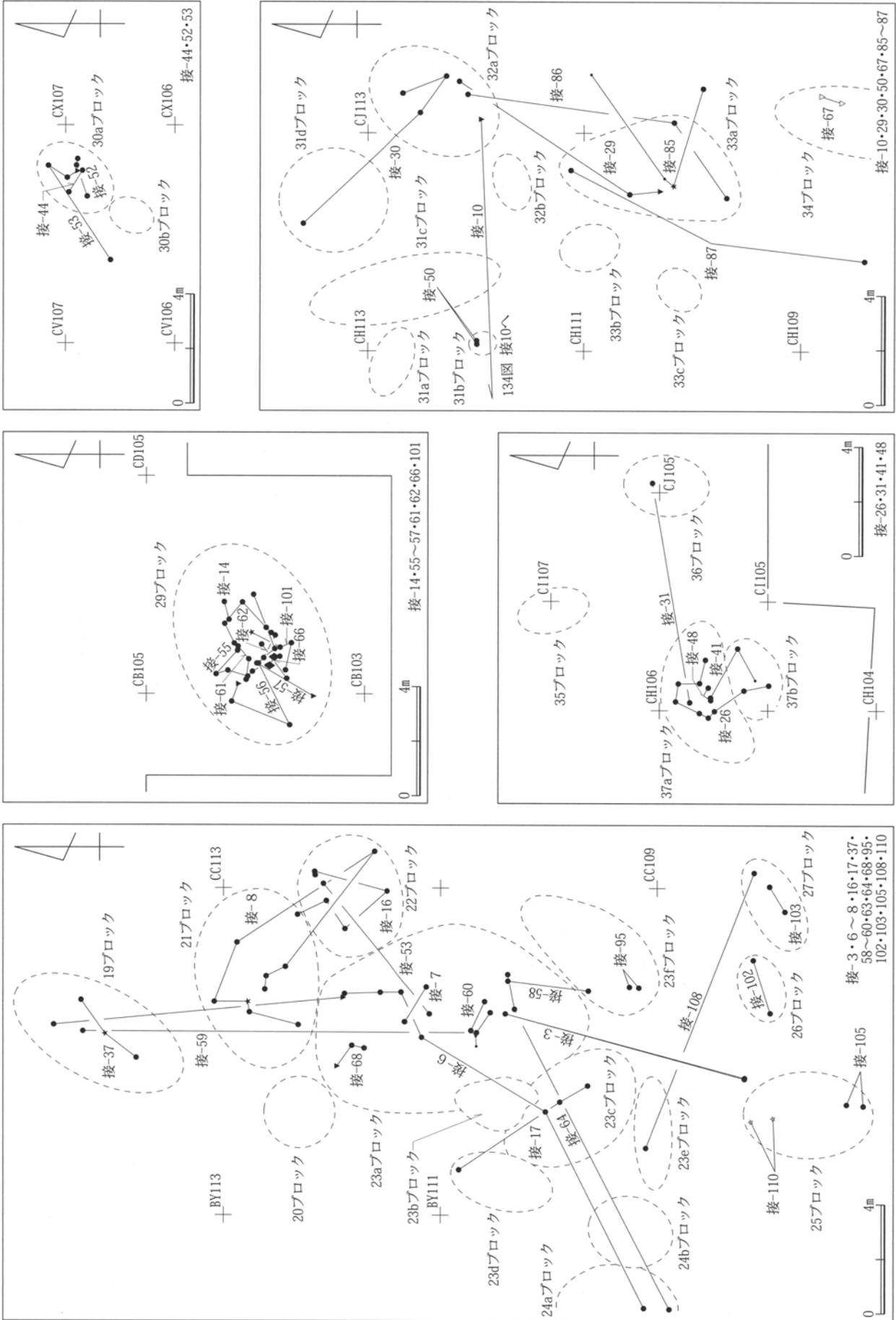


接-10・11・13・15・18・19・22・
27・32・33・35・36・38・49



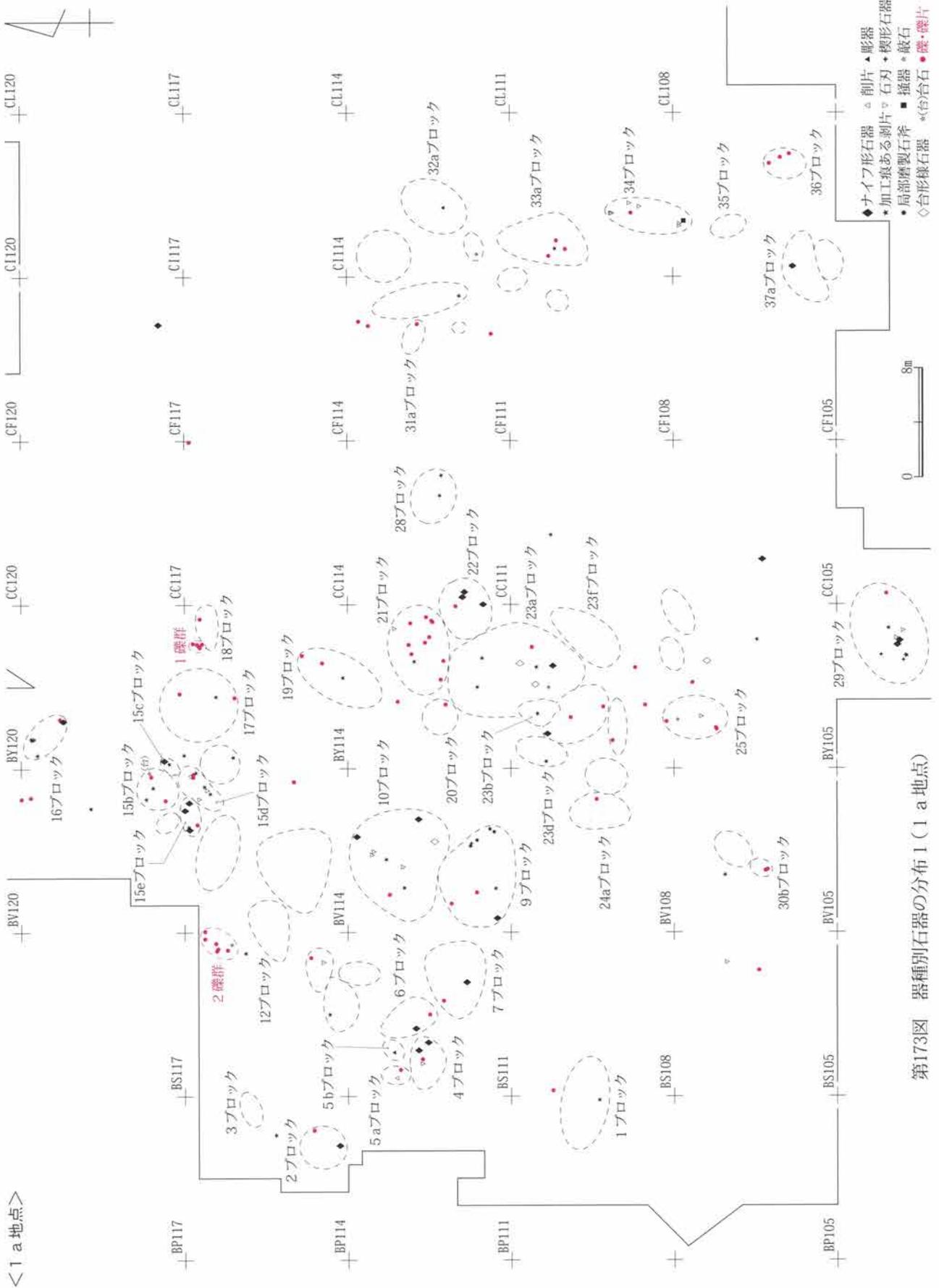
接-9・12・21・24・34・40

第171図 接合資料の分布5(1a地点)

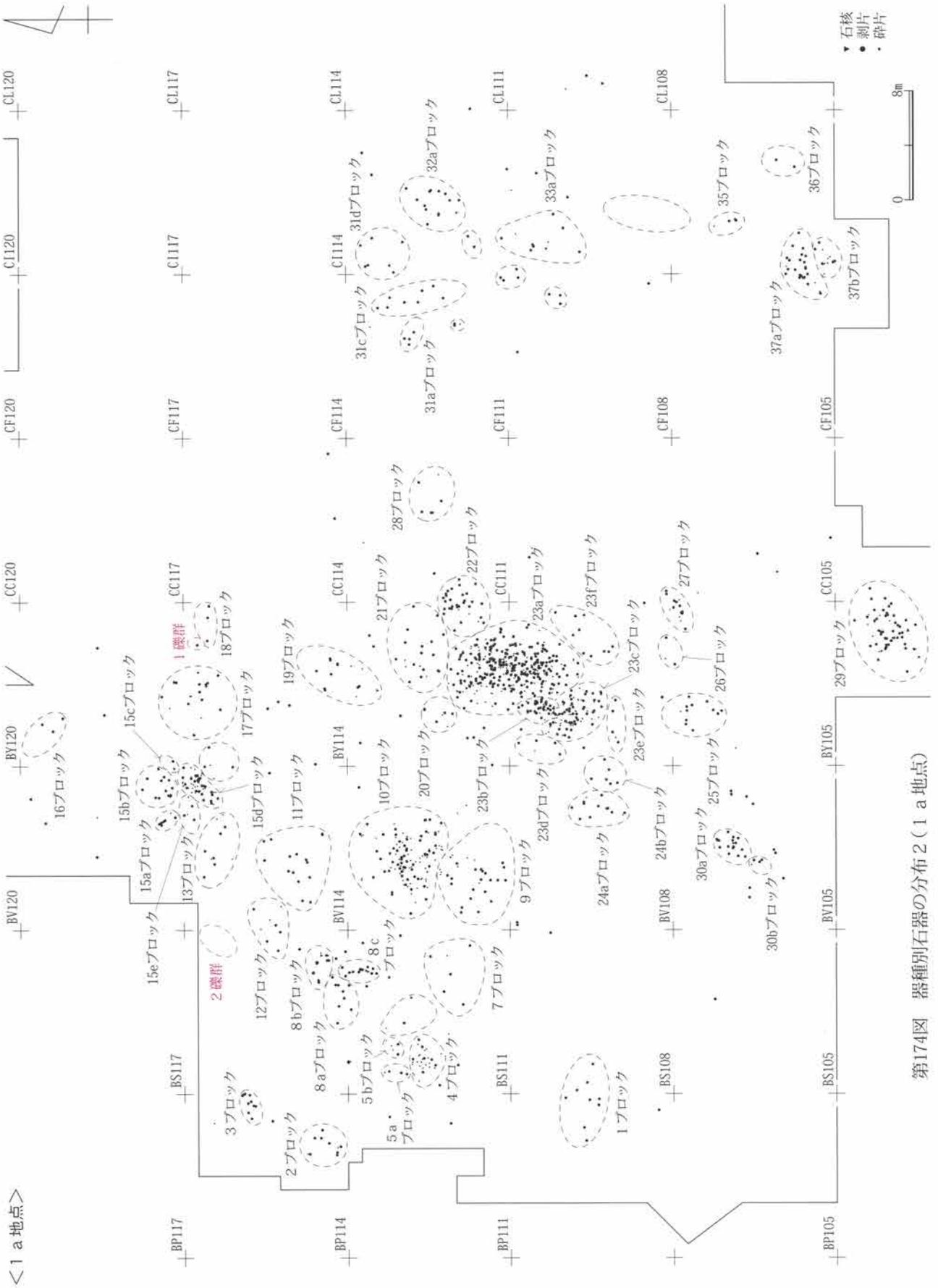


第172図 接合資料の分布6(1 a 地点)

II 調査の成果

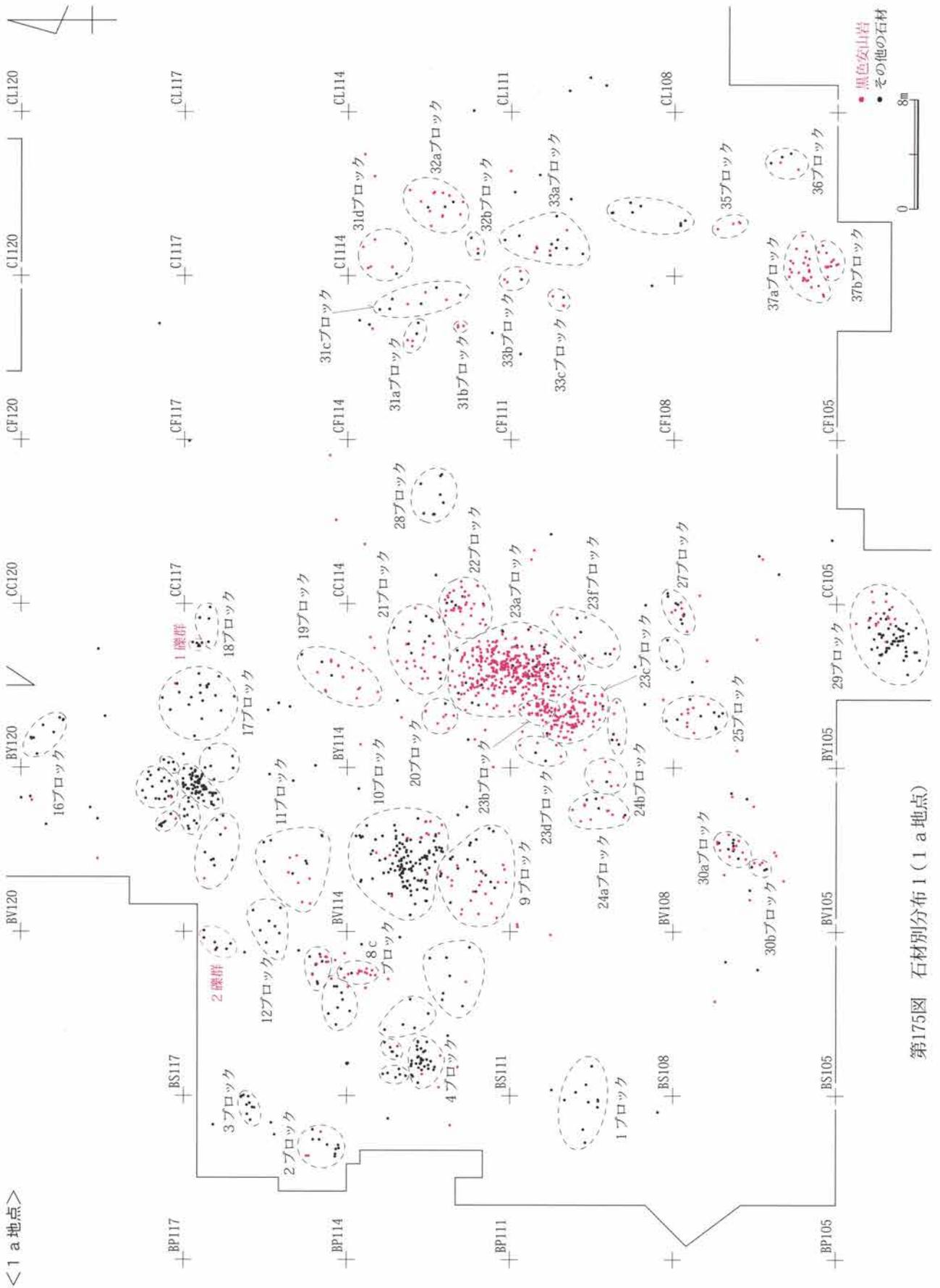


第173図 器種別石器の分布1(1 a地点)



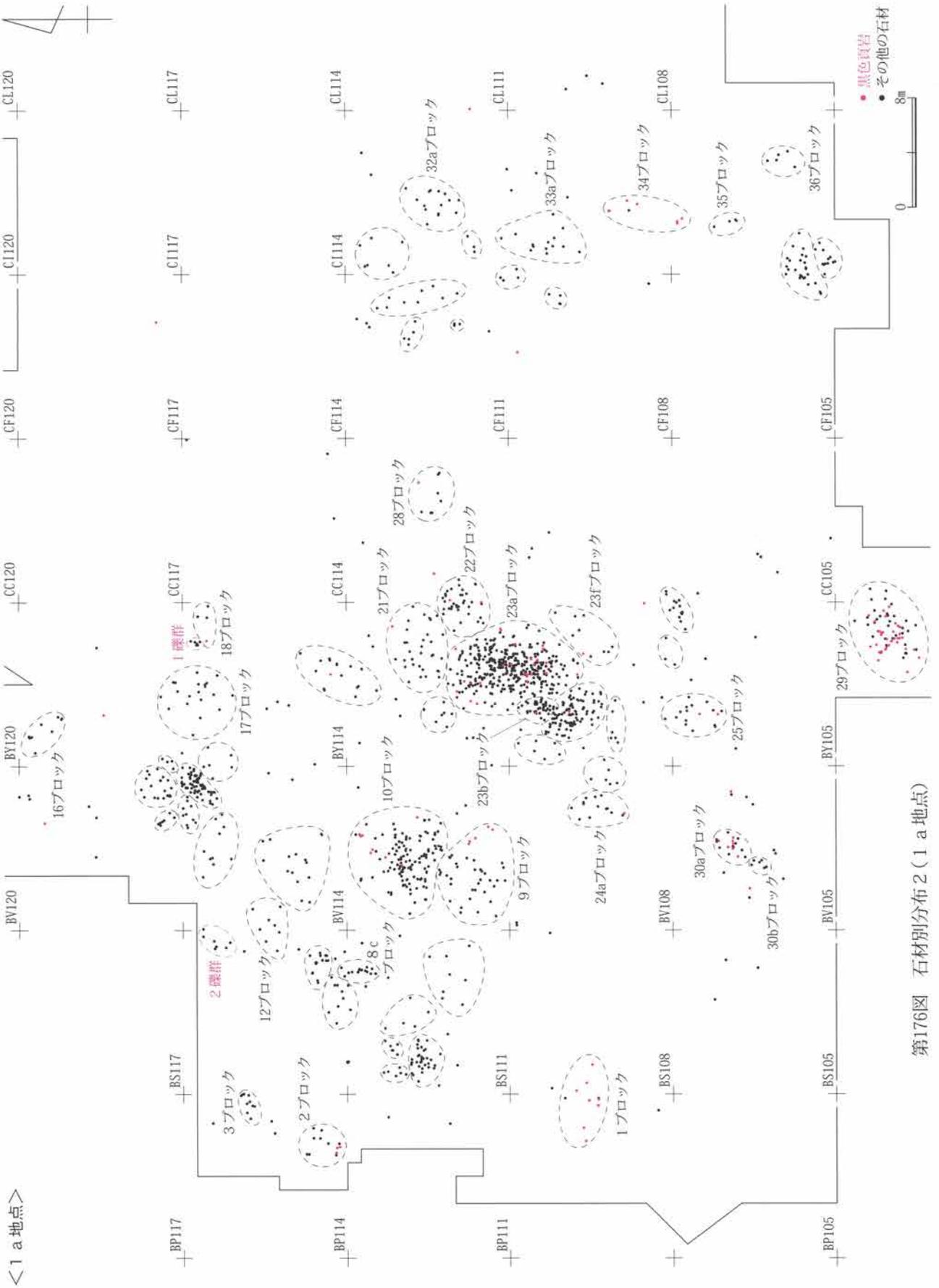
第174図 器種別石器の分布2 (1 a 地点)

II 調査の成果



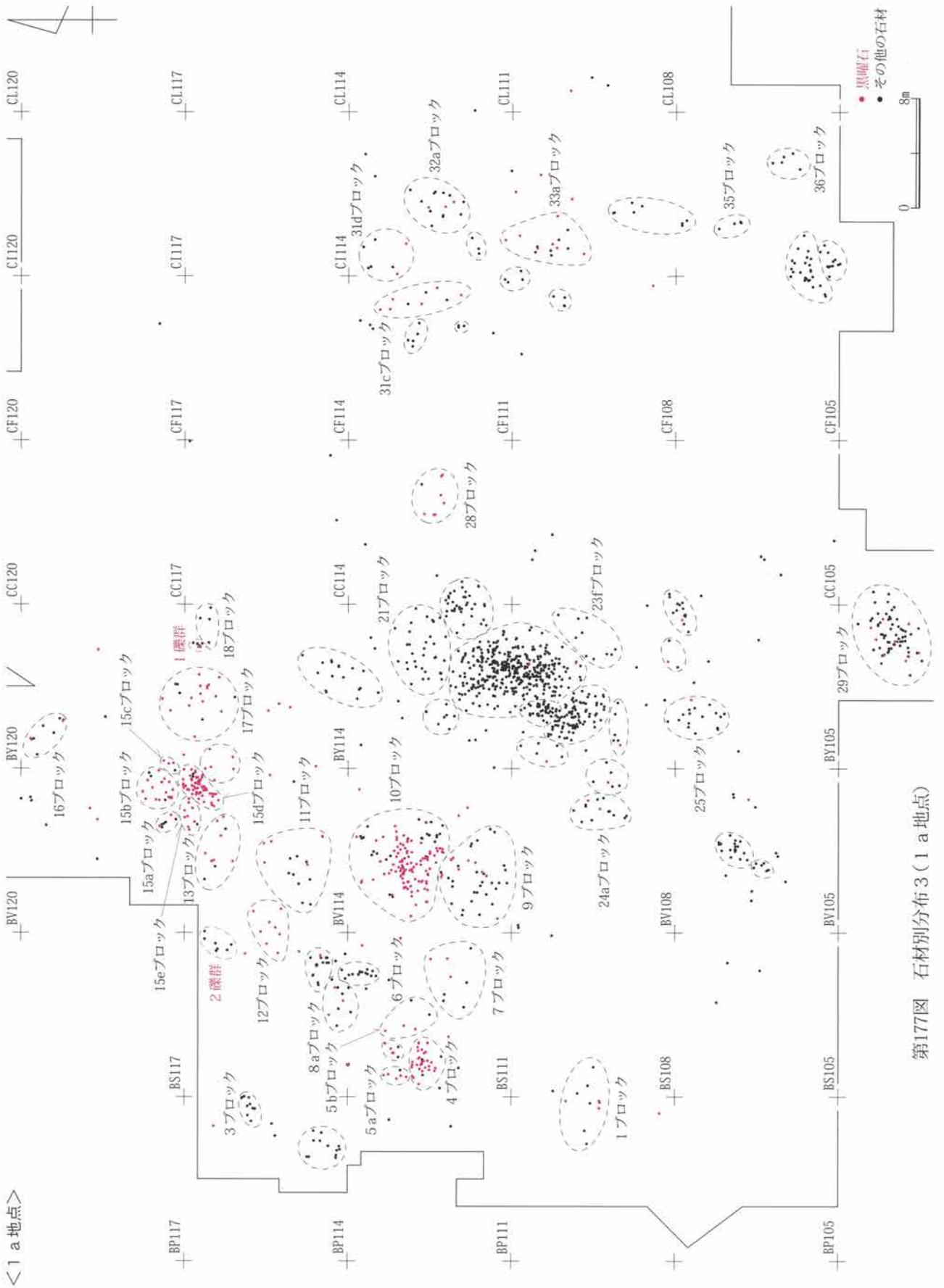
第175図 石材別分布1 (1 a地点)

< 1 a 地点 >



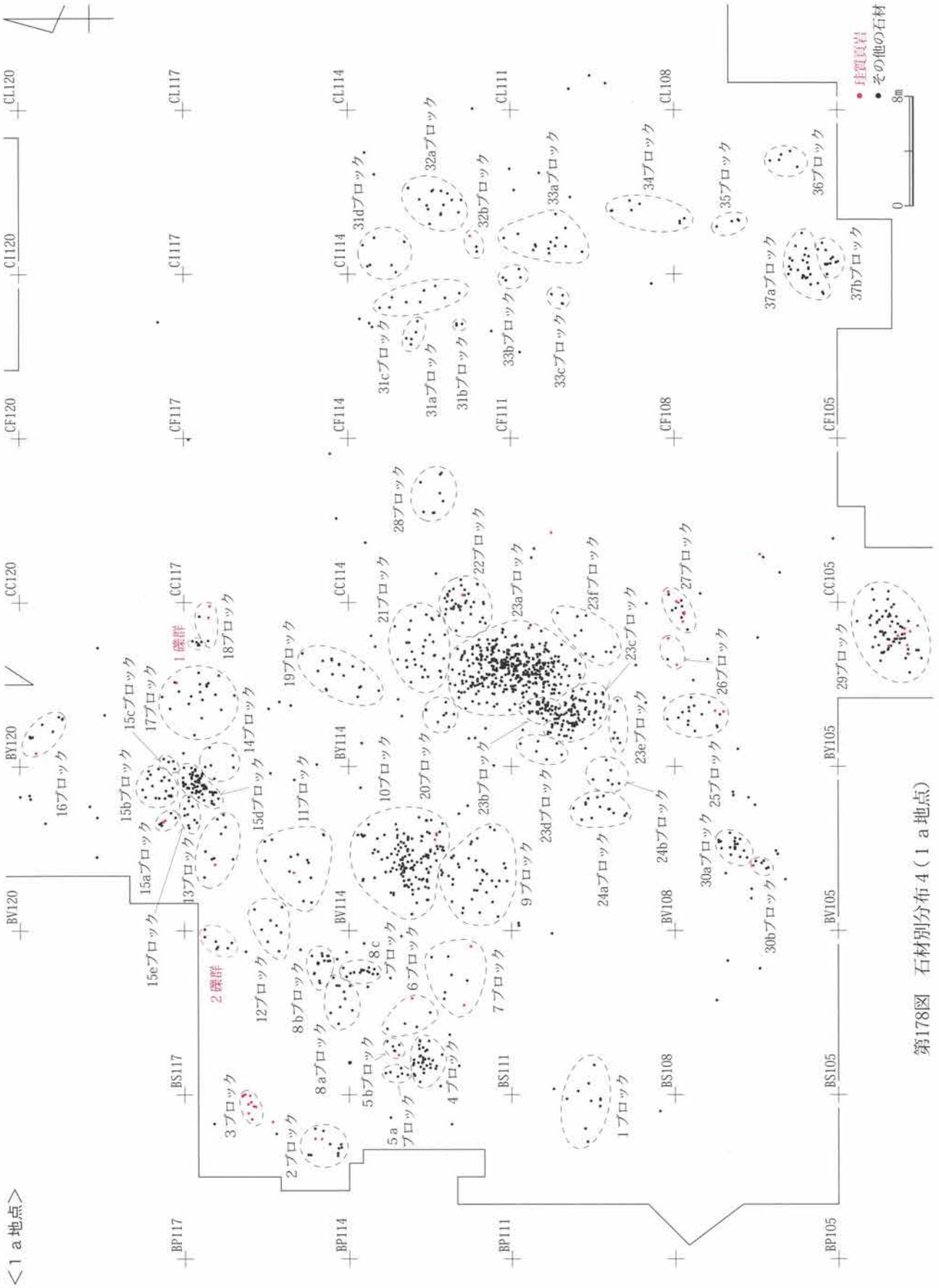
第176図 石材別分布2 (1 a地点)

II 調査の成果



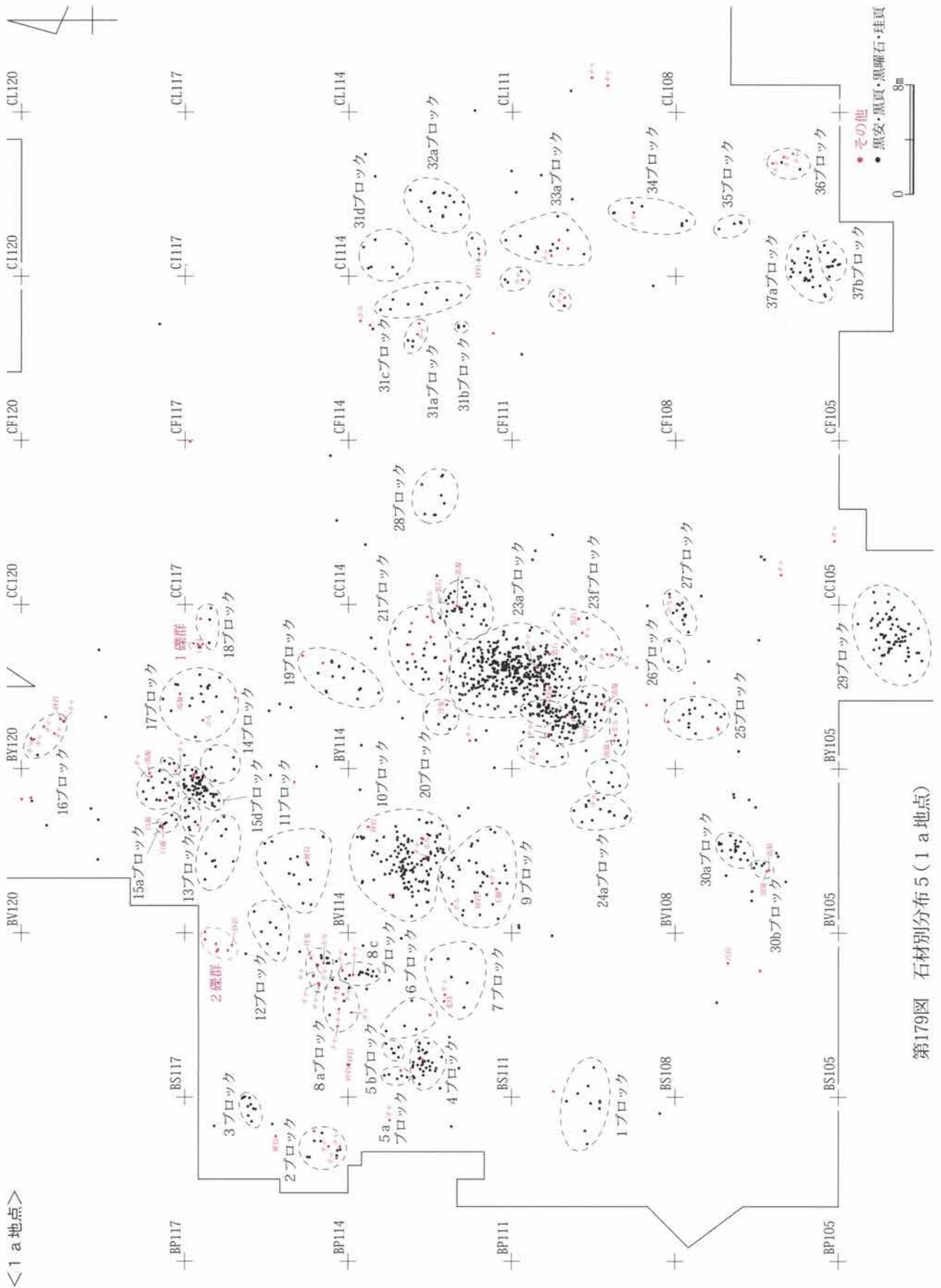
第177図 石材別分布3(1a地点)

< 1 a 地点 >

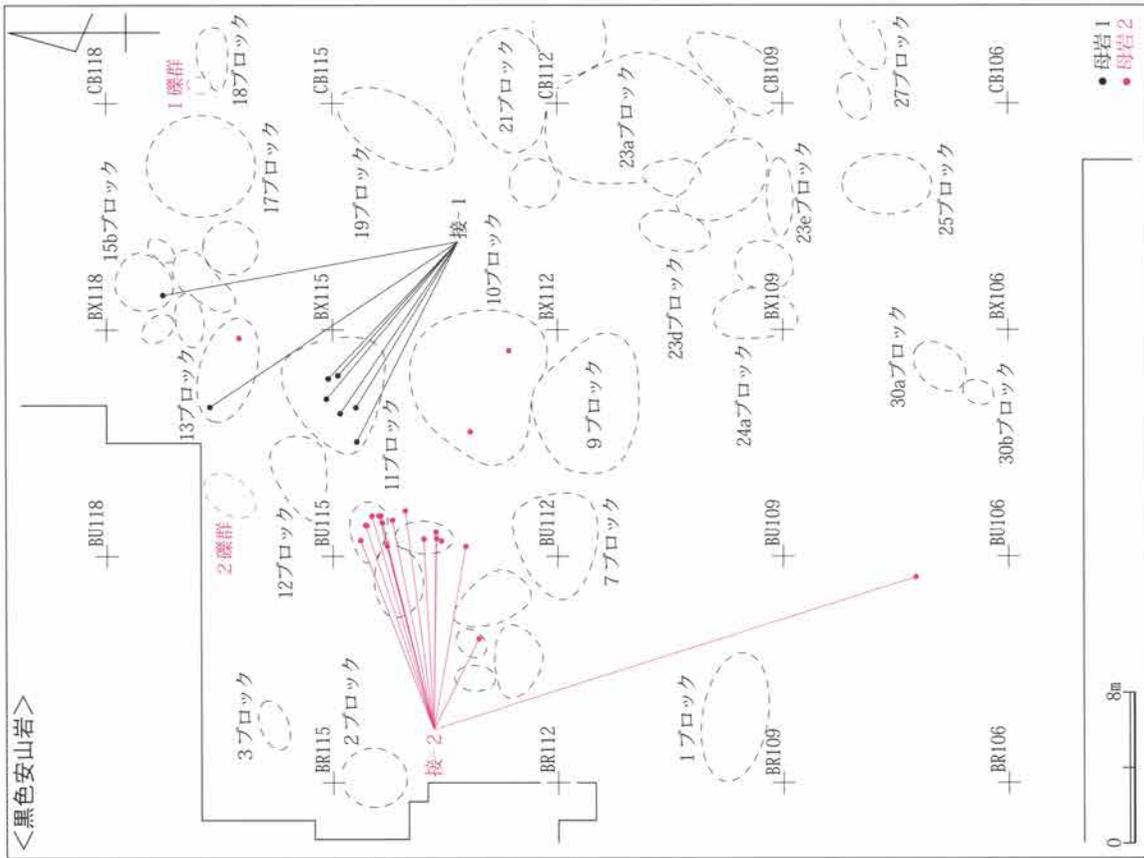
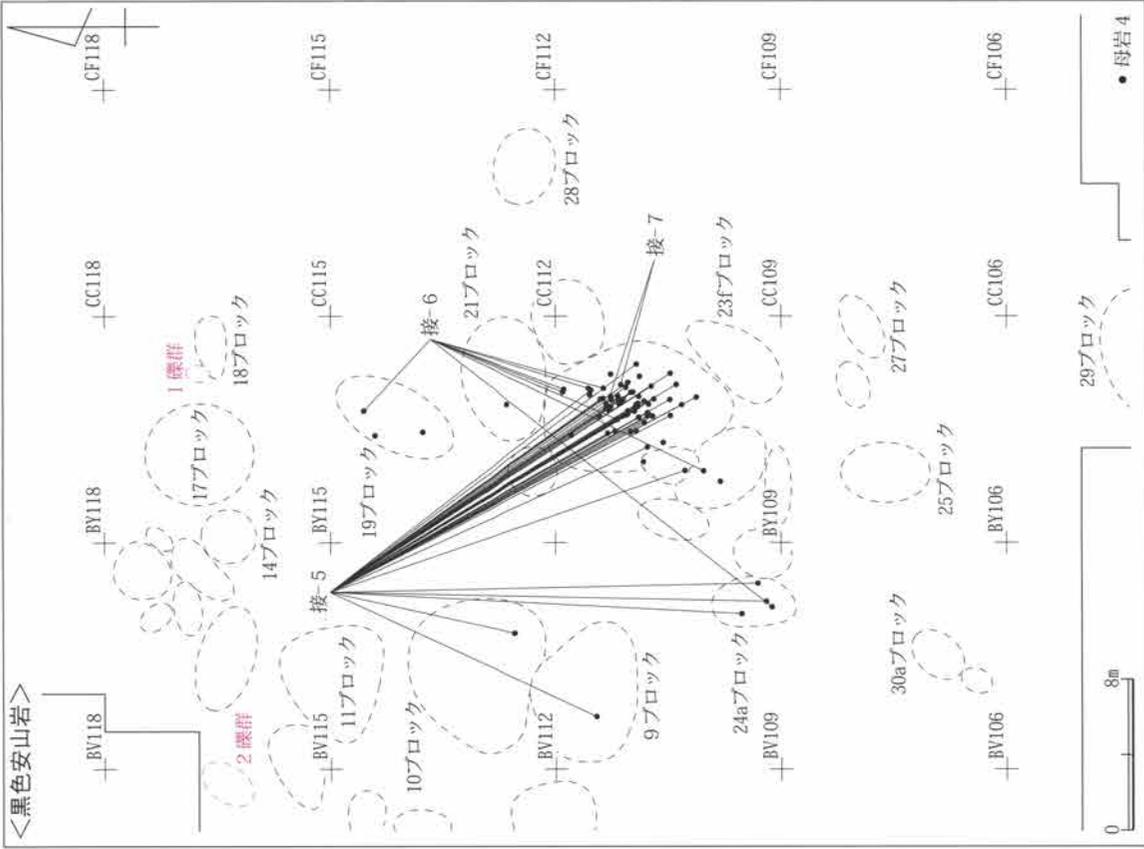


第178図 石材別分布4(1a地点)

II 調査の成果

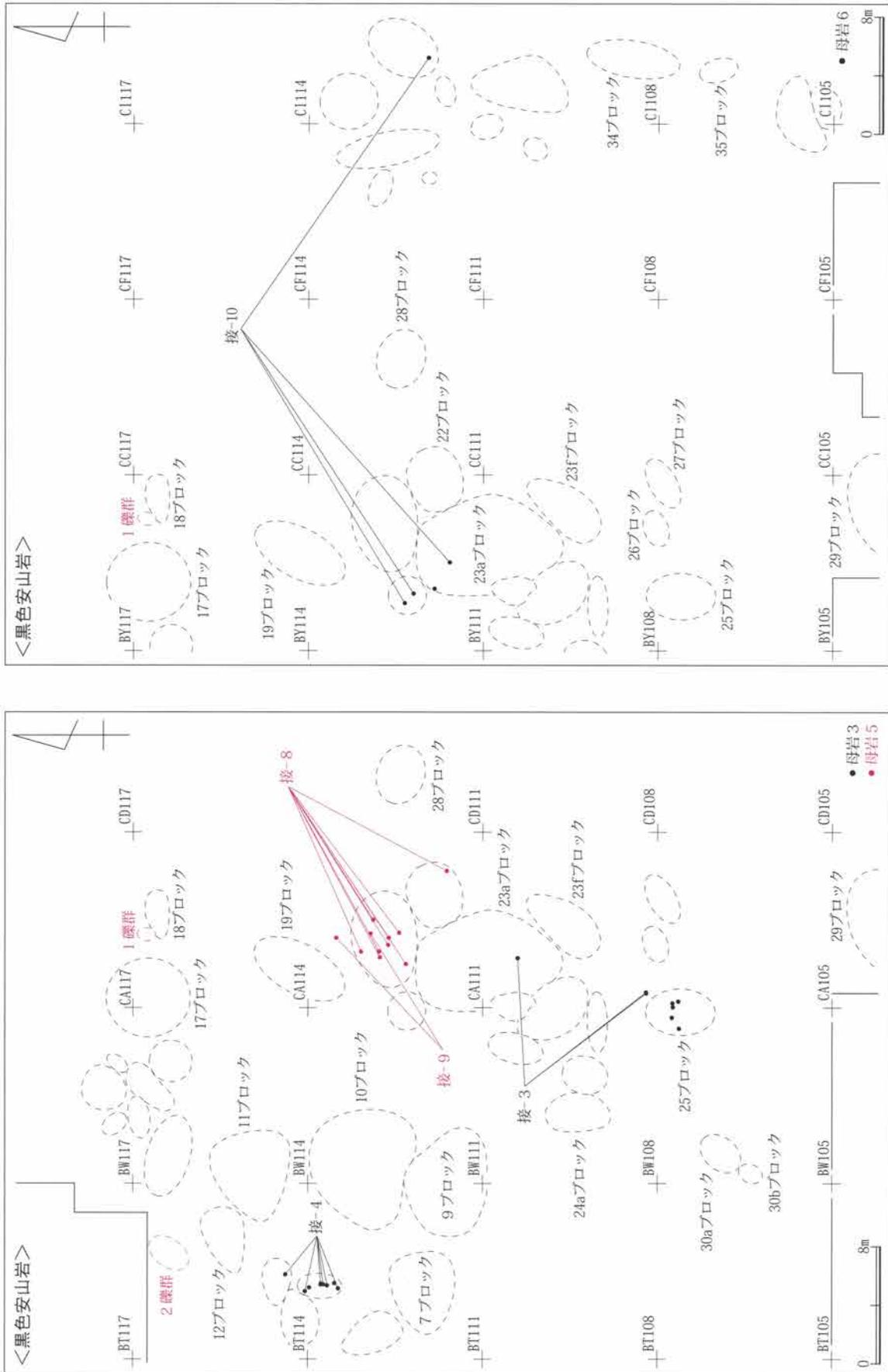


第179図 石材別分布5(1a地点)

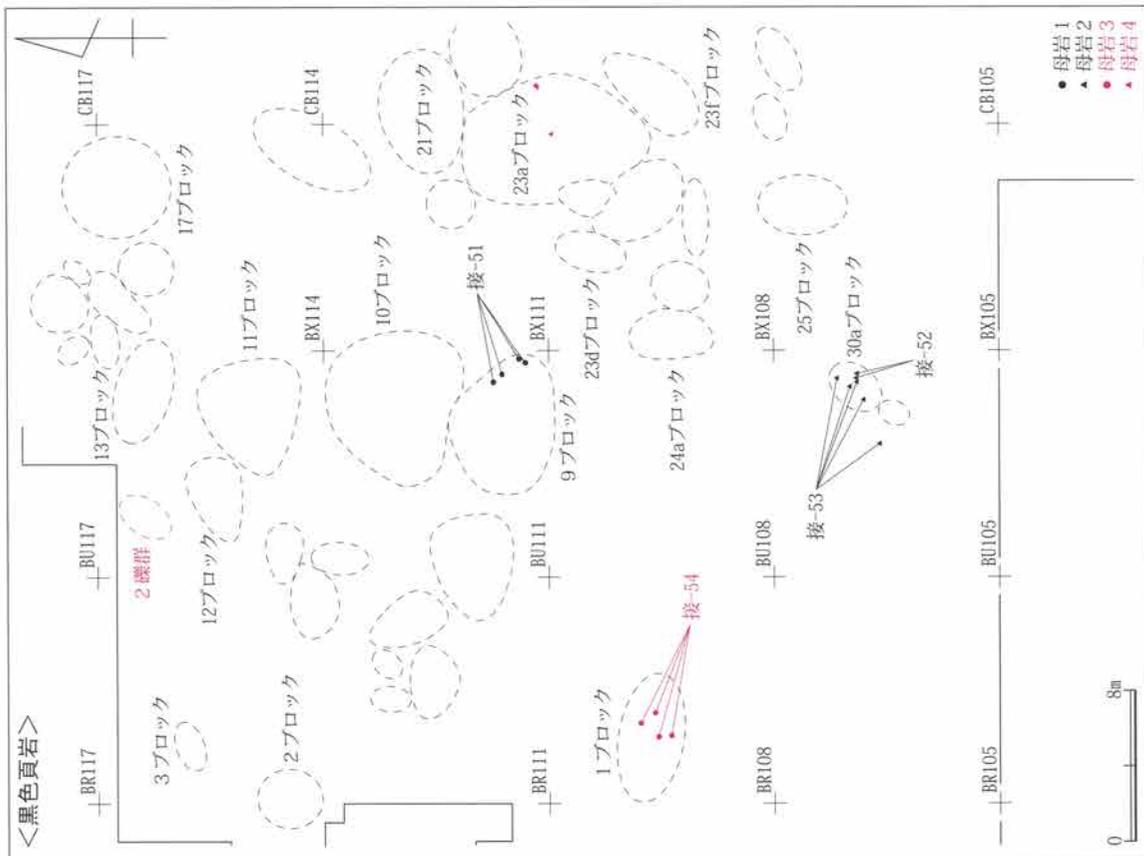
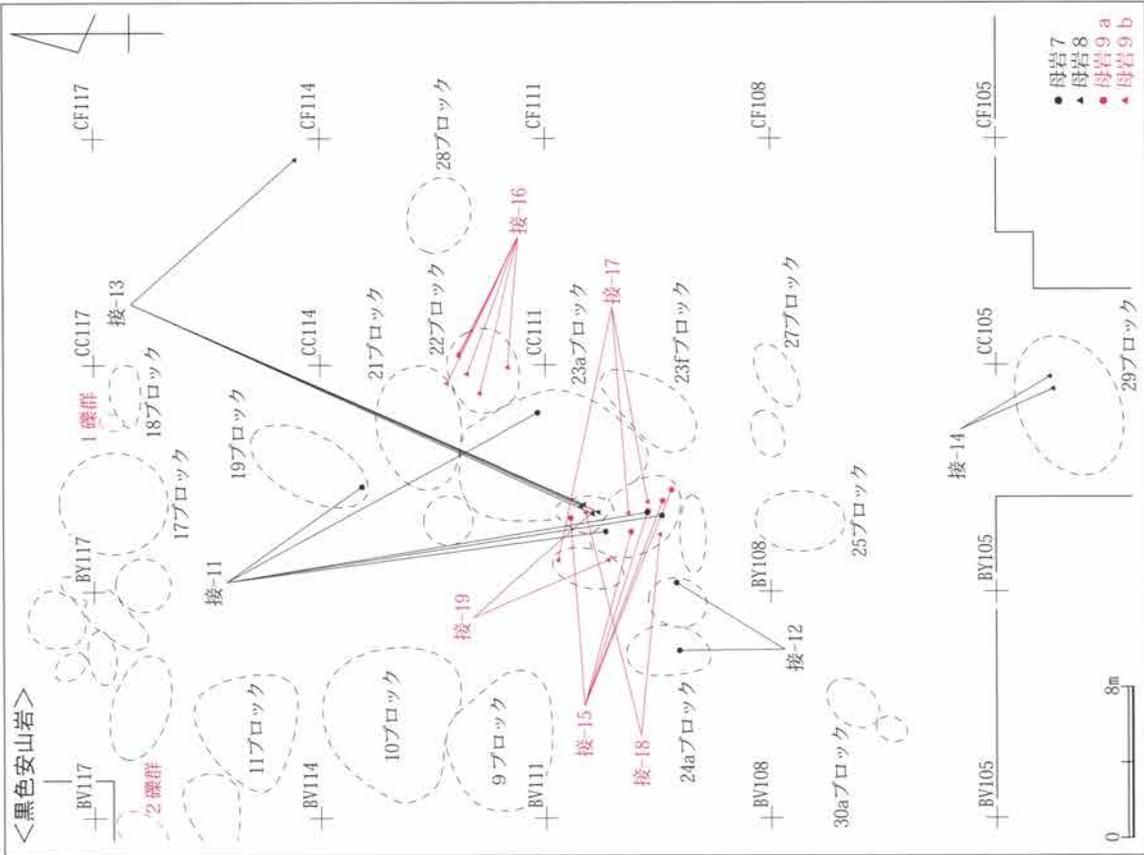


第180図 母岩別資料の分布1 (1 a 地点)

II 調査の成果



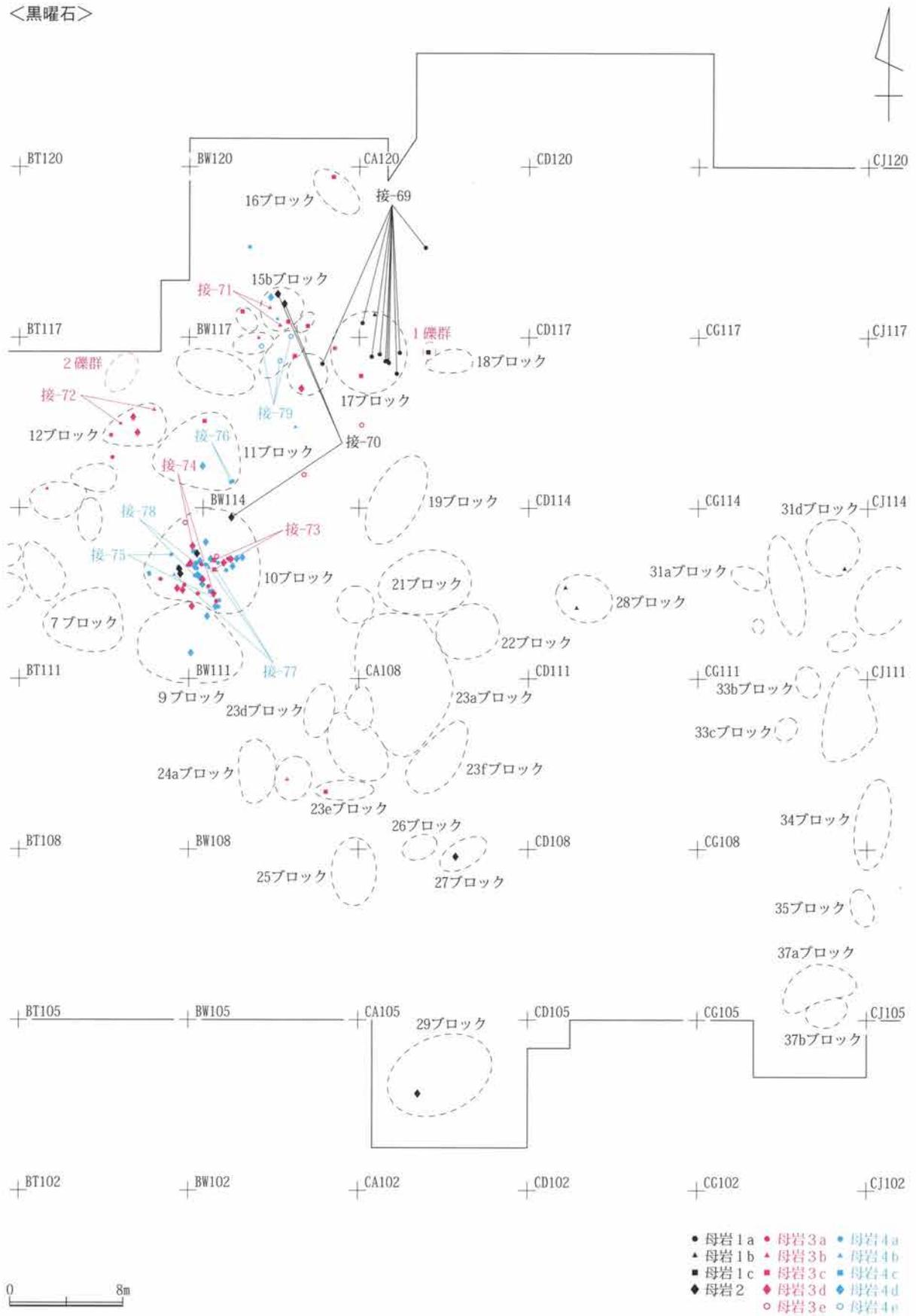
第181図 母岩別資料の分布2 (1a地点)



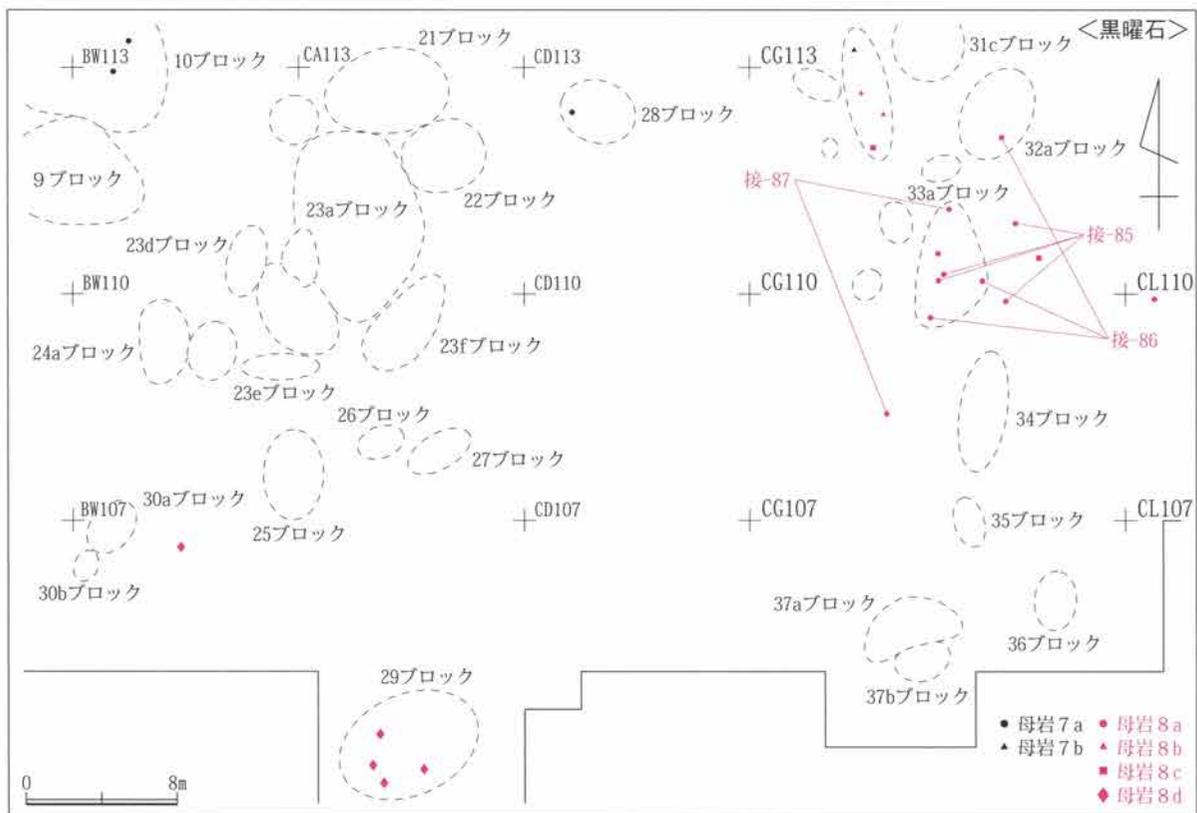
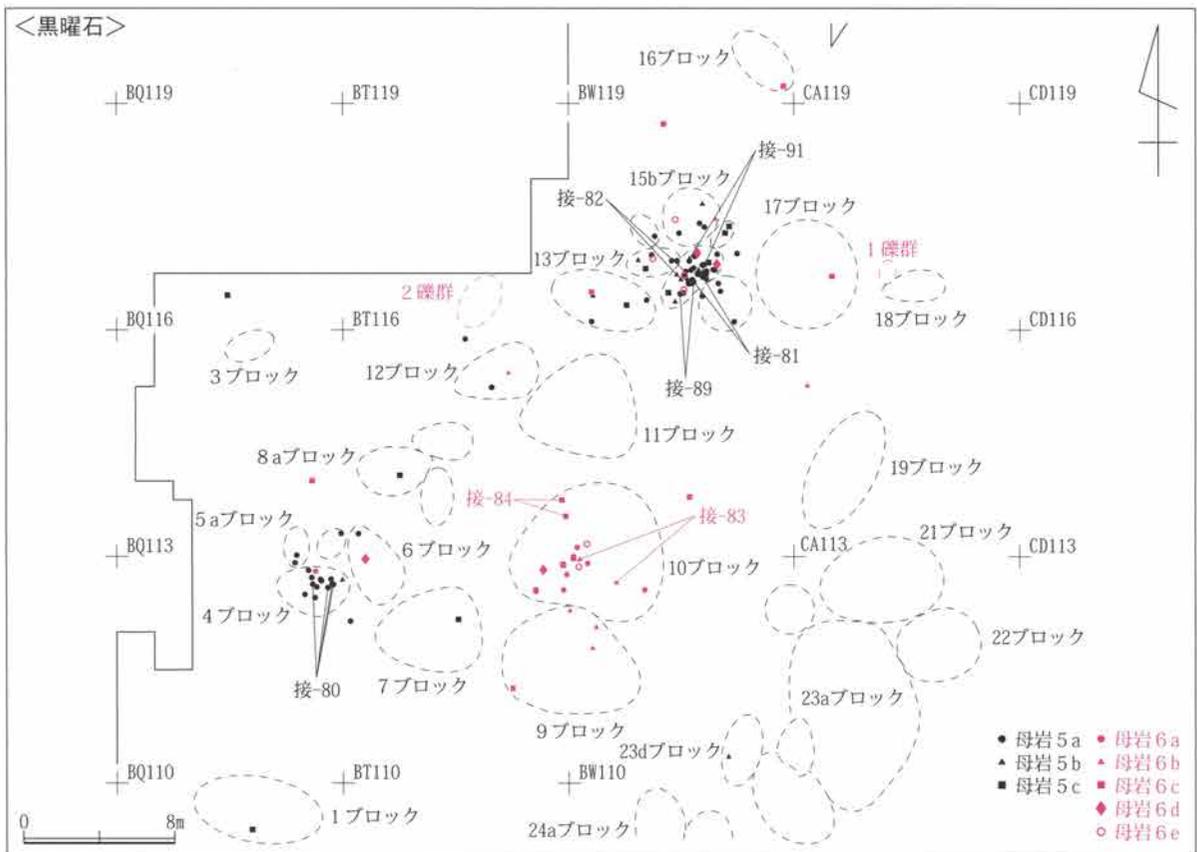
第182図 母岩別資料の分布3(1 a 地点)

II 調査の成果

<黒曜石>



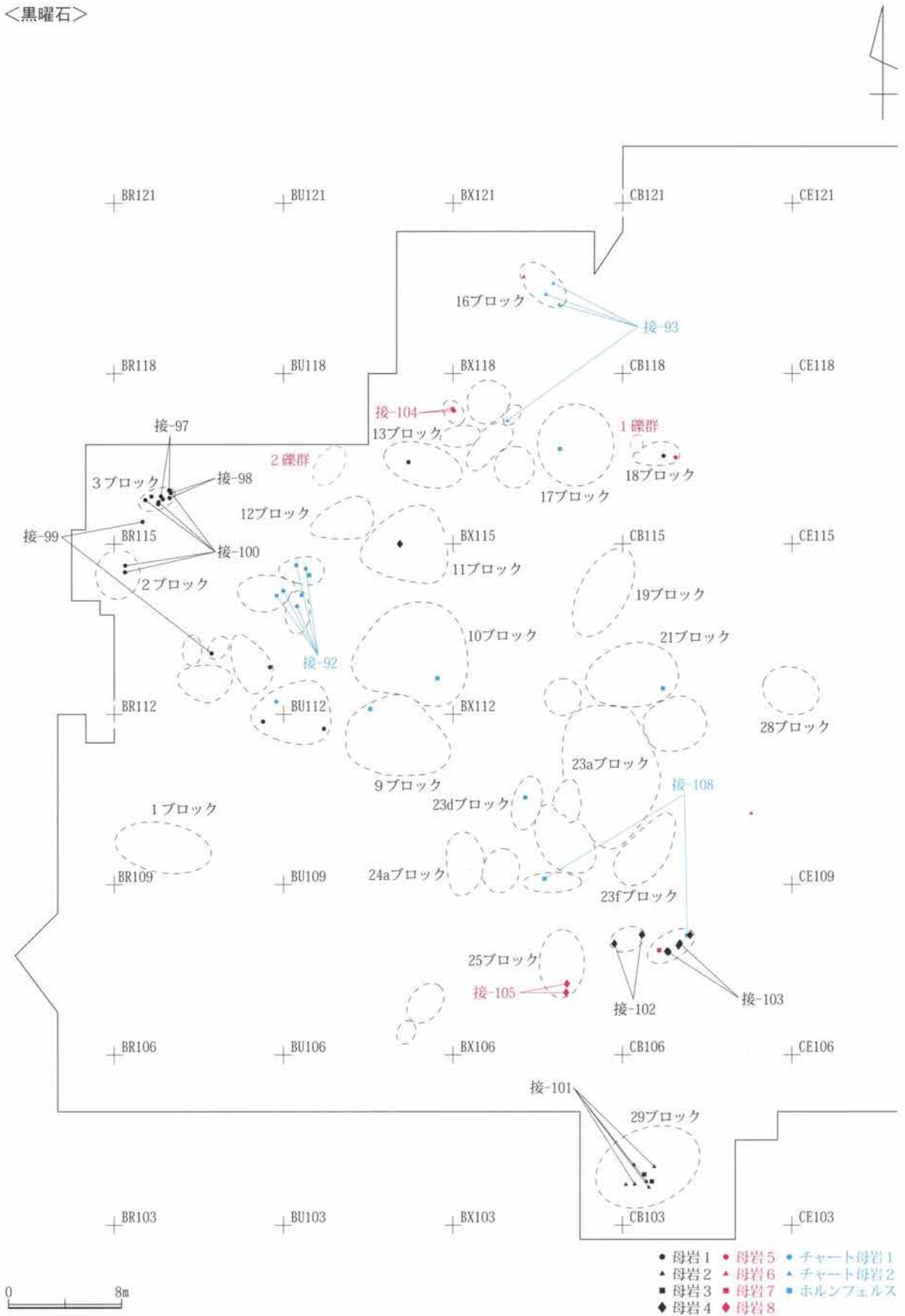
第183図 母岩別資料の分布 4 (1 a 地点)



第184図 母岩別資料の分布5(1a地点)

II 調査の成果

<黒曜石>



- 母岩 1 ● 母岩 5 ● チャート母岩 1
- ▲ 母岩 2 ▲ 母岩 6 ▲ チャート母岩 2
- 母岩 3 ■ 母岩 7 ■ ホルンフェルス
- ◆ 母岩 4 ◆ 母岩 8

第185図 母岩別資料の分布 6 (1 a 地点)

(2) 1 b 地点

概要

県道南側の丘陵鞍部に近い北側斜面に位置する。当該地点の石器分布については調査区北側に延びたというべきであろうが、全体的傾向は捉えることができたのではないかと考えている。

1 b 地点の北側には東西から浅い浸食谷が入り込んでおり、この浸食谷を避けるように石器は分布した。石器分布は直径40mほどの範囲に広がり、1567点の石器(礫・礫片36点を含む)が出土した。石器ブロック30を認定した(第107・186図を参照)。

石器はⅫ層に最も多く出土(Ⅷ層2点、Ⅸ層50点、Ⅹ層208点、Ⅺ層262点、Ⅻ層1044点、不明1点)した。

石器石材は黒色安山岩が最も多く出土、51.6%(807点)を占めている。以下には黒色頁岩が41.8%(657点)、珪質頁岩1.9%(29点)、チャート0.9%(15点)と続く。確認した石材は19種類であったが、石

器製作に関連する石器石材は10種類程度であったようである。

接合資料は147例957点を確認した。剥片剥離は原石を分割、90°打面転移して剥離するものが圧倒的多数を占めており、接合資料中の石刃剥離は確認することができなかった。

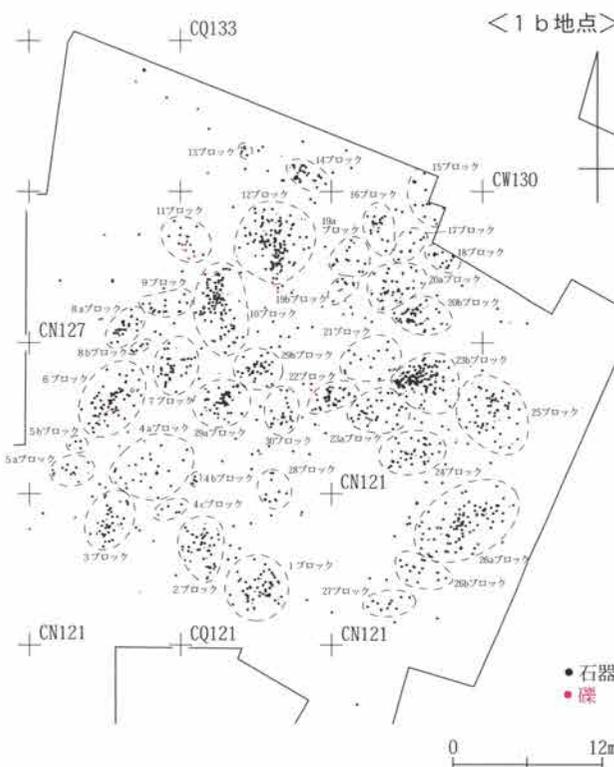
出土石器

総計1567点の石器が出土した。碎片を含む剥片類が1353点と多数を占めた。石器群の主たる石器は側縁加工した大小2種類のナイフ形石器と台形様石器で、これに若干の削器類が加わるものであった。

第38表

層位・ブロック別出土石器点数(Ⅳ文化層1 b 地点)

	8層	9層	10層	11層	12層	合計
1号ブロック	0	0	3	7	50	60
2号ブロック	0	0	2	10	41	53
3号ブロック	0	0	5	3	38	46
4 a号ブロック	0	0	3	2	21	26
4 b号ブロック	0	0	0	0	5	5
4 c号ブロック	0	0	1	1	4	6
5 a号ブロック	0	0	0	0	14	14
5 b号ブロック	0	0	2	1	1	4
6号ブロック	0	3	10	8	52	73
7号ブロック	0	1	1	2	32	36
8 a号ブロック	0	0	3	5	19	27
8 b号ブロック	0	1	0	0	5	6
9号ブロック	0	1	1	4	12	18
10号ブロック	0	4	17	13	71	105
11号ブロック	0	0	1	0	17	18
12号ブロック	0	1	25	28	85	139
13号ブロック	0	0	0	0	7	7
14号ブロック	0	0	7	6	24	37
15号ブロック	0	1	3	5	4	13
16号ブロック	0	0	1	1	19	21
17号ブロック	0	1	1	1	7	10
18号ブロック	0	1	2	2	9	14
19 a号ブロック	0	0	3	1	10	14
19 b号ブロック	0	0	0	2	8	10
20 a号ブロック	0	1	5	9	26	41
20 b号ブロック	0	4	6	9	30	49
21号ブロック	0	2	3	6	6	17
22号ブロック	0	0	2	3	32	37
23 a号ブロック	0	1	11	9	16	37
23 b号ブロック	2	9	23	31	80	145
24号ブロック	0	2	5	9	26	42
25号ブロック	0	3	4	7	43	57
26 a号ブロック	0	3	12	19	61	95
26 b号ブロック	0	0	5	3	11	19
27号ブロック	0	0	2	4	6	12
28号ブロック	0	0	0	3	8	11
29 a号ブロック	0	1	5	6	37	49
29 b号ブロック	0	0	5	2	26	33
30号ブロック	0	0	5	11	7	23
ブロック外	0	10	24	29	74	137
合計	2	50	208	262	1044	1567



第186図 石器と礫の分布(第IV文化層1 b 地点)

II 調査の成果

第39表 器種・石材構成 (IV文化-1 b 地点)

	ナイフ	台形様	削器	加工痕	使用痕	敲石	石核	石刃	剥片	碎片	礫	礫片	不明	合計
黒安	2	1	0	14	0	0	54	1	641	95	0	0	0	807
黒頁	4	0	0	24	0	6	51	5	533	33	0	0	0	657
黒曜石	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3
硬頁	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
褐碧	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
赤碧玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
チャート	0	0	0	1	0	0	0	0	8	2	1	3	0	15
珪頁	0	0	1	1	1	0	1	1	24	0	0	0	0	29
ホルン	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	3
輝緑岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
玉随	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	4
黒片	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
砂岩	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	4
細輝安	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
変安	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3
粗安	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	9	18	0	28
変珪岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
変輝緑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
変玄	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
緑片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計	7	1	1	41	1	13	106	7	1220	133	11	25	1	1567

ナイフ形石器 (第187図1~7、PL68)

7点が出土している。概して、小形の横長剥片を用いるものが多く、石刃ナイフの占める割合は低い。

第187図1は、幅広剥片を縦位に用い、両側縁を blunting したものの。石器の上下両端を欠損しており、刃部の作出位置・石器基部の形状は不明。4 a ブロック出土。黒色頁岩。2は、小形の幅広剥片を縦位に用い、裏面側の両側縁を加工したもの。裏面側・左側縁の調整加工は blunting 的であるのに対して、右側縁のそれは浅く微細である。石器先端部を欠損する。29 a ブロック出土。黒色頁岩。3は、小形の幅広剥片を縦位に用い、両側縁を blunting したものの。石器先端に未加工の剥片端部を取り込んで石器を作出している。18号ブロック出土。黒色安山岩。4は、小形の幅広剥片を縦位に用い、右側縁に blunting 加工したもの。左側縁は石核底面を取り込んだ剥離面となっており、機能的に blunting に変わるものと評価することができる。ブロック外 (CU-122 G) の出土。黒曜石。和田峠-1。5は、幅色剥片を用いたもの。やや荒い調整加工を基部側の両側縁に施す。26 a ブロック出土。黒色頁岩。6は、幅広剥片を用い右側縁に blunting 加工したもの。石器基部・左側縁は剥離時の偶発的剥離により、右側縁は剥片縁辺を折断することにより作出され、その断面

形状は台形状となっている。ブロック外 (CP-132 G) 出土。黒色安山岩。7は、石刃を用いたもの。調整加工は左側縁側の先端と基部側の両側縁に見られ、左側縁と右側縁の剥離は錯向的となっている。石器基部は素材を截ち切るような剥離によりノッチ状に作り出され、これに続く右側縁中央の剥離は、浅い平坦剥離になっている。石器先端部は調査時に破損している。29 a ブロック出土。黒色頁岩。

台形様石器 (第187図8、PL68)

1点のみ出土している。8は、小形の幅広剥片を縦位に用いたもの。右側縁を折断により、左側縁を平坦剥離により作出している。左側縁・背面側の剥離は典型的な平坦剥離であるが、裏面側は中央より下半のみ見られ、ノッチ状に加工することによって石器の基部を作出。6号ブロック出土。黒色安山岩。

削器 (第188図1、PL68)

第188図1は、幅広剥片を用いたもの。左側縁を丁寧連続剥離しており、非常に整った刃部を作出している。左側縁から石器端部は「刃こぼれ」が著しい。左側縁の刃部角は厚く「搔器的」であるが、刃部の作出が雑であり、ここでは削器と捉えた。10号ブロック出土。珪質頁岩。

加工痕ある剥片 (第188~191図1・2、PL68・69)

15点 (41点が出土、7例15点は接合図を参照) を

図示した。

第188図2は、節理面で剥れた小形剥片を用いたもの。石器端部の表裏両面に微細剥離が連続する。これに対向する小剥離痕が石器の上半部にもあり、楔形石器とも認定が可能だが、小剥離痕が上半部・裏面側のみに偏っており、ここでは便宜的に加工痕ある剥片と捉えた。右側縁には裏面側から粗い加工を施す。ブロック外(CS-125G)出土。チャート-1。3は、背面側に礫面を大きく残す幅広剥片を用いたもの。粗い調整加工を剥片端部に施す。ブロック外(CV-125G)出土。黄褐色を呈する在地系の珪質頁岩。4は、厚さ2cmを測る幅広剥片を用いたもの。加工部位は素材となった剥片の打面部にある。加工初期に剥離を放棄しており、製作を意図した石器器種は明らかでない。ブロック外(CO-127G)出土。黒色頁岩。5は、背面側に礫面を残す幅広剥片を用いる。素材となった剥片の打面を折り取り、石器素材としている。剥片端部に調整加工を施す。右側縁、及び、左側縁を欠損する。石器石材は変質安山岩で、周辺域には同種石材が見られないことから、使用時の破損か、刃部再生時の破損と理解することができよう。20bブロック出土。6は、小形剥片を用いたもの。微細な加工を右側縁に施す。6号ブロック出土。黒色頁岩。

第189図1は、器体中央で破損した2点の石器の接合資料。断面三角形を呈する大形剥片の端部に裏面側から搔器の刃部作出法に似た剥離を連続的に施す。最終的な刃部形状は搔器のそれと異なり、粗い。刃部の作出が未完成であることから、石器の欠損は刃部作出段階であるといえることができるだろう。破損した石器の左側縁は微細に刃こぼれしている。接-242。6号ブロック出土。黒色頁岩。2は、礫面を残す幅広剥片を用いる。裏面側右側縁に微細な加工を施す。加工意図については明確でない。接-230。12号ブロック出土。黒色頁岩。3は、小形剥片の剥片端部に一撃を加えたもの。背面側の左側縁には、火バネした痕跡が残る。20bブロック出土。黒色頁岩。

第190図1は、小形剥片を用いたもの。剥片端部に刃部を作出しようとした加工意図は明らかであるが、調整加工は粗く、剥離の初期に剥片が破損した可能性が高い。破損部位は素材剥片の打面部に一致しており、加工時の衝撃により破損したのではないだろうか。2号ブロック出土。黒色安山岩-5。2は、小形の板状石核を石器素材に用いたもの。調整加工は粗い。剥片剥離の際の打点部を選択していることから、この粗い剥離は剥離時に生じた可能性も否定できない。12号ブロック出土。黒色安山岩。3は、大形の幅広剥片を用いたもの。調整加工を裏面側・左側縁に施す。26aブロック。黒色頁岩。4は、3に似た四角形状を呈する幅広剥片を用いたものであり、微細な調整加工を背面側上端に施している。剥片端部は微細に刃こぼれしている。3号ブロック出土。黒色頁岩。

第191図1は、背面に礫面を大きく残す幅広剥片を用いたもの。この剥片の右側縁側に調整加工を施し、石器刃部を作出している。剥片は横位折断しているが、この折断と調整加工の前後関係は明確には判断できなかった。ブロック外(CT-127G)出土。黒色頁岩。2は、幅広の三角形剥片を用いたもの。剥片先端から背面側・左側縁に浅く微細な小剥離痕が連続する。この剥離痕は表裏両面に見られ、背面側に比べて裏面側の剥離は深く入り込んでいる。22号ブロック出土。黒色頁岩。

使用痕ある剥片(第191図3、PL69)

1点が出土した。第191図3は、幅広の三角形剥片を用いたもの。やや突出した左側縁側の中央に使用痕が残る。6号ブロック出土。珪質頁岩。

石刃・剥片(第192~205図、PL69~74)

出土した剥片類1227点の中から、比較的形狀の整う剥片(石刃7点を含む)を主体に73点を図示した。

第192図1~5は、石刃を一括した。5点とも平坦な打面より剥離、背面側・剥離面の剥離軸と裏面側の剥離軸が一致している。形態的には先端の尖るもの(2・4)と、先端が広がるもの(1・3・5)の両者が存在する。長さ6~8cm測る。3はブロッ

II 調査の成果

ク外 (CW-123G) の出土、1・2・4・5は26aブロック出土。3は黒色安山岩、残る4点は黒色頁岩。

第193図1～11は、小型の縦長剥片を一括した。長さ5cm前後であり、やや小型石刃の部類に属す。背面側の剥離面と剥離軸は概ね一致している。1・8が黒色安山岩、2がチャート、3・6が玉ずい、7が黒曜石、10が珪質頁岩、9・11が黒色頁岩。

第194～198図には、中型の縦長剥片を一括した。長さ6～8cmを測る。背面側の剥離面と剥離軸が一致する状況は小型縦長剥片のそれと変わらない。環状分布した石器群の東側(26aブロックに8点が出土)に集中出土してほか、西側の4a・6・8a・29aブロック、北側の17・19a・20bブロックに各1点が分布した。石器石材は黒曜石1点(第194図6)を除いて在地石材で、その内訳は黒色頁岩12点、黒色安山岩8点となっている。

第199図には小型の幅広剥片を、第197図4・5、第198～205図には幅広剥片を一括した。背面側の剥離面には90°異なる剥離面構成が見られること、背面側の剥離面と剥離軸も90°直交するものが多く見られることから、これらが頻繁な打面転移を伴い剥離されたことをよく示している。石器石材は在地の黒色頁岩や黒色安山岩を多用している。

石核 (第206～209図、PL74・75)

106点が出土している。ここでは、接合関係の確認ができなかった石核17点中11点を図示した。

石核は、大形剥片を石核素材に用いたもの(第207図ほか)を主体に、90°打面転移を行う石核(第206図1、第208図1)が出土している。

第206図1は、石核正面左側に平坦な分割面を有する石核。石核正面を作業面として、上下両端から小形剥片を剥離している。裏面側に大きく礫面を残す。29bブロック出土。黒色頁岩。2は、分割礫を用いた石核。石核の正面左側に分割面が部分的に残る。石核上面で剥離を行った後に、石核正面で幅広剥片を3枚ほど剥離している。礫面側に礫面が残る。14号ブロック出土。黒色頁岩。3は、左右両側縁に礫

面を残す大形剥片を石核素材とするもので、裏面側の上端で小形剥片1枚を剥離している。7号ブロック出土。黒色頁岩。

第207図1は、裏面に礫面を大きく残す大形剥片を石核素材とするもの。剥片剥離は石核正面・左右両側面で行われ、小形の幅広剥片を剥離する。ブロック外(CU-125G)出土。黒色頁岩。2は、厚さ5cmを測る分割礫を用いたもの。石核正面で小形剥片2枚を剥離している。5aブロック出土。黒色頁岩。3は、裏面側に礫面を残す大形剥片を石核に用いる。石核上端で数枚の小形剥片を剥離する。15号ブロック出土。黒色頁岩。

第208図1は、表裏両面で小形剥片を剥離した石核。求心的剥離により剥離作業を進めており、石核消費は進んでいる。石核形状は不明だが、石核底面には礫面を残しており、拳大程度 of 原石を想定することができよう。ブロック外(CQ-131G)の出土。黒色安山岩。2は、大形の幅広剥片を石核に用いたもの。石核正面の平坦面を剥片端部に取り込み小形剥片を剥離している。石核中央付近で破損している。石核上端のエッジには微細な剥離痕があり、削器的機能を目指した石器の転用を意図した可能性も否定できない。19bブロック出土。黒色安山岩。3は、完形の河床礫を石核素材とする。石核正面上面の剥離のみ目的的で、左右の剥離は規模も小さく、剥離の意図は明らかではない。原石を河床で採集、試し割りをして、遺跡に持ち込んだ可能性が強い。20bブロック出土。黒色安山岩。

第209図1は、大形剥片を石核素材としたもの。剥片剥離は大形剥片の裏面側左側縁で行われ、小形剥片を剥離している。28号ブロック出土。黒色頁岩。2は、裏面側に礫面を大きく残す大形剥片を石核としたもの。礫の分割面が石核正面右側に部分的に残っている。剥片剥離は石核の上下両端で行われ、小形の幅広剥片を剥離している。18号ブロック出土。黒色安山岩。3は、裏面側に礫面を残す大形剥片を石核に用いている。剥片剥離は石核の上下両端で行われ、小形の幅広剥片を剥離する。5aブロック出

土。黒色頁岩。

礫 (第210図1、PL76)

礫・礫片は36点が出土している。図示した1点(第210図1)は、長さ4.8cm・幅4.6cm・厚さ2.6cm・重さ72gを測る扁平礫である。表面側下半部・左側面は河床礫特有の表皮で覆われているが、それ以外の表皮は新鮮な剝離面(分割面?)が流水で摩滅したようになっている。また、裏面側は全体的に白濁したように見えるほか、部分的に玉髄質の石英が貫入する。褐色・赤褐色・臘脂の縞模様が特徴的で、その存在感を主張している。

緻密・珪化の進んだ石材観から見れば、最良の石材ということが出来るが、石核素材としては小ぶりで、通常みられる「試し割り」の痕跡がない。29bブロック出土。赤碧玉。

敲石 (第210図2~213図、PL76)

13点(接合資料1例3点を含む)が出土している。石材6種類からなる。礫重量は500~700g程度のもの7点、2000gを超えるもの3点となっており、敲石としては大型の部類に入る。

第210図2は、扁平な河床礫を用いたもの。礫の小口部・側縁に顕著な打撃痕が残る。右側縁の打痕は特に激しく、側縁は潰れる。黒色頁岩製で、石材は良質。石斧の素材に用いることも可能。546g。3号ブロック出土。黒色頁岩。

第211図は、3点からなる接合資料(接-253)。礫上端の小口部、及び、左側縁に打痕・衝撃剝離痕を有する。1は左側縁に接合する小片で、使用中に破損。2・3は接合状態で、剝離面を部分的に共有しており、この剝離面を打面に2を剝離している。3は、2を剝離したのち、その先端側の表裏両面を微細に剝離して、そのエッジを整えている。礫器的に石器を転用したのかもしれない。礫重量は1が1.31g、2が274.5g、3が470.6g、計746.4gを測る。3号ブロック出土。黒色頁岩。

第212図1は、敲石として手頃な掌サイズの河床礫を用いている。上下両端の礫の小口部分に打痕を有する。604g。10号ブロック出土。変質玄武岩。2は、

下半部を欠損する扁平礫を用いる。上端の小口部分、及び、下端の欠損部に打痕を残す。上端側の右側縁には大きな剝離痕があり、可能性として原石採集時の「試し割り」痕ということも想定しておきたい。595.7g。22号ブロック出土。黒色頁岩。3は、扁平・棒状礫を用いる。礫の小口部分、及び、側縁に顕著な打痕を有する。下半部を欠損する。633g。11号ブロック出土。砂岩。4は、断面三角形状を呈する棒状の河床礫を用いる。礫の小口部分に打痕が見える。1307g。26aブロック出土。変質安山岩。5は、棒状を呈する河床礫を用いる。礫の小口部分に打痕を有する。1097g。2号ブロック出土。変質安山岩。

第213図1は、礫の小口部分に打痕を有するもの。柱状礫を用いる。礫の下端には大小の剝離痕がある。前者は衝撃剝離痕であることがほぼ確実であるが、後者は剝片剝離を目的としたものである可能性が指摘できるだろう。813g。25号ブロック出土。珪化の進んだ黒色頁岩を用いる。2は、下半部を欠損した扁平礫を用いる。礫の上端部分に打痕を有す。698g。20aブロック出土。輝緑岩。3は、扁平・棒状を呈する河床礫を用いる。礫の小口部分、及び、側縁に打痕・衝撃剝離痕を有する。2019g。19aブロック出土。細粒輝石安山岩。4は、やや扁平な棒状礫を用いたもの。礫上端の小口部分に打痕を有する。2324g。8aブロック出土。変質安山岩。

接合資料

接合資料は、148例895点を確認した。原石を用いるもの、分割礫を用いるもの、大形剝片を用いるものなど、多様な接合資料が得られている。剝離法は90°打面転移を行い石核形状に即した剝片生産が行われたようである。実測図を省略した接合資料3例(接-212・208・237)については、分布状況等の重要性が判明したので解説(PL99・100)した。

接合資料-119 (第214~220図、PL77)

加工痕ある剝片1点・石核10点・剝片74点からなる。径2mm前後の斑晶を多量に含む河床礫を用いる。剝片剝離は、原石を上端の小口部分から分割したの

II 調査の成果

ち、打点を左右に振り大形剥片4枚を剥離、うち1枚を石核(2)とする。この後、90°打面転移を行い、大形剥片4枚を剥離、これを石核素材(A~D)として小形の幅広剥片を剥離する。現状で、接合資料は長さ16.2cm・幅10.8cm・厚さ11.2cmを測る。20b・23a・23b・25号ブロック出土。黒色安山岩—2。

(原石の分割)

⇒ ○○1→2 ⇒ 石核A→石核B ⇒ 21
⇒ 石核C→石核D

<石核A>

3→4→5→6 ⇒ 7→8→9→10 (石核が二分) ⇒ (11→○ ⇒ 12→13)・(14→15 ⇒ 16→17)

<石核B>

18→19→20

<石核C>

・22→23

・24→25→○・26→27 ⇒ (打面と作業面を反転)
28 ⇒ 29 ⇒ 30→31→32→33 ⇒ 34
→35→36

<石核D>

・37→○ ⇒ 38 ⇒ 39 ⇒ 40→41

・42→43 ⇒ 44 ⇒ 45→46→47→48 ⇒
49→50

・51→52→53・(54→55)

接合資料—120 (第221・222図、PL78)

石核1点・剥片31点・碎片2点からなる。やや偏平な河床礫を用いる。剥片剥離は上端の小口部分から開始され、打点を左右に振り剥片1~5を連続剥離、剥片1~5の作業面を打面として剥片6~9を剥離する。剥片10以後の剥離(剥片11~13・剥片14)は頻繁に打面と作業面を入れ替えて剥離を進めている。剥片15は対辺に打面を移動して剥離、90°打面転移して剥片16を剥離している。剥片17と剥片18以後の剥離の前後関係は不明だが、剥片18~25は剥片16の作業面を打面に連続剥離、小形剥片を剥離する。21号ブロックに1点(12)が、1号ブロックに31点、ブロック外に1点(10)が出土。黒色安山岩—3。

・1→2→3→4→5 ⇒ 6→7→8→9 ⇒
10 ⇒ 11→12→13 ⇒ 14 ⇒ 15 ⇒
16 17・18→19→20→21→22→23→24→25
⇒ 26 ⇒ 27→28 ⇒ 29→30

接合資料—111 (第223・224図、PL78)

剥片21点からなる。長さ20cm・幅12cm・厚さ10cmを測る河床礫を石核素材に用いる。原石左側の小口部分で90°打面転移を行い、大形剥片2枚を剥離する。剥片1・2は、この剥離面を打面に剥離したものであり、以後の剥離も90°打面転移を繰り返す。剥片7以後の剥離は原石右側の小口部分に剥離の主体を移している。10号ブロックから20点が、ブロック外から1点出土。黒色安山岩—1。

(原石の分割)

○ ⇒ ○ ⇒ 1→2→3 ⇒ 4a・4b
⇒ 5 ⇒ 6 ⇒ (7 ⇒ 8→9)→10

接合資料—141 (第225・226図、PL78)

石核1点・剥片12点からなる接合資料。径10cmを測る河床礫を分割して、石核素材に用いる。剥片剥離は石核の正面右側で開始、剥片1枚を剥離した後に、石核の上面で剥片1を剥離する。剥片2以後の剥離は基本的に石核正面で行われ、厚味の均質な幅広剥片を剥離する。石核12は厚い大形剥片を石核に転用したものであるが、その剥離順については明らかにすることができなかった。

(原石の分割)

1 ⇒ ○○2 ⇒ ○…… ⇒ 3 ⇒ (4→
5→○→6→7)・(8→○・9→10 ⇒ 11 ⇒
○○→12)

接合資料—144 (第226図、PL79)

石核1・剥片2からなる接合資料。石核正面で上面から幅広剥片1枚を剥離したのち、石核右側に打面を移し、小形剥片を剥離。剥片1は石核下面から剥離したものであり、上面で大きく打面再生的剥離を加え、剥片2を石核上面から剥離する。石核左側の剥離は鈍角的で、石核に衝撃痕として残ったものであろう。石核は1/4分割礫となった時点で廃棄されている。1・3は6号ブロック、2はブロック

外の出土。黒色安山岩。

○ ⇒ ○ ⇒ ○ → 1 ⇒ ○ ⇒ ○ → 2 →
○○

接合資料—123 (第227・228図、PL79)

加工痕ある剥片1、剥片17点からなる接合資料。礫面を部分的に残す分割礫を石核素材とする。90°打面転移して幅広剥片を剥離、遺跡内で石核消費を終えている。2ブロックを主体に出土するほか、4bブロックに加工痕ある剥片1、剥片1が出土した。黒色安山岩—5。

(原石の分割)

○○ → 1 ⇒ 2 ⇒ 3 → 4 ⇒ 5 → 6 →
7 ⇒ (作業面のみ90°転移) 8 → 9 ⇒ 10

接合資料—156 (第228図、PL79)

剥片3点、石核1点からなる接合資料。剥離段階で横位破損した大形の剥片を石核素材に用いる。礫面から小形剥片(剥片1)を剥離したのちに、90°打面転移して石核の小口部分で剥片2を剥離する。二分した残る折断剥片(剥片4)は、石核として用いられることなく廃棄。3号ブロックから3点が、ブロック外から1点出土。黒色安山岩。

1 → ○ ⇒ ○ → 2 → 3・4

接合資料—124 (第229図、PL79)

裏面側に礫面を残す1/4分割礫を石核素材に用いる。剥片剥離は石核上面の平坦剥離面より行われ、幅広剥片1~3を剥離する。剥片4以下の剥離は打面を下端に移動・剥離する。このとき石核は大きく三分したようであり、石核9を除いてそのまま廃棄されてしまったようである。2号ブロックから7点、ブロック外から3点出土。黒色安山岩—5。

(原石の分割)

1 → 2・3 ⇒ (4・5)・(6・7)・(8 → 9
→ 10)

接合資料—136 (第230図、PL80)

裏面側に礫面を残す1/4分割礫を石核素材に用いる。90°打面転移を行い、剥片剥離を進める典型的な接合資料で、小形・幅広剥片を剥離している。まず、剥片剥離は上面の平坦面で剥片1・2を剥離す

ることからはじまる。剥片3~6は打面と作業面を交互に入れ換え剥離、剥片7は石核下端から、剥片8は90°打面転移を行い左側側面から剥離する。12号ブロック出土。黒色安山岩—11。

(原石の分割)

1 → ○ → 2 ⇒ ○ → 3 → ○ → 4 ⇒ 5 ⇒ ○
○ → 6 ⇒ 7 → 8

接合資料—139 (第231図、PL80)

石核1点、剥片7点からなる接合資料。上面、及び、正面に分割面を有する1/4分割礫を石核素材に用いる。上端の分割面より剥離を開始している。正面左側で小形剥片(剥片1ほか)を剥離したのち、徐々に打面を左側面に移動させ、剥片2・3を剥離、以後剥離は石核の右側を主体に90°打面転移を繰り返し小形剥片数枚を剥離する。16号ブロック出土。黒色安山岩。

(原石の分割)

○ 1 → 2 → 3 ⇒ 4 → 5 ⇒ ○ ⇒ ○
→ 6

接合資料—121 (第232・233図、PL80)

石核2点、剥片21点、碎片2点からなり、裏面側に礫面を大きく残す1/4分割礫を石核素材に用いる。正面上端で剥片1を剥離、90°打面転移して裏面側で剥片2を剥離することからはじまる。これ以後の剥離は石核の側面に作業面を移し、打面転移を繰り返し剥片8までを剥離する。剥片9は剥片1と同一打面より剥離、打面を元に戻している。剥片10~14は剥片9の作業面を打面として剥離、以後徐々に打面転移の度合を増していく。24号ブロック出土。黒色安山岩—4。

・ 1 ⇒ 2 ⇒ (石核下端に打面転移) 3 →
4 ⇒ 5 ⇒ 6 → 7 → 8
・ 9 (1と同一打面) ⇒ 10 → 11 → 12 → 13 → 14
⇒ 15 → 16 ⇒ 17 → 20

接合資料—150 (第234図、PL81)

石核3点・剥片8点からなる。板状剥片を石核の素材とする。石核正面、及び、上端で小形剥片の剥離を行い、打面と作業面を交互に入れ替え剥離を進

II 調査の成果

めている。剥片1・2は大形剥片を素材とする石核3から、剥片4は石核5から剥離。23aブロック出土。黒色安山岩。

(板状剥片の剥離)

○○ ⇒ ○○→(1 ⇒ 2→3) ⇒ (4 ⇒ ○→5) ⇒ 6 ⇒ 7→8

接合資料—152 (第235図、PL81)

石核2点、剥片3点からなる接合資料。剥離段階で縦位破損しており、それぞれが石核素材になっている。剥片1は裏面側の平坦面を打面に、剥片4は縦位破損面を打面に剥離する。剥片4以下数枚の剥片は薄手・幅広の比較的形状の整った剥片となっている。11号ブロック出土。黒色安山岩。

- ・ 1→2
- ・ 3→4→5

接合資料—149 (第235図、PL81)

石核1点、剥片1点からなる接合資料。裏面側に礫面を残す大形剥片を石核素材に用いる。縦位切断した一方の端部で小形剥片数枚を剥離している。12号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料—142 (第236・237図、PL82)

石核2点、剥片11点からなる接合資料。幅12cm以上・厚さ8cm以上を測る河床礫を分割して石核素材に用いる。剥片剥離は裏面側下端で打面と作業面を入れ替え、剥片1・2を剥離することからはじまる。剥片3・4は正面上端の平坦打面で剥離、以後の剥離は、石核正面・正面左側で行われたようである。

(原石の分割)

1 ⇒ ○ ⇒ 2 ⇒ 3→4 ⇒ 5
⇒ 6 ⇒ 7→8 ⇒ 9 ⇒ 10→11

接合資料—130 (第237・238図、PL82)

加工痕ある剥片1・石核2点、剥片12点、碎片1点からなる。拳大程度の分割礫を石核素材に用いる。剥片剥離は正面、及び上面で、打面と作業面を交互に入れ替え小形剥片を剥離する。12は打面のみ90°移動させ、石核(13)下端から剥離。6号ブロックに出土したほか、1点が7号ブロックに出土。黒色安山岩—6。

(原石の分割)

1・2・(○→3) ⇒ ○ ⇒ (4 ⇒ ○→○)・(5 ⇒ 6→○○) ⇒ 7→8 ⇒ 9
→10→11 ⇒ 12→13

接合資料—140 (第239・240図、PL83)

21点(石核2、剥片17、碎片2)からなる接合資料。剥片剥離の後半段階で石核が二分、それぞれで剥片剥離がおこなわれる。

剥離の後半段階で二分した石核を、もう一度二分して得られた石核が石核Aであり、1～5の石核・小形剥片からなる。石核2と石核5は層理面を共有する関係にあり、石核2から剥片1を、石核5から剥片2・3を剥離する。石核Bでは分割面を作業面として剥離が展開、石核上端から剥片6・7を剥離したあと、下端から剥片8・9を剥離する。剥片10以後の剥離は、石核の表裏両面で打面転移を繰り返して、小形剥片を剥離している。

(石核A)

・ 1→2 ⇒ (3→4→5)

(石核B)

・ 6→7

・ 8→9

・ 10 ⇒ 11 ⇒ 12 ⇒ 13→14→15 ⇒
16→17 ⇒ 18→19

接合資料—135 (第240図、PL82)

剥片2点からなる接合資料。上面の平坦打面より幅広剥片を連続剥離する。1点が4aブロック、1点が14号ブロック出土。黒色安山岩—9。

接合資料—143 (第241図、PL83)

13点の剥片からなる接合資料。高さ10cmを測る河床礫を分割して石核素材としている。剥片剥離は正面上端・左側で90°打面転移を行い、剥片1～3を剥離する。剥片3の剥離直後に得られた剥片は大形であり、この大形剥片を石核に転用、剥片4を剥離している。剥片5～9は石核の正面左側から90°打面転移を介し剥離している。2点がブロック外の出土、他の11点は26aブロック出土。黒色安山岩。

・ 1 ⇒ (打面のみ90°転移) 2・3

(大形剥片石核)

- ・ 4
- ・ ○5 ⇒ ○→6 ⇒ 7→8→9 ⇒10

接合資料—154 (第242図、PL83)

加工痕ある剥片2点、剥片1点からなる接合資料。石核上面に打面を固定、剥片を連続剥離する。剥片形状は断面三角形を呈し、厚い。18号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料—151 (第242図、PL84)

石核1点、剥片3点からなる接合資料。板状剥片を石核に用いる。剥片の打面部、及び、端部で小形剥片を剥離する。4b・4cブロックに各1点、12号ブロックに2点出土。黒色安山岩。

接合資料—148 (第243図、PL43)

裏面側に礫面を残す分割礫を石核素材に用いる。90°打面転移を行い、小形・幅広剥片を剥離する。石核正面で幅広剥片を連続して剥離したのち、上端で剥片1を剥離する。以後の剥離は石核左側に作業面を移動、打面転移を繰り返し剥片2～5を剥離。

(原石の分割)

- ⇒ ○○ ⇒ ○→1 ⇒ 2→3 ⇒ 4
- 5

接合資料—131 (第243図、PL84)

剥片2からなる接合資料。左側縁側に平坦な石核・分割面を取り込んでいる。2点とも26aブロックの出土。黒色安山岩—7。

接合資料—112 (第244図、PL84)

10点の剥片からなる接合資料。分割礫を石核素材とする。剥片剥離作業は正面右側・上端で剥片1を剥離することからはじまる。剥片2～6の剥離を上端の平坦打面から連続して剥離したのち、対辺に打面を移動して剥片7・8を剥離する。10号ブロック出土。黒色安山岩—1。

- 1 ⇒ 2→3→4→5→6 ⇒ 7 ⇒ 8

接合資料—115 (第244図、PL84)

5点(加工痕ある剥片1、石核1、剥片3)からなる接合資料。裏面側に礫面を残す板状剥片を石核素材に用いて、石核の上下両端から小形の幅広剥片

を剥離する。石核は剥片3を剥離した段階で、破損。29aブロックに4点が、29bブロックに1点出土。黒色安山岩—1。

接合資料—145 (第245図、PL85)

加工痕ある剥片1点、石核1点、剥片8点の接合資料。剥片剥離は石核消費の初期状態を示し、剥片には大きく礫面を残す。最初期の大型剥片を石核に転用、小形剥片を剥離する。

- (1 ⇒ 2 ⇒ 3→4) →5 ⇒ ○ 6

接合資料—155 (第245図、PL84)

石核1点、剥片1点からなる接合資料。大型剥片を石核素材に用いて、作業面を固定、求心的剥離を行い、小形幅広剥片を剥離する。14号ブロックに1点、ブロック外に1点出土。黒色安山岩。

接合資料—114 (第246図、PL85)

石核2・剥片4からなる接合資料。90°打面転移を行い、大型幅広剥片を剥離する。この大型剥片は石核(1・4)として転用、小形剥片を剥離する。3は側縁に粗い剥離が見られ、刃部作出を意図した可能性も否定できない。10・23bブロックに各3点出土。黒色安山岩—1。

接合資料—167 (第247図、PL85)

加工痕ある剥片1・石核1・剥片1からなる接合資料。大型剥片を石核素材に用いた例であり、小形幅広剥片1を剥離する。石核は石核中の衝撃痕(割れ円錐)から破損しているが、側縁には剥離が施され、削器的な加工意図が窺われる。これについては、石核の破損後の加工か判断が難しい。剥片のみ29aブロック、他の2点は30号ブロック出土。黒色安山岩。接合資料—203 (第247～249図、PL85)

加工痕ある剥片2点、石核1点・剥片28点からなる接合資料。剥片剥離は石核上面を剥離、打面を確保することによってはじまる。剥片1・(2～13)は、この平坦打面から連続剥離したものである。以後、剥片剥離は打面と作業面を交互に入れ替え進む。より厚い(厚さ3cmを測る)大型剥片となった2～13は石核素材として転用、小形剥片を剥離する。23bブロックに27点が、23a・25号ブロックに各1点が、

II 調査の成果

ブロック外に2点が出土。黒色頁岩—15。

- 1 ⇒ (2 ⇒ 3 → 4 → 5 → 6 → 7 ⇒ 8 • 9 • 10 ⇒ 11 ⇒ ○→12→13)
- 14
- (○→15→16) ⇒ 17→18 ⇒ ○○→19 ⇒ ○→20 ⇒ 21→22 ⇒ 23→24

接合資料—224 (第249図、PL85)

加工痕ある剥片1点、剥片1点からなる接合資料。90°打面転移を行い、幅広剥片を剥離する。2は、礫面を大きく残す幅広剥片で、剥片端部の表裏両面に微細加工を施す。21・29bブロックに各1点が出土。黒色頁岩。

接合資料—207 (第250～252図、PL86)

石核3点、剥片21点からなる接合資料。推定長16cm近い河床礫を石核素材に用いる。剥片剥離は礫の小口部分で開始され、1～6を剥離する。この剥離で石核高は2/3ほどになり、剥片7以後の剥離に進む。剥片7の以後の剥離は、基本的に打面と作業面を固定して剥離を進めている。

原石消費を半ば終えたところで、石核は遺跡外に持ち出されたようである。12号ブロックに20点が出土したほか、4a・15・ブロック外に各1点が出土。黒色頁岩。

- (○○→1) • 2 • (3 → 4 → 5 → 6)
- 7 → 8 → 9 → (10→11→12) ⇒ 13→14 ⇒ 15→16→17→18→19

接合資料—200 (第253～254図、PL86)

加工痕ある剥片3、剥片18、碎片1からなる接合資料。幅10.8cm・厚さ7cmを測る角柱状河床礫を石核素材に用いる。礫の小口部分で打面を作出した後、90°打面転移を繰り返し剥離するものである。礫表皮を大きく残す剥片 (第253・254図3・5・7・10) が比較的大形で、剥離面に覆われた剥片類が小形であるのと対照的であり、礫表皮を嫌って、剥片剥離を進めている可能性もある。3ブロックを主体に出土したほか、5号ブロック (1・4c・5a・22b・29b) に出土。黒色頁岩—13。

- 1 ⇒ 2→3 ⇒ 4→○ ⇒ 5→6→

- 7 (打面のみ90°転移) ⇒ 8 (作業面のみ90°転移) ⇒ 9→10→11→12 ⇒ 13→14→15→16

接合資料—256 (第255・256図、PL87)

石核1点、剥片15点からなる接合資料。裏面側が礫面、上面側が風化分割面となっている河床礫を石核素材に用いる。剥片剥離は正面で剥片1を剥離することからはじまる。剥片2～5は正面右端で、剥片6・7は左端で打面転移を行い剥離している。剥片7を剥離したのち、石核は長軸方向に二分したようで、それぞれで小形剥片の剥離が行われている。7号ブロックから石核1・剥片9が出土したほか、6・8a・9・19・23aブロックから剥片が出土。珪質頁岩—1。

- 1 ⇒ 2 ⇒ 3→4 ⇒ 5 ⇒ 6 ⇒ 7
- 8 ⇒ 9 ⇒ 10・11→○
- 12 ⇒ 13→14

接合資料—229 (第257・258図、PL87)

剥片18点からなる。板状剥片を石核に用いる。剥片剥離は上端礫面側から剥片1～4を連続剥離、打点を左に移して剥片5・6を、対辺で剥片7を剥離する。打面と作業面を入れ換える剥離を経て、再び打面を戻し剥片8・9、剥片10を剥離、11・12は90°打面転移して剥片10と同様に礫面を大きく打ち欠く剥離となっている。剥片12～14は、90°打面転移を行い剥離。石核は未検出。5aブロックに2点、5bブロックに1点、6号ブロックに14点、10号ブロックに1点が出土。黒色頁岩。

- 1 → 2 → 3 → 4 → (5 → 6) → (7 → 8 → 9) ⇒ 10→11→○→12 ⇒ 13 ⇒ 14 → (15→16)

接合資料—191 (第258図、PL88)

4点からなる接合資料。礫面を打面に剥片2点を剥離する。このうち、大形の幅広剥片を石器素材に用い、その側縁部分に削器的刃部を作出している。石器は加工途中で破損しているようだが、破損後も加工して石器としたようである。

接合資料—218 (第259図、PL88)

石核1点、剥片4点からなる接合資料。石核正面

で剥片1を剥離したのち、打面を90°転移して石核上面で剥片を剥離、この剥離面を打面に剥片2を剥離する。剥片3以後の剥離は剥片2の剥離面を打面に剥離。22号ブロック出土。黒色頁岩。

1 ⇒ ○ ⇒ 2 ⇒ 3 → 4 → 5

接合資料—226 (第260図、PL89)

石核1点、剥片3点からなる接合資料。河床礫を石核素材に用いる。剥片剥離は上面で幅広剥片を剥離、正面で剥片1を剥離したのち、90°打面転移を繰り返し剥離が進む。剥片2は石核上面で剥離。分割面を石核正面に残している。16号ブロック出土。黒色頁岩。

(原石の分割)

○…… ⇒ ○……1 ⇒ ○…○ ⇒ 2 ⇒ ○…○ ⇒ 3

接合資料—214 (第261図、PL90)

8点(加工痕ある剥片2、石核2、剥片4)からなる接合資料。径10cmを超える大形の河床礫を用い、上面の平坦剥離面より大形剥片を連続剥離する。厚い大形剥片の一部(1・5)については石核素材に転用、小形剥片を剥離する。20aブロックに5点、20bブロックに2点が出土したほか、石核5が10号ブロックに出土している。黒色頁岩。

(○→1) → 2 ⇒ ○○ ⇒ 3 ⇒ ○ ⇒ 4 ⇒ (5→6)

接合資料—217 (第262図、PL89)

9点の剥片からなる接合資料。打面と作業面を交互に入れ換え、やや大形の幅広剥片を連続剥離する。22号ブロックから8点、23aブロックから1点が出土。黒色頁岩。

1 → 2 ⇒ ○ ⇒ 3 → 4 ⇒ ○ ⇒ 5 → 6・7

接合資料—228 (第263図、PL91)

石核1点、剥片4点からなる接合資料。裏面側に礫面を大きく残す河床礫を石核素材に用いる。裏面側・下端で剥片1を剥離したのち、打面のみを石核正面上端に転移、石核上面で剥片2を剥離する。8aブロックに石核1点、8bブロックに剥片1点、

9号ブロックに剥片2点、ブロック外に剥片1点が出土。黒色頁岩。

○ ○ ⇒ 1 ⇒ 2 ⇒ ○ → 3

接合資料—240 (第263図、PL88)

剥片3からなる接合資料。剥片3点は上面に打面を固定、打面を大きく左右に振り連続剥離。剥片1の背面側・上端左は、剥離時に打面部が弾け飛んでいる。26bブロック出土。黒色頁岩。

接合資料—233 (第264図、PL93)

石核1点、剥片7点からなる接合資料。裏面側に礫面を大きく残す板状剥片を石核に用いる。礫面を打面に求心的剥離を行い、幅広剥片を剥離する。27号ブロックに5点、ブロック外に3点が出土。黒色頁岩。

接合資料—201 (第264図、PL90)

石核1・剥片4からなる接合資料。大形剥片を石核素材に用いる。剥片剥離は石核素材となった剥片の打面側で行われ、90°打面転移して小形剥片を剥離する。剥片1の左側はブロック外、2は2号ブロック、3・4は1号ブロックの出土。黒色頁岩—14。

1 ⇒ ○ → 2 ⇒ ○ → 3 → 4

接合資料—215 (第265図、PL90)

5点の剥片からなる接合資料。正面上端から剥片1・2を連続剥離したのち、上面に作業面を移し、石核上面右側から大形剥片1枚を剥離する。剥片3以下の剥離は石核左側の対辺で展開、打面と作業面を交互に入れ換え剥離が進む。24号ブロックに4点、ブロック外に1点が出土した。黒色頁岩。

1 → 2 ⇒ ○ ⇒ 3 ⇒ 4 ⇒ 5

接合資料—225 (第266・267図、PL91)

加工痕ある剥片1、石核1、剥片8からなる接合資料。剥片剥離は正面で大形の縦長剥片1を剥離、以後剥離は90°打面転移を行い、石核の消費を進める。上面から剥離した大形剥片は石核に転用、小形剥片を剥離する。23a・23bブロックに各1点、24号ブロックに8点が出土。黒色頁岩。

1 ⇒ 2 ⇒ 3 → (4 → 5 → 6 ⇒ 7 → 8) ⇒ 9

II 調査の成果

接合資料—210 (第268図、PL92)

石核2、加工痕ある剥片1、剥片9からなる接合資料。原石を分割、上端から大形剥片を剥離、打面と作業面を入れ替え、小形剥片を剥離する。以上が剥片1以前の剥離で、剥片1自体の剥離は上端・右側に90°打面転移するものであり、同時剥離した剥片2～4の剥離は再度上端に作業面を移動して剥離したものである。剥片5～8は途中打面を移動して正面左側の剥離を挟んで、バルブの発達した剥片4の剥離面を打面として剥離したものである。20bブロック出土。黒色頁岩。

原石の分割→大形剥片剥離 ⇒ ○○ ⇒ 1
⇒ 2・3・4 ⇒ 5→6→7 ⇒ ○ ⇒
8→9

接合資料—185 (第269図、PL92)

石核1点、剥片7点からなる。打面上端の平坦面に固定して、打点を左右に大きく振り幅広剥片を剥離する。3・4・5は同時破損、5は石核素材として剥片1枚を剥離する。7号ブロックに2点、8aブロックに1点、9号ブロックに3点、26aブロックに1点、ブロック外に1点が出土。黒色頁岩。

1→2→3・4・(○→5)→6

接合資料—234 (第270・271図、PL93)

石核1点、剥片6点からなる接合資料。平坦打面より剥片3枚を連続剥離する。より大形の剥片は石核に転用され、裏面側を主体に小形剥片を剥離する。25号ブロックに出土。黒色頁岩。

(3→4→5→6)→1→2

接合資料—188 (第271図、PL94)

剥片3からなる接合資料。90°打面転移を行い、幅広剥片を剥離する。

1→2 ⇒ 3

接合資料—205 (第272・273図、PL93)

14点(石核1、剥片12、碎片1)からなる接合資料。石核の正面で大形剥片1・碎片2を剥離して剥離が始まる。90°打面転移を繰り返し、右側側面から3・4を剥離する。このあと、再び打面を元に戻し剥片5以下の剥離を行う。

1・2 ⇒ ○○ ⇒ (3○○→4) ⇒ 5
→6 ⇒ (7・8・9)→10

接合資料—198 (第273図、PL93)

石核1点、剥片1点からなる接合資料。大形剥片を石核素材に用いる。剥片剥離は素材となった剥片の打面部、及び、左側縁側で行われ、小形幅広剥片を剥離する。ブロック外の出土。黒色頁岩。

接合資料—172 (第273図、PL93)

剥片3からなる接合資料。礫面を大きく残していることからみて、剥片剥離・最初期の剥片であるが、その剥離は偶発的なもので、同時破損した3点が接合したものである。下半部に接合した石片は折断面に微細加工を施す。加工意図については不明。20aブロック出土。黒色安山岩。

接合資料—190 (第274図、PL94)

石核2点、剥片2点からなる接合資料。石核上面の平坦剥離面より幅広剥片を剥離する。石核2・4は剥離段階で同時破損。この同時破損した大形剥片を石核とした2から剥片3を剥離。13号ブロック出土。黒色頁岩—5。

1→2・(3→4)

接合資料—196 (第274図、PL94)

石刃1点、剥片1点からなる接合資料。1の打面部は、粗い加工により除去。加工意図については不明。26aブロック出土。黒色頁岩—8。

接合資料—186 (第275図、PL95)

剥片4点からなる接合資料。石核上面の平坦剥離面より連続剥離する。8a・9号ブロックから各2点が出土。黒色頁岩—1。

接合資料—248 (第275図、PL94)

加工痕ある剥片1、剥片1からなる。剥離段階で縦位破損した縦長剥片を素材に用い、その剥片端部をノッチ状に剥離する。剥離面全体が風化しているため判断は難しいが、石核として理解するべきかもしれない。10号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料—243 (第275図、PL94)

剥片2からなる接合資料。90°打面転移を行い、幅広剥片を剥離する。剥片1の背面側は広い平坦面と

なっていることから、原石を分割して最初期に得られたものだろう。14号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料—199 (第276図、PL95)

石核1点、剥片1点からなる接合資料。石核上面の平坦剥離面より連続剥離している。1は剥離後、左側面で小形剥片を剥離、石核として転用している。2号ブロック出土。黒色頁岩—11。

接合資料—193 (第276図、PL95)

6点の剥片からなる接合資料。剥片礫面を有する剥片剥離は打点を左右に大きく振り進む。26bブロックに5点、26aブロックに1点が出土。黒色頁岩—7。

接合資料—255 (第277図、PL95)

剥片2点からなる接合資料。石核上面の平坦剥離面より剥片1を剥離、90°打面転移を介して剥片1枚を剥離したのち、元の位置に打面を戻して剥片2を剥離する。29bブロック出土。チャート—1。

接合資料—257 (第277図、PL95)

石刃1、剥片1からなる接合資料。上面の平坦面に打面を固定して連続剥離する。接合状態からみて、打点は直進的に後退しており、作業面は石核の小口部分を利用した可能性が高い。26aブロック出土。珪質頁岩—2。

接合資料—382 (第277図、PL95)

剥片1点、碎片1点からなる接合資料。上面の礫面より剥離。10号ブロック出土。玉髓—1。

接合資料—212 (PL99)

石核1・剥片17・碎片1からなる接合資料。石核の正面で大形剥片(4aブロック出土)を剥離したあと、上面に作業面を移して剥片を剥離する。これに続いて、再び作業面を石核正面に移し大形剥片2枚(1枚の剥片は縦位破損して4c・14号ブロックに出土、残る剥片1枚は29bブロックに出土する)を連続剥離する。以後、剥離は石核上面と石核正面・石核左側で打面と作業面を交互に入れ替え、剥離が進む。最終剥離に近い剥片2枚は29bブロックに分布していることから、石核を移動した剥離作業も想定されよう。4a・4c・14・29a・29bブロック

出土。黒色頁岩—17。

接合資料—208 (PL100)

計22点(石核1・剥片21)からなる接合資料。断面三角形の河床礫(幅12cm・高さ8cmを測る)の小口部分から剥離を開始する。剥片剥離は打面と作業面を入れ替えるもので、途中大形剥片を石核に転用、小形剥片を剥離したようである。石核本体は搬出されていた。10号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料—237 (PL100)

計15点(石核1・剥片14)からなる接合資料。厚い板状剥片(厚さ5cm)を石核素材に用い石核の小口部分(打面側)で打面と作業面を交互に入れ替える剥離が行われる。12号ブロック出土。黒色頁岩—18。

石器と礫の分布

1b地点出土の石器群は、丘陵鞍部に近い丘陵・北東側斜面部に分布した。分布域の北側が県道に接しており、その全貌については明らかにすることができなかったが、石器分布の概要については以下のとおり捉えることができた。

石器群は直径60mの範囲に分布、石器ブロックは大別30ヶ所を確認した。石器群は「環状ブロック群」と見られ、分布域の中央は石器分布の空白域となっていた。外見上、空白域は南北2ヶ所にあり、環状ブロック群が重複したように見える。

石器は1567点が出土した。ブロック別に見た石器の出土点数は平均で52.2点であったが、大部分は50点未満の石器ブロック(22ヶ所)であった。直径60mに達した石器の分布規模に比べて、石器は特に密集分布したわけではなく、大型環状ブロック群の中央・石器の空白域に発見されることの多い炭化物、火処を示唆する礫群等は発見されなかった。

石器は、X～XII層を主体に出土(第38表)した。出土層位については石器ブロック毎に多様であるが、分布密度の高い石器ブロックではVIII層から石器が出土するなど、より石器が上下差を以て出土する傾向にあるという感触を得た。

II 調査の成果

石器石材は20種類を確認した。黒色安山岩（807点）・黒色頁岩（656点）2種類の石材で93.4%を占めた。珪質頁岩・チャート・粗粒輝石安山岩が1.0～1.9%で続き、黒曜石・硬質頁岩等の非在地系石材の占める割合はきわめて少なくなっている。

接合資料は、148例897点を確認した。これらの接

合資料はブロック間で接合するものが多く、ほぼ同時存在した石器群と理解できよう。

1号ブロック（第278図、PL11）

位 置 CR-121・122G

規 模 長軸5.3m・短軸5.1m

第40表 ブロック別器種構成（IV文化-1b地点）

	ナイフ	台形様	削器	加工痕	使用痕	石刃	石核	敲石	剥片	碎片	礫	礫片	不明	合計
1号ブロック	0	0	0	2	0	0	1	0	50	7	0	0	0	60
2号ブロック	0	0	0	1	0	0	8	1	35	8	0	0	0	53
3号ブロック	0	0	0	3	0	0	2	4	29	8	0	0	0	46
4a号ブロック	1	0	0	1	0	0	3	0	19	1	1	0	0	26
4b号ブロック	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	5
4c号ブロック	0	0	0	1	0	0	0	0	5	0	0	0	0	6
5a号ブロック	0	0	0	1	0	0	2	0	9	1	0	1	0	14
5b号ブロック	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	4
6号ブロック	0	1	0	2	1	0	3	0	59	5	0	2	0	73
7号ブロック	0	0	0	0	0	0	2	0	32	2	0	0	0	36
8a号ブロック	0	0	0	0	0	0	2	1	23	1	0	0	0	27
8b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	6
9号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	17	1	0	0	0	18
10号ブロック	0	0	1	1	0	0	5	1	89	8	0	0	0	105
11号ブロック	0	0	0	0	0	0	3	1	9	1	2	2	0	18
12号ブロック	0	0	0	3	0	0	8	0	106	21	0	1	0	139
13号ブロック	0	0	0	0	0	0	4	0	3	0	0	0	0	7
14号ブロック	0	0	0	0	0	0	7	0	25	5	0	0	0	37
15号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	12	0	0	0	0	13
16号ブロック	0	0	0	0	0	0	3	0	16	2	0	0	0	21
17号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	2	0	0	10
18号ブロック	1	0	0	2	0	0	1	0	10	0	0	0	0	14
19a号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0	0	1	0	14
19b号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	1	7	1	0	0	0	10
20a号ブロック	0	0	0	2	0	0	3	1	30	5	0	0	0	41
20b号ブロック	0	0	0	3	0	0	5	0	36	5	0	0	0	49
21号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	15	1	0	1	0	17
22号ブロック	0	0	0	3	0	0	2	1	29	1	1	0	0	37
23a号ブロック	0	0	0	0	0	0	5	0	30	2	0	0	0	37
23b号ブロック	0	0	0	4	0	0	12	0	109	19	0	1	0	145
24号ブロック	0	0	0	2	0	0	3	0	34	3	0	0	0	42
25号ブロック	0	0	0	0	0	0	2	1	48	5	0	1	0	57
26a号ブロック	1	0	0	1	0	6	0	1	80	4	1	1	0	95
26b号ブロック	0	0	0	0	0	0	0	0	18	1	0	0	0	19
27号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	11	0	0	0	0	12
28号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	10	0	0	0	0	11
29a号ブロック	1	0	0	1	0	0	5	0	36	3	0	3	0	49
29b号ブロック	0	0	0	1	0	0	1	0	30	0	1	0	0	33
30号ブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	21	1	0	0	0	23
ブロック外	3	0	0	5	0	1	9	0	94	11	3	11	1	138
合計	7	1	1	41	1	7	106	13	1220	133	11	25	1	1567

第41表 ブロック別石材構成 (IV文化-1 b地点)

	黒安	黒頁	黒曜石	チャート	珪頁	ホルン	輝緑岩	玉ずい	黒片	砂岩	細安	変安	粗安	変玄	その他	総計
1号ブロック	55	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	60
2号ブロック	42	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	53
3号ブロック	22	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	46
4a号ブロック	12	12	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	26
4b号ブロック	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
4c号ブロック	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
5a号ブロック	2	11	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
5b号ブロック	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
6号ブロック	25	44	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	73
7号ブロック	17	7	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	36
8a号ブロック	4	21	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	27
8b号ブロック	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
9号ブロック	4	13	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
10号ブロック	69	31	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	105
11号ブロック	10	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0	0	18
12号ブロック	79	56	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	硬頁1	139
13号ブロック	7	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
14号ブロック	23	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37
15号ブロック	2	10	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
16号ブロック	13	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21
17号ブロック	4	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	10
18号ブロック	10	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
19a号ブロック	6	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	14
19b号ブロック	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	10
20a号ブロック	26	13	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	褐碧1	41
20b号ブロック	25	22	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	49
21号ブロック	3	11	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	17
22号ブロック	3	33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	37
23a号ブロック	23	13	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	37
23b号ブロック	106	36	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	変珪1	145
24号ブロック	27	14	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	42
25号ブロック	13	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	57
26a号ブロック	48	41	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	94
26b号ブロック	1	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
27号ブロック	4	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12
28号ブロック	9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	11
29a号ブロック	10	35	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	49
29b号ブロック	8	22	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
30号ブロック	20	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	23
ブロック外	69	42	2	7	4	0	0	0	1	0	0	0	11	0	緑片1	136
合計	807	657	3	15	29	3	2	4	2	4	2	3	28	2	4	1567

II 調査の成果

分布状態 集中分布する。

出土層位 X～XII層

器種構成 加工痕ある剥片2・石核1・剥片50・
破片7

石材構成 黒色安山岩55・黒色頁岩4・玉ずい1

その他 接合資料6例を有する。1例(接-120)
は21ブロック・ブロック外の剥片と接
合。

2号ブロック (第278図、PL11)

位置 CQ-122G

規模 長軸5.3m・短軸3.7m

分布状態 集中分布する。

出土層位 X～XII層

器種構成 加工痕ある剥片1・敲石1・石核8・
剥片35・破片8

石材構成 黒色安山岩42・黒色頁岩10・変質安山
岩1

その他 接合資料10例を有す。ブロック間の接
合資料2例(接-201・205)を確認。

3号ブロック (第278図、PL11)

位置 CO-123G

規模 長軸5.0m・短軸3.7m

分布状態 集中分布する。

出土層位 X～XII層

器種構成 加工痕ある剥片3・敲石4・石核2・
剥片29・破片8

石材構成 黒色安山岩22・黒色頁岩24

その他 接合資料7例を有する。うち、3例(接
-191・200・208)がブロック間接合。

4a号ブロック (第278図、PL11)

位置 CO・CP・CQ-124G

規模 長軸6.5m・短軸5.3m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X～XII層

器種構成 ナイフ形石器1・加工痕ある剥片1・
石核3・剥片19・破片1・礫1

石材構成 黒色安山岩12・黒色頁岩12・チャート
1・砂岩1

その他 接合資料7例を有する。うち、4例(接
-123・135・148・207)がブロック間
で接合。

4b号ブロック (第278図、PL11)

位置 CQ-124G

規模 長軸1.2m・短軸1.0m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 XII層

器種構成 加工痕ある剥片1・剥片4

石材構成 黒色安山岩3・黒色頁岩2

その他 接合資料3例を有する。3例(接-
123・151・205)ともブロック間接合。

4c号ブロック (第278図)

位置 CP-123G

規模 長軸2.7m・短軸1.6m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X～XII層

器種構成 加工痕ある剥片1・剥片5

石材構成 黒色安山岩1・黒色頁岩5

その他 接合資料4例を有する。4例(接-
151・200・205・212)ともブロック間
の接合。

5a号ブロック (第279図、PL11)

位置 CN-123・124G

規模 長軸3.6m・短軸2.5m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 XII層

器種構成 加工痕ある剥片1・石核2・剥片9・
破片1・礫1

石材構成 黒色安山岩2・黒色頁岩11・ホルンフェ
ルス1

その他 接合資料5例を有する。5例(接-
142・188・191・200・229)ともブロッ
ク間で接合。

5b号ブロック (第279図)

位置 CO-125付近

規模 長軸1.7m・短軸1.5m

分布状態 散漫に分布する。

- 出土層位 X～XII層
 器種構成 加工痕ある剥片1・剥片3
 石材構成 黒色安山岩1・黒色頁岩3
 その他 接合資料2例を有する。2例(接—200・242)ともブロック間で接合。
- 6号ブロック** (第279図、PL11)
 位置 CO・CP—125・126G
 規模 長軸6.6m・短軸5.1m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 IX～XII層
 器種構成 台形様石器1・加工痕ある剥片2・使用痕ある剥片1・石核3・剥片59・破片5・礫2
 石材構成 黒色安山岩25・黒色頁岩44・珪質頁岩2・砂岩1・粗粒輝石安山岩1
 その他 接合資料10例を有する。うち、6例(接—130・141・188・229・242・256)がブロック間で接合。
- 7号ブロック** (第279図、PL11)
 位置 CQ・CR—126G
 規模 長軸4.7m・短軸3.6m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 IX～XII層
 器種構成 石核2・剥片32・破片2
 石材構成 黒色安山岩17・黒色頁岩7・珪質頁岩12
 その他 接合資料5例を有する。うち、4例(接—130・141・185・256)はブロック間で接合。
- 8a号ブロック** (第279図、PL11)
 位置 CO・CP—127G
 規模 長軸4.0m・短軸2.8m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 X～XII層
 器種構成 敲石1・石核2・剥片23・破片1
 石材構成 黒色安山岩4・黒色頁岩21・珪質頁岩1・変質玄武岩1
 その他 接合資料8例を有する。うち、6例(接—185・186・187・205・206・256)がブロック間で接合。
- 8b号ブロック** (第279図、PL11)
 位置 CP—126G
 規模 長軸2.1m・短軸1.5m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X～XII層
 器種構成 剥片6
 石材構成 黒色安山岩1・黒色頁岩5
 その他 接合資料2例を有する。うち、1例(接—205)はブロック間で接合。
- 9号ブロック** (第279図、PL12)
 位置 CP・CQ—127G
 規模 長軸4.3m・短軸2.0m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX～XII層
 器種構成 剥片17・破片1
 石材構成 黒色安山岩4・黒色頁岩13・珪質頁岩1
 その他 接合資料8例を有する。8例(接—118・141・185・186・187・205・228・256)ともブロック間で接合。
- 10号ブロック** (第280図、PL12)
 位置 CQ・CR—126・127・128G
 規模 長軸7.5m・短軸4.3m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 IX～XII層
 器種構成 削器1・加工痕ある剥片1・敲石1・石核5・剥片89・破片8
 石材構成 黒色安山岩69・黒色頁岩31・珪質頁岩2・玉ずい2・変質玄武岩1
 その他 接合資料14例を有する。うち、7例(接—118・142・178・208・214・229・248)がブロック間で接合。
- 11号ブロック** (第280図)
 位置 CQ—129付近
 規模 長軸4.3・短軸3.9m
 分布状態 やや散漫に分布する。

II 調査の成果

出土層位 X・XII層

器種構成 敲石1・石核3・剥片9・碎片1・礫2・礫片2

石材構成 黒色安山岩10・黒色頁岩3・砂岩1・粗粒輝石安山岩4

その他 接合資料2例を有する。2例(接-152・238)ともブロック内で接合。

12号ブロック (第280図、PL12)

位置 CR・CS-128・129G

規模 長軸6.7m・短軸6.5m

分布状態 集中分布する。

出土層位 IX~XII層

器種構成 加工痕ある剥片3・石核8・剥片106・碎片21・礫1

石材構成 黒色安山岩79・黒色頁岩56・硬質頁岩1・細粒輝石安山岩1・チャート1・粗粒輝石安山岩1

その他 接合資料10例を有する。このうち、4例(接-140・151・178・207)がブロック間で接合。

13号ブロック (第280図、PL12)

位置 CS-130G

規模 長軸1.3m・短軸1.1m

分布状態 集中分布する。

出土層位 XII層

器種構成 石核4・剥片3

石材構成 黒色頁岩7

その他 接合資料2例を有する。うち、1例(接-197)はブロック間で接合。

14号ブロック (第280図、PL12)

位置 CS-132G

規模 長軸3.9m・短軸3.0m

分布状態 集中分布する。

出土層位 X~XII層

器種構成 石核7・剥片25・碎片5

石材構成 黒色安山岩23・黒色頁岩14

その他 接合資料9例を有する。うち、2例(接-135・212)はブロック間で接合。

15号ブロック (第281図)

位置 CV-130付近

規模 長軸4.9m・短軸(一)

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX~XII層

器種構成 石核1・剥片12

石材構成 黒色安山岩2・黒色頁岩10・ホルンフェルス1

その他 接合資料2例を有する。2例(接-162・207)ともブロック間で接合。

16号ブロック (第281図)

位置 CT・CU-129G

規模 長軸4.3m・短軸2.5m

分布状態 集中分布する。

出土層位 X~XII層

器種構成 石核3・剥片16・碎片2

石材構成 黒色安山岩13・黒色頁岩8

その他 接合資料6例を有する。うち、2例(接-162・241)はブロック間で接合。

17号ブロック (第281図、PL12)

位置 CU-129・130G

規模 長軸3.4m・短軸2.3m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 IX~XII層

器種構成 剥片8・礫2

石材構成 黒色安山岩4・黒色頁岩3・チャート1・粗粒輝石安山岩2

その他 接合資料1例が16・17ブロック間で接合。

18号ブロック (第281図)

位置 CV-128G

規模 長軸3.0m・短軸1.7m

分布状態 やや散漫に分布する。

出土層位 IX~XII層

器種構成 ナイフ形石器1・加工痕ある剥片2・石核1・剥片10・

石材構成 黒色安山岩10・黒色頁岩4

その他 接合資料1例がブロック内で接合。

19 a号ブロック (第281図)

位置 CT-128G
 規模 長軸3.3m・短軸3.2m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 X~XII層
 器種構成 剥片13・礫片1
 石材構成 黒色安山岩6・黒色頁岩6・珪質頁岩1・粗粒輝石安山岩1
 その他 接合資料3例を有する。3例(接-157・158・256)ともブロック間接合。

19 b号ブロック (第281図)

位置 CT-127・128G
 規模 長軸2.8m・短軸1.7m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 XI・XII層
 器種構成 敲石1・石核1・剥片7・碎片1
 石材構成 黒色安山岩7・黒色頁岩2・細粒輝石安山岩1
 その他 接合資料2例を有する。ブロック内で接合。

20 a号ブロック (第282図、PL12)

位置 CS・CT-127・128G
 規模 長軸4.1m・短軸3.5m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 IX~XII層
 器種構成 加工痕ある剥片2・敲石1・石核3・剥片30・碎片5
 石材構成 黒色安山岩26・黒色頁岩13・褐色碧玉1・輝緑岩1
 その他 接合資料8例を有する。4例(接-166・210・214・220)がブロック間で接合。

20 b号ブロック (第282図、PL12)

位置 CU・CV-127G
 規模 長軸4.8m・短軸3.1m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 IX~XII層
 器種構成 加工痕ある剥片3・石核5・剥片36・

碎片5

石材構成 黒色安山岩25・黒色頁岩22・チャート1・変質安山岩1
 その他 接合資料8例を有する。このうち5例(接-119・157・166・214・220)がブロック間で接合。

21号ブロック (第282図)

位置 CT・CU-126G
 規模 長軸5.1m・短軸3.6m
 分布状態 散漫に分布する。
 出土層位 IX~XII層
 器種構成 剥片15・碎片1・礫片1
 石材構成 黒色安山岩3・黒色頁岩11・珪質頁岩1・黒色片岩1・粗粒輝石安山岩1
 その他 接合資料4例を有する。4例(接-120・204・213・224)ともブロック間で接合。

22号ブロック (第283図)

位置 CS・CT-125G
 規模 長軸2.4m・短軸2.2m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 X~XII層
 器種構成 加工痕ある剥片3・敲石1・石核2・剥片29・碎片1・礫1
 石材構成 黒色安山岩3・黒色頁岩33・粗粒輝石安山岩1
 その他 接合資料10例を有する。7例(接-141・189・191・200・218・223)がブロック間で接合。

23 a号ブロック (第282図、PL13)

位置 CT・CU-124G
 規模 長軸5.0m・短軸3.7m
 分布状態 やや散漫に分布する。
 出土層位 IX~XII層
 器種構成 石核5・剥片30・碎片2
 石材構成 黒色安山岩23・黒色頁岩13・珪質頁岩1
 その他 接合資料8例を有する。このうち6例

II 調査の成果

(接—119・161・213・217・225・256)

がブロック間で接合。

23b号ブロック (第282図、PL13)

位 置 CU・CV—124・125G

規 模 長軸5.4m・短軸4.9m

分布状態 集中分布する。

出土層位 IX～XII層

器種構成 加工痕ある剥片4・石核12・剥片109・
碎片19・礫片1

石材構成 黒色安山岩106・黒色頁岩36・輝緑岩
1・変質珪質岩1・砂岩1

その他 接合資料7例を有する。6例(接—
114・119・161・197・204・225)がブ
ロック間で接合。

24号ブロック (第283図)

位 置 CU・CV—124・125G

規 模 長軸5.5m・短軸3.5m

分布状態 やや散漫に分布する。

出土層位 IX～XII層

器種構成 加工痕ある剥片2・石核3・剥片34・
碎片3

石材構成 黒色安山岩27・黒色頁岩14・珪質頁岩
1

その他 接合資料4例を有する。1例(接—225)
のみブロック間で接合。

25号ブロック (第283図)

位 置 CV・CW—125・126G

規 模 長軸6.9m・短軸5.8m

分布状態 集中分布する。

出土層位 IX～XII層

器種構成 敲石1・石核2・剥片48・碎片5・礫
片1

石材構成 黒色安山岩13・黒色頁岩43・粗粒輝石
安山岩1

その他 接合資料6例を有する。2例(接—
119・203)がブロック間で接合。

26a号ブロック (第284図)

位 置 CU・CV・CW—123・124G

規 模 長軸9.1m・短軸5.7m

分布状態 集中分布する。

出土層位 IX～XII層

器種構成 ナイフ形石器1・加工痕ある剥片1・
石刃6・敲石1・剥片80・碎片4・礫
1・礫片1

石材構成 黒色安山岩48・黒色頁岩41・珪質頁岩
3・変質安山岩1・粗粒輝石安山岩1・
変質輝緑岩1

その他 接合資料16例を有する。うち、3例(接
—185・193・245)がブロック間で接合。

26b号ブロック (第284図)

位 置 CU・CV—122G

規 模 長軸4.9m・短軸2.6m

分布状態 集中分布する。

出土層位 X～XII層

器種構成 剥片18・碎片1

石材構成 黒色安山岩1・黒色頁岩18

その他 接合資料4例を有する。2例(接—
193・245)がブロック間で接合。

27号ブロック (第283図)

位 置 CT・CU—121G

規 模 長軸4.2m・短軸2.2m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 X～XII層

器種構成 石核1・剥片11

石材構成 黒色安山岩4・黒色頁岩7・ホルンフェ
ルス1

その他 接合資料1例を有する。ブロック内で
接合。

28号ブロック (第283図)

位 置 CR—123・124G

規 模 長軸3.2m・短軸2.7m

分布状態 散漫に分布する。

出土層位 XI・XII層

器種構成 石核1・剥片10

石材構成 黒色安山岩9・黒色頁岩1・粗粒輝石
安山岩1

その他 接合資料2例を有する。2例(接—169・183)ともブロック内の接合。

29 a号ブロック (第284図)

位置 CQ・CR—125G
 規模 長軸4.7m・短軸3.8m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 IX～XII層
 器種構成 ナイフ形石器1・加工痕ある剥片1・石核5・剥片36・碎片3・礫片3
 石材構成 黒色安山岩10・黒色頁岩35・黒曜石1・粗粒輝石安山岩3

その他 接合資料9例を有する。7例(接—115・141・142・146・167・209・212)がブロック間で接合。

29 b号ブロック (第284図)

位置 CR—126G
 規模 長軸4.0m・短軸3.3m
 分布状態 集中分布する。
 出土層位 X～XII層
 器種構成 加工痕ある剥片1・石核1・剥片30・礫1
 石材構成 黒色安山岩8・黒色頁岩22・チャート3

その他 接合資料11例を有する。8例(接—115・137・164・175・189・200・209・212・223・224)がブロック間で接合。

30号ブロック (第283図)

位置 CR・CS—125G
 規模 長軸4.0m・短軸2.8m
 分布状態 やや散漫に分布する。
 出土層位 X～XII層
 器種構成 石核1・剥片21・碎片1
 石材構成 黒色安山岩20・黒色頁岩1・チャート1・玉ずい1

その他 接合資料6例を有する。このうち、5例(接—142・146・164・167・189)がブロック間で接合。

接合資料の分布

接合資料は、148例895点を確認した。うち、74例が黒色安山岩の接合例、70例が黒色頁岩の接合例となっており、接合点数は石材構成を反映していることが明らかである。接合資料はブロック内で接合するものが大部分であったが、ブロック間接合例(第285図を参照)も多く、石器群の同時性を示唆していた。以下接合資料の分布概要について、石材別に記していく。

〈黒色安山岩〉

1～4号ブロック (第286・291図)

計16例の接合資料が分布した。このうち、5例(接—120・123・135・148・151)がブロック間接合で、接—120は環状ブロック東の21号ブロックの、接—135・151は環状ブロック北の12・14号ブロックの剥片類と接合した。接—120・123については2号ブロックを剥離地点と想定することができるが、接—135については資料点数が少なく判断できない。同様に、接—151については石核が環状ブロック北に分布したことから剥離地点を移動した可能性が高いが、資料点数が少なく断定は難しい。

6～8号ブロック (第287・291図)

5例の接合資料が分布、5例中2例(接—130・141)がブロック間接合した。接—130は6号ブロックに剥離地点があり、7号ブロックの1点は剥片7(第238図7)と同時剥離した碎片であったが、ブロック間接合した理由について明らかにすることはできなかった。接—141についても7号ブロックを剥離地点、石核を29 a地点に移動したことは容易に判断されたのであるが、6・9号ブロック等へ剥片が移動する理由については明らかではなかった。

10号ブロック (第287図)

9例の接合資料が分布、3例のブロック間接合(接—114・118・178)を確認した。石核等6点が接合した接—114については環状ブロック東の23 bブロックと接合関係を有しており、剥離後に素材を持ち出して石器製作したことは明らかである。

II 調査の成果

11・12号ブロック (第288図)

7例の接合資料が分布、3例のブロック間接合(接-140・151・178)を確認した。接-140については環状ブロック南の石器空白域に石核(第239図5)が分布した。石核1点が単独分布した理由については明らかにすることはできなかった。接-151は4bブロックと、接-178は隣接する10号ブロックと接合関係を有した。

14～16号ブロック (第288図)

8例の接合資料が分布、2例のブロック間接合(接-135・162)を確認した。接-135は4aブロックに分布した剥片と接合関係を有する。

18～20号ブロック (第289図)

11例の接合資料が分布、2例のブロック間接合(接-157・166)を確認した。2例とも剥片類同士の接合であり、ブロック間接合した理由については明らかにすることはできなかった。

21～25号ブロック (第289・291図)

6例の接合資料が分布、3例のブロック間接合(接-114・119・161)を確認した。接-114については素材剥片類を持ち込んだ石器製作が、接-119については23bブロックが剥離地点であったことは明らかであったが、剥片類の移動は判断材料を欠き判断できなかった。

26aブロック (第290図)

7例の接合資料を確認した。このうち、2例(接-143・165)はブロック間接合したが、接-143については剥離順1・3の礫表皮を残す大形剥片類で、剥片5・8とともに選択的に剥片を持ち出した可能性も否定できない。

28～30号ブロック (第290・291図)

10例の接合資料が分布、5例のブロック間接合(接-115・142・146・164・167)と1例の遠距離接合(接-169)を確認した。接-115は剥離順3番目の剥片が29bブロックに、接-142は剥離順2番目の折断剥片が5a・10号ブロックに、接-146は大形剥片が分布、選択的に剥片を持ち出した可能性がある。なお、接-167は29aブロックに石核1・加工痕ある剥片1

が、30号ブロックには剥片1が分布、剥片1を持ち出した可能性と、これとは逆に石核類を持ち出した可能性の両者を考えることができる。遠距離接合した接-169については、重さ1.66gの薄片であり、剥片類の意図的移動という想定は難しい。

〈黒色頁岩〉

1・2号ブロック (第292図)

4例の接合資料が分布、2例のブロック間接合(接-200・201)を確認した。ブロック間接合した接-200は3号ブロックに剥離地点が特定、剥片類は剥離地点の移動というより剥片類を持ち出したというべきであろう。接-201については2号ブロックを剥離地点として剥片1(第264図2)を持ち出していることが明らかであった。

3・4号ブロック (第292・298図)

3例の接合資料が分布、1例のブロック間接合(接-200)を確認した。接-200(第298図)は剥離地点として3号ブロックが、剥片類の持ち出し地点として6ヶ所の石器ブロック(1・4c・5a・5b・22・29a)が想定されよう。環状ブロック・外縁の1・3号ブロックには礫面を大きく残す剥離初期の剥片が、中央部の22・29bブロックには小形剥片が分布、特徴となっている。

5・6号ブロック (第293図)

6例の接合資料が分布、2例のブロック間接合(接-188・229)を確認した。接-188については剥離順で3番目の剥片が5aブロックに出土しており、剥離地点を移動している可能性が、また、接-229については剥離後に6号ブロック(剥離地点)から剥片類を持ち出した可能性が指摘されよう。

7～10号ブロック (第293図)

10例の接合資料が分布、ブロック間接合6例(接-185～187・205・214・228)を確認した。接-185は9号ブロックで剥離、石核(第269図5)を8aブロックへ、剥片(第269図4)を26aブロックへ持ち出している。接-186は剥離順の早い剥片が9号ブロックに、剥離順の遅い剥片が8aブロックに分布した。接-214は20aブロックで剥離、石核を10号ブ

ロックに、接-208は10号ブロックで剥離、3号ブロックに剥片を持ち出している。接-205(第272図)は剥離地点として8aブロックが、剥片類の持ち出し地点として2・4b・4cブロックが特定されよう。

11～14号ブロック (第294・297図)

9例の接合資料が分布、2例のブロック間接合(接-197・207)を確認した。接-197(PL104)は、剥離順の早い剥片が23bブロックに分布、それ以後の剥片類が13号ブロックに分布した。剥離地点を変えたのか、それとも剥片を持ち出したのか、明確ではない。接-207(第250図)は12号ブロックに剥離地点として、剥離初期の剥片(第251図2)が4aブロックに、最終剥離した剥片(第252図20)が15号ブロックに持ち出していた。

16～20号ブロック (第295図)

7例の接合資料が分布、4例のブロック間接合(接-210・214・220・241)を確認した。接-210の剥離地点が20bブロックであったことは明らかであるが、20aブロックに分布した剥片(剥離順の1番目)が持ち出されたものかについては、明らかにすることはできなかった。接-214の剥離地点は20aブロックであることは明らかであった。

21～25号ブロック (第294図)

17例の接合資料が分布、17例中8例のブロック間接合(接-189・203・204・213・217・223～225)を確認した。接-189は5点よりなる接合資料(PL103)であり、22号ブロックに剥離地点を想定、剥離順の遅い剥片が分布した30号ブロックに剥離地点を移動した可能性も指摘されよう。接-217の剥離地点は22号ブロックと見られ、折断剥片(第262図6)1点が23aブロックに分布した。接-225については24号ブロックで剥離、23a・23bブロックに剥片類が分布した。接-217・225については22・24号ブロックに剥離地点が想定可能で、周辺ブロックに接合剥片が分布したのであるが、接合距離が短く、剥片類の「持ち出し」を積極的に評価できるという状況にはない。接-213(PL98)は3点からなる接合資料であり、剥

離順の早い剥片が21号ブロックに、残り2点が23aブロックに分布することから石核を移動した剥離が想定できるだろう。接-204(PL105)は縦位切断した剥片の接合、接-223は横位折断した剥片の接合、接-224(第249図)は小剥片が21号ブロック、加工痕ある剥片が29bブロックに分布、剥離地点については特定することができなかった。接-203については23bブロックに剥離地点が特定、23a・25号ブロックや環状ブロックの中央空白域に剥片類を持ち出していた。

26・27号ブロック (第295図)

10例の接合資料が分布、3例のブロック間接合(接-185・193・245)を確認した。接-193(第276図)は剥離順4番目の剥片が26aブロックに分布、26b地点に剥離地点を求めることができた。

28～30号ブロック (第295図)

6例の接合資料が分布、3例のブロック間接合(接-189・209・212)を確認した。接-209(PL103)は29aブロックを剥離地点として、剥離順の遅い剥片1点を29bブロックに持ち出している。接-212(PL99)は29aブロックを剥離地点として分布、その他の地点では隣接する29bブロックに4点、4a・4cブロックに各1点が分布した。

〈珪質頁岩〉

6～9・19a・23a・26aブロック (第301図)

2例の接合資料が分布、1例のブロック間接合(接-256)を確認した。接-256(第255図)は、7号ブロックを剥離地点として、6・8a・19a・23aブロックに剥片類を持ち出していた。剥離地点周辺ブロックの剥片類は意図的搬出か不明瞭であるが、明確に分布域の離れた19a・23aブロックの剥片は19aブロックの剥片が比較的薄手の剥片であり、23aブロックの剥片が折断剥片(台形様石器の素材?)であり、剥片移動の理由は明らかであった。

器種別分布

1b地点出土の石器群は、概ね径40m弱の範囲に環状分布するものといえる。石器分布の

II 調査の成果

中央には東西からブロックが延び、石器分布が視覚的に南北に二分されたようであるが、典型的な環状ブロック群として捉えることのできるものであった。周知の通り、環状ブロック群として著名な下触牛伏遺跡では台形様石器を現地生産、石刃ナイフを搬入石器とする典型的な石器製作構造を示した。石器群を支えた主要器種の分布も特徴的で、現地生産した台形様石器が周辺ブロックに、搬入石器である石刃ナイフ、及び、石刃は石器群が環状分布した内側の中央広場に接して集中分布、しかもそれが受熱剥片と分布域を重ねるように発見され、遺構類の乏しい旧石器時代遺跡の中で、集落分析を可能とする遺跡として注目を集めた。本遺跡出土の第IV文化層・1b地点出土の石器群も環状ブロック群として捉えることができるが、ここでは器種別に見た石器分布の概要を以下に記していきたい。

まず、主要器種であるナイフ形石器・台形様石器の分布だが、本遺跡ではナイフ形石器は7点が出土したのに対して台形様石器は1点と、この種の遺跡としては台形様石器の出土量が少ないようである。ナイフ形石器は4a・18・26a・29aブロックに各1点が分布したほか、環状ブロックの外側(CO-128、CP-132G)に2点と内側(CU-123G)のブロック外に1点が分布したことになる。ナイフ形石器の素材は石刃類を素材とするもの3点と、幅広剥片を素材とするもの4点からなる。幅広剥片を用いるもの4例中2例は出土層位がIX層で、上層石器群の混入ということも可能性としてなくはないが、相対的には形態的類似性が看取され、ここでは組成器種として捉えたが、石器先端を加工することなく作出しているようでもあり、台形様石器と親和的であるという捉え方も可能かもしれない。これを台形様石器と捉え、残る3点をナイフ形石器と捉えて見ても、石器の偏在性は指摘できないというのが実態であった。

削器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片については、剥片類の分布密度の高い石器ブロックを主体に分布しており、基本的には石器製作に付随するもの

という理解が可能と考えている。

剥片類については接合資料から明らかなように、石刃剥離を示す典型的なものは得られていないが、図示した剥片類から分かるように、類石刃については、分布上の偏在性が指摘できるかもしれない。第192～205図に示した剥片類は、接合剥片を除いて剥片類の形態的多様性を示せるように意図して図化したものであるが、石刃(第192図)は26aブロックに偏在、同様な傾向は縦長剥片(第193図以下に図示)でも明らかであった。26a・26bブロックには石刃製作を示す接合資料は見られないことから石刃類の搬入地点であったことが判明する。

1b地点では、石器ブロック30ヶ所を認定したが、これらはさらに6群(1～4号、5～14号、15～20号、21～24号、26・27号、28～30号)程度に大別が可能であった。各群は石器分布の密なブロックと分布の薄いブロックからなっており、石核・剥片類の分布の密な地点が石器製作地点であることは明らかであった。敲石(台石の可能性の高い礫を含む)の分布は分布密度の高い地点に一致したわけではなかったが、基本的には大別したグループに均質に分布したといえることができるだろう。

母岩別資料の分布

石器群の石材構成は黒色安山岩・黒色頁岩が90%以上を占め、比較的単純な石材構成を示した。黒色安山岩・黒色頁岩については、それぞれ15・17の母岩が認定され、以下各母岩の分布状況について概要を記す。

黒色安山岩—1 (第302図)

67点を認定した。主たる分布域は10号ブロックであり、その他には23b・29b・30号ブロックに分布した。本母岩には接合資料3個体(接-111・114・115)が含まれる。

黒色安山岩—5 (第302図)

51点を認定した。主たる分布域は2号ブロックで、8aブロックにも2点が分布した。石器が環状分布した東側には同一母岩の分布は見られない。本母岩

には接合資料7個体(接-123~129)が含まれる。

黒色安山岩-2~4 (第303図)

黒色安山岩-2は、88点を認定した。主たる分布域は23bブロックで、そのほかには23a・25ブロックに分布した。石器が環状分布した東側に分布、西側に分布域は見られない。本母岩には接-119が含まれる。

黒色安山岩-3は、43点を認定した。主たる分布域は1号ブロックであり、ブロック外に1点が分布したほか、環状分布東側の21号ブロックに剥片1点が分布したのみであった。本母岩には接-120が含まれる。

黒色安山岩-4は、32点を認定した。主たる分布域は24号ブロックで、隣接する26aブロックに3点と、石器が環状分布した西側に2点が分布した。本母岩には接-121・122が含まれる。

黒色安山岩-6~8 (第304図)

黒色安山岩-6は、19点を認定した。主たる分布域は6号ブロックであり、その他には7号ブロックに1点が分布した。石器が環状分布の東側には同種母岩は確認されなかった。本母岩には接-130が含まれる。

黒色安山岩-7は、5点を認定した。石器が環状分布する東側の26aブロックのみ分布した。本母岩には接-131・132が含まれる。

黒色安山岩-8は、7点を認定した。石器が環状分布した1号ブロックのみ分布した。本母岩には接-133・134が含まれる。

黒色安山岩-9・11・13 (第305図)

黒色安山岩-9は、3点を認定した。石器が環状分布した西側の4a・12・14号ブロックに分布した。本母岩には接-135が含まれる。

黒色安山岩-10は2点を認定した。2点とも搬入石器であり、1点は7号ブロックに、残る1点は26bブロックに分布した。

黒色安山岩-11は、8点を認定した。12号ブロックのみ分布した。本母岩は接-130のみからなる。

黒色安山岩-12は5点を認定した。1号ブロック

に1点が、12・21号ブロックに各2点が分布した。本母岩には接合資料は含まれていない。

黒色安山岩-13は6点を認定した。3号ブロック付近に集中分布したほか、2号ブロックに1点が分布した。本母岩には接-137が含まれる。

黒色安山岩-14は5点を認定した。20aブロックにのみ分布した。本母岩には接-138が含まれる。

黒色頁岩-1~4 (第306図)

黒色頁岩-1は、16点を認定した。主たる分布域は石器が環状分布した西側の7~9号ブロックで、1点のみ東側分布域(26aブロック)に分布した。本母岩には、接合資料3個体(接-185~187)が含まれる。

黒色頁岩-2は、3点を認定した。14・23a・24号ブロックに各1点が分布した。本母岩に接合資料は含まれていない。

黒色頁岩-3は5点を認定した。4b・5aブロックに各1点が、6号ブロックに3点が分布した。本母岩には接合資料1個体(接-188)が含まれる。

黒色頁岩-4は、5点を認定した。22号ブロックに4点が分布したほか、29b・30号ブロックに各1点が分布した。本母岩は石器が環状ブロックの中央ブロックに分布した。接合資料1個体(接-189)が含まれる。

黒色頁岩-5~7 (第307図)

黒色頁岩-5は、4点を認定した。分布域は13号ブロックにあり、本母岩は接合資料1個体(接-190)のみからなる。

黒色頁岩-6は、6点を認定した。本母岩の分布域は石器が環状分布した西側の3・5a・6号ブロックにあり、1点のみ22号ブロック(中央分布域)に分布した。本母岩には接合資料2個体(接-191・192)が含まれる。

黒色頁岩-7は9点を認定した。その主たる分布域は石器が環状分布した東側の26a・26bブロックにある。本母岩には接合資料2個体(接-193・194)が含まれる。

II 調査の成果

黒色頁岩—8～10 (第307図)

黒色頁岩—8は、8点を認定した。本母岩の分布域は東側分布域の26aブロックにある。本母岩には接合資料2個体(接—195・196)が含まれる。

黒色頁岩—9は、4点を認定した。その分布域は石器が環状分布した西側分布域からやや北に離れた13号ブロックに3点が分布したほか、東側分布域の23bブロックに1点が分布した。本母岩は接合資料1個体(接—197)のみからなる。

黒色頁岩—10は、7点を認定した。本母岩の分布域は西側分布域の8aブロック周辺にあり、7点中6点が分布した。残る1点は、東側分布域の15号ブロックにある。本母岩には接合資料1個体(接—198)が含まれる。

黒色頁岩—11・13・14 (第308図)

黒色頁岩—11は、2点を認定した。本母岩は2号ブロックのみ分布した。接—199が含まれる。

黒色頁岩—13は22点を認定した。本母岩は3号ブロック周辺に分布したほか、中央分布域の22・29bブロックに各1点が分布した。本母岩は接合資料1個体(接—200)のみからなる。

黒色頁岩—14は、7点を認定した。本母岩は2号ブロックに分布主体がある。このほか隣接する1号ブロックに1点が分布した。本母岩には接合資料2個体(接—201・202)が含まれる。

黒色頁岩—15～18 (第309図)

黒色頁岩—15は、35点を認定した。その主たる分布域は石器が環状分布した東側の23bブロック周辺にあり、西側分布域には分布は見られなかった。本母岩には、接合資料2個体(接—203・204)が含まれる。

黒色頁岩—16は、17点を認定した。主たる石器の分布域は8aブロックで、その他には2・4b・4cブロックに各1点は、8b・9号ブロックに各2点が分布した。本母岩は接合資料1個体(接—205)のみかなる。

黒色頁岩—17は、23点を認定した。主たる石器の分布域は中央分布域の29aブロックにあり、その他

の分布域は2・4a・4bブロックに各1点が、8b・9号ブロックに各2点が分布した。本母岩は接合資料1個体(接—212)のみからなる。

黒色頁岩—18は、17点を認定した。本母岩は12号ブロックのみ分布した。接合資料1個体(接—237)のみからなる。

珪質頁岩—1～4 (第301図)

珪質頁岩—1は、18点を認定した。本母岩は石器が環状分布した西側分布域の7号ブロックを主体に分布したほか、周辺ブロック(6号ブロックに2点、8a・9号ブロックに各1点が分布)と、東側分布域の19a・23aブロックに書く1点が分布した。

珪質頁岩—2は、2点を認定した。26aブロックにのみ分布した。

珪質頁岩—3は、2点を認定した。本母岩は石器が環状分布した西側分布域の7号ブロックと、東側分布域の26aブロック(第193図10)に各1点が分布した。7号ブロックの剥片は縦位切断した不良剥片の類であったのに対して、26aブロックのそれは類石刃といった類のもので、2点とも搬入石器として捉えていいものか、判断が難しい。

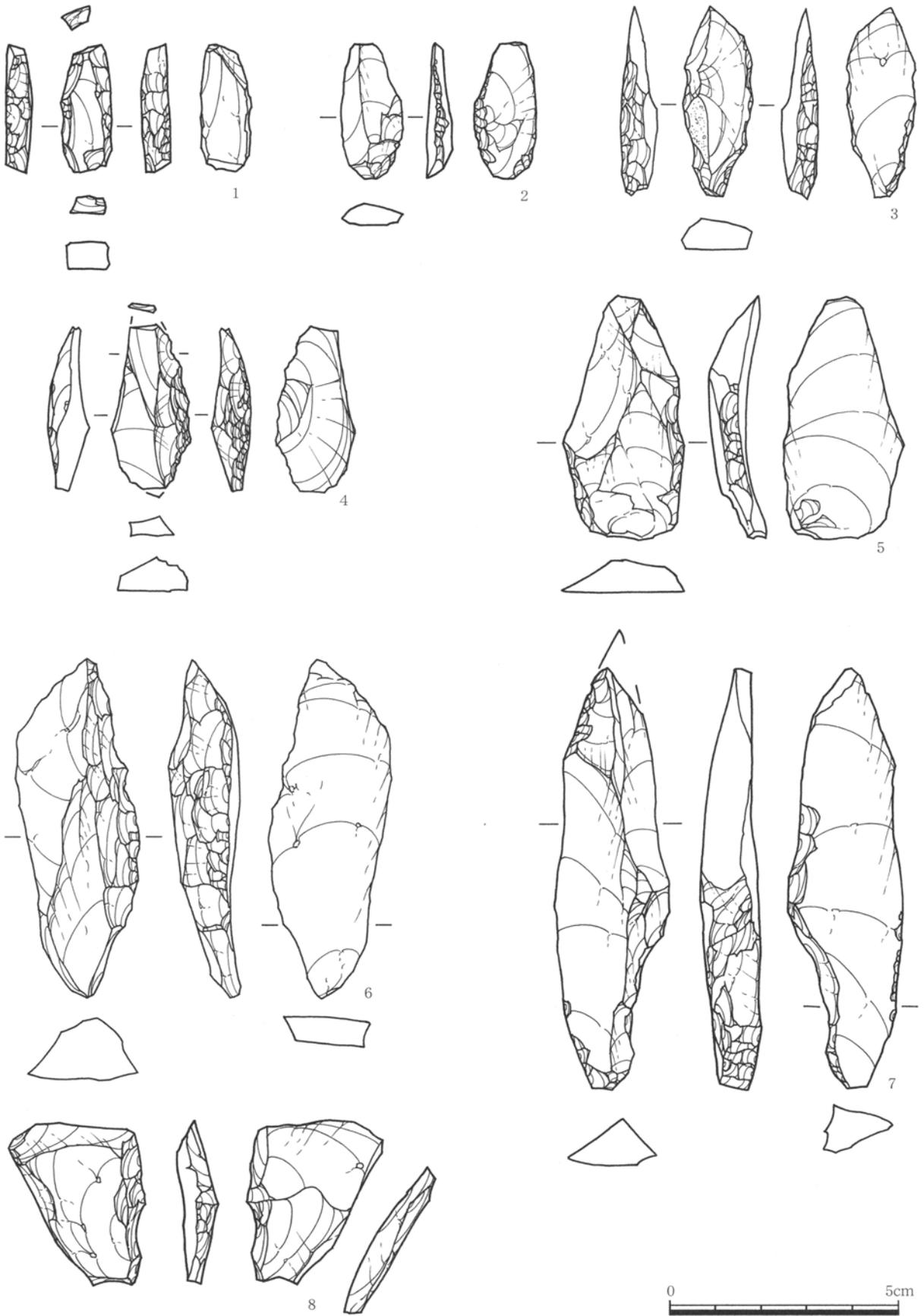
珪質頁岩—4は、4点を認定した。21・24号ブロックに各1点が、24号ブロック周辺に2点(うち1点は加工痕ある剥片、第188図6)が分布した。

その他の石材分布 (第310図)

チャート1母岩を確認した。分布域中央の29b・30号ブロックに集中分布した。26aブロック周辺のチャート3点は碎片類であり、少量の剥片生産を示唆している。29号ブロックに接合資料1例(接—255)を確認した。その他のチャートは単独出土。

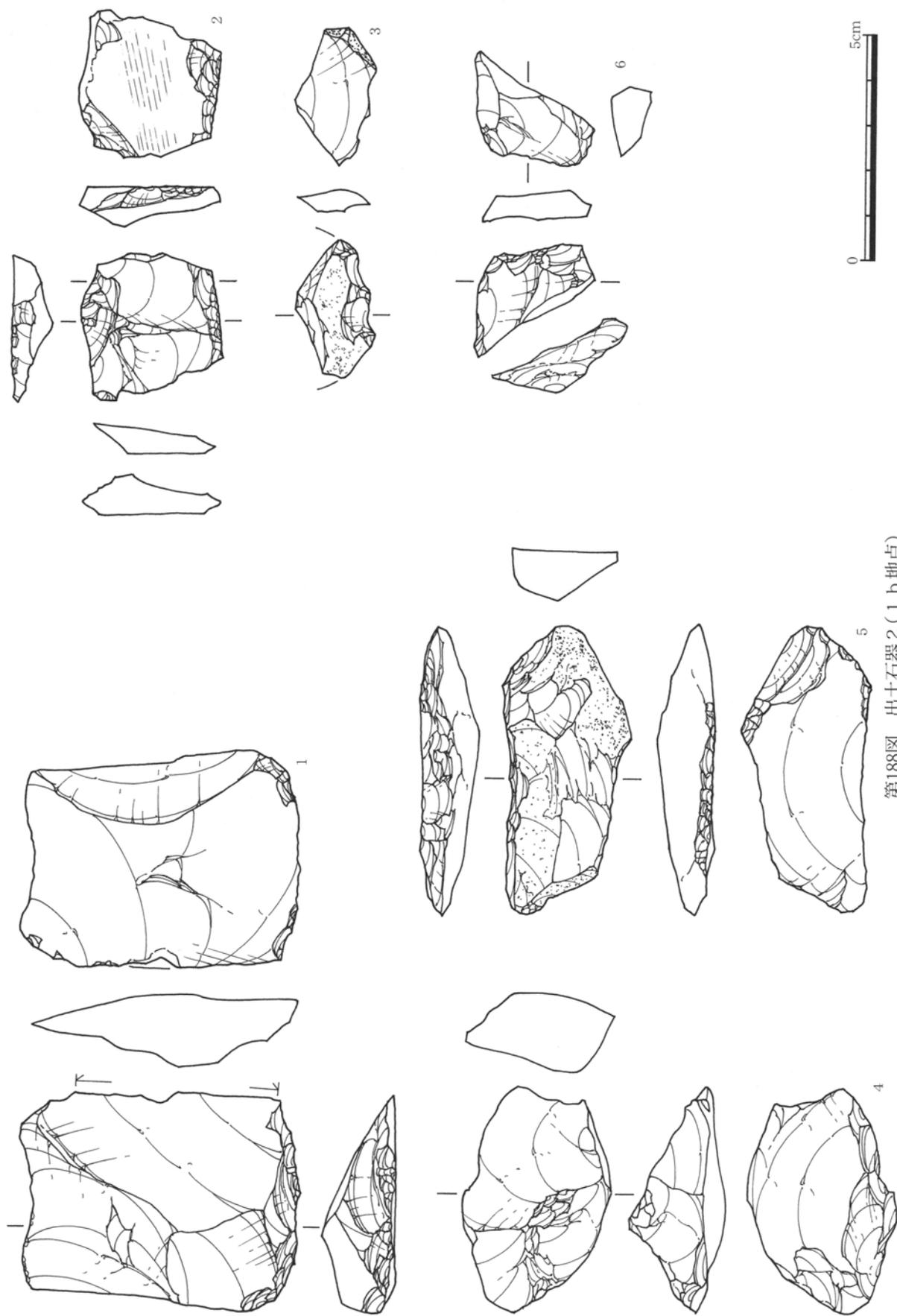
玉ずいは1・10・30号ブロックに分布した。10・30号ブロックの3点は同一母岩(接—382を含む)に、1号ブロックのそれは搬入石器に認定した。

そのほかには、硬質頁岩(PL96 上段左から3番目)・褐色碧玉(PL96 2段目左端)・赤碧玉(第210図1)・黒曜石(第187図4・第193図7・第194図6)などの石材が出土しているが、大部分が単独出土であり、搬入石器として理解することができた。

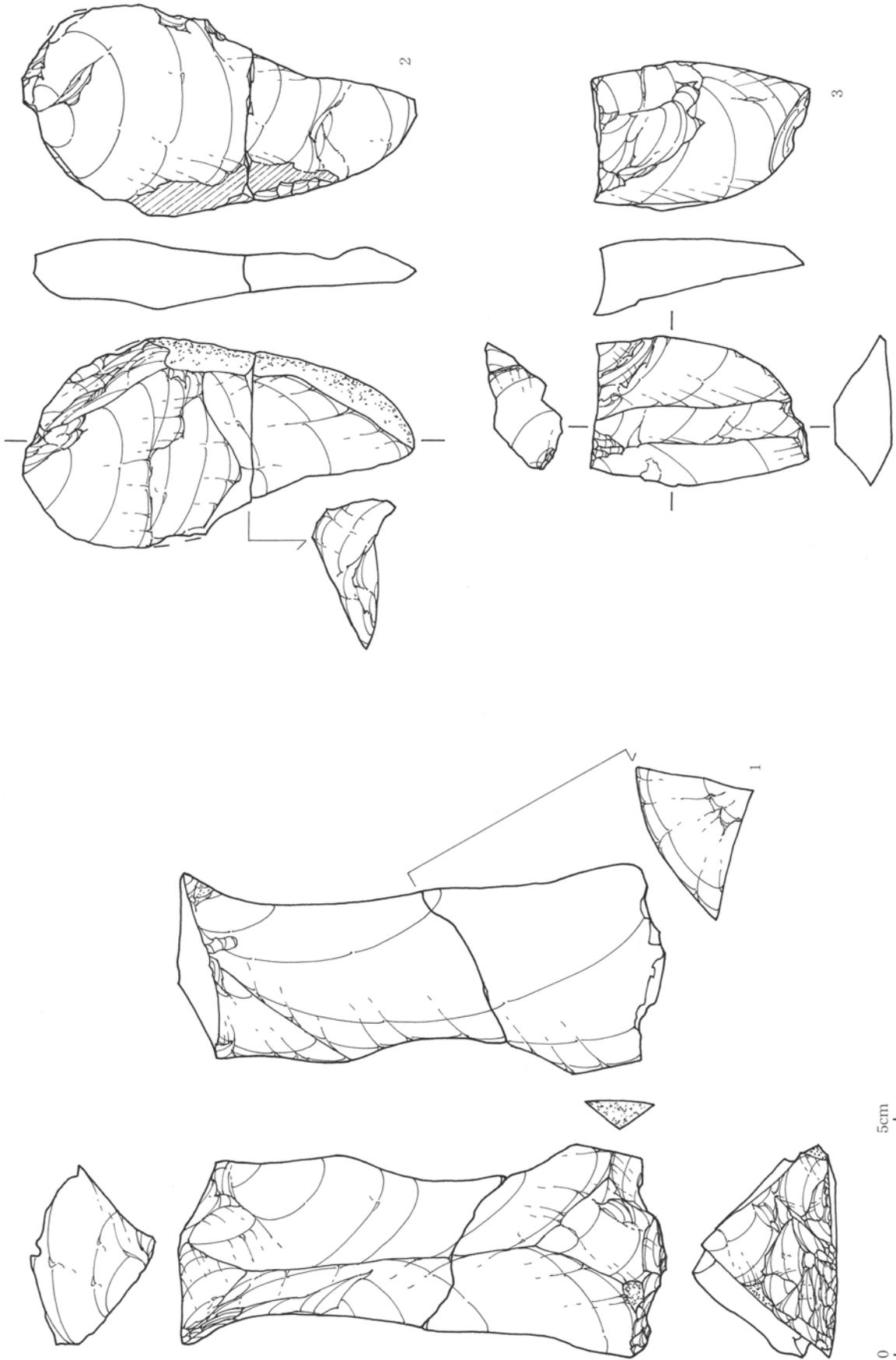


第187图 出土石器1(1 b地点)

II 調査の成果

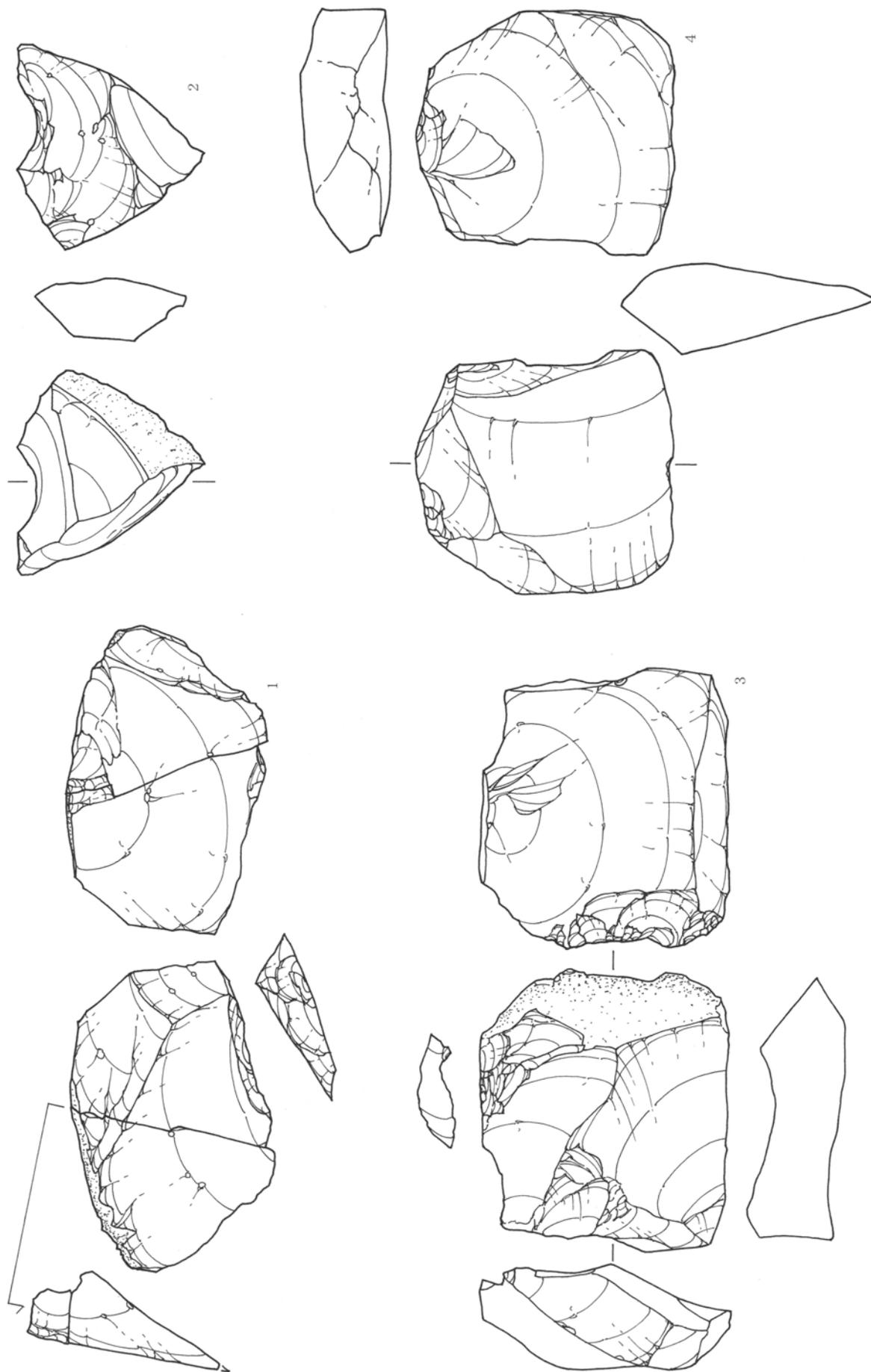


第188図 出土石器2 (1 b地点)

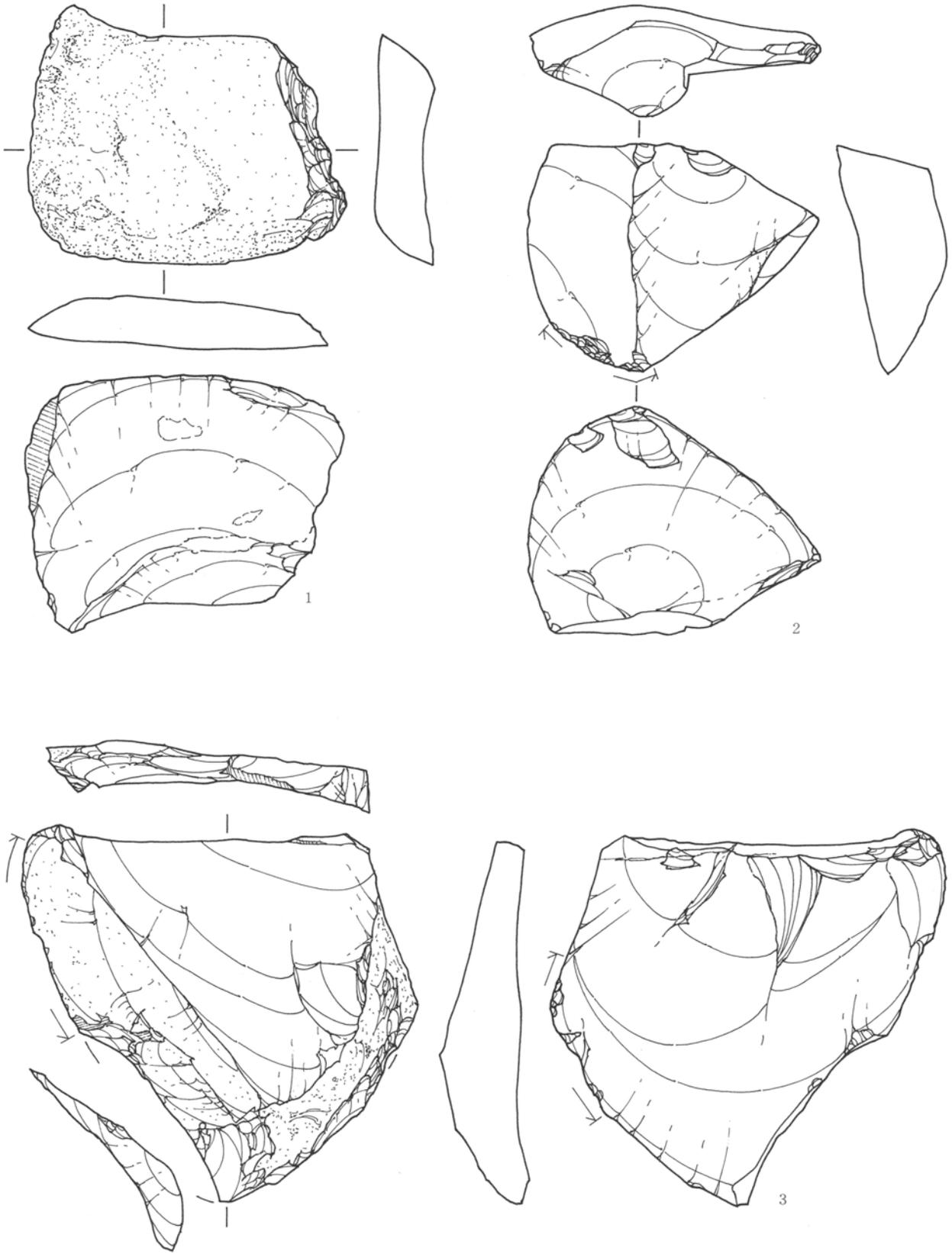


第189図 出土石器3 (1 b地点)

II 調査の成果



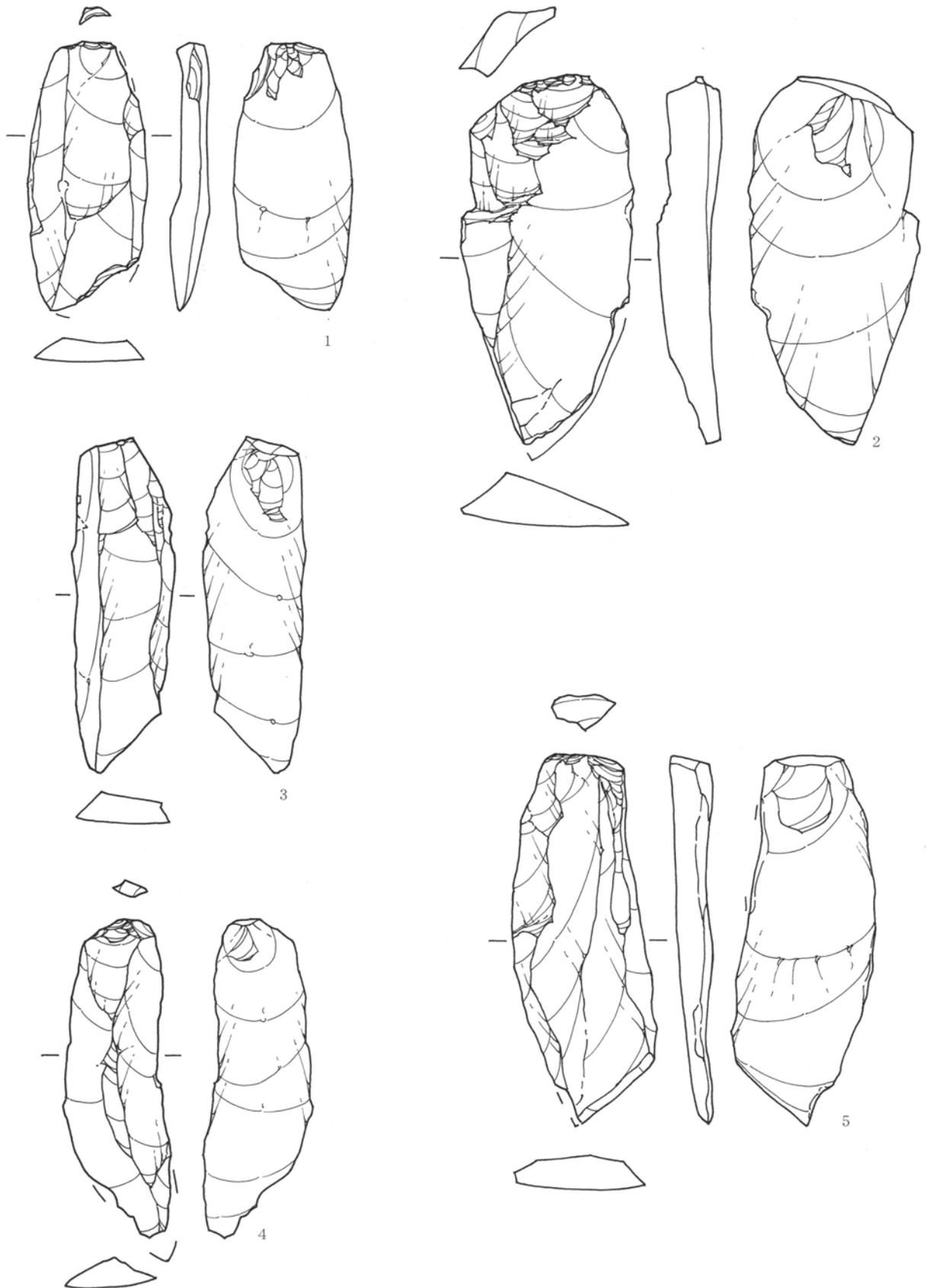
第190図 出土石器4 (1 b 地点)



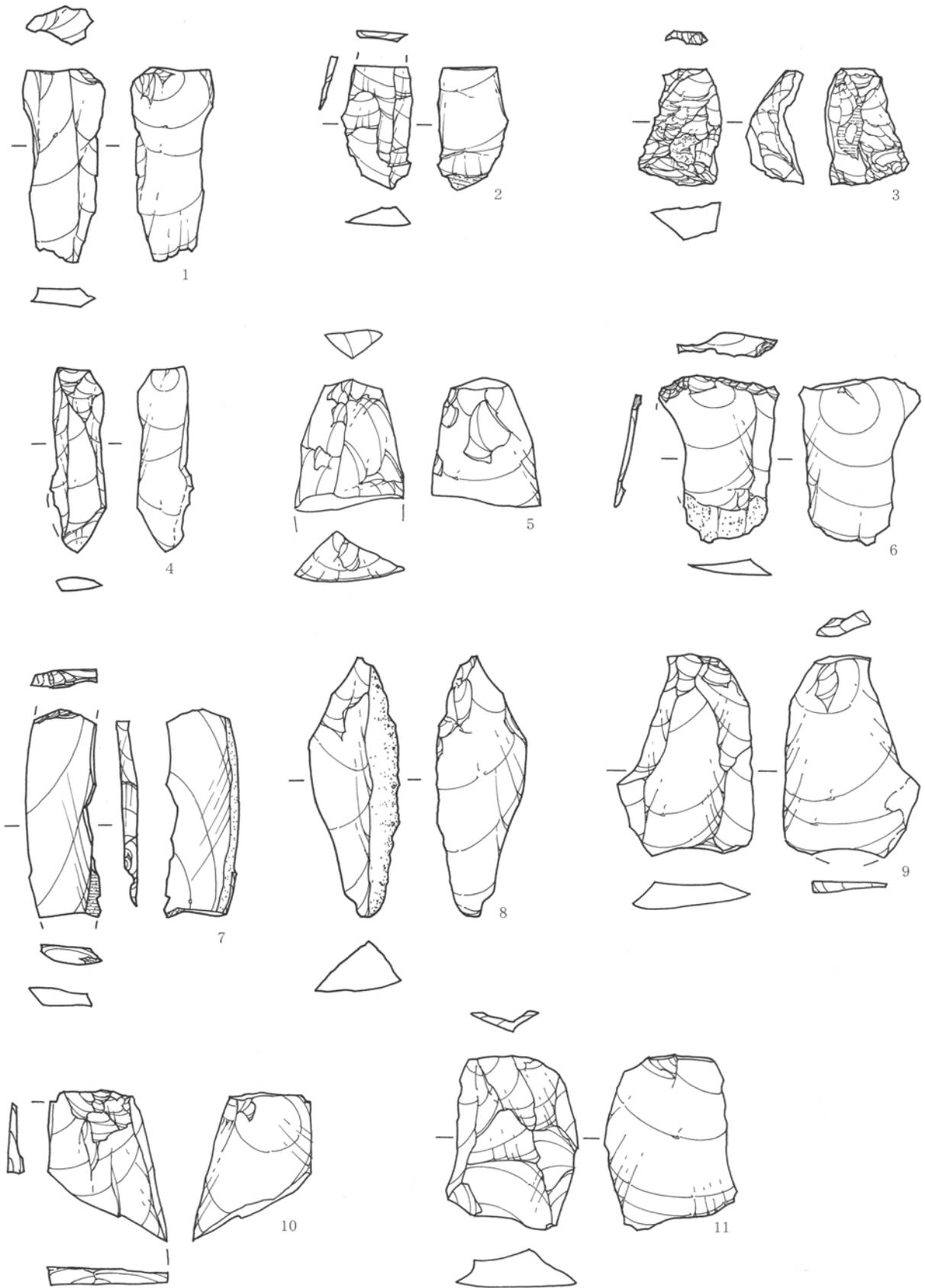
第191图 出土石器5(1 b地点)



II 調査の成果

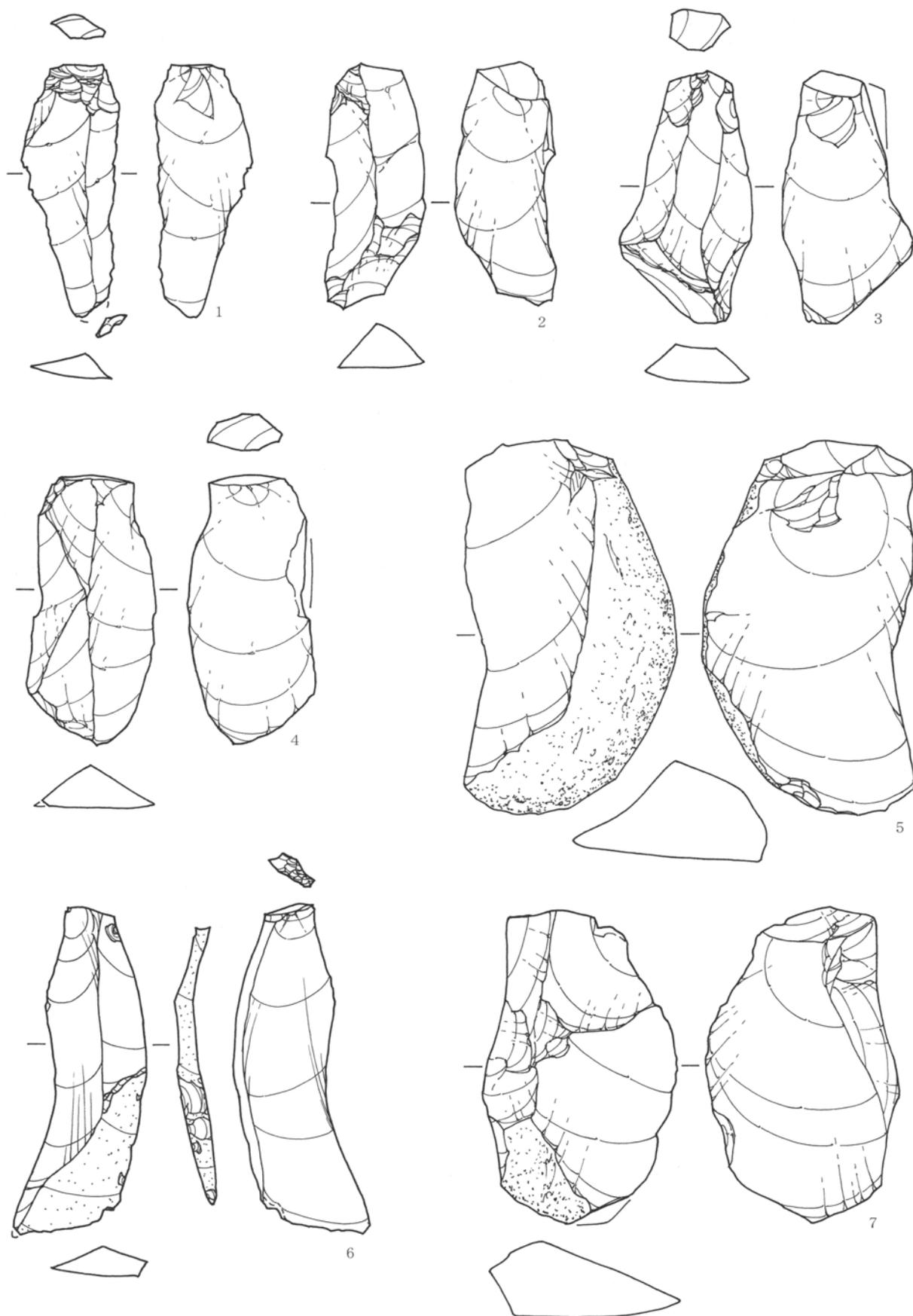


第192図 出土石器6(1 b地点)



第193图 出土石器7(1 b地点)

II 調査の成果



第194図 出土石器8(1 b地点)